大正十五年六月廿七日印刷
大正十五年七月一日發行

参編第一冊（通編第四十六冊）

本文

艶示樓に就て
紅毛媚薬談
黄表紙（寛政後期）解題抄
大南北孫龜岳が事
狭斜五十五句

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第一冊（通編第四十六冊）

○狹斜五十五句

著者

緣起棚の達磨のつらや秋の風
聖天の扉を鎖して軒燈の影の搖れ
脫ぎ捨てた下駄、格子に月がさし
話聲のあり、灯は黃に磨硝子
撥冴えて寂しさうなる宵のうち
お稽古ごと露地のひなたや赤蜻蛉
月の町歌舞妓人形を買うて歸る
晝風呂や柳閑たる露地がへる
月の傘無理心中のある夜かな
行きづまり灯のあか〳〵と忍び駒
潮どきの露地しつとりと柳の灯
緣さきに古三味せんや秋ざくら
食卓に頰杖つけば灯のおそき
喫ふ煙草味知らず床に僞蕪村
電話口途絶れたり火を落す頃となりしが
灯を消して聞くやながしの霜の冴え
更け果てゝ磨硝子には松の夜明かな
ひんやりと黑繻子が手に觸りけり
衣ずれや枕べの盆ひきよせる

手を洗ひ茶の間によれば灯あか〳〵と
聲色使ひ向ひの障子の開くおと
もらはれて行く俥、路上月かげろ
中庭の石ぬれ下婢の灯搖れたり
葉蘭に灯、廊行くひとの足袋のさき
風呂口の緣に鏡臺据う紫苑に夕日
辻占や寢返りうてば窓のそと
心中を冗談にする夜長かな
三味せんの胴をやぶりて灯の更けぬ
うたゝ寢のうしろに三味の色掩ひ
宵たけて疊つめたし戸に時雨
泣くほどの思ひのあるに時雨かな
寄切れの座布團に昨夜の疲れ眼に沁む
廣重の繪を帶にするをんなかな
背負揚の赤のもつれや撥ぶくさ
口臙脂を溶いた爪先で打たんとす
肌ぬぎの頸にも秋、刷毛のさき
出の仕度早く戸をお締めよと襟しごく

羽織をずらす癖、襟に灯の映えて
黑襟がよう似た姿銅壺煮沸る
長羅宇の煙管と三世相に秋の日は暮るゝ
お召著て井戸端がよひ糸すゝき
長襦袢ほどいて襤褸にする夜かな
お召の裾切れて鶉の摺餌摺る
肩衣の鶸茶、灯のけぶり、花簪
簾うちの撥の冴え間、堀の水更く
柱に襟を擦らしてそち向ける銀杏返
三の糸切れた拍子に時雨れけり
お溫習の木戸の群集や時雨れたり
黑襟で來た今宵はわけて更けおそき
燈を消せば夜著の襟這ふ月あかり
目ざめしに一人なりし、いづこ摺り草履
障子そとの夜氣や廊下の豆電氣
夜著ずらし眠れる眉毛灯のくもり
話途ぎるや廂しとしと雪げはひ
歸したあと月の流るゝ向ふ屋根

艶示樓に就て

一、艶示樓は、京傳門人也

洒落本作家の一人に、艶示樓主人といふのがある。「嚋昔の茶殻（唐）」寛政十二年春梓）一冊の署名者であるが、これは、疑ひもなく山東京傳の門人である。現に此の「嚋昔の茶殻」は、京傳の天明八年春「夜半の茶漬」を摸し、其の糟粕を嘗めたものと、自序にある。即ち「我師何がしが夜半の茶漬」云々とあるのである。全文如左。

遊ふべの茶がら自序

夫屁はころしてひろにしかず、金はいかして遣ふにしかず、いきた金とてものをいつたろためしもなく、死だ金とて幽靈にもならねど、たゞころすといかすとはかの屁玉と金玉ほどのたがひあるなり、とは我師何がしが夜半の茶漬の筆勢にして、たれかは是をあまんぜらんや、爰に予が著述なせるは、すべて彼書にもとづくといへども夜半の茶漬のあまり茶の二番せんじにも至る事なく、馬の小便にもならざれば、其名を夕べの茶がらといふ、一斤百茶の澁しといへども女の中の豆いりに同志の茶呑友達ありて若しうかされて寢事をしらずば、書肆の幸　爰にみてんト爾云

仇氣屋のひとり息子

艶示樓のあるじ誌

とありて、最後に印があつて、上は京傳鼻その儘の形、下は京傳の例の丸に巴山人の印である。（此の仇氣屋云々は、無論京傳の名作「蒲燒」から來て、それを摸したもの、己惚子息の意であう。）正直いふと、自分の穿鑿も、この印の鼻と巴山人の印から來たのである。先づこの印の疑問から片づけ

てゆくが、此の京傳鼻を捺したのは如何なる意味か、第二世京傳を許された話も聞いてゐない、從つて艶次郎鼻の己惚を意味したものであらう。が巴山人の印までがあるに於ては、可笑しい。(無論これが京傳の作とあれば、事は終り問題は起らぬ。)明かに文中、我師とあり、がそれも京傳と明示しない所はをかしい。強いて解すれば、京傳が洒落本の禁に遭つた(寛政三年)それを再び記憶せしめない爲の、婉曲なる筆法でもあらうか。が、この巴山人の印は、京傳が、終生此れを愛し、且つその歿後、寡婦のお百合と弟京山とこの印を渡す渡さぬに就て爭ひ、京山は僞印を造つて自己の書畫に押捺した形跡がある(外骨氏「山東京傳」)といふのであるが、それ程の印をこの艶示楼に許してゐるのが怪しい。殊に、此の印の使用(この「遊ふべの茶殼」)は、京傳歿前の寛政十二年であるに於てをやである。(尚、且、仇氣屋云々からの照應としても、此の鼻印を許してゐるのがをかしい。が無斷使用とはいかにも思へぬ。)

此の艶示楼と京傳と、いかなればそれ程の關係の下に、この印の別使用てふ事實が現れたのか。茲で、私は、最初直感したと同じ疑問が、チラと腦底をかすめる。それは、此の艶示楼とは、京傳の別名、隱號ではないか、と。然し此の茶唐が既に寛政十二年版と、跋によりて(申の春の意があろ。後掲)類推せられた以上、(この本の寛政十二年といふ事は自分の發見、寧ろ推斷である。從來は諸書、刊行年不詳に置いてゐる。)寛政十二年頃に、彼がこの變名で再び洒落本をものするといふのも可笑しい。假りに、この跋の申といふのを十二年繰上げて、天明八年とすると、「夜半の茶漬」と同年であり、しかも同時新春といふ事になる。且つこの時は別に洒落本がまだ嚴禁にもなつてゐないから、彼が何を好んでかくの如き變名を用ひ、且つ「我師何がし云々」とするかも分らない。且つ糟粕を嘗めるの意味を殊更斷ら

なくともいゝと思ふ。結局これは京傳の作ではない、すれば、著者自らのいふ如く、京傳の門人と見ていゝ、それには、この京傳鼻と牡丹餅印（巴山人印の事）との使用が珍妙である。如何。が、何としても、最後は、艶示樓主人は、京傳の門人といふ結論になる。

二、馬琴の誤謬

と來ると、茲に、馬琴（變名にて蟠行散人の名に）のものした「江戸作者部類」には、この「疇昔の茶唐」を明かに、京傳作と誤り傳へてゐる。これは無論、原本に據らずの、馬琴の記憶のまゝの執筆に成つた點からの誤謬であらう。それは、同書洒落本並中本作者部の中に、

山東京傳

天明中より洒落本の新作、春毎に出て評判よからぬは無く、小本（洒落本の謂也ー久）臭草紙共に滑稽洒落第一の作者と稱せられたり。そが中にゆふべの茶殼、京傳予誌、ムスコビヤ（息子部屋、令子洞房とも書す。久）、傾城四十八手などいふ洒落本あり、四十八手尤行はれたりと云、かくて寛政二年官命ありて洒落本を禁ぜられしに、蔦屋重三郎（書林並地本問屋）其利を思ふの故に、京傳を唆かして又洒落本二種をつゞらしめ云々」（温知叢書本に據る）

以下は知らるゝ通りの「仕懸文庫」などによつて彼が手鎖の刑を受けるに至る記事である。これによると、勿論年代順には記せられてゐない事を初めから知つてかゝれば何でもないが、でないと、この書名の順で、「ゆふべの茶殼」は、彼の最初作であり、少くとも寛政二年以前の作の如く考へられる。特にこれには京傳作と明記してゐる。が、「茶殼」の跋によりて、申歲寛政十二年の作であり、一巡以前の申歲は、天明八年で、「夜半の茶漬」と同年、すれば「夜半」を踏襲した意味が全く立たぬ。即ち是は寛政十二年の申歲であり、同年版と見るを正しいとするなれば、馬琴の記述は全く誤謬である。彼

は洒落本などの姦淫の書は、手にとらぬからと、この誤謬をうまく云ひ遁れるかも知れないが。

そこへ來ると、「花折紙」は慥かにわらい。間違へてはゐない。（「花折紙」は享和二年版の洒落本評判記である。）曰く、

三、花折紙の評判

印（この印は例の京傳鼻）噂昔茶唐　艶爾樓作

右の評語に、「頭取、ゆうべの茶唐丈は、師匠の夜半のちやづけ丈のしうちをしたひ、それを増補いたされての仕うち、」とある、その通りである。

四、艶示樓と艶二は同人か異人か

一方、洒落本寛政末期享和初期の作家に、例の艶二がある。（前册で、艶二を染物屋かというたが、これは、未だにかと疑つてゐる。唯、鹽屋は屋號類のもじりかというたが、これは、取消したい。理由は後説の如し。）この鹽屋艶二と同人か異人かの問題である。艶二と紫の色主とは同人らしい。「南門鼠」（寛政十二年版）には、現に鹽屋色主著ともあるからである。即ち此の紫色主と艶二とは、決定的に同人と見てよい。艶二及び色主の署名の著作如左。

洒落本、南門鼠　寛政十二年（紫色主。又は鹽屋色主と云ふ。）⦿五大力、享和元年（艶二といふ。北溪畫）⦿匂嚢、同年（艶二といふ。）⦿同後篇匂嚢、享和二年（艶二といふ、北溪畫）⦿南門鼠歸、同年（艶二。北溪畫）⦿嫖客三体誌（同、同）⦿白狐傳、文化元年（同、同）

青本。男一面髭拔鑑　三、（寛政十二年、紫の色主といふ、豊國畫）⦿夫京都是東都見物左衛門　三（同、同、同）、他に艶次郎生日記、怪談富士詣の二著のあること、「小説家目録」に出てゝゐる。

が、「茶殻」を艶二の作(艶示樓、艶二を同人と見て)とは、嘗て何ものにも現れてゐない。大久保氏の洒落本目錄には艶二樓主人とある。これではてんから混同してゐるのである。偖、同一人か異人か。自分は異人と見たいのである。何となれば、示と二とも違ひ、且つ、艶示樓は其外何處にも見當らず、且つ同年同時の「南門鼠」には、些も艶示樓とも京傳とも何とも見ゐないからである。それは、「花折紙」の記述上の体裁に於ても、異人別人の如く記述されてゐる。即ち花折紙には、匂嚢と南門鼠を載せて、匂嚢は、「近年の作ではよい中である。然しさんと人氣が上らぬが、頭取などは感心してゐる。」の意を掲げてゐるが、然し色主として取扱ひ、一方艶示樓の「疇昔の茶殻」とは全然沒交渉、名も一方は色主、一方は艶術樓である。さて自分の此の二者別人説は、當時艶屋並に艶次郎が自惚れの意を現し、一時流行つた語である事を知つたからである。(艶二郎又は艶二がさうであるとして、鹽屋までが、自惚の意とは氣が付かなかつた。)即ち自分の論據もまだ不十分ではあるが、このえんじらう(これが京傳の「蒲燒」に起源したものである事は無論である。)に當てた同時の異人暗合であらうと思ふ。一方は艶二とし、一方は艶示樓としたのであらうと思ふ。(が、色主の艶二は、一年後の享和元年からしい。)さうして此の一方の艶示樓の方が京傳の門人であり、艶二の方は、でないと見たい。(從つて鹽屋艶二の方は、鹽屋が染物屋の家號かといふ自分の前説を撤廢するのである。唯、「南門鼠」にもある「染物屋にゆかりある紫の色主」といふにより、染物屋か又はこれに關係はあるとは未だに信じてゐる。尚、傳ふる處に據れば、彼は畫に巧みであつたといふ。品川に住すとある。)

五、「疇昔の茶唐」の後序と跋

參考に、「茶の唐」後序と跋とを擧げておく。

後序

佛に方便あれば聖人に權の道あり、艶示樓主人が茶店の筆勢虚にして實あり、艶にして俵あり、戯言に似て然も勸善懲惡の語なり、御如在はあるめへ、四方の遊子淺く買で深く味ふべしといふ

淺　深　草　ろ

〔この深ろは、振鷺亭でもあるか。〕

跋

夫雪は飛んで散亂すといへども いまだ歸らず嵐に木の葉の散る頃、柳原の土手を通り懸りしに茶店の隣に端書共取散らし商ふものあり、傍には茶のせんじがらうづ高く積、さもきたならしき店な近々泥中に蓮あり、須原出雲寺に無きものもかやうなる處にあるらん、呉服やに無き小切店に有が如し、おいらんのおよばざる風味廿四文の辻君にあるまじきものにあらずと立寄見れば、此草紙あり、捨置んも心なしと、噂昔の茶店と題して、中の初春御きげんに備ふものなり

柳　塘　山　人　誌

〔此の跋の柳原云々は、或は自分の異人艶示樓の住處を斥してはゐないか。即ち艶二の品川住とは別人だ、爾くこれを利用出來ないかとも思へる。〕

六、還　記

繰り返していふが、此の「茶店」は、天明八年の串ではない。若し天明八年とすれば「夜半の茶漬」も同年春、この茶店も同年春といふと、踏襲作が原作と同時に出るなどといふ矛盾は無論肯はれぬ。尙「花折紙」では、廓通遊子（藍江作、寛政八年）と一括して評語を物してゐる。とにかく色々述べて來たが外骨氏本「京傳」などの京傳門人數輩の中に、此の未發見の艶示樓を新たに入れてよき事、及び、例

の自惚の表徴たる京傳特有の鼻と、彼の寡婦が京傳弟の京山にすら繼承を拒んだといふ程の牡丹餅印と此の二個の使用を「茶唐」に見、しかも京傳存生中（京傳の歿は文化十三年九月七日、五十六才）であるといふ事がをかしいのである。尙、艶示樓、艶二同一人と見るのに、朝倉無聲氏あり、（德川文藝類集五、洒落本の解題）が、その解題に成れる「南門鼠」も「茶唐」と同じく申春（寛政十二年）の出版、しかも兩者の序跋に、共通點なき事を更に念を押しておく。若し「花折紙」などの傍証すら叩き破つて、艶示樓即ち京傳と見るなれば、鼻と牡丹餅印とは濟むとしても、例の「夜半の茶漬」と同年同時の出版になる事が益々滑稽といふ事と云ひ添へておく。（まさか、寛政十二年に、末輩洒落本作家の眞似をして、大先輩の身が〔京傳自身が〕匿名で物した、とは思へぬから。それに自家の舊作の踏襲といふに於て。無論これは度外において可いと思ふ。）

——六月二十二日夜

再追記——馬琴の筆といふ別著「伊波傳毛乃記」を見ると、「茶唐」を京傳作とせる誤を、「作者部類」と同樣の筆意で繰り返してゐる。同一人の筆に成つたもの故、此の重複錯誤は尤としても、然し余り念入であるっ序でに、「伊波傳毛乃記」から、京傳の牡丹餅印に關する項を拔粹する。「毎編用る所の巴山人の印章は、其父母と共に、深川木場なる曲物舖に在りし時、賣物の中より出たり。其賣流るゝに及んで、父これを京傳に與ふ。于時年八九歲、これを愛玩すること云々。天明の末に始て草册子を著すに及で、此印を用ふ、云々。其生涯巴山人の號を用ひずと雖も、印は此の人に依て見はれ、此の人は其印をもて名をなせり云々」。

紅毛媚藥談

紅毛渡りの媚藥としては、臘丸などは寧ろ平凡である。かうした普通の物以外、珍奇な秘法と稱したものが玆にある。英泉需作の「枕文庫」下巻に載つてゐるものである。無論本としても平凡ではあるが。これは、媚藥と稱しても直接のものではない、相手（婦）に忘られぬ爲の料である。○紅毛傳來ペプラホの法といふもので、

此阿蘭陀へフラホといふは。唐土にてはヤンイヤンといふ、文字に通しては鴛鴦なり。是長崎に來舶の蘭人口(がり)傾城などにのましむ藥なり。

一牛　肉　三分　　五味子　二分　　麝香　三厘

右の三味細末にして、男の褌を二寸四方黑燒とし。五月の粽かまたは正月の餅か但し婚禮のいわひの餅かを糊となして。四十九丸になし本金箔の衣をかけ。女に四十七丸をのませ。男は殘る二丸を懷中なすべし。此女男と遠ざかり年月經て會ずに居るといへども。かならず忘るゝとなく戀したふといふ也。崎陽より聞つたへて爰にしるす

とあるのであるが、「四十九丸になし」とあつて、「女に四十七丸」、男は「殘る二丸」では、何をいつてゐるのかさつぱり分らない。が、牛肉五味子云々とまじめにいうてゐる所が面白い。此の本案外數版をかさね、普及されてゐるらしいから。此の妄說は、或は信ぜられてゐたかも知れぬ。當時天保前後

の(或は古く)時人に。

現に、此の卷下に、「契情にペプラホを吞して紅毛人國え歸るわかれの圖」として、脩ける崎陽の傾城と、立ちて長煙管らしきものを持てる紅毛との繪がある。紅毛は、白い頭巾のやうのものを頭上から肩へ頂き、代赭色の詰襟服を着てゐる。丁度刑務所の看守といつた感じ。

同本の附錄に、秘藥之傳といふのがあつて、中、○紅毛長命丸之製法といふのがある。これも參考(といつても何の參考であるか分らぬが)として掲げておく。

一。丁子、阿片、蟾蘇、紫梢花、各一錢　龍腦、麝香　各五分

右七味細末蜜にて煉、　といふのである。其妙、神のごとしとあるが、あてにはならない。

尚、唐人の媚藥として、此本卷頭に撼龍の說を擧げてゐる。三才圖會にも現れてゐるが、要を得てゐるから載せておく。これは、江戸初期南蠻流秘藥として、傳つてゐたものであらう。

○葵元慶が撼龍の說

幹何遠が春說紀聞にいはく撼龍といふものあり。蠻人是を養ふ長さ一尺ばかり。銀盤の中におき玉の筋を張て育ける也。此龍撼を好み喰ふしほを飼すまして。しばらく有て鱗の中より撼を出す。そのしろき支雪のごとし。是をとり貯へ置て　酒にて一錢目ほどこれを吞むに、はなはだ妙なりとぞ。葵元慶といふ人あまり此龍を悴けるによつて、その龍死したり、ゆへに龍を撼漬にして貯へおきてその撼を用ひけるとかや。此說本草綱目、三才圖會等にも見えたり。今は蠻國より

も此龍あまり渡らぬにやあらん。

といふのである。

横長小本「濃開節用集」にも、若干の紅毛流媚藥に就ての記錄がある。○阿蘭陀人の傳授奇妙△悅丸といふもの、蜻蛉(やんま)の中に鬼(おに)とも又澁(しぶ)ともいふ柿(かき)色なるの首を取つぶし、その油を用ふるといふのである。

○又方として、

一、じやしやし、　一、くこつのはい、　一、につけい

右三色おの／＼等分粉にして、――にてねり、塗り云々。ゆへに此くすりの名を萬年思悅丹といふとある。一種の刺戟劑たることは無論である。此本には、紅毛、倭妹と語る圖が三圖收めてある。畫は豐信風（墨摺）。中、紅毛人は、座においても、皆帽子を冠つてゐる。「ランチヤウタアデキン」など丶いつた語を、彼をして使用せしめてゐる。以上。

○右、小篇は、「新小說」七月號所載拙稿「艶本に現れた紅毛」の補遺である。あの稿執筆當時以後の一二材料によりてのもの。對照せらるれば幸甚。

――六月二十二日

黄表紙(寛政後期)解題抄

●先開梅の赤本 三卷 京傳作 重政畫 寛政五年版 蔦屋版である。序に、若井の水を硯に汲惠方にむかつて 山東京傳 試筆とあり、下に例の牡丹餅印を見る。梗概。ちんもち仕候などの看版かけた年の暮の忙しい町中へ、歳の神が、門松の松を束ねて運ぶ馬の背の上に乘つて來る。節季候なども忙しさうに通つてゆく。大晦日の八ッ時分になると、一ばん鷄を鳴くので、鷄の親子夫婦忙しい。ちやほの体の後ろにある時斗には、七五三讓葉の飾が見え、床には鏡餅も据ゑてある。元日になつて「いつもと違つて元日の明烏は、春の來たのを告げる役だから、隨分氣を付けて、山里までも殘りなく告げわたりましやうぞ」といふ天道樣の言付で、くまのやとした提灯などを持つた尻端折の烏五人が、へーい〳〵と向鉢卷で忙しい体。次は、小路まちの井戸、武藏のほりかねの井、金ざはうなぎの井、といつた井姿の連中が、若水汲みに來て出逢ひ、お目出たうを繰り返してゐるといふ樣子。次ぎ、富士と鷹と茄子が初夢で忙しい事を呟く。名代を出し、一筱波、二鷹、三唐茄子などもあるといつた樣子。(以上ー上之卷)。雛や波や網干にかゝるに忙しい霞。そろ〳〵春めいて、例年の如く富士の處へ總山が集り、アヽヽ〳〵と惣笑ひに笑ふ樣子。風の神の風の用意。こち、いさな、ふじ、ならひの中で風の神「どうでも時候のものだけあつて、東風がいつちよく光るはへ」などある。梅の宿屋へ來た鶯の主從。北さきはの國、東日本國とある榜示杭の手前で、代謝の言葉を告げやつてゐる雁と燕。(以上、中の卷)。初雷

の用意と見えて、雷の師匠へ鳴り方を習ひに來てゐる、稽古場の體。お師匠曰く「らいしやさんは器用だ。とんだよく鳴んなさる。モウ日待ちぐらいはいつて鳴られる」というてゐる。次ギ猫の戀で二匹の出逢ひ。次ギ棹姫(美女)と朧月(美男)との出逢ひ。次ギ棹姫の館「さほ姫は初音の日の松がさねの半切に百千鳥のさへづり程數の思ひを認めし春の日の長文を」奴凧に結へて、朧月の許に差立てる。(腰元、青柳、文を掛けた奴凧を上げてゐる緣端。)こゝに北岩倉の庵室に、消え殘つた雪佛が、宗玄といつた體でゐる。そこへ奴凧が落ちる。文を讀むと、雪佛、かねて自分の戀慕してゐた棹姫が、此の十五夜に逢はうといふ文言を見て、自分が朧月となり、身を忍ばんと計る。こゝに又去年西の海を遁れたるとし越の鬼、これも棹姫に戀慕、老人に身を扮して棹姫の館に忍び込んだ、所を橙(女性に擬く)に見つけられる。鬼は傍にありあふ福引の繩で、縛り、其身は樣子を見んと緣の下に隱れる。そこへ雪佛が、朧月の姿に化けて來かゝる。出迎へた棹姫は「おまへさんの御手はきつうつめたうござんす手が切れるやうだ」といひながら閨へ引かうとする。それを柱に縛られて焦れつたがる橙女、「わたしが男だと、アノ雪佛へ小便をしかけてやるに」。雪佛と露見、まご／＼してゐるうちに、夜明けとなり天道樣のお蔭で、雪佛は水にとける。折よく歳の神も來あはせて、ありあふ銚子の屠蘇酒を鬼の口へ注ぎこむと、鬼は其の儘息たえる。朧月と棹姫、お二方の惡者退治に呆れてゐる體。次ギ、千兩箱を車にうんと積んだ歳の神。春宵一刻價千金で、春の日は一日で千兩づゝとなる、これを歳の神の御儲けとせられる、といつた體。(以上、下の卷)新春の際物であるが、雪佛を宗玄もどきにした所が智慧か。初めの、正月事物行事の擬人も、常套ではあるが、面白さの通常心理を穿つていゝものである。

●頓囀卯席書提料理四人詰南片傀儡 三卷 京傳作 重政畫 寛政五年版　例の、鬼と佛とが、操師となつて、人事の善人不善人

を操るのである。圖は各々上と下とに分れ、下の善には、必ず上に佛が糸をひき、不善には、鬼が糸を引いてゐる。中には善に惡を向はせ、即ち佛と鬼とが掛合で糸を引いてゐるのもある。第八丁裏第九丁表のヒラキの圖、よき姑とよき嫁、嫁が姑の肩を揉める場面などは、性質の通り、雲の間は、全部佛ばかりである。此の人事善惡にかこつけてゐる點、唯當時の操を持つてきた所だけは思ひ付であるが、他に於て滲んでゐる教訓趣味は、彼が幕令を迎へた點でもあらうが、素氣ないものだ。殊に毎圖、必ず御談義風の言葉を連ねてゐる。面白くもないものだ。樂屋ともいふべき處で、鬼と佛が、團爐裏を圍んで、一ぷくしてゐる所がある。そこで、鬼「とかく善人はすけなく、惡人が多いと見えて、佛樣たちより俺が方がいそがしい」と呟いてゐる。その次ぎ、これは一寸、當時の操りの樂屋も匂はせてゐて面白い。それを拔く。（第十三丁裏第十四丁裏）

罪業深く娑婆に怨を殘して、浮みかねる人形は、一たび幽靈にして出し、其罪を滅しさする也。「この幕の道具は、藪疊に流れ灌頂、後ろが黒幕だ、常念佛で幕が明くによ。ア、ラ閻浮戀しやナアをきつかけに、うすどろをうちあげてくれねへ。

「三千世界のあやつり芝居の頭取は賓頭盧尊者なり、それだから娑婆の芝居でも頭取は高い所に上つてゐるなり。

「頭取は萬事に心を配り、かんてらの蠟燭もさうとぼしては損じや、衣裳が汚れては損じや、人形に傷が付ては損じや、損じや〳〵といひしよりびんづる尊者と申とかや。〇しやうちう火と魂の下はモリようござへす。〇さゝれんりびきになつて幕かへ。（以上、右の圖。幽靈らしき女の操りを提げた鬼と。太鼓の前に、燒酎火などをぶらさげてゐる鬼と。）「頭取さん、その玉は此次ぎの幕ふき水の時いります、その玉の口上さやう。（これは、佛の人夫、手に拍子木を持つ。）（相手になつた頭取の尊者曰く）〇此玉をばどうぞ

毎日おれに持たせておいてくれゝばいゝ、玉を持たねへとびんづるめかねへ（以上、左の圖。）

次ギ、此の三千世界の操り芝居の座元は、無量壽佛、帳元は閻魔大王。閻魔と壽佛、下働きの鬼と佛ども大勢。それに「毎日〳〵娑婆の舞臺の狂言の善悪、札錢をくろがねの帳につけ、その罪をゑらむ事也。かるが故に、狂言綺語も讃佛乘の縁と云ひ、天地人は一ばんのけじやうといへり」云々、大分抹香くさいお談義がある。

●國姓爺合戰　三卷　作者不詳 畫家不詳　寛政六年カ

年代不詳。唯、上卷貼外題の中に寅とある、即ち体裁上、内容上、寛政六年の寅歳かと思はれる。大明へ韃靼の使節献上品をもつて到來、爾後兩國のもつれ、李蹈天の叛逆、呉三桂の忠戰、錦祥女の日本へ避難から、最後例の和藤内が千里が竹で韃靼兵を降伏させ、鬚を剃つてゐてやる處である。別に異つた趣向はない、唯近松原作國姓爺の大當りにつれたものであらう。以て此の青本當時も尚此の名作の評判、東都市井に高かつた證である。第一丁表は現に、小屋入口の体を描いてゐる。

●竹齋老寶山吹色　三卷　築地善交作 重政畫　寛政六年版

第一丁表、序の体裁にて左の如くある。

口　上

一、私儀此度扁鵲其所退け華佗のはだしさまうす古今未曾有の料治種〳〵工夫仕候間御望の御方樣は御賑々敷御光駕の程偏に奉希候以上

寅正月　藪内竹齋

この竹齋の手柄譚で一篇は始終してゐる。「みな樣御存じの竹齋老、つら〳〵工夫しけるやう、凡そ

人間の上焦中焦下焦の病を脈ばかりにて伺ふ故、ゑて仕損ひがあるなりと、駒形の目がねやへ誂へて、遠目鏡を拵へ、上焦の病は口から覗き、中焦の病は臍から覗き、下焦の病は尻の穴から覗き見るに、あり〳〵と見えすく故、何う見へたかう見へたとへちまな思案をするに及ばず、忽ち療治手段が付き藥の效目拔群なるゆへ、見ごをし醫者と名代を取、門前市を爲す、その療治の仕方だん〳〵感心したものさ」とあつて、竹齋老、病人の腹をあけ、臍を眼鏡で覗いてゐる圖。(一の裏二の表)。「人間は食を喰はねばいかず、さり乍ら藥をのめば飯が喰ひにくゝなる故、藥を飯に焚きて喰はせる故、藥を一緒に腹中へ治まり、病氣がよくなる、傍から直に力つく誠に竹齋老の工夫、へつぴり醫者の及ぶ所に非ずと、歴々の醫者たち手をつかねて門人となり、三介役をつとめる」といつた体。一方で藥を刻んでゐるかと思へば一方は竈に火を焚きつけてゐる。中には桶の米をといでる者もある。「十一のたきぞめに藥の飯を焚きならい。はや十三の正月はこうしやな醫者と浮名立つ」ととんでもない事をいつてゐるお弟子がある。竹齋は、頭巾を冠り、得意滿面で「これ〳〵三尺去つてさるねむりばかりせまいぞ、あがつたらあとへ内托飯と通聖散をしかけさつしやい」といふてゐる。筒袖で威張つたものである。次ぎは、作者が作者であるだけ、平賀源内流のエレキテルを應用したもの。全文如左。

「引かせの病人は和蘭のゑれきてるから思ひつき、屁禮支出留といふふいごをこしらへ、尻の穴へ管をはめて、さつ〳〵とふいごをさせば、引かせば口へぬけてしまふ。その時ふくはんきんしやうきはんといふ飯を食はせて、あとをおぎなふなり。大ぜひはやりかぜの病人落合ひたる時は、管を何本も拵へ尻の穴から口へはめてやらかせば、水車のこまがたをしかけたあんばひにて、どこでも通じるなり。それでは風氣のとれぬ病人は、汗をさするなり、其法は次に圖す」(天地乾坤こんとんみぶん、じやうずな醫者

は多けれど、ついてさつぱり抜ける、さん〳〵ひいた引かぜ、すい〳〵のすい。ぬけるは〳〵。」片肌ぬぎてふいごを押す竹齋、管の通つた病人、尻を曝して、床臺に蹲つてゐる、その口からは風邪氣が、煙のやうに脱けてゐる。見物の門人、なんとしやうあんとへたの木すんぱくの二人。（以上、三ノ裏四の表。）次ぎ、汗を取る方法は、角力取を雇つてきて、病人大勢がゝりでそれにとりつき、押すといふのである。竹齋老は、行司格、軍配をふるといつた圖。次ぎ、御屋敷の棚つちりとかぼちやじりの二人の女中が、尻を直して貰ひに來る。その玄關先の体である。（以上、上卷）

竹齋の家來のにらみの介が應待に出て、暫らく待合せる。座に、お芋を盆に山のやうに載せて振舞ふ。睨の介は、相變らず、眞面目に睨んで控へてゐる。女は、しめる程に〳〵おほゝと笑ひ、げら〳〵笑つてはつめこみ、後には氣を重くして壁ばつかり睨んでゐたりしが、暫くすると、お芋のせゐで、お腹がぶつ〳〵として、やたらむしやうにもみつちりになる。次ぎ、時分はよしと療治場へ通すと、かねて用意してある當時流行の役者女形ずらりと居並ぶ。女は恥づかしさ、竹齋から紹介される度に、とりはづしてはならぬと一尻懸命になつてはすぼめるから、流石の大じりぐいもちひさくなる處を、竹齋かねて用意のたがをはめるといつたものである。たがをはめて、槌を振つてゐる圖。左は、來迎の如く、役者どもが居並んでゐる。次ぎ、中風にて左が痛みかなはぬといふのを、吉田才二といつた大坂下りの人形使に命じて治させる圖。次ぎ右の手のきかぬ中風病を頼まれる。眼鏡で見ると、これは大の自慢で、中々吉田如きでは治らぬ人物。そこで一工夫。青樓へつれてゆき、利く方の手（左）をしつかり竹齋取つてゐる處へ、なうてのおいらん、新造禿、男げいしやども來る。色男先生、衣紋を直さうとすると、利く方の手は、竹齋にぎつしり攫まれてゐる。仕方がないから利かぬ方の右手をむり

やり上げては直す。自惚ゆゑ、これを數回、痛さを堪へてくりかへす、その中に本復といつたばか〱しさである。次ぎ、腎虚した人物を、かね(?)をしたゝか飲ませて虚したる水を補ひ、それより身のぐにやつきを洗張のやうにして、槌で敲き、弟子が霧を吹つかけてゐるといふ工夫。丁度此の趣向は、天明元年版の市場通笑の「異國針命の洗濯」にそれに似た趣向がある。次ぎ、痩せた人物の療治には、豆と水を喰はせる。(以上、中卷)

「こゝにげつぷうと屁を朝から晩まで出つゞけに出る人あり、竹齋老つら〱考へ、大根はげつぷに出るもの故、まづしたゝかにしめこみ、芋は屁のくすりなればこれあとからしめこまば、げつぷに出るものと屁に出るものが腹中にて相もちにおしあひなば、屁もげつぷうもやむべし。敎に從ひ、其通りにやつた所が、暫らくすると、腹がぶつ〱して、やがて口からあい〱と屁が出、尻の穴からげつぷうをする」「竹齋老の御手際でもいかぬ病はかひもなし」といふのである。(亭主膳に向ひ、手をひろげて、口をあいてゐる。袖で鼻を押へる女房と同じく下女の圖と) 次ぎ、痰のからむ病人を、太い紙撚を口から腹、尻へ通し、その先を穴にして、そこから熱湯を流し込む。それでせい〱したとて治るのである。病人腹ばつて、こよりを通され「私はねずみやちう介と申て、きせるやでござります」というてゐる。今の灌腸器そのまゝの思ひつき、(屁だけ見てゐるとである。)とにかく、作者が善交だけあつて、こんなつまらぬ思ひ付にも、他の戯作者とは、異つた蘭學畠の智識の幻が往來してゐる。是れ奇、然し彼としては寧ろ當然であつたらう。次ぎ、先だつて、屁の療治をしてやつた女中のひきで、不きりやう女數人の女中を治させに、三太夫が連れて來る。その數一分際はある。竹齋老、こゝの所二丁分を使つて大車輪、面形を拵へて、療治、殿樣も見違へる位ゐの綺麗にして返す。最尾、俵の上に乗つた大黑もどきの竹齋老。大流行で、内證

はふく〳〵福はうちへ〳〵と祝ひこめ云々といふ体である。

此の作者善交（築地）は、謂ふ迄もない二世風來、萬象亭、例の森島（實姓は、桂川）甫齋のことである「紅毛雜話」などの蘭學紅毛に關する數種の著があり、即ち彼の素地には、師の源內、兄の桂川甫周などの指導刺戟交々あつたらう。その戲作には、洒落本黃表紙數種を見うけるが、この晩年の「竹齋老」などは、比較的彼の蘭學臭味が現れてゐると思ふ。晚年、萬象亭の號を門人七珍萬寶に讓つてからは、居處を名にして築地善好と稱した、といふが、此の年時は、尠くとも此の「竹齋老」の寬政六年と見てよい。〔同時に狂名の（竹杖）爲輕も戲作に使用してはゐる。〕此の「竹齋老」當時、彼は四十三歲年老とは謂ふべくもない、が戲作過程としては翌七年に一作を見るが、とにかく最終期に屬すると見てよい。（尙、普通に善好といふが、此の竹齋老の原本は、明かに善交である。即ち善好善交併用したものであらう。）

尙、此の本表紙の外題が、例の洋字の圍みであることは、嘗て久保田米齋氏であつたか、風俗圖說（カ）にも謂はれ、知られてもゐるが、自分としては、この竹齋老に見るだけで、（米齋氏も此の本だけを見本に上げてゐた）、他は未見である。但し古く天明末の京傳のものには、戲文中にちよい〳〵此の洋字（擬ひ）のものあること、人の知る如しである。

○右は、前稿黃表紙（寬政初期）解題其の一の續篇である。此稿刪出。

―六月二十三日夜―

南北の愛孫龜岳が事

大南北の孫に龜岳といふのがあつた、これが祖父南北から可なり愛せられてゐたらしい、その存在を最近知つた（發見といふほどではない）のである。自分として偶この所見、しかも最初の知識であるが、孫の龜岳といふだけより分らない。

發見したものは、文政十一年戊子孟春新版の、「裙模樣沖津白浪」の合卷物前中下三編六冊（南北作、蓬萊山人校、初世國貞畫）の中にである。（既に本年七月發行「歌舞伎研究」第二輯に登載の拙稿「根本仕立の臺本」の中にも若干附記はしておいたが。此稿、龜岳本位にの執筆である。）これは小まん、濱島幸兵衞などに藉材した合卷物であるが、その中の前編上の口繪、「歌舞妓狂言相談の圖」の中に、此の龜岳が見える。役者は坂東秀佳、岩井杜若、岩井紫若、外に南北と直重といふのがゐる。此の直重といふのは、不詳であるが、これ或は南北悴の二世勝俵藏ではあるまいか。即ち彼は「始め俳優となり、三世三津五郎の門下にして劇藏といひ、後に鶴十郎と改めしが、文化十二年俳優を廢めて深川に妓樓を營み、直江屋十兵衞といひ、更に文政十年より作者となりて、父の初名俵藏を襲ぎしが天保元年十二月十七日、五十歳にて歿しき」（近世日本演劇史六七七頁）といふ。その直江屋十兵衞ではないか。即ち直と十、十を重と變へて直重ではあるまいか。殊に此の二世俵藏は、文政八年の「四谷怪談」など其他に於て俳優への注意、又は父の作の補删に隨分與つて力あつたらしい。すれば、此の俵藏が實際、かうした芝居相談の場にも臨んだ事は常に事實であつたらうと思ふ。その俵藏は、南北の婿であつた

とある。さうしてその俵藏の子が、即ち龜岳といふのではなからうか。すれば、この相談の席上は、南北の居家の意であらう。（果してその裏、半丁の繪には、年玉の紋をつけて即ち國貞と取れる男や他三人の入り來る圖がある、その門の名札に南とある。此の半丁は貞房の畫である。）

此の龜岳といふのは、後に何になつてゐるであらうか。畫が年少巧みであつたらう事は、この相談の席上に、雀を描いてゐる、それを覗く秀佳の樣でも分るが、（尙、念入りには、此の合卷中の、前の上第六丁裏と第七丁表の、「小まんと幸兵衞」の圖の屛風に、梅を描いて、それに 十童龜岳 つる屋 と落款させてゐる。）とにかく南北自身としても單に自分の孫だからといふだけではなく、相當に他からも認められた年少畫才の把持者であつたらう。十童といへば、此の文政十一年頃は十歲であつたらう。さて此の龜岳であるが、これが、例の五世南北——二世勝俵藏（前記、直重の事かといふ男）の養子といふ鶴屋孫太郎改め天保八年十一月の五世南北かと思へるが、それでは年代が合はない。即ち此の五世は、嘉永五年正月、五十七歲歿といふのであるから。文政十一年頃には、無論十歲ではない。すれば、これは、俵藏の實子として、存在した他で無論ある。すれば、此の龜岳は、後に畫家として大成したか否か、或は夭折したか。南北の子孫系圖でもあればすぐ分る事であらうが、今、明細でないのを遺憾とする。唯大南北が、晩年鍾愛したらしい此の龜岳といふ點に於て、その明確でないのを憾む。

探せば、大南北の合卷物の他にも、此の文政末當時に於て、此の龜岳はあらうと思ふ。或は、此の龜岳、初代國貞の門下などではなかつたらうか。

大南北の晩年の、內的生活の斷片を知りえたやうな氣がして、私は今、彼の微笑んでゐたやうな顏を想像しながら、此に此の紹介の筆を擱く。

—六月廿四日—

寄贈紹介

歌謠篇　石川巖編

書物往來叢書第三編である。能六齋の「花哇一夕話」、發狸子の「春陽唱話」、潘吉觀の「手毬語國字解」、羽積の「歌系圖」の四篇所收中、青陽唱話と國字解とは、始めての活字化である。他と雖も從來の無責任なる飜刻の比ではない。圖畫も多大に挿入、校訂も先づ無難。唯傍訓を事情上略いた箇處が多少あるのが遺憾といふ丈である。とにかく國字解、青陽唱話は、自分も一本づゝ持つてゐるが、相當な値を出してゐる。況して昨今はその幾倍を呼んでゐる。今日、この善本活字化が現れゝは、強いて眞喰ひ本の原本を漁る必要はない。（噫、家藏本と此叢書所收の帝國圖書館本とは多少の異同がある。これは他の機會に述べる）とにかく最近古書暴騰の折から、此の飜刻は、非常な皮肉事、最福音と云ひたい。是非一本を御奬めしたい。（四六判型、和紙和裝。貳圓五拾六錢。東京市本郷區駒込千駄木町五八、從吾所好社刊）

評釋大伴家持全集　小泉苳三著

藤村作氏校といふ。全集は附錄、評釋はその主なるものにつきてゞある。卷頭に家持に關する傳記、附に年表等を載せゐる。關係事項を記入せる地圖一葉。全集は、同氏の編に成つたもの。王朝時代、生活を歌つた詩人として寧ろ人麿赤人の上におきたい親愛なる家持の全歌の羅列てゐる。好著（四六判約四百頁、布裝、二圓五十錢、東京市神田、作文館）

護法之神兒島惟謙　[illegible]著

大津事情に名判決を下すべく中心となり活動した近世名判官兒島惟謙の評傳である。圖畫多數入。著者は崇拜の極この著に及んだといふ。その點か、非常に熱のある、刺戟の多い文と成つてゐる。材料の配合またよし。（菊布裝、二九四頁。貳圓五拾錢。發行所同上）

俳文俳句選　藤井乙男選著

高校用教科書として編まれたものといふ。俳文篇柴門辭（芭蕉）以下三十余篇、俳句篇は宗鑑以下盧子鬼城に至る、及び連句數篇を添ふ。挿圖豐富、俳壇史上好縮圖であらう。（四六判約百六十頁、八拾錢、發行所同上）

新井白石關係文獻總覽

日比谷圖書館波多野賢一氏の編に成る。白石文獻の殆ど全部である。著述、傳記及其の資料、參考資料。原稿本、古刊本明治本の凡てに渉つてゐる。東京誌料特別調査の第一といふ。吾人は、同氏及び館員諸氏の勞を多とし、尙今後愈々加餐、各文獻の綜合に努力せられたき事を望む。職として便の有無はさておき、獨り文獻の素地的事業に努められつゝある諸氏を、現在異數として感謝したい。（非賣）

人文　第一卷第一號

新雜誌、硬軟併せ載せ、概して趣味實益豊かな記事雜考である。陰崇拜より陽崇拜へ、最古の江戸名所圖、きつちよむ話に關する諸家の記錄、曰く何、凡て好讀物である。發展を望む（菊、一七六頁、特價八拾錢、東京市神田區表神保町十、人文發行所）

東海道に關する圖書　第二、第三

第一輯の續、第二に名所記繪圖の類。第三

著者より

本月から第三編にうつゝた。これで第一編は大正十年十月より同十三年十二月迄計二十七册、第二編は昨年一月より本年先月まで、別册三册共十八册、通計四十五册、今度で四十六といふ譯です。以後如斯く一年半位ゐで編を更へたいと思ふ。到頭滿四ヶ年に近づく譯です。（此の十月で）何とも駄筆を鞭打したまふ諸賢の御恩惠だと、難有く御禮が申上げたい。小生今日の處名も、一に本誌の誕生からです。その本誌に深甚な御好意御聲援を賜はる創刊以來の方々に、[illegible]始め厚く御禮もお述べしたい。●本號表紙二の何集は、御覽に供する、大抵は舊作●請希本集處第一卷も不日出來、今日でその四百頁以上は初校が濟んだ。三校了の部分百五十頁斗り、第一卷六百五十頁内外の筈。多くなつたのです。各卷頁も卷數も殖えといふ譯です。先は右御々（六月廿四日夜十一時半）

定價表

一册廿五錢	郵税貳錢
六册分	壹圓四拾錢 税共
十二册分同	貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割増の事
○照會は返信料添付の事

大正十五年六月二十七日印刷
大正十五年七月一日發行
〔貳拾五錢〕

編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　[illegible]社

名古屋市東區建中町一五七番地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

（典籍三より）は十六夜日記、東國紀行の類、その各種本解題及び異同の考證である。（菊勝、各約二十頁非賣、大阪市西區南堀江通三丁目二十六、金田氏方）

歌舞伎研究 第一輯

新生の誌、而も從來當然出づべく期待せられてゐてしかも嘗て是を見なかつた唯一の古劇研究滿載の誌である。しかも當發行所の如き資材に豐富でなければ、迚もかゝる贅澤さ充實さとは現れぬ、といふ程の立派さにそれが生れたのである。決して我等は故意の推奬を爲すのではない。用紙、挿圖の鮮明、口繪の豐富さなどは當然として、記事內容に於てこの推奬により多く値すると思ふ。從來の演劇誌類未だこの古劇の統一はなかつた、殊に歌舞伎と雖も、この純研究ではなかつた。誠に始めて我等の期待に副いたものと思ふ。本號執筆高野、伊原、黑木、澤美氏以下數氏、殊に黑木氏の淨瑠璃解題、澤美氏の歌舞伎劇本解題、吉田氏の歌舞伎狂言外題索引等は、永久便用の文獻であらう。別に、劇場一覽顯微鏡な、用紙別、原版通りの複製となし、添へてある。（會員組織、半年四圓八拾錢。東京市京橋區木挽町、歌舞伎座內同出版部。）

■新小說（七月南蠻紅毛號）○書物往來（三ノ五）○柳樽研究（二ノ五）○歌舞伎（二ノ七）○長唄（十五）○清元研究（十一）○墓碑史蹟研究（三十三）○川柳續錄（十五ノ六）○本道樂（二ノ二）○早稻田文學（六月）○國語と國文學（同）○歷史地理（同）○國學院雜誌（六月）○性の知識（同）○自然（同）○文章往來（七月近代劇號）

依託書目 （送料別、乞照會）

●能樂私論（野島）三十●古句新註（紅綠）八十●日本美人史（獨去）二圓五十●娯樂の江戸（鳶魚）美本一圓三十●極樂淨土論（松本文三郎）一圓二十●將來の宗教（新佛教同人編、明治三十六年）六十●明治文藝史（太陽增刊）一圓五十●菅公論（水谷不倒）九十●春の家漫筆（逍遙）一圓三十●袖時雨（紅葉、純初版）八十●濤聲（獨歩、初版菊判本）八十●春日局（櫻癡）六十●漾虛集（初版菊判、漱石）美三圓●鶉籠虞美人草（漱石三六判）一圓八十●彼岸過迄四篇（同）一圓五十●三四郎それから門（同）一圓七十●The Brothers Maris 巴里出版二圓●青春（風葉、初版本三冊美本）四圓●淪落のむれ（天民序）四十●お三津さん（三重吉、初版極美）一圓半●鐵火石火（秀湖）一圓五十●黑潮（蘆花、元版）八十●不如歸（同）五十●お目見えまわり（中平文子）五十●藝者又藝者二冊（西男）一圓三十●里見八犬傳（大川屋版、厚冊二冊）一圓五十●白露集（馮虛、胡射等）八十●ハウプトマン（鷗外）九十●みをつくし（初版、上田敏）一圓半●莽婦曆（邦枝完二）一圓●明治勅題歌集（村松）六十●結婚禮讃（武想庵）一圓●連翹（馬場孤蝶）八十●ニイチエと二詩人（竹風）七十●幻術の理法附神と幽靈（近藤嘉三）八十●論註聊齋誌異圖詠（繪入）上海版八冊完一圓●開童子（賞奇樓叢書の內、一枚落）二十●雜誌主潮（大正八年刊春秋社冬夏社合梓）創刊より四冊揃美八十●小說むら竹（篁村、元版）三十●（和）合世鏡上中二冊粗六十●（同）民間救濟錄二篇（福澤諭吉原版）七十●（同）風流俄天狗二一五四冊大本元版繪入本二圓●東西美術提要（原、石谷）銅版多入七十●（和）太功記後編旗幟（元丸本、厚六十●柳宗元（天籟）五十●明治三十年史（櫻牛。太陽增刊。假製本）五十●親鸞研究（大正七年雜誌、創刊より十冊揃）一圓三十●性增刊（東京大坂講演會號）六十●同變態性慾號八十●同生殖器崇拜號美一圓五十●同處女と貞操五十●雲のちぎれ（綠雲）七十●藝文（卷二。上田敏氏雜誌、明治三十五年）八十●露西亞（大正六年十月號）三十●はし句（紅葉、元版）八十●雜誌性第一卷（大正九年）より第二卷七まで二卷五欠十四冊揃二圓五十●神田明神靈驗記（繪入、脚本。明治三十六年刊）八十●雜誌太平洋第二卷ノ一（明治三十四年一月博文館、風俗寫眞附錄付）八十●雜誌トルストイ研究創刊より廢刊號まで全部合三冊五圓●運命觀（加藤咄堂）六十●新選歌曲集（霞氣樓主人編、東洋文藝全書、江戸淨瑠璃の部）美本八十●人道の戰士田中正造（正岡藝陽）五十●明治文化の研究（解放增刊）一圓●（和）風俗圖說（朝倉無聲氏編輯雜誌。木版手摺口繪入）第一より二ノ一まで七冊揃六圓●日本風俗圖繪第一（師宣の卷。特製本）三圓五十●西鶴の人々（梅溪）美本一圓五十●近松の人々（同）美一圓二十●藝術の革命（木村莊八）二圓五十●人生の歸趣（河上肇）一圓五十●社會主義評論（同、純初版）讀賣新聞刊二圓●（以下和）新撰柳樽一圓三十●注入百人一首（國芳豊國）二圓二十●繪入俳書（安永版）一圓八十●聲曲類纂（上本七揃）十圓●下界圖會（春扇）三圓半●狂書苑（初摺）二圓●聚美畫鑒（極彩色）二冊九圓●婚禮口粟袋（繪入）二冊一圓●（以下稀書會本）●參海雜誌（華山）三圓半●四言雜字一圓半●竹齋寶山吹色二圓半●米僊稿本浮世模樣二圓八十●風流蝶退治二冊二圓三十●狂齋繪日記三圓。

大正十五年六月廿七日印刷
大正十五年七月一日發行

定價貳拾五錢 送費貳錢

大正十五年七月廿七日印刷
大正十五年八月一日發行

参編第二册（通編第四十六册）

本文

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第二册（通編第四十七册）

○紅毛媚藥について

飯島花月

軟派研究第三編第一册の紅毛媚藥談にある諸藥の大部分は恐らく英泉などの戯作者派が衒學的若くはいゝ加減な駄法螺で和蘭藥方なごゝ假託して書いたものではあるまいか德川期の央頃から兎角何事にも和蘭傳來として誇大な宣傳をすることが行はれ賣藥や化粧品類には特に斯ういふ傾向が盛であつた事は恰も今日舶來品と誇稱して傳れんことを求むる商人の慣用手段と同一であつた紅毛諸藥と稱するうちで丁子龍腦麝香の如きは昔時印度や西藏方面から支那を經て本邦にも澤山渡つた普通藥故敢て和蘭秘法を待たずに既に媚藥として支那に用ゐられ本邦にも支那から其法が傳はつた事と思ふ「枕文庫」の紅毛()命丸の製法といふ七味の調劑は支那の「萬寶全書」などにも見えて居る筈だ右和蘭藥法中の又方として載せられた

一、じやしやし　一、くこつの
はい　一、につけい

右三色おの〳〵等分粉にして云々い一條は明らかに前に述べた關法假託の證據として擧げ得られるものと思ふ即ち枕文庫などより遙の以前に既に支那の藥法に見えて居るからである。（じやしやしはじやうしの脫字として間違あるまい。）

明の嘉靖十五年十月刊されて居る素女妙論に

想夫戀膏

蛇床子　狗骨灰　桂心（各三錢）定粉（一錢）

右爲細末津調云々

またわが天文二十一年正月今大路道三が譯したと傳へられる黃素妙論には

寸陰方

蛇床子（粉二匁）　狗骨灰　肉桂（各三匁）　定粉（二匁）

右四味細末シテ云々

これ明かに紅毛媚藥談中に載せられた和蘭方と同一のものでは有るまいか（但し二書の定粉一味だけ餘分だが主劑の三味は孰れも一致してゐる）

尚は永觀二十一年丹波康賴奏進の本邦最古の醫書たる醫心方の房內篇には澤山の房藥が載せられて居るが烏賊骨や鹿茸や水銀硫黃などの三四の動物鑛物以外は概ね艸根木皮で肉桂蛇床子などは其中でも特に多く用ゐられて居る然して此藥法は悉く支那傳來とあるから遠く千年の昔から寸陰方に類した配劑は支那から傳はつて普通に用ゐられて居たもので和蘭傳來を待つて知つたのでは無い枕文庫に所謂紅毛傳來ペプラホの法などいふ怪しげな外國語も恐らくは近松が國性爺合戰に蒙古語を模擬した珍妙な詞を用ゐたと同樣の筆法で讀者を煙に卷く戯作者の常套手段と解してよからうと思ふ閻魔王道行の浄瑠璃チリクチクスイ引換へての文句や忠臣藏のシシキガンコツかカイレイニフキウの道行文句などゝ古人の狡猾手段にうつかり乘せられぬやう御用心々々々と言ひたい、なる川柳の（略）の名玉が緬甸（ビルマ）から支那に輸入され支那から歐州に傳播したことを思へば蠟丸やコレン香も恐らく支那が本家本元であらう兎に角支那人は「大丈夫馬上ニ死セズンバ當サニ二死スベシ」と放言する程性慾に關しては非常な精力を有すると共に之に關する藥物や手法や其他文藝方面に亘つても昔時から著大な發達を遂げ來つて此點に於ては今日でも世界に比類なき富民たる事は殆ど驚嘆に値するものがある。

（追記）前揭の支那の「萬寶全書」（支那の俗書にて此書以外にもさま〳〵の春方を載せたものがある）の媚藥中で所謂紅毛法と同一なものと思はれるのは

萬寶全書春意妙方　抹馬頭一尼（マヽ）散

大附子　三分　蟾酥　一分
鴉片　三分　母丁香　一分
紫梢花　二分半　蓽撥　二分半
麝香　一分　茱萸　五分
蛇床子　五分　右以眞川椒五錢蒸成膏云々

とあつて「枕文庫」の七味劑中龍腦が無いばかりで圏點を施した主藥五種は共通して居る（枕文庫から貴誌の抄出は七味とあり乍ら一味を缺く）私は縷述の通り紅毛法なるものゝ大部分は其實支那傳來のものと信ずるのであるが併し紅毛が支那の藥法を重譯して傳來したのだとすれば紅毛法と稱しても差支へない樣なものだが戯作者輩が斯ういふ藥法を長崎の書生などから聞き傳へて書くと云ふは當時の事情として容易な事で無い之れよりは寧ろ黃素妙論の類からコッソリ抄出して紅毛方などゝ吹き立てる方が自然に運ばれ易い道であつたと思ふのである。

（大正十五年七月七日稿）

一九の異本「反古張障子」

一九の中本作に、「反古張障子」といふのがある。現に、滑稽文學全集にも、此の名前の物、前編と續編と二編が收められてゐる。即ち「當世茶話反古張障子」(全集本第二卷)と「當世茶話反古張障子續編」(同第五卷)といふのである。前編は、「濡れぬさきから年寄の冷水は首たけの慾 はまりこんだ後生願の浮世ばなし」とある通り、彼とうまのあうた或る老媼の浮世話の滑稽さ、中にしぜんと敎訓を含んだといふもの。その年次は、序に文政午孟春の文字があつて、即ち文政五年である。續篇は、幇間の万八といふのが、田舍大盡に却つて饑弄せられて、申譯の爲に坊主となつた、見出しも「蛙は口から出放題の戲言に瞳を月夜の釜、してやられた牽頭持の俄道心」といふのである。前編も續編も同じく短篇、菊判に組んで八頁位のものである。それと違つた「反古張障子」を、最近發見したのである。

元來、此の「反古張障子」は、命題の示すやうに、反古同樣、かき集めた小話であつて、作者自身も重きを爲してゐない、或は舊作の蒸し返しかとも思はれるものであるが、流石に當時の風俗を取り入れて、滿更の反古にはならぬ。既出の二篇は、共に文政五年版(續編も)であるが、さて此の新出の「反古張障子」は、いつの版か。元來この「反古張障子」は、全部普通書目に之を見ぬものである。今度新發見の「反古張」も無論である。

自分の發見したものは、比丘尼に材を藉りたものである。それも曾て自分が當著にも述べた賣比丘尼(私娼の一種)である。いゝ旦那が見つかつて、やれ嬉しや、造作も立派な物を建てはじめ、とその最中、旦那の身元に急變が起り、旦那は行衛不知、自分も吉原へ賣られる。果に或る幇間に元の素性を見現

されるといふだけのもの。であるが、その書き出しが、當時、從來の比丘尼の分布を大体に述べて、なほその風流行であつた、自分の長い賣比丘尼考を簡にしたやうなもののあるに於て、自分は北叟笑まれた。即ちこの前文をその儘原文を追うて發表したい。次ぎに、此の小篇の荒筋をも。

一寸解題に及ぶ。此本、中本一册、元表紙不明。序等なし。（或は落か）本文、第一丁より始まり、第九丁表まで。一行廿一字位詰八行半丁。振假名あり。○の句讀点を打つ。年代が不明であるが、最尾の第九丁裏に、半面、「太田道灌雄飛録　全六册」といふもの、廣告を載せ、その終り、巳の秋、人形町通り双鶴堂梓とある。此讀本（？）の出版年次が巳の秋か、或は此の「反古張障子」が巳の秋か、判然しないが、「反古張障子」にかけて可からう。巳といふと、文化六と、文政四、天保四とある。此の本無論初代と見て、歿年以後の天保四年では無論無からう。すれば、文化六か文政四であらう。然るに、別本の「反古張」は、文政五年である。即ち此の本その前年の文政四年でもあらうか。但し、此の反古張は「禍福雜談」と小見出しがあり、彼は「當世茶話」とあつた。全く異種であるから、強ひて年代を近邇させる必要もない。信用は出來ないが、此の本以前の藏書家某氏の書入には、文化六年巳年とある。が、異本ではあるが、篇の見出しが共に一個。しかも長短も略々相似たり。（當世茶話本と）即ち文政四年の巳であらうか。以下その要略。

禍福雜談　反古張障子

十返舍一九編

色に迷ふ心は浮舟に法の導引(みちびき)

身代の回向前に掛取の貰念佛

むかし〳〵。小哥比丘尼といふものはやりて。都は建仁寺町の下。大黒町の邊。浪花は高津の宮の北。高原の町はづれよりいでゝ。文庫に熊野の牛王。なぎのは。びんざゝらなど入れて持。身には淺黄黑。または茶染の布子に龍門の中幅帶前にむすび。黑羽二重のあたまかくし。つまをりの菅笠。前さがりにかぶり。絹の二布裾みじかく。樣子なしにつか〳〵と歩行。勸進といふ聲も引きらず。はやりぶしをうたひ。うら店のひとり住。醫者がたの供部屋を心がけて。哥に氣をうつさせ。ぬれをしかけ。相手さへあればころりと　て。鳥目百文の定直段。何國もおなじ事にて。伊勢道中には。とよく野の取付虫の長野のふる狸と異名して。道者にとりつき。あぢな目つきし。壹錢の情をうけてよをわたる。明野がはらには。むしろ屏風をたてゝ。三四人づゝ居ならび。おしろいへげるほどぬすくり。口紅いやしきほどにつけ。あふぎにて往來をまねき。齒は雪のごとくしろくみがき。哥うたひながら。ゑみをつくり。參宮人の氣をうかし。紺の布子に齋宮笠かぶりて。とをし馬の馬奴駕かき。さては伊勢踏へ商ひにゆくもの。頭をとるといふゑんにて。商ひの門出よしと。いづれも祝ひて。ひときれづゝは賞翫し通るといへり。江戸にては神田の田町。下谷竹町邊。または淺草の田町。牛込田町。赤坂のふろや町。芝四國町などに出るは。下職の若者。あるはおやしきのたけきやつこらさをなかせ。竹光の魂をとらかす。また堺町の東大坂町。いづみ町。さては八買町山王町などには。名とりの上物ありて。客も勤番の侍衆。または商人の店あづかり。それ〳〵の念頃あるゆへに。强ちおし責をせず。顔かたちも花者風にして賤しからず。其代り。花代もむつかし。雜用もよほどかゝりて。其ころ清林があみだ笠とて。名題ものもありしとかや。こゝに歷々の丹那株にて。諱名を酒好といひしもの。和

泉町の妙貞といへる比丘尼にふとしやれそめて。喰付となり。坊主くさきも鼻につかず。次第にかはゆく。まるまこきあたまのぎり〳〵より。足のつまさきまで。此酒好が世話なれば。衣裳つき萬端。外に秀て。其頃の評判ものなりしに。酒好自身のはな毛とともに。妙貞の髮をものばさせ。すゑ〳〵は妻ともなし。わが手生の花とながめんと。妙貞が母ひとりあるをも。心添して不自由をさせざりければ。元來慾心房と異名のつきし母比丘尼。もの貰ふことには。人情をすてゝ。あつかましいの上なしといふしろもの。丹那へねがひて。何とぞむすめがつとめを。やめさせたきのぞみ。おつとまかせと。酒好さつそくのみこみ。かゝへ地面のうち。南向のあき地に家作し。親子ふたりを引とり。さしおくべしとて。急に普請の物好。繪圖面をもつてあつらへ。杉檜木のはしらごのみしてとりよせ。大工大せひに前金少々づゝわたして。作事をはじめ。何とぞ新宅にて正月をさすべしとて。極月の半頃より。番匠日雇に。増錢をつかはす約束にて。あしもとから鳥のたちまちにおつたて。屋根ふく傍から諸道具をはこび。ゆかはりし所には。はや疊屋が備後おもてをとりまはし。寒中に汗をながしてさしいそぐ。酒好は萬事大たばに出かけて。かねは椀方両入てもくるしからず。造作見ぐるしからぬやう。念入れよと。毎日普請場へきたりてのさし圖。よく〳〵の口分と見へ。親のとも子のともかまはず。この妙貞にうき身をやつして。次第に鼻の下細長くなり。けふも出入の雨のみや風のみやを。引つれて來り。世間はいそがしき。師走の半過に。はや正月のこゝろ。さま〴〵の料理ごのみして。普請場のかんな屑おしのけ。薄縁しかせて。ゆふ〳〵とのさかもり。妙貞はや髮をのばすつもりなれば。つく〴〵ばへのいがぐりあたまを。手拭にておしつゝみ。身にはべんべらもの。裾長くひきづり。黒じゆすの帶。しどけなくひきむすびて。丹那の機嫌をとり〴〵のもてなし。母比丘尼の欲心ぼう。くちか

ら鼠いろのよだれをながしてよろこび。諸事丹那の御かげ〱と。追從たら〲。有がたいの八百程も。いひつゞけてゐる所へ。酒好の宿より。下男の久すけ息きつてきたり」

以上が、本文第一丁より第五丁裏の第一行目までゝある。以下は、全文の登載ほどでもないから、梗概を以て更へ、所々本文を摘記しておく。

下男久助が來て、何をいふかと思へば「只今弟御さま。鰻の腸(わた)と泥鰌とをよごし(ママ)にしてめし上られ。大食傷にて。御家内大騷動なり。はやく御歸り。とけはしき使」といふのである。流石の酒好も驚いて早々宿に歸つてみると、親類其外出入の者まで、大勢集まり、病人を取りまき、醫師の相談、藥の評議まち〱である。其中に才覺らしき人のいふには、毒消には、金を煎じて飲ますがよし。それ藥鍋仕かけよと炭火をおこさせ、小判一兩といへど、番頭返事もせず臉を向いてゐる。氣をいらつて、こゝの内には小判はないか、小粒なりとも出せ、といふ。戸棚簞笥錢箱探しても貳朱一つもないから「隱居してゐらるゝ親仁の禪門やくはん頭を打ふつて酒好をさらへ。有金一萬五千兩渡したるは。未だ五年にならず、其外諸方への貸金、戻りしもあまたあらん。此金は何として。貴方もなき身代には。いかゞしてなしけるぞと。此悶着に病人はわきへなり。家内の騷動大方ならず」。女房は有情まとめて己が簞笥へ押込み錠おろし、手代共は、くすね物の仕末、三助も俄かに用心、草鞋の鼻緒をとをす、皆さあといへば逃げ出す用意」「家内ひつそり沈まり返りて此の仕舞(しまひ)を案ずる所に」隱居は天火のごとく怒りたつて、酒好を嚴しく吟味するに。云ひ譯一つもなし。依りて其庫より勸當。

勸當受けた酒好は、日頃末社につれて目をかけた誰彼へたづね行けば、皆逢へず、「それよりは如何せしや知らず」でといふのである。處が妙貞親子、「酒好の樣子をきゝて。肝をひつくりかへし、[illegible]

ばさいひ。節季仕廻はいつとても酒好のかたより附屆あることなれば。それを當にして算用なしに買がゝり。今更拂ふべき當の穂ちがひて。ぎつちりつまり。大工日雇材木屋や疊やへもこの事を語れば皆々呆れて。迚もさうした事なれば：：とかくは此家打壊し。百貫のかたに編笠一蓋。ねだ一本づゝなりとも分ざりにすべしとて。節季の廿四五日頃。掛矢にて片はしより打壊し。時の間に元の明地となしたりける。」（その明地をどうしたとは書いてない。）妙貞親子は、今此世へ生れ出たものゝやうにぐんにやりとなつて、詮方なく店賃の安い裏店へ引込んだが、今日食うて明日のあてもなく、それに買がゝりの尻が來て、着溜た着類も段々賣拂ふ。妙貞折角髮は伸びたが、今更比丘尼にならんも外聞あしく如何したらと吉原に遣手奉公の叔母を尋ねると、いつそ女郎になつたらとの事で「早速目見えさせし所に。器量はよし風俗はしなやかなり」、相談出來て、突出し晝三、あつぱれの堀出し物と親方も喜ぶ。果して評判、大繁昌となつた。或日、田舍大盡、末社に堺町の小詰役者共四五人附添ひ、中の町の茶屋に呑みゐたるに、妙貞今は浮舟と名を付けて二人禿に新造で例の如く花やかな道中姿、大盡眼を細くして云々。茶屋夫婦の盡力で、全盛、「前廣にさしこみ置ざれば首尾のならぬ」所を、浮舟早速光臨、（以下全文）「茶屋の夫婦飛んで出。これはおいらん。少々お聞申たきことあり。まづ〳〵これへと高貴の姫君にてもあしらふごとく。請じ入れて。上座になをせば。浮舟さも大樣に構へて。長煙管に多ばこのみゐたる顏を。田舍大盡の末社のうちに。すゞめの忠吉とて。よく囀る男。浮舟をつく〳〵見て。思はず知らずに。これは妙貞どのではないか。さても珍しやさうつかり言つて。しまつたあとで口に手を當てしは笑止にもおかしく。これにておいらんは。ついと座をたつて逃歸れば。折角大盡の思ひ込し女郎。取逃がせしと。忠吉の不首尾なりしも又おかし」（以上にて大尾）といふのである。

こゝで想ひ起されるのは、一九の作に比丘尼は因緣淺からざる次第である。現に自分が最近飜刻、自家より出版した「續々膝栗毛」（その初二編は、初代一九）の初代の中にも、この比丘尼が現れ、それが肴屋の口からうつかり洩れるといふ話。此の時の比丘尼も、還俗しきつてゐた。丁度髮を伸した花魁浮舟と同じやうである。但し「續々膝栗毛」に於ては、これに誤つて入夫した彌次も、舊丹那の杢右も此の比丘尼上りのおりえも、發見した肴屋も凡て同國――作者一九と同鄕の駿河にしてゐる。此の「反古張」の比丘尼が生國は何處とも分らず、丹那の酒好が江戶者といふ丈の差はある。要するに、この「反古張」の趣向を更に入りとれたのが、「續々膝栗毛」である。畢竟かうした賣比丘尼還俗に關した當時實事譚があつたのであらうと思ふ。それをそのまゝに記錄し、（多少の潤色は無論入つてゐよう）小篇としたのが、此の「反古張障子」の異本といふのではなからうか。尙此類、探せば彼の作中に、三度び現れて來るかも知れぬ。

一九の無論主流的作物ではないが、遺作の一として、披露に及ぶ事如右。――七月二十三日――

○雨の宮風の宮について

右の一九「反古張障子」にも、末社の意味で、雨の宮風の宮とあつた。これは、無論末社の意である。大盡な大神と見て、その取卷た末社。雨の宮、風の宮は、ふざけた一例である。此の末社なもて單に神とも「かみ」ともいうた。例は、寛政末享和頃の洒落本にざらに見受ける。茶屋女たちは、平氣で使つてゐる。普通、大盡客の取卷の謂である。然し、此の雨の宮風の宮の例は、始めてである。面白い言ひ方だ。（久）

灌頂卷の内容

「灌頂卷」は、我國エロチックス中最古(知らるゝ範圍の)の物の一、恐らく一二の順位に在る筈の物である。傳稱、鎌倉初期の産、書者詞書には、様々あり。傳本にも詳本略本があり、略本は小柴垣草紙ともいふ事、曾て拙著「江戸軟派雜考」にも掲げた。(勿論一般の常識でもあらうが)「考古書譜」(黑川眞賴翁著、同全集第一第二に收む)に據ると、黑川家にも此の一本摸本を有せらるゝさうである。最近、自分もその一個摸本――(廣本か略本かは斷言出來ないが、体裁、詞書の複雜より見て、恐らく廣本、即ち純灌頂卷か)を發見した。元來此の原本は、今日では何處に藏せられてゐるかを知らない。恐らくは應仁の亂或は以後に於て、遺失したのではあるまいか。京都某院に、現在一本を藏するといふが、小生發見の摸本よりも更に拙なりとの、これを比較した某氏の話である。昔、此の摸本或一本が、柳營(徳川氏柳營の意である。)にも入つてゐるといふが、それは如何なつてゐるか、また眞賴本は如何のものか、今比較するに由もない。唯、先づ自分發見のもの丈の輪廓を左に示すことにする。以て博雅の、異同、詳本略本の確な處も指示を受けたいと思ふ。先づ此の發見本(寧ろ發見繪卷)に言及する以前、重複ながら、灌頂卷の異本、廣本略本等に就て、自分が「考古書譜」等によりて曾て抄記した物を再び掲げて、以て、我人、此の繪卷に對する概念を新たにしたいと思ふ。

○

灌頂卷は、齋宮濟子女王(三品兵部卿章明親王女)の、瀧口武者平致光といふものと密通ありし事を敷演して、ゑがけるものなり。木下侯に古本あり。書樣の樣鎌倉時代のものとおぼし。もしこれより先き原本ありしものにや(下略)(屋代弘賢、一輪[illegible]書譜)

△

灌頂卷は、一名小柴垣草紙である。さて此の野宮の話は、古來有名で、十訓抄卷三にも、「寛和(花山)齋宮、野宮におはしけるに、公役瀧口平致光(平五大夫致賴五男)とかやいひけるものに、名立たまひて、群行もなくてすたれたまひける。夫より野の宮の公役はとまりけり。」(考古畫譜、上に據る。但し此の十訓抄卷三なるもの、流布本に見當らず。如何にか。)とあるといふ。序でながら筆畫家をいふと、諸説區々である。灌頂卷、繪、住吉法眼慶恩、詞、後白河法皇宸翰(本朝畫圖品目。古畫目錄。古畫類聚目錄。倭錦。)小柴垣。繪、信實。詞爲家(畫圖品目、畫圖品類)、繪詞、爲家一筆(柳庵雜筆)、繪信實、詞慈鎭(黑川眞賴本)など區々である。灌頂卷と小柴垣と同一であるとはいひながら、畫圖品目の如き、一は灌頂を住吉法眼一は小柴を信實とせる如き、なかしいやうではあるが、物は元來一つで、詳本を灌頂卷、略本を小柴垣といふ由である。(下略)(「江戸歡派雜考」三七五――三七六頁)

以上が、其の概念であるが、さて自分發見の物は如何。摸本ではあるが、肉筆、着極彩色、純然たる繪卷の形式を備へてゐる。詞書、次に畫、次また詞書の形式。先づ處々、要文(詞書)を示す。

○

寛和の比瀧口平致光とて聞ある美男ならひなき好色あり見人戀にしつみ聞者思をかけぬはなかりけり齋宮野宮におはしましける公役に參たるを御簾の中より御覽しけれはみめ有さま所のしな〳〵すきてはなやかなる姿世の人に勝てみえけるを男の影さす事もまれなるにたま〳〵御覽しける御心のうちいかゝ覺食けむ(次ぎ、烏帽子、狩衣姿の致光。矢を佩び、弓を持つ。童一人附隨の圖。左、御簾より齋宮なるべし、窺見の體簾の緣、女性の着衣など、金をあしらふ。)月傾夜ふくるほとにこしはのもとにふしたる處へいかなる神のいさめをかのかれいて給けむかうらんのはつれより御足を指おろしにくからす御覽しつゝかほをふませたまひたるにまきれて見あけたれはなへてならすうつくしき女房の御くしはいとこゝろくるしくこほれかゝりて御小袖の引合しとけなけにしろくうつくしき(以下十四字略)月のかけにほのかにみゆるこゝろまとひいはんかたなし(次ぎ、其の圖。次ぎ、此の畫書略。灌頂卷の昔、圖に其の目的がそれ自体の自然的[illegible]又は圖

開いたのか、又は　行動か、どこかへ或る　が行はれてゐる。」（次ギ、圖。）〔次ギ詞書略〕（次ギ、圖。）〔次ギ詞書〕（次ギ、圖）〔次ギ、詞〕（次ギ、圖。〔此圖中に、鷄の番ひ、樹にとまれる見ゆ。畦を作れるなるべし。〕　かくて時遷事變しぬれは鷄類晨刻殘宵爲明あかぬなごりの御松もかけはかりを身にそへて立歸る道芝の露けさもとりあつめたるやもめからすのうかれこゑ我心のうちをおもひしりたるにやとうつゝも夢の心地して齋宮も千夜を一夜になさまほしけれともしのゝめつらくあけ行はつゆとゝもにをきいてかたふく月をなごりをしくそなかめたまひけり（次ギ、致光、振返りつゝ、馬上歸りゆく姿、童從ふ。上半、青の色濃く塗りつぶし、二羽の鳥、黑く飛ぶ。紅葉の落葉ならん、庭前に點々として赤し。或はこれ落花の意か、次ギ再びに、初秋とあれば。馬の描寫、巧み、鞍に金を塗る。）もち光又公役に參たるに孟秋の上旬の事なれば秋の初風の上葉にをとつれて草はにむすふ露は玉かとうたかひ天のさわたる蓉（マヽ）の葉に思事かく比もすき逢瀨は雲のよそなれは物かなしくてそいたりける夜はふくるほどに人をとのするをみれはよめにもしるき御すかたまかうへきかたなきにむねうちさはきてをそれ〳〵まいりたるに〔以下略〕〔次ギ圖。小柴垣の前に、跪いゐる致光。上の木は、櫨の如き描寫。勾欄、簾のはづれ、覗かせらるゝ女体の白き顏。次同じく圖。略。〕此事御かいしやく漏聞て色深き人のふるまひゆかしくて常よりも心すましてはしの妻戸より秋の夕をなかめわたし給へは招薄の下に人待虫のこゑほのかにて光源氏のつゆわけ給けん蓬生のやどり思出られて物さひしき夕ぐれに致光いときよけにて參たり前栽のはつれより御らんしけれはめつき事からきゝしにも過てみえけれはむねうちさはきて大床へ出給を見はきたる事もなく侍に命もとてをそれ〳〵參たれはなつかしき御さまにて引入たまふを彼大將かおほろ月夜にしく物そなきとよみ侍けれと申せすき〳〵の事やとてついいさせ給を〔下略〕〔次ギ、絲に迎ふる女体と、烏帽子姿の後描きの致光。次ギ又圖。〕いとめつらしき御有樣あやしなからとかく〔以下三行斗略〕たれなるらむとおもふ程にかたしけなき御手なり唐帝の揚貴妃漢皇の李夫人は只名をのみ聞と三皇五帝の后も是にはすきしとそ

覺けりいやしき身にてかたしけなく近付たてまつる事多生曠劫をへたつるともまたあひがたしとおもふに〔下略〕〔次ギ圖、又圖、又圖、又圖、〕〔次ギ詞。〕〔次ギ圖。〕神代よりむかしにやあらん淸ものはのほりて天と成にごれるはくだりて地と定まれり其中に陰神陽神うきはしの上にたち水火婚合して萬のしな生けり其はなこのみとなりつたへてやいま齋宮光源氏の二つの神豊にして本來〔七字略〕烝々玄々として虚無の戯眞實の道ふみしらぬ山のはにも此□(不明)の□(全)まきたやすくゆるさゝるへくとなん其恐つゝしまさるへきにや殊に香は味をしらん根本なれば五智如來のさ(以下マヽ)たらりん圓くそくの尊胎全不二と觀し諸佛の出世の□なればたかいに□□□あひたてまつり給ふ事神も和光のかけすゝしかるへき(是れ、例の或る特殊の說明)〔次ギ圖、又圖〕致光は美男のすき者なれは春は散花を怨てさそふ嵐を厭ひ秋は入月を惜てとかなき山のはを恨かゝる者なれはにや齋宮もためしなき者におほしける誠夢幻の世也とてもかくてもありぬへし□(不明)娥宗王も積て蓬髪に月深く絳樹(マヽ)には琴も秋重て紅顔に霜あらたなり人更(カ)若事なし盛(マヽ)なるもの必衰小野小町も若かりし時は桃眼露にゑみしかほはせ柳髮風に梳し程寵愛世にすくなき衰て後はむかしをしのふなみたよな／＼枕席を霑といへとも更にかひなし品若く盛ならむ時男も女もなさけあらむともに合て互に心をなくさむへし此和きは上下成興男女含咲言媒也女として此道をしらさる人は難受人身を受て又如歸三途なるへし有情貴賤併千秋好色男女必保萬歳なるへきならむ

以上である。摸本のせいか、處々、前後してゐる箇處があるやうにも思はれ、且つ〔圖又圖〕の處は詞書が脱したのかとも思へる。且つその首尾が、齋宮致光のみの記事か、或は齋宮の侍女も立ちまじつてゐるのか、はつきりせぬ。筆を新たにして齋宮を說くやうな所があるからである。がこは或は術

文、人物はこの二者に恐らく止まつてゐよう。詞書は、終りにあつたやうに少々佛教臭い。漢文派を取り入れた點、紙和文でない所が特色である。圖は、摸本のせゐで、筆意が却つて巧になつたためか、とにかくその儘では平安末、又は鎌倉期とも思はれない。筆意はくづれたにしても構圖は元のまゝであらう。すれば、此の構圖、中々寫實で、近世、ひいき目では室町初期のものかとも思はれる。或は、原本から書者詞書を異にして、二本も三本も異本が生じてゐる。その比較的近世の摸本が、是といふのかも知れない。彼此對照の叶はぬを憾みとする。唯、現在京都某寺院に藏せるものよりは、遙かに逸作といふに於て、稍人意を強うする。

當然生るべきもの、しかもその形式（繪卷）からいへば、これを鎌倉期に置くは至當である。唯自分は、詞書の如何はおき、（專門的には、此の詞書の体裁からも、略年代を了知しうべしと思ふが）構圖からは室町か。果して鎌倉期といふなれば、我らは我らの祖先の、此種繪畫の發達、既に想像以上であつた事に驚嘆するのである。（因みに、此の摸本、横は約六間二尺、縱一尺。恐らく原本と同寸尺か又はその以下であらう。）　――七月二十三日夜

〇「ゆふでゝ」と「ゆふでく」

「慧星」の七月號に、諸氏の「金々先生榮華夢」の輪講が載つてゐる。中に、序の「ゆふでゝ頓直（とんちき）」の「ゆふでゝ」の解を、優でありながらとして納つたらしいが、金々先生の原文を自分も見ぬから何ともいへないが、此に似よつたものに、「ゆふでく」がある。「ゆふでく」なれば、洒落本「辰巳の園」にもある通り、田舍者の意だ。若し此の金々先生が、「ゆふでくとんちき」と讀めるなれば、共に名詞で、金なき者は田舍者とんちきとなるの意で、一層意味が判然しよう。然し原文を見ぬから何ともいへぬ。參考まで。時代も明和と安永（金々先生）で近いやうに思ふ。

洒落本雜記

（「洒落本集成」を心がけてゐるせゐ、最近洒落本に就て思ひ當る事が多い。此の雜記、此の「集成」編著によりての當目所感をそこはかとなく書いつけようといふのである。まづ、作家に就て——主に不詳側の作家に就て、先づその二三に觸れてみたい。）

一、作家に就て

イ、艶示樓は鼻山人也

前冊「艶示樓に就て」で、艶示樓と紫色主（艶二）と別人である事、及び艶示樓が京傳門人である事、「晴昔の茶殼」（寬政十二年版）の外には、洒落本を見ぬ事を列擧したが、更に此項、冒頭に、此の艶示樓の正体を明らめてみよう。事は、あの稿校正時、ふとの思付である。其後考慮を加へたがどうも的確に近い。即ち艶示樓は鼻山人也といふのである。といへば既に明らかである樣に、例の鼻の印の捺されてある事（「晴昔の茶殼」自序）、及び京傳を除き、此の鼻を使用したは、後來の作者たる、獨り鼻山人（東里山人に同じ。鼻山人としては人情本の作が多い。）のみであるからである。それに此の鼻山人が、何年頃かは明らかにしないが、とにかく京傳の門人である事は、古來諸書の一致する點である。（作者部類。戲作者小傳など。）。外骨氏本「京傳」所載の同門人には、如何してか、此の東里山人（鼻山人）を略いてゐるが、とにかく、鼻山人が京傳門下たりし事は問題はないと思ふ。即ち、他に珍らしき鼻印の「晴昔」使用と、東里（鼻山人）の京傳門人たりとの諸說一致、これ丈ですでに此の類推は肯定される事と思ふ。すれば、諸書に明らかにしなかつた鼻山人が、京傳に仕へた最初は、或はこの「晴昔」の寬政十二年又はその前間もなくの事ではなからうか。然るにその鼻山人、文政に至つて漸く、主に人情本（同系の洒落本作を含む）の作あり、又主に東里山人としては、文化に青本の作あり、〔青本年表で、文化四年廿三歲の最初なる如し。〕が此の純洒落本はこの「晴昔」の一冊になぜ止まつたか。（勿論文政元年かと思はるる「由佳里の月」の如き人情本內容の洒落本類にあれど、今略くの。問題は、寧ろ文

化猶在った純洒落本に就てである。）これには、私の答は斯うである。即ち彼が、師の「夜半の茶漬」を眞似て、「曉昔」を著した、（此時彼十六歳、頗る早熟である。或はこゝらから、「曉昔」を京傳作との說も出はしなかつたか。無論師の加筆が多かつたらう。）が、案外不評（?）であつた、それに當時なほ此方面には三馬一九などの多士濟々で、彼の活躍の余地がない。でこれが爲、一時洒落本に筆を絶つたといふべきであらう。といふのである。

ロ、三多樓主人に就て

三多樓主人（三多樓戯家主人ともいふ）といふのがある。作としては、寛政十一年の「仲街艶談」と、年代不詳（イ寛政十一年）の「女肆三人酩酊」の二作がある。「仲街艶談」は、「江戸文藝資料第一」にも飜刻せられて、人の知る所であらう。私の氣がついたのは、最近、此の「三人酩酊」を『集成』第一卷に挿入、その解題に當つての事である。三馬ではないかとの（内容からも）疑問である。念のため諸書を調べると「戯作者評判花折紙」には、此の「三人酩酊」が出てゐて、これには明かに三馬とある。但しこれは三多樓とあるべきもの丶、誤植だといへばそれ迄であるが、校訂者の粗漏とも強ちにいへないかとも思ふ。（國書刊行會本、徳川文藝類聚第十二、評判記所收本に據る。）「江戸趣味」誌上、朝倉氏が物せられた洒落本分類の類は如何。矢張りそのまゝ三多樓主人とあるだけである。結局、「花折紙」の三馬とあるのが、從來唯一の文献である。朝倉氏などが、此の三多樓三馬說の「花折紙」に氣づかれぬ筈はない。「仲街艶談」の飜刻、その解題をせらるゝ時に方つても、一言これに觸れてゐられないのは、氏等は三馬說を信じないのか、氣がついてはゐての事であらう。

「花折紙」から、此の三多樓作の二作を摘記すると「上上　女肆三人酩酊　三馬作、どれ〳〵も生酔ならくだを卷紙」。「上上ナ（此のナの形、白ヌキなり。假りにナを以てす。）　中街艶談　戯家作、ようしやはらつてみじまいの口こうせい」とある。一方は同じ三多樓を三馬、一方は作に現れたそのまゝの戯家、ちよつと怪しいとも思へるが、とにかく多少の典據にならう。作風（三人酩酊の）からいへは、無論三馬かと思へる事

既述の如し。即ち此作、吉原、深川、品川の三に分ち、それを泣、笑、腹立の三上戸に書き分けてゐるのである。三馬の中本作を聯想させるに十分な作風、會話の如きも流石に巧い。唯「自分の疑点は、一方同じ三多樓主人戯家の作「仲街艶談」に、山東住息子(京傳か)が序を掲げてゐる。その中に「作者は當春突出し流籠、譯も白歯の新狂言」とある事である。さうしてその序に寛政十一とある。が、若し三馬とするなれば、三馬は此春が突出しではない。前年に「辰巳婦言」があり、他の作(青本)に於ては、すでに寛政六年からある。然るに「東邊木」といへる男の跋には、「今戯家の親玉が著述なす所の……近ごろ山人辰巳仲街に至り、神をぶら提燈と倶にぶらつかせ云々」と物してゐる事である。滿更の突出し新妓でもなささうである。がかみごもを供にぶらつかせる大盡氣どりには、三馬としては少々可笑しい。

一方、三馬と思へるのは、作風もさうであるが、戯號の三多樓の三が三馬の三と同じ、且つ三多樓は三太郎のもじり。戯家は、たはけ、即ち馬鹿。これ三馬の名を二つに割つたものではなからうか。即ち三を三多樓と現はし、馬を馬鹿、たはけ、戯家、と現はしたのではなからうか。「山東住息子」の序の「當春突出し」は、三馬だとすれば、この當春は、版行の前年寛政十年(「辰巳婦言」の年)を意味し、序の寛政十一は、あとよりつけたもの。出版が十一の春であるから、序の内容は、その前年の十年に出來てゐたとも考へられる。無論寛政十年以前にも、三馬には青本等に作があるはあつたが、(青本作は六年に二。七年に一。八年一。九年に二。十年に四種を數へらる。)これらは問題にならず、辰巳婦言でわずかに存在を認められたといふのではなからうか。

「然し本來の三馬號は、無論、衆說の如く三和と焉馬との一字づゝから成したのであらう。が、この三多樓戯家は、更にその既成の三馬から、ふとした思ひ付と思ふ。此間の事情に通じてゐた「花折紙」は、三馬と直ちに爲したのであらう。○參考として、三馬の別號を列擧しておく。本町庵、四季山人、

酒落齋、遊戯堂、哆囉哩樓など。此の中、遊戯堂とたらり樓は、どうも此の三多樓戯家とも亦通ずる所あるやうに思ふは、避目か。若し予の謂ふ如く、果して、三多樓戯家を三馬とするなれば、彼の酒落本作に、「三人醉酊」「仲街艶談」の二を加へる事となる。〔文化頃の酒落本小本「吉原帽子」は、煙花濱子とあるが、その印に遊戯山人とある。これも疑へば疑へて來る。〕

ハ、山旭亭に就て

山旭亭といふのがある。山旭亭署名の下に成された酒落本を列擧すると、「孔雀染勤記」、「五臟眼」外に、「金の和良路」（この本、寛政二年（カ）版の「面美多通身」の改題本、剞直し本である。著者名を削り、序に山旭亭主人とし、題を金の和良路と入木したまでである。悉しくは他の折に説く。）の三本を有するのみである。中、純創作と見るべきは、「孔雀染勤記」と「五臟眼」の二である。共に寛政末又は享和かとも思へるのである。（他に、なほ小咄本に數種を見うける。此期頃。新群書第七、書目「笑話書目」を見よ。）然るに此に疑點が起るのは、例の神田あつ丸と同人か否かの問題である。成程、此の神田あつ丸と山旭亭とは、偶々相隨伴して酒落本に現れてゐる。まづあつ丸の酒落本を擧げると、

●侃手本（北齋畫、不詳（イ享和元））●佳妓鑑（不詳）●廓臍鏡（天明頃と云ふも恐らくは誤り。享和元年ならん）●通神藏（北齋畫。侃手本後編。年代不詳、（イ享和二））●内所圖會（政演畫。天明六年）●闇の明月（北齋畫、不詳）

の六種である。内所圖會最も古く、通神藏、最も新しいやうである。酒落本二度の禁を寬つて、中期後期とに、とにかく作を殘したるは、振鷺亭と同じく、割合に創作期の（酒落本として）長かつた男である。そのあつ丸は、神田なべ町に住み、（從つて彼の印章のなべの意が存る。）狂歌師で、黄厚麿、「酒落本でも小金あつ丸と稱した」武江年表によると、文政十二年十月、享年不詳で死んだとある。初期政演（京傳）に繪を描かせたり、後期北齋に描かせたり、彼の正業は紙問屋であるが、「伊勢屋吉兵衛と通稱した」とにかく相當彼ら京傳や北齋にも幅の利いた、有產階級の戯作遊びといふのであつたらうかも知れぬ。彼また畫をものしたと見え、（誰に學んだか、京か北か）、成三樓鳳雨の「廓數可佳妓」に口繪を描いてゐる。左程描くはない。北溪風の繪、或は北溪の代作、虛名を賣らんが爲にあ

つ丸としたのかも知れない。そのあつ丸が、山旭亭と洒落本作に於て序を交換してゐる。あつ丸山旭亭の全部を見てゐないから何ともいへないが、今「五臟眼」と「仇手本」とを比較すると、斯うである。

あつ丸名の「仇手本」には、山旭亭が、山旭亭間葉行述として、「（前略）……の世界を小金あつ丸なるもの奪、予仕懸の穴より閲するに……其本文の清書に習ひて仇手本と名づく。此後逼の通神藏はのちほどおめにかけましやう　さらばだア」とあり、いかにも終の口調は、自分の事のやうである。〔この仇手本が、享和頃である事は、北齋畫の落欵、畫狂人北齋筆からも確實である。〕其反對に、あつ丸が山旭亭名に序してゐるのは、「五臟眼」である。「……こゝに間婆行〔山旭亭の名。現に山旭亭署名の印に、間婆行とよめる。〕なるもの野狐の回々國よりひとつの玉を得たり、名づけて五臟眼とす……、お手にとつてめがねごろふじろと金玉もつり方に序す、神田あつ丸誌　なべに」とある。これである。然るに、此の兩者は同一人かとの疑ひは、此の序の他に、居所の同一からである。「五臟眼」には、自序の終りに、藍水北居山旭亭演とあり。かと思へば、「鄽臍鏡」には「千早ふる神田の八町堀のひんがしらん水のほとり濱荻樓上において　小金あつ丸　なべ」とあり、「佳妓窺」にも「八丁ぼりのひんがし羅ん水のほとり濱荻樓上におゐて　小金あつ丸誌　なべ」とある。藍水北居といふに於ては同一である。が話は違ふが、千蔭と春海のやうに同じ巷に住んだ例もあるから、同一居處というて、強ち同人とも斷言出來なからうが、がをかしい。山旭亭名の洒落本三種の中、「五臟眼」にあり、他の「孔雀染勸記」になく、剽窃本の「金の和良路」（これは、無論本屋の無理すゝめであらうが）にも無い、これも却つて、同人説を強うする材証かと思ふ。

山旭亭には、倘、異説がある。「風俗圖説」第二ノ二に物された澤田氏の說で、靑本文化三年の鳳凰染五三桐山、同後篇とから初代一九の變名といはれてゐるのである。がこれはをかしい、といふのは、「仇手本」に山旭亭が序を物してゐるが、當時すでに一九は洒落本作家として多作、相當に名を爲してゐた。（色講釋、惠比良梅、野良玉子など享和元年作。）で寧ろ一九の名に於て序すべきであらう。「山

旭亭が一九であるといふならば。）好んで聞えない山旭亭を以てあつ丸の洒落本（現に「仇手本」に）序する必要がない。且つ藍水北居の反証もある。少くとも一九ではない。此の類の類推は極めて危険である。結局、自分も前二者のやうには、此の山旭亭あつ丸の問題は、判然せぬ。唯材料だけを並べたに過ぎぬ。尚一考したい。

二、振鷺亭（關東來）の作期

大抵洒落本作家は、初期、中期、後期（初期は草創期より天明初まで。中期は、天明後半と寛政三年まで。後期を寛政五年以後文化頃までとする。種彦の天保、他作家二三の文政の例外もあるが。）と定つて、各期に跨がつてゐるのは尠い。殊に中期の末、寛政二年の禁、翌年の京傳体刑を受けてからは、後出のものもあるが、これで京傳はじめ凡そ中期作家は一先づ止んだ譯である。然るに、例外がある。それは、前にも一寸述べたあつ丸と振鷺亭である。此項、此の振鷺亭に就て、主に述べたい。

先づ振鷺亭の作を舉げる。（關東來、振鷺亭同一人と見て、一括しておく。一括の上、年代順とする。尚、純洒落本だけに今は止めたい。）

A、自惚鏡（天明九〔寛政元〕）。

B、取組手鑑（寛政五年）●意妓口（寛政末カ）●翁竹我（同カ）●格子戯語（享和元年）●見通三世相（享和初、花折紙に綴りたれば、元カ二）●玉の幉（同初カ）●永代談語（文化カ）

AB不詳、客衆一華表（或は、Bの寛政カ）●品川海苔（寛政頃といふ。未見なれば仕方なし）●世説新御座（不詳）●市が榮ゆる除夜（同）。

〔他に、「鳴子瓜」などの、未見のため、中なりや洒なりや不明のもの若干を略く〕

右の大体でも分るやう、彼は、主に後期に榮えてゐる。京傳などの繼承者の觀がある。なぜ自分がこゝにこんな分りきつた事を繰り返したか。従來の諸書、振鷺亭は、中期の作家、或は寛政九年頃迄

[illegible]寛政九年以後とも見たいから、[illegible]分は、「意妓の口」の如きは、（馬琴る。）とにかく彼は法網を窺つての作家、寧ろ禁以後享和にいたる中心作家と見たいのである。（この獨斷は、「洒落本集成」第一卷解題に讓る。）何れ未定本も見極めての上、再說したい。（朝倉氏も、振鷺亭を享和期に多く作したと見てゐられる。現にその校訂本の刊行會「資料本」では、玉の蝶を寛政二年などに見てゐられるが、後の「江戸趣味」では、これを享和に改めてゐられる。恐らく「富岡八幡鐘」（かはきち作）を享和に見直されたその影響でもあらうか。）

三、洒落本は、後期本全部秘密出版也

これも何でもない事であるが爲念。これは、新小說八月號拙稿「浮世繪雜考」の第二にも「極印に就て」として說いた中に觸れる處あつたが、要するに、洒落本其他が行事改となつてから以來（寛政二年十月以後）、行事の改判を受けたのは、同三年出版の京傳の三冊（その中、「錦の裏」にだけ極印がある。

「細論」は今原本なし、何ともいへず。「仕懸文庫」はなし。）であつたらう。然るに此の三冊が忽ち露顯して、京傳は五十日手鎖の体刑を受けた。然るにそれ以後は、凡て此の當然履行さるべき極印を、同系の小噺本には見受けるが、他には見ない。隨つて全部秘密出版かと推定をしておいたのである。これの反證を見つけた。何でもない事だが、爲念。

「作者部類」の三馬一九（洒落本作家としての）の項に、「地本問屋の行事に改正を受けず、私に印行し」とある、此の事である。これに、この當時の盛行洒落本は、寛政八九年頃の再度の取締嚴禁があつて、それに、これで私の推定は、當つた譯だが、尙可笑しいのは、此の程の嚴令を侵して、翌十年の三馬の「辰巳婦言」を始め、寛政末又は享和期に頻出した事である。（一九の活動は、寛政十年の「見通し占」の外は、享和である。）これらは全部無論秘であらうが、それにしては、行事問屋は何をしてゐたかといふ事である。

〔この項未完。次に、「洒落本前後の禁に就て」として再叙したい。〕　――七月廿四日朝

○龜岳の遺聞

前號に書いた龜岳の事を、ちよつと見當つた。何でもない、平凡な所にあつた。「戯作者小傳」（燕石十種第一）、鶴屋南北の項の終りに、和文混りの小傳を擧げて、次、

右は、六樹園が作文自筆なるもて是を記し、窪世祥これを刻す、文政十三庚寅年閏三月建之、直江重兵衛、勝田龜岳、鶴屋孫太郎と連名あり。云々。

孫は勝田龜岳とよばれ、幼より書をよくす、向島料理屋武藏屋權三が子なりと、香蝶樓（無論國貞の謂であらう）物語りぬ」とあつた。尙、見當る事もあらう。

五十〇田ごとの日一圓半〇文字の戯畫三十〇天保發句集（寫本）二十〇新發句集三十〇（以下洋本）その後（温亭）一圓〇近松語本集（高野、南校。演劇叢書本）二冊二圓半〇兒玉大將傳（上本）一圓八十〇明治の實錄二冊一圓八十〇浮世草紙（石川巖編）五冊十八圓〇近松世話浄るり（帝文本）二圓三十〇道中膝栗毛（同）二圓八十。（以上、在否御照會ありたし）

寄贈紹介

變態刑罰史　澤田撫松著

梅原北明氏など企劃の一、「變態十二史」中の一冊、第一回配本である。和紙和裝本、表紙及び本文用紙が稍堅いといふ外、まづ好ましい。この刑罰史、中々面白い。それに簡説ではあるが、本邦此種文献としては、先づその一に位するものであらう。此本、二卷に分れ、第一が上古から德川期前まで、第二卷が德川期及明治である。圖畫を豐富に入れてある事も結構である。叙説、引證該博、且つ正確さ信用のおける物ばかり。唯說く事詳かでないのは、第一文献としては當然である。まだこれ丈に纏められたことを其の功多として大に敬意を表したい。無論研究資料であるはもの〻、また事痴情に關する刑罰も多く、從つて讀んでも面白いのである。好著々々。（會費一圓六十三錢、東京市牛込區赤城元町三十四、文藝資料研究會發行。）

愚書珍籍標本集　一、二、三

既に以前から紹介しようと思つたが、此物性質上、二十人の限定、無代頒布と標傍してゐられるから、さうした篤志寄贈でもあり、又、多數になつては性質上頒布不能且つ御迷惑と思うて、敢て爲さなかつた。が、默つて氏の厚意を受けてゐるのも、物に聞へた氣である。で此に氏の厚意を感謝する意で發表する。此物、東京、滄吉書屋主人の厚意により「部數は原物の頁數の部合で二十部を」限りとして配布せられるもの、予幸ひその一部に初めからありつくべく厚意を持たれてゐる物である。命題の如く、愚書（と雖も大に意味はある。）珍籍の端本類を一枚づゝ貼つて、大抵一輯に十種内外、毎月頒布せられつゝあるもの。最近第三輯を頂いたがその内容を例示すると、東京府日誌、中外新聞、唐詩選畫本、新刀銘鑑、春曉八幡鐘、膝栗毛、逆卷涙夢の夜嵐、繪入花柳事情の八種である。硬軟樣々であるが、しかし大に我らの常識になる事彰しい。現に新刀銘鑑の享保版の如きもの。一般にあつても、此の滄吉書屋主人氏の如き試みは、大に意味あつて有益趣味あらうと思ふ。つまりペンを以てするより、直接標本を以てするのである。主人の厚意を深く謝す。

珊瑚礁と護謨の樹　磯ケ谷紫江著

氏の歌集である。墓碑史蹟研究の專門家たる氏にも此の心情發露の余技（或は本技か）がある。懐しく思うた。自分も昔取つた杵柄、死んだ兒が蘇つた樣に、自分の歌の樣に思はれて愛讀した。（三十錢。東京市外、代々幡町笹塚一〇六四番地スズラン書房）

我等の文學　第二號

早大文學科諸氏の同雜であるが、中、啓知小田嶽輔氏の遊仙窟愚考がある。長研究、拜見して大に得る所が多かつた。遊仙窟の日本影響に就て主に說かれてある。（非賣、早稻田教育會）

歷史地理（七月特大）〇國語と國文學〇性の智識〇長唄〇書物禮讃〇風俗研究〇川柳鯱鉾〇墓碑史蹟研究〇歌舞伎研究〇歌舞伎〇國學院雜誌〇本道樂（以上七月）〇柳樽研究（二ノ六）〇愛書趣味（五）〇新舊時代（二ノ三）〇清元研究（十二）〇文章往來（八月）〇新小說（八月）。

著者より

〇仕事に追はれて暑さも、月日も忘れてゐる〇海老で鯛を釣つたといふのか、今度花月翁から紅毛媚藥に關する寄稿を受けた「黃素妙論」との比較も氣がついてはゐたが、無精でその儘になつてゐた。それが一層精刻に比較斷決せられた譯。感謝申す。〇洒落本集成第一卷も愈々初校全丁、本文丈で五九〇頁、まだ解題緒言の校正が來ない。（此分二〇頁はあらう）全四校は八月中。製本は九月であらう。大に提灯を持つて頂きたい。賣れねさ、アト五卷を本屋で遊る譯です。なにとぞ。〇「軟派談筆」といふのも少し後れて出る筈です。これは、小生古今の雜筆集。大にふるつて八百屋を曝け出してゐます。がその中には、小生として最も緊張した二十代三十代の結晶の影が――江戸軟派へ來ぬ難路が多く收められました。――九月には是も出來ませう。此分四六判五七〇頁斗。以上。（七月廿四日）

定價表
一冊廿五錢　郵稅貳錢
六册分　稅共壹圓四拾錢
十二冊分同貳圓八拾錢
〇郵券貳錢一割增の事
〇照會は返信料添付の事

大正十五年七月二十七日印刷
大正十五年八月一日發行
「貳拾五錢」

名古屋市東區東新町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區瀧川町一五七番地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六〇二番

補記三則

著者

○喜三二と蓬萊山人龜遊、同女に就て

これは自分の前々稿蓬萊山人考に於て、喜三二と蓬萊山人龜遊とは同人、龜遊女は實在の異人ならんと推定しておいた。最近、朝倉氏編「江戸趣味」を繰つてゐると、これには既に天明四年「龜遊書草紙」の跋によつて、龜遊女また喜三二の變名だ、即ち同人と見る說が、同氏によつて發表せられてゐたのである。即ち左の如くである。

「龜遊女は、喜三二門人との肩書付きで、天明元年に、青本の「嗚呼不儘世之助噺」を初作として、同四年に「龜遊書草紙」を著してゐるが、其實は烏有の女で、朋誠堂喜三二の假名である事は、「龜遊書草紙」の卷末に、

右上下二册は、門葉の婦人龜遊が作れる青本の清書双紙なるが、予其むだの多きをはぶき、又增補するに▲印を以てし、批判するに△印を以てして、再び龜遊に返さんとするを書林が無心の無理無たいに持て歸りて、有の儘龜遊書草紙と題せしは、地口さりとも片言ともいざ白黑の三角印、それなりけりにゐりつけつゝ、蔦の唐丸さくら木に花咲く春の新板とはなしき、卜申すが則ち趣向にて面白くも無御座候へ共、世之介噺の御評判にすがり入御覽申し候間、御ひいき奉願候以上　喜三二

卜申すが趣向にてと作者の自白が、何よりの證據である」(大正六年七月――江戸趣味、二ノ一。江戸女流小說家。無聲)(單に、龜遊女、喜三二の同人といふだけは、先是「風俗圖說」二ノ二(大正四年六月)の澤田氏「戲作者に就て」の○榮女の項にも輪廓は出てゐる。」)

此の無聲氏の根據とせられた「卜申すが趣向」にては、取りやうによつては、唯、「卜申すが出版の經過、次第にて」といつた意味に取れぬ事もない。が先づ、無聲氏のいはるゝ通り、仕掛、からくりの意で可からう。に仍て、龜遊女則ち喜三二とすると、例の評判記「菊壽草」も若し本當に爾く思つたといふなれば、自分と同じく一杯喰つた譯である。によ り、自分の考も加へて、蓬萊山人龜遊、同龜遊女、凡て一括、喜三二なりとすると、殘る處、歸橋の蓬萊山人と二世蓬萊山人の二世爲馬とのみになつて、問題は余程簡になる。(無聲氏の此の記述では、蓬萊山人龜遊(女ならず)と喜三二とには觸れてゐられない。)

尙、これは其後氣づいた事で、あの蓬萊山人考には書入れなかつたが、龜山人は無論その發音キサンジンが喜三二と共通、即ち喜三二を芽出度く更へたものと思ふ。よつて、喜三二の場合は、この同音別號の龜山人のその龜に因んで蓬萊山人を生んだと附加したい。

○喜三二と歸橋との親善

尙、歸橋と喜三二と、直接も知りあつてゐたであらうと類推しておいたが、やはり道樂仲間であつた事は、その「居續借金」(天明三年春版)の中、「歸橋屏風の中」に、おたよと歸橋の對話で、

(た)せんごあつちに居つとけなしなすつた時、兄さんや内のしゆびが、さんだ惡かつたそうだれ(歸)そんな事などのやろうがいつた(た)かめ山のばけものが(歸)おもひつき所じやアれへ、おれがくるを内でもしつていろか(た)(以下略)

の龜山のばけものは、龜山人(喜三二)を指してゐる事無論である。

○「日光道中膝栗毛」の作

磐文の作。擬膝栗毛物の一である。此本の存在、「草雙紙書目」にも「中本書目」にも「磐文著作目錄」(列傳体小說史の)にも見えてゐない。草双紙風一册讀切、中本全二十五丁ものである。國綱の畫である。草雙紙風といふた通り、每丁挿繪、假名文字の文を添へてゐる。表紙は、彌次喜多の旅立の樣子を畫いた彩色摺。見返しは、日光土産の意であらう、「ひそ卷こうがらし」などがある。本文は、その第四丁が始まり、多少此の模擬作に氣が引けたか、第一丁は、全亭愚文作とし、卷尾は鈍亭磐文校合と逃げてゐる。序は磐文として此の作自作の由を明らかにしてゐる。此の序に、既に、東海道、木曾、甲州、成田、大山江島、鎌倉往土栗毛と編次けた模擬作のある由を白狀してゐる。「今又日光道中を一編增て七部の小册」とある。第二丁第三丁には、夢に原作者の一九や彌次喜多を、閻魔冥官立會の下に、引ばり出してゐる。尙、此本によると、他に、「兩國八景江戸栗毛」(芳盛畫)「房總めぐり膝栗毛」(國綱畫)など本文中に廣告してゐる。(備、此本、日光、出立から歸宅まで、挿繪は時に、猥雜なひといものがある。(七月廿四日)

大正十五年八月廿七日印刷
大正十五年九月一日發行

參編第三冊（通編第四十八冊）

本文

校訂 音曲神戸節（がうごぶし）

○解題

○全部紹介

大阪版（讀販）「潮來ぶし」など

尾崎久彌著

第三冊
（通編第四十八冊）

○大阪版讀販「潮來ぶし」など

美濃四ッ折くらゐの大きさで、二葉(又は三葉)を綴つたもの、これが瓦版とも通俗に謂はれた、讀販の流行唄草子である。江戸版もあり大阪版もあることは無論であるが、その中の大阪版潮來ぶし其他數種を合綴したものが此にある。此の中から、潮來ぶし其他の面白さうなものだけ、抜いてみよう。(原本は、成川圭司氏の恵與に與るものである。)

此本、全部大阪まつや町筋九之助ばしより北へ二筋目塩善といふのが版元である。二葉が一部であることは普通であるが、物によつては上下二冊になつてゐるのもある。即ち全四葉である。今、此の合綴本の所收總目をあげる。

傾城に誠ある文○むさしぼうはれはどつこいぶし○(かわりもんく)はれはどつこいぶし○(町づくし役者なよせ)はれはどつこいぶし、上○十二月いたこぶし●十二月いたこぶし、下●よめ入いたこぶし、上○嫁いりいたこぶし、下●太功記いたこぶし、上○太功記いたこぶし、下●伊勢參宮いたこぶし、上○伊勢參宮いたこぶし、下●五十三驛いたこぶし、上○五十三驛いたこぶし、下●(おかしいづくし)いたこぶし、上○(おかしいづくし)いたこぶし、下●(おもしろいづくし)いたこぶし、上○(おもしろいづくし)いたこぶし、下●(かけ合もんく)おどけいたこぶし、上○(かけ合もんく)おどけいたこぶし、下●女夫づくしいたこぶし、上○女夫づくしいたこぶし、下●(はしか)いたこぶし、上○(はしか)いたこぶし下、●(仮名手本)いたこぶし、上○白石噺いたこぶし●盛衰記いたこぶし、上○盛衰記いたこぶし下●菅原いたこぶし、上○菅原いたこぶし下○(そめいろによる)役者かぞへうた○(百人一首による)かぞへうた○(いろはによる)かぞへうた○(かわりもんく)だんのぶし○おどけ手まり歌、上○忠臣蔵(かわりもんく)だんのぶし○おどけ手鞠うた、下○忠臣蔵てまり歌(此唄、三葉が一部)○役者づくし○同○(三ケ津役者名)(よせかわりもんく)十二月手まりうた○(役者家名俳名十二つきかわりもんく)手まりうた(以上の二種、三葉が一部)○(大こくまひ松づくしかわりもんく)櫻づくし○(新だんまつしかわりもんく)づくぜに相場割○(新だんまつづくしかわりもんく)きやくづくし○(江戸深川)さはぎうた(此の分、三葉)○(中のしばい松本よね三)所作事、以上。

右の全部が、塩善版である。江戸に題材を持つたものどもである。以下、その一部しかも、抜載である。

○

●色里町中はやりうた(おかしいづくし)いたこぶし、上。より

くるわがよいのきやくさんがたをおくろげいこやなかいしゆがはよきなませそのあさははでな小うたやなけぶしもかすかにきこゆるさきだいこおさもふけゆくちや屋もどりびつしやりくゞりどしめてあるさりさはこまりいりやした(合)たゝけばおやじが目をさます

●同　下。より

【ささづくし】さとのみなかみさてしんまちやまつのくらいの。たゆふしよくあげやおくりのはちもんじすいなぢよろしゆはしまのうちなんちさか町。ほり江がは。きたのしんちや。むめがへや。ぴげそりばゝさきあましよまん。そのほかはまがはそうかさん(合)おきやくはすりむくひざがしら

●(かけ合もんく)おどけいたこぶし、上。より

男あそびすごしておもはずしらずしよやも四ッもさきわすれよふけてさびしいもどりみちいぬがなくやらおどすやらこけてすりむくひざがゝらあたまもこつつりあいたしこ。わがうちながらみすぼらし。〳〵たゝいてあけてたもうろ〳〵しよんぼりかどのくち(合)ごさ

女うちのないぎのそのなはおりんむれはしらくらまたろゝさまつみになるなさよのたさへはらがたつやらごふのわくゆふべもよふけてさなたゝきこんやもいまごろさなたゝき。さつてもすけべいおさこづらこんやはかどぐちあけはせぬ(合)おきせんづらされてごんせ(以下此のつゞきかけ合もんく也、此の思ひ付、一寸面白し。)

●色里町中はやりうたはしかいたこぶし。上より

【つくしむもの】ゑらいどくならまずいろごとよきやくはれつからきてゝれぬこう〳〵さびしきおきや見せすまぬかきしてしよがないゆふべもちぢよろしゆが。おちやひいた。こんどのはしかはたなし物。おい〳〵きやくしゆのぜんくはいな。いろざさくろはにまちやした(合)そうかでしんだらわらいもの

校訂 音曲神戸節(ごうどぶし)

解題

嘗て江戸軟派叢書第二編「どゝいつぶし根元集」や、本誌第二編第一册第二册等に於て丟爲した「都々一節起原考」と双對の關係にあるもの、即ち此の「音曲神戸節」である。此本、稿本一册、半紙形の九行罫紙二十三葉にいろは別に集錄せられたものである。神戸とは、近世熱田三遊里の一しかもその首座を爲した神戸の謂で、此の神戸を中心に榮えたものが、所謂後の都々一である。即ち都々一は、當時名古屋及宮の流行唄の亂れ囃子(しどろ)から來た轉訛名、此の神戸節は、發祥の地名を借りた名である。即ち此の神戸節の全內容は、都々一として宮及び名古屋、東海道の各驛、江戸、延いては他地方にまで及んだものの濫觴、起源である。現に、小寺玉晁の稿本「どゝいつぶし根元集」に所收の原始的どゝ一と共通なもの、數首を數へ、尙、他に宮(熱田)の地名事物を特殊に讀込んだもの數首を收めてゐる從來他に、この神戸節なる節の所在を、我等は嘗て文献上存知しない。それ丈、これが從來等閑視せられた、都々一發祥地の宮、殊に神戸遊廓附近の當時の流行唄その歌集として、最初にしてしかも有益多趣味な唯一記錄であらうと思ふ。尙、幕末流行の作者が第三者として遊女の境涯を詠んだものとは違ひ、彼女ら自身の率直な感情流露、そのまゝの創作が多きにゐるとも思はれ、また歌詞も幕末とは比較にならぬ純樸味原始味、殊には側々として我等の心胸を打つ悲痛味に滿ちてゐる。これらからも特殊な貴重味はあるかと思ふ。

勿論この「音曲神戸節」の全部が、宮驛神戸に於て創られたものではない。吾人が校訂筆寫の際にも、然らざるものを多く見受けた。これは無論、交通に便な宮の地理的理由からも、東西の唄を多量に吸集してゐると思ふ。都々一發祥の寛政末より以前の諸記錄に載れる唄の複載も多い。又、變へ唄の如きものも。これらは、無論、新しく所謂神戸節(後の都々一)の節調によつて唄はれたものであらう玉石同架、攙入創作雜載の觀があるが、とにかく此の稿本所載の全部を擧げておく。校訂謄寫にあたり二三の外は、全部原文のまゝとした。植字の都合上、原本一行一首のものを、二行となし、三段とした。尙、「どゝいつぶし根元集」に現はれしもの、及び宮驛固有名詞の含まれたもの、即ち神戸に純世胎を有してゐる唄の數首は、●を以て明かにした。(地名其他解說は、「どゝいつぶし根元集」の頭註〔自分の下したもの〕に詳述せられてある。參照ありたい。)尙、追加の中、「お客つとめか一座の中で」の唄は、都々一が潮來から生れた事を示す傍證とも思へる。とにかく當時神戸に、潮來が流行つてはゐた一例である。

音曲神戸節

高岡齋游鳧編集

い

○いろの戀のと扨やかましい人のせぬ事するじやなし

○いちごそをふさ二世迄かけててうしあわする三下り

○いまのおきやくに誠があればたてしはしらに花が咲

○いきさはりなりやわしや淀川の水の流もとめて見しよ

○いわゝいわんせかきねにしほりくさり繩さも思やせん

○いやなおかたにむりさはゆわぬきれてよければ今までに

○いやよあいたぞ此家のつとめはよふねんあき(ぬしいつま)

○いやな男になびこうよりもきれぬゑにしをきるがまし

猫○いろでやせるかしんぐがま(マヽ)すかたゞしつとめが(くに成か)

○いかにわたしがいたらぬとてもこふはなさるゝ(はづかない)

○いきでしよしんで男もよいが情のないのが玉にきづ

○いやなおきやくもぬしざうせんにしゆびを(つくろふそのつらさ)

○いつそやぼなりやのらうちやせまいやぼで(ないからのらなうつ)

●いろがくろふて氣がきくならば御茶屋がらす(にやぼでない)

○いやな坐しきにいる夜のながさなぜかこよひの(みじかさは)

ろ

○ろうかづたへにぬけてはきたがこすにこされぬ(かべひさへ)

○六十むくにでそわれぬ時は唐へいてなとそふてみしよ

は

○花といふじでさかぬもくやしさけばみがなる(はづかしや)

○はらが立かへ是しき事にかほにもみじをまきちらす

○橋のうへから又とりおとし氷にふたりが名をながす

○はをりかた手に帳面さげてかよいづとめはいつの事

○はらのたつ時はけんくわもするが跡であやまる(ほれしよふこ)

●はよふやめたやかいごりづ

まをぬしのおそばではりしごと
○はよふ此家をめでたくかし
こ女房がほしてくらしたい
○はよふこのやをめでたくか
しこつまよきたかとゆわれたい
○はよふ此家をめでたくかし
ここわいさとじやとながめたい

に

○二世とかわせしつまさへか
わるましてつとめの身じやものを
○にしも東も南もやめてわし
がおもいは北のかた
○西にさくはな南でひらく北
に一トころゑほとゝぎす
○にくいやろめは夜る晝かよ
ふすいたたれかはまゝならぬ
○にげるしやんも手立もつき
たもはやしぬより外もなし
○女房さらずさわたしものか
ずぎりさせけんのたつよふに

○女房されとはわしやゆわな
んだほかにしよふがないのやら
○女房去るよなうわ氣な人に
するのやくそくなる物か
●女房たゝきだし子はふみこ
ろしあとのごさいは是ゝに
○女房よばねば親へのふこう
よべばたれかへぎりたゝず
○女房あるのも子のある事も
しよふちしながら腹がたつ
○女房あるのも承知でほれた
とゞのつまりはごふ成と

は

○ほれて見せるはつとめのな
らいそれをうちこし女房がほ
○ほかにます花有のも承知お
さきながらもすへなごふ
○ほれたしやうこにやおまへ
のくせがみんなわたしがくせとなる
○ほれたしやうこにやあいと

てならぬ外にごさいはないわいナア
○ほれたせうこにやとめとて
ならぬかへらしやんすがぬしのため
○ほれていながら氣づよい事
をいふていなしてあさくやし
○ほれたかほすりやふんだり
けたりまりのけいこじや有まいし
○ほれたかほすりやふんだり
けたり誠ほれたらころす氣か
○ほれてほれられてあいぼれ
とやらとゞのつまりはごふなさろ
○ほれてみやんせかねこそな
けれ金のかわりのこゝろいき
○ほれてつまらぬ他國の人に
すへはからすのなきわかれ
○ほれてつまらぬものとはし
れどいろはしやんの外さやら

へ

○へだてられたる海川よりも
こすにこされぬかべひとへ

○返事まつ身は日にせんたびもみせやろうかにたちくらす

と

○としは卯のとし其名はさゝぬあわせおくれよ今いちど

○としは廿七その名はさゝぬまゝになるみがもたせたい

○としは三十だい其名はさゝぬひろいどこかにたゞひさり

○となり坐しきでひく三味せんはわしをまよわす五大りき

○とうにおちいでかたるにおちるあくじせんりとしれやすゐ

○とかくうき世がまゝなるならばいとしおまへにかねもたせ

○とゞのつまりをあんじるよふな淺イほれよはせぬわいな

○とのごもつなら廿四か五六つゝやはたちはうわのそら

○とてもそわれんあく緣ならば髮をおろしてあま寺へ

○とらは千里のやぶさへこすに越にこされぬかべひとへ

○どふでこよいはつぶさにやならぬするゑでおかほはたてゝみしよ

○どこかかよいをとめよもむりかわしがたてつく人じやなし

○どてのかわづのなくのも道理水にあわづにいるからは

○どこの土場でも長半ばでもさらし手拭こちの人

ち

○ちわのこたつになさけのふとんいろをひきだす酒ちやわん

○ちやうのはかまのひだとるよりもぬしの心がとりにくい

○ちわもりんきもくぜつのあまり明のからすが中なをり

り

○りん氣せまいぞへはらたちやせまいぞふで女房に成じやなし

○りこうだてすなさしでやしやんな人がかれこれいふぞいし

ぬ

○ぬしのくる夜はよいからしれるしめたしごきがじやらごける

○ぬじをかへしてその跡見ればどちらむいてもよぎのそで

○ぬしににやわぬてくだとやらもぐちなわたしがあるゆへに

○ぬしはわたしを他人のよふにへだてさんして樣といふ

○ぬしによふにたやゝでも産んで川といふじでねてみたい

○ぬしはわしゆへわしやぬしゆへに人にうらみはないわいナ

○ぬしはたち鳥ぬしある花よ思ひなをして後の花

○ぬしのこぬ夜ははやねてゆめに逢ふて思ひがはなしたい

○ぬしがあるゆへおきやくは
たへたまゝよおもへ（ばなんの　その）
○ぬしのかんしやくひごろの
氣しつ夫を苔にする（わしじや　ない）
○ぬしのおいでをいつじやと
聞けばおそく此月すへつかた

ゐ

○ゐろうさすのもみなわたし
ゆへあわせたまへよ（むすぶか　み）
○ゐいは有まいごこかにひと
りおせのたかさよはのしろさ

を

○をやもたいせつ此身もだい
じけれごたれかにや（かへられ　ぬ）
○おもしろいときやおまへと
ふたりくろふする時（はわしひ　こり）
○おもいだすまいとはおもへ
ごもいろはしやんのほ（かさ　やら）
○おつと承知〳〵五三の桐は
ごこのこうやがそめたやら

○親もとくしん此身もしよふ
ちねんがじやまして（そわしや　せん）
○おまへそのよにきらずをく
ふてのごのつまりは（ごうなさ　る）
○おもいさそよりころしてし
まへ死ねばごこかの（つちとな　る）
○おまへ前髪とらんすならば
わしもとめましよふり袖を
○男ぢくしよないぬよりおと
りいぬは尾もふるあ（さも見る）
○おまへひとりをたてよとす
れば岩やつるぎの中にすむ
○おとこめうりかいんぐわの
はしか玉（ママ）にほれゝば（女房ある）
○お竹しの竹心のやたけむね
にあり竹あかしたい
○おもふわたしにおもわぬお
まへおもわせふとはわ（しが　むり）
○おふて嬉しさわかれのつら
さおふてわかれがな（かよかろ）

○おふてうれしさわかれのつ
らさ夫れにじやけんな（事ば　かり）
○おふた夢みてわろふてさめ
るあたり見まわし泪ぐむ
○おもふまいとは思ひはすれ
ごまたもみれんでか（へすがき）
○思ひ出す程泪がさきへ（おち）
てながるゝいもせ川
○おつるこのはにやかぎりも
あるがかぎりないぞへ（我お　もひ）
○親のいけんも聞かないわし
がぬしにゆわれてあら（たまる）
○男よいのにほれたじやない
かぬしの持まへ諸事万事
○おふて嬉しさわかれのつら
さわたしや心がぐちになる
○おふて啼そと思ふていたに
おふてなま中むねせ（まる）
○おふて聞らなくはやしのゝ
めのにくやからすがつ（げわ　たる）

○男ぢくしよなふたみちかけ
てつとめすりやこそ聞わけゐ
○思ひきれとはしねとの事か
しねば野山のつちとなる
○おもひきれ〳〵あのきり
〴〵すおもひきれなく〳〵と
○思ひきれ〳〵きらねばなら
ぬかねのくさりもきりやきれる
○おふは玉さかかよふは毎夜
あわで歸すはいく度か
○おまへ〳〵やずみわしや年ン
の內てんじよつかへらぬてまゝな
○おまへ〳〵やずみわしやねん
のうち人目つゝみがぬ(マヽ)まゝなら

わ

○わけのあるたけもの猶いわ
ずあらたまるほどかんがつく
○わしとおまへははをりのひ
もよしかとむすんでむれにある
○わしはあふみで戀こがるれ

ごおまへあわずの氣まゝ酒
○わしが事かへ志賀から崎の
ひとつ松とはたよりない
●わしとおまへはよるふる雪
よ人にしらさずふかふなる
○わしはひとへにさく花なれ
ごつとめすりやこそやへにさく
○わしがけんしは此丁にやな
いぞ二丁も三丁もかみの丁に
●わしがおもひはあの森下タ
のおつる木の葉のかづよりも
○わしがきものを鼠にそめて
おまへ猫にして飛付かせよ
○わしは七ツにいなねばなら
ぬ內(ぐちか)をいわずとその羽をり
○わしがとのごでほめるぢや
ないが色の小黑イ背のひくい
○わしによふ似たアノほとゝ
ぎすなゐてあかしてナア居るわい
○わしが思ひとそら飛とりは

ごこのいづくにとまるやら
●わしはどゝいつでまぎれも
せうがさぞごちよあまりひお氣づ
○わしがむねでは火をたくけ
れどけむりださねばぬしやしらぬ
○わしが思ひは是より西にな
がいのれんのそのなかに
○わしとおまへはあいをいの
松月を畵にしてかへり酒
○わしが事かへ川ばた柳水の
流を見てなげく
○わしはぬしない野にさく花
よおらばおらんせちらぬさき
○わしはおまへにおまへはわ
しにほれたげなぞへあいぼれに
○わすれ草にと三味せんひけ
ば歌のもんくで思ひだす

か

○かねて手くだとわしやしり
ながらだまされてさくむろの梅

○かわいかいなのいればくろさへ今ははかない灸のあと
○かわす枕がものいふならばわたしやはづかしさこのうち
○風がうわ氣か柳があだかかわりやすきはひとごゝろ
○かみもゆふまいみじまいすまいいとしたれかがあろじや なし
○かみもゆふまい夜げしよもせまいこんごおまへにあふま では
○かねがなるかへしゆもくがなるかかねとしゆもくの合ィ がなる
○かづさ木綿のじやうなしおとこよくもだましただまされ た
○かきのれんに何やごそめてふたりくらすはいつの事
○かきのれんに何やとそめてなかで帳あいこちの人
○かぎりある身のかぎりをしらで甲斐もなき世をうちな げき

○かねがいもりのくろやきならばおもふ男をまゝにする
◉かへらしやんせといふたがむりかアケノ大須の一番だい こ
◉かわゆけりやこそ七りもかよへにくて七里がかよわり よか
○かみはばら〳〵いろ青ざめてやつれすがたもぬしゆへに
○かほでわらふて心で泣くいやなさじきに居るばやい
○かへしともないわたしが心かへらしやんすがぬしのため

よ

○よいはまぎれてくらしもしよふがもはや九ッなんさし よふ
○よさへ明くればはやきぬ〴〵のにくやからすがつげ わたる
○よごと〳〵にまくらがかわる枕かわらぬつまほしや
○よこに車なおまへの心それをかぢさる身のつらさ
○よいがさめたらかほあげさんせしんなはなしがあろわい ナ

た

○ためになるきやくまたほれたきやくふたりきた夜のその つらさ
○たとへかりんのごうなるとてもだいてねじめのんたがやさ
○たとへせかれてほどふるとてもゑんとじせつのすへたま つ
○竹にすゞめはしなよくとまるとめてとまらぬ我おもひ
○たてよ〳〵の月日はたゝであだなうきなが先キへたつ
○たてよ〳〵の月日はたゝでたゝせともないきやくがたつ
○たまの御げんに逢ふ其夜さは斷するのもあとやさき
○たつはかみそりたゝぬはしんしよあるはしやくせんない はかれ

○たとへいづもでむすんだゑんもむすびなほしてすいたごし

○たてばしやくやくすわればぼたんあるくすがたはゆりの花

○たとへまさむねめいさくじやとてわしとたれかの中きれぬ

○たれもしるまいふたりがなかはかけごすゞりの筆ずしる

○たゝみざんして待夜のながさぬしとねる夜のみじかさは

礼

○れん中じやけんにおまへのうわ氣じよしに心はゆるされぬ

○れんがはいくわい茶の湯のけいこおだな月日は送りやせん

○れんりひよくとちぎりし事もあだし枕のうき涙

そ

○そうにやそわれずきれるもいやよごうかはてしのつくように

○其日ぐらしの朝がほさへもかきにもたれてしやんがほ

○そめてくやしや江戸むらさきをもとのしらじにしてほしい

○それまいとはそりや氣がよわい石にたつ矢もあるわいナア

○そふてくろふは世上のならいそわぬ先キから苦勞する

つ

○つとめする身と帆かけたふねは人目らくそでくはたへぬ

○つとめする身に誠をいわせうそはおまへにせんこされ

○月はさゆれど心はぬしにまよいがちなるしんのやみ

○つとめする身とさげしましやんな諸國諸大名はみなつとめ

○つとめする身とお庭のとうろばんにやたがきてさぼすやら

○つとめすりやこそあのやろめにもおきやく樣じやと手をさげる

○つとめつらのかわ三味ねこのかわのたりおきやくはこけのかわ

○つれてゆかねばはてしがつかぬごうでぎりづくそわりやせんゆかりやせん

○つらい中にもおまへがあればわたしやくろふもわすれ草

○月もながれにその身をまかせくるわがよいのうかくさ

○つらいつとめもぬしさんたより夫にうわ氣な事ばかり

○月夜がらすは夜にまよふてなくわしはおまへにまよふてなく

○つらいけふしをながらへいるもすこしたくみの宿ゆへに

ね

○ねてはかんがへおきてはしやんこうもやるせのないものか

○ねんの內から女房じやけれごなせかだんなさんさいゝにくい

○ねてはかんがへ起きてはふさぎ何をたよりのうきつとめ
○ねんをゆびをり（以下、原ホナシ）

な

○ないてくれなようたがいはれたかわゆけりやこそむりもゆへ
○なんのいんぐわで他人がいとしそだてられたるおやよりも
●なくな庭鳥お茶屋のからすなくも其夜のきやくによる
○何がなんでもそわねばならぬそふてくろふがして見たい
○なんぎ硯の海やま越してくろふするすみ男いし
○何がふそくで枕をなげたなげた枕にとがはない
○ながゐ月日にみじかい命なんのあくしよがやめられよふ
○ながしみじかしふたこしきめてどこかかよいのりとしさよ
○何のいんぐわでわしやしやばへきたいきてそわるとも身ではなし
○なぜかけふ〳〵はあいとてならぬいつにおろかはなけれども
○なんのかの迚口先きばかりころしもんくにこりた物
○泣てくらすといふてはわるいぶじで暮すとゆておくれ
○なんぼおまへが浮氣じや（ママカ）とてもしんにほれたかしれぬかへ
○ながのねんきを一まいがみにふうじこめたる身のいんぐわ
○ながゐのれんに何屋と書て中で帳合イこちの人
○なんじやおかんせ其手じやゆかぬだましこまれたわしじやもの
○何がなるぞへくがいの身にはじつをいふても茶にせられ

ら

○らんじやさわぎじやこうなるからはごふで此家はかりのやど

む

○むりなくせつをわしからしかけねさすまいとて夜もすがら
○むすぶいもせのしたひもといてぐちなせりふも戀のはな
○娘したがるその親たちはさせて見たがるしゆすの帶
○むかふかゞみにわしやい〳〵わけの心からなりや腹がたつ
○むねになみだをわしや持ながらあいそづかしもすきの道
○むりは男のつねとはいへどこうはなさりよふはづがない
○梅はやへさく櫻はな〳〵へなせにあさがほたゝたとへ
○梅はいろよく咲てはゐれどうぐひすがなかおかしかろ
○むかしじやわたしも花とも

見たが今はかれ木の枝さみる

○むねと〳〵とをむすんでおいてしらぬかほすりや猶いとし

う

○うちはかんどうくるはせかれどこに身をおくしまもなし

○うわ氣さんすなせけんの人が浮氣物じやといふわいナア

○うでに我名をいれさせおいて夫につまらぬむりばかり

○浮キ名たてられそわずにいてはぬしも立まいわしは猶

○うそじやないのに茶にするおまへほんにわたしはヱヽじれつたいわいナア

○うちでせくのはしよふばいからよきやくのせくのはわしやつらい

○うき名たつとていまきれらりよかすゑのとやかぬ縁しても

○うちで大目に見やんすからはすゑのつまらぬ事はせぬ

ゐ

○ゐつそあわねばこふした事もほんに有まいうさつらさ

○ゐとしけりやこそわしから先へぬれてあまへてよるの雨

○いやでことわりいふではないがなぜか今宵はおりわるい

○ゐまの今迄たがいのくろふくろふしたのも水の泡

○いきなおかたとおもふてほれて跡で情がなかおかしかろ

○ゐとし誰かはどこかにおいてわしは此家のうきつとめ

●一の鳥井こし二のとりゐこしてもはやあつたもちがくなる

●いせじでるときやなんだでたが今は吹來る風もいや

○ゐけんするほどこんじよがまがるつのりやするともきれはせぬ

の

○ののめやうたへや今宵がかぎりあすは出船の風をまつ

○のちに逢ふとわかれた儘で待どくらせど便りない

○のでも山でもそわねばならぬ思ひきる氣はさらにない

お

○おもひ出すぞへどこかの坐しき今にわするゝひまはない

○おもひだすのはわすれるからよ思ひ出さずに(ま)わすれずに

○おふてたつ名かたつ名の内かあわでこがれて浮名たつ

く

○くがいする身は浦山ぶきの花はさけどもみはならぬ

○くれのかねなら千里もひゞけ聞かせともない明けのかね

○ぐちがこふじてせなかと背中あけのからすが中直り

○くろふする墨身はすみぞめのぬしに命をかけすゞり
○くるか〳〵とゆふつげ鳥の飛をながめてしやんがほ
○くもにかけはしかすみにちごりおよびないとはおもへど
○ぐちはゆふべのくぜつの殘りこよいまたきてむりばかり
○くにもところもへだてゝすめば夢のごげんをまつばかり
○ぐちな女ごの心としらでしんとふけくるかねのこゑ

や

○やがて行ぞへどこかをさしていやな此さとあとに見て
○やけとでかけてのむひや酒もすこしたくみのあるゆへに
○やけとでかけてのむ酒よわでたまにあいする酒に醉ふ
○やめておくれよばくちと酒をわしもやめませよ茶わんざけ
○やぼなよふでもまさかの時は水の流もとめて見しよ
○やぼなよふでもまさかの時はぬしにちじよくはさらしやせん
○やけじやぞやけじや呑をれさわげどふで此家にいるじやなし
○やめろじやれるなじたばたするな下駄の工面もできやせまい
○やぼめ手なしといわんすよりもいやじやあいたさゆておくれ
○やばなよふでもまさかの時はぬしのおかほはつぶしやせん
○やつれさんした三日月さんよおまへそのはづやみあがり
○やけじやぞやけじやあふまでかよへすへでそふやらそわぬやら
○やがてみやんせせかれた人に物の見事にそうてみしよ

ま

○まゝになるなら何しにぬしを人にだきねをさせはせぬ
○まゝよいなかも又すみよかろぬしとふたりでくらすなら
○まゝになる身かなんぞのよふにきては泣たりなかせたり
○松の葉のよふなこまかい氣をもつなひろいばせうばに氣をもちやれ
○まゝにならぬは承知でほれてまい夜逢とはわしがむり
○まてばあわるゝ身をもちながらせいてせけんをせまくする
○まつがつらいかまたるゝよりもうちのしゆびしてでろつらさ
○まつがつらいか煙りがうゐかしん氣まくらのそられいり
○まつがつらいかわかれがうゐかまつはたのしみわかれう
○まぶとやぼとをならべて見ればちがふ物かへゆきとすみ

○まゝにあわんす人さんがたを見るにつけてもはらがたつ

○まゝに氣まゝにあわるゝならばぐちやみれんはいゝはせぬ

○まてどくらせど便りのないは思ひきれどのしらせかへ

け

○げんはみなもとゝはふじとよむなぜに吉のじよしとよむ

○けふはひとしほあいとてならぬいつにおろかはなけれども

ふ

○ふじの山でものぼれば下るそれにわたしはのぼりつめ

○ふじの山ほどのぼらせおいて今はつるべのさかおとし

○ふつと目がさめだきしめ見ればぬしとおもへば夜着のそで

こ

○こゝろぼそさをすいりよふさんせ木にもかやにもぬしひとり

○こよひ〳〵とまつ夜はあけて今朝はむかしのかれのこゑ

○こしにやたてを帳面もちてかよひづとめはいつの事

○心つくしてかいたる文もぬしは茶にしてまくら紙

○心ばかりをかよわせおいてせみのぬけがら身はこゝに

○こふはたがなす半氣ちがいにみんな誰かがなすわざよ

○こんの前だれ松ばのちらし松にこんとはわしやつらい

○これしおまへとこうなるからはすへはめうとじや我つまよ

○戀にこがれてかほ三井寺のかねがわかれかまゝならぬ

○戀にこがれてなくせみよりもなかぬほたるが身をこがす

○ござれ噺ませよに松の木のもとで松の葉のよにこまやかに

○こゝとどこかやかごぬけならばぬけてあをものいま一度

○こんのれんに何屋とそめてなかにいさんすかほ見たい

○こんなわかれをせうとはしらず玉の御げんになくばかり

○こいで〳〵とまつ夜は來いでまたぬ夜にきてかどにたつ

○五大力ではわしやないけれどゑんとじせつのすへをまつ

○愛はてるともどこかはくもれいさしたれかがひにやける

●こうき傳馬丁にふた瀨がござる思ひ切瀨ときらぬせが

え

●えんはいなもの是あじなもの遠い三河といせ産れ

○榮はさかゆる彌はいよとよむなぜかだれかはよみがなひ

て

○てい女たてゝもわかれていればうわきするかされうたがわ

○てんのほしほごお人はあれご月ご見るのはぬしひごり

あ

○あきもあかれもせぬそのなかを人のくちゆへごほざかる

○あだごじやけんを車にのせてごこの誰かにつなひかせ

○あじな所でかんしやくおこし夫を手にしてきれる氣か

○朝な夕なにまくらがかわる枕かわらぬつまほしや

○明のからすごには鳥にくいかわい男の目をさます

○あさぎ千筋あいびろごの羽織あれがわたしがけんしぞや

○朝のかへりに袖ひきごめてしんぼさんせご目になみだ

○あんな男にごうしたものじやほれた誰か(が)氣がしれぬ

○あんな男ごゆびさゝれてもほれたやまいはなほりやせん

●ありがたいやのすゞしのかやで中でするがや永らくや

○あさの六ッからやたてをこしにざいごあるきはこちの人

○あるはいやなりおもふはならずまゝにならぬが腹がたつ

○あへば名がたつあわねばゆかししらぬむかしがましであろ

○あくしよぐるいのなるたけなされごふで此家(ママ)はかりのやご

○あめはしきりにふれごもはれるわしが思ひはいつはれる

○あへばたがひにすてばちいふてあわざこがれて泣であろ

○あすのわかれはいつよりつらいあふてなま中物おもい

○あいた見たさは飛たつばかりみては泣たりなかせたり

○あいたみたさはごびたつけれごかごの鳥かやまゝならぬ

○あいたさにくる見たさにかよふすがたかくしのきりがふる

○あへば嬉しいかほ見るけれごわかれおもへばまたふさぐ

○あるが中にもへだてのふすまあるにかひなき捨小舟

さ

○さぞやさぞ〳〵さぞいまごろは淋しやかたに只ひごり

○酒をのむなご御いけんなれご酒はつごめのうさはらし

○咲てくやしやせんぼん櫻鳥もかよわぬ山おくに

○酒やたばこでわすれるよふな淺イほれよはせぬわいナア

○三味のみすじでまぎれてい

れど哥のせうがで思ひだす

○酒はさかやによい茶は茶やにぬしはどこかのどこやらに

○三のいとよりきれよい人に心つくして今くやし

○酒じやおもひ出したばこじやわすれとかくたばこはわすれぐさ

○さいた櫻になせ駒つなぐこまがいさめば花がちる

○三味のいとさへみすじにわかるなせにわからぬぬしの胸

○さん里山みち貳リ半かけてお茶をひことてかよやせん

き

○きれていたとて何にくかろぞいやでわかれた中じやなし

○きせるかたてにひざたてなをしわしがむりかと目に涙

○きれたおきやくにとちうで逢ふてものもいわずになみだぐむ

○菊にませがきゆいとめられて今はしのぶにしのばれず

○きれてみれんで又たちかへりこんどあふのは命がけ

○きせうせいしはほぐにもなろがいれたほくろはどうなさる

○きれていた迚何にくかろぞあつさ寒サもとふてやる

○木にもかやにもおまへがたより夫にじやけんな事ばかり

○きりよのよいのとすがたにやほれぬ人はみめよりたどころ

○ぎりもしらないわたしといほがぎりもせけんもいとやせん

○きれてしまへとみな人さんがいけんするほど腹がたつ

○ぎりもせけんもいとわぬならばなんのよしみに此つとめ

○きやくのきれるもいといはせぬが内でよしあし聞つらさ

○きやくのおちるもいとゐはせぬが跡でよしあし聞つらさ

○きじもなかずばうたれはせまいわしもでやねばほりやせまい

○きれてくりよならきれてもやろがいちどごげんのそのうへで

○ぎりといふじが是ないならばあんな男に何のその

○ぎりをわきまへせけんを思ひ死よりせつないいきわかれ

○きれてしまほと硯にむかいおつるなみだがすゞり水

○聞ておそろしおにづたなれどつけてやさしきもん所

○菊とききやうはどちらがいもと同じいせうについのくし

○ぎりのかすがいなさけのくさりひくにひかれぬ中となり

ゆ

○ゆわれまいとはおもひはす

れどおまへゆへにはいろさ〳〵

○ゆふじやなけれどたしなましやんせあじな噂があるわいナ

○ゆふておくれよことづけしたさないてくらすとゆておくれ

○夕し御げんはけんくわでわかれあとはつぢうらたゝみざん

○夕し御げんはうれしいけれどなまじあしたの物おもひ

○ゆふにゆわれぬわがむねのうち夫にわからぬむりばかり

○ゆふなかたるないろへもだすなやねでふる雪むれでさけ

○ゆふてこまそかいわずにおこかさきのしうちをみての事

○雪やこうりとへだてはあれどとけておつればおなじ水

○ゆふておまへの心がはれりやきゐてわたしがむれくもる

め

○めにはみねどもあなたのすがたむねにみぬ日はないわいナア

○めでもものいふ坐しきのばやひかほでかくふみむれでよめ

○めしも喰ふまいたばこもいやよ爰でひや酒二ッ三ッ

み

○みたいあいたい山ほどゝぎすすがたならずばこゑなりさ

○みれば見わたすさほさしやさゞくなぜにさゞかぬ我おもい

○み月四月は袖でもかくすもはやなゝ月なんとせう

○みてもみあかぬせんたび見てもたてしかゞみとぬしのかほ

○水の流はおろかな事よどこかかよいもとめて見せよ

○水にはなれぬ(マヽ)おし鳥さへもなれしつばめに袖しぼる

○水の流と身の行すゑはどこのいづくにとまるやら

○みれんながらもいわねばならぬぐちとおもわゝおもわんせ

し

○しんのやみにもまよわぬわたしまよいますぞへぬしゆへに

○しんでくれなよわづろてくれなつとめさすのも今しばし

○しんぼしやんせしばしの内じややがておまへのまゝになる

○しんぼしなよと口ではゆへご朝のかへりにやばんにきな

○しんぼしよふよりごろぼふさんせくびのないのもいきな物

○しかとだきしめかほうちながめこうもかわゆく成ものか

○しばしあわねばすがたもかほもかわるものかへこゝろまで

○しんで花みはさかぬといへどいきて實のなる身ではなし

○しんきしんくの心のたけを書ておくれどかたたより

○しやんしかへてのく氣はないかしよせんそわる くみではなし

○しんじゆしましよかかみきりませよかかみは はへもの身はだいじ

○したはおきせん二かいはおきやくのぼるはしごは しでの山

○じつも誠もみないゝつくし□□□ならべてかほどかほ

○しよてははづかし中ごろゆかし絲のきれめはつら にくや

○しよふじ明ればもみじの座敷もはやお客も龍田川

○じつも誠もよにあるときよかわりやすきは人ごゝろ

○しよせんあふ事はまゝにはならぬ文の便りをまつ わいナ

○しよせんうき名がたつからまゝよせいだおかた さそふてみしよ

○しよふき大じんとこのまのかけじいやなおきや くたばらいたまへ

○しよふき大じんとこの間のかけじすいたお客を まれきたまへ

ゑ

○ゑじのたく火とほたるのむしはやくやもしほのみ をこがす

○ゑんとじせつをまてとはいへごじせつ所かかたときも

ひ

○ひとがいふならひとまづきれてあとはたがいの むれにあろ

○人はちよいと見てちよいとほれなさるわし はしんそこみにやほれぬ

○人のいやがるごうらく男ほれたわたしは又いんぐわ

○人がいふならひとまづきれてかわるまいぞや胸とむね

○人のそしりもせけんのはじもおまへゆへなりやい さやせん

○人のいゝなし北山しぐれくもりなき身は晴れてゆく

○人をたのんでこうじやとゆをかたゞし打あけ噺そふか

○人がしらぬとおもふかしやれか今はりこうでめで さゝる

○人のとのごでほめるじやないがおせのたかさよ はのしろさ

○人はうらめしいろよい花よわしは日かげのうすもみじ

○人にやしたゝかくろふをさせて捨ておまへはあだ ばかり

○人のいけんもわるくはきかぬ色はしやんのほかじや もの

○ひぐれ〳〵にあなたのそらを見ては思わず袖しぼる

○ひざにもたれてかほうちまもりものもいわずに めになみだ

○ひろいよふでもどこかはせまい誰にあかさん人もなし

○ひろいせかいにわしやすみながらせまふたのしむすきのみち
○ひにちまいにちおかほはみれご物もいわれぬぎりごぎり

も

○もはやおまへも秋風なればすゝき尾花をまつばかり
○もしも道中で雨ふるならばわしが涙とおもわんせ
○もさはうわ氣であいそめ川のふこうなるほどあいにくい
○もんにつけたや何かの紋をつけて見たならさぞやさぞ
○もんの中でも何かがすきじやすいたたれかの紋じやもの
○もんは何かをつけてはゐれごいやなお客とねるつらさ
○もさは五本の此ゆびなれど

(以下原本ナシ)

○もさのおこたはみなわたしゆへ人に恨はないわいな

せ

○せ田でわかれてあわづの此身いつかおかほを三非のかれ
○せいであわさぬこの親かたに戀のしよわけがしらせたい
○せいであわさぬあのみせばんにあだなかしこがいさかせた
○せかれてもまたこうあいたいは神のばちかへあくゑんか
○せじでわらふて心でなゐてしゆびをつくろうそのつらさ
○せじでわろうて心で泣ていやなざしきにいるばやゐ
○せん両万両のかねもちよりもわしはおまへの氣にほれた
○せきしよこへてもそわねばならぬあすはなわめにおよぶさも
○せん里はしるような虎の子がほしいたよりきいたりきかせたり

す

○すいた櫻や梅さへあるになせに柳はみだれがみ
○すこしやすもとうたゝねすればぬしの夢見てまたふさぐ
○すそをさらへてこれ開かしやんせ實にや誠に…これ…にいわいナア
○すゑのやくそく心の儘にはなすまもなき夏の夜や
○すいな水仙わしや藤の丸心まよわすつたのもん
○すいたおかたとそわれぬ時はすみのころもであまでらへ

右凡計四百五十有四員

追加

○つらやはかなや勤の身なりやおぼへない事うたがはれ
○くるか〳〵と沖へ出て見ればはまの松風音ばかり
○もみぢふみわけ鳴鹿の毛は

戀の文かく筆となる
○ひとり來たぞへあの山中を
谷でつま呼鹿の聲
○すゞり墨とはおもふてくれ
ななきの泪で書た文
○硯墨とはわしやおもやせん
まつよ涙でよむわいナア
○つれて退んせ東都のかたへ
通（道）の路銀は胸にある
○月夜烏にふと眼が覺メて嘸
や今頃寢てであろ
○いとしかわゆのせうこは今
に殘す目黑のひよく塚
○かわゆがらるゝお客はいや
であたまはらるゝぬしの側
○せめて一日つがいの女夫人
のうはさも身のねがひ
○かごに立ゝんす悲しさつら
さぬれて寒かろつめたかろ
○そらを見さんせ烏さへつが

ひわしは獨りで夜もすがら
○ぬしをおもふてふさいで居
れば日〳〵にうといと笑はんす
○心からとはわしやいゝなが
らやぼな親御の御かんろふ（マヽ）
○せくな親かたなぜしよて出
したしよてに出さればほれはせぬ
○つらいなんぎな峠を越して
なんのかわろぞ今更に
○わしはうたがふぬしやつゝ
まんす中をとりもつ哥と三味
○ぬしは水仙わしや玉椿ふた
り根〆の床の花
○人のそしりもせけんのぎり
も捨ておまへに情たてる
○おちよ半兵衛じやわしやな
けれども親がそわさにや死ぬかくご
○なんぼおもふてもお庭の櫻
垣の外から見る斗り
○しんぼしてまたそわれぬ時

はやもめ暮しの末をまつ
○ぬしにそわねばわしやいつ
迄もねぐら定めぬやもめどり
○あいを隔てわしや居るけれ
ご心ばかりはぬしのそば
○苦界しらねばあの唄聞る（以下原本ナシ）
○いわにせかるゝわしや瀧川
のわれて逢夜の嬉しさは
○ひなら九十日月なら三月も
ふすまいぞへ何事も
○あまりつらさに山に出て見
れば雲のかゝらぬ山もある
○いとしあなたも小藪の雀な
る（マヽ）も落るも人しらず
○いやなお客の情に落てひく
にひかれぬ義理を（マヽ）まつ
○むかし松の葉ふたりも寐た
が今は芭蕉葉に唯獨り
○せかれてもよいこう成から

はぬしもしやんが有であろ
○しんで花實が咲ものならば
比よく塚にも花が咲く
○月夜恨めしやみならよかろ
御手を引合てしのぼもの
○お客日照りが一日がしても
いとし誰かに出ればよい
○お月樣さへりん氣が深イし
のぶ其夜は猶てらす
○山のおくでもそわねばなら
ぬ落葉薪にしてなりと
○いとしかわいの雪駄の音は
もしや夫かと氣にかゝる
○逢ふてわかれは夢見たよう
な夢の浮世に夢を見て
○ひく手あまたのおまへじや
とても人にやる なさけさぎりがあ
○人めいとふも斯ゥならぬ先
キ今は浮名もたたばたて
○いかな惡日くろ日の日でも

ぬしにおふ日は天赦日
○綾やにしきで卷かるゝ迚も
いやな枕がかわさりよか
○たとへ緣なきふたりが中も
じつと〳〵でそふて見せよ
○嬉し戀しのかさなるうへは
つらやしんくな事ばかり
○ちへのつるべがみじかいゆ
へにぬしの心がくみにくい
○なまじなま中あはねばかほ
ど今の思イはあるまいに
○じつなおまへとせけんの噂
惚れたわたしははかられぬ
○いつもじやけんなアノ明烏
玉に逢ふ夜を知りもせず
○ぐちをゆわずとよく聞わけ
よあわぬ此身は猶つらい
○戀の淵瀬と世上のぎりとつ
らい勤と三のいと
○文でこま〳〵かいてはやれ

どあへば嬉しさ口へ出ぬ
○先は手管とゆわんすけれど
胸にない事書はせぬ
○ぬしがありやこそ故郷をは
なれ今ははかなきしらぬさと
○雪はちらつく咄しはつもる
今朝の寒さに歸さりよか
○女房有身に惚なといふはど
このやぼめがいふたやら
○つみな事じやがまかせぬに
つけ先キの女房がにくゝなる
○女房ばかりか殊更子迄何を
賴にほれたやら
○あふた其夜は誠とおもい跡
はうたがふ戀の欲ク
○ぬしを待夜は人こそしらね
時をかぞへて豊ざん
○ほかへ心をうつして見れど
いつかおまへの事ばかり
○思ひ染川わたらぬ先キはか

ほど深イと露しらず
○枕ならべて寝る時よりもかげのそしりが聞かせたい
○ゑんがほれてかほれたが縁か花ももみじも手につかぬ
○すいな人さへ戀路にまよふましていたらぬわしじやもの
▲○お客つとめか一坐のなかで心見らるゝいたこぶし
○月はまん丸ひへてはいれど心さへねばいつもやみ
○まさか思ひを汲わけさんせやぼなおまへじや有まいし
○すいもぶすいも其身になれば人をやぼじやとわらわれぬ
○あいそづかしも誠のたねよ何ゝの思はぬ人といを
○くろうくるしみ浮かんなんも昔語りと成わいナア
○物や思ふと問人あらばせめて頼んぬしの事
○酒でつらさをしのぐと知らで呑なやめよと心ない
○月は傾く夜はほの〴〵ともはやせきなき(マヽ)こいとま乞
○おもい出せば去年のけふしすへの事迄いゝかわし
○こがれ〳〵て待甲斐ながきあへばひそりの捨詞
○ぬしの事ゆへ内證へ呼れ又もいけんの其つらさ
○逆も添れざ三途の川へ浮名沈めて情たてる
○大事がらるゝお客はいやでぶたれ叩かれ主の側
○いけんする度思ひがましてけふも逢たいあすの夜も
○人に野菊とわしやわらわれて操守りてひとへ咲く
○花にたんざく付なもよいがぬしの有枝手折まい
○ぬしはする墨わしや硯水戀も涙もぬしの胸
○人の戀路の枝折人はなさけしらずの山あらし
○ないた顔見りやまんざらうそもとかくみれんにひかさるゝ
○いけんまじりにはじしめられて顔をそむけて目に涙
○岩にせかるゝわしや瀧川のわれて逢夜の嬉しさよ
○ぬしは何所かにわしや此町に花じやなけれどちり〴〵に
○うらみますぞへいづもの神と緣のむすびがちがふてある
○はよふわたしに眉毛をそらせおらがお源といはしやんせ

「香曲神戸節　畢」

●そめいろによる役者かぞへうた（全部紹介）

一ッとさあのやあのや、ひいき嵐の吉三郎人のよろこぶりくはんちやで、このじやうかいな

二ッとさあのやあのや、ふかいしうちでいろをもつ、ろかうは江戸のむらさきで、このじやうかいな

三ッとさあのやあのや、見れば三五郎しよさ事はときのてうしにあいびろど、このじやうかいな

四ッとさあのやあのや、よいはみんしとそめあげて見ればもゝいろうつくしい、このじやうかいな

五ッとさあのやあのや、いつもひいきの歌右エ門、げいのこなしはとうせいちや、このじやうかいな

六ッとさあのやあのや、むすめすがたは友吉とあいにいろますべにぎゝやう、このじやうかいな

七ッとさあのやあのや、なにをさしても仁左エ門、よいるりこんのしつくりと、このじやうかいな

八ッとさあのやあのや、やさしいしうちでよしざはのいろははかはらずはないろで、このじやうかいな

九ッとさあのやあのや、こぞろひいきは市ぞうとこゝろもうはのそらいろに、このじやうかいな

十ヲとさあのやあのや、どうでも市川團藏としうちはくろいかちんぞめ、このじやうかいな

（次の、百人一首によるかぞへうた、といふのも役者名よせのものである。）（表紙ノ四へ）

著者より

此册は、家族滯在地で、編んだため、材料に簡單な、「神戸節」の紹介で全誌面を埋めた表紙の潮來ぶしもその例。「神戸節」は御覽の如き三段組にしても尚二十行に詰めればならなかつた。案外の多量が質とされても相當に此は此としての價値を有してゐると思ふ。くはしくは解題に述べたから略く。〇近來、先輩の業蹟に全部又は過半借りた飜刻が流行る。近代日本文學大系第一回本一九の未飜刻の翁丸物語といふものも、實は繪入文庫に當てある。それも一割に足らぬ。最近廣告してゐる江戸軟派全集といふもの、小生の新造語を無斷借用といつた形のものは、これは向陵社の復活蒸返し、所收書目を見ると、凡て既飜刻物の配列。別本進呈と稱して見本に摺つてゐるのは、例の「春雨衣」の一節だ。智惠のない話。（廿三日知多郡古見海岸、龍雲院にて）

定價表	
一册廿五錢	郵稅貳錢
六册分	稅共　壹圓四拾錢
十二册分同	貳圓八拾錢
○郵劵貳錢一割增の事	
（）照會は返信料添付の事	

大正十五年八月二十七日印刷
大正十五年九月一日發行
「貳拾五錢」
送料貳錢

編輯兼發行者　名古屋市東區東造東町百五十七番地　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　英比貞造
印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區道東町一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

前冊正誤　前冊でとんでもない誤植があつた。每冊再校までしてゐるが、此折の再校に限り、女房子供の海岸へ出立間際で、あらかた目を通したからです。それは、洒落本雜記の中の、振鷺亭の變名關東米が全部關東米になつてゐた。初校でも見落し（二三ケ所あるのが）再校でまた。校正誠に可恐。印刷所諸氏も全部一種の錯覺に陷つてゐられたのと思ふ。以上、かねて御氣づきではあらうが、改めて訂正。倘一つ。三十二頁二行目の紙和文は、純和文の誤。

●（安永の三より）大黒また松づくし　かわりもんさく　役者づくし。より

一ほんめには一ふでのいろ事やつしはほんにやれほかにあらしの三五郎、二ほんめには三代めの玉さよばれし今みんし、三木ンめには三右よりせわもじだいもできまする、四ほんめにはしさやかにしごく上々吉三郎（下略）

●三味線合書　かわりもんく十二月　手まりうた。より

二上りまづはつはるのこよみ雛助こゝち芳龜名た大五郎さ。一ッ正月友右エ門をかさねて。ひいきおきやくはついかごぐちでおれいもうすや文蔵かでやは。れいのかはらげ友吉。なづなゝくさはやし脈藏。小四郎□□□□。ついあら吉さ鯉長手に手を新平のうちさて奥山二かいも。半五郎や手まりのひやうしそろへて。おさも友九郎さついてもらへばほれ正月や。こたへ鐘九郎□□菊治郎は。□□□ながれて猪三郎云々。

●役者宗名俳名　十二月かわりもんく手まりうた。より

二上りまづはつはるのさぐみひらけばこゝちよいぞやみなげいぞろへ。一ッ正月さしなかされてはやるしばゐはげににぎわひて。おれいもうすやしんぞかげ子はれいの口上さり〳〵。しやぎりだいこではやしたつればこゝろいき〳〵みなおふべすさ。じつさおくさをしめたしうちはよしだ屋眠獅（ひなすけ）つばにもさじきもよいや〳〵さひやうしそろへて。おさもごんごさほめてもらへばほれしやうれにも。こたへさせつゝ岡嶋や李冠（吉三郎）。きやしやできれいでほんに女中ものふはづかしや。天わうじや蘭耕（のしほ）はつうまそふに□□てれはんの板や花友（友吉）は□□□□のうちで。□□のひぞりをきくもせうらい大こくやの田男（文五郎）云々。

●江戸深川さはぎうた。より（全部紹介）

▲かんだ。かんだまちの。かんだいなりのほういんさんな。たのみなんせ。めうでごぜんす。（合）ごんなぐわんでも。すつきりちやんさ。ついきまりやす

▲かのこしぼりの〳〵。ほうかぶりで。ぞめきなんせ。めうでごぜんす。（合）ごんなやぼでも。すつきりらやんさ。ついきまりやす

▲いまのはつかうの〳〵。めうけんさんをたのみなんせ。めうでごぜんす。（合）ごんなおきせんでも。すつきりちやんさ。ついきまりやす

▲かたにかけたるてのぐひの。おちたもしらずに。うか〳〵さ。これさてぬぐひがおちましたさ。（合）いはれて。びつくりあさふりかへりて。かたじけのふ

▲あけのからすが〳〵。ものゆふならば。めうでごぜんす（合）たよりきゝたや。すつきりちやんさ。ついきかしたや

▲ぬしのくろひは〳〵。あさからしれて。めうでごぜんす。（合）しめたひしごき。すつきりちやんさ。ついほどけやす

▲かれやたいこで。ちきちやんちき。ごん〳〵ちやんちき。たづれ。さまよまいごの〳〵三太郎。（合）どうぞたづれたし。（合）さゝさん。かゝさんに。かをみせてよろこばそうぞ

▲わしのこゝろを〳〵。かわずがしつて。めうでごぜんす。（合）ぬしのかへりに。すつきりちやんさ。ついごてでなく

▲かごのしばいの〳〵。あら吉さんみなんせ。めうでごぜんす。（合）ごんなはなでも。すつきりちやんさ。ついたをりやす

▲かんだごふまへの〳〵。ぢよろしうに。だまされなんすな。めうでごぜんす。（合）ごんなきやくでも。すつきりちやんさ。ついおろしやす

●中のしばる松本よね三所作事。より

▲おんらがざいしよはふうがにいでゝむくつけにねまりもうす（合）かたろならうんれしかんろのもゝやかきにぶらさがりてられてもわらはれてもれごんぞほれた（合）九十九ひきのはなかけざるにおんだがしやうれかへ（中略）

▲いんまのらいしはふうがなやつしおくやまにうけはあら吉（合）かたおかならうんれしかでやにはかうや友吉にふじやくあたり（合）工ざへもんひいきのはながたよれ三おらんだやんまひよわらはしてもれごんぞほれたは重太郎か（以上）

大正十五年九月三十日印刷
大正十五年十月五日發行

参編　第四冊（通編第四十九冊）

本文

尾崎久彌著

第四冊
（通編第四十九冊）

小咄本から

○洒落本型の小咄本

従來洒落本書目に入つてはゐるが、嚴密にいふと、小咄本と目すべきもの、或は無論、に入るべきもの數本を見うけた。自分も、従來の書目類を信じて、嘗て洒落本書目に入れてはおいたが、其後續々、寧ろ除外の正當なるものを發見した。先づ、その限りないふと、

江戸嬉笑(文化三年)は無論で、これは嘉永版の小三馬序の再版もある。喜三二の柳巷訛言(天明三年)も小咄本の一種。振鷺亭噺日記(從來凡て文化にこれを見たるも、序の亥によりて享和三年と思はる。)の如きも純然たる咄本。享和四年(文化元)の東都眞衛もまた然りである。これは、比較的長咄であるから、それだけ洒落本の臭がするが、が咄は咄だ。尙、文政三年一九作と稱する「初惠比須」一は、これも咄本、これは小咄、さうして一九は誤りで、これは名古屋版、一九はその口繪の賛に現るるだけである。(此の初惠比須、名古屋版小咄本條下参照。)

○「東都眞衛」に就て

「東都眞衛」は、よく調べると、鼸刻本があつた。それが、「江戸自慢」の名に隱れてゐるから、分らなかつたのである。近世文藝叢書の第六笑話の中にある。

校訂者(不詳)は、此の「江戸自慢」を文政六年の開板なりとしてゐるが、これは、文政六年の改題再版、原刻は東都眞衛(享和四年)としなければならぬ。本文は、全く、此の「東都眞衛」と「江戸自慢」と同樣である。唯、序を違へてゐる。江戸自慢の序は、晉米齋玉粒、東都眞衛の序は「享和四…、原の狐逃とある。文も無論二者別である。乃ち左に、鼸刻本と相異の部分―此の原刻の序、及び右の鼸刻本で略いた人魚の說明とを、載せておく。此の人魚の說明は、同鼸刻本の○諸國珍物といふ小話の中にあるもの、鼸刻本の◎挿圖略とあるものである。此の挿圖ヒラキ一丁分、眞中の左右に、人魚を描いて、その解說の小文字數行、諸處にこれを附してゐる。圖は、島田髷の美女人間の胸と顏と兩手を持ち、腹と背以下全部、鯉と同樣、背ひれも、尾ひれも腹のひれも附いてゐる。上に、右から左へ、大きく人魚圖とある。その所々の說明の言葉をまた書拔きしておく。

東都眞衛序

空をかける放鳥。水にすむはなし龜いづれか、咄を咄ざらんや。放鰻のめそつ子より、江戸前の穴をうがつてさぐり出したるしん前の靑、よく長燒のすしをわけて味くはなすか、今の山なるかおみやげならば、から漬のかる口咄甲しやくかゝりのすつぽんに、戯場咄のおさり子あり田舍咄の鯰づゐまで、いづれも口は三笑亭、可樂あまくは御好次第はなしの、重のふたをされば香をりに春の鼻をうごかしぬ

享和四年
甲子春

原のきつね逃(印)

人魚圖　亦吾樓□(者カ)

(背ひれの處の文句)

背ひれは客をせびるなり物事ひれをつけてしたがる事也

(島田髷の上の文句)

かしらに毛あつて下ッぱらにはなし

(左の泳ぐ手つきより線をひきて)

左右の手をだして人をよくおよぎださせ一トロなめさせては千ざいのよはひをたもたせみな人なまぐさき中とはなりぬいつたい此うをちへたくさんにしてこけすくなしもつとも客人にはおほし●此うをさし身にしてはよししかしあまひすではくへず●口さきにて人をころしつれにさけをすいてのむ又心によろこびあるときはれづみのごとくなるなきごゑをいだす

(右の泳ぎの手の小指より線を引き)

此小ゆび一本にていかなる角やしきもおつたをすといふ大力なり

(左上のところに、大文字に)

▲此魚何によらず食するといへどもなすび漬をばくらはずこれ辰已通は御ぞんじならん歟

▲數人これを退治せんとすれどもうまくぶちころす人はまれなり

○名古屋小咄本

名古屋にも小咄本が、土着的のものが當然出版せられたであらうことは、類推に難くないが、さてその書目を我らは見なかつた。今度、自分の發見した一本と共に、三種は、數ふることを得るのである。無論、これ以上あつたで(表紙の三へ)

三馬戲作「江戸の水」(上)

解題

合卷風に成した三馬作國直畫の「江戸水」である。悉しくは「江戸水幸噺」。年代不詳ではあるが、文化九年に、國滿畫で六卷、「江戸水福話」と再版してゐる所から推すと、此本、初版、三卷國直畫、即ち文化九年以前のものである。三馬の「江戸水」の宣傳大に力めた、自家廣告册子、案出の隨一、標本である。体裁全く合卷と同じく、挿繪每丁にあり、五丁一卷三卷一部合本、每丁の輪廓も合卷と同じ寸、但し天地横をひろく開けて、半紙本風に製本してゐる。元表紙不明、貼外題も不明。江戸水自身の解說、並に戲作者にして商賈たる呼吸を最も巧みに心得た三馬の用意周到さ、一に戲作者副業生活の好資料とも謂ふべきものである。原本、花岡百樹氏藏、今その原文、圖柄の全部を其儘登載して、大方と共に鑑賞したい。內容、時に平凡なる賣藥化粧品の自家推奬、冗長の譏もある、がそれを巧みに危機を脫して、戲作ぶりに書き了せてゐる。そこに三馬の戲作者として商賈として語る物があり、三馬の或る技倆――京傳と匹敵した――を示したものと思ふ。

倘、江戸の水の贋造品が、此の册子によれば當時行はれたとある。時人に與へた册子であるから、眞實事であらう。を以ても當時此の江戸水が如何に流行繁榮したかを語るものがあり、嗣業の盛衰如何を較べて、その聲價經營の技倆、京傳に勝るものあつたと謂ひたい。

例言

以下大凡そ原文のまゝに記載。唯、餘りに煩しき假名を時々眞字に換へた。倘、括弧內の文字は、校者の補記である。每丁挿繪は、說明を以て換へ、その標本として、第十一丁裏ヒラキを掲げた。但し原文、最後の丁(第十五丁裏)は挿繪なく、賣品の廣告のみである。

藥店を壽く　春興

（松）
千とせまで
請合賣に
うそはない

（鶴）
本町延壽
丹頂の鶴

三馬

（以上第一丁表）

金の鯱（しやちほこ）

（屋根に鯱の圖あり）

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春
晉子

（染カ）下口もせぬゆるしの色も

八百八町御最屓のありがたきを思へば

江戸紫

紫の藤もお江戸の水の恩

七代目市川 三升

（コヽ助六に扮せる三升、右手煙管を持ち、鏡立に向ふ。後ろ、筆やうの毛筋立て髮に水をつけたる髮結）

江戸じまん

（以上第一丁裏）

江戸ッ子

一擲の青
錢ハ
百萬の黄金
昨日の按摩ハ
今日の檢校

（コヽ三枚續圖の上に桝の小判を投げたる男下に拾ふ幇間藝者など）

江戸氣

月令ニ曰
四月袷衣
變而
爲松魚

（鰹の繪）

○江戸繪一名東にしきゑ　○江戸仕立　○江戸本

（花魁、二人禿道中の圖）

江戸のはり

江戸の水の
うりぞめの日によめる　徳亭三孝

賣出して　水もま馬の
とくいを　かごの
江戸の人ませば　目印

（以上第二丁表）

(以下ヒラキ。式亭正舗、馬と暖簾のかゝつた三馬店の体。右に、延壽丹の大きな看板用日除け。店前群集、御殿女中、下町女房娘、侍、町人など十二人。別に店に腰かけたる上下姿の侍一人それに茶を出す小僧。右すみには、腰かけて包みを背負ひかゝつた男一人。店の者二三。奥の帳場は番頭か。日覆のうしろに、挨拶せる三馬らしき男と客一人纔かに見ゆ。以下の文は、上欄、屋根の上。)

こゝに京都田中宗悦が製する煉薬に仙方延壽丹といふは、昔々元祿年中より江戸本町一丁目出店にて賣り始め來り、當時まで凡百二十年あまり世に聞えたる良藥也、すべて京大坂より江戸表に出店を出し、或は弘め所を出す類多けれども皆近比の事にて、此延壽丹を最初とするよし、古物好みの諸先生或は古老の物語なり、これによつて此度本丁二丁目三馬方は本家に內緣あればとて、一丁目の店を引うつして以前の如く賣弘め來る、然るに關東筋は式亭の取次にて、諸國へ賣出す、勿論昔より國々にあまた取次所はあれども、戲作御ひいきの御恩澤にて、昔にまさる藥の賣高[次へつゞく]

(帳場の男)「ハイ〳〵唯今詰めます間、少しお待ち遊ばされませ(職人風の男)延壽丹を二朱が下さい

(以上第三丁表迄)

(次ギヒラキ、或る家の上り端、奥に臺所など見ゆ。火鉢を挾んで、舅と嫁、姑、右に亭主あり。姑は、嫁の背にあつて睦じく囁く。庭に腰かけ本を見る娘あり。)

[つゞき]なほ〳〵藥種を吟味して調劑する故、いよ〳〵効能著しく益々用ゆる人多きは誠に大みくにの廣くゆたけく、誠ある大和魂のいさをしにして、又ありがたき事なりか

「のぼせ引さげ、啖咳には即功あり、輕きは二百文にて忽ち功能あり、重きは三匁又は二朱ほども御用ひあれば、驗が見ゆるなり、第一腎を增し、精を強くす、脾胃を調へ瘠せたるを肥やし、胸をすかして腹の張りたるをすかす、○顏色あしく、ぶら〳〵病むによし、○氣のへり○きのかた○氣うつ○みゝなりてきこえぬ人○中風にて半身きかぬ人或は手足なえしびるゝ人○精のつき○口中一切○あつささむさに負ける人○疝氣○すばく○りん病○痳病○五ぢ○下血○小兒五かんにて瘠せ衰へ

るによし○婦人血の道、月やく不順○こしけにて腰膝痛み○ながち○しらちによし○産後血衰へて肌瘠せたるによし○常に氣弱く食すゝます、瘠せる人によし○病後ひだちかぬるによし○頭痛めまいのたぐひはいふに及ばず、男女諸虚百損に用ひて此上もなき良藥なり、悉しくは能書に記す○さて又三馬が新製に江戸の水といへる化粧水を賣り出しけるが、能書の通り効能　つぎへつゞく

（亭主、膝小僧を出して立膝。手拭を肩。）

「おらア此としでれこしきがやくにたゝねへから（以下數行不明）あのあまが所へ行てもばんいちにす（？）やだ人をつけへにした、ばかげきつてるせへ

（暦を手にする男）

「おれが今に眼鏡がいらぬ、此暦がすら〲とよめるも延壽丹のおかげさ

「（不明）

「（猫を抱き上げた嫁の言葉カ）おめへの肝癪にもいゝといふから、ひとまはりも嘗めて見なせへし

「（姑の言葉か）よわ〲とした生れつきは、あのお藥を持藥にするど違ふよ、持病のあるものは、持病の起らねへばかりもとくだはな

「（庭に腰かけた娘）三馬が引うけるほどのお藥だからよつぽどよいお藥であらうにネヱ、およしさん（以上第四丁表）

（次ギヒラキ、髪結床の前。髪結の男と一人の客は、江戸の水の効能書を見る。今一人の客は、天下一の鏡と毛拔を持つ。店前の路に、荷を背負うた江戸の水賣が効能をひろげて、藝者風の女に物云ふ。中、乳母と子供。左、効能を配る小僧、その相手の御殿女中、後ろに下女と奴）

つゞき　うたがひなきゆゑ、御ひいきの御蔭にて賣れる事夥し、これは和蘭の藥法にて蠻名もあれど、女中がたにおぼえよきため江戸の水と名づけたり、いふ心はよく人の性にあひて流行することを思へばなり、すべて斯樣なる珍しき方を弘むる時は、世の人不淨の藥を使ふなどと悪口をいひたがるものなれど、これはおほけなくも地名を取りて江戸の水と名づくる程の事なれば、汚れたる品にあらず、よつて疑なく人〲も用ひ給ふなり、寒

の水を以て製法するゆえ、日かずを經るともくさることなく〔次へつゞく〕

（髪結の男）

「此水を用ひて此上へ色男になつては命がつゞかねへ

（手拭肩に仲間風の客）

「勇さんおめへも用ひる氣はなしか、ハヽア何だ第一きめをこまかにし、御かほのあぶらを□□常に白粉のおちつきあしき御かほなりともよくのりて、はぐる事なし、用ゆれば黒き顏も白くすッ、こいつは妙だ〳〵

「アノお子は色が白いから藥を用ひてもはえやすめへ（江戸の水賣の詞カ）

「（藝者風の女）小つるさんの所で噂のあつたのだおいらもつけようや、おまきさんにもをしへてやらう

「（子供）ばゝあや、こゝは勇さんの床だのう、勇どこといふのう、おいらアよく知つてゐます

「（乳母）白銀丁の觀音さまへ參りませう、坊さんお出で〳〵

「（効能を配る小僧）御ひろうを御願ひ申ます

「（御殿）けしやう水か、これはよからう

（以上、第五丁表）

（次ギ、ヒラキ。右は、廓内の圖で、鏡二つに向ふそれ〴〵二人の妓、後ろより江戸の水らしき箱を捧げる禿。立つて見る妓一人。左（卷之中）は、茶屋辰巳屋の前の、茶屋女房さはおりの一人。）

〔つゞき〕淸くいさぎよき藥水なり、きめあらく脂顏なるか、又は常に白粉をつけざる人、たまさかに化粧する人なりとも、きれいにのりて艶を出し鹿の子斑にはぐる事なし、吉原の花魁などは生れ付き淸らかなる上に、朝夕擦りみがくゆゑ、白粉のりよく又しげ〳〵に化粧する故、はぐる事はなけれども、いつたいの美はしくなる藥なれば、日ごとに江戸の水を用ゆることゝなりぬ（以下卷之中）なつは汗をかきてもはげず、冬は風に當りてもはげず、にきびはたけひゞ霜焼は忽ち治るなり、そ

ばかすは餘程日數を用ひて治る、又化粧をするこ
との嫌ひなる御方、常に此藥水を塗り給ふべし、
白粉つけずとも、顏に艶を出す
○別して申上候、此藥水の色を似せて、おなじ物
と見せかけ、江戸の水と種は同じ事じや、など申
すもあるやうに承り候、馬の目印江戸の水とよく
〳〵御改御もとめ可被遊候
(立つて居る妓)
「みどりやこれさ、おれにもひとつ取つてきて
くりやよ
「(禿)山口巴の金藏どん所ではうり切たと申い
すから、揚屋町の源藏さん所で取つてまゐり
した
「にせぢやアねへかよ
「いゝへほんとうざいます
「(鏡に向ふ左の妓)わつちらは白粉のはげるといふ
ことはありませんがネ、江戸の水をつけると
朝の寢顏がいつそきれいざいます、朝起きて
顏をふくと、薄化粧でもしたやうになりいす
はな

(以下、卷之中、左の繪に附く)
「(はおり)生酔さんが四ッあきに來ては困らせる
のう
「おかゝさん今夜は寒いのう、此風はいやだよ
(はおり)
「化物の引込む時分に恐れるせへ、しかし風に
あたつてもの、江戸の水のおかげで、顏をな
ほせばよしさ、これだけがまうけものさ、
(同カ)
「うさアねへこれにもだの(茶屋女房カ)
(以下、第六丁表)

(次ギ、奥女中部屋。壁に役者繪が貼つてある。本両替町下村、
住吉町松本の二個の到來物がある。通箱、本町二丁目江戸櫻と
いつた箱もある。)
戲作の御ひいき強き御蔭にて、御邸の御女中樣方
は、別して御評ばんよろしく、御懇意樣方へ御吹
聽遊ばす故、いよ〳〵江戸の水〳〵と大評判にな
りしは、誠にありがたき御贔屓の御力なり

(右の、眉のない女中曰く)
「よし〱そこへおきや、江戸の水は皆様がお待ちかねだ、
(同じく、今一人の年増の女中)
「お宿から參じましたかへ、ヲヤ〱誠に感心
「(不明)……。
(召使の女の〇)
「江戸櫻のお使が歸りました、そして三馬の江戸の水も三十さんじました。
(召使の女の△)
「源之助の短冊も貰ひました、イヽヱ見せられません、何より大切だものを
(同じく□)
「まあちよつとお見せな、どうもいたさないよ
(召使の女の▲)
「ちよつと御覽あそばせ、おさつよりとうなすよりもけつかうな御品がまゐりました、これは白銀丁の東林だと申ます、ヲヽおいしかろ
(左の年増の女中曰く)
「なにをお騷ぎだ、ヲヤ江戸の水が來たかへ、一つおくれ

(以上第七丁表)

(次ギ、右は橋の欄干に近づき、左の手を下げ、右手の指を高く捧げた丁稚、橋下に引札散る。上に、引札をさらつた鳶。左は雲形になりて、天人二さ、鳶。)

江戸の水の引札を配る丁稚、日本橋の上を通る時そゝつかしい鳶一羽飛び來り、かの引札の紙を見て、こいつ油揚を包んだなと大きに量見違ひで、ずつとさらつてゆく拍子に、片手に持ちたる引札を取り落す、折節さつと吹き來る風に、引札を吹きたてゝ殘らず川へまきちらしけり

(丁稚)「おれがなりは、お釋迦様の御誕生、おかみ様も御繁昌がきいてあきれる、然しかう一時(いちどき)に散しては、天上天下よむが澤山(たくさん)、アヽわるい〱

「あれ〱遙かに鳶が見えるは〱ツヽチン〱

かの鳶がさらひたる引札は、天に屆きて天人に弘まりければ、おの〱江戸の水をもとめて化粧を

し給ふ、三馬按ずるに、天人の白粉をとく猪口を天人猪口といふてはまはり遠い故、しやれて天猪口とよびたりしを、今はおほぞらの惣名となるのみならず、天ぢくとさへよこ訛りぬ、天ぢよこの天の川に白いものが流れたと、たしか萬葉集に見えたるやうに覺ゆ、則ち白粉の流れたるをいふ云々、

「天人はとかく、不精なもので、ねころびたがるが癖なり、合天井に引付いてゐてさへ寢そべつてゐるから、いはんや天上の事は、五衰もじ

(露曰く)

「天人さんのそのなりは、所作事ならば切落しへ落の來るやつだね、

こちら向かしやんせ、ヱ、なアんぢやアいヒヒな、バン〳〵、ナント豊前太夫はきつからう、

(坐して、引札を見てゐる方の天人曰く)(今一人は雲に飛行)

「雲の上は風が強いから、白粉がはげてなりいせん、江戸へ行く序での時、買つて來てくんなんしト、天人の言葉は、どうやら聞いたやうな訛なり

(以上第八丁表)

〜〜〜〜〜〜〜

(次ぎ、龍宮の体。右の上、樓門の遠見。右は、乙姫と同じ扮裝で、頭に魚を頂いた[くろだひ]と[かゞみだひ]。左、鏡鯛の背の鏡に向ひ、左手に、箱と右手に壷を持った[をとひめ]。而かも此の三人、共に白き鯨の背に坐す。持てるは江戸の水なるべし。)

さて又日本橋の川へ吹落したる引札は、水を潛りて龍宮界に至りければ、龍の都の乙姫君早速用ゐ試み給ふに、色澤うるはしくなりて、潮風に黒みたるも、顏玉を欺くばかりなれば、龍宮の鱗屑ども、我も〳〵と江戸の水を用ゐければ、色の白き鯨も眞白になり、黒鯛も白鯛となり、烏賊の黒みも白みとかはりければ、誠に不思議の妙藥なりとて龍宮までも專らの御評判に預る、

(くろだひ曰く)

「あとでお前の背中をちつとお貸し

(かゞみ鯛がいふ)

「うしろをつん向いてをるはよいが、ひよつと

おならが出たらどういたさうのう、ヲヤ〳〵
かうした身は、きつい灸すえの看板だネ
○乙姫は、鏡に向ひて化粧の水を使ひ給ふ（原文）
「そなたは濱の何がし殿か潮風にもまれて色の
黒さよと昔のはやり唄があれど、此江戸の水
を潮風にもつけさせたい
「鯨の白くなつたのは、版摺と版元の大きな仕
合せさ、チト楽屋落だが、摺りやれが出ねへ
（校者曰ふ――此時分からすでにすりやれをいうたかと思ふ
と、面白い。）
「をと姫を龍神のだしと見れば、お祭の番附と
いふ繪組だと、どこからか悪口、
（以上、第九丁表）

（次ギ、白珊瑚の枝を振上げてゐる黒ん坊。風采は、孫悟空の如
し。即ち唐風。眞中、背を向けて止めてゐる女。左、妻。其の
うしろ洞窟の入口、向ふ海の遠見。）
かの引札水の上を流れ行て、こんろん國に着きけ
り、此國は世にいふ黒ん坊の住む嶋也、ある黒ん
坊の妻、試みのため江戸の水をつけた所が、忽ち
白ん坊となりければ、亭主の黒ん坊肝を潰し、あ
てこともない事をした、黒ん坊といふものは色が
黒いのでもつたもの、白くなつてはかたは者も同
然と怒り罵り、眞黒になつて腹を立つ所だが、黒
ん坊だけに眞白になつて腹を立つ、
「はてさおめへも野暮なものだ、此國でこそ黒
をうるしがるけれど、一体黒は弱くて染がへ
しが利かねへはな、ハテおかみさんを白くし
ておいて、飽きたら何ぞに染めなせへ、路考
茶かねずみのいよ染にすれば、結構おはれを
するはなト此言葉女房の事か白つむぎの事か
ねから分らず
「白くなつていやなら出してやんなせへ、こゝば
かり日は照りやアしめへし、世界中が黒壁づくり
だよ「百が米をかへば、くろ水を流すはな、何の事
つたおもくろくもねへ、暗闇へ黒縮緬の頭巾を落
したやうに、こんな又分らねへ亭主もねへもんだ
お黒さんうつちやつておきなせへ
（黒ん坊の亭主）
「茶の湯茶碗を墟磨きにして賣るやうなものだ、

黒ん坊が白ん坊になつては値打が下るはい、餘り白つぽいことをしやアがる、あさぎ帷子黒小袖、いつもすたらねへうへに、此頃は黒うらのはやることを知らねへか、ナニ此白ん坊あまめが、

〇これを唐音できけば「こんろんこくふう
　こんろんぼうしんろんぼうぢやアすかま
　ただあぱあ〳〵

(黒ん坊の妻)

「いふ事があるなら、しづかにいひなせへ、何も珊瑚珠の投げうちをすることはねへはな

(黒ん坊の亭主、白珊瑚の枝を振り上げ、投げんさするが故也。すでに投げたるもの、妻の膝元にあり。)

(以上、第十丁表)

(次ギヒラキ、右、大きな三方にのせた江戸の水の小箱數多。差出す馬印の衣を着た召使二人。その前、黒圭と黒塚、黒木賣、左(卷之下)は、九郎助稻荷、義經、牛時、團七、鏡に向ふ秀藏)

江戸の水益々流行するに從ひ我も〳〵と求め給ふ人〴〵は、大伴の黒圭、黒塚のひとつ家の婆、八瀬や小原の黒木うり、九郎判官義經、九郎助稻荷團七九郎兵衛、黒船の忠右衛門、牛時くろ兵へ、くろだきの潮音、くろ本尊に目黒の不動尊、黒川道祐、黒□秀藏、おの〳〵前後を爭ひて數限りもなき黒盡し、皆江戸の水を求め給ふぞあり難き、

(召使曰く)

「箱入の歯磨きには、をかしい引札を添へて差上げます、ねだんしだいで(以下二行不明)ござりませぬ、いち〳〵に歯磨の製法が違ひます

(以下卷之下)

鏡立にいざ立よりて眺れば黒圭は白圭とかはり、團七九郎兵衛は團七しろ兵衛と變りければ、牛時しろ兵衛、白船の忠右衛門、八瀬や小原の白木うりしろ塚の婆皆〳〵白くなる程に、目黒の不動樣も目白のヲツト待つたり、それでは目白が二つになるから、これは作者の誤りか、但は傳へ誤る所か未だ詳かならず。

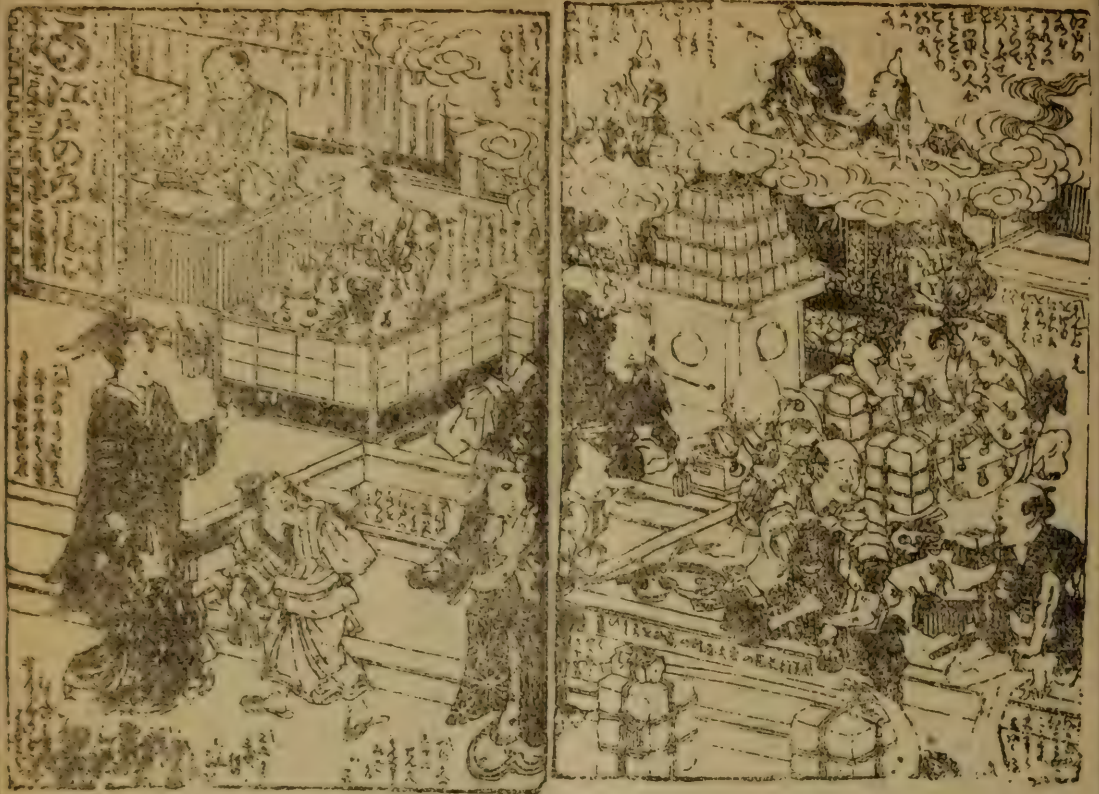
(團七九郎兵衛の語か)

「落ちつく所は、備中玉じまではねへ、江の戸水をつけた(以下約七字不明)

(義經曰く)

「佐藤四郎忠信が身代りにたつて呉れてから、しろう判官となつたも滿更ではない、

。

(以上第十一丁表)

(江戸の水三馬店先の体ゝ右、三方に山と積んだ江戸の水。荷造りをする店の者。上り端に腰かけてゐる仲間と飛脚。小女に江戸の水の小箱を渡す小僧ゝ今一人の旅の客。上の雲間に、江戸の水の精、三個現はる。左、奥の帳場に算盤を弾くは、三馬らし。下、江戸の水を括る番頭。庭に、女と子供など。)

江戸の水が賣れるは流行(はや)るはと聞いておつかぶせをしたがるは、世の中の人心、そこでもこゝでも何の水かの水を▲

「なんの水が出たとても、ありがたい江戸の水に叶ふものか

▲まぎらはしき化粧水を出しければ、江戸の水の精現はれ出て樣々と評議する、

(右の荷造りの店の者)

「延壽丹を四匁、江戸の水を五つさし上げます

ハイ〳〵

(茶を飲みゐる飛脚男)

「越後長岡の幾久屋行の荷物を早速飛脚やへ出して下され

(左の、小箱を括りゐる番頭)

「白川へ行く延壽丹は、飛脚屋へ出したかな、あしたはしまやの出目だぞや

（右と左の二丁に跨がつた旅の者、腰かけてゐる。）

「わしらが國では、一めんに江戸の水を用ゐます

（右と左に跨がつた、小僧の手から受けとる、子を負んだ女）

「詰めかへは三十二錢かへ、そんなら水ばかりおくれ

（左の子供）

「これから下村の白粉を買ふだ、江戸櫻のあぶらはしろ物がよくて目方がおほいといふもんだから、むかふの店は繁昌する筈さ

（左の女）

「江戸の水をおくれ、五十のでは少ないから、百五十のをおくれ

（最右の仲間）（不明）。　　（以上、第十二丁表）

（右、江戸の水。出刄を持つてゐる。左、刀を握み、腰に尺八を佩し、蹲がんだ何とやらの水、眞中留女の格で、御きやうの油本町二丁目江戸櫻□七方にて製する花のつゆ。三人共に擬人で頭に壷を頂く。江戸の水は、勇みの風、何とやらの水は、俠客風。）

江戸の水の精現はれたる内にも色々あり、通り者肌の江戸の水あれば、勇み肌もあり、當世風の短か羽織といふ精あれば、あだなる風俗の精もあり男女の精色々に現れて、まち〳〵に評議しけるが勇み肌の江戸の水は、中にも氣の强き精にて、贋が出ては量見ならねへと、人の異見をも用ゐず、贋にせの水のびいどろを攫み挫がんとする、贋の水は、詞までがなまけちらした京だんにて、ねから骨のなき達引なりしを、花の露といふ女だて、双方を割つて入り、此喧嘩は貰ひやんした、一番わたしにくだんせと貰ひにするぞ賴しき。

江戸の水
つめかへ三十二文 外□□
いれもの 御持參あらば割
よくいたし差上申候
大びいどろ入 二百文

（何とやらの水カ）

「ちうツぱらたらなんたらいふて、トツト相手になられんさかい、よろしうお賴み申ます、あれきかんせあのくるちやわいの

(江戸の水)

「出來合びいどろのはねものめら、俺が眞似をしやうとしてもあとから剝げる白粉水、ゑてへもしれねへ藥を混ぜて、本家の名まで汚すとは餘りないやすがたきめ、此方は鯱鉾の金看板伽羅の香のする江戸の水、だれだと思ふあゝつがもねへ

「きりおとしで成田やと賞めさうなものだが

(何とやらの水)

「贋の水ともいはゞいへ、御試が四十八文、ちよと箱づめまで出て貰をかい、サア江戸の水、したにゐたがなんでありや、

(花の露曰く)

「お江戸に名高い油店、多くの中でこなさんとは向ひ合せの江戸櫻花のお露が見てもゐられず、女だてらにませたやつとお得意樣のお叱りをもかへりみじまいしかけた喧嘩、江戸の水さんにせ水さん、花のお露が貰ひやんした、いづれ化粧の水にして、ずつと流して下さんせいなア

「イヨ大和屋ア引「これさむだをいひッこなし

(何とやらの水)

「なんぢやい、へげたれめが、ゑらい痰火きりくさる餓鬼めぢやはい

(何とやらの水)

「にせるのぢやない、あとからおもひついたのぢや、逃げるのぢやない、引退くのぢやはい

(以上、第十三丁表)

(次ギヒラキ。眞中、仙方延壽丹の精、仙人風。右、當世風の江戸の水(息子風)、その前に通り者風の江戸の水(名の如く)、左上に、人がらよき江戸の水(奥方風)、あだなる江戸の水(藝者風)、下に叱られてゐるいさみ肌なる江戸の水二人、一人は腕組み、一人は頭を掻く。)

通り者肌の江戸の水、これを聞いて早速駈けつけ、勇み肌の水を樣〳〵と異見して連れかへりければ、煉藥壺の中より仙方延壽丹の精現はれ出、勇み肌を敎訓する。

「手前達は第一に量見が違ふ、此式亭の家は俺

が家だから、俺に贋(にせ)があつてはすまねど、手前たちにいくら贋があるとて構はぬことだ、手前たちには、廂を貸しておくのだから、母屋(おもや)のおれが大切。手前たちは賣れても賣れいでも式亭は構はぬといふほどの事、お蔭で賣れるはありがたいとぢやと思ひ、隨分製法に氣を付けて、よいが上にもよくしてあげ申せ、世の中に贋の出るほどありがたい嬉しいとはない、なぜならば、江戸の水が賣れるによつて、おつ被せも出來るといふもの、これが賣れぬものならば、金を出してお賴み申ても、似せてはくれぬ人心、にせが出來るは本家の繁昌、たはけがあれば智者もあらはれ、夜鷹がある故、晝三のありがたみが知れる、きかぬ藥がある故に、きく藥が賣れるなり、人のとを構はずしてひたすら己れが身を愼み、諸人愛敬(あいけう)を心に忘れず、製法粗末のないやうに淸らかにして、然るべしと、中つ腹の江戸の水、大きに脂をとられければ、いよ〳〵淸淨(しやうぐ)潔白(けつぱく)の藥水(くすり)とぞなりにける、

當世風の江戸の水

「チトうすげつて見えばの人の所へ買はれてへス、厚化粧では手柄が見えねへても、とかく用ゐいせん、チト製法がまへ方と見えやす、

(さとか)

こほりもの「近頃おとなげないとだと異見をし

(延壽丹の詞)

「人の顏の脂を取るものが、俺に脂を取られて濟むものか、チト氣をつけやれ、さりとは若い〳〵

(勇み肌の江戸の水の一人、頭を搔いてゐる)

「あやまり入ました、

(同じく一人)

「能書の文句までおつかぶせますからさ

(以上、第十四丁表)

洒落本禁止考

考といふ程のものではない、普通在りふれた事を唯、纏めたといふ迄のものである。最初、自分の疑問、嘗て抱いた疑問を述べる。洒落本は何回禁を受けたか。寛政二年の禁といふが、それは、洒落本のみか否か。寛政三年の京傳の被罰は如何。寛政五年以後ぼつ〳〵洒落本は復活し、寛政十年以後、享和へかけて再び昔日の大量出版を爲してゐるが、これに對する有司の手心如何。これらを知りたかつたのである。

御同樣の疑問抱懷者に、自分の諦らめた限りを述べる。先づ簡單にいふと、寛政二年の禁は、洒落本單獨ではない、好色本類一括の事である。其後、表面に現れた禁令なるものは見當らぬ。唯、寛政九年頃、奉行吟味に於ける版元處分と絶版とがある。即ち寛政二年の好色本類の禁（從來本の絶版は斷行すべくしなかつたらしい。）、寛政九年頃の洒落本（特に洒落本と限られ）版元處分と絶版（從來のものも全部）と此の二回である。さうして個人として處罰せられたのは、先に京傳の寛政三年、一個あるのみである。寛政九年の版元處分と絶版以後に於て、特に眼ざゝれた絶版本（著者には被罰はなかつた）は、同十年の「辰巳婦言」（三馬）、同十二年の「南門鼠」（艶二）、享和二年の婦足髷（成三樓）の三種くらゐである。

即ち總括すると、洒落本が獨立に取扱はれて絶版と處分（版元）を受けたのは寛政九年頃の一回のみ。好色本禁の令に引つかゝつては、作者としては、前に京傳の洒落本作者、しかも彼一個休刑を受けてゐる。（版元として、蔦重また處分を受けた。）絶版は、寛政九年頃の古今のものと、寛政十年以後享和二年頃迄の三種斗り。作者に對する直接の處分は、後期全く無い。即ち洒落本作者として處罰せられたもの、前期後期を通じて京傳一個のみといふ事になる。（此の前期後期とは、寛政二年の好色本類の禁までた前期とし、寛政五年以後た後期とする。）

即ち、此の前期の禁と、後期の處分（版元のみ）と絶版とに引かゝらなかつた寛政五年から九年迄の洒落本作は、全部秘密出版といふ譯である。（云ひ落したが、寛政二年五月の好色本類の禁の折、奉行伺上、同九月の厲行達しには、行事改めを命じてゐる、これを顧慮に入れねばならぬ。）尚、寛政十年以後享和文化頃に至る末期洒落本は、また數に於て夥しいものがあるが、これらは無論行事改を經す、（即ち秘出）唯その中の三種程が犧牲的に引かゝつたのだといひたい。

以下、その敷衍である。

一、寛政二年の禁は、二回に亘つてゐる。さうして第一回が、此の禁の正の物である。第二回は、その厲行を迫つたものである。即ち第一回は、同五月の町觸、五ヶ條に亘つてあるそれである。これが嚴密にいへば、寛政二年の禁そのものである、その全文を擧げるにも及ばないが、大体に於て「新規に仕立候儀無用」、已むを得ざれば奉行に伺出でよといふのである。その主眼點はこゝで、且つ「新板書物其筋一通之事は格別、猥成儀異説を取交、作出候儀、堅可レ爲二無用一候、只今迄有來候板行物之內、好色本之類は、風俗之爲によろしからざるに付段々相改、絶版に可レ致、又は書物によらず、以後新板之物作者並板元之實名、奥書に、いたし可レ申旨」といふこの第一ヶ條である。即ち今後猥本無用從來の好色本類も絶版にさせよ。尚奥附を明瞭にせよ。尚、新規仕立物は、凡て內閲を乞へといつた、出版物に對する高壓である。此の好色本類の中に、無論洒落本は含んでゐる。がこれとて、此の令と共に絶版を斷行してはゐなかつたらしい。（有司自ら）

茲で疑問を感ずるのは、行事改がいつから始まつたかといふ事である。此の時の令では、內閲の强要であつて、行事改を指してはゐない。或は、奉行の內閲伺上が、九月に變じて行事改となつたのか。とにかく、此の五月の令には、行事改は見えてゐない。

第二回は、九月の町奉行への達しである。「三奉行ヱ」の達しの中の、一つ、その第五箇條目にある。

これは行事改を述べたものである。曰く、

一、書物類之儀、前々ヨリ厳重ニ申渡候處、イツトナク猥ニ相成候、何ニヨラズ行事改之繪本草紙之類迄モ、風俗之爲ニ不ニ相成一、猥リガハシキ事等、勿論無用ニ候、（云々）右ニ付行事ノ改ナ不用モノ候ハヾ、早々可ニ訴出一候、又改方不行屆歟或ハ改ニ洩候儀候ハヾ、行事モ越度タルベク候、

といふのである。これに引つかゝつたのが、京傳の二洒落本（正しくは三）と、其版元の蔦重と其の折の行事である。これは、知らるゝ通り、二年の十二月末、行事の改めを經たものである。それが、翌年春出版、三月になつて、奉行初鹿野河内守からの京傳五十日手鎖、蔦重は身上半減、行事御咎め（二人が輕追放）を受くとなつたものである。これは、他の同業者（出版者）の密告か、又は奉行側の發見か何れかであらう。然し此時の吟味始末書にも、洒落本とは、特にいうてゐない、讀本と名づけてゐる。此の時の京傳等の處分も、前年の五月に町觸あつたにも拘らず、同七月中に作者と版元との取引濟み、（即ち脱稿は、五六月頃、作者は、この町觸を見てゐるであらう。）十二月年末のドサクサマギレに行事改の不十分、通過、さうした作者版元の意識的犯行、及び行事の粗漏、それを痛しめ、延いては他に對する懲らしめ、且つは前年二回の令の厲行効能を裏書する爲の、苛酷處分であるといひたい。勿論、この寛政三年には、京傳以外、少數ながら洒落本作を見受ける。然し、京傳は當時名作家、影響普及の烈しさを顧慮し、且つは作者版元の態度を特に卑劣と認め、（教訓讀本と表袋にしたのなど、特に感情を害したであらう。）即ち彼等の心證を餘程の不良に認めての事であらう。即ち或意味で、京傳等の處分は、犠牲である。然しこれで以て、出版界及び世間に、洒落本（特に）の出版危險、讀者には秘密出版的のものたる事を印象せしめた筈である。これが惡く（奇利を狙ふ商賈には善く）影響して、同五年の振鷺亭の「取組手鑑」などとなつてゐると思ふ。無論此等は秘出である。以後またぼつ〳〵出だした。凡て秘出であつたらう。それが積つて、寛政八九年頃には、新板一年に四十二種となつた。全部秘密出版、行事改もな

かつた等である。これが發見せられて、奉行の吟味、版元處分、（作者は、左記の事情により、却つて有司自ら忌避した。）及び從來當時の洒落本絕版の實行（寧しろ寛政二年の令の實現斷行）となつたのだといひたい。とにかく、例外はあるが、概ね、前期よりも、寛政五年以後の物の方が、猥さも徹底してゐる。（我等の前期本後期本の內容の比較からである。）それは、秘密に出て、愈々奇利を博したせゐもあらう、益々前期の令と處分（京傳らの）とが掃つた反動的、寧ろ自然的の出版的良心の墮落（若しくは窮極）であるといへよう。寛政九年頃の處分といふのは、明文ではないが、馬琴の「作者部類」に現れた記述である。同、洒落本作者、三馬一九の條中に、

「（前略）寛政八九年の頃、當年洒落本の新板四十二種出たり、此故に板元を穿鑿せられしに、多くは貸本屋にて、書物屋は二人あるのみ。町奉行所へ召出されて吟味ありしに、其洒落本の作者は、武家の出なるもあり、其家人さへ有ければ、中立事に及ばず、皆板元が自作にて、地本問屋の行事に改正を受けず、秘に印行し、不調法の由なびさしく陳申しゝかば、件の新板の小本四十二種はさら也、古板も洒落本と唱ふる小冊は、此時皆町奉行所へ召拿れて、遺りなく絕版せられ、その板元の貸本屋等は、各過料六貫文にて赦れけり、そが中に（云々）。こは根岸肥州の裁許にてありける。是よりして臭草紙はさら也すべて作り物語も稿本を兩御番所へ差出して、伺の上行事等、其板元に賣買を許すべしと命ぜられしかば、像の如く取行ひしに、未幾何もあらず、御用多ければとて、町年寄二人に其義を掌らせ給ひしに、町年寄も亦御用多くして事不便なりと申により、文化の年に至りて肝煎名主四人（……今は七人也）に草紙類の改正を命ぜられし也。（下略）

以上によつて、よく經過が分ると思ふ。唯馬琴の記憶のまゝの記述、これ以外正確な日時、四十二種の外題名などを缺くのが殘念であるが、不思議と此の第二回處分と眞の絕版斷行とは、他の明文にこれを見ないから止むを得ぬ。（尙、この馬琴の記述によれば、圖書の檢閱方法は、寛政二年九月存在の行事改が、此の九年頃、奉行所差出、後町年寄、後更に名主と變じたのである。さうして此の名主制が、幕末まで續いてゐた唯一の檢閱方法であつたのである。）

此の第二回の處分と絕版以後に於て、懲りずまのものは、而して其の中處分を受けたのが、「辰巳婦言」等の三種である。

（此記述、尙一回）

（表紙の二より）あらうが、先づ此の三本。その解題の略如左。

○

落噺初惠比須　小本一冊　文政三年

旭文亭序。序に文政三かのへ辰めて度春さある。口繪、作者案出の体の圖あつて、子供衆にあこのかけかればつさせて戸さゝぬ御代にすめるたのしさ　十返舍一九さ賛がある。これによつて此の咄本、一九作さ誤まられたか。現に本屋も、一九作さ見せかけはしたさ見ゐて、表紙は、新作一九はなしさある。恐らく序の旭文亭の作、一九の盛名を藉りたものであらう。現にその序の中に、「……朋友（ともだち）さ噺合（はなしあひ）草稿（したがき）一冊さなるを落ばなし初惠比須さ題す」さもある。　文貫堂梓。

新　土　産　小本一冊　文政七年

自序、文政七つさし申春、旭文亭述ッ次ギ、作者口上の体で、繪さ文あり、終りに旭亭主人述さある。即ち旭文亭、旭亭同人であらう。本文中、雜拙なる挿繪ヒラキ三個。表紙は、初惠比須さ同樣。全く同一、新作一九はなし、文貫堂梓のものである。

惠　方　棚　小本一冊　天保二年カ

序、耳風改小野秋津さいふもの。それに卯のはつ春さある。此の卯、天保二年の卯であらうか。口繪、風流畫工玉僊寫、見臺に向つて噺をする男、聽く娘、女房、子供の圖。上に四者の狂歌の賛がある。此の玉僊は、北齋門下墨僊の門人、例の小寺玉晁の畫道の師である。本文は名古屋を中心さした、附近の好事家の新作を集めたものらしく、現に卷頭一返舍半分（作名）には、桑名さ肩にある。（此本を、天保二年の卯カさしたのは、收載小咄の一に、尾上菊五郎が大須の芝居で天竺德兵衛云々さいふのがある。これを三世尾上菊五郎は無論の事さして、その名古屋上演は、文政九年であるから、即ちそれ以後の最初の卯、天保二年かさしたのである。）

此本、卷尾によつて、本町三丁目（名古屋）萬卷堂梓さいふのであるさ思はれる。

依託書目

（和本）人間一生善惡道中記（七冊揃）三圓卅●冠附懸想文（二冊裏打）一圓五十●新板都々逸ぶし（取合三冊）一圓二十●料理分類いろは庖丁（中五冊）三圓●倭人物畫譜（素絢上本六冊）十三圓●繪本春東雲三冊（豊信畫）四圓五十●柳川畫帖二圓●落噺千里藪五冊（上本）四圓半●江戸職人哥合二冊三圓半●しみのすみか物語二冊六圓●外骨著文明開化（廣告、新聞篇）二冊三圓半●同明治奇聞六冊揃四圓半●浮世畫譜二篇（英泉畫本、美人風景等）一圓●畫本錦の嚢（英泉畫本、人物風景花鳥）美本壹圓半●武勇魁圖會初編（英泉畫本）七十●胸算用嘯店卸（北齋畫作、黃表紙稿本複製）二圓半●梅若丸一代記（八文字屋本、天明版）揃美本五冊九圓●廓の癖（洒落本、一枚補寫）外題付三圓二十●浮世繪展覽會目錄（小林文七刊、フェノロサ解說）一圓三十●筆禍史（初版美本）五圓●北齋漫畫初編（初版粗）八十

（依托の續き）●世話千字文繪抄（曉鐘成編畫）一圓●花暦八笑人三編四編五編合六卷美二圓●繪本江戸土產（初代廣重）五編壹圓五十●開化浮世ごゝ一八冊四圓八十●（以下洋）世界寬宥小說集五十●つゞらふみ（秋成遺著、宮崎三昧校）八十●長崎市史風俗篇（新美本）十二圓●血痕集（明治十四年版、杉田定一慷慨詩集）八十●不二（外骨雜誌一號以下四冊）一圓●此花（外骨、大阪版和本）第一より第十四迄外に第十八計十五冊十八圓●外骨骨董協會雜誌四冊揃三圓八十■江戸軟派叢書初篇品切の處初篇より五篇まで五冊一組、一人分に限り取纏め、代計三圓八十錢也。

著者より

洒落本集成第一卷の出來が意外に遲れてゐるが、是は、目下內閣中の爲です。大分危險視されてゐるので、爲念その手續を運んだのです。その爲內閣の濟むのが、三月はかゝるから督促を受けてゐるが、右の事情故、不惡その代り、さいふ丈のものはあります。●小咄本の編輯一冊、洒落本複刻の余業さして完成した。未雕刻斗り、十七篇程、發行所は坂本書店。十一月頃出來。●「軟派渉筆」は、略々校了であるが、挿繪製版がまだ捗らない●扱、從來本誌發送に、袋を以てしてゐたが最近、諸方から「皺になつて困る」さの不足が激しい。で、普通制の帶封にして、試みに此冊はお送りする。どちらがよろしいか。自分さしては此の二つ折に變へる（今後）積りです。舊の袋が可いさ思はれる方はお葉書を下さい。（二十六日）

大正十五年九月三十日印刷
大正十五年十月五日發行

定價表	
一冊廿五錢	郵税貳錢
六冊分	税共 壹圓四拾錢
十二冊分同	貳圓八拾錢

○郵券一割増の事
○照會は返信料添付の事

〔貳拾五錢〕

名古屋市東區車道東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區車道東町一五七番
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

寄贈紹介

○歌舞伎年代記　吉田暎二校

かれて待たれた本である。東陽堂の明治石版本すら拾圓臺に騰貴の今日、此の大正版が吉田氏により爲されたるは、慶福に堪へぬ。烏亭焉馬の著述として、此種文献の唯一のもので、豊芥子の「續」、田村氏の「續々」に繋がるもの、しかも挿繪を豊富に入れたのは、此の焉馬の正編のみである。これらは贅する迄もない。それが、今度晉文愛玩の初版本により、完全なる活字本複製を見たのである。挿繪は全部原本通り收錄。外に、原本以外、藝題索引を附してゐる。印刷製本用紙、殆ど完璧である。唯、餘りに凝り過ぎて、外箱に貼付した紺紙の色が剝げて、折角の美裝の本文表紙を汚す憾のある位ゐである。誤植等今迄に氣づいた中では一個もない。挿繪凸版も上乘の出來。唯、吉田氏の新編、此著に挿入の筈であつた春章以下の役者繪の四十何葉の、別册となつたのが殘念である。が、豫定より二百頁の紙數超過の實狀を見て小言は云へぬ。萬人必備の好著、とお奬めしたい。(菊判絹表裝、約七百五十五頁、特價七圓。歌舞伎出版部)

○拷問史　坂ノ上言夫著

拷問に關する主に我國の文献記事を集錄したものである。令制以前、令制時代、中世、近世等に亘り、しかも出典を明確に指示せられてゐる。挿繪大小二十個。總說叙述及び確證の列擧といつた形式で、略々我等の非議を許さぬ程度に、完備である。温故叢誌の第一篇であるといふ。未刊のものには大分學術的に趣味的に我等の興味を喚るものが多い。續刊を望む。(四六判、二百十頁以上。定價壹圓七拾錢、東京市神田區表神保町十、坂本書店)

○變態人情史　井東憲著

此種の舊著に佐々博士の「日本情史」などがあるが、これよりも行方を違へてゐる。該博引證、「日本情史」以上、文献的記載に富み、且つ變態の名にふさはしい記述が多い。挿繪また奇拔。(菊判和九十六頁。非賣品。東京市牛込區赤城元町三四、文藝資料研究會)

○變態藝術史　村山知義著

フックスの有名な大著「性的藝術史」と、ミヒエルの「惡魔的瑰奇的藝術觀」の大意、譯述である。挿繪も略、危ないものを集めて計二十九圖。フックスの例の大著(六册本又は一册の略本あり)を一度も覗かれたことのない諸君、或は自分の如く覗いたにしても本文の讀めなかつたものには、唯一の興味的學術的參考である。フックスの議論を、實は此の村上氏著で始めて讀んで、自分は、自分の江戸期猥畵(ひろく浮世繪)に對する見方と共通なものを、累々發見した。未見の士にはぜひ、此の意味からも此の抄譯をお奬めしたい。(因みにフックスの原著は、有名な世界猥畵の研究、六册で二百圓以上のもの)(菊和、五十二頁。非賣品。同上)

○川柳六歌仙　田中鳴風著

柳樽研究誌上に連載せられたものの、補修本である。六歌仙に關する各時代の句を類聚、雜評註解を加へたもの。卷頭の六歌仙考も好文字である。(四六和六〇頁。五十五錢。岐阜市神田町二、柳書刊行會)

○變態資料　創刊號

例の梅原氏などの企劃、變態十二史會員に配る。特殊高等な研究雜錄集である。口繪の三葉からして既に駭心、大正の治政下、これが生れたといふのは、實に奇蹟である。七月配布の此計畫の內容見本すら禁となつたといふから、以て推すべし。內容は、偶々に硬を混へてゐるが、概して酷い軟である。自分も拙稿「江戸軟派の猥的味」を寄せてゐるが、酷さに於ては、曉天の星。特に自分が明治大正稀有の猥文として愛讀したのは「近事猥事考」の峯岸氏の文である。執筆者、生方、藤澤、武藤(直治)、今、齋藤(昌三)、酒井、井東の諸氏及び梅原氏の大車輪になつての大量發表「デカメロン」他の伏字考である。(非賣。東京市牛込區赤城元町三十四、文藝資料編輯部)

稀本百種(杉本梁江堂編)□金平六段本題名一覽(非賣、百足屋文庫發行)□書史會主催虫干會展觀目錄(同會)□文學たむけぐさ(「思ひよる日」と同系のもの。前田草人編。非賣)□東海道に關する圖書第四(非賣、金田晴一)□川柳書目錄(明治大正本の部。川柳寺雀羅氏編)□「讀書票」第一第二、(東京朝日新聞社)

新舊時代(二ノ四、五、六)●墓蹟(二、三)●東京新誌(一、二)●集古(丙寅第四)●延壽情話(十一)●國語と國文學(九月及び十月特大)●新小說(十月)●文章往來(九月特輯)●清元研究(第十四)●風俗研究(七十五)●性の智識(九月)●愛書趣味(六)(以下八月號並に九月號)墓碑史蹟研究●やなぎ樽研究●歌舞伎●川柳鯱鉾●本道樂●長唄●國學院雜誌●歷史地理●歌舞伎研究●早稻田文學

大正十五年十月二十九日印刷
大正十五年十一月一日發行

参編 第五冊（通編第五十冊）

本文

江戸軟派研究

第五冊（通編第五十冊）

尾崎久彌著

合巻と根本の一一

最近入手の、つぶしにするは惜しいの、零本ばかりであるが、面白さうなものを選つて、こゝに書いつけておく。先づ合巻ものである。

一、金花猫婆化生屋敷(ねこまたばゞ) 前編三冊 文化五年刻

三馬の作である。第一丁表に、三馬作、岩戸板と欄外の上にあり中には、文化五年戊辰春新刻、同四年丁卯夏稿成とあるものである此の本、「新修日本小説年表」には初版だと、金花猫婆化生屋敷と上に二行にあつて、本外題は復讐両股塚だとあり、天保九年に金龍作として、金花猫婆化生屋敷として改題再版したとあるが、これは誤りであらう。それは、現に此本、元表紙題簽があつて、それには紛るべくもない、「金花猫婆化生屋敷」とあるからである。それに、第一丁には、鈴や首輪で縁どつた扁額やうの中に敵討ふたまたつか前後六冊ともある。即ちとにかく、天保の再版があるにしても(此の入手本を再版としても)、天保に金龍作としたといふのは誤りである、第一丁裏から第二丁表へは、見返しになつて、十二一重を被た猫婆が、檜扇をかざし、口から煙を噴いて、子猫の群を放出してゐる圖が描かれてゐる。次ギの次ギ、本文、ほつたん、れこまたやしきの来由「今はむかし根駒中将信俊卿といへるやんごとなき方おはしましき……」といつた書き出し。描だ絵は、豊廣の畫だけあつて、拙だか巧だか分らぬ描法。六丁裏七丁表に、野川を背景に、手拭を被つた猫の踊つてゐる様がある。

これと、處々、惨虐な殺害場面が一味の刺戟を與へる。(筋は、根駒の子孫になつて、封じられた猫又が、封をとかれて大飛躍、跳梁するのである。)内、第十三丁裏より第十四丁表への、老婆に化けた猫化が、人間の赤子の死骸を、口あんぐり喰つてゐる圖がある。猟師兄弟の母に化けた体で、捕つた猿など獸の類もある。老婆の背の方には、襴襠も轉がつてゐる。これが、無條件で、此の零本に飛びつかせた(私をして)唯一原由の絵である。豊廣の變怪の絵として、先は見本にならう。此前編ちやうど三冊即ち十五丁分である。仕立は半紙本、表紙は茶表紙。

二、絵看板子持山姥 上と下 文化十二年

京傳の合巻もの、同じく半紙本に仕立てたものである。これは前本に比べたら、版はいゝ、序によると、文化十一年六月稿成、同十二年春新草紙といふ。署名の右肩に骨董集の著述のいとまとある。序には「(前略)さばかり人のめで集る芝居の愛敬を借著せしおのれが拙き筆すさみは、ゆきたけ揃はぬ似せ上使頼光朝臣の時代をたづね古今の筆のことかしこをひろひあつめてつゞりたる木の葉ごろもの袖草紙云々」とある。此の本凡て初代豊國の畫である。恐らく三冊ものであらう。入手本は、第一丁より第十丁までの合本と、第三十丁より第四十丁までの合本と此の二合本であるが、本來は、上編が上冊中冊下冊で十五丁、中編同じく十五丁、下編が同じく十五丁、計四十五丁の合本三冊本であらう年表のいふ通り、成程、この第四十丁目に、なほ次へつゞく、とある。即ち年表の九巻(四十五丁)物に違ひない。それにしては、文化、その末とはいへ、すでに長くなつたものである。この入手本は、上と下とが、それ〴〵上の下、下の下の五丁分だけ缺けてゐるらしい。現に表紙題簽は、上又は下とある。紙勘定に終つてしまつたが、入手本の上でいふと、はじめ五枚の口絵がいゝ。こゝいらの感じは、讀本らしい。第一の、金時と綱との對局眞中に金棒を持つた蜘蛛の大入道下に茶坊主に見せた小妖物それが又かと思ひ乍らも面白い。筋は、将軍太郎良門や純友の家来の伊賀壽太郎や、それへ将門や純友の亡靈があらはれ、頼光四天王の奮闘となる。それに、下編で山姥金時をからませてゐる。入手本下の中の、金時に乳を飲ます山姥の絵がいゝ。合巻の挿絵にしては、可なりの大首である。描法を餘り守りすぎて、一枚絵歌麿などに見る面白味はないが、その型を傳へながら、右足を投け出して熊の背を押へ乍ら、母の乳を吸ふ金時の大目玉は、疱瘡絵本めくが、豊國初代の金時山姥の一見本にはなる。次ギの次ギ、頼光に金時が召抱へられ、山姥登遐で終つてゐる。アトは、賊類追捕で目出度しであらうこれを見ながら、白分は、版畫(一枚絵の類)に現れたると、挿絵(讀本合巻など)に現れたるとの凡て山姥金時――それに乳を吸はせてゐる山姥を集めたら、比較的面白い(この面白さは、すでに我らは度々力説してゐるから略く)ものが出來るであらう。山姥選集といつたものである。これからこまめに集めておかうかと氣づいた事である。が、版畫一枚絵には、

(表紙の三へ)

黄表紙九種（寛政以前）解題

家藏本黄表紙の中、帝文本「黄表紙百種」「万物滑稽合戰記」、有朋堂文庫「黄表紙十種」等其他に現れない、未飜刻のもの三十二種の梗概及び寸評である。根が黄表紙を專門にした蒐集でもないから玉石同架ではあるが、然し何れも書目には名あつて內容の不明な物ばかり。作の高下は論外として、當時作內容の推移と繪柄の變移を語る、一材證にもと擧げておく。文化期の敵討物は其の二三だけに止めておく。唯、從來飜刻された物ばかりが全部名作と限らないと同じく、此の未飜刻物の中にも、相當に作の上位を占め得べきものもあらう。殊に、洒落本にも非ず咄本にも非ず、滑稽本にも非ず、讀本にも非ず、しかもそれらの諸要素を色々な意味で具へてゐるものは、黄表紙である。今、敍述を作の年代順によつて進める。したがつて、此の三十二種を從來飜刻せられたる物の間におき、(既飜刻の概數は百四十種)その如何に多岐多樣の內容を包含して、合巻草雙紙に移り行つたかを知るには、丁度幸はひの機會であらうと思ふ。先づ書目、次に解說である。

(外題)	(巻數)	(作者)	(畫者)	(發行年次)
一、「せんはのつる」	二	富川房信カ	富川房信	不詳
二、風流友世車	二	東西南北	鳥居清經	安永五年
三、通略三極志	三	四國子	鳥居清長	同九年
四、異國張命の洗濯	二	市場通笑	不詳	天明元年
五、大通天王野暮親王誤献大和功	三	朋誠堂喜三二	北尾重政	同三年
六、源平總勘定	二	四方（蜀）山人	北川歌麿	同
七、運開扇花香	二	春朗（北齋）カ	勝川春朗	同四年

八、	明矣七變目景清	二	山東京傳	自書	同六年
九、	〔榮増〕津宇那門成	三	稻坊	不詳	同七年
一〇、	〔孔子縞三篇 淺草の繪馬〕磨光世中魂	三	竹塚翁東子	龜毛（京傳）	寛政二年
一一、	聽從淺黃鯑	三	二代喜三二	櫻文橋	同
一二、	〔高慢 狂訓〕至無我人鼻心神	三	竹塚翁東子	北尾政美	同三年
一三、	〔頬𢢫即席 菩提料理〕四人詰南片傀儡	三	山東京傳	北尾重政	同五年
一四、	先開梅の赤本	三	同右	同右	同
一五、	國姓爺合戰	三	不詳	不詳	同六年カ
一六、	竹齋老寶山吹色	三	築地善交	北尾重政	同六年
一七、	諺下司話說	三	山東京傳	同右	同七年
一八、	庭莊子珍物茶話	二	曲亭馬琴	同右	同九年
一九、	無筆節用似字盡	三	同右	同右	同
二〇、	兩頭筆善惡日記	三	山東京傳	同右	同十一年
二一、	視藥霞報條	三	曲亭馬琴	同右	同十二年
二二、	平假名錢神問答	三	山東京傳	初代豐國	同
二三、	兒童文珠稚教訓	三	可候（北齋）	自書	同十三年（享和元年）
二四、	浪速秤無女芬輪	二	曲亭馬琴	百川子興	同
二五、	伊呂波短歌	二	十偏舍一九	自書	同
二六、	不廚庖即席料理	三	可候（北齋）	自書	享和三年
二七、	人間萬事吹矢的	三	山東京傳	自書	同

二八、怪談摸摸夢字彙(クワイダンモモンジイ)　三　同　右　北尾重政　同

二九、五人切西瓜斬賣　三　同　右　長喜　同四年

三〇、榮花男二代目七色合點豆　三　同　右　北尾重政　同四年(文化元年)

三一、嵐山花仇討後編春霞女回國　五　十返舍一九　歌川豐廣　文化五年

三二、十六利勘略縁記　三　山東京傳　初代豐國　同十二年

○

以下は、其の單簡な解題である。

(一)せんはのつる　二

これは零本、下卷(六丁より十丁まで)の一冊。作書ともに富川房信(吟雪)であることは、其の下卷八丁表に、富川房信書とあるによつて知られる。(作者名を明示しない限り、畫者の名が同時に作者名であることは、大体に於て正しい認定である。)内容は、曾我物、未だ黄表紙の体を爲さぬ青本時代の名殘と目すべきもので、畫風も人物等大柄(おほがら)な、全く原始的氣分に滿ちてゐる。唯外題は、柱(はしら)に「せんはのつる」とあるのみで、類似作を「書目」等に檢索するも、遂に見當らない。下の初丁(六丁)は、近江と八幡に十郎。編笠かぶつた近江のはだけた跨(また)の前へ、笠を脱ぎ、手をついて謝罪(あやま)りをる韓信(かんしん)もどきの十郎である。右に立つた誰哉行燈で、廓の往來をきかせてゐる。最後の丁、兄弟討入の松明姿。

(二)風流友世車　二

これも下卷の一である。柱には「はしか」とある。安永五年版。當時府内で女力持で有名だつたともよを材(ざい)にし、それに痲疹の流行をきかせ、痲疹の神を痲疹道人として芝居の鳴神の趣向を取り入れたものである。(このともよの力持は、同年風來山人も「力婦傳」に之を藉りてゐる。)此の本、すべて朱の筆彩色、或は元來が板元自身から、かく彩つて賣り出したものであらうかとも思ふ。然し色版の旣

に發達した當時としては、可笑しいとも思へる、一々此んな手間暇の要る事をしたであらうかといふのである。が一見、其の筆彩が、頗る要領を得て、迚も素人の手ずさみではない。安永の當時、尙此の靑本類に筆彩色があつたか否か、一考を煩したい。一分の疑問は、若し當初からの筆彩なれば、なせその面倒を略いて、色版にしないかといふ事である。（尙、此の「風流友世車」は、嘗て拙著「江戸軟派研究」貳編第五册に、「驅蠡のひま」として物した中に、より詳しい梗概を載せた。參照を乞ふ。）

（三）通　略　三　國　志　三

三國志に見立たものである。後世の赤讀和本の「讃極志」や「すゐこ傳」なども、畢竟此の黃表紙（間々洒落本にも此の見立の傾向あり）類の眞似が一にありはしないかと、彼此對照して微笑まれる。筋をいふと、現金屋德右衞門といふ質屋の悴德次郎、十九になつて嫁を世話する人多くあるとも未だ嫁とらず、吉原にてきろといふ女郎に深く云ひかはしてゐるからである。そのてきろをそうそうといふ坊主頭の客とはりあふ。德の兄弟分の關羽が、德の爲に、廓の者を追ひ散らす。金が敵曹そうが仇で、德と的との添はれぬ愁嘆などあつて、最後深川のほとりに住む竹むら竹五郎といふ高名な大通を味方に賴み込む。雪の日に、高名の庵を訪ふのである。的盧身請の手附の金に差當り困る。高名、德の賴みを引受けて、德の兄弟分の張飛に計略を授ける。次ぎ、丁半（賭博）場で「かうめいよいじぶんと、てうひをつゝくと、こゝろへたりと、けんくわをはじめ、ぼんござを引たてたゝきちらすに、たゞ一人金をとろふといふ人もなく、みなくにげる。これてうひがてうはんばのはたらきといふといふ」のである。（此の處の淸長圖、當時賭博の實寫圖であるが、我々には一切不通。「三六に四三をまけける」、「せうぶ」、「はぐりをうちやれ」「半かたが二十はあまるがないかく」、「四の二をまけてやる」、「せうぶ」とあり。高名、張飛とも十人の車座である。）次ぎに、かねてそうくに意趣を持つてゐる吳孫軒といふさる御歷々の若隱居、高名と對面の場があつて、十五日に中の町のせきへきで、挙

の會を催し、そう〳〵を負かして廓に一切足踏みさせぬ計ひが決る。トドその日となり、そう〳〵拳會に大敗、てきろが首尾よく身請せられて、德治郎の妻となるので、めでたし〳〵。

（四）異國張命之洗濯　二

作者通笑の子孫たる市場德兵衛氏の複製本に據る。

金の番人同樣で、どろ〳〵眠りもしない越前屋太郎兵衛が、ある宴會の席上で、金を貯めるが藝ではない、人間は命の洗濯が大切と話すのを聞いて、俄かに自分もさうだと思ひ込み、早速廓へ赴き、たゝら遊びをして、腑ぬけのやうになつて、駕籠にもえ乘らず、人の肩に縋つて、やつと歸る。（上の卷）御内儀の思ひ付で、粥に砂糖をいれて團子の樣にして箸で挿んでは嘗めさせる。太郎兵衛は粥を嘗めながら緣側にゐて日向ぼこばかりしてゐる故、だん〳〵にぎしやばり、無性に堅い事ばかりいふ。女房呆れはて、奉公人共も困り拔く。こゝに長崎きたいといふ異國流の針醫の名人があり、それに頼み込んで療治をして貰ふ。きたい、弟子と二人で來り、二人で槌にて病人を叩き、時々きりをふいてはさすり、餘程按配のよいと思ふ時分に針を打つた。そのお蔭でか、生れかはつたやうに、大通になつたといふ話。（以上、下の卷）つまり洗張を人事に寓したのである。

（五）誤　敵　大　和　功　三

鹿田の再版本に據る。此本、筋は割合に複雜で、天王物の一種としては、佳作の側であらう。大通天王の御代で、宮中で寳合や扇合などの色々な催し事がある。（當時、通人間に寳合や扇合が流行つた。現に第一回の寳合は、安永二年、第二回は此の作と同年の天明三年に行はれた。會者當時の作者通人。これらをきかしてゐる。）唐土の半通王から銀の煙管一挺、黑き新ぎれの煙草入一ッ、書簡を添へて贈り來る。その書簡が、野馬臺の詩もどきである。「なるほどやぼつてい書簡だ、やぼつていの詩といふのであろふ」と天王が仰せられる。或時天王、吉原のきん〳〵たる事を聞し召し、都六條河原へ吉原をお移しになる。唐土よりは昔の例に習つて、三つの寳を献上し來つた。「一に花原傾、これは桃花

原の傾城なるゆへ、花原傾といふ。もとより仙女なり。二に尿瓶石、これは少しづゝ打砕きて、むらを直し下帯に縫ひ付けおく時は、小便を吸取る故、如何様の所に長座しても困ることなし。……。さて第三は面向不背の玉にて、上もなき玉なり。「此女に一目見られたる男は忽ち俺に惚れたなと思ふ氣になる名玉なり」といふのである。此の中、花原傾と面向不背玉とは、傾城となり、吉原に勸めさせ、天王及び文魚卿が通はれ、天王の相方は面向不背の玉改めの淸玉、文魚卿には、花原傾改めの桃園である。(此の文魚卿は、當時十八大通の一人で、京傳にも保護を與へた贔屓の札差義徳文魚の謂であらう。他、凡て當時の實情によそへてゐよう。)桃園は根が仙人ゆゑ、客の込んでゐる時は、分身させて、何處の座敷にも現はれ客をそらさない。天王の流連が餘り烈しいから、不通將ふるくさが奏聞して、鳥羽の離宮に御隱居あらせられ、御弟野暮親王に御位讓りあらせられるやうにと、申す。天王「それはおれがにも至極勝手の筋」と仰せあり、御即位の御議式もすみ、親王は野暮天王と仰がれ給ひ、大通天王をば大通の院と申し奉る。大通の院、鳥羽の離宮に入り給ひ、りきうより思ひよりて、茶道三昧に身を委ね給ひ、色事を茶にし給ふ故、唐土の計事成り難く、淸玉は古狸と形を現はし、六ツの尾を振りたて雲に乘りて唐土へ歸る。(此處、玉藻前をきかしてゐることは無論)尿瓶石も盡く天に飛上り小便の雨を降らす。桃園は、鶴屋の暖簾に乘り飛び去る。(此の處の繪柄、面白し。小町風の姫曰く、「千早振る神代も聞かぬ雨じや」。袖を掩ひて雨を避ける公卿や雜式「小便の雨ふるとは年代記にもない圖だ。」「寶物の小便組とは油斷のならぬ」など。此の小便組に注意する必要がある。此の天明年代、妾の小便組が流行つた證である。)次ぎ、野暮天王、小便の雨ふる事朕が不德なりとて、早く淨めの雨降らん事を祈り給ふ。然るに尿瓶名、天で雨を吸取つたと見えて、天下雨の降る事がない。で文魚卿の思ひ付で、小町の雨乞に倣ひ、松葉屋の瀨川其頃小町にも勝らん程の美人にて而も歌人なり。されども歌の力小町に及ぶまじとて、三園のためしによりて其角代りに當時前句の點者淸柳を選み出し、兩人に歌と發句を仰せ付けられ、兩人仰せにより一首一句を奉りければ、忽

ち空掻き曇り、大雨車軸を流す云々でめでたしに終るのである。(此處、禁庭を、道中姿の瀬川が右、上下姿の青柳が左。御兩人、禿の傘にも、雨が降りしきつてゐる。珍奇な思ひ付である。)

(二八)源平總勘定　二

此本、朝倉氏の舊「小說年表」には「三卷とあるが、矢張り「書目」の示す通り二卷で完本である。源平の世界を借りて、平家の沒落を身代の破産に譬へてゐる。初め、親に似ぬ重盛が、難波の二郎と瀬尾の太郎を呼び寄せ「これ兩人、親爺が晝夜の奢りでは此の三千兩も危なもの、どうぞ出入の帳面の方へ三十兩一ぶにでも五十兩一ぶにでも廻しておいてくれろ」と賴む。「只今は三兩一ぶ前利と申す世の中、かゝる利やすなお金はござりませぬ」といふ瀬尾。次ぎ、重盛に一杯喰はせた難波と瀬尾、いわうざんへ收むべき三千兩の金をつり出し、入道へ捧げ、己れも十分一をせしめた。入道大きに喜び、祇王祇女の白拍子を呼びて騷ぐ、又佛といへるに現をぬかす。(此處、佛は娘道成寺の振にて書かる。)祇王障子に樂書して曰く「もれ出るもかむのも同じのべの紙いづれか紙の屑となるべき」。背景は福原の中洲の景色といふのである。次ぎ、平家の清盛以下、小烏丸といふ船に乘り、あきれ向ふ島へ船遊山にでかけしが、あきの太郎が前を通りし時、太郎が家の洗ひ鯉飛んで船の中へ入る。遠景、いつくしまの向ふ島の体。(此圖、恰も後の哥麿描くの兩國繪の如き氣分。)次ぎ、次第に平家は身代衰へ、福原の別莊も人手に移り、「せう事なしの西八條の佗住居、如何してか家の內へ火の降る事度々なり。これを情燄火の病といふ。また或る日の夕暮に、金の工面に差支へ、廣庭を眺めゐたりしに、「何處ともなく數萬の座頭、或はしゆもく、かたしゆもく、はいとうしふんに至るまで白眼を向き出し、聲を上げ利の滯りをはたりしは、恐しくもまた物凄し」といふ体。次ぎ、清盛重盛世を去つて後、名の如く、貧もり、實もり、宗もり、維もり、敎もり、一樣に雨の漏つた家に難澁の体。次ぎ、高雄の文覺上人、平家の古證文を買ひ込み、佐殿に謀叛を勸める。笹輪藤の提灯を左に提げ、金錢出入帳を右手に

持つた義經が、賴朝の番頭となつて、此の證文を種に西國の平家をはたりに行く。「いかに義經、今より兄賴朝が番頭として平家の一文をはたれ〳〵」。(以上、上卷)次ぎ、ひよ鳥越、元曆元年大つもごりに借錢はたりに攻めよせた体。次ぎ、扇の的、岡部と忠度、(岡部を無論豆腐屋にしてゐる)、敦盛直實、錣引の体。凡て借錢の取り立てである。次ぎ「大納言時忠宗盛とうなづきあい、□□□□を下の關へ賣りこかし、其の身の代をもつて半金ばかりは借金を濟しける」といつた荒唐無稽さ。二位の尼はやりて、□□は男禿、□□は檜扇と名をかへる。一座は、檜扇、熊野、辨慶、時忠宗盛は幇間となり、大盡格が義經、二位尼も相手、靜は藝者で三味線を持つて撥。此座で義經と梶原とさかろの論。辨慶曰く「げぢ〳〵めがやぼには困るぞ」。次ぎ、「義經は折角取り立てし平家の金を使ひ込、兄賴朝へ申譯なく、密かに四つ手駕籠に乘り、一先づ奥州秀衡が館へ居候とならんと辨慶一人供にて出かける。途中、知盛の亡靈が現れる。次ぎ、渚の梶原、水の平家蟹。曰く「梶原は義經に出し拔かれ獨り初春早々掛取にも行かれず、頃は二月のたまおち頃、梅花を折りて箙に揷し、殘る借金をはたりける。これを梶原二度の掛取といふ。……。平家は殘らず蟹となりて借金を橫にねる。これより佐渡の金山へ赴き、金の蔓をきりて金をすます。これ後世きりがねの始めなり」。次ぎ、鶴岡の神前で、賴朝から千兩箱の小判を分けて頂いてゐる諸大名の体。「源の賴朝公、平家の貸を百日百ばいにきりがねにしてとり給ひしが、迚も此かねなきものと思ひ、鶴が岡の神前にて鎌倉山の諸大名へ金子千兩はづみ給ふ。これを賴朝千羽つうといふ。」(以上、下卷)。黄表紙特有の趣向ではあるが、無理がなく而も面白く筋が運ばれてゐると思ふ。畫は歌麿であるが、人物は男女殊に女性の描寫、うつかりすると重政か春章、せゐ〳〵湖龍齋か、これ位ゐによりはどうしても見えない。唯二三構圖に於て、殊に其の背景、點在事物等に於て、後の彼を想はしめるもののみである。(蔦屋板)

(七)運開扇花香　二

作者不詳、末尾に春朗畫とある、恐らく作畫とも春朗(後の北齋)であらう。春章の弟子當時であつただけ、春章そつくりの畫樣、唯男性の描寫の稍強い線に於て、春英あたりを思はしめるものもある。此本梗概、并て「江戸軟派研究」貳編「驪龕のひま」に詳述した。就て看られたい。當時の流行妓扇屋内花扇(此作には、あふひや花おきとせり。)に關する物の一である。

八、明矣七(惡七)變目景淸　二

鹿田の再版本である。源家の仁心を感じ両眼をくり出し、景淸は日向宮崎へ下り、日向勾當となる。頼朝公は、此の景淸のくり出した両の眼玉を、根締にでもしろとて重忠に賜はつたが、重忠「いゝものをやろふといつてだましたと新造衆のいふやうな臺詞にて、とある掃溜へ棄てゝしまひけるが」、此頭開けばその両の眼が、頼朝に仇せんと「平家の仇頼朝を睨み殺してくれん、どうするか永い目で御覧じろなど」、「氣長な謀叛を企む由」で、その眼玉を詮議せずばなるまいと、その役を岩永と重忠に、一月替りに仰付けられる。此月は岩永の番で、景淸の目姿を描いた標札を立てた家來を供に、岩永が下の役人、鎌倉中の町人に詮議を申付ける。「急に目の明いた奴があるなら召連れて出ろ。その外凡て目にいわくのある奴は氣を付けませい。大切な目しうどだ。必ずとり逃がすまいぞ」との命令。鎌倉の入口へ「人目關」といふ新關をしつらへ、往來の者一々吟味。次ぎ、非人体のもので、目が四つある者が徘徊するとの事で、それこそうさんと、引立てゝ見れば、「おきやがれ、その方は節用で見た奴だ。とんだむだをした。」「そんなうろんなもんじやアごんせん。唐土のそうけつ(蒼頡)といふもので、ごんすよ。永字の八法でも問はつしやるかと思ひました。ア、つがもない」。次ぎ、箱根の先に、三ツ目の大入道がゐるとて、捕へ來り土牢へ入れておいたが、これは化物の親玉なれば「忽ち消えて了ふ筈なれど、それも餘り手がないと思ひしや、かの牢を押破り、岩永が組下の番人共を散々に踏みちらして逃げ失せける」といふのである。(以上、上の巻)此月からは重忠の當番である。赤坂に、御入

目御望次第といふ看板を目當にたづね來りかくまはれゐるとの事を重忠聞き出し、早速捕手を大せい遣はしければ、此事を悟り目から鼻へ拔けて逃げ去せける。捕手の者たち入目所の棚にありし誂への拵へ物の目を持ち歸り、此うちに定めて景清の目あるべしと重忠に差上げる。妙手の琴を聞く時は、目の中に涙を催すもの也。拵へ物の目なれば、何の事もあるまじと、机の上に誂らへの目玉を色々並べて、重忠、和田義盛の計らひにて京町一丁目四ッ目やの傾城七里を召して琴を彈かせて目の吟味。此處、異つた琴責の圖柄で、七里の後には禿が二人ゐる。その一人の詞「此の草ざうしを扇やのかたうたさんや菊園さんに見せたふざんすよ」といはせてゐる。此の菊園は、寛政二年に彼（京傳）の妻となつた菊園、とんだ所で惚氣をいうてゐる形である。此の菊園對京傳の關係に就ては、外骨氏の「山東京傳」にも詳述せられてゐるが、此の本また以て當時（此本、天明六年）、すでに菊園と多少の緣を有つてゐた一據證である。七里の祕曲も結局無效に終つた。景清の目らしきものはない。昔、大佛供養に景清衆徒に扮して現れたから、今度もと大佛供養を始めんとする。重印だん／＼詮議下手になりける。折ふし達磨大師日本へ渡り、大佛の所へ尋ね來たのを、重忠見つけて吟味、目が大きいからである。詮方なく、灰の灰汁で洗つて見せる。景清の両眼は、如何にもして頼朝公の御前へ近づかんと思ふ折ふし、近日相模川の橋供養に御出馬ある由を聞き、御厩へ忍び込み御召の生馬の目を拔き、そのあとへ入り、道にて落馬させ一と思ひに蹴殺さんと荒れに荒れてゐる所へ、重忠、懷中より日向勾當の官金五百両の證文を馬の目の前へさしつけて、景清を勾當になし給ひしは君の御仁心、扶持を下されて宮崎に樂隱居、頭巾紫の衣かた撞木の杖、此代金積つて一千両、此金を今返すか頼朝公の烏帽子首を受取るか、サア／＼どうだ／＼。「何とこれでは目が出ようがな。十両や二十両の目腐れ金ではねへぞや」。「さうとは知らず怨みしは此両眼の目がね違ひ。今千両といふ金を出せと聞いては、ア、目が出る／＼」と此馬物を言ふかと思ひしが、忽ち両眼飛び出しける、是れ目が出るの初めなり、とい

ふのである。次ぎ、賴朝公、景淸が目の忠義を感じ給ひ、吳子胥が目にまさりし英雄の目は武門の寶なりとて、重忠に預け給ひ、目出度御代とぞ成りにける云々」より朝公、目の騷動治まりければ、目といふ字を七ッ書いて、茅場町の藥師へ奉納し給ふ。七ッ目御運の守これなり。」と賴朝、三方の上に載せためを七ッ書いた繪馬を重忠に賜ふ。重忠、桐の大紋の素袍「その方が素袍の紋所を見ると、竹やの歌菊を思ひ出す」と賴朝公の仰せである。此の歌菊にも作者の俤さん、何か意味を持たせてゐるだらう。(彼の狎妓または高根の花の一人ではなかつたらうか。不詳。)最尾、目かづらをかけた幇間の体で「重忠目かづらといふものを工夫し出し、これを吉原の太皷持目吉に傳へけるが、今座敷にする女へんめといふはこれなり」とある。(以上、下の卷)。

(九)津　宇　那　門　成　三

三冊物ではあるが「家藏は下の一冊。下によつて推すに、大通がる二人の兄弟があつて、(その一人は、羽織に文とある。例の京傳のパトロンでもあつた文魚の意であらう。)いろ／＼大通ぶり研究の結果、下卷は、大佛千体の供養と決つて、町中に總振舞をする。大金をかけての供養が濟んでも一向評判がない。で兄弟は釋迦文殊達磨の三師を呼んで其の智慧を借りようとする。三師も一向妙案がない。或日兄弟居眠の夢に「不思議や西の方より竈將軍現れ出で、抑々大通といふものは金を使ふ斗りにも非ず。長き羽織を着るにも非ず、粗服にてもわたりよく着け、商賣を精出し、女郎買も遲く行き早く歸り、藝者も二度目の迎ひの頃に又直しすぐにあけてやり、こんたんしてとかく金を使はぬやうにするが大通の奧義なり、これにて諸事を考へべし。ゆめ／＼疑ふ事勿れ、どろ／＼／＼。」「兄弟夢さめげにもと、感心して、それより女郎買もあさぎとなり、誠に通の通くさきは眞の通にあらずと渡世に精出し、兄弟末繁昌に暮しけり」で結んでゐる。此の本の作者、稻坊といふのは、誰の事か。此の他に餘り見當らぬ作名である。畫風は、前の「景淸」と似、寬政よりは婦人の顏ふくらみ多い所より推して、やはり政演の書でもあらうか。以上、第一回。次ぎは寬政期の物である。〔以上、既出翻刻、黄表紙(寬政前期)解題の前段也〕

三馬戯作「江戸の水」(下)

（次ギ、三馬師弟饗宴の圖、ヒラキ）

仙方延壽丹

關東筋

賣弘所

奥州 仙臺大町 鳴屋忠右衛門
同 白川橋町 萬屋三四郎
同 本宮 井桁屋吉兵へ
常州 □（?）浦 大國屋勘兵へ
武州 八王子 小谷屋彦太郎
甲府 八日町 丸屋順五郎
駿府 新谷町 扇や半兵へ
相州 いせ原中町 加藤惣兵へ
同 藤澤 谷や惣右衛門
下總 佐倉 伊セ屋兵吉
上州 桐生 藤屋忠兵へ
同 高崎 大澤孫介
同 藤岡 いづみや卯兵へ
野州 小山 萬や源兵へ
武州 越谷 亀谷甚内
同 秩父田村 淺海傳兵へ
同 神奈川 きの國や源七
常州 水戸 井筒や作十郎
同 大田 井筒や嘉二兵へ
下總 松戸 升や太郎兵へ
同 古河 ならや久兵へ
同 佐原 いせや新兵へ

此外取次所有廿五ケ所東國諸所に有之候こゝに書記すものはいづれも古來よりの取次所に御座候新規取次所の姓名あまたなれば略之

延壽丹江戸の水益々御ひいきの御蔭にて繁昌日〲にいや增り、樣〲の妙藥（みやうやく）われいちと効能を現はしければ、取次所も次第にふえて、多くの金銀山と積り、めでたき春のかきぞめにいつもかはらぬ馬の連中、ことしはわきて馬（さる）のとしなればとて、式亭社盟の戯作者を集めて壽（ことぶき）の酒汲みかはしけるは、めでたかりける身の上なり、めでたし〲〲〲

豊國門人　國直畫

日本ばしの 匠亭三七

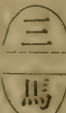
「いづれもお骨折のかひあつて、斯樣なめでたい歳（虫）を迎へまする、これと申うすも御ひいきの御めぐみ、次には□□□□□御連中のひきたてて下さる故ぢや、ありがたいことで御座る。

（此の饗宴の師弟、右は小石川の泉亭（少年風也）、日本橋の匠亭三七、小石川の德亭三孝、淺草の古今亭三鳥、下の黑紋附は三馬の意、その傍の兒童は小三馬の意か。左、日本橋の谷亭三友、虎の門の雪亭三冬（坊主頭）、日本橋の學亭三子、小田原町春亭三曉、□□町樂亭三笑。以上、第十四丁裏より第十五丁表）

金勢丸

酒の酔をさまし一切毒けしはら一道の妙薬、

○大 包 百文 ○中 包 五十文
○小 包 廿四文

三馬作（三馬）

じやかう細吟味
○箱いり御歯みがき

箱入極製 四十八文
同 精製 三十二文
同 上製 二十四文
袋入吟味 十六文

目方の多少にかゝはらず製法の仕方と薬種の上下品によりて直段いろ／＼有之候砂を用ひず至て細かなるを専らとす

馬 小児百日せき妙薬

さとうゆにて用るゆゑ小児にのみよく速に治す

一包代 五十文

式亭家傳 小児丸

五かんきやうふうはいふに及ばず小児の諸病に用て其効能すみやかなり

御目あらひくすり 龍樹散

はやり目は一日にて治す

龍樹菩薩秘方の目ぐすり三馬年來用ゐ見てためしたる名方也

代 三十六文

經驗良方 婦人の薬

さん前後血の道によく婦人一切の妙薬悉しくは能書にしるす

代 百文 五十文

しやくの黒薬（くろくすり）

うち身切きず二即功あり

毎朝用れば しやく〱の根をきる

代 三十六文

（以上、第十五丁裏。此面、挿絵なし。大尾）

野暮と通の名論

南陀伽紫蘭（窪俊滿の匿名）作・安永九年出版の「古今青樓噺之畫有多」は、天明六年に「北廓故實内所圖會」として、小金原丸の自序並に端書や遊女花扇の書を添へて、修補再版、更に寛政に至つて「古今繪入吉原大全」として、再々版にかけてゐるものである。が全部を通じて繪は、政演（京傳）の筆、体裁は中本、本文十五丁に毎繪がある所など、頗る黄表紙体裁である。その繪に插入した故實を説いた詞書は、殆ど以前の即ち明和五年版澤田東江著と稱する、春信の繪などを挿める「吉原大全」（中本五卷）の踏襲で、何の變哲もないが、純初版の「噺之繪有多」の跋文は、中々振つてゐるものである。これは、恐らく作者紫蘭の筆に成る所のものであらう。勿論此の跋文とても「吉原大全」第五卷目の諸辨を種本にはしてゐようが、明和と安永とでは、そこに距離があり、別様の風趣がある。殊に當時の客の通と野暮、傾城の誠と實とに觸れて、さては、當時の怜悧になづた傾城買の極意にも、作者自身しぜんと時代の感化をうけて、即ち昔とは違つた沒頭本位とはさらり變つた、冷靜傍觀、（この味は、前本「吉原大全」の第五、諸辨にも少いかと思ふ。）不離不即の妙諦を説いた、當時安永頃の花街の人情世相に滲透した、頗るのメイ論と思ふ。後（寛政十一年）の谷峨の「傾城傳受」など、其他、天明から寛政へかけての多くの洒落本の、情界彼此の空氣を、凡て驅擢して、これを端的な議論にしてゐる所があつて、即ち吉原大全を親とし、末期洒落本の色道傳授物を孫とする物として、頗る寸鐵要を得てゐると思ふ。傾城は、客の心次第、みさをも僞もそれからといふ點や、結句溺れないのが通だといふあたり、殊に、生惚れの方が、傾城にも面白いといふあたり、溺れる事を避けた世相が見えて面白いかと思ふ。以下其の全文の紹介、精讀玩味あらせられませうと、原作者に代つて提灯をもつ事如件。

○

右古今青樓事譯難算尚書上粗而委吉原大全其他青樓書數卷讓而是略

噺畫有云。吉原大全の烏有と虚來の序（明和版「吉原大全」の序文參照。中に、烏有と虚來現れたり。久彌。）も。出來たもんだが何ンとマア。女郎買の一とをりも。大体あのくらいなもの。それから込ミ入て見れば。愛想のつきる事ばかり。たのしみのあるも青うち。通になつては絲瓜の根。何か無上に。こうでもない。あゝでもないと。さみしちらすといつでも香の物で茶漬より外はなし。初心はかけらるゝもふらるゝのも。わからずに遊ぶゆへ。菜さへ有ばいつでも飯を甘く喰ふ。こゝらはやぼの一德。いでや此世の多き中に。やぼならぬも

なく。粋ならぬもなし。其中にも己惚にて。通人と見せんと。何かに付て朝夕のこゝろ遣ひ。やつぱりこれがやぼの上まへ。粋の目より不通うと笑る人は。ごふした形が持るもしらず。ぐん内嶋も。せんじの羽織も。祖父のさした朱鞘の脇指もふ恪好ともおもはねば。是又心のつうなるべし。名高き遊里に。さたされ給ふ。通達のくわんねんの念にもあらざれば。大門をくゞるとならば。たゞ何事も利口だてをふりすてゝ。いつそ愚痴に。だまされて。かけられて。女郎に逢ふこそ。買といふ字の深意ならん。これよりおくをさがしなば。此道の横たをしなるべしかの。ちよ〳〵ら傳を見れば。金銀を遣わずして。女郎を自由にするを。色男といふと書り。これらははるか下ざまのとのはにして。ろんずるにたらず。やり手の高笑ひではなけれど。作者の心が見たい。今はむかし。新かづさやのすまぎぬと。大かづさやあげ卷が子供狂言へ遣す。幕の出入にて。張合ふたを。ある人中なをりさせし其仕様のよさ。肴賣が花をくれる。物もらいに金をやるなど。是らは皆。たてひきの通うよりおこる。行過たるをおつ付。足らざるをおぎなつて。せつなきをすくふ。此むれの通達かぞへがたし。又くるわにも。下を廻るものに名を得しは。近比。松屋のおまつ。かなやのおつま。中あふみやの平三などは。何茂の御ぞんじ。又穴さがしへんてこ論などに。傾城は。中〳〵風上にもきらふ物のやうにあれど。少し心得違ひならんか。大門より内を極樂といふはつまらずと。云しもつまらず。人〳〵女郎を買ッて。もてたといへど。つとめと云字に氣がつかぬかとの。理くつもすめぬ。勤といふ字に氣がつけば。誰か樓中へあゆみをはこばんや。此里へ入ほどならば。面白く遊びて。友達へ咄にも。ふられたといふよりもてたといふが聞へもよし。いかほど惚た客なればとて。初會から實もあかされまじ。先。かけてくるめて置て。其上來る時は。うそから誠も出るぞかし。男にほれたのか。金の有と取られたのか。

いづれにもかけらるゝのは客の手がら也。此かみわけなく。めつたにわるい〳〵といふ物しり達は。へんくつのひつくり返しにて。屈へんとや申さんか。戀せずは。人は心の。なからまじ。物の情も。これよりぞしる。此うまみは有がたからずや。聖經賢傳をせんじてあひても。板を擔ふて片〳〵ばかり見ての筆勢ならん。傾情の身の上とても。金をためるのは其意に叶はず。向ふの人や堀のむすこに吸取らるゝをそしつても是もかづ三十余の女郎なれば。いくらも有そふな事。殊更客と色とのへだてあれば。ほれた客より。なま惚な色の客の方がおもしろくたのしみなるべし。きざうと笑ひなんしても。よふありんすと云のは。傾城の情なるまじ。さりながら何やの何がしといふおいらんなどが。露光命とほりしは。あまりあさはかなしかた。すべて歌舞妓の類などゝ狂ふは。さりとは此里の女郎に似合ず。おか賣女かおどり子めきていやし。心倦までおろかにひがみつよく。無筆無げいにして。みさほといふはつゆほどもなく。ちよ〳〵らを常とし。耻をしらず。賢愚貴賤をわきまへず。と云人もあれど。そふ云ふ口が辨へのなきなり。爰に來ては。高下へだてず興をもよふす里ならずや。常の禮儀がまじり。見さかいあらば。さつばりはじまらず。戯氣が太々を打やうに。たいそうに取あつかはれるで持た世界。あまたの中にはみさほも實も有るぞかし。すべてみさほがあつてつまる物か。三百六十日つとめの身。色男は茶づけ食。耻をおもつて一日も女郎の奉公はならず。一頭朱唇萬客嘗。または誰かはけふの夫ならんと語てあれば。うき川竹のふし〳〵ほどつらき事はあるまじ。無筆無げいと笑ふとも。唐机にて文を書もあり。牡丹を一輪生るくらいは。ずいぶん知ッてゐる事也。わづかのあたひを費て。はした女郎狂ひのやからは。おしなべて文盲のやうに覺るもさぞあらんかし。吉原の外にゐていやしく勤せし女など。奴と成て爰へ入しには。ひがみのつよきもあらんか。おろかといふは里

の習ひ。中比巴屋のかほる。金魚を持遊にこね廻し。ちつと休せんと盆へならべしも。遊女の心には叶ひしか。彼奴となりて入込し賣女と。此里育の引込禿と同じやうに思ふは誤り。箕輪の庵にも。源氏いせ物語やうの草紙をもよませ。又は山彦生田流も。其家〳〵の風にて仕込む事にぞ。諸流数品なれば。委く述るにいとまあらず。遊女と成ては。裂肉砕身の謀にて。人をたぶらかしおかしくないにも笑ひかなしくないにも涙そゝぐは。奉行大切世渡りに精を出すのなり。傾城を古狸野狐とおもふは。さりとは此方のおろかなる事。其心からは女郎に化さるゝも尤なすじ歟。ぬしがしくじりなんしたら。かくまつて置いしやうとは。伏義神農以來のせりふ付。其客がのめつて死ふともかまはぬといふもふづまり。此を構つて手出ししよふなら。どんな時行ぬ女郎でも。公界十年の間なれば。二十人や三十人は有べし。殊更扇婦ほどにも時行ならば。いくら有ふもかぎりしられず。客に實なければ女郎に實なし。客に實あれば女郎に實あり。さりながら女郎買の功者斗はさのみ高名にもならず益なし。傾城に實を入る程我家業に實を入て勤たらば。親父の澁ひ顔もあま干にならふといへど。こいらもやつぱり久しいもの。そふいふ形氣ばかりあつてみな。さつぱりわからぬの始りさ。お先まつくらに行のもあれば。通うに買のもわかり。そふ行たがる人が有から。じつとしてゐるのもわかる。沚も女郎を買ならば。とのといわれて遊ぶべ（が）よしさ。といふて八を九に置て通ふがほんのわからぬの。とゞまる所をしつてとゞまるをつうとも粹とも通りものともいふべし。今つうといふはなまはんじやくをいふ。まづやぼの仕うち品よく。すいのしかた是に對す。當世の通。中にたとへ。其風もつぱらいきをこのむ。小そで二ッ紋。色黑とひにして。帯は菊壽。せみの羽ぞうり。きせるしんしやうよりは銀目おく。古渡さらさの大多葉粉入。鼻紙袋の金物ふちかしらのごとし。通なる物なきかともとむれ

ば此品を出す。道具なければいきをつくす事あたはず。又言葉有。キマリ。ブチコロシタ。ウツ。ク。カク。テン。スジ。カブツタと一ツとして風雅らしきはなし。本だあたまのぎん出しは。正燈寺の西日にかゞやき。傘の蛇の目は。すしやのかんばんかと見まがひゐもんをなをす事茶をひく女郎にひとし。もてたといへば新造にかぎり。すきんせんをば大盡と心得。けいせいの身のうへをくるしめて遊ぶを。みづから大通ときわめ。無口者。內氣者のたぐひを。不通と名付て。足下に見くだせども。やぼふつうといはるゝ人は目出たく。すいにはなりにくし。今時の大通は。あんずるより成がやすし。まつすぐな花の中の町を。人にとく事やすくおのれ行ふ事かたし。此道に師なく。非をうつものなし。人を笑つて。われを笑はるゝをしらず。どふ理屈を云て見ても。ハテそれ〳〵に一ツづゝ能事があればこそ。色里のにぎやか。所詮數十年たつても。此論は。わかるまい。何事も紙づふゐ。お茶でもあがれと爾云　（以上、噺之綸有多跋。五丁分。）〔此跋、半丁十行。一行三十二字位詰也。〕

○黄表紙体の謎的狂歌の本

表表紙缺、裏表紙は、黄表紙と同樣の黄、同じ紙質。本文用紙も、全く黄表紙と同紙質の粗惡なもの。外題は、表表紙缺のため不明、柱には、「狂歌」と二字がある。丁數は、第一丁より五丁まで。三册物か二册ものか、これのみの一册物かも不明。作者名畫者名一切なし。序もなし。每丁、半丁分を二ツに竪に仕切り、その右と左に、下に繪があつて、上に、所謂自分が謎的狂歌と名づけたものがある。下の繪は、大抵この謎的狂歌の下の句に交渉を持つてゐる。体裁、凡て安永天明頃と思はれる。畫は、春章か、又は歡鶯の若描き。上の詞は、上の句は、極の暗示的のワイで、それを平凡に落してゐる。例は、「こし元がそれでもわたしやこわいとはゝふなり、そふに見へるいなづま」などは、稀な穩當である。即ち全五丁で、表裏にこの狂歌四、計二十である。ヘンな本である。

洒落本絶版に就て

洒落本の絶版に就ての疑問である。幕府は、寛政九年頃に、當時の四十二種斗り並に從來の絶版、以後の禁止を斷行嚴命したといふが、それが直ちに裏切られるのは、翌十年以後の末期洒落本の盛行である。三馬・一九・谷峨などは凡て此期以後の活動に屬する。此の夥しい出版、新作の頻出は、何を意味してゐるか。當然上司の監督の寛、又は法令の弛廢を意味してゐると思ふ。殊に、谷峨作の如きは、當り作多かつたせゐか、その三部作の二筋道・廓の癖・宵の程などは、再刻否三刻(?)まで、明治以前に行はれてゐる。殊に、人情本にそのまゝ改題補修せられてもゐる。(人情本としての以外、洒落本としてもまた再々版、發販せられたのである。)谷峨のみではない、三馬の「辰巳婦言」の如きも、今日現存せる本の体裁よりいへば、再摺再々摺を企てゝゐる。これらは、全部秘密の行跡であつたらうか。殊に此の再版は、文化頃に多いかと思はれる。寛政九年を距つる近き此の年代に於て、此の現象は、一方新版頻出より見て當然とは思へるが、寛政三年、同九年の上司の處置から見て、思へば滑稽である。(が、享和頃、二三の物に絶版を命じてゐるといふが、然らば他は何とこれを見たか。又は、他の數十種の存在を知らなかつたのか。現に、當時一九などは、宛字ではあるが、序文などに左禮本というてゐる。殊にをかしいのは、所謂享和の絶版本などより醋さを一九作などに見受ける。)或は、此の文化頃の、前代の名作(或は群衆に喝采せられた作)の再摺再販は、當時、まだ人情本の形式整はず、洒落本の新作家漸く凪び、その間の楔として、當然の書肆の思ひ付であつたのでもあらうか。

殊に、をかしく思ふのは、寛政九年頃の古今の洒落本類板木沒收、絶版斷行といふのが、これがまた實施せられたか否か、怪しいものである。其の證據をいはう。それは、寛政三年以前の京傳作の洒落本の再摺、――それがその現存をり〳〵見受けるからである。現に同三年に絶版を命ぜられ、作者は体刑まで受けた三册(仕懸文庫と絹篩と錦の裏)のたしかに再摺と思はるゝものもある。この再版は、いつ行つたものか。三年の絶版が事實に於て實現せられてゐず、隱匿せられてゐた版木を持ち出して、ほとぼりの冷めた頃(同五年

以後に）摺つたか、又は新しく板を發したか。今、此初版本と再摺と思はるゝものとの比較をしてゐないから何ともいへないが、本を舊版その儘使用したものが多いかと思はれる。無論、寛政三年以前の他の作者のものにても、再摺がその以後にある。「遊僊窟烟の花」など然りである。（尙、此の例の確實なものとしては、寛政二年頃の「面美多通身」と、山旭亭と著者名儀だけを彫りかへ、外題も「金のわら路」とした小本一冊も、擧げられる。これは、全く序文本文とも同一判木である。即ち此の山旭亭本は、彼の年代から見て寛政末である。）

誠に、當時の幕府の態度は、怪しいものだ。寛政九年頃に斷然絶版を命じたといふが、その以後の板行に係る「婦足編」（成三樓著）は、筆禍に觸れたといふに拘らず、今日、小本、或はそれを中本に刷り直したものや、又は、「雪の梅」と改題した文化本や樣々ある。此の通りである。（尙、盛行した享和期本例へば二ッ蒲團の如きも、文化に改題再版してゐる（此例僅にも多い。））尙、寛政三年以前の例では、自分は、まだ京傳の「吉原楊枝」などを知つてゐる。此本元來は、天明八年の版であるが、現に自分所藏の本は、慥かに再摺である。これなどの再摺は、いつに起つたか。或は、その天明當時に、初版賣出し後間もなくの增刷とも思へるが、（事實、この初版當時の增刷で、現存してゐるものも多からうが）自家本の如きは、どうも寛政三年以後、文化頃に至つての隆々たる京傳の聲名に顧みての、舊版增刷としか思はれないものである。

或は、寛政三年の体刑處分は、あるにはあつたが絶版は行はれず、寛政五年頃から九年に至る間に於ける、當時一年に四十二種の頻出と同時に、前代のものも爭つて再版にかけたのだともいへるが、（これで寛政三年以前の本の、再版本現存の理由は說明出來るもの丶、）然らば、以後の斷然禁止絶版の舌の根の乾かぬ同十年以後の盛行を何と見るか。殊に「婦足編」などは如何に。が當時と雖も嚴に行はれたものもあるらしい。例へば、同じく筆禍に罹つたといふ「南門鼠」（艶二一の作）などは、成三樓の「婦足編」に比しては稀本で、又再摺も見ない。

最後に、自分の知りたい事は、寛政九年頃の一年に四十二種とは、蓋し何々か。これらは、殆ど現存しないか。尙、所謂年代不詳本には、此の當時のもの多きにをりはしないかといふ事である。が要するに當時の上司、頗る不得要領の取締を講じた事は、以上を以ても知られると思ふ。

（表紙の二より）歌麿の敬種の他には、我らは寡聞であるが、どうであらう。現に此の合巻物の初代豊國にも、初見参である。

阿染久松色讀販　五冊　天保二年秋

これは、根本である。博文館帝文の「脚本傑作集」の上、但しこれは禁止になつてはゐるが、同刊行菊判の文藝叢書の中の「演劇脚本集」一（饗庭氏校訂）の中には、無事に複刻されてゐる。が、全部挿繪は略いてゐる。殊に、此の本は、その第一巻口繪に、作者南北の像がかづら師と共にあるので有名であるが、そんな事はそれらの飜刻本では煙だも窺へぬ。これは悪飜刻の烈しい例だ。繪を略いたら、せめてその解説だけなりとあつていゝ筈である。さて此本半紙本五冊、天保二辛卯季秋發行と、第五巻の奥附にある。依例江戸の鶴屋と名古屋の松屋と、京都の鉛屋と大坂の河内屋との合梓であるが、事實は河内屋が主であらう。現に、巻末の廣告は、書林文金堂（河内屋）である。此の本に限り、江戸國貞の挿繪及び口繪である。それに、此の根本の珍重すべきは、第五巻の巻末、又は、第一巻の花笠文京の序にも断つてゐる通り、淨書は、大坂の松亭加藤近張といふのがやつてゐるが、凡て南北の手稿臨書だといふ點にある。即ち全くの南北の著といひうるのである。挿繪の一々などこれを略くが、（これは流石に國貞だけあつて、大坂繪とは全く風韻が違ふ。）全く影も形もない（飜刻本に）その第一巻に就てのみいはう。今度原本入手に及んで、これは凝つたものだと、自分は驚いたのである。それは、此の第一巻は全部飜刻本に關係がない。即ち根本本文の、芝居の運びに交渉がない。普通の根本の首巻に二三枚ある口繪の様式のもので、（他に序など）全部を埋めてゐるのである。即ち飜刻本は、此の第一巻を除き、第二巻以後の活字化である。出版屋初め非常に凝つたのは、寧ろ此の第一巻にある。今その体裁を列記すると、初め二丁、在浪華の花笠簪介（文京）の叙、南北を亡師と稱してゐる。次ギ一丁、半四郎の大首似顔と七役扮装の圖。次ギ表は、亡師の言を引いての文京の再記。

次ギが、例の、岩井半四郎七役早替工夫發端とあつて、ヒラキ、右が半四郎、左の上に南北、下にかづら師友九郎、此の御三人の似顔があるのである。（尚、此の第一巻の口繪は、全部濃厚な錦繪摺である。）——未完——（大南北全集第六巻本との比較もアト）

著者より

此頃は、僅かづゝ喰ひしやぶつた原稿が澤山あるのと、それに他から臨時依頼を色々引受けてゐるのと、尚且年内に四種の單行本を進ませつゝあるので、いつも此著の編輯は、大まごつき。下旬は、全くの忙殺。それがため先月などは印刷所の都合もあつたが、此方の送稿もおくれた。どうしても人の依頼の方を先へ片づける事になりますから。此の冊は、今日でこれを書く手順になつたから、今度は一日に發行が出來よう。○此冊で間に合はせようと思うて、實は、新刊朝倉氏の「新修日本小説年表」に、鋭意書入をした。自家の藏本（それも知れた數で、知れた質だが）と首つ引で、その錯誤や脱漏を補正しつゝあるので。まだ半分位ゐより進まない。それで四五日はかゝつた。大体に於て、今度のは、餘程しつかりしてゐる。原本と首引をして、實は半分は、あれかしと願つてゐるものゝ、案外誤りは少い。實際、此丈の偉業を成し遂げられたのは、敬服に餘りある。がなほ、新群書類從の書目の受賣りかと思はれる所があつて、それが誤つてゐる。また脱漏もちよい〳〵ある。凡ては、多分來月には、一先づ一括發表が出來よう。決して新著をさみすのではない。蛇足の幾分を添へるのである。それにちよい〳〵ある誤植も、此機會に訂してゆきたい。（これは、無論著者からも發表せられるであらうが。）

○肝心な事。本著も、——此の貧弱な本著も、愈々此冊で、滿四ヶ年を夙うに經過して、第五十冊目に入つた。人の命でいつたら、定命といふ譯だ。が自分としては、まだこれからだと思ふ。別欄に、第五十冊を迎へた感想を長々書かうかと思つたが、氣が引けたから止める。ともかく此の上とも御愛讀御聲援を頂きたい。

○別項新年繪葉書の計畫、自家架用の惡戯、お氣があつたら申込下さい。圖柄は、お任せ願ふ。（廿三日夜）

定價表		
一冊	貳拾五錢	郵税貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	税共
十二冊分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割増の事
○照會と返信料添付の事

大正十五年十月二十九日印刷
大正十五年十一月一日發行（貳拾五錢）

禁轉載

名古屋市東區東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區東町一五七地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

で組置きの儘、五月六月に出ず、七月八月は共に特輯で、別に依頼の際物を書き送つた譯。七月頃、原稿（此の本誌發表の分）を取りよせ、此の續篇を既に本誌で發表した關係もあるから、「君の方で當分使はなければ、此方で使用するから」と編輯の今村君に云うた所、九月中に御返事するから、待つて下さいとの返事。で、忙しい所を遊んだ原稿を其儘十月まで待つてゐた、返事は來なかつた。到頭組置を放棄したなと思ひきめて、此冊本誌の發表となつたのです。それが本日只今、此の「研究」の再校と共に届いた「新小説」を見ると、其の發刊號で、これを載せてゐるのです。夫が爲重出といつた莫迦な体裁になつたのです。が、これは、先方の怠慢ゾホラのせゐ、が、本誌も再校の今となつては、何とも仕方がない。それが爲不本意作ら此儘としました。御諒察を乞ひます。（[illegible]。三十日午前四時）

寄贈紹介

○明治性的珍聞史 梅原北明編

その上卷である。此の上卷、明治初年から同九年頃までの諸新聞からの性事珍聞を集錄したもの。當時發行に係る芳幾、芳年などの一枚繪新聞(錦繪摺)の類を數十種挿繪さして複寫せられてゐる。維新匆々、風俗にも思想にも、殺伐淫虐であつた、時には、滑稽奇拔でもあつた諸相を、一堂に集め見せてくれる本さして、勿体ない程難有いものである。挿圖銅版、凡て原畫よりの撮影であるから、極めて鮮明、蒐集編纂上の、編者多大の苦心も窺はれて、當時天下一本さ呼びたい。評者は、繙く事屢々するも嘗て倦かないこさを實感上述べておく。(贈呈頒布。菊和裝百三十頁余。東京市牛込區赤城元町三四、文藝資料研究會)

○おしやぶり 古代篇

河野通勢氏の裝幀並に口繪、純板畫で誠に此書さして相應しい氣持のよい出來である。本文は、コロタイプ刷で、「天兒」から「芳幾人形」まで五十六頁。別に盤双六やごろめん、繪双六の數圖、おもちや繪の數種、千代紙まで添へてある。附に、有坂氏自身執筆の古代玩具通解第一、形代さ天兒さから、第十一、千代紙さおもちや繪までの詳解が專門的に附せられてゐる。我々未知の者には、初めての世界ではあるが、好奇的興味さ祖先共通の愛玩味も起される。まして同好者には、唯一の經典さならう。コロタイプ印刷鮮明、一々原寸何分一さ指示せられてゐる。卷頭に、大槻如電氏並にスタール博士の序を添へてゐる。斯界の好著であらう。(有坂與太郎氏編。本文八十八頁、四六二倍。裝幀美。定價五圓。東京市外南品川淺間臺一五一七、有坂氏方郷土玩具普及會)

○川柳參尾志 西原柳雨著

一名川柳戰國史さいふものである。川柳に現れた尾參の事項を類聚、略解を施したもので、挿繪も數枚ある。主に織豊頃に關係の事項で、末には大阪役なごが附せられてゐる。稍内容が挿繪さ共に堅いかさ思はれるが、性質上然るであらう。裝幀も地方出來からいへば、極上出來である。唯難をいへば、挿畫解說の省かれてゐる事である。表紙は、稍御本山の本めくが、見返し等は、恰適の思ひ付である。好著。(名古屋市中區南園町二丁目、圖書刊行會。四六判本文百七十八頁。壹圓五拾錢。)

○紙魚 第一號

當市内から刊行せられた、尾張を中心にした鄕土文藝研究に同好の諸氏から成つたものである。卷頭石田元季氏の、戲作者「木芽田樂」考は、これまで田樂に關していはれたものの中の、唯一まさまつたものであらう。以下諸氏の好文字に富む。次號以下の豫定目次も中々充實有益の模樣である。發展を望む。(定價貳拾五錢。名古屋市東區千種高見、紙魚社)

○江戸時代 創刊號

雜考さ銘うたれてゐる。菅竹浦氏忍頂寺氏なごの執筆がある。竹浦氏の「江戸時代の狂歌師さ其本業」、「天明以前の狂歌書解題」などが好文字、忍頂寺氏の兵庫佐比江の洒落本、「粋好行夢枕」の紹介はまた地方洒落本の一標本さして、必讀の文字である。体裁等またよし。發展を望む。(定價參拾錢。神戸市坂口通り四丁目六、江戸時代社)

○東京新誌 十月號

書物往來の改題であるが、以後益々面白くなつた。好古資料、明治文藝の遺聞、痛快なる出版物評等に富む。耽奇郎氏の奮闘目覺しきものがある。敬服。(五拾錢。東京市本郷區駒込千駄木五十八、其社)

○愚書珍籍集 第四集

元和木版太平記、古今名物類聚、東京開化膝栗毛、唐土名山圖會など。相變らずの奇特。(非賣)

俳諧三尺のむち(川柳寺雀羅氏編)○川柳鯱鉾○以毛圖流○歌舞伎○長唄○北隆館月報○變態資料○明治大正歌書研究(雜賀重良氏の個雜)○早稻田文學○國學院雜誌○墓碑史蹟研究○歌舞伎研究○風俗研究○本道樂(以上、十三種十月號)○國語さ國文學(十一月號)○淸元研究(第十五)○國史の懷古(歷史地理增大號)○東海道に關する圖書(命田氏編。第五集)。

●申込募集

卯年に因んだ **繪葉書** 三枚一組

●申込期限十一月十五日迄

御希望の方は、申込んで下さい。但し自家用かた〳〵の製作ですから全部で二百組限り。實費は、三枚袋入で拾貳錢ほど。數さへあれば、十二月中旬に出來のつもり。圖柄は、繪本版畫等より江戸趣味的のもの選定中。三枚、銅版で二版。三十組以上の御註文には、二割引。御希望尠少なれば中止。(成否、及び發行期日、來册發表。)申込は、ハガキで當發行所へ。お一人で多數組乞御申込。

大正十五年十一月二十九日印刷

大正十五年十一月二十九日印刷
大正十五年十二月一日發行

参編第六冊（通編第五十一冊）

文　本

新修 日本小說年表の書入（一）
內地出版 浮世繪研究書目解題
役者必讀 妙々痴談の摸擬本
會本の「江戸生艶氣樺燒」
洒落本の話

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第六冊
（通編第五十一冊）

洒落本の話

——十一月十六日、名古屋放送局にて

江戸文學の中、軟いのは、小説脚本浄瑠璃の類でありますが、その中でも、一般的である事と、挿繪の艶麗、といつたやうな點が伴つて、此の軟かさをひどくしてゐるのは、無論小説です。が小説というても、色々種類があり、年代により、その差もあります。まづ年代の順でいひますと、假名草子から、浮世草子、此の浮世草子の次に、同時くらゐに、讀本、洒落本、滑稽本が現れ、また一方黑本青本といつた子供向き同然のものがあり、それが黄表紙に變型する明和安永寛政へかけては、殆どは洒落本と黄表紙の世界です。寛政以後、讀本に、京傳、更には大作家の馬琴が現れ、また黄表紙も漸く草双紙風となり、種彦などの作家を生みました。滑稽本も、三馬や一九などが現れて、さうして明治の啓文にまで命脈が續いてゐます。別に、人情本が文政頃から現れました。その最も盛んなのは、天保の爲永春水、初代春水の時代です。が此の人情本は、殆どその系統は、前に述べた洒落本に承けてをります。

さてかうした江戸時代小説の中で、何が一ばん軟いか、所謂誨婬の書として、士君子から排斥せられたか、且つ幕府の禁止絶版が、何に及んでゐるか。それを申しますと、御承知の通り、先には西鶴や八文字舍などの主に大坂本の浮世草子、後には、洒落本と人情本です。此の洒落本人情本、共にその殆どは江戸出版です。元來、江戸文學といひましても、浮世草子までは、殆ど京坂文學、この洒落本あたりになつて、江戸で生れる事になつたのです。即ち洒落本は純粹江戸發生文學の初めであつても、しかも屢々幕府から睨まれたものです

ここでは、人情本に比較して、一般常識には遠い、洒落本の事を述べてみませう。洒落本の概念、即ちその形式、年代、内容、その代表作、幕府の執つた態度などに及びます。

一、洒落本の形式。本の形です小本と中本との二種あります。(例外として、半紙二ッ折の大きさ、即ち半紙本がないではありませんが、これは主に上方本です。)この小本といふのは、半紙を二つに切り、更にそれを二つに折つたものです。中本は、美濃紙大をこの四ッ折の大きさにしたものです。今の單行本の形でいふと、小本は菊判の半截、中本は、四六判に相當します。例外もありますが、この洒落本、その江戸版の中、初期は此の小本が殆んどであり、後期になつて、漸く此の中本が多くなつてゐます。從つて今日珍本として賣買價格も驚く程の高値なのは、此の小本に多いのです。本來は小本であつたものが、再版の時に中本に作り直したのもあります。

枚數は、大抵三十枚から四十枚末期本には、五十枚程のもあります。大抵土器色の茶表紙をつけ、時には青表紙をつけたのや、又は更紗模樣の美しいのもあります。口繪が一枚位ゐ、末期本になるとそれが數枚、また挿繪もあつて三枚位ゐあります。即ちこの繪の多くなつたのは、頓て人情本となる前程です。洒落本を一名菎蒻本といひますが、これは、色からではなく、形から名づけたものです。

洒落本とは、最初いひません。最初は小本と申してをりました。それが洒落本といつの間にかいひ出しました。此の洒落本といふ言葉の使用最初は、從來の定説では天明七年の「田舍芝居」(万象亭―風來山人の弟子で、二代風來の作)からだといひますが、これは誤り。私の一友人が指摘した通り既に、先是、安永七年にありますその年の出版「十八大通百手枕」の叙文に、洒落本とあります。即ちこの頃からでせう。

次が、年代。この年代は、寶曆頃から現はれ、明和安永と榮え、天明は益々盛んで、それが寛政二年になつて、洒落本はじめ一般好色本の嚴禁に遭ひ、翌三年に、山東京傳が、教訓讀本とごまかして三册の小本洒落本を出しましたが、これが間もなく幕府へ分りまして、禁止絶版、作者京傳は、法令を犯した點で五十日の手鎖といつた体刑を受け、版元の蔦重は身

(表紙の三へ)

新修日本小說年表の書入（一）

補遺といふべきではない、自分の著書ではないからである。さりとて、讀んで、見てでもない。仍て、此の書入とする事爾り。今、所藏原本と對校して、その誤り、又は追記を要すべき事項のみを、擧げておく。概して訂正、附加の必要を認めざる程、しか程に今度のは、著者永年の苦心渉獵の結果だけあつて、間然する所が尠ないのである。

○讀本の部

〔八六頁ノ下〕

○浪花烏梅　三　十返舍一九　喜多川月麿畫　同（文化三年）

とあるのは、

○浪花烏梅男達湊の花　六　同　同　文化二年

と書き直す必要がある。浪花烏梅が本外題でもなく、且つ文化二年開版であるからである。此本に就ては、他の機會に於て「一九の初期の讀本」なる題下に述べてみようと思ふ。此本、半紙本六冊に六卷を收めてゐる。

〔九七頁ノ下〕

○頓々表紙　三　曉鐘成畫作　同（文政五年）

は、外題が、頓々拍子の誤。

〔九九頁の上〕、文政十年の中に、

○葦間月浪華一節　三　柳園作　畫家不詳　同（文政十年）

といふ一行を追加の事。此の本、大阪本で左程のものではないが、とにかく脫は脫。

○滑稽本

〔一二〇頁ノ下〕

○粹宇瑠璃　五　天明五年

は、作者名を欠くが、蘆橘庵である。此の蘆橘庵は、其他の上方洒落本のろきつ、呂佶、すべて同一人であらう。

〔一二三頁ノ下〕文化三年の項の中に、

○膝摺木　冊數不詳　（作者）不詳　同（文化三年）

の一行を附加せねばならぬ。此の膝摺本の解題は、本誌の既述にある。參照を乞ふ。

〔一二四頁ノ上〕

○馬士の歌囊　一　同自作畫　同（文化四年）

は、

●右、初版は「旅眼石」、享和二年版。自畫の他に、榮水畫の一九と僕太吉の像あり。と、註記の必要があらう。而して此の本、滑稽本といふよりも、寧ろ狂歌本とすべきではなからうか。野崎氏の「狂歌集目錄」の如くに。

「同頁」ノ上」、文化五年の項に、

○奧九旅人井中水　二　頭陀樂雲水作 畫家不詳　同（文化五年）

の一行、追加の必要がある。此の「井中水」につきても、本誌に、描述した。

〔一二六頁ノ上〕、

○妙伍天連都　一　同（一九）作 自畫　同（文化九年）

といふのは、これを滑稽本に置くは、誤りである。即ち此本、小咄本で、寧ろ噺本に挿入かへの必要がある。特に、自畫とあるは、誤り、恐らく月麿の畫であらうか。

〔一二七頁ノ上〕、文化十年ノ項の中に、

○津島土産　二　石橋庵增井 華溪等畫　文化十一年

を附加の要がある。朝倉氏は、此の本の後篇「滑稽祇園守」に及んで、津島土産後編との角書あれども、初編未見といはれてゐる。此の初編「津島土産」、現に版本として存在してゐる。後編と同じく、名古屋の松屋板。いづれ此等に就ては、增井棠齋續記の下に、近く發表しよう。

〔一二九頁ノ上〕、文政六年の項に、

○滑稽臍磨毛　三　曉天狗百癡　同（文政六年）

の一行を挿入。

〔一三一頁ノ上〕、天保五年の項に、

○妙々戯談　二　南地亭金樂　同

の一行挿入。

〔一三一頁ノ下〕、天保八年の項に、

○造物趣向種　一　鬼拉亭力丸 松川半山畫　同（天保八年）

●右、貳編あり、年代不詳。

の二行を追加してもよからう。（此本凡て上方版）

〔一三三頁ノ上〕、

○茶番頓智論　一　嘉永五年

は、作者名に、翠柳舍棌鷲、東雅園蝶嬉と入るべきであらう。

〔一三三頁ノ下〕、

○滑稽富士詣　一四　假名垣魯文 一猛齋芳虎畫　萬延元年

は、

○滑稽富士詣　一〇　假名垣魯文 一猛齋芳虎畫　万延元年

○右、文久元年に至り完結。

と改むべきであらう。

○洒　落　本

〔一三八頁ノ下〕、安永七年の項に、

○三　幅　對　一　無學堂大辭 畫家不詳　同（安永七年）

の一行を、挿入すべきである。此本、石川氏の複製謄寫本もありて、比較的平凡なるに、此の外題は、洒落本はおろか、滑稽本にも何處にも現れてゐない。朝倉氏千慮の一失と思ふ。今、原本を見ると、序に、明かに安永七年の記入がある。内容は、拙編「洒落本集成」第二卷に讓るが、とにかく初期としては、比較的纒まつた小説体のものである。魚づくしや鳥づくしなどの戲文（手紙に藉りた）ものを載せてゐるが、末には、稽古本風にして、めりやすの全文を掲げるなど、小說体と戲文体とおつに融和した、當時の代表作であらうと思ふ。

〔一四〇頁ノ下〕、

○本草妓要　二　承露庵 陽腎男　同（安永年間版）

は、安永年間とあれど、是れ恐らく誤りならん。原本を見るに、敍に交喜甲戌とあり。交喜は康熙のもじり、甲戌は本物、即ち寶暦四年の阪地版ならんか。

〔一四四頁ノ下〕、

○通　詩　選　一　同　作　同（天明年間版）

は、通志選の誤である。

〔一四五頁ノ下〕、寛政六年の項、

○新織藝子洒戲（さげ）　一　万壽井山人　同（寛政六年）

は、歌妓洒戲であるし、寛政六年といふのは、どうかと思ふ。これは、增井棠齋續記に說くが、文化三年の寅ではなからうか。多分、朝倉氏は序に、寅とある所からの類推であらうが、これが最近、自分も例の名古屋の萬壽井山人（棠齋）である事が明かになつた。さうして、此の本、例の「一向不通替善運」（天明八年）の補足改題本である。恐らく名古屋の例の松屋が、東都から求版のその一にあらう。而して、萬壽井山人の擡頭時代は、文化であらうから、（木の芽田樂よ

り後輩と見て）此の寛政六年は、彼としては、尙早であるといふのである。尙、「增井彙齋續記」（來冊發表）を參照せられたし。尙、此の歌妓洒戯が、前來に二本ある事は、本誌既述の「洒落本改題本の異例」を見られよ。

尙、朝倉氏の註は、

○右、天明八年版「一向不通替善運」を首尾變更補足せしもの也。

と改むる必要があると思ふ。

〔一四七頁の上〕、

○「南門鼠」の註に、「艶示樓と紫色主は同人なり」とは、誤り。艶示樓と、紫色主事鹽屋艶二と別人、艶示樓は、艶次郎のもじりで、京傳の門人、後の鼻山人であることは、自分の既述「艶示樓に就て」及び、洒落本雜記のいふが如くである。

〔一四七頁ノ下〕、

○東海道金の和良路　一　同（山旭亭貳婆行）作　同　（寛政年間版）

○面美多勤身　一　廓通交廓集交　同

は、何とも書かれてないが、これは、面美多通身（多勤身ではなく、多通身である。）が先きである。さうして此の二本は、全く同一である。

自分は此の二本を藏してゐるが、對照すると、多通身は、本文完全であるに拘らず、わら路本は、ところどころ鈌字がある。これは、板元が故ありて削つたのであらうと思ふ。其他は一切同じ、つまり同一板木で、全くの再摺である。唯違ふのは、題名の所と、作者名とを、元板の所に埋木して、山旭亭主人としたり、金のわら路としてゐるだけである。これなどは、山旭亭の自分發議か、又は本屋の强請か、とにかく良心に背いた非行と思ふ。即ち、本文完全なる點から、面美多通身本は、寛政二年末の禁以前、殊に、中州云々等の記事より、朝倉氏嘗ての考證の如く、寛政二年頃の版。それをそのまゝ再摺改題した「金のわら路」は、山旭亭活動の、寛政八九年頃ではなからうかと思ふ。

〔一四八頁ノ上〕、

○取組手鑑

は、寛政年間とあれど、序の丑島の丑の暗示により、寛政五年たる事疑ひない。　――未完

內地出版浮世繪研究書目解題（上）

明治以後の出版物に止めておく。近來、識々に浮世繪の內地研究、趣味の復興も旺んに、從つてこれが著書圖錄も、漸く頻發の最況となつた。今その中の、自家架上の物のみに就て、その書目の列擧と、目星しい物に寸解題並に妄評を加へておきたい。藏本なきものは、別行に一括、其他の部に入れておく。が概して、後至のもの程、（拙著などを此に引くのではないが、）その研究も、その圖錄類も纏りある信頼に足るものが多いと思ふ。が、昔の物であつても、記事はとにかく、挿入の圖版などに於ては今日なほ我らの參考と爲すべきものが多い。書目、大体に於て、細項に分つて、しかも類別の形式を取ることとする。時には年代に據らない。

〔汎　論〕

書名　判　著編者　發行所　年代

●新增補浮世繪類考　四六判　本間光則發行　畏三堂　明治廿二年六月十日

○右、慶應戊辰春、龍田舍秋錦の序あるもの。命題の如く、浮世繪類考の一部也。後來の温知叢書本と大差なし。唯、頭註の二三、役になきものあり。左程信頼の出來るものならねど、此著所收の北齋の肖像は、最近井上和雄氏の發見によれば、これこそ北齋の眞に近きもの、飯島氏の傳に所收のものは、誤りなりといふ。これによりて此本の存在を認むるに足らんか。附錄に、戯作者略傳を添ふ。

●增補浮世繪類考　四六判（温知叢書第四編）　內藤耻叟・小宮山綏介校　博文館　明治廿四年四月廿三日

○右、齋藤月岑の改題本の校訂也。即ち原著笹屋邦教、京傳これに追考を附し、三馬これが補記、英泉更に己が考を加へて續浮世繪類考とす、月岑再び補記を加へて爾いふといふ。此の温知本、間々誤植等ありて、定本と爲すには、足らず。

●无名翁隨筆　菊判　池田義信（英泉）原著（燕石十種第二）　國書刊行會　明治四十年十二月廿五日

○右、一名、續浮世繪類考、即ち温知本類考などと大差なし。唯、英泉自稿の「大和繪師浮世繪の考」などの長篇あり。但し、温知本と對校せば、双方の誤植を發見しえて、それだけの使用途ありといはん乎。

●浮世繪編年史　菊和　關場梅屋編　山下重民校補
東陽堂　明治二十四年十二月廿八日

○右、慶長より明和迄上卷、天明以下下卷の二卷に別たる。年代順、各時代目ぼしき畫家につき、その小傳事蹟の類を、類考其他雜書より拔萃せり。戲作挿繪等に比較的多く觸れたり。但し所要事項の引く難き事夥し。といつて骨折つて引く程には、概して新説なし。が此點、責むるは酷なるべし。

●浮世繪備考　四六判　梅本塵山編
東陽堂　明治三十一年六月十九日

○右、前來の諸書に比べて、小冊なれども、比較的逸名畫家類にまで及べり。殊に明治年代の浮世繪系統に及べるは、多とすべし。其他は、凡て類考の抄本の如きもの也。

●本朝浮世畫人傳　四六判和二冊　關根金四郎
修學堂　明治三十二年五月廿六日

○右、畫人傳としては、比較的整ひたり。但し先人只誠翁の業績也。此本、後に改題一冊本となし、更に近時、「浮世繪百家傳」として、洋裝本を刊せり。此の最新刊本、正直博士の叙を添へたり。なほ數項の增補を加へたり。されど、舊「畫人傳」本の誤植等そのまゝなるは、惜しむべし。

●浮世繪師便覽　横小本和　飯島虛心著
小林文七　明治廿六年九月三十日

○右、其後の新發見、並に誤植等によりて今日に於ては左程のものならず。然れどもなほ群小作家等もその名を擧げたれば、以てなほ參考と爲すに足るべし。イロハ別、各畫家を雅號に引き、その項に年代、生歿年代、系統等を簡に知らしむる物也。

●浮世繪師一覽　四六判横　浮世繪研究會編
渡邊庄三郎　大正十二年六月

○右、恐らくは井上和雄氏の編ならん。同氏未刊の「浮世繪師傳」の略本ともいふべきもの。各畫家生歿年、又は作畫期、得意の題材等を列擧せる小冊子。

●畫集　四六判　編不詳
婦人文庫刊行會　大正四年一月

○右、婦人文庫第拾編として出でたるもの。書集・圖錄の部に入るべきなれども、浮世繪略史約百頁を附すれば、此に載す。間々肉筆に言及せるは、此頃のものとしては、多とすべし。誰人の執筆なるを知らず。序は、市島謙吉氏也。附圖は、肉筆繪本錦繪數十枚。圖としては、平凡なるもの多し。今日より見れば、誤謬多きやうなれども、此本、寧ろ前文（略史）を取るべきか。

●浮世繪の諸派　菊和二冊 帙入　原　榮　著
弘　學　館　大正五年二月廿五日

○右、上下二冊、上卷は岩佐より清信時代まで。下卷は、雪鼎石燕より幕末まで。編纂方法、新樣を負び、各畫家の大家をそれ〲一章を設け、傍流作家は、凡てその年代に一括して示すなど、頗る要を得たり。但し挿繪其他引用記事等に於て、不十分なるもの多し、といはる。此本、三四年前、挿繪の二三を改めて洋裝本として再販せり。

●浮　世　繪　菊半截　美術叢書第八編
同刊行會　大正六年七月十日

○右、藤懸靜也氏の口述によるものといふ。後至同氏の「浮世繪」とは別本、別内容也。此本、寧ろより通俗的なもの也。但し此の泛々たる小冊子に、よく如斯く各方面を纏めえたるは、流石に氏也。

●浮　世　繪　四六判　藤　懸　靜　也著
雄　山　閣　大正十三年五月二十日

○右、好著なれども、尙、挿繪等に精彩を欠くものあり、記事また動もすれば、通俗的也。然れども野口氏の如き鑑賞批判少なく、正確なる事實列擧に力められたるは、まだしも也。肉筆ものにも多く觸れられたるは、多とすべし。

【譯　著】

●日本の浮世繪（西人の見たる）　袖珍　平田禿木編
赤城正藏　大正三年十一月廿八日

○右、アカギ叢書の第九十四編也。上下に分つ。上は、フエノロサ氏「北齋其流派」、下は、フ

トレンジ氏「日本版書小史」。

●日本版書史　四六判　蘇武緑郎譯
向陵社　大正五年七月十六日

○右、美術叢書の第五輯といふ。ザイドリッツ氏「日本版書史」の前半の譯也。挿圖多きはよけれど、原本よりの複寫なれば、しかもその製版不良、不鮮明なるもの多し。譯文の可否は、我らこれを言はず。

●浮世畫版畫志　菊判　落合直成譯補
圖南社　大正八年六月二十五日

○右、ファイッケ氏の名著「チャッツ、オン、ジャパニース、プリンツ」の譯なり。但し、處々譯者の補記あり。且つ挿繪に於ても新挿の好書多し。圖版の製版佳良、凡て參考と爲すに足る。

●增補浮世繪の印象　四六判　尾崎楓水 藤浪水處 譯著
天佑社　大正八年七月十五日

○右、ドーラ・アムスデン女史の「浮世繪の印象」本文の抄譯に、頭註增補を加へたるもの。頭註增補は、予の業也。藤浪氏の此の譯稿ありたれば、これに手を入れたるに過ぎず。これを最上として紹介したるには非ず。本文、殊に處々をかしき錯誤あり。此の譯著本、裝幀極めて不良、今にして思ふ、冷汗三斗の懐あり。舊惡々々。

【個人畫家研究】

●葛飾北齋傳　菊和二册　飯島虛心著
小林文七　明治二十六年九月十二日

○右、上卷は、主にその詳傳。下卷は、主に逸話、著作の解題等也。諸書より引けると、故人知己よりの聞書とによる。一時、北齋研究の最高權威として謳はれたるの書なり。今日猶、逸話、解題等に於て、得る所多し。

●山東京傳　美濃紙本和　宮武外骨著
圖畫刊行會　大正五年十一月二十日

○右、京傳の弟子として、艶示樓、鼻山人（予は、これを同一人と目する也。）等を脫したるはあれど、凡てに於て好著也。殊に京傳の著作目錄等よし。戲作者として、浮世繪師として、狂歌師として、商人として等。中、浮世

繪師としての政演、好參考也。

●寫樂　四六判　仲田勝之助著
アルス　大正十四年十二月八日

○右、アルス美術叢書第八編也。圖版は、多くクルト氏原本に據られたるやうなるは惜しむべしと雖も、寫樂原畫の佚失せる現狀に於ては已むを得ず。此著、新研究其他——製作年代及び彼の墓石發見及び彼の版下繪等の——を挿入、且つ寫樂畫圖版の、列擧し得る限りを集大成し得たるは、最とすべし。

●歌麿北齋廣重論　菊判　野口米次郎著
第一書房　大正十五年二月十五日

○右、既著岩波出版の「六大浮世繪師」と大差なきもの也。その重版に近きもの也。別に、小分したる四六判本あり。

●北齋　四六判　織田一磨著
アルス　大正十五年五月二十日

○右、アルス美術叢書第十五編。北齋の業績を謳へるうち、殊に、彼の版書以外挿繪本につき、記述多きは、異數也。殊に、其挿繪、此種のものゝ中より多く拔かれたり。

●春信清長寫樂論　菊判　野口米次郎著
第一書房　大正十五年六月十八日

×

【特殊研究】

●浮世繪と風景畫　菊判　小島烏水著
前川文榮閣　大正三年八月五日

○右、實は「初代廣重を中心としたる記述なり。但し、浮世繪一般風景畫にも觸れたる記事多し。圖版よし。末尾の廣重初代二代三代作畫表及び初代廣重年表等また好參考。但し作畫に於ては、なほ洩れたるもの二三にして止まらず。縦に廣重を中心としたる風景畫の記述、横に廣重に與へたる長篇の讃美也。なほ好著たるを失はず。

●芝居錦繪集成　菊二倍　山村耕花　町田博三編
精華社　大正八年六月十五日

○右、所收三百圖、解説約五十頁。或は、此著書集圖錄の中に入るべきなれども、解説等權威あるものとして、此の中に措く。圖版師宣

×

【目錄類の其一】

主に、圖版なきものを擧ぐ。

●浮世繪展覽會目錄　四六判和　フエノロサ述

小林文七刊　明治三十一年四月十五日

○右、フエノロサ氏解說（日本文に譯せり）。圖版なし。フエノロサ氏に別に、此種北齋（？）のものありと聞けど、未見。

●東京帝室博物館美術工藝部列品目錄　菊判

帝室博物館　明治四十一年三月十三日

○右、圖書部が、浮世繪也。二〇頁より四八六頁に至る。五六の圖版を添へたり。各書題の他に、寸法を記せるは、參考となすに足る。

●哥麿版畫錦繪幷繪本目錄　美濃紙本和　米々山人編

田中重信　大正六年十二月

○右、京都市にて、謄寫版刷のもの。誤謬あれど、（二代と初代との混同あり。）また多少の參考と做すに足る。圖版なし。

×

【其　他】

●浮世繪師略傳　四六二倍和　宮武外骨編

「此花」附錄

○右、此花全二十二枝に附錄となされしや否やを不知。予が手許に、其中の第八枝と第九枝のものとあり。內容、飯島氏の便覽と相似たれど、艶本類の隱名にも及びたり。京坂書家にも、比較的多く採取せられあるを見る。

●異本日本繪類考　四册　四六和

漆山天童編　圖書刊行會　吉川弘文館

○右は、藝苑叢書第二期本の中として刊行せられたるもの。甞て宮武氏が、「此花」に試みたると同樣、各種繪の標本並に解說を施したるもの、浮世繪に關するもの尤も多し。甞て飯島氏に實物を貼付せる此と同名のもの十六冊ありき、これとは別物なり。此の漆山氏の編、未完のまゝ也。

（次回、圖版を有する目錄類。畫集。複製其他に移る。）

役者必讀 妙々痴談の摸擬本

周滑平の妙々奇談に眞似た花笠文京事三芝居士の「役者必讀妙々痴談」（中本二冊。天保四年。）のある事は、人の知る所であるが、今、その更に摸擬本、（妙々痴談の後篇、「役者妙々後の正夢」の類ではない。）一種を發見した。此本、新修日本小說年表にもこれを缺くもの。中本「妙々戯談」（二冊ものならん）天保五年刊と名づくるもの、所見本は、その下之卷である。

他の「妙々痴談」類とは、異つて、此本、小篇の集りではない。中村芝翫（四世歌右衛門）が上阪以前〔彼の名殘上阪は、天保四年十一月である。即ちその翌年の出版である。〕江戸は芝翫宅に於ける贔屓連の噂に始まる。（此の下卷は、）最初は奥女中ども。〔捻梅〕がいふ、人の噂に聞ましたが、今度上方へ登つて中村歌右衛門に成との事だが、いよいよ左様なら、芝翫の名まへは。また誰に讓るのでムり升へ〔呂中〕大方今の鶴介を芝翫に仕升であらふ〔梅〕今の鶴さんとは、上方の役者かへ〔呂〕（これは男衆の一人）申せば長ひ御話じやが云々。以下元祖歌右衛門からの家筋のはなしに移るのである。そこへどや〳〵來たのが、四五輩の勇連中。贔屓あげくの口爭ひ、喧嘩となる所へ、當の芝翫が出て仲裁。

「シャン〳〵と打半へ本町邊の娘連、御暇乞の餞別両國橋の夜店連、淺草の楊枝連。糀町の御屋敷連、四ツ谷邊の馬奴連。目黑の粟餅組、高繩の水茶屋連芝の肴河岸。酒屋のゐ連深川の櫓下。本所の立川組日本橋京橋新橋八百八丁はいふもさら。屋敷町町方寺社山伏江戸四里四方老若男女餞別の品々大のぼり引幕水引纒數積かされ、門先は市のごとくおし合へし合上を下へと混雜せしかば芝くわんも肝を潰しいかに御ひゐきなればとて云々。屋根へ上ッて御請申がよかろふ。〔芝〕〔梅〕（二人の勇のもの）足場なら私が仕やせふと。裏口にて太き丸太の有しを四五本取來り流石商ばい柄にて何の苦もなく七八人の居所を屋根の上へ調へ階子をかけて芝翫を初め皆々上り大勢の衆へ向ひ。扨高ふはムりますれど云々。

で、一人づゝお茶の代りに、家根から茶瓶の茶をふりかけられて、御馳走でごせへす……といふ

のも東都の氣質、若い者の呂が、番鍰を渡して順々に受納いたしますといつたもの。

第一番は本町邊の娘連中糸屋の娘を初として進物は祇園守染付錦手の茶碗百人前イ菱形の膳を百膳添ていづれも箱入麁末ながら芝翫さまへと狂歌を付たり。娘連中へ色めづる芝翫茶わんの送りものひよつとわれたがあらばおゆるし。へもし御氣に入らずとごふぞめしあがれむすめれんからおくるすえ膳。（中略）二番は酒店め連の余丹坊先生。茄たこのやうな顔をして諸肌ぬぎに坊主あたまへ捻はちまき、ヤア〳〵成駒屋の芝翫親方油斷めさるな。東海道木曾街道甲州口は八王子。仙臺筋は千住の宿其ほか下總上總の舟場。出口〳〵に網を張置、上方抔さは思ひもよらぬ三里と向ふへやらぬ工風のわなに掛り跡へも先へもゆかれぬ難儀を切拔るべき謀斗いかに〳〵と詰寄る言葉の下より大音揚立川組に名を得たる芝樂（例の初代、芝樂亭、焉馬である。）〳〵またたまへ夫にこそ手段あり。親方に百日髭を着せ、天鵞絨の切割に小手すれ當、鎖帷子五枚重の草鞋にて跳の具足。

云々で、雲介なんどの網を打破つて通れ、これがいかねへけりや焉馬流の仕込がいろ〳〵有ます、との事である。とにかくひいき連、肝膽を盡して、江戸脱出の法を案ずるのである。あまりの騒ぎに芝翫、座敷へ歸り、旅立の支度、先刻よりの長談で空腹、皆様へ上る用意……「と思へば、門弟芝藏迎にきたり親方今朝はちと早ふ樂屋入致し升ふかとゆり起されし一臥の夢物語トサ」といふので、尾つてゐる。

此下卷廿丁、第廿丁の裏は、奥附、作者南地亭金樂戯編、天保五甲午春新調發兌、書林河内屋太助、同直助、秋田屋源兵衞、丁子屋平兵衞とある。即ち大坂本である。即ち以上、最近在府當時の人氣を描いた彼の聲價を誇張したものである。（然し、江戸に於ての餞別の多大、收納七百両程なりしとは、普通にいはれてもゐる。）挿繪、北英あたりの畫か。鏡山お初仕合。芝翫の幟。五右衞門扮装の芝翫花道の体、見物の群集、うしろに蹲ふ木の男。以上の三圖である。芝翫の全盛、それを謳歌した作物は、樣々あるが、これもその一。しかも妙々痴談に名を藉り、その翌年それにつられての芝翫膝下の阪地出版である事が、一寸面白い。それが爲の紹介。——十一月二十五日夜

會本の「江戸生艶氣樺燒」

天明五年の「江戸生艶氣樺燒」が、京傳の出世作であり、一度黄表紙界の流行兒となり、且つ主人公の艶次郎が、一般名詞とまでなつた事は、謂はでもの事である。

由來、當時、その時々の名作物（正系の上の）と相伍して、必ずヱ本の類が生れた。現に、讀本(よみほん)の上では、馬琴の八犬傳、これに摸擬したものは、讀本型に、また草双紙型にある。滑稽本の名作、一九の「東海道中膝栗毛」に擬したものには、その代表作として「膝磨毛」がある。合卷草雙紙物の名作、種彥の「田舍源氏」、これは、永い間の流行を爲しただけ、大本に、半紙本に、人情本型の中本に、殆ど枚擧に遑ない程ある。人情本としては、春水の「梅曆」を摸擬した、「梅好(うめごのみ)」云々の國貞畫の半紙本などがある。見渡した所、その時々の、正系の上の評判作には、大抵これに伴つたヱ本の存在があつた。〔淨瑠璃物の摸擬作、又はそれより意匠を藉りた類は、これまた無數。よりて略く。忠臣藏ものの無數など、此の例である。其他その世話物に現れた男女は、大抵此の材料である。〕轉じて、洒落本及び黄表紙を、その名作物をうけたヱ本があゝや。これは、自分のかね〴〵存否を心がけてゐた事であつた。洒落本でも、「當世虎之卷」の金魚作や、末期本流行の最たる「傾城買二筋道」の谷峨作の連作や、これらは、ありさうに思へるが、まだ觸目し能はぬ。矢張り人情本に書き直された程度のものに過ぎなかつたかも知れない。黄表紙の名作物はどうであらう。其の時々の當り作は、數々あるにはあつたが、さて何がといふと見當らぬ。純然たる黄表紙型に出來上つたものは、ある。が、黄表紙の流行作のその正本を藉りて、その延長といつたものには、未見であつたのである。元來、此の黄表紙は、他

の讀本や滑稽本や合卷物の名作と違つて、比較的生命が短かつたのであるし、且つ高々三卷又は二卷（十五丁又は十丁）の短篇でもあつたから、それのみ獨立して、當時に限られた諷刺、漫罵、寫生を擅にしてゐるのであつて、即ち民衆的となるのには、まだ徑庭があつた。一般民心と當時文學の接觸といふ點から考へても、黃表紙の世界は、まだ非民衆的で、比較的高尙で、大通向きであつたやうに思ふ。從つてより通俗的な、普及性を持つたヱ本類に、それの一つだに現れない（？）は、尤もであるやうにも思へた。が、當時、比較的永く、（田舍源氏や八犬傳の、普及性と時間性とには、似もつかぬが。）その名を傳へられてゐた、京傳の艶次郎、（例の「江戸生艶氣樺燒」）、又はその類の中で、何か一つぐらゐは有りさうに思つたのである。そのかね〴〵の探求が、漸く最近、滿足さるゝに至つた。即ち、やはり黃表紙の名作をそのまゝに傳へた（配材の人物名と、結末は、多少の差があるが。）ものが、あるにはあつたのである。それが、「　艶次郎　全」の一冊であるのである。

成程、黃表紙から、その名作をそのまゝに傳へるにしては、矢張り此の「樺燒」であらうことも、他の一般黃表紙の性質と、此の「樺燒」の内容と、及びヱ本の内容と普及性とに考へて來れば、大凡に肯づけるのである。まだ「艶氣樺燒」であるとより、思はれないのである。而も、他の正系の、讀本合卷などに名を材を藉りた屈指に遑のない程の夥多出版のものとは違つて、これは、恐らく此の「艶次郎」だけに止まつて、そのまた摸擬作又は類似作は、遂に出なかつたらう、恐らくこれ一本であらうと思はれる所のものである。

以下、此の「艶次郎」の内容の一般と、母体の黃表紙「江戸生艶氣樺燒」との比較に及ばう。

×

一冊、中本と半紙本との中間位ゐの大きさ。圖九丁、文は追丁にて十八丁まで。別に、文のマシ四丁。計二十二丁。（文のみは十三丁。）初めに、福來□□壽長實根元の第一丁表があり、其の裏より筋を追うた圖。書き出し、「申さずとも御ぞんしのゑん二郎、よいたふれたるをみすまして、しのぶ喜のすけそらことも、まちかねやま云々。ゑん二郎何かわからぬねごとの大ごへ云々。なんだおれがはなをねこがなめる、なめられるはおれがかぶだ。」と例の己惚。喜の助の人物を配してゐる所は、本筋どほりである。但し本筋の「輪留井思庵といふ太鼓醫者あり」といふのは、たうとうこれには現れて來ぬ。圖は、左、寢言をいふ艶次郎。右は、喜の助とそらごと。この妓名のそら言も、本筋とは異つてゐる。本筋では、彼の敵妓は、浮名といふのである。さて、此の艶次郎の留守宅に、腰元のおびわといふのがある。そのおびわを張り込んでゐるのに、手代の助兵へと、丁稚上りのやさの助とがある。第二の圖は、やさの助とおびわ。（正系の「樺燒」に、此の三者の存在なし。）第三は、助べいとおびわ。第四は、艶次郎、廓からの歸り。「ゑん二郎は、うちへかへればこし元おびわ、モシ若だんなさん、けさはきついおつかれざふでもおたのしみだ、かくべつだからとひんとやきかけられ、云々」、「……かこつておくはよしか、助べいはかたいもんだから、あれをつけておいて、きのついたやつだからやさのすけも、一しよにつけておこう云々」。艶次郎を、例の正面の京傳鼻に描いてゐる。第五は、げいしやのおまじと艶次郎。「くどきおふせたところはげいしやもまたありがたへ。これおまじぼう、くろ八丈にすがぬいのすそもやふ、小もんちりのあいぎまつば、かべちよろのおび、ふじいろのしごき、べつかうのくしかうがいも、すぐにそつちへもつていくはづだ、まだなんぞほしくは、すぐいゝつけてやりや、云々。ひとりではなしひとりでこたへのろけのめせば、おまじもにつこり云々。ゑんさんこのぢうの事

は、じつかへ、だましなさるとつゞくによ云々。」艶次郎の横顔尤も巧みである。第六、後家に持てゝゐる艶次郎である。「きんじよのごけを金づくめでくどきおとし、見はらしのよいちや屋ででやい云々。」第七は、手代の娘との懇ろの件。「家もち手代のむすめがやどをり、だんなへのごきげんうかゞひ、ちよつときたやつが、ことし十九のうつくしもの、云々、だんなのいかう、云々。しばいでもふねでもなんでものぞみしだいにふるまおう云々。」といふのである。こゝで、艶は、すつかり嬉しがつてゐる事、甚だ不相應である。第八は、花嫁と艶次郎。「きりやうならすがたならいゝぶんなしの上しろもの、金と玉とのごとくにて、云々」。第九（半丁分）は、以後いよ〳〵和氣靄々の体。「……ほかへめもうつらず、うちにばかりいるほどに、つかつてさへふへるきん〴〵、のびるばかりになりければおふくのかねぐらへをしこみ〳〵、いつぱいになるこそ、まとに〳〵めでたけれ」といふので、女房は懐姫の体といふのである。本筋「艶氣樺燒」の、傾城浮名と浮名を流し、その果浮名の不肖した心から夫婦になり、「元より身代に不足もなければ、いよ〳〵繁昌に榮へけり」とは、結びは似てゐるが、經過に於ては、雲泥の差である。「艶氣樺燒」では、事毎に失敗し、己惚氣の限り、虛榮の爲め狂言の數々を工夫してゐるが、此の「艶次郎」では、それ程には及ばない。多少、己惚の例の特徴を作者、裏から示してはゐるが、然し概して彼の欲望は成就せられてゐる。例の贋心中の道行なども、しないうちに無事に局が運ばれてゐる。こゝらが甚しい相違である。が、此の「艶次郎」が、大いに順境に在るのは、ヱ本の性質上、然るべくもあらう。事毎に失敗では、ヱ本の体を爲さぬからである。即ち艶次郎は、黄表紙の正体では、事毎に虐待を受けてゐるが、此のヱ本の怪体に於て、やつと救はれてゐるのである。

文は、明た口へもちかける云々。娘が一度の情は諸願成就の宿下り。及び補遺として、馬鹿の付た藥で利口に廻る樂しみの三篇である。說話上、馬鹿の付た藥で云々は、最初に措かるべきである。

馬鹿の付た藥で云々は、讀んで此の外題の如く、艶次郎とそら琴と喜之助の三角關係である。「兼て女道の事は手の物とうぬぼれの艶次郎は、好色　蘭圖會とある妙藥方のだれん香（こんな香は、假作の上の名であらう。）を火入にたき、又　　　妙方…、　　…っあんまり酒をのみすごし、大よたんぼう……。明部屋に待つてゐる喜の助にあいたさ小用に行顔でぬかりんと出かければ、かねて相圖の云々。明いた口へもちかける云々は、艶二郎が妾宅の体である。「淫婦は男子を蕩かすのうつわにてどう〳〵おびわは、艶二郎をだましごみ、貳三町へだてたる新道にかうしつくりの圍もの、ば、アと調子のやさの助を付をき、ゑん二郎が里通ひの折からは留守ばんとして、手代の助兵衞、どれも女の好くやさをとこ猫にかつをのばんあぶなきものなり、ゑん二郎は年始の禮からすぐに大たらふくにて、妾宅へといふのである。「娘が一度の情は諸願成就の宿下り」といふのは、「一番手代のひぞうむすめお糸といふて、今年十九のぼつとり者、今日はじめの宿下り、丹那へきげんうかゞひに來りしが、そのうつくしき見るより、ゑん二郎はれいのはやぼれぢびやうさしおこり、なんでも一ッしめこのうさぎと、むねにおさめて、はじめてのやどおりだから、芝居はおれがふるまおふから、さかい町を三げんつゞき、そのあくる日はふきや町でも、こびき町でも、のぞみしだいにふるまわう。幸ひ呉服ものがきている、かべちよろの帶地、むらさきちりめんのすそもよふ、これはいんきよからしんせると、手あたりしだいにやりければ、娘は何の氣もつかず、有難ふござりますと、うれしさ顔にあらわ

れ、いそ〳〵すれば・・。「てめへをもらつておれが御しんぞ様にするから、そふおもやとは、目出度ゑにしなりけり」といふのである。以上で、圖と說話とをあらまし終つたのであるが、性質が性質だからとはいへ、とにかく或る一人物を中心にして、其の筋が續くといふのは、此時代の此の種として は、珍らしい方であると思ふ。

表紙、靑表紙、題簽は、中央に、五字、下に全とある。畫作、無論政演（京傳の畫名）であると思ふ。年代も、本筋の「艶氣樺燒」の出た天明五年、間もなく、その好況につれての作と見るべきであらう。尙、此の本、きん〳〵と云々、例の金々先生の金々を、或る氣分の形容にも使用してゐる事を述べておく。——十一月二十三日夜

○豐章（初代歌麿の前名）落款の役者繪

最近、當地平出文庫賣立下見當日、張込帖の中より發見したものである。細繪判余板であつて、三枚であるが、恐らく此は、三枚續の物であらうか。圖、一は、重忠おくがた岩井粂三郎、（行燈を手にして立つ。枝折戶の前、上に陣幕張られ、廊下に立つ姿。）二は、曾我五郎時宗市川團十郎、（碁盤を差し上げてゐる圖。）三は、女形、役者名ナシ。（鶴の紋の素袍を著て、白拍子姿。）以上凡て、豐章畫。紅、草などの淡彩、全体に粗惡な感じ也。此と同型、同時代の出版、或は同時の出版と思はるゝものに、尙他に、豐丸（壽亭。寬政末、洒落本に挿繪す。普通版畫またあり。然るに、彼の此の細繪を、豐章と同時とすれば、その製作期は餘程古くから也。）、國長の落款あるものも見かけた。

（表紙の二より）

上半減さいつた處分を受けました。それが爲に、洒落本は、一頓挫したやうですが、讀者の要求が猶盛んでありまして、間もなく寛政五年からボツ〱出始め、寛政九年頃には、一年に四十種も出る景況でしたので、流石の役人も氣がついて、一時に檢擧の網を擴げたところ、その作者には身分のある武士連が大分あつたので、全部版元の作さいふ事にして、絶版禁止を申付け、板木も取り上げて燒いたさあります。同時に、これ迄の洒落本も全部今度こそ實際に絶版を命じ、板木も燒却したさいひますが、事實は、どうですか。これで一時、洒落本は、熄んだかさ思ひの外、翌寛政十年頃から、再び三馬や一九、或は新進大家の梅暮里谷峨などの作が現れはじめ、寛政末から享和四年頃まで、昔に勝る大量出版を爲してをります。さうして可笑しい事は、此の間、一九などは、盛んに洒落本を書いてをりますが、一九の物などは、却つて前代の寛政三年の京傳の禁止本やそれ以前のものなどに比較して、ずつさ禁止の價値のあるものなのです。勿論、この享和頃には、幕府に告められて、絶版禁に遭つたものが、二三ありますが、大量の生産であり、且つひどい事に於て劣らぬ一九の作などは、一つも禁になつてゐません。以後、文化文政頃まで、まだ此の洒落本は現れてゐます。が實勢力は、享和が終りです。

内容に就ていひますさ、様々あります。一、遊蕩兒――それも半可通さ初心の者さを同行させた：一の花街に於ける遊蕩の實際描寫。即ち遊蕩小說。二、遊女買心得を說いたもの、即ち遊蕩兒の教科書で、色んな手や場合を、項目を分けて說いたもの。三、遊里に關係なく、當時一般風俗、又は流行事物を、會話ヌキで列擧したもの。即ち風俗に關するもの。此の三種が目星しい區分です。中、初期中期――此の中期さは、山東京傳の寛政三年の体刑の年までをいひます――は、純小說体のものよりも、色道傳授、教科書、又は、何處々々の遊里を主題にして、其の雰圍氣を出さうさしたものが多きにあります。即ち敍情味が乏しく、敍事が多いのです。それが、京傳のものになつて、稍、ふつくらして、內面描寫らしいものが現れました。後期、（寛政五年以後）は、末になればなる程、本當の小說らしくなつて、主人公らしいものが決り、それさ女性さの情痴の展開、情事に關する描寫も隨分突込んだものになつてをります。が、形式は、何處迄も、中篇小說体です。それが、谷峨さいふ男などになつて、初篇二篇三篇さ長篇小說の形になり、後の人情本の形式を十分に具備してゐます。が大部分は、始めなく終りなく、たゞある場所を中心にして、主人公の男や其他の動作が寫實されてゐるものです。

尙、以上の分類の中でも、これ以上細別は出來ます。例へば、遊里本が、其場所によつて、吉原本、深川本、品川本、其他の岡場所本さなります。尙、風俗の中でも、商人物や、流行事物本などの區分も出來ます。

次は、主なる作者を述べてみます。

初期――寶曆、明和、安永頃までは、大抵相當の學者又は武士たち、文字の辨へあるものゝ、匿名の作です。勿論道樂出版で、原稿料出版といつたものは少いのです。從つて、作者も多く身元不詳で、變な名前のものが多いのです

（表紙の四へ）

著者より

○表紙の分は、本月十六日以後三日間、名古屋放送局の依賴で放送した第一日の分です。本文に組込む程のものでもなく、で此の虞待さいふ譯。○卯年の綸業書、案外の好況、延期して今日で〆切、都合二百十四組。紙は、越前別漉本鳥子、刷はコロタイプを奢る事さした。三枚一組袋入十五錢さしたが、既御申越には、組數の如何に拘らず十二錢でお頒ちします。御申込濟の方は、組數に十二錢をかけ送料を適宜に添へて御送附下さい。出來は、十二月初旬。○別に、一枚割愛に忍びぬ一圖を、これは木板影刻、手揩、紙に五色奉書貼付臺紙、さして發行した。此分一枚四錢でお頒ちします。（十一月二十五日）

定價表

一冊	貳拾五錢	郵稅貳錢
六冊分	稅共壹圓四拾錢	
十二冊分	同 貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

大正十五年十一月二十九日印刷
大正十五年十二月一日發行〔貳拾五錢〕
[illegible]
名古屋市東區[illegible]町百五十七番地
編輯兼發行者 尾崎久彌
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者 英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社
名古屋市東區[illegible]東町一五七號
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

○お知らせ二件。●最近東京國學院大學にて江戸時代文化研究會さいふのが生れた。來年二月から機關雜誌を刊行するさの事。小生も緣故あつて、贊助しました。御同好の方は、御入會下されたい。詳細は、東京市外下澁谷氷川裏の同大學同會へ御照會ありたし。●最近、東京日比谷、日比谷圖書館にて、種彦月岑などの追悼展覽會が催された。其の出品目錄の殘部僅少あり、御希望者には、郵券二錢にて御頒ちするさの事、別に今夏同主催の江戸風俗年中行事展觀目錄もお添へするさの事。御希望は、同館內、波多野賢一氏宛送料添封にて御依賴の事。

(表紙の三より)此の間で、有名であり分つてゐるのは、道陀樓麻阿といふペンネームの朋誠堂喜三二、或は蓬萊山人歸橋、山手馬鹿人の名の大田蜀山人、万象亭の二代目風來山人、などです。此の間に、有名な田螺金魚といふ男もをります。中期の天明から寛政三年迄では、前代からの諸作家の他に、唐來三和、内田新好、などが分つて居りますが、大なる勢力は、無論山東京傳ですさうして、殆ど文學を營業的にしてゐたのも、此の京傳ぐらゐが初めです。後期の寛政五年以後では振鷺亭、式亭三馬、梅暮里谷峨、十返舍一九、神田あつ丸、鼬屋艶二、成三樓鳳雨、閑耆亭薫、などが、有名で身元の分つた男です。

代表作をいひますと、極初期の澤田東江の著だといふ「異素六帖」田舍老人多田爺の「遊子方言」、夢中山人寝言先生の「辰巳の園」、喜三二の「娼妃地理記」、(この本は、地理の本のやうに拵へたもので、今では珍本です。)田螺金魚の「當世虎之卷」、蓬萊山人の「美地のかきがら」、などです。中期では、蓬萊山人の「富賀川拜見」、志水燕十の「浙都洒美撰」(これは、娼妃地理記の後編で、純小説体ではありません。)、參和の「三教色」、京傳の「息子部屋」、同じく京傳の「總籬」、「古契三娼」、「吉原楊枝」、「傾城買四十八手」及び、寛政三年の絶版本「娼妓絹篩」などです。後期では振鷺亭の「取組手鑑」、三馬の「辰巳婦言」など、谷峨の「傾城買二筋道」など、一九の「野郎玉子」、「吉原談語」、「青樓松の裡」など、鼬屋艶二の「南門鼠(みなと)」、成三樓の「婦足かむろ」などです。さうして、此の三期を通じて、全部洒落本又はこれに入れてよき書目の數は、四百以上に上ります。

次に、少しく、此の洒落本の文學上の價値を述べて、此の話を打切りませう。項目に分けます。

一、今日の小説体の元を爲した事、即ち會話と地の文とが明かに付いた事。浮世草子の末のものに既に此の傾向が現れてゐますが、これを大成したのは、洒落本です。即ち寫實主義の元といふ譯です。

二、當時の花街又は市井の風俗資料に富んでゐる事。これは其の殆どは花街本である以上、尤もです。

三、寫實主義であるから、當時の言語研究上の好資料にもなります。これも當然な効果でせう。

四、原本には一々當時特有の假名遣ひ、宛字、などが澤山あります。これが當時の文法でも調べるものには好資料になります。

他の小説類でもさうでありますが、此の洒落本が、江戸文化の中期否全盛の明和安永天明寛政に跨がつてゐるだけ、一層の効果があるのです。

終りに望んで、この洒落本の古今の値段を申してみませう。この洒落本、中本(大きい型の本)の方が、當時値が高かつたのです。即ち小本で、一册が一匁五分、(三錢五厘)中本で二匁五分、(四錢二厘)貸本屋の見料は、新本が一册二十四文(夜鷹を買ふ値と同じ値です。)舊本で十六文ですそれが大正の相場は、まだ東京震災以前は、平均一册八十錢から三四圓まで。それが今日では勿驚、最低が三圓から五圓、一寸珍らしい又は名作物は、十圓から十五圓中には、二十五圓五十圓といつたものも見受けます。先づ普通平均五圓です。恐ろしい相場になつたものです。(完)

◇卯年に因んだ繪葉書

(甲之部)　三枚一組

右、かれて申込を受けてをりました三枚一組の分です。用紙本鳥ノ子、コロタイプ刷、文字とも二版。袋入。圖柄左の如し。

A、初代廣重畫新法文字圖句惠
その中の一枚、上が月に兎、下が寶船。凡て文字を繪にしたもので、兎は、假名のめ。寶船は、草体の寶。品のよい圖柄。

B、繪本かち〳〵山、より
一齋畫の小本よりである。兎、右に松の根方に腰かけ、狸、左に泥船を作るに忙しい体。愛嬌あるもの。

C、富士裾うかれの蝶衛の上下二册の表紙續繪である。英泉の畫。種彦の作、天保二卯年の新板。娘と若衆と、濃艶、上に卯がゐる。

右、十組分に限り餘分あり。頒布費一組十五錢。(送料別に二錢)御希望は、往復はがきにて御照會の事。

(乙之部)　一枚一組　(一枚ニ付四錢)

「著者より」參照あれ。圖は、兎と狸の舟、上に清元の玉兎の文句あるもの。(此分、御希望御照會あれ。)以上凡て十二月五日出來。

版元　江戸軟派研究發行所

大正十五年十一月二十九日印刷
大正十五年十二月一日發行
江戸軟派研究　第六冊
定價貳拾五錢　送費貳錢

昭和元年十二月二十九日印刷
昭和二年一月一日發行

尾崎久彌著

第七冊
（通編第五十二冊）

本文

に製本せられてゐる。元の板木を其儘に使用したものである事は、一見して肯づける。唯、此の再摺に至つて、所々編次の名を、（即ち數字を）彫り更へてゐるらしい痕跡はある。若し果して、此の「金草鞋」が二十五篇ものであるなれば、家藏再摺本は、一編欠である筈であるが、或る一編（第七編）を除いては、大凡そ帝文本と順序を同じうしてゐるのである。

事は、年表の指示と、「帝文」飜刻本と、家藏再摺本と、この三種であるが、今、先づ其の異同を左に記してみよう。各編に亘りて、初より順次に吟味することにする。

（以下、年は、年表。帝は帝文本、家は家藏本の意とする。）

金　草　鞋　初編

（年）六卷（三十丁）月麿畫。●（帝）江戸見物。●（家）六卷（三十丁）鼻毛延高像より增上寺に至る。柱は、五丁づゝ異り、即ち一より五まで、ゑと見物上。六より十、同中。十一より十五、同下。十六より二十、同後上。二十一より二十五まで、同後中。アト同後下といつた風に。即ち此によれば、江戸見物の前後二編三十丁、六卷である。月麿畫。然るに可笑しい事は、年表には「初二篇六冊宛江戸見物（月麿畫）とある、是である。これによると、貳編も、江戸見物で、六冊（三十丁）物である樣であるが。誤記か否かは、自分の斷定の限ではないが。（或は、是れ、初編丈に、江戸見物前後と分れてゐることの誤解ではなからうか。家藏再摺本によりて。）

金　の　草　鞋　第二編

（年）前述の如く、六冊、江戸見物なりといふ。不詳。●（帝）東海道。●この帝文本は、實は、第三編かと思ふ。（家）では、大坂京の卷を第二編にしたい。否、帝文本第二編（東海道）第三編 大坂京）の序を見ても分る通り、稿出來の順序からは、明かに、東海道は、大坂京のアトである。現に帝文本第二編東海道の序にも、「京都より伊勢參宮して、京師に至るまでを著したる序なれば……」とある如くにである。（家）の大坂京本は、あいのやま內宮、（大坂）道頓堀より、（京）內裏御外曲輪

に至る、「三十丁（六卷）」但しこれに限り、丁數は前編よりの追丁である。―月麿書。杜には、「三十一より三十五、大坂見物上、三十六より四十まで同中、四十一より四十五まで同下。その終りに、「大坂の名所こと〴〵くせずあらましにしてこの次篇に京都見物の事を委くあらはす仍而全部四卷不殘出來」とあつて、月麿書、十返舍一九戲作と、こゝで篇が分つものの如くある。四十六より五十、京見物上、五十一より五十五まで、同中、五十六より六十まで同下、六十丁とあり、其裏にも、月麿書、十返舍一九編とあり。「三ケ津見物の滑稽東都六冊（五丁一冊と見て、即ち三十丁の意。久。）京大坂とも三冊（とも三冊なれば計六冊即ち三十丁の意。久。）不殘出來有之候猶東海道之記引續き差出申候」ともある。さうして、此の再摺本、埋木のあとか否かは不詳であるが、大坂上のハジメ（即ち三十一丁の表）には、金草鞋三編とあるにはある。

金草鞋　第三編

（年）六冊大坂京見物（月麿書）●（帝）大坂京の卷。●（家）東海道の三十丁を以てこれに宛つべきか。この東海道も初編江戶見物と同じく文化癸酉（十年）の出版である。がこゝに、疑へて來るのは、大坂京の卷（帝文は第三編）に、その序に左の如くある事である。

東都行脚の趣は、前編に記すが如く、今又此の伊勢參宮より大坂見物を爰に記して、東海道驛々名所見物の滑稽は追て歸路に委しくすべし。猶四編に至りては、京洛中洛外のことを記す。帖數わづかの冊子なれば………。

といふ事である。即ちこれによると、自分の思ひなしか、金草鞋は、元來は、十八編又は廿四編（或は廿五）と書きつぐ計畫でなく、即ち初版は、丁數も後の平均三十丁一編よりは少く、寧ろその半數、即ち後の初編と名づくる江戶見物が、實は初と二編で、即ち江戶見物（十五丁）が初編、同後、十五丁が貳編、後の第二編（又は第三編）が二つに分れて、大坂見物の十五丁分が、三編、終り京が四編といふのであつたらうか。即ち、その理由は、この二個の編が、六十丁と丁數の續いてゐる事からで、即ちまだ純粹の合卷形式を追うて、六十丁（即ち十二卷）が、十五丁づゝ四編に分れて

ゐたのかと思ふ。それが、後、書き足すやうになつて、この本來の十五丁一編の分け方が、滅茶々々になつたものと思ふ。即ち、私は、此の東海道を、補足の部分であると見做して、これ以後（この東海道の編から）三十丁一編の形式が成立つたものと思ふ。然し、この（家）本の東海道の終りに（第三十丁裏）「……京大坂を一見しそれより歸りは木曾道中のおもむきつゞゐて出版いたし候」とあるから、何ともいへないが。これは、著者板元のさかしらで、内容の都合上、江戸と大阪京の間へ强ひて入れようとしたゝめである、が出來は、序の如く、その後（大坂京見物の後）と思はれるのである。（柱は、五丁づゝ。初めの十五丁が、東海道の上中下、後の十五丁が、同後の上中下である。）

金草鞋　第四編

（甲）此の四編に二種ある。年表には、四篇六冊（三十丁の意）西國道中（美丸畫）とある。丁度これに匹敵するものは、（家）本の、西海道（柱に西かいとあり。）の三十丁、よし麿畫である。緒言にも、「去年……既に伊勢參宮より京大坂に至りたるに。この兩子（主人公の鼻毛延高と千久良坊を斥す。久）……迚もの事にいざや讃州の金毘羅山へ參詣し序なれば藝州の宮島……」といふによりて、この本、前の大坂京を承け、翌年文化十一年の出版だと思はれるのである。

（この編は、家本によると、その卷尾第三十丁裏には、例の雪麿の「神東道」の誤謬を罵つた一九の文が載つてゐる所のものである。尙、この西海の三十丁分は、全文、帝文本に缺けてゐる。どうして缺けたか、恐らく、編次の錯雜から來た誤りであつたらう。其の上、御叮嚀にも、第七と第二十の重複同一といつた不體裁を氣づかずに行つてゐるのである。）

（乙）は、帝文本の第四編で、これは木曾路である。これが、年表では第五編になつてゐる。が、帝文本で、これを第四編と、誤つたも無理はない。即ち此の序に、

「……東都より伊勢參宮の記つゞゐて京大坂見物の紀行、續に編集して梓ひに行れたり。今亦其歸路を木曾街道にあてて編よさ。書肆の需るを固辭難して此卷を著す。……于時文化癸酉初春長閑なるあした　通油街翠橋上　十返舍一九戯著」

とあるによつてである。（家）本も、その初丁に、金草鞋四編木曾路卷とはあるが、この四だけいや

に太く、埋木の迹が著しいのである。即ちこれは本來の（初版では）第四編ではなかつたものかと思ふ。

或は、これは、本來年表のいふ通り第五編で、即ち前上――江戸が初と二編、大坂が三編、京が四編、その次ぎこの木曾が第五編、その間へ、後の書足しの東海道と西海とを入れたが、西海は、例の雪應の事に觸れた記事があつてか、又は何らの事情で、絶版、で、江戸二編を改めて一編分の初、大坂京を合して第二、東海道を第三、又は東海道を第二、大坂京を第三とし、この木曾を第四と埋木して、編次を整へたのではなからうか。

即ち、東海道と西海との共に三十丁づゝ、即ち二編分は、編籍のはつきりせぬものなのである。

（とにかく、家本西海道によると、その卷尾に「これよりきこくの道すじこのつぎ五へんは木そかい道のみちのきつゞいてうり出し申候」云々ともある。即ちこれだけ見てゐれば、四編は、無論西海道といふ事になる。）

金　草　鞋　第五編

（年）は、木曾路である事既述の如し。●帝文本では「鹿島より筑波山、日光の御山へも參詣せんとて、……本所扇橋から奥州街道郡山、福原までである。●（家）本には、これと同樣のものはあるその初丁表に五編とは明かにある。が何ともいへないと思ふ。記事の順序からいへば、大坂―京―木曾路の次である。即ち問題は簡單である。前の第四編の木曾が、年表のいふ如く五編（初版で）であるなれば、これはその次ぎ、無論第六編であらねばならぬ。とにかく疑ひだ。この分、三十丁、柱は、奥州とある。

金　草　鞋　第六編

（年）奥州路之卷、とある事は、前述、一編づゝ繰り下がる意味で、尤もだ。●（帝）は、仙臺道で、檜皮より鹽竈七森あたりである。●（家）本にも、これはある、即ち帝文本と同樣のものか。且つその序（初丁の表）には、

……書肆の需るに任せ木曾道中のおもむきを四編としそれより鹿嶋香取生栖の三社詣併に筑波山日光の御山に至るまでを五編とし、其余奥街道仙臺にいたる迄六篇となし都合四五六の卷を當年出版し畢んぬ………

〔五篇は奥海道福はら驛に終る、其次六篇は檜皮宿より仙臺の國府町にいたる……（下略）〕

とあるに仍てである。然しこれは、自分のいうた如く、この序は凡て、新たに編を編み直した以後のもので、從つて、初版本よりも、一編づゝ編次を繰上げたものかとも思へるのである。が斷言は出來ない。）此（家）本、三十丁、國丸の畫である。柱には、仙だいとある。

金　草　鞋　第七編

（年）の七編、鹿島生栖筑波日光（國丸畫）とあるのは、これは年表の誤りであらう。即ちこれは、（年）第六編の奥州路と同じ物と思ふ。●（帝）では、この第七編は、どういふものか、前にも度々いうた通り、第二十編（飜刻上）の羽黑山道と同樣、同文である。即ち諸君は、「一九」の第七編と、「續一九」の第二十編とを對比せられたら、一切合財同一に氣がつかれよう。異るのは、「一九」で遠慮なかつた小咄の猥的が、「續一九」で略けてゐる位である。これは、如何なる間違ひか。これまで誰人も氣づかずにゐたのもをかしい。●（家）本では、その第七編に當るものを直接には見かけぬが前掲、仙臺道の三十丁分が、或は本來、此の第七編かと思ふ。即ち（家）本の仙臺道の最尾に、豫告めいて

續金のわらじ
右は此次より南部津輕ならびに出羽秋田庄内ゆとの山月山さんけい（云々）

とある。それが（家）本第八編と思はれる會津越後道の序に、

「凡て………七へんには………これより津輕南部のかた行脚のおもむき跋文にあれども今年は仙臺より會津に出それより越後路一見のおもむきをあらはすものなり（云々）

とあるによつても、證據だてられる。即ち初版にあつては、この仙臺道が第七編であつたらう。そ

れが、再板で第六編らしくなつたので、第七編が行衛不明となり、うつかり帝文本の如きヘマ、重複をやつたのであらう。

金の草鞋　第八編

（年）は、八九編九冊（四十五丁の意）西國順禮（國直畫）とあつて、これが、西國順禮一つを二編なみに見てゐる。これは、誤謬とも何ともいひえないが、妥協をつけると、これが、純初版で、或は、次掲（帝）（家）の會津越後道が、後に補足され、が、その以前は、この（年）のいふ通りであつたのかも知れないといふ事になる。●（帝）は、會津越後道である。●（家）本にも、この帝と同様なのは、あつて、即ち會津若松から越後高田まで、三十丁。柱には、凡て越後とあるのである。國丸畫である。

金の草鞋　第九編

（年表）の、八九篇を西國順禮と爲すこと、前述の如し。●（帝）では、西國順禮道である。即ち（家）本の四十五丁分である。即ち（帝）は、（年）の二篇分を一篇に見てゐるのである。●（家）の此分、（年）のいふ通り四十五丁、柱は、西國一より同九に至る、即ち五丁づゝ。最尾（第四十五丁裏）に、金草鞋九編大尾とある。國直畫である。

第十編以下第二十三編までは、年表と帝文本と家藏本と、凡て三樣一致である。編次然り、唯、年表には、挿繪畫家の名に於て、家藏本と對照するに二三の誤がある。今それを訂し乍ら、左に一括して示さう。（主に、家藏本内容に據る。）

第十編、坂東道。三十丁。（よし丸畫）●第十一編、秩父道。三十丁。（國丸畫）●第十二編、身延道三十丁。月麿畫●第十三編、善光寺道。三十丁。國丸畫（コレヲ年表ニハ、月麿トイヘリ。）●第十四編。四國遍路道。四十五丁（九卷）、（月麿畫）●第十五編、東都八十八ヶ所道。三十丁。（美丸畫）●第十六編、廿四輩道。三十丁。（美丸畫）●第十七編、房總紀行。三十丁。（國彙畫。コノ畫家、年

表ハ、國直ト誤植せり。）●第十八編、越中立山道。三十丁。（國安書）●第十九編、加賀白山道。三十丁。（重政書）●第二十編、出羽羽黒道。三十丁。（國安書）●第二十一編、南部道。三十丁。（國信書）●第二十二編、伊豆紀行。三十丁。（畫家不詳。但し年表は、國信畫とせり。尙、此の編卷尾、一九著署名の左に、小さく、淨書金水とあり。是れ、或は、例の後の人情本作家松亭金水の、初期例の筆耕を爲したその一例ではなからうか。）●第二十三編、箱根江ノ島廻。四十丁（八卷）。（美政畫。年表ニハ、國安畫ト誤リヲレリ。）

第二十四編以下が厄介である。即ち帝文本と家藏本とは一致で、第二十四編で完尾を告げてゐる。しかもそれは、共に西陸道、長崎より大坂着までの四十五丁（九卷）分、二代重政畫である。然るに、年表の記述には、

○二十四篇讃州金毘羅（美丸畫）○二十五篇長崎宮島（重政畫）

とある。この二十五篇長崎宮島といふのが、帝、家の第二十四篇といふのに近い。（但し、家藏本に據れば、長崎より廣島までが丁度三十丁（六卷）分である。）臆測を廻すに、年表の第二十四篇といふのは、金毘羅の內容から考へて、これは、第四篇（年表でいふもの。この篇帝文には缺。）の所謂六冊西國道中—大坂より金毘羅を經て長崎に至る—ものと、同一ではなからうか。即ち年表自身重出、の錯誤ではなからうか。とにかく性質上、此の第四編の大坂—金毘羅—長崎は、家、帝本の第二十四編（年表の第二十五編と同じ物ならん）の長崎—大坂と、併せて前後を爲すものであらうと思ふ。

即ち、此の年表の二十五編は、今の處、信が措けない。（金毘羅が二度出て來るのもをかしい。）で自分としては、矢張り此の「金草鞋」は、二十四編かと思ふ。さうして、以上、列擧し來つた所の如く此の作、初め二三編であつたのが、次から次へ書き足し、その間、既成編の間へ無理に嗣足し割込ませたものもあるし、從つて、初版自身（再版に至りても多少の修正）、同じ編次の重出、前後、かうし

た錯雜狀態を來したものと思ふ。今、各編の序跋又は、其他によりて、家本二十四編を順序だてゝ見よう。

○初編、江戶見物(六卷)○二編、東海道(同)(此編、アトよりの書足しならん。)○三編、大坂京見物(六卷)○四編、西海道(同)ーこの編帝文本缺く。○五編、木曾路(同)ー但し家本は、四編と埋木のあとあり。○六編、奧州路(同)ー但し家本、五編とあり。○七編、仙臺道(同)ー但し家本、序跋には、六編の如し。○八編、會津越後道(六卷)○九編、西國順禮道(九卷)。

十編以後二十三編までは、既述。

○二十四編、西陸道(九卷)。

以上であらうと思ふ。

尙、發行年代に就て、言及したい。(以下の、編數は、家本に與へた編次であると思うて頂きたい。)

その編次と、序跋其他によりての年代とを擧げる。

○初、二編は、文化十癸酉年。○三編、不詳、恐らくは、文化十年か。○四編、文化十一年か。○五編、文化癸酉初春長閑なるあしたと序にある。新群書「書目」には、文化十一年版とある。○六編新群書「書目」同じ。○七編、不詳。序には、「去年東都及び花洛浪華伊勢東海道の紀行を著し」とあり。○八編、文化十二年カ。(序に、去る癸酉甲戌春打續きて此金草鞋數編を梓行しとあり。)○第九編、不詳。○第十編、不詳。(序には、單に、文化とあり。書目は、文化三年と云。)○第十一編同、同、同○第十二編。不詳。(或は、文化元年か。此の十二編の序に、「善光寺參詣それより……を十三編とし、來陽卯のはるの新板」とあるにより。)○十三編、文政三年。(序に、文政辰孟月とある。即ち十二編の豫定より一年遲れである。)○十四編、不詳。○十五編、文政五年、(同年午孟春と序あり。)○十六編、文政六年(同未初はると序)○十七編、文政十年カ(同跋に、豫告ありて、來子

春出來發行とあるから。)〇第十八編、文政十一年。(序にあり。又「書目」も一致。) 十九編、文政十二年(序にあり。) 〇二十編、天保元年、(序に寅のとし初春とある。) 〇二十一編。不詳。〇二十二編、天保三年。(序に同辰春とある。或は、天保二年のものが、三に延びたものか。此編尾の跋に次編を辰の春發行とせり。)〇二十三編、天保四年(癸巳孟春出版と序にある。然るに、此編跋にはことし卅四へんに至るなにとぞ相かはらず云々の詞がある。)〇二十四編、不詳。(此編に至り、始めて、編尾に、故人十返舍一九遺稿と明らかにある。序にも十返舍一九遺稿とある。)

以上であるが、諸君も疑はれたやうに二十三編以下は、或は、糸井の二代一九の嗣作ではなからうかといふ事である。が、第二十四編に遺稿と明らかにしてもゐ、で全部或は初代かとも思ふ。或は、初代生存時の、末の方は代作かとも思はれて來る。が、とにかく公平に謂ふと、二十三篇以下は、怪しい臭がしてゐると思ふ。

次に、帝文本で、どうした譯か飜刻を脱した(その代り御丁寧にも第七と第二十とは重出)自分のいふ第四編、西陸道の略筋を述べておかう。

序。從大阪西國海路。(ヒラキ、其の里程表などがある。) 攝津－播磨－室津－讃州丸龜－金毘羅山－劒五山彌谷寺－備後ふく山－備後鞆小松寺松－鞆之裏町(遊女屋店先)－阿伏兎海潮山－安藝－嚴嶋明神－周防－長門－宇佐八幡宮－山國川急流－筑前－肥前－崎陽圓山町。

の順序で、三十丁、歌川よし鷹畫である。

補記――右の金草鞋は、第二十一編だけは、別に純初版一本を有してゐるが、それを見ると、見返しに南部路記旅雀と大きくある(小説年表の南部路象潟は誤り)凡てが、此体裁(合巻形式の初版)であつたらう。

五十年來名物名題のかず〳〵

—文政三年版「傾城客問答」より

東里山人作、勝川春扇畫、「虚實分解傾城客問答」（合巻物、前編後編計六巻）（甘泉堂版）、文政二卯年秋稿成、同三年庚辰春發販といふもの、、口繪がはりである。この口繪がはり、ヒラキ自序の次にあるそれ〴〵呼賣の詞と、その人物を描いてゐる。即ち、五十年來（文政三年頃までの、流行物賣りの數々である。今、好古の資料にもとて、その挿圖を略き、詞だけを筆寫しておく。〔宮武氏の「奇態流行史」などに洩れてゐるものも色々あらうと思ふ。原本汚れ本、或は判讀の誤があるかも知れない。あらば、よろしく是正せられたい。〕

さ平のあめうり

「さへいさいふたさてはらたつものかさ平がわかいさきアいろ男さんしよのせ

そゝぼうず

「そ〻それがそれへがそれがかふじてわしやべんてんさアまアへたのみやんす戀中をそ〻それがそれへがかうじて

すまふ

「ハイやわらにまけて六十日ほどわつらひましたハアすまふさらふなかふさらふだアハアあいなんのこつたこいつア〳〵

とりさし

「一ッひよごり二ッふくろ三ッみそづく四ッよたかよたかさいふさりはおかしなさりで日さへくればあっちのすみじやアごそ〳〵こつちのすみじやアごそ〳〵こいつさいてくりよトさほさしのべてさほはみぢかしかさぶせてやつてくりよテンテレツル〳〵てんつるてん

すた〳〵ぼうず

「すた〳〵ぼうずのくろらしい（カ）田の中かいさ申やすごこ申してよいさこなり

はりがねうり

「はりがね〳〵〳〵

さんごじゆの巾著

さんごしゆのきんちやくがおさるをつけて三文だ

ふくりんたう

「おらんだのふくりんたうほり〳〵さうまい

かうけいし

「ちやうせんのかうけいじしやくやつかへにきんめうじやハア〳〵たんせきのぼせにきんめうじやハ・・・・・

七いろとふがらし

「七いろさんがらしひり〳〵からいがさんしよのこ

あんけらたう、こんけらたう

おゑご市川おやだまが木ばにすんではおやぢかぶそれでもさしはわかやいだあんけらこんけらぺんぺこ〳〵ぺん

ひゑい山めいほう

「ごうしうひゑいざんのめいほうしやくばつかりたんせきにはよいれりやくがござります

よねだはら

「ひやうばんのよねだはらたゞの四文〱

よかんべい

「かたやかいなのいたむさころへはつたらふかんべいつけたらよかんべい

おぢいがあめ

「おぢいが来た〱おぢいが一ツぼん四文

ねこのゑかき

「ねづみよけねこのゑかこう

きよくば

「大つぼりうのたづなさばきくらがためよりぢのりわのりかうそくかけのりわけてこらんに入れんハイシイごふ〱

いわおこし

「なにはのめいぶつあにのいわおこしおいわさんでちよい

からんたう

「からんたう一名はおらんたう

ちんちやうじ

「ごめんなさいちんちやうじあみだ堂こんりうお心ざしをおれがひ申ます

おかぐら

長まつさん太郎まつさんしいたけさんかんぴようさんおめでたくおかぐらをあげやんしやう

うんにくゑん

「うんにくゑんしやくつかへのみやうやくはんだいなり

「うやまつてきれんし率るはんだいなり大明神ごしんごんにはおんろけいぢんばらきりくすいかほうそもかるいはしかもかるい家内あんぜんそくさいゑんにれんがんじやうじゆさうやまつて申ス

おせんがあめ

「こひさいたさてゆかりよかさごへさごは四十九里なみのうへおせんがあめならいつてう四文よずいらさきなせへ

口　　上

「五十ねんらい此かためいぶつ名だいのか?のかづ〱ありさいへごもまづそのあらましをこゝにしるすこれも一ツのごあいきやう口ゑがはりと見給へかし

〇

因みに、此の「客問答」、内容は、洒落本式、寧ろ中本の三馬例の「古今百馬鹿」式のものであるが、挿繪、詞などの体裁は、合巻流義である。初め、[ヲヤヂ]ヤイあほうめ、ゆふべも又女らかいにゆきおつたナ[ムスコ]よんどころないつきあいで云々。以下長談義、そのつゞきは傾城ともなり僞と眞の長談義となるのである。

稿本 きつひむだ枕春の目覺

初春の一興に、此の稿本黄表紙をお目にかける。年次は明かでないが、文中の詞によつて、寛政八年春かと思はれる。作者不詳、艶好謡作とあるが、まさか京の西村定雅ではなからう。作中、名古屋の方言あり且つ名古屋附近(鳴海、星崎、呼續)の地名ある所から、名古屋人かとも思ふ。すれば根芽田樂階級の、同時代の男か。増井(蘂齋)などとは稍方面が違ふかと思ふ。それにしても、現在の靜岡縣に主に人物(名物の擬人)を定め、場所を三尾に持つてきてゐる。名古屋の作者にしても、すれば何故、名古屋附近の名物にこれを決めぬか。他の鄕土の名物をいふのは、どういふ譯か。それに竹原春朝齋などの名所圖會などにも交涉がありさうだ。とにかく分らぬだけ、余計をかしく思へる本だ。以下その梗概であるが、上卷は、全文、下卷は、略筋を記すことにする。(原本中本、中味十葉)

○

春の色は東よりこそ赤本を。

ひらくや梅がかばやきぐし。さしも名高き京傳風。世におし茶飯流行を。及ばぬ筆で野邊につむ。若菜上下の二冊物今摺立のすりこ鉢。ところにかけし。海苔の來た。作者が鼻毛も永き日も。あいに鮑の貝誌ぬるを。紙くづの粉となさんよりはと。題してきつひむだ枕。春の目覺とはいふものならし。(以上、序)

×

○(前略)實彌高き三國一の大山王富士の山の院と申奉るは世にいちじるき雲の上左右は端山芝山の袖をつらねし其中に右大じんあしたか卿麓間近くすゝみ出て申されけるは近比都名所圖會をはじめ諸州の風土を誌し或は地理の圖をなす事專世に流行せり其が中に東街便覽とやらんいへる道中記は上は勅撰の哥枕より下はくも助めしもりの穴迄さがせし細書と言ひ又文談の野俗に通じ安きを以て此書を一見の輩は今迄名所に氣のなき人々迄もこれがために古跡を尋の端ともなれりされはおのづから名もなき地までも旅人に知られてほまれを得の一助たる事我々をはじめ末〳〵にいたり火打坂の姥嬶までも世に名をあげたる事ひとへに此本の恩

惠によれりされば彼本の作者方へ何をもつてかこれに報せんやと詞もいまだおわらざるに田子の中將浦浪卿みぎわに打よりそうせられしは是ぞ名にあふ不死の藥並七寶衆滿の寶をあたへてはいかゞに候やとありければ例(別)嶽各頂をふりてそれはあまり大そうなり最そつと手がるき品はあるまいかとありければさん候是はちと山師らしふは候へどもつら〳〵恩按をめぐらし候に幸彼作者道中記全部せしを祝ひて來る正月福引を催由承りぬ其景物として海道筋の名物共を風流に出たゝせ作者が宅へ遣し家内中大笑をなさしめば則命のせんだく是不死の薬又笑門へは福も寶もかならず参ると萬歳の樣な事を申されけり。

(田子の中將)とかくたゞいまのはやりは名所圖會と水でつぽうでござります。

(右大臣愛鷹卿)うけたまわれば竹原春朝齋も東海道の名所圖會を書ますげなてまへが似がほはどのやうに書てくれるはやくみたいものじや。

いつでもきさまのかほつきはなんの本にもうつくしう書ます。

(右、第一丁裏より二丁表。圖は、富士院、近侍の愛鷹右大臣、奏聞の田子中將。凡て擬人に描いてゐて、而も院と右大臣は山、中將は、凡て浪から出來てゐる。)

○爰に三保の守松原の景好公とて名高き名勝おわしけるがかねて富士御嶽の命によりて今度東海道筋の名物のうち面白き人品のものを撰まんためみだいどころ箱根のまへ若君淸見丸家老與津鯛右ヱ門同女房富士野をも召加へて相談ありけるが凡道中宿々の名物數〳〵なれどもかくべつに大笑をさせそうなものハたれ〳〵をさし遣すべきなんぢよきにはからい候へと大將の下地にしたがひ家老鯛右衞門かうべをかたむけ居たりしがやゝあつて申上ける樣世の人のもてあそぶ品にうつくし好あり異物ずきありたとへば大森の細工府中湯本等が一ぞくは調法とはいへども時の興を催しごつと笑の種にハ相成まじく候又なぐりの浮世こざなどはうつくしくかけ川のくず布は

風雅にして是もおかしみなし或は小田原ういろうが類の薬かうやくぞもも人々を笑わせる功能は見へ申さず候とかく貴賤上下を論ぜず老若男女ともに用ひてにこ〳〵の出るはたゞのみくいの品にこへたるはござなく候されば のみ家くい家の輩へ仰ありてしかるべしとぞ申ける。

（景好公）こんどめいぶつのしなのうちづいぶんとあごのをちるやうなおかしそうな人がらをぎんみいたせ。

（綱右ヱ門）はなのおちたそうなはあかさかへんにござりましやうが。

（右、第三丁表まで。圖は、凡て擬人。松原様の烏帽子を被つた景好、御饗、梅の枝を頭に付けた清見丸、鋼を頭につけた鋼右エ門、銚子を頭につけ、盃の紋をつけた女房富士野〔〕）

○かくて東海道の名物のうちへ三保の守の命ありてのみくい両家の内を人別をもつてそれ〳〵の役を見立られしかば先浮島うな吉はさぶらい分の役目となりかけ川のくづの粉はをちうらうといふ様な役にてかけ川を名としさつたのあわびはこしもとのくらざわと名をあらためきく川のなめしもおつぎ衆といふ身に化してきく川と名のればまりこのところはおこしやうとなりてまりこ野と改名しわれも〳〵と東海圖畧の作者方へと趣けり元來隨分おかしみを第一とし大笑をなさしむる事專とある故こゝをせんと（ママ）思ひきりばからしくこしらへ浮島其日の出立にはめつた皮のずきんを著し富士沼の水色の羽織に兵衛内侍の東路や雪の下なると讀れし松の三紋を大通につけたる男ぶりにおこしやうの丸子が思ひ染しが人しれぬすりばちのふかき中とぞなりにけるそれゆへ道中にて浮島と外の女とならびゆけば丸子野大にやきもちにてりんきの角のすりこぎをふり廻してやかましくいふ。

（くらざわ）なが〳〵のたびぢをつれだちてもまりこぞのがいぢめるでうきしまのはらがたちます。

（かけ川）くらざわさんそのやうにひつつかんしてもなみのあわびのかたおもひであらう。

〔右、第四丁表迄。圖は、右に、竹の皮に包んだ饅を頭に付けた大小姿のうな吉と、鮑を頭に付けた腰元のくらざわ左は、葛粉を載せた中老かけ川。後に木の芽田樂やうを頭に付けたきく川。擂鉢と當り木を頭に付けた鞠子野。〕

○東街道の餅家の親玉かぶに安部川五文取の入道みろく齋と聞へしは唐土晋の七賢の跡をしたひて棕竹(しゆろちく)の林にのがれて天然の長壽をたのしまれける然るに此度の名物會(くわい)に出ざるも本意なしと新坂(にいざか)のわらび餅をいざない出立(たゝ)れける（おれをぜけんでせ）んにん〳〵といふげなのふれん　其中（のかめにでものつてゆかうか）に佐夜の中山の名物あめのもちが一組は殊外仲満多(なかま)にてごや〳〵とこそ出かけける此一例（列）は至ていやしひれんちうにて又しても辨當くふた〳〵と口の修覆にばかりかゝつてねから道ばか行(ゆか)ず（かわいゝあん口を）（たゝかふかおかしがほしいナアさ）家(いへ)（がらさでむめがへのちくちをいふ）ごうやらむげんのかねのこんりうのやうだ。

〔右、第五丁表。圖は、右、安倍川五文取の入道、襟をきた御局風のわらび餅凡てその物を頭に載せてゐる。左は、左の手に一重をさし上げ、右手で菜(さい)の一つを箸で挿んで、弟に見せてゐる兄、足下に風呂敷の上に重の殘りが見えてゐる。その二人の兄弟に即いて左、赤兒の手を引いて歩かせてゐる婦人姿、婦人の右手から肩に、中山連中と大書した幟が長くある。さうして此の大小四人の頭上には、盆の上に一つづゝ餅を入れたのを載せてゐる。〕

○爰に清見そばは今度お老女の役にさゝれしが古き名物にして老衰ゆへ足腰もいたみ漸(やう〳〵)にとなりの清見寺かうやくがせわにてそろ〳〵跡より出かけ若衆に追付んと急いできよみが關〳〵ぞゆく（おれがなりは高砂のほうきをわすれたやうなこれもひさしき名代(なだい)ものかい　わたしやきよみのそばがよいさんしよのせなごゝふろくさい事をうたひてなぐさむ）

〔右、海岸、杖をつく老女風の清見そば名の如く、頭にそばを髮の如く垂らしなり。〕――以上、上之卷。

登場人物の輪廓を明かにするため、これまでは全文原文のまゝ載せてきた。各人物に就て說く所、凡てそれに假りた各地の名產、その形狀性質等を謂うてゐるものと思ふ。その現存せるも少からずあらう。郷土趣味通からは、一々首肯が出來よう。それらの興味のため、全文を載せたのである。以下は梗槪のみに止める。

うな吉と丸子(まりこ)は、互ひに人目を忍ぶ体となつたが、表向はわざと喧嘩をして仲惡に見せかけた。或日その見せかけ喧嘩が、度が過ぎて到頭本物の仲違ひとなつた。（圖は、丸子の頭擂鉢からさ

ろくを浴せられてゐるうな吉。」「うな吉の言葉に、「たつたいまゆやからもどつたきれいなからだへしるをぶちかけるとはあんまりなとろくくさいやつめが」——とある。このとろくくさいは、とろくさい、名古屋辯であつて、馬鹿らしいの意である。此點及び他の二三から此の作者は、名古屋者ではなからうか。」

次ぎ、食氣の一門、かくて三河を過ぎ尾張鳴海潟有松しぼりの助が許に落着き、爰を旅宿とし來辰の正月福引の日限をぞ待ちかける。所がかねて仲惡くなつた浮嶋丸子の口論止む時ないは勿論、他の名物連も、家柄や持前を言立てゝ、仲間もめ、小言が絶えない。次ぎ「此名物のうちにもかけ川は錢氣のあるものゆへ仲滿中の金元(かねもと)をして」ゐたが、浮島丸子に異見し仲睦じくさせんと、清見そばと共〲宥めたが聞かないから、掛川は葛の葉もどき、戀しくは尋ねきて見よゑんしうのかけがわじゆくのうらみくづのこと歌をかいて清見そばと連れ立ち身を隱す。錢金の事を缺(か)かせんとの積りである。二人は、三河八橋、燕子花の精へ來てかくまはれてゐる。次ぎ、腰元のくらざは(鮑)は氣晴しにと呼續が濱邊に遊んでゐたのを、志度の浦の海人に見つけられすでに船に連れ行かれんとする所を、両人(清見と掛川)の行衞を探す爲、藥賣の姿となつてゐるうな吉が折よく來て助ける。(鮑と、棒持つて見えたきゐうな吉、膝に敷かれた野郎、逃げる裸体の海女。) 次ギ(左)、八ッ橋燕子花の趣向で、清見と掛川を役者に仕入れて、女かぶきを始める。狂言外題は加賀見山舊郷(ママ)錦左樣に東西〱。(圖は、清見の岩藤、掛川の尾上の見え、草履打っ)

次ギ、お次衆の菊川は、仲間採めの小言を嫌ひ、星崎の浦に出て〻宵から舟ばつかり漕いで樂しむ。其比小田原の名物漬梅(つけうめ)寺(てら)の尼公は、名物のさし採めを宥めんとは、法席を開いて法文を說く。殊に丸子浮島は、一旦契りを結んだ身、二世の機緣未だ至つて深くして盡きない。我天眼通を以て察つせりと教化半ばへ、光明赫燿として、「彼(かの)の本の作者が信じ奉る觀世音の寶前に供へらるべき猿が馬場(ばんば)のかしわ餅、うつのやの十團子」現はれ、「各々心を改め中よくなりて早う福引を相勤よや云々」と告げる。次ギ、其年も暮て寛政第八、辰の正月七日の福引の儀式相濟んだから、各々富士御嶽より恩賞を賜はつた。就中、丸子とうな吉のなかしみ抜群なりとて、三保の守の御仲人で、芽出度婚禮の儀式を取り結んだ。めでたし〱。[艷好畫作]といふのである。——さて、肝心の道中記作者へのお禮の場面がさつぱり書けてゐず、尙もその作者の居在も結局、その催しの前と、結末に一齣に纏んで、纏りのないものであるが、名作の擬人、それに駿遠尾三に限つた所がをかしい、チンなものと思へるのである。

に、春章、重政合畫の「青樓美人合姿鏡」三冊が現れてゐる。（耕書堂版）には、無論春信の明和七年の「青樓美人合」の繼承であるが、此の兩人合畫に於ては彼ら大に趣を變へてゐる。即ちこれは、坐、立、樣々の姿態であつて、且つ背景もあり、精細なものが多い。人物の表現と、廓内の生活の表現とに骨折つたものであることは、肯ける。一々、圖中に、妓名と樓名を指定はしてゐるが、春信畫のものと同樣、畫家の美人の型が餘りに滲んでゐて、個々としては平凡なものである事は止むを得ぬ。「此の本、兩者の中、春章、重政の差殆どなし。一說、重政、春章に感化を與へた時代といふ。」「此の本の追隨を、翌年頃の湖龍齋の畫帖「東錦太夫の位」更に、重政の門人政演（京傳）の「新美人合自筆鏡」（天明三年）に生んでゐるが、今は略く。」

このやうに、明和頃から發祥を見た寫實の風は、市井の有名美人並に妓女を描くの風を生み類型の域は脫しなかつたが、とにかく、安永天明の、湖龍齋、春章、重政、淸長などの遊里美人（主に）精寫の風を生んだ。而して、終に、繪畫を以てする細見或は妓の宣傳、廣告かとも思はる〻樓と妓との背景も如實にとり入れる苦心を孕みつ〻あつたが、未だ半身像（無論大首も）はこれらの畫家に生れなかつた。即ちこれらは坐、立の違ひこそあれ、凡て全身美人である。

果然歌麿の出現を見たのである。勿論歌麿と雖も、その最初期（安永末）は、微々たるものであつたが、天明に至つて漸く擡頭した、が未だ版畫美人に全的の努力を注ぐには至らなかつた即ち當時の彼の美人、繪本黃表紙挿繪版畫の何れを問はず、春章、淸長、或は重政の何れかに似通つてゐた。彼の眞に獨自の個性發揮は獨得の理想美發表は寬政に入つてからであつた。さうして彼は、恰もよし當時寬政二三年頃に出現し始めた役者半身又は大首畫に、自己また暗示を受け、雲母摺の工夫も併せ採り入れて、始めて半身美人を描き、さては純大首を描き始めた。以て寬政六七年の寫樂の役者繪と妍々相爭つた。以上は、極めて概略ではあるが、當然の順序、徑路であると思ふ。　―「浮世繪美人大首畫乃研究」の一節。

（表紙二ヨリ）市場に現れます。（この大野屋といふのは、御存じの方も多いでせう現に當主は、岐阜の聯隊になられて、今は少佐ぐらゐです。私と中學が同窓でした。）その稿本の類で、今日分つてゐるものは、

文化二年作の記入のある「野圃の玉子」といふ本、文化四年記入のある「南驛夜光珠」といふ本、此の二種です。兩方とも私は讀みましたが、これらは、凡て當時の熱田（主に神戸）の遊廓の情調を現した、一種の洒落本です。が「野圃の玉子」は、大分一九の膝栗毛式の所があり、また「南驛夜光珠」は、どういふものか、後に現れる江戸出版の花山亭笑馬の「青樓玉語言」の文政五年版と同じやうな内容です。年代からいふと、笑馬が剽竊したのかと思はれます。其他では色々書目は殘つてゐますが、眞否は分りません。

其他の業蹟では、稿本寛政十二年本の「輕世界四十八手」——これも熱田遊廓の洒落本の一ですが、此の本は、五六人の合作で、その中の第二、見拔かれた手といふのが、增井の作です。其他では、寛政十三年の新織讃意鈔——木の芽田樂の著作に、增井が序を書いたりしてゐます。これを以ても、田樂と相並んで、素人文壇の大家であつた實證があります。

處が、こゝに增井の本で、しかも板本で、今一つあります。それは、純然たる洒落本で、小本一冊「歌妓酒戯」といふものです。年代は、寅の春と序文にありますから、寛政六年の寅かも知れません然し寛政六年にするのは、稍、增井としては早過ぎるやうな感じもします。がとにかく此の「歌妓酒戯」は、全く以前の本の補足本です。三分の二程、元の版木を使用して、初めを少々作りかへ、板木をくつゝけて一冊にしたもので、序文も更へて、その序文を增井が書き、いかにも新作のやうに見せかけたものです。此の本の元は、「一向不通替善運」といふ天明八年の江戸出版のものです。多分、名古屋の增井の知つてゐる本屋、例の松屋が、澤山洒落本などの板木を江戸から買つてきてをりますから、これもその中の一で、その再現だらうと思ひます。かくした事を、若し有意義でやつたとすれば增井も中々、綽名の己惚王人の通り、賣名に忙しかつた男です。

增井の大体の話は、以上でありますが、今その代表作として、「津島土産」といふ本、前にも述べました文化十一年と十三年の版の前編後編四冊について、一寸述べませう。此の本、無論一九の「東海道中膝栗毛」式の摸倣でありまして、人物はうんつく太郎兵衛といふ男と、たらふくの孫太といふ男と、此の二人が名古屋から津島見物にまゐる道中の滑稽です。隨分あくどいものですが、この特色は、名古屋の方言を織り込んでゐる所が中々面白いのです。此本、前編の上下二冊は、餘りに澤山出なかつたものと見えまして、珍本扱ひをされてゐます。前編は、藁齋だけの自叙、後編に至つて、當時名古屋にゐた一九が序を書いてをります。本の大きさは、丁度四六判の型で、一冊が夫々三十枚斗りです。挿繪が所々にあります。（下略）

○

以上が放送の要領であつたが、ラジオの效果の甚大な事驚くに足りた。當夜、放送し終つた直後に局で自分にむけ面會人があつた。誰かと思うて逢ふと、五十前後の紳商らしい人物。話は簡單に進め（表紙四へ）

發行所より

○原稿輻湊、先月も出さなかつた新刊紹介なども本月も休む事にした。來月多量を發して、責を果す積りである。其旨寄贈先にお詫びしておく。○拙著「軟派漫筆」出來市場に出た。装幀——自分としては少々ニヤケてゐると思ふが、讃辭の方が多いやうだ。小村氏の案である。よく賣れますと、市内の本屋の一軒がいうたが何うか。○跡の雁に先立たれて、洒落本集成はまだ内閣が捗どらぬと見え遲刊々々。然しもう近々。○卯年の繪葉書、甲も乙も全部賣切。後の注文の多かつたのには弱つた。○これも好評を得てゐます。○年末筆賢の御多幸な御越歳をお祈りしておく。（十二月廿二日夜）

定價表

一冊	貳拾五錢	郵稅貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	稅共
十二冊分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和元年十二月二十九日印刷
昭和二年一月一日發行
〔貳拾五錢〕 送料貳錢

編輯兼發行者 名古屋市東區東道來町百五十七番地 尾崎久彌
印刷者 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 英北貞造
印刷所 名古屋市中區…二丁目… 扶桑社
發行所 名古屋市東區東道來町一五七番地 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二番

（表紙三ヨリ）ることする——それが今かた放送の主題であつた増井蘐齋の傍系の子孫であつた。家に遺物もあり、蘐齋の墓も分つてゐるとの事。次の日曜の午前、墓參を約して同氏に別れた。氏は、渡邊鉦太郎といふて、名古屋では舊家の一、現在は肥料問屋をしてゐる。蘐齋の娘の緣づいた渡邊家の孫、つまり蘐齋からは傍系の曾孫といふ譯。

二十一日（十一月）約により來訪せられた渡邊氏と同伴、名古屋市東郊覺王山墓地に蘐齋の碑を訪れた。覺王山の墓とは新しいではないかといふ疑問も起らう。尤もである。其は、東橋町榮國寺（本願寺派）にあつたのを、渡邊家で覺王山へ墓を併せた時、共に換地せしめたのだといふ話。渡邊家は、清洲の出である。その清洲傳來の古い墓も共に蘐齋の碑の傍にあつた。

蘐齋の歌碑だけ最も大きく、渡邊家の清洲傳來の小さい墓石や其他四五があつて、一廓を爲してゐる。蘐齋の歌碑は中央。

その表面には、

つれになき風にともしの消とても
　彌陀の誓ひは在明の月

右下に、石橋菴無事老人と二行にある。無事老人、又は無事翁というた事が發見せられた。現に渡邊家に無事菴と書した額もあるとの事。

裏面は、

南無阿彌陀佛

釋信西
釋信翠
釋尼妙泰
釋幻齡
釋知齡

天保七丙申歲建之

とある。此の信翠が、眞醉で、蘐齋の事である。さうしてその左の妙泰といふのが、彼の妻君でもあつたか。渡邊氏の話によると、蘐齋の直系は絕ねてゐるらしい。それが爲位牌の守も墓も多少の遺物も、渡邊家に傳はつてゐるのであらう、幻齡などは、天折した彼の息でもあつたか。蘐齋は、相當の財もあつたが、殆どこれを放蕩に費した。然し、門弟も可なりあつたと見えて、現に此の墓も、門弟が建てたとの事。

渡邊氏と別れた數日、今度は手紙で、家系其他によりて、調べられるだけ調べ來られたその手紙が來た。其の要點を書く。

伊兵衞の祖父は俗稱不明、美濃、の石橋村の出生であるといふ。戒名釋道意、寶曆十二年壬午九月十八日歿。伊兵衞の父は俗名孫八、行年八十二歲、（釋玄淨）。伊兵衞は、石橋庵無事翁眞醉、行年七十三才、弘化三年丙午十一月廿七日死。（すれば、前揭の無事老人の歌碑は、門弟發意の壽碑とでもいふべきものか。とにかく、年號により生存時の物である事がわかる。）

蘐齋の妻は、果して釋尼妙泰といふのがそれであつた。俗名ヤウ。伊兵衞の妻、其父は、新橋（今の名古屋市南區尾頭橋上）島田屋新兵衞の娘であるといふ。

蘐齋の娘うたといふのが渡邊家に嫁、その孫が當主鉦太郎氏である。

尙、遺文として「大根之記」（現、軸仕立）一篇がある。

大根之記

大根の尾張の國の名產は莖大根の靑丹よし奈良漬大根のかすかなる宮重を最上として俳諧の會席には月の輪切りの羹とし花に揚句の揚豆腐を安(あカ)らひ作歌の友は短冊切三と一トもじの汁の子にも倭こゝろの和らかなるを贊むそれもかゐわりの二葉より千大根の皺のよるまで友！ら髮なる生酢にも齡ひ長根の千年を經千切ほしとなしてこそ春ふき大根の芽出度きためし

是にはいかでまさるべき
大根引疝氣の腰のあはれなり

右　石橋庵無事老戲作

尙、一つ畫像がある。君溪といふ男の繪で、卷留の所に天保十四辛卯春、七十歲石橋庵眞醉別名無事翁眞像とあつて、軸の贊、左の如し。

なむあみたの文字を句のかしらにおきて

南無といへはむかいとらんとある願の
彌陀こそ我はたのみなりけれ

石橋菴
無事翁

いづれこの畫像は、後日、彼の壽碑（？）と共に發表したいと思ふ。以上、渡邊氏より報知の要領並にそれが動機となつた放送の大要である。

（尙、渡邊氏が、元より、文藝人としてその蘐齋の輪廓を知らうゝ筈もなかつたが、それがどうしてか放送局へ直後逢ひに來られ得たかといふに、丁度自分放送の最中、何氣なくに聞いてゐると、兼て祖母さんなどから聞いてゐた祖母の親父の伊兵衞、御園二丁目といふのも聞いてゐた通りだ。眞醉（マスヰ）とはいはれるが、私自分は眞醉（シンスヰ）と思うてゐたが、成程これもマスヰと訓めぬ事もない若し間違つてゐたら謝まる丈といふので、半分聞で飛出し、丁度居宅から局へは三四丁であつたので一走りにやつて來たとの話であつた。誠に放送奇談の好例と思はれた。

昭和二年一月二十九日印刷
昭和二年二月一日發行

參編 第八冊（通編第五十三冊）

本文

大學の摸擬本

新修 日本小説年表の書入（三）

內地出版 浮世繪研究書目解題（[illegible]）

浮世繪の常識

邦刊漢文笑話書一斑（飯島花月）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第八冊（通編第五十三冊）

◎邦刊漢文笑話書一斑

飯島花月

形式では漢文だから硬本に屬すとも謂へるが實質は寧ろ軟本として江戸軟派研究誌上で管見を述べるも敢て不當では有るまいと思ふ。但し貧弱な家藏本に就いて申すのだから特に一斑と謂ふ即ち全豹で無いことを豫めお斷りして置く元來小咄は輕口噺とも落し咄とも又日本製の漢語で落語とも稱し（支那で落語と稱するは之に似た所がある）之を輯めた書を話本と汎稱し遠くは鎌倉期足利期の頃から存した話に更に新作の咄が加はつて徳川期に入つてから續々咄本として刊行せられ明治の初頭までに一千部にも上つたらうと謂はれて居る其の京大阪で出來たものは多く半紙本五冊もので江戸版の初期物も同様で有つたが安永天明以後のは大抵[illegible]本の一冊物であつたから早く散逸して現存の噺し本は古今を通じて三四百種に過ぎまいと思ふそれら邦文ものは近年各種の全集本に覆眞刊されたり又解題年表目錄様のものが種々出來て居るが漢文笑話本は一切さう云ふ惠みに浴して居ず殆ど世に忘れられた觀がある依て此解説を思ひ立つたのである。勿論既述通りホンの一斑に過ぎぬから澤山の脱漏があらうと思ふ同癖博雅の補訂を偏へにお願ひする。

漢文と稱しても必ずしも正格の漢文のみとは限らぬ狂體漢文もあれば日本化した漢文もあり支那小説語いはゆる譯詞を用ゐたのもあるが要するに假名雜りの邦語で無い漢字綴りのものを便宜上漢文体と假稱するのである又之れに支那書を訓點注釋して飜刻したのと全然本邦人の手に編著されたのとあり話の種が支那出來のと日本出來のと稀には印度傳來ものや西洋種も往々見えそれに剽竊若くは換骨奪胎若くは暗合と思はるゝものも多いが今はそれを穿鑿剔抉するが目的で無いからさう云ふ評論や考證めいした事には一切觸れぬとする。

○開口新語　大本一冊　岡白駒著

寛延四年刊　風月堂莊左衛門梓

同年播摩清絢の序がある岡白駒は字を千里號を龍洲と云ひ播州出の儒者で種々の著書がある本書は本邦の俗語を漢譯する準則を示す爲めに書いたといふので譯準と冠したので話の數は百則ある。

○奇談一笑 一名巷談奇叢　半紙本一冊　口木子輯

此書古版新本で原版の版木に削られた部分が有りはせぬ歟と不安に思はれる出版年月書肆等も詳で無い表紙の見返しに新刻と覺し、白駒岡先生輯、浪華蒿山堂梓とあり非我主人の題詞あり笑疑齋主人の跋語あり初丁に書名の次ぎ一字下げて龍洲岡先生と書して下部に口木子輯とある恐らくは岡先生の下に閲の字でも有つたのを削つて岡白駒の著らしく装つたのでは有るまいか然して跋文の笑疑齋を笑疑齋主人の山本北山とする岡龍洲とは時代の隔りが多過ぎるから別人で有らう其文に據ると口木子は近江の人で本名は西田維則字は子孝とある奥附は新刻で發行印刷者大阪市東區南博勞町青木恒三郎とあるから今日此家に版木を藏して居るのだらう本文は僅々十八枚で小話二十八則を收めてある。

○解人頤廣集備 初編　大本一冊

明和七年大阪丹波屋半兵衛刊で末葉に二編嗣出と刻してあるが果して續刊されたか否かを知らぬ此書支那書の抄譯で初めに明和七年の鄒汝吉敬の序あり次に乾隆二十六年の原序あり本文の初丁に雲溪胡澹庵定本。呉門錢愼齋增訂。平安雨新庵鈔錄とある即ちわが京都の雨新庵なる人が抄譯したので跋文は安藝平賀晋人撰である。

この書は笑話本とは稍類を異にし古人の逸事奇聞文話詩話の噴飯解頤すべきものを多く集錄したものである此書を載せるからは笠翁の山中一夕話（邦譯本がある）をも同じく收むべきだが山中一夕話（別名開卷一笑）は目下他へ貸出中だから爰には省略する。

○笑府　中本一冊

明和五年江戸本石町須原屋半兵衛版。

（表紙三へ）

大學の摸擬本（上）

德川氏治世期に於ける、民間普及に最も徹底した經書は、無論四書であらう。そのうちでも、此の大學だと思ふ。勿論、專は、江戸時代一般人と經書の親染味といつた問題で、やゝ我等の範圍を離れるが、とにかく、その短篇、且つ初歩といつた意味からも、この大學であらう。現に、女大學もこれから生れ、女大學に關する各種の繪本、出版、艶本の如きに及んでゐるは、周知の事實であらう。その女大學ではないが、この大學も、また一般、文字の稍辨へあるもの、恐らく商家の小僧番頭も、その時々の儒學奬勵で、此の類は、意味は分らずとも、一般の諳記、口癖に多くなつてゐたと思ふ。その大學に似せた戲著（主に、滑稽本の範圍）が、我等の眼に止る。その中の三種、一は黄表紙物、一は洒落本物、一は中本（滑稽本）である。そのこれを、左に先づ列擧して、その如何に、大學正文を摸して、別様に爲してゐるかを見ようと思ふ。（京傳の洒落本「京傳豫誌」の大樂の如きは、唯、型を似せただけである。此類は除外。）

其一、寛政二年版、大學嗅句（本外題、遊妓寔卯角文字、全交作。）三卷と、其二、洛東闕亭京鶴述、京都鬪轉堂發行の傾城情史大客、（天保三年版）一冊と、其三、狂訓亭主人（春水）作、英泉挿繪の「大學笑句」一冊とである。本の体裁、其二は半紙本、他は中本型である。

今左に、先づ其の冒頭の數行を、三者對照させて、全文を載せる事にする。

大客　意氣上戸

御亭子曰。大客格子先之虛言而諸客入床之門也。於今可見通人爲客次第者獨賴

大客

酒氣章句

酒酊子曰大客古之妓書而初客入通之門也當時可見

心學提徑大學　評註　私記私欲

御亭主曰勘略巧者意味兎角德入門於今主人德取世

かけのことばにて、むつかしいせりふなり
右躰一生但功者言而笑止迯之　せう
しならだまつてゐればいゝに、これをのぶるもす
さまじい、
又おしろいのあつひうすひといふは、つらのか
はのことかもしらず（屏風にある文句）
「これへよくうなア下略
ごふともなんし〱（閨中、髪を攫み、枕で打たんとす
る客、寄る妓。屏風外、のぞく朋輩の妓。）（以上第三丁裏）
其點十兵衛若者事而判人記レ之給金
頗有二借金一今因亭子定而更考返分別
無所在如左
「わかひもの丶十兵衛は、きうきんのかゝりこしが
あつたを、ていしゆがあんじをつけてとりたて
たといふやつさ
モシていしゆもちよさいのねへやつじやアごせ
へせんか
きさまがはん人だから、くめんのわるいときは
又かしてやらアナ
わたくしもはん人ぶくろのをがきれました（主人
と判人、長る若者、その後神棚。）（以上第四丁表）
香物曰克明澤菴。大食曰此點銘々買
喰
「たくあんづけのかう〱に、さんだおいしひの
がおざんしたから、とつてもらつておまんまを
たべんしたといふことなり
おまんまときいては、めしをじんじやうにくふ
よふだが、ようかしな、したゝかくつたそうだ
おいしひかう〱でおざんす、わつちやアおま
んまをけさくつたまんまだよ
わつちもさ
わつちもさ
以上三人けさくつたまんま（一つの膳を圍んで飯を食
べてゐる三人の花魁。）（以上、第四丁表）
吉原俠銘曰荷日日荒日日荒又人荒
「けんくはこうろんをしやうばいのやうにするか
ら、それむつかしふごせへす、又一名きやんと
いへぞ、此名いまだかんがへず、きをひといへ
ど、のろ〱あるくこともあり、地まはりとい
ふから、こめのやうなものかとをもへばさにも

あらず、こゝがいしんでんしん　どうめいつた
こうめいつたの所むつかしいだんなり
ヱヽくそがあきれら
あいつウぶちのめしてやるべい
ヱ、うつちやつておけへ、きやん〳〵三ツくち
あとのきやんがさきへいつたら、かうろんしやうな（三人の傒往來、一人は肌ぬぎ影物を見せてゐる。）（以上、第五丁表）

右傳地主釋二牽頭一誤二詩曰當季千住惟闇所レ不レ行也（右の中、牽頭をかみと訓ませてゐる、注意すべしであらう。久）

「これはよしはらの地のものへしめすことばにて、このごろはせんじゆもだいぶぶつさうだから、くらいばんなどには、めつたにゆきやんなといふことなり
「古歌に曰
あふてもどればせんじゆも一里ア、なんとしやう、おきあがれ
「人のせんじゆをづつうにやみはどうだ〳〵
「とんだわるひぢぐちだ

「そんなら三人よれば、せんじゆのちえはどうだ
「これサ、もふあやまるせい（三人寄つてゐる所）（以上、第五丁裏）。

詩曰毎晩庖丁止二料理一子曰聽二敲音一知二其敲音一。可二以レ鉈而不一レ打レ鳥乎

「此だんはまいばんとゝんとたゝくをとは、りやうりばんがとりかなつとうをたゝくのだといふことにて、いはずともしれたことなり、
「せいじんといふものは、なんのやくにもたゝぬことをいつてをくものなり
あんばいはしれるが、きやくのくれるあんばいはしれねへ
此ゑびすこうには、ちともらひたいの（一人、俎に向ひ、庖丁を持つ。一人は、擂鉢を擂る。）（以上、第六丁表。）

詩曰穆穆分散鳴呼序明店返止爲二人客一止二賢張一爲二人臣一止レ迎

百くはんのかたにかさ一がいとおもふて下され
みんなうりはたいた所がこれぎり、よひように

して下さりませ（小判少々と小粒三個、緡の錢三つばかり出してゐる。どらの父親か。その傍、煙草盆の灰吹に唾を吐く男。向ひ、老爺と中年男ゥ皆、債主であらう。）（以上、第六丁裏）

爲二人子一止二居續一爲二人父一止二逃懷一與二閻雲一交止レ貧

「やぼにくらひこんで女良かいをすると、いつでもしまひはしんだいぶんさん、あきだなにして、大屋へかへす、そこでおやぢがはらをたつ、ア、よんいやなと古哥（点カ）にもみへたり

「論語にもしんだいはんぶん父母にうけ、あへてもうせんかぶらざるを孝のしるしといへば、こいつさうでなし

「なんだ百くはんおんこんりうに、かさをかぶつた、こいつはありさうなこつた（庭に両手をあげて背のびをしてゐる若者、多分例のどら殿であらう。）（以上、第七丁表）

詩云瞻二狸寢間一翌草臥有二寢君子一。如レ着如レ脱如レ打如レ起食兮呑兮吐兮瀉兮有二寢君子一

なんぼこまものみせだとつても、あれ〲こはだのすしのこまくら、かんぴやうのひらもつとひ、そばきりのびんさしよりどり十九文〲大どうだといぬのしあはせだが、おれがほうへはむかぬものだ（これは猫の言である。久（床で、金盥に瀉れてゐる客。仰ぎみる猫）（以上、第七丁裏）

終不レ可レ忘如レ着如レ脱者質言也如レ打如起者生醉也食兮呑兮者酒肴也吐兮瀉兮者反吐云也有二得君子一終不レ可レ忘者生得穢不レ能忘言也

「てつきりくらつたあげくのいつゞけ、うちへかへつてはくやらひるやら、こうしやくどころではなし、きたなくて手もつけられず、

「だんなが久しいもんだ、又こまものみせをださしつた、ヱ、きたないへどをばかにした（右の丁を見てゐる、階下の下り口、女中らしい。口を袖で、掩うてゐる。）（以上、第八丁表）

新修日本小說年表の書入（二）

○洒落本の部（續き）

〔一五〇頁ノ下〕

○くるはの茶番　一　楚满人遺稿　文化十二年

●右の一行挿入。

〔一五二頁ノ上〕

○初恵比壽　一　十返舍一九　同（文政三年）

の一行を削る事。こは、落噺初恵比須一冊（小本）にして、表紙には一九とあれど、實は旭文亭の選、名古屋版也。

〔同頁ノ同〕

○東海探言

は、探語の誤。

〔同頁ノ下〕

○傾城情史

は、「傾城情史大客」とあるべし。

〔一五二頁ノ上〕

出版年代不詳の中、

○南樓丸は、南樓丸一之卷の誤にして、享和二年しかも此本恐らく刋本なからん。（名古屋本。）

○見通し占は、滑稽本「當變卜十露盤占」（ィ當變木眼倉八卦）と同本ならん、即ち寛政十年ならん歟。

○噺本の部

〔一六八頁ノ下〕

○茶の子餅　一　唐邊僕　安永三年

の一行挿入。安永三年たる事、原本の序、をはりに、甲牛（午）初春とあるによりて、明か也。

〔一六九頁ノ上〕

○十千萬両　一　安永四年

の一行挿入。此本小本（洒落本型）。ひんくはねる午の春と序にあり、即ち午歳、しかも本文に、明和の年號が變る話あり。旁々、從來此本漠然と明和版（年表には所在なし。書目に載る。）とあれど、安永四の午歳ならん。

〔一七〇頁ノ下〕

○茶の子餅　一　唐邊僕　安永年間版

の一行削除。

〔一七二頁ノ下〕

○富　喜　樽　一　　寛政四年は、作者感和亭鬼武である。

〔同、同〕

○輕口四方春　五　不　詳　寛政六年

の一行挿入。原本は、上方本、半紙型。

〔一七三頁ノ上〕

寛政八年のくゝり猿は、本來は緺猿、序は滿々亭とあれば、此者選者ならん。

〔一七六頁ノ上〕

○妙伍天連都　一　十返舍一九　文化九年

の一行挿入。（年表、滑稽本として取扱はれたれど、寧ろ噺本なり。）

〔同、同〕

○花競璃寛噺は、原本に據れば、文化十一年版也。

〔一七七頁ノ上〕

○落噺初惠比須　一　旭　文　亭　文化三年

の一行入る。

〔一七七頁ノ下〕

○御蔭道中噺栗毛　一　　文化十一年

は、家藏本下一冊あり。此の下に小咄あり。完本ならざれば、斷言出來がたきも、とにかく、年表の一は、イカヾ。

〔一七八頁ノ上〕

○即興御かげはなし　一　南里亭序　天保元年

の一行挿入。此原本、大坂本。小本。

〔同、同〕

○落噺惠　方　棚　一　小野秋津撰　天保二年（カ）

の一行挿入。（原本、小本。名古屋版）

〔一七九頁ノ下〕

○新　落　し　噺　一　立川焉馬　歌川國直畫　嘉永三年

●右の焉馬は、二代ならん。原本、中本。

〔一八三頁ノ上〕

年代未詳の中に左の三行挿入。

○落噺寶の山　一　十方舍一九畫作（大坂版）

○故事附古新話　五　不　詳（同ならん）

○繪本噺山科　五　同　（同）

〔圖録及び畫集類〕

此類は、なか〳〵家藏本の比ではなからう。姑らく其の一斑とする。

●第二回肉筆板畫展覽會目錄　四六二倍　京都大和繪協會　芸艸堂　明治四十五年一月

●木板繪　同和　北村鈴菜編　芸艸堂　大正五年六月

●國粹浮世繪傑作集　四六四倍　草野守人編　國粹社　大正六年六月

○右、異り繪多くありて、案外參考となすに足るもの也。

●古代風俗畫集　四六二倍和　北村鈴菜編　芸艸堂　大正六年七月

●うきよゑ　菊倍判　芸艸堂編　同　大正六年七月

●廣重六十回忌追善記念遺作展覽會目錄　四六倍和　渡邊庄三郎編　浮世繪研究會　大正六年十二月三日

○右、外題の如きものなるが、コ、數年來の好參考となりしもの。主に廣重作畫を年代により、壯きより老境へと配列せられたり。和紙摺と洋紙摺と二種の製本あり。(內容、コロタイプ圖版。目錄。外に展覽會記事。別に三代豊國畫の廣重死繪の木判着色摺一枚を添へたり。)

●浮世繪版畫全集　四六四倍二冊帙入　河浦謙一編　吉澤商店　大正七年五月廿五日

○右、模型を附せる浮世繪師略傳とも二冊也。全集は、中々變り繪多きものとして、有名なるもの也。

●やまとゑ　四六倍和　武岡豊太編　芸艸堂　大正八年十一月

●浮世繪畫集　菊判和二冊帙入　帝室博物館　矢吹高尙堂　同　十一月十八日

○右、嘗て明治末、聚精堂より四六四倍三冊に刊行せられたるもの、その縮冊也。肉筆畫の展覽圖錄也。別に畫家略傳を附す。

●浮　世　繪　四六四倍　齋藤隆三監修
新古書粋社　大正八年十二月
○右、新古書粋第十編として刊行せられたるもの、内容平凡。

●百五十回忌展觀春信圖録　菊二倍和　笹川臨風編
精　華　社　大正九年一月廿五日
○右、外題の如きものなれども、クルトの「春信」などの内容に遜色ありと見らる。廣重はまだよし、春信に至りては、汚れ物、圖の平凡物のみ、内地に殘りをれりとの嗟嘆も、これに由り濺がざるを得ず。

●肉筆浮世繪刊行會　四六四倍以上四袋入二十枚　吉川觀方氏カ
京都　山本文華堂　大正九年二月
○右、參考として相當期待する所ありしが、未完のまゝに終りたり。主に、京都附近殘存の中期の肉筆書也。無名書家多し。

●浮世繪板畫展覽會圖錄　四六四倍
大阪每日新聞社　大正十一年十一月
○右、松方氏將來の一部分として、展覽會ありし折のもの。右、展覽會の入場者にのみ頒ちたるもの。

●浮世繪板書集　同　大阪每日附錄
同　同　十二月
○右、前揭と異同あり。

●浮世繪聚英　菊判四倍帙入バラ　京都帝室博物館編
京都　便利堂　大正十二年六月
○右、武岡豊太氏蒐集の、肉筆物の英を聚めたるもの。

●あぶな繪書集　四六四倍帙入バラ　尾崎久彌編
江戸軟派研究發行所　大正十三年三月二十日
○右、非賣品。しかも頒布禁止となりたるもの蓋し未曾有な事也。惟ふ、廣狹二義のあぶな繪の名を留めたるに休んぜんか。

●廣重團扇繪展覽會圖錄　菊二倍和　松木喜八郎編
芸艸堂　大正十三年十月
○右、實は、東京中村氏の蒐集よりの選也。しか程に、廣重の團扇書多量に上る事、その書材の風景美人到らざるなき事、亦驚異の種たらずんばあらず。廣重研究の好參考。

●浮世繪版書精粹　四六二倍四冊和帙入　松木善右衞門

松木善右衛門　大正十四年五月
○右、松木氏の非賣品物のみを更にその秀を拔きたるもの、當代無比の名に背かず。全く他に見る能はざる珍圖また多し。三册、圖錄。一冊は、藤懸氏執筆の解說。

●廣重畫集若書の卷　菊二倍和　中村集一編
芸艸堂　大正十四年十月
○右、廣重蒐集の權威、中村氏の圖錄。廣重若書の圖版集としては、前古無比の壯觀。所收百七十九圖。

●豐國浮世繪集　四六倍　藤懸靜也解說
雄山閣　大正十五年一月十五日
○右、豐國百年忌記念展覽會圖錄也。內容はよし、裝幀は最も不感服のもの也。

●慶長寬永風俗畫集　四六四倍　日本美術協會
書報社　大正十五年四月
○右、前年秋の展覽會圖錄也。岸田氏「初期肉筆浮世繪」と姉妹を爲す、共に尊重すべし。

●哥麿浮世繪集　四六倍　井上和雄解說
雄山閣　大正十五年六月廿五日
○右、第九回浮世繪協會展覽會の圖錄也。（此年、哥歿後百二十一年也といふ）まだ〳〵佳作が內地に所有せられをるを知り、聊か人意を强うするに足るもの也。

〔著彙畫譜の類〕

●浮世繪師百家美人畫譜　菊和二冊　宮武外骨編
雅俗文庫　年不詳
○右、大阪滑稽新聞附錄として次々板行せられたるもの丶、集也。木板墨摺、描線に於ては崩れたる所多し。別に、簡單なる各畫家小傳を附す。

●菱川師宣畫譜　美濃紙木和　宮武外骨
雅俗文庫　明治四十二年七月十五日

●奧村政信畫譜　同　同
同　明治四十三年四月廿五日

●西川祐信畫譜　同　同
同　明治四十四年九月一日
○右、續刊の處中止となりたるもの。畫譜とはいへど、それ〳〵其畫家に對する詳傳、門派に及び、詳細なる記事、十丁餘を添へられた

り。中、該書家の繪本年表の如き、未だに見るに足るものあり。畫の部分は、またこれは凡て半丁又はヒラキを以てせる該書家各代表作（主に繪本）よりの、主に原圖大の選也。木版精到、原畫の風韻を傳ふるに近し。別に四面の着彩圖を附す。

●やまと錦繪　橋口五葉編　風俗繪卷刊行會　四六四倍和十二冊　大正

○右、原圖を縮摸したる各畫家代表作、着彩描線一切原圖に循ふ事最も忠實なるもの各二十圖を載せ、次に、各畫家の詳傳と見識に富みたる編者の評、登載圖の解說と年代。時々、各時代綜觀の如き長論文あり。複製の圖版、五葉氏の監督最も嚴に、從つて最も信憑に足る複製とも謂ふべし。論評記事、また含蓄あり。今は亡き五葉氏の恐らく畢生の事業たる浮世繪研究の上の唯一遺品なり。その論評、傳統說の如何に據らず、原圖により直接云爲すべしとの鑑賞研究の新傾向を開きたる、その先驅ともいふべき概あり卷。は年代を追ひ、江戸初期より同末期の十二卷也。

〔其他、浮世繪に交涉ある目錄又は圖錄類〕

●劇に關する展覽會圖錄　四六二倍和　芸艸堂　大正四年四月

●西洋の影響を受けたる日本版畫　四六判　國民美術協會　石井柏亭編　大正六年二月

●追善記念市川家歌舞伎展覽會圖錄　四六二倍和　圖書刊行會刊　大正七年五月

●歷史參考品陳列目錄　四六判　印刷文化展覽會協贊會　大正十一年三月

○右、大阪市開催のもの、圖版なし。

●明治以前洋畫類聚　菊四倍帙入バラ　平安精華社　大正十四年五月

○右、浮世繪多し。

●納涼に關する江戸の風俗　菊二倍和　芸艸堂　久保田金僊　大正十四年十月

●江戸時代初期版畫並繪入版本展觀目錄　月曜會　大正十五年三月

〔浮世繪に交涉ある特殊書、圖錄類〕

●曉齋畫談　美濃紙本和內外篇四冊　瓜生政知

●日本女裝　美濃紙本和七册　岩本俊　明治二十年七月六日

●德川時代書籍考　菊和　芸艸堂　明治三十九年二月

●日和下駄　四六判　永井荷風著　籾山書店　大正四年十一月十五日

○右、江戸風景畵の挿圖及び記事多し。但し再版以後、此の圖版（十七葉）なし。

●風流祇園櫻　桃本和　大槻筐舟編　大正五年一月

○右、艶本の中、無事なる繪を集めたるもの。

●舞と踊　菊二倍和　宮武外骨編　有文堂　大正六年二月一日

●艶色京紅　菊二倍帖　大槻筐舟編　大正十年夏

○右、前掲「風流祇園櫻」とは別本、寧ろその廣本とも謂ふべきもの也。解題悉しく、參考と做すに足る。

●繪本上袋集　四六幅廣和　禿氏祐祥編　佛敎藝術院　大正十一年四月一日

○右、諸草双紙の袋をのみ集めしもの、コロタイプ摺。

●近松時代風俗展覽會圖錄　菊大四册和帙入　堀喜二　大阪高島屋呉服店　大正十一年十二月十五日

○右、風俗、筆蹟摺物、器物、小袖の四卷。浮世繪また多し。其他好參考多し。

●古代版畵集　菊判洋　禿氏祐祥編　中外出版株式會社　大正十二年十一月十日

●西洋の影響を受けたる日本畵　四六二倍　黑田源次著　同　大正十三年三月十五日

●日本漫畵史　四六判　細木原靑起著　雄山閣　大正十三年七月

●版畵禮讃　菊判　稀書複製會編　春陽堂　大正十四年三月十八日

●双六十種　菊四倍十枚袋入　月曜會編　ちどりや　大正十四年五月

●繪畵に見えたる妖怪　菊和　吉川觀方著　京都美術圖書出版部　大正十四年九月一日

●江戸時代團扇集　約菊二倍橫帖　福岡玉僊編

大正十四年十月

●艸草紙板畫集　四六二倍和　服部寅三
京都　文聖堂　大正十五年二月三日

○右、白縫譚全編に亘り、袋の複寫也。

●繪畫に見えたる妖怪續編　菊和　吉川觀方著
京都　美術圖書出版部　大正十五年九月二十日

●慶長風俗展覽會圖錄　四六倍和　高畠勝多編
松屋吳服店　大正十五年十二月十五日

○右、「慶長寛永風俗畫集」などとは、別様のもの。主に時代裂、小袖等を載すれど、繪畫また多し。時代空氣最もよく現れたり、好著也。

〔複製品の類〕

此類枚擧に遑なし。殊に最近各社に於ける此の複製あり。過去に就ては、五葉氏の「やまと錦繪」（前掲）或は好古堂の「浮世繪版畫逸品集」（七十五枚ヵ。家藏不詳）等、或は五葉氏が岩波より出せる歌麿又は廣重五十三次の類。又は、渡邊庄三郎氏の各畫家別畫集、これらは信頼に足る複製品也。近來品の中、日本木板畫粹社の如き、力めたりと雖も、諸先輩（好古堂、渡邊氏）の業績の右に出づる事能はず。

〔補遺〕

圖錄の類では、審美書院の發行であつたかと思ふ、國華式の複製技倆を示した大村西厓氏編の「浮世繪派畫集」五册や、藤懸靜也氏の浮世繪大家畫集（解説附）などは、無論、過去の貴重な文献である。が、忌憚なく我らから謂はしむれば、今自分に藏本がないからの故を以て、强ひて謂ふのではないが、これらは、過去としては貴く、且つ顯揚すべき先期の業績であるが、今日に於ての存在力に於ては、甚だ非いかと思ふ。何となれば、其後より系統的に、より精選せられた此類が頻發せられてゐるからである。結局、最近に至るまでに於ては、我等は、廣重のもの數種、松木氏の「精粹」の類に、僅かに權威を認む。（複製兼解説としては、主に五葉氏の「やまと錦繪」に。）他は、畫家別外國の著述に、より多くの渇を醫されつゝあることを述べる殘念さを告げたい。と、余白あるための、憎まれ口を叩くこと然り。尙、目錄（圖版入の）類では、古くは、數年度に亘りたる村田の賣立目錄、最近に於ては、尙美社の賣立目錄に、より貴重な板畫材料を羅列してもゐるといひたい。此類は、遺却せられがちである。一般の注意を喚びたい。但し、系統的ではないといふ非難だけは、已むを得ぬ。

浮世繪の常識

浮世繪に關する極通俗的なお話をいたします。先づ浮世繪といふ字義から始めます。これは、無論當世繪、當時の風俗畫の意でありまして、元來貞享元祿の頃には、此の浮世何々といふものが澤山ありました。浮世草紙、浮世袋、浮世團子の類です。この一々の說明は省きますが、恐らく小說に於ける浮世草紙、繪畫にこれと對立させて浮世繪、かうして生れたものに違ひありません。さうして此の畫家を、浮世繪師といひました。文献上、浮世繪師の存在の最も古いのは、西歷一六八七年、即ち貞享四年版の「江戸鹿子」といふ物に、「浮世繪師菱川吉兵衞」（師宣の事であります。）とありまするのが、尤も古いらしいのです。

浮世繪は、別稱江戸繪といひます。これは、無論その生產地の江戸といふ意味から來たもので、諸國へ土產になつてゆく場合江戸繪といつた、それから起つたと思ひます。錦繪といふのがある。これは、浮世繪の明和年代からの名前で、鈴木春信などの力で、間色を利用して、數版摺の着彩の美しいのが生れた、それを京の錦にも劣らぬ意味で、江戸人が自慢的に、錦繪とつけたのだと思ひます。

形式をいひますと、肉筆と板畫とに分れますが、浮世繪に限り、價値は、肉筆よりも板畫にあります。理由は、浮世繪師の大部分が、板下畫かきとして熟練したものであり、從つて其方面に變態的に技倆が進み、却つて肉筆の練習は疎であつたが爲です。即ち浮世繪は、そのよいのは板畫であり、即ち一種の合成美術、版下かきの畫家、彫る彫師の苦心、これを摺り出す摺師の苦心、この三拍子揃つて出來たものです。が中には、肉筆にも、板下と同樣に勝れた技倆を持つてゐたのもあつた、例へば先では師宣、春章、後では北齋と榮之の如きです。これらは、肉筆も珍重されますが、（巧いから）其他の畫家は、板畫にのみ於てです。

さて、今度は、浮世繪主に板畫を、内容から區別してみます。それは三大別が出來る。一、役者繪。二、美人畫。三、風景畫。其他では、歴史畫（一名を武者繪といひます。）、動物畫、玩具繪など様々あります。が、主流としては、この役者、美人、風景の三つです。

次に、浮世繪の全部、慶長寛永頃から明治に至るまでの、有名な畫家、及びその系統を述べてみませう。

初期は、肉筆が多く、師宣頃から一枚畫の板畫がぼつ〳〵現れました。初期肉筆の大家で、浮世繪風の祖ともいふべきは、普通吃の又平で通つてゐる岩佐又兵衛です。が此の又兵衛君、決して吃又ではありません。吃又といふのは、大津繪を畫いた又平と、此の浮世繪を開いた又兵衛とをゴッチャにして、作り上げたやうな近松門左衞門の作中に現れる架空の人物です。さて此の岩佐又兵衛、これが浮世繪風を描いた、が、まだ傳統らしいものは、造つてゐません。比較的、當時の風俗描寫を試みてゐるだけです。次ぎ、天和貞享元祿に盛りを見せた菱川師宣に至つて、確實に浮世繪の一派を開いた。師宣は、元は、縫箔の上繪師でしたが、到頭繪かきを本職にしました。房州の出です。弟子が色々ありますが、男の師房と、門人の古山師重などが有名です。此の畫風を學んでえらくなつたのが、鳥居派の元祖の鳥居清信です。清信は、芝居の看板も描きましたが、役者繪の版畫や繪本も多い。この間に懐月堂とか、宮川長春などといつた肉筆畫家があつて、美人や風俗を描いてゐます。懐月堂の感化は、鳥居清信にもありますす。長身の、一人立美人が多いのです。鳥居清信の傳統は、門人も色々ありますが、その系統が、二代は清倍、三代が清滿、四代が清長といつた風に傳はつて、明治大正にまで續いてをります。、稍後に、京都に西川祐信が現れ、これは主に繪本に、例の上方式美人を描きました。この祐信の系統も色々ありますが、この祐信を學んで、江戸風にしたのが、江戸の奥村政信です。丁度此頃、西村重長といふ畫家もありまして、それに弟子に、秀才が何人も現れました。即ち石川豊信

鈴木春信、磯田湖龍齋です。豊信が最も先で、さうして政信を受けて、美人や役者に多數の作品を殘しました。鈴木春信に至つて、エポックメーキングな錦繪摺が現れます。此の春信と同門であつて、しかもその感化を受けたのが、磯田湖龍齋です。次に、北尾重政が現れて、これが頗る長生きをしてゐて、北尾派といつたものを作つてゐます。小說家の山東京傳も、本來は浮世繪師で、北尾政演といつて、初期は、中々いゝ美人畫を描きました。その重政から稍感化を受けたかと思はるゝ次の大家に勝川春章があります。春章は、初めは、政信だか、重政だかの顏と似よつたものを書きましたが、後には個性の著しいものを書きました、役者と美人が多いのです。この春章の門人に、春英とか春好、これらは主に役者繪、美人畫の方では、春潮といふのがあります。此の時分、歌川派の祖の歌川豊春がありまして、盛んに遠近法のとれた浮繪といふものを書きました。(然し浮繪の元は、奥村政信にあります。)此の豊春の門人に、豊廣と豊國が現れます。此の豊春と同時代に、鳥山石燕といふ化物にうまかつた畫家を出し、その弟子に、喜多川歌麿などが現れます。一方鳥居の四代淸長は、また當時の大家中の大家でした。尙、浮世繪師の中で身分の高い細田榮之も、此頃に現れて居ります。丁度此時代が、天明寬政頃で、湖龍齋、豊春、重政、春章、淸長は、稍先の方で、歌麿に榮之、豊國は後の方です。此間また役者繪に、迚も奇拔な意匠を凝らし、而も今日世界的に有名な、寫樂は、寬政の六七年の頃の短い命です。次の享和や文化からは殆ど歌川派の全盛ですが、その勢力を二分して半分を持つてゐたのは、葛飾北齋の北齋派です。弟子の多い事も豊國と好敵手です。この北齋は、春章の門人で、天明頃から現れてゐますが、その本領を發揮したのは、文化以後です。この北齋に秀才多く現れました、即ち北溪、辰齋、北爲、北壽などです。豊國は、前にも述べた豊春の門人で、初めは、歌麿の眞似をした美人や寫樂の眞似をしたやうな役者繪を書きましたが、文化頃には、多少の個性が現れてきました。その弟子が無數な位ですが、古い處では、先生の豊國以上の役者を描いた國政、

後に國貞、國芳、國虎、國安、國直などです。大抵この國の字がつきます。當時、この北齋派と豐國派の外には、歌麿の系統などがありましたが、振ひません。まだ英山とその弟子の英泉、即ちこの菊川派、及び豐廣（豐國と同門であつた）と、その門人の廣重、この二つの勢力です。

天保以後、畫壇の中心勢力となつたのは、國貞改めの三代豐國です。これがまた弟子無數、明治に及んでゐます。がいゝ弟子は、寧ろ國芳の方で、即ち國芳の門人の芳年などは、末流の中の大家です。廣重の系統も、明治にまで續いてはをります。

以上、殆ど江戸を中心にしましたが、他では大阪に、北齋や其他の系統が少々あつて、繪本や芝居の看板、役者繪を描いてゐた位ゐです。

さて以上の概觀を、今度は、浮世繪三區分の上から、その今日最も世界的の名譽を得てゐる大家の名を列擧してみませう。

一、役者繪。師宣、淸信、政信、豐信、春章、春英、春好、寫樂、初代豐國、三代豐國。

二、美人畫。師宣、懐月堂、祐信、政信、鳥居淸滿、豐信、春信、湖龍齋、重政、春章、淸長、歌麿、春潮、榮之、榮之の弟子の榮昌、北齋、英山、英泉、國貞、國芳。

三、風景畫。政信、春信の弟子の司馬江漢、豐春、北齋、北壽、國虎、國芳、及び初代二代の廣重などです。

内、大抵の畫家が、美人と役者、風景と書きましたが、此の中、特色が際立つてゐるのは、春信と歌麿の美人、（役者繪もありますが、ホンの二三枚です。）、徹底的に一方であつたのは、寫樂の役者繪です。

以上で概觀を終りましたが、中、更に〳〵外國に響いて、殆ど世界の常識としての名前は、春信、寫樂、北齋、ウタマロ、淸長位ゐです。即ち中期の諸大家です。さうして、お差づかしい話ですが、

浮世繪に關する研究書も、外國の方が盛んで、今日では、恐らく五百種以上は、出來てゐると思ひます。日本では、五十種に滿ちません。これ迄の日本人の研究は、大抵外國人の著書を飜譯して、お茶を濁してゐたのです。

次に、現存してゐる浮世繪版畫の價値をいひますと、キレイな、にせ物と間違ふ程のものがいゝのです。前にも申したやうに、浮世繪は、肉筆よりも版畫が價値多く、即ち一種の、畫と彫と摺との合成藝術でありますから、從つて、刷り出したと同樣な、色の澤があり、虫喰ひも破れも無論ないのがいゝのです。即ち上等の保存ほどいゝのです。從つていかに歌麿であらうが寫樂であらうが、汚れたり、破れたり、虫食つたりしてゐるものは、うぶな末期物の方がまだいゝのです。寫樂のいゝものは、恐らく一枚五百圓以上しませうが、汚れたものは、五圓の價値もありません。最近、商人仲間もいゝ傾向になりまして、昔なら、歌麿とか廣重とか、名の通つた者の繪なら、何でも高かつたものですが、此頃では、汚れたり、又は圖柄の惡いものは、ウタでもヒロでも安いものです。以前から、汚れや破れは價値を措いてゐませんでしたが、此頃では、畫家の如何を問はず、其の一枚の圖の出來ばえ、構圖色彩のよしあし、それに保存の程度をいひます。それだけ、有名畫家の盲信時代から、一枚一枚の選擇時代に入つたのです。

くれぐ〵もいひますが、汚れたり虫食つたりしたものは、大家の繪でも殆ど價値がありません。それに尙注意する事は、保存がよく構圖がよくとも、摺の惡いのは、また二番ものです。その譯は、今日のやうな印刷機械で刷るのとは違ひ、高々、一つの板木で、きつかり刷りうる限りは、千枚が限度でせう。その中でも、初版といひまして、一枚目から二百枚目位の摺の間は、判の細かい線もそのまゝ出てゐて、誠に鮮明です。印象がはつきりします。それを珍重します。同じ繪でも四版五版目位ゐのものは、判木が磨滅して、線もザラ〵〵で、見られたものではありません。

以上が、ほんの浮世繪の内容と形式の一走りです。細部に亘つては、また申す機會がありませう。

——大正十五年十一月十八日、名古屋放送局にて

北齋の「畫本早引」に就て

北齋の文化十四年初秋版か、翌年の文政元年春新板と思はれる「畫本早引」初篇を入手した。此本、織田一磨氏の「北齋」などには、どういふ譯か、文化十三年の項に挿入してゐられる。全くの誤りである。後示の如く、初代一九の、「文化丁丑」の序がある。丁丑は同十四年である。此本、中本一冊、二篇も續刊せられたらしい。現に織田氏の「北齋」にも、その文政二年の項に、二篇一冊が見えてゐる。私の所見は、初篇一冊である。これに一九が序をものしてゐるが、此頃、北齋、一九の交情は、圓滑なものにあつたらしい。左は、その序の全文である。

東福寺の兆殿司は、本來師なくして畫圖を學ぶ。其一切のものゝ像、活生の儘を熟寫して。おのづから講明し竟に玄妙神に入ると言傳ふ。今畫の道連に行れて。戯れに□□慾し。自得するもの甚多し。然れども高手は師に據ざれば成事回し。于此東都戴斗翁畫帖數篇を著し。偶此早曳と命ずるもの。以呂波四十八文字の假名に併せ。其意に應ずる。圖畫をひき得る。排設にして實に黄口の素子が。此道に慣るの祖述。翁が奇才。畫法氣韻ともに凡ならず。人物の骨相。雲行水流の頓筆。しかも學ぶに易く。ひとり案上遊戯の調寶なるべし。

文化丁丑晩夏日　　　　十返舎一九識

といふので、推奨大に力めたりである。

此の初篇は、（い）から（む）までゝある。半丁に二十から三十までぐらゐの人物、器具、風景などを、小さく描いてゐる。さうして各音は、一音につき二面又は三面（一丁分又は一丁半分）を費してゐる。人物は、全部略畫で、輪廓だけである。眼などは打つてない。丁度、政美の「略畫式」を、小さい北齋ばりにしたやうなものである。が、政美の描線よりは、寧ろ一層の巧妙、生氣に富んでゐる。隨分エロチックな材料も、平氣で書きこなしてゐる所もある。最尾によると、衆星閣並に雙鶴堂（人形町通乗物町鶴屋金助）の合梓である。

（い）で、その半丁分を、題だけ擧げると、瑞籬、陰者、居合、賭行、伊勢（大廟の景）、一僕、逸民、色（男女）、圍碁、家居、醫者、異見、鑄懸、石匠、息杖、井戸、（以上初丁表）である。この（い）が、此分第二丁表まで、即ち三面分ある。以下此類であるが、例外として、（ゐ）の中の、第二面、廬舍那佛は、半丁分の過半の大きさに描いてゐる。即ちこの半丁は、五項目を擧げてゐる斗りである。が、人間の數は、やはり小さく、二十以上はある。

（表紙二より）

○刪笑府　大本一冊

安永五年攝城書坊（以下缺）

○笑府　半紙本一冊

文政元年皇都華屋孫兵衞？

三書とも清の墨憨齋編の舶載本の抄譯である此書は右三書以前にも譯刻されたのが有ると聞いたが支那でも澤山飜刻されて大本小本廣本抄本種々あつて輸入の唐本も多數流布して居る右三種中の中本は懽憧齋譯で明和五年の貧喧齋主人の序及墨憨齋の原序あり本文は卷一古艶部より卷五廣萃部まで七十七則の話を收め一則毎に序假名雜りの邦文で親切に譯が施してある卷六以下は後編として近刻とあるが刊否を詳にせぬ此中本はのち京都の寺町通山田茂助が求板したと見えて同人方から新刷として出したものである。

大本のものは原序の次ぎ本文の初めに日本風來山人刪譯とあるが果して平賀源内の風來であるや否やを知らぬ時代と譯語の邦文から推定して源内かと思へぬ事も無い原版は大阪版らしいが奥付が削られ今刷本として東京武田傳右衞門大川鍵吉兩書肆の發賣としてある。

半紙本は原序があり本文は腐流部から雜語部まで上下二卷を一冊として百七十餘章の咄を載せ末尾に僅計りの語釋が注記してある奥付の文政元年云々は果して刻梓の年か否か判明せぬ。

○前戲錄　河支佑著　中本一冊

明和七年京都佐々貫惣四郎刊。

樣式から云へば狂詩本系統に屬するもので狂詩本の板元錢屋惣四郎の藏板であるが初めに明和六年蘇門山人服天游の序があり本文は雜話十三首として十三則の短編笑話を載せ末に狂詩狂文があつて明和七年の永忠原の跋がある序者服部蘇門は京都の儒者で其著述目錄のうちに前戲錄後戲錄の名が見えるが此書の序跋に依れば河支佑の著たること明である後戲錄は未見。

○花間笑語　寫本大本一冊　柏亭著

家藏は寫本で奥付を缺き出版の年月及書肆を知る由が無い□□之秋柏亭識とした著者の自叙あるのみで本文は百二十二則の咄を集めてある刻本が世に存する事と思ふ。

○新譯開口新話　大本一冊　谷口葭州譯

寛政九年浪華藤澤文苑堂刊。

寶暦二年長洲隱吏の序がある支那の原本を知らぬから全譯か抄譯かを詳にせぬ五十章の咄を載せ首書に短評を加へてある。

○胡盧百轉　初編　和州　河原澤編　中本一冊

寛政九年大阪藤屋彌兵衞外二店刊。

和州の儒者河原澤の著この人號を九疑齋といひ多くの著述がある奥付に其書目總計二十六部百三十二卷を擧げて胡盧百轉一卷の下には「和之落咄ヲ面白取續記ス」と註してある載する所六十六話で序は平安太平館醉道として銅脈先生の得意の狂文短篇を載せてある曰く

京師ニ有ニ彦八一。江戸ニ有ニ豆□一。共ニ以テ雜談ヲ鳴ル者也。和州河原澤ハ繪ニ畫キテノハナシヲ其談ヲ而。夫具スルナリ者也。尤モ極ム其妙境ヲ一則令ニ三予ヲシテ擊タ二太鼓ヲ一。予不レ能レ辭スルコト乃取レ桴ヲ曰。因々。吹々。始焉。始焉。

○笑堂福聚　江戸　山本北山著　大本一冊

享和四年文刻堂玩月堂發兌（以下次號）

著者より

諒闇の新年を迎へて、御同樣籠居がちな靜かな松の内であつた、○國家の御大事は云はずもがな、小生一家にも、周章さ[illegible]うた。長男、今月で滿一歳のが、舊臘から氣管支をやられ、年末から小兒科醫院に入院、今月中旬漸く退院、まだ[illegible]しない所へ、小生も年末からかうした心配の苦勞と、戸外の奔走とから、酷い感冒に罹り、今年は名の通り臥床で迎へた。中旬まで[illegible]がらであつたが、それでも書物には、熱が出て（これは歡迎していゝ熱だ）、隨筆集「煖房の夢」といふのも一冊纏めあげた（本誌發表のもの殆どなし。いづれ本年度には本になりませう。○本月も記事輻湊で、依託や寄贈を延した。來月は必ずである。御許しありたい。（一月廿三日夜）

定價表		
一冊	貳拾五錢	郵稅貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	稅共
十二冊分	貳圓八拾錢	同

○郵劵貳錢一割增の事

○照會は返信料添付の事

昭和二年一月二十九日印刷
昭和二年二月一日發行　（貳拾五錢）

禁轉載

名古屋市東區東瓦町百五十七番地
編輯兼發行人　尾崎久彌
印刷者　英比貞造
印刷所　[illegible]社
發行所　名古屋市東區東?町一五七番地　江戸軟派研究發行所
振替[illegible]六六七二番

（表紙二より）

○同　　中本一冊

明治十四年縮刻再刋丸屋善七。

此明治の縮刻には享和二年天籟齋藤豹藏の序あり又同年小春日とある跋には名が無く唯文中に芳譴云々と見えるので門人芳蘭卿の作と推想し得られる然るに原刻の大本に序も跋も無いのは蓋し脱漏であらう本文の前に江戸奚疑齋主人戯著。桐生門人佐羽芳蘭卿校とあり話の數は五十二則但し其中には玄惠法印が太平記の文意に就いて閻魔王に叱責せらるゝ條や鼠子と膽との問答など諷刺的の戯文も雜つて居る。

尚縮刻本には明治十三年十一月の依田百川の序が添へてある著者北山の傳は世の知る所だから略す。

○譯準笑話　大本一冊　村田通信著

文政九年發行名古屋梶田勘助求板とあり原刻の年次は不明で文光堂藏板を梶田が求板したのである。

著者村田通信は儒者で匏庵と號し數種の述作がある此書正編續編各百則づゝの小咄を漢譯し一冊に合刋して習文の資としたもので著者の自序がある。

○奇談新編　大本一冊　淡山子著

天保十三年の序あり發行書肆江戸須原屋茂兵衛外三都七店の名を聯ねてある。

序は三橋子浪華の寓居に書すとあり表紙の見返しには淡山先生著松濤館藏板の旨を誌し幹齋高村眞撰の淡山子傳が附載されてゐる傳に淡山子は何れの許の人たるを知らず來りて大阪に住すと云々とあるのみで氏名を詳にせぬ話の數は五十則で內二十二條は友人紀洋子新譯とあり鼇頭に幹齋の評語が加へてある。

○譯解笑林廣記　半紙本二冊　一嘯道人譯解

原刻年次不詳明治十六年求板東京吳服町奎文堂藏版。

遊戯道人纂輯の笑林廣記は笑府と同じく支那でも澤山覆刻があつて省本略本大小新舊さま〴〵の異本が舶來し邦譯されたものは此二冊の外にも有らうと思ふが詳で無い本書原刻は無論明治以前であらう序は例の大塊洪々流光瞬息とある原本の通りで本文の前に

遊戯主人纂輯　一嘯道人諺解
粲然居士參訂　艾草山人校閱

とあり通計三百餘の話があるが原本も精粗區々だとは謂へ此本は一層節略されたものである蓋し餘り鄙猥に亘る談を除き且本邦人に理解し易い話丈けを抄譯したのと思ふ。

笑府と笑林廣記とは部門の立方にも話の數にも若干の相違があれど同一の話が同一の文系で雙方に出て居るのが少からずあるこれは出版者が販賣の便宜上名を更めたので畢竟は同書異本と見るべきであらう笑府も既掲の中本と半紙本とで部分けが一樣で無いが大體は左の通りである。

古艶部　腐流部　世諱部　方術部
廣華部　殊稟部　刺俗部　形體部
謬誤部　閨風部　雜語部

然るに笑林廣記は（譯解本は閨風部を除いてある）

古艶　腐流　術業（方術としたのもある）形體　殊稟　閨風
世諱　僭道（また廣華）　貪吝
貧窶　譏刺（また刺俗）　謬誤
（また細誤）

序でに述べるが支那の笑話は閨風の一部門がある位に卑猥の話がうるさい程多いことで尙閨風部以外にも澤山あるこれは猛烈な刺戟で無ければ感興を惹かぬと謂ふ支那人の國民性の致す所でもあらう邦書にも之を擬して「豆だんご」の如き全編閨風に屬するものが二三書あり其他の小咄本にも必らず一書中に二三個處以上見えるが支那物の樣なアクドイ點が無いから餘り嫌味を感じさせぬのである。

以上諸書の外明治大正に成つてから假名交り文に譯したもので、「開卷百笑」の如きがあり原文を揭げて假名譯を附載した「支那笑話新編」あり此類のもの外にも出版されたと思ふが之を西洋笑話の譯刋に比すれば尙頗る寥々たりで物足らぬ感を起さしめる支那本の明治に成つての輸入に「一見哈々笑」の如き澤山笑話を纂めたものも有るから誰か譯本を出して欲しいものである。

（附述）明治十四年九月東京濱町三丁目高橋脩助が編輯兼出版人と署名し山中市兵衛外數店發賣書肆の名を聯ねた「[illegible]笑文選」と稱する木版の袖珍本が一冊あるが槪ね笑府や笑林廣記やさらずば又前記邦刋ものを抄出したに過ぎぬから取立てゝ謂ふ程の書でない其頃風雅新誌東京新誌同樂相談鳳鳴新誌の如き漢文雜誌が非常に流行して競つて漢文小說や漢文笑話を載せたから其影響として斯樣な笑話の單行本が出來たものであらう其れ故此他にも數種の出版が有つた樣に思ふが今は慥かな記憶が無い。

江戸軟派研究　第八冊
定價貳拾五錢　送料貳錢

昭和二年三月二十六日發行　参編第九册（通編五十四册）

尾崎久彌著

第九册（通編第五十四册）

◎かりたさんの信仰　附ラセキさん

飯島花月

貴著軟派謾筆を拜讀しカリタさんの一篇に就て聊か所見を申試みる既に貴述の通りカリタさんの信仰はわが信州でも川中島方面に熾んで長野市外上水内郡若槻村字東條に有名な蚊里田神社があり信越線吉田驛の名所標にも同神社が示されて居る地名はカリタとは謂はぬが此地の東方信濃川を隔てた上島井部都住村は都住、中松、雁田（カリタ）の三部落を合併した村で其の雁田の岩松院に福島左衛門太夫正則の墓があるで聞えて居るが蚊里田神社とは何等の關係も持つて居ぬらしい元來カリタといふ地名は苅も雁も假借文字で恐らくは借り田則ち他村から借りた田とでも云ふ意味ではあるまいか併しこれはホンのあて推量で據ろある考では無い而してカリタさんは雁田の地名と鳫との語訓の相通と偶ま其地に存した天然又は人工の石棒との結合から此神名を唱へ出したものと解したいが越後のカリタさんは地名でも無い樣で且此地名が諸方に存するや否や又地名のある處石神ありや否やも詳知せぬから何とも斷言は出來ぬ。

扨前記信州長野在の蚊里田さんだが此神明治初年迄は苅田稻荷さんも蚊里田八幡とも稱し神體は陽石で男女腰より下の病、安産、縁結び等の祈願をして靈驗ありと謂はれ木石造のオハセ形を奉賽として献上したのが社頭に山積して居たことは恰も今日の下總の太田權現の拜殿の如くであつた今は奇麗に清められ八幡さまとして蚊里田神社の社號で祭られて居るが普通の信仰はなか〳〵盛んで越後方面からも參詣者が多い社に傳はる縁起は「科野佐々禮石」第十四卷に出て居る其要に曰く。

神功皇后三韓征伐の時御出産の憾みありしを武内宿禰有合ふ所の二つの石を取つて鎭護の加持し奉り御歸朝後筑前怡土郡蘆津浦今の子負原といふ處にて皇子御降誕あり其後人皇七十五代崇徳天皇の御宇右一の石根東をさして虚空を飛行し當國に落ち鎭りたまふといふ靈石神これなり云々（日下部博士の「二人行脚」に據れば筑前怡土郡深江村子負原の鎭懷石は今日現存せざる由である扨は信州へ飛んで來たものか誠に飛んでも無い沙汰である。）

カリタさんは果して越後西頸城郡のが本體か信州のが本家か、解らぬが信州では他から求めて神棚に祀つておく張拔きのオハセ形を直ちにカリタさんと稱して居るところもある依て私はカリタさんは地名が起原で轉じて其地の石神の名となり更に轉じて陽神の汎稱と成つたものでは無いかと憶想するが尚之に就いては廣く各地の信仰や傳說を調べた上で無ければ斷定は出來かねる（日光の木ムラ峠がキマラ峠と轉訛したといふ說の如きも參考とすべきであらう。）

北信から越後へ掛けてラセキ樣の信仰もなか〳〵熾んであるから事の序でに申述べる此神は新潟縣三島郡石地町の海岸に在つて神體は高三尺圓周二尺の石棒海中からあがつた物だと謂はれて居る今は社殿を設けて十二大明神と謂はれて居るさうだが尚私には大摩羅石神又はラセキ樣と稱して居る此神の信仰靈驗はカリタ神と大差無く而して信仰の地方的範圍も略伯仲して居るからカリタ樣を說くからにはラセキ樣をも說かねば神樣の御立腹が無いとも限らぬ恰も奧州の笠島道祖神と卷堀神社とが併立して居る樣に北信から越後に掛けてカリタラセキ兩神の信仰が交錯分布して居るのである。

ラセキ樣は裸石とも書かれる蓋しあて字乍ら宜しきを得て居ると思ふ又裸毬石としてラセキと假名を施したのを見た事もあるが普通には羅石と書かれる「松屋筆記」に今俗陰莖を閹つを羅切（ラセツ）と云へり摩羅を切るの略語云々とあり「皇帝紀抄」に羅の一字を以て男根にあてゝある又「きのふはけふの物語」にもラといふ語は屢見えて男根の瘡毒をラヤクとあるのも羅疫の意と思はれるされば ラセキ樣は羅の石の義でラセキの信仰は即ち石棒崇拜と解すべく元來石地町の十二明神には限らぬ筈だが此神が殊に古くからラセキで聞えて居るから其登錄商號と見て差支はあるまい殊に石地といふ町名既に此石を根據として與へられたものであらうと思ふから兎に角有名な有難い神樣の家元として御信心の方々の參拜をお勸めすると共に斯る古風俗の遺蹟が段々湮滅するを惜んで敢て提灯を持つ所以である。

「艶道俗説辯」の完本に就て

小松百亀作と、私の認定した半紙本「艶道俗説辯」は、本來は五冊本であるが、從來家藏には卷一の零本のみ、が此の零本によりて嘗て本誌上に紹介、作者に就ても百亀である事に言及した所、鶴岡春三郎氏より、此本卷五の内容を云ひ越された。結句、卷一と卷五とは、世上に略發表せられ了つたけれども、その間の卷二卷三卷四は、その内容不知であつた。それを今、その完本五冊（卷五は、影寫本）を手にし得たのである。

餘談であるが、此の完本入手の徑路をこゝに述べておく。此の本、元、名古屋平出文庫本である。昨秋十一月、此の平出本の賣立が當地（名古屋）に於て行はれた。その下見の當日、同業者間に混つて自分らもあつた。丁度東京から石川巖老も來てゐた。石川君と話しながら、自分は、その前日來刷られた目錄（賣立の一部目錄）によりて、此の「艶道俗説辯」を發見、その所在を探した。知れなかつた。勿論あの無數の藏本羅列であるから、隅から隅までは行き亘らなかつた。恐らく隨筆物の中に、一括、紛れ込んでゐたかと思ふ。到頭知れなかつた。主催の同業者に聞くと、印刷した目錄は、書目の記載によつて、目星しい物を拾つたといふから、恐らく有名無實で、先代以前に散佚したものかとも思つて、諦めた。それが今春一月の其中堂目錄に現れた。艶道俗説辯五（一冊寫本）といふのである。てつきり平出本と直感した。それは、此の本は、内容はともかく、本として割合に稀本の側に屬するとも考へられてゐたし、その證據自分の卷一發表以後、絶えず心掛けてゐたが、つひぞ何處の書目にも現れなかつた。その稀本の中である事と、内一冊寫本といふのが、平出文庫の賣立一部目錄と的中するからであつた。で飛立つばかり喜んだ。其中堂の家憲を破つて元日の朝、家人をして其中堂に電話をかけさせた。返事には、まだあるとの事、さうして取除けおきませう、との事。さうして、二日の朝私の所有となつたのである。寫本の分は第五卷目であつた。此の卷五は、嘗て鶴岡氏の謂はるゝ如く、割合にひどい内容である。それがため平出家に於て、此の一卷だけ以前に散佚、他の藏本によりて影寫したものか、又は平出家に於て購入のなり、此の卷五たけ賣惜んだためその賣主に乞つて、寫本として完本としたものか。（が、此の五冊本、第四卷目の題簽の所に、大尾とある所より推せば、卷五は、アトよりの補足し寫本かとも思へる。）とにかく此の第五卷の寫本も、影寫本であつて、且つ四冊と間もなき折の影寫であると思はれる。

後日、尚、其中堂主人から聞く所によると、此本は、私を始め、朝倉無聲氏、さては坪内逍遙先生、其の他數人の注文を受けたさうである。元來、此本、私の想像してゐた通り平出本であつたが、其中堂氏のいふ所には、平出賣立から直接彼の手に入つたものではなかつたさうである。東京の村口の賣立が其後にあつた。その當日、村口から買つたのであるさうな。其中堂主人もいうたが、結局奇縁

さいふものが、此の本、何かと一括されてあつたのを、賣立のをりは誰も氣がつかず、(また他に比べては氣のつく筈もない本だが)村口に買はれて東京へ行き、東京で何がしかで賣立に出たのを、そのをりの朝倉氏はじめ何人も氣がつかず、勿論其中堂主人は、朝早く行つたさうだが。其中堂に買はれて、また名古屋へ舞ひ戻り、幸はひ私の手に入つたのである。平出から村口、村口から其中堂、から私と、名古屋東京を一廻りしてゐたのである。それを私は、元來平出の賣立下見當日探してゐたのである。それにしても、其中堂が私に賣つた値は、村口の賣立の値より、高い筈である。すると、私の買値よりもより安いものとして村口氏は扱ひ、それをまた彼、其他も氣がつかずにゐたのだ。本などといふものは、かうした妙な廻り合せを作るのである。——以上此の本に就てのいはれ、冗言多謝。

○

以下、「艶道俗説辯」卷二、卷三、卷四の內容紹介である。

「艶道俗説辯」卷之二。品目

○戀する人を夢見れば其戀叶はぬといふ説○惚藥の説○下紐の説○傾城といふ説○太夫といふ説○白人といふ説○野郎といふ説○忰といふ説○シヤラ臭といふ説○忘八の説○水揚の説○衆道の説○姫はじめの説。以上

其の中の二三。

○惚くすりの説

俗説に云守宮のつがひをとらへ竹のふしを隔てゝ入れおくに一夜のほどに竹の節をくひぬきてつるむなりこれを引はなして山をへだてゝやくに其けぶり自然とひとつにあふといへり此いもりの黒やきをおもふ人にのますればかならずこゝろのまゝに成るといへり

按ずるに惚くすりの事所見なし熈々子といふ書に見へたるよし云傳るごとく守宮の交たるを生ながら霜となし是を妍尼の　取て煉りなびけんと思ふ女にしらせずしてこれをつくれば其人忙々と成りて付たる人をしたふと也此事崎陽の人の説なれども信じがたししかも尼の　漏などえしれぬ求がたきものを藥法に加へたるは虚説のしるし也但し守宮のしるしといふ事和漢ともに沙汰有張華が博物志に曰守宮以朱飼之滿三斤殺乾末以塗女人身有事便脫不爾如赤誌とあり古詩にも

臂上守宮何日消

鹿葱花落涙如レ雨
と作れり和哥には
ぬく履のかさなる事のかさなれば
いもりのしるし今はあらじな
ぬく履の重るといふは人の妻のみそか事すれば
沓のおのづからかさなるといへり又
わするなよたぶさに付し虫の色の
あせては人にいかゞこたへん
これはしるしの汗すべければあひがたしといへ
る也此返哥に
あせすとも我ぬりかへんもろこしの
いもりの守るかぎりこそあれ
三才圖會に鼠印の事みへたり因ミに記ス
○鼠印即外腎也令二人媚悦一鼠の外陰上に文
あり印に似たり正朔端午七夕十一十二月子の
時を以て北にむかつて刮取陰乾青嚢に盛
り男は左り女は右臂の上に繋る人見レ之懽悦
せざる事なし求る所心の如くなりとあり
○粋といふ説
色道にくらからぬ者を粋といふ俗説にものを推量りて能くしるものをいふとしかれは推とも書べし
といへり
按するに非なり粋の字睟に作るべし孟子に君子主レ色睟然見二於面一不レ言而喩といへるより出し俗語なり粋の字はあざやかと訓ず米のしらげたるをいふ也睟の字は万物に至て能其理を明らめいわずしてしりわくるをいふ也推の字いよ〳〵非なり悪推などいふに用んか
○しやら臭と云説
俗間に子細らしき僭上ものをしやら臭といふ
按ずるに長崎丸山にて遊女の事を唐人詞にシヤラといふたきものを身にふるゝゆへにしやらくさいとはいふなり
○男傾城といふ説
俗に冶郎かげ間にかぎらずすべて美男をさしておとこけいせいといへり
按るに男色の事伊訓を引て上古より已に此事有と五雑爼に見へたれば漢土にも久しき事也衞霊公は珍子瑕を愛周穆王ハ慈童にたわむれ漢の高祖は籍儒に迷ひ恵帝は鄧通哀帝ハ董賢

いづれも僻愛によりて政を妨世を亂りぬ男色の道女色にまさりて益なし是天地和合の謂にあらざれば也抑傾城國の事女色にのみいふべきにあらずかるが故に戰國策ニハ美男破ル老と記せりしかれば男けいせいともいふべきにや

○ひめはじめの說

暦ににひめはじめとあるを暦家の說には妃目始と書て何事にてもすべて女のしよさをいふとなりべにおはぐろはり仕事などの事なるべし俗間此說によりて夫婦の交りをもしそむる事と心得たるもの多し

按るに非也貝原好古の云馬のり初を飛馬始といふひめはじめとありて又馬乘そめとあるは暦のあやまり也といへり是を以て俗說のあやまりをしるべし

艶通俗說辯卷之三品目

○結ぶの神の說○娘に伊勢源氏をよませざる說○起請誓詞の說○男女相生の說○丙午の女を嫌ふ說○庚申の夜忍びあへば顯るゝと云說○心中の說○三十二相の說

已上

○娘に伊勢源氏をよませぬ說

俗說に云むすめをおしゆるに伊勢源氏の物語をよますればいたづら心いでき物かゝすれば文にものをいわせていたづらのなかだちとなるなり女は縫はりの外いたらぬものぞといふて手習さへさせぬものあり

按るに非也伊勢源氏は好色の事を書キたるものと聞て制するとみへたり愚なる事也男女ともによみかきは幼少よりおしへざれば叶はぬもの也そのうへ婦女のよみもの源氏狹衣いせ物語にしくものなし師につかず共常にもてあそばしむべし伊勢げんじの二語は好色の事を書たるものなれども容易に解するものにはあらずしかるに當時の娘の親かぶき芝居豐後ぶし等のひたゝけたる風のいたづらの道びきたるをしらで寵愛の余り遠慮なくゆるして見ものとしみだりに男になれまじへてじだらくにそだて十二三才よりうわ氣に成たるむすめに

筆とることを制したりとて何の益かあらん却てかの無筆なるやつが文などのまはりどをきをおかしく思ひ打つけにあつかましきわざをするもの也おや／＼のあやまりとしるべし

〇丙午の説

俗説にひのえ午の年に生れたる女を娶ればかならず夫にたゝるといふて大にいみ嫌へり

按るに丙午の説いにしへはなかりしことなり江戸にては八百屋お七火刑に行れし比より言出しけるとかや丙も火午も火に相當する故きらへるならんお七吉三郎ともにひのへ午の生れにてありし故其比忌けるよしきけり今の世もはらいひふらして緣込のさまたげとはなりぬ知りたる生れこそあらめ媒人は年をかくして午をば丑といひおとこもしらずしてつれそへばわざわひもなくて過ぬかやうの諺は大かた用ひぬぞよからん

(是れ、すでに丙午の妄説否認である。百數十年以前、すでに此卓見(?)を洩してゐるのである。丙午の祟妄信徒、此の百龜の言に羞ぢて可なりと、大に彼の爲に提灯を持ってやらざるを得ぬのである。)

艶道俗説辯卷の四品目

〇井手の下帶の說〇のしゆくの哥の說〇新枕の說〇常盤を貞女といふ說〇鹽谷が妻の說〇弓削道鏡大淫の說〇楠をおくれば緣きるゝと云說　已上

〇井出の下帶の說

近比印行の在原竹といふ草子に夫婦の圖を書て一首の哥をそへたり

とけかへし井手の下紐ゆきめくり
あふせうれしき玉川のみつ

按るに在はら竹の作者哥の心をも辨へずして思ひづるまゝに書しと見ゆ又井手と書べきを字の似たるにあやまりて井手と書たるなるべし此事は大和の國井出の里へむかし御幣使に内舍人なる男選にあたりて下りけるがやどりし家に八九才成女のわらはありていとやさしく見へければ末はわが身に添寐せよなどゝたはむれて紅絹のきぬとり出し下帶にせよとてとらせける扨てわかれて七八年を經て其ほとりをとをりけるにおとこは井出の里さへわ

すれたるにある家よりおとこの名をよびて出
あひふかくうらみて後のちぎりをなしけると
ぞこれを井出の下紐と云也哥に

　解かへし井手の下紐行めぐり
　　　あふせうれしき玉川の水

又おなじ草紙に艶文論。女志論等を述たり其
意を見るに律氣なる好色者と見へたり愚盲の
俳説論ずるにたらずといへども初心の爲に殆
害となるべき事もあり長ければしばらくおく
我黨の諸生これらのつたなき説を用ゆるもの
なし嘉尙すべきかな

○新　枕　の　説

俗に處女のはじめて男と寢るをにゐ枕といへり
按るに男女はじめて相逢ふをば幾度も新枕と
いふにや

　あらたまのとしの三とせを待わびて
　　たゞこよひこそ新まくらすれ

これははじめ逢たるおとこの年をこへてこざ
りければ異男にやくそくして逢ける夜はじめ
のおとこ來りければよみて出しける哥也令に
も夫他國へゆきて歸らざるに其女。子あるは
五年子なきは三年を限りて他人に嫁してくる
しからざるよし見へたり定家卿の哥に

　わするなよみとせの後の新枕
　　さたむはかりの月日なりとも

これらを以て考へしるべし

○岡ぼれの説（此の章、最後にあり。品目に脫せり。）

觚羅山人の仙藤優劣辨に云かぎやのお仙は天の
なせる麗質地物の上品みがゝずしてきれいに容
つくらずして美也櫛笄の長きを用ひずべに白粉の
粧を假らず八百八町に佳人と稱す衆人涎をながし
床机に鼻毛をのばして團子を買ども其價をとはず
茶をのめども其味をしらず茫然として見とるゝこ
とおせんが貌に祭のわたるがごとし爾のみならず
細路塲をふさげおし合ふて合見る者市のごとし近
所のだんご化してやき餅となる不吉の桃李みづか
ら道をなす哥舞伎に赴をかり錦畵に姿をうつすと
云々

按るに笠森のだんご娘は文朝が似貌に起り淺
草のやうじ娘は路考が狂言に名をなし各世に

鳴る今始メて出るにあらねども文につくり哥に唱ふ皆一時の興にのりて人情を引也人情いろを好ぬものなく茶店にかぎらず土弓も矢取に集りうり物も女房ではやるが故に祇園豆腐に女を重とし神樂巫女にも娘をゑらむ是を好して足をはこぶ客人は誠に人ぞよめきのあだ惚なり卑俗これを岡ぼれといふ瀬ゆく船を岸にてのぞむがごとく及ばざるを云なるべし思はぬ人をおもふさへ水ニゑをかくにたとへたり能はぬ戀に身をやつすは畫にかく餅に咽をならすがごとし喰んと欲れども能はずむなしく心を勞するのみ益なき主になづみて人の嘲りをしらざるはたわけの根元不睟のいたり也かくいへばとて一向に見じ聞じといふにはあらず人目ばか〱しからぬ樣に心得あるべし又人の家に行ても女あるじの顔打まもりてなれ〱しく物いひたるいとなめげに見ぐるし又顔も見まじ物もいわじとひすみ居たるも世なれぬ人とおぼえてわろし茶など持いづる女の貞見されたる道を過る女をふりかへり〱て見る人などみな見ぐるし女もおとこの貞きろ〱みたるはすき〱しくていやし又おのぼれとてすまし顔なるも心根はかられてあさまし

次ぎに、甞て鶏岡氏により輪廓だけ紹介せられたる第五巻の二三につき、掲げてみよう。巻五は他の巻に比して、稍性事に關する記述多く、憚るべきものがある。その比較的、穩當な二三である。全品目をも左に載せておく。

艶道俗説辯巻之五　品目

○枕繪を具足櫃へ入ル說○脚布の說○新嫁血なきを疑ふ說○產神の抓し跡といふ說○双子の說○墮胎の說○春三夏六の說○ふたなりの說○石女と云說○牛下未分の說

○墮　胎　の　說

俗間に月水流の法有て婦人の虛實をも窺はず月わかきものに服藥を用ひ大に脱血して命にあやまちあるもの多し

按に墮胎さする事不仁のいたりにて人のすべき事ならずされ共（以下十七行略）

五不男、五不女といふのは、五不男、天、漏法、犍、怯。五不女は、螺、紋、角、豚、皷、である。（凡て解は略す）

此の巻五は、惣じて性事に關するもの多く、がさりとて全く挑發的ではない。一種の性事教科書の觀である。

○

凡て此の艶道俗説辯全五巻、全内容は提示しなかつたが、がそれ程に名の如き「艶道」ではない。寧ろ世俗男女の迷信、風俗に對する辯駁である。教誡である。「艶道通鑑」が名の如き（勿論聯想する我らが悪いが）軟本ではないと同様である。

が、小松百龜は、有名な艶書家であり、家は藥種屋であつた。その男の作としては、學者めいた、硬いものである。藥種屋らしい點は、此の俗説辯にもちよい〳〵現れてゐる。とにかく一種の軟雜學者であつた。彼の全著作を總べていふのではないが、とにかく記錄には足りる男であると思ふ。さうして形式が、井澤蟠龍の「廣益俗説辯」に似てゐるも面白い。（無論年代からいうても、百龜がこれを摸したのである。）

○内地出版　浮世繪研究書目解題の補遺

浮世繪に交渉ある特殊著書の中で、拙著二冊をうつかり落した。「江戸軟派雜考」には、浮世繪師の心理、浮世繪の肉体美、浮世繪の賣春讃美、死繪考、東風吹江戸繪桒、浮世繪風景畫漫談、廣重畫最初の東都名所、廣重の立齋に就て、浮世繪漫錄、本朝艶畫考、艶本に於ける春信の推奬、エロチツクスに滲む心持、の數篇。「軟派漫筆」では、春信の一枚繪、描かれしもの、大判横繪忠臣藏のいろ〳〵、浮世繪の虎等。及び研究書の一として、新刊拙著の「浮世繪美人大首畫の研究」の一册。尚、圖錄類では、「長崎版畫集」の正續（永見氏編）。新刊の季水書房の「元祿版畫聚英」なども、無論遺れてはならない。

體驗派の小說

體驗派の色彩濃厚なものに就て、考へてみよう。さて我等の近世文藝の中で、孰れが、此の「体驗派」に、最も近いか。無論、「洒落本」だと自分は思ふのである。そのかみの浮世草紙にも、稍此の「体驗」が、其の臭がせぬでもない。が、それは、西鶴の「一代男」などの類に、さうか？と思はれるのみである。初期の怪談小說、同じく讀本の類、凡て多く支那文學主に小說類の飜案、印度又は本朝上代のそれであつた」と自分は思ふ。後の讀本類は、また近松以下の淨瑠璃に借りたり、又は歌舞伎に藉りたり、又は講談師の講釋と交渉する所が多かつた。合卷類も然りである。勿論、合卷でも草双紙でも支那小說類に藉りたり、又は本朝平安朝頃の小說に借りたものもあつた。或は、合卷の如きは、間々當時流行作の讀本の作り替へ又は踏襲といつたものもあつた。とにかく獨自な境地を拓いたものは、洒落本の他に餘り其の適當なるを見ない。唯、こゝに問題にすべきは、滑稽本と黃表紙と噺本と人情本と此四者であらうと思ふ。以下、此の四者に就ての、私のドグマ的な感じを述べてみよう。

滑稽本は、初めにもあり、又、三馬、一九、鯉丈等の名作家を得て、後にも、否より多く榮えた。が、此の滑稽本、やはり比較的に、此の「体驗」を、洒落本よりは少量に、他よりは多量に藏してゐるかと思ふ。初期滑稽本の風來山人の諸作の如きは、此の「体驗」、實感味のそれに於て著しいかと思ふ。少くとも自己本位の記述が多いのである。作者の心的徑路は、濃厚に滲み出てゐると思ふ。然るものとしてはである。天明期、睟川子（西村定雅。）――上方版――の諸作などは、或は洒落本に目すべきものもあつて、遊里情調を傍觀的にものしたといふよりは、寧ろ「体驗」の味に於て著しいかと思はれる。享和以後寫實（大分ごまかし氣味もあつたが）に根柢を置き、作爲の迹を少く見せかけた一

九、三馬の輩に至つて、其の行文の一新と共に寫實味に加ふる實感味の豊かなるものあるを想はしめるに足りた。が、「体驗」とは、まだ霞一重であつたやうに思ふ。彼等は、「体驗」といふには、稍興味中心に追はれがちであつた。この興味中心であることが禍して、彼等に、未だ、駄洒落と作爲の迹と當時風俗の傍觀的描寫の、多少の熱意さとを見せてゐるだけで、渾然たる体驗の感じは起らなかつた。

鯉丈の「八笑人」の類に至ると、稍、「体驗」の味が著しい。彼等は、自己の享樂仲間を直寫したと思はれるからである。從來の作爲の迹は、多少ありながら、從つて興味中心の點もありながらも、なほそれ以上、彼等は、かの如き遊惰、駄洒落、遊戯、の生活そのものであつたと思はれる。彼等は、讀者に一切お構ひなしである。その代表者として、筆を執つた、と思はれる鯉丈（その亞流の金鶩）の輩は、譫むに餘りある實感、寧ろ遊惰安逸の「体驗」があつたと思はれるのである。その作者が、彼等團隊の中の誰に當るかは、一々指示に困難ではあらうが、とにかく彼らの中の一人、又は數人に、作者の体驗が投影せられてゐる筈である。

黄表紙も、末期の、合巻物に近くなつた敵討物、又は讀本型に近くなつた物語物などは除き、初期中期、殊に中期には、洒落本と相拮抗して、隨分彼にをさ〳〵劣らぬ遊里描寫、しかも寸鐵人を刺す式のものがないではなかつた。その簡潔な描寫、詞書の二三にも、作者の体驗が閃いてゐるではないか。勿論黄表紙の特色は、洒落本が遊里小説なるに反して、社會小説（世相、政治等）であつたにもせよ、黄表紙中、自からにして存在する遊里材料には、その配材を古代の人物か又は物語めくものに藉りてゐるものあるにせよ、とにかく洒落本の如き直寫細叙、露出ならざるも、而も「体驗」味の鮮やかなるものあるを感ずるのである。

噺本、これも、「体驗」ををり〳〵見せつけられる。「体驗」の機智的方面をしかも壓搾したものゝ如

き感じがある。一個斷本の全內容が然りといふのではない。偶々にである。例の喜三二の「柳巷訛言」の如きは、惟ふに全部、その折々の彼の實感、体驗ではなかつたらうか。其他蒟蒻本型斷本の中に現れる小咄は、爾る感あるもの多いことを自分は見てきた。市井の雜事、それから來る滑稽、機智の働きが招致する得意、又は失笑、さうしたものも、やはり作者の汎い意味に於ける「体驗」ではなかつたらうか。

人情本も亦、体驗臭若干を覺える。恰も京傳等が、大通の幇間同然として隨行見聞し歩いたと同樣なものがあつたらうとは思へる。現に、春水の如き。然し春水は、京傳らの如き遊里描寫の直截的なるを避けて、迂餘曲折、樣々な人物の直接間接なるを混へ、實感空想織り交ぜて、婦女子侗解する程度に書き上げた。それだけ實感味は稀薄に、却つて野卑なる動機から來た挑發意識のみ遺れりである。これが、私らから謂はしたらば、人情本を飽かしむる所以である。作者の燃犀した實感が出てゐない。强ひて甘からしめんとし、媚びんとしつゝあるのである。況んや切々たる「体驗」の嚴肅感などは、遊戲漫作の裡に、打ち消されてゐる。人若し、試みに、春水の、人情本中の名作たりといふ「梅曆」シリースの一篇一冊を見るも、容易に肯づけよう。曲山人は、稍風格を異にするが、凡ては、所謂甘き情話物、今日の大衆物めいてゐて、体驗の辛辣さはないのである。金水然り、其他然り。唯、人情本は、稀に見る、狹斜情調描寫の天才(此の方面に於ける)たる英泉、さては國直などの諸浮世繪師によりて、其の挿繪口繪の實感甚大、所謂文字ならで繪畫に據りたる、端的なる「体驗」の迹、その些少ながらも認められることに、我らは滿足を求めるのである。

倩、肝腎の洒落本であるが、知らるゝ如く、これこそ唯一体驗の鮮やかな文學と慫慂したい。(がそれが最高なりとするのではない。)洒落本作家にも色々あつた。初期の逸名の學者武士どもの作者は、恐らくは彼ら自身客たるものであつた、それの体驗記錄であつたであらう。殊に存在明確な喜三二、

歸橋の如きは、かみとならざるも自ら蕩費を賄ひ得るだけの身分と融通のきく餘裕と資力とにあつたらうと思ふ。中期後期の作者、例へば京傳三馬一九（三馬は、稍かみの色彩菲かつたやうにも根柢なく思へるが。）輩の如き、滔々乎として、所謂かみ（太鼓末社）の役を勤めたものであつたらう。一九の如き、自ら客たる機會もあつたであらうが、それらは端店に於ける滿足本位の事で、彼らの作に現はれた客、女郎の描寫は、自己當事者といふよりもかみとなりての觀察が、その機會を與へてゐはしまいか。遊蕩の氣分、その沈潛、悠々たる慘透境は、彼等獨自ではなかつたやうに思ふ。京傳も然なりの嫌疑がある。（といふと、地下の彼の望は、罵られたりとして怒るかも知れないが。）がかみ、當事者如何に拘らず、とにかく、彼等は、遊里を、直截の見聞場、試煉場とした。そこに彼等に獨得な、鋭い「体驗」を生んでゐた。が、それが、中期以後の京傳輩に見るがやうな、作爲の迹比較的に乏しいだけ、初期、中期の或者、その作家に私は、却つて懷しみを振り向けたい。

云ひ忘れたが、八文字屋本（浮世草紙の晩期物）には、「体驗」はない、がその代り、彼等作家のみ得た空想、幻影があり、それが体驗らしくあやなされ、物語的に作爲せられてゐる事を述べておきたい。

以上、間々ドグマを混じた此の小論を擱く。――二月二十三日夜

○「滑稽道中膝車」に就て

「滑稽道中膝車」は、魯文の著として、初編に明治十五年十月の序がある、爲に、高木文氏の「明治戲曲小說大觀」にも、明治物として取入れられてゐるが、これは、同じく魯文の初編萬延元年の「滑稽富士詣」と同じ物である。その改題であると、及び、初編などの口繪が、江戸を明治の背景に彫りかへ、序を二三變へ、且つ富士詣を道中膝車と埋木しただけで、全く同一版木の刷り直しである。共に十册本である。

大學の摸擬本（下）

子曰聽二狼狽一吾猶レ人必也使レ無二狼狽一乎無レ錢者不レ得レ盡二其辭一大畏二入主志一此謂レ知レ事

つとめのすがたしばしかくれんなんぼせつなひとつてぢぐちまでが、せつなひやつさ。（右隅の障子に）

南一のことでかつこうがわるひ、今まで太郎がところで三両ばかりおごつてきたから、あしたうちへとりにきてくださいな（第八丁裏と第九丁表とに跨がつた障子に書かれた詞。但し「くださいな」は、左り第九丁表の方也）（以上、第八丁裏）

「此だんはあたじけないともだちどうしが、二しゆみせへふりこみにあがつた所が、ひとりのやつがをぶさつてあそぶきで、つとめをとりにくるとおめへそこからやつてくんねへといゝければ、むかふのやつもかすりはくはず、おれがつとめばかりでよけいはないといゝければ、此くらいなたてひきはしてくれそふなものだ、ぬしのこゝろいきにおそれ入と、たつた二しゆのつとめにうろたへたことなり、よくあるてんなり、つゝしむべし〳〵。

「もしそれはちと古風ないゝわけでござります、さやうなことは二朱のうみへさらり〳〵、つとめはらひましよつとめ。（第八丁裏、第九丁表、綴目のすぐ左、障子の中に）

きん〳〵なふうのきやく人だかのふ（その左、廊下を歩ゝ妓。右の一人の詞。上の障子に書かるゝ）

「ひん〳〵だろうよ。（妓の左の一人の詞。左隅の障子の中に。）（以上、第九丁表。）

笑止曰鳥目視最後十手所二指切一其恐歟乎

「ぜに金のあるきやくと見ると、ほれもしないで

いたひゆびをきり、もん日をしほはせるの夜具をこしらへさせるのとは、もしへおそろしいじやァごぜへせぬか。

「どうりでおめへはせいがひくうおつす、おやの日にゆびをきつて、それでせいがひくいな

（相手の妓の指を、切らうとしてゐる妓の詞）

「わつちやァけふはおやの日でおつす、ごふしいしやう。（指を切らせようとして、顔に袖、泣いてゐる妓）

富潤レ屋見徳潤レ身心廣大夜發。故亭子誠二其意一（とみはいへをうるほしけんとくはみをうるほすこゝろひろきだいよたかなりかるがゆへにていしはそのこゝろいきをまことにす）

「かねつきごうのよたかゞ、いゝけんとくがあると、とみの札をひたものかつたら、ごつさり百両とりやした、そこで今では子どもをかつて、ていしをあんらくにすごすといふやつさ、よたかにさへかういふたてひきがあるから、おいらんかぶのたてひきをしらぬは、はちださいふことなり。

「又きやく人は、あいだにとみの札をかつてみなといふしめし也

てつぽうみせのあねさんが、つらがふぐのやうだからいゝ。（地廻りの一人）

「これからみかづきでもいくべい。（同の他の一人）

（鐵砲店の体――店先の、鰒のやうな姐さん。左、用心と書いた軒行燈の下に立つた二人の地廻り。）（以上、第十丁表）

心不レ在レ焉視而不レ逢喚而不レ聞暗闇而不レ知二其譯合一（こゝろこゝにあらざればみれどもあはれずよべどもきこへずくらやみでもそのわけやいがしれぬ）

「古語に内でせかれて茶屋ではあげずと云々、せかれたきやくが、まいばんこうしさきへいつて、ぶらつけどもどうもつうくつができず、ヱ、じれつてうおつす。

「これきんこう、どうぞよびだすくめんはあるめへか。

「よびだすくめんより、むかふで十めんをつくつていらア。

（格子先、右、息子。左、覗、きんこう。）（以上、第十丁裏）

高聲曰如二杓子定木一心誠求レ山雖レ不レ中不レ遠矣未レ有二學レ養レ氣而后揺奴一者也（也の字の下へ續けて）諸事ちよく〳〵らをいつて、いゝとみるともん日をうけやひ、女良のたて引こんなことばかりして、かみになつてあそぶやつをやましといふ、どこぞであたらずといふことなし、こんな人だから、だれもかするやつはないといふことなり。

あの女良を一ばんかいてみて下せいナ。

あいつも手のあるものさ、なんでもいくがよしさ、ア、手のあるほうへ〳〵、これではめかくしのやうだ。

（煙管を啣へた男と對ふ男。間に文二通などがある。孰れもいみごもか。）（以上一第十丁表。）

一家貧一向貧男二一家一揺言一國揺不聞一人田圃拔北國作レ乱其氣如レ此此謂二一隨破レ事一人定胸

つかひはたしてつまらぬやつ、やけになつて一け一もんをゆすつてみても、いつこくをいつてゆすりをきかねば、とてもつまらぬ女郎としんちうでもしやうと、一人たんぼでぬいてみればかねのわきざしゆへ、しばゐのやうにはゆくまひとしあんするさきは、ちつともきがなげれば、しんちうとはばからしふをつすよと、大ごへでいへば、うち中らんちきさはぎ、あんまりむしがよふおつすにくらしふおつすなど〻、むしやうにおつすづくしでばかものになるといふことなるぞ。

「おつすとはだるまのもつてゐるもの〻やうなれどそれとは大ちがひ。

（第十二丁の右下、人物の足下の左右）おらがおやぢもきのきかねへ、もうちつといゝしんないがありさうなものだ、どいつも一文もかさねへ、しんちうでもしべいか、うまくしんでくれゝばいいがほんのたんぼ八ツあたりだ。

「きがせくかしてわからぬ、ひとりごとをいふ、

これとう人のねごとなりとゝる人あれど、さうみるはあしく、つう人のこゞとゝみるべし。

（遠見、廓内の屋根見ゆ、川、土橋架り、手前の堤を、駕を擬げながら、若者、振向いた形。）（此の繪、第十一丁裏より第十二丁表に亘る）以上、第十一丁裏より第十二丁表。）

詩曰物能用足其箸錦錦此子于レ床這入宜ニ其客人一宜ニ其客人一而后可三以教ニ食呑一

いはゆるこれは手のある女郎にして、しよくわいのきやくでもざしきのうちから、しうちよくこさがべんじ、さこへはいつたのちも、のみくひまできのつく女郎にて、これをきやくさりといふ。

ぬしはだれにかよくにておいでなんす

さうだあろう、今はこんなかほがはやる

（三ツ蒲團の上、妓と客、妓は煙管を持つ）（以上、第十二丁裏。）

詩曰樂只君子蛸之疣蛸之所レ呑呑レ之蛸之所レ惡惡レ之此之謂ニ蛸之規摸一

「此段は前段のごとくこれほど手のある女郎なれば、さだめてこれは　ならんとせいじんもさとり給ふ語なり、この　と仰られたは、ゐみしんちやうなることなり、のちのくんしくふうあるべし。

「すでにゆらどのゝ哥に、手をだして足をいたゞくたこざかなとよまれければ、九太夫の下の句に、「わがころもでにゆきはふりつゝとつけられたとさ、アハゝゝ

（第十二丁裏とツヅキ繪にて、火鉢に禿火をふく体。）（以上、第十三丁表。）

詩曰堰人彼難題此意趣巖巖堰堰客山神具難儀膽有ニ文章一者不レ可ニ以不レ愼僻則爲ニ山神生靈一矣

此段は女ぼうのあるもの女郎にはまつてむしやうにいく、そこで女ぼうがせきこんで、いろ〳〵なんだいをいゝかけて、やきもちをやくことなり、又女郎かいゆへしんだいもわるくなつたから、カヽアはともになんぎをみる、文などをきたなら、ずいぶんかくすがよし、ひよつとみつかるとぢきにつのがはへて、おんりやう

となる。

「ごふか此こうしやくは、だうじやうじのきりをみるやうだ。

サア此ふみはなんだへ、これでもかくしなさるか、エヽほんにむしのいゝ、（女房）その文はなによ、なにだからなんだア、なんだらぼうしのかきのたね、どこぞのだるまのゐんの下で、ひろつたな。

（第十三丁裏より第十四丁表。亭主と女房。女房は、煙管を持つて、文を突きつけてゐる。亭主は頭を掻いてゐる。）（以上、第十三丁裏より第十四丁表。）

是故小言悖而言者亦逆而行嬶悖而言者亦逆而行

（このゆへにこごとさかんにいふときはまたさかさからつてゆくか、あさかんにいふときはまたさかさからつてゆく）

前段のごさくに、やきもちげんくはになつてくるさ、かゝあがこごとをいへば、いふほど、ていしゆはかんしやくやけになつていきかける、そこでかゝあがさかんにいふ、ていしゆもまけずさかんにゆく、これなさかんごとこなたしといふ、その心は雨ほうがあつくなつてゐる。

いゝともどうともかつてにしなせへ、わたしもさとへ出てゆかア。

そつちがおやざとへゆけば、こつちはいろざとへゆかア。（拗れた女房と出かける亭主。）（以上、第十四丁裏。）

唯人々放二埒之一逆レ惜與同中間一此謂二唯人々爲能茶人能惡人

（たゞにんにんこれをほうらつにしてをしいことをしりぞいてともにちうげんになじこれをたゞにんにんようひとをちやにしひとをよくにくゝするといふ）

これ此巻の惣くゝりにして、たゞ人々みもちほうらつにして、おしひこさだ、ついにゐた所もしりぞき、折介奉公同前の身のうへとなる、これといふも人のゐけんもちやにしたゆへ、いろにそやされ、こんななりになられた、ツヽテン〳〵、つゝしむべし〳〵。

おれもむかしは女郎かいだが、今は百に四ツのよたかもかへぬ、それも百にもたゝぬむだをいふもんだ、これだから身がもてねへ。

（木戸口、吠へる犬。風呂敷包を背負ひて、油揚でも手に提げて、縞端折り折介の作。）（以上、第十五丁表。）

芝全交戯作　駒

凡傳十章前四章憶論二手習指南一後六

（およそてんのじふしやうさきのししやうさまはたしかてならひしなんをろんぜのちのりく）

章細論ニ烏目勘定一其第五章乃量レ米之要第六章乃出レ銅之本何歟彼乎尤爲ニ當務之者阿房一讀者不レ可下以レ惡笑レ上之

大客嗅句　畢

（以上、第十五丁裏）

○

右、「遊妓寔卯角文字」の大体である。黄表紙物としては、風變りなもの、恐らく後至の「傾城情史大客」や、「大學笑句」の模型となつたものではなからうか。三馬がこれを名作二十三部の中に選んだその理由は知る由もないが、恐らくは異様な構想に感嘆しての事であらう。それにしても、「明和伎鑑」が、武鑑の形式を眞似たといふ理由で、發禁絶版、版元をして体刑（此の事項有名、周知の事なれば略く。）にも遭はしめるならば、此の經典の一たる大學に摸擬した、しかも經典をして一旦に漁色記事に書換へた此の「遊妓寔卯角文字」は、當然「明和伎鑑」と同樣の處分に遭つてよかりさうなものである。その間の寛嚴、又は差等にも由るのであらうか。或は、此の本、貼外題が、明らかに「大學嗅句」と顯れてゐないせゐでもあるか。さては、上司は、大名階級に對するその存意は、一經典の「大學」よりも重しと見たのであるか。であれば、經學の事の遊戯化を、一武鑑の遊戯化よりも輕く見たわけである。（勿論、これは事實であつたと思ふ。）

と理窟をこねて來なくとも、「明和伎鑑」は、餘りに模型的露骨である。此の「大學嗅句」は、摸擬の程度、寧ろ彼に胎を藉り乍ら第二となしてゐる。そこに、「伎鑑」ほどの直截の聯想がない。それが、妙趣向なりとして、拍案せしめるだけの價値はある。恐らくは、讀者（その中の上司も）は、此の心持にゐたらう。「大學嗅句」を紹介して、思はずも「明和伎鑑」との比較に及んだ。比較すべからざるもの、比較かも知れぬ。が、それ程に「明和伎鑑」の出版禍を苛酷なりと思へばこそである。

京・江戸の詞と錦繪評判

裏話滑稽烏歌話(からすかわ)(上下二卷。中本)の下之卷に、京と江戸との詞の相違がある。下卷表紙の裏、見返しに赤摺になつたものである。

京にて		江戸にて
すきといふ	を	まよつたト云
すいな	を	つう
ゑらごり	を	あつい
どないに	を	どんなに
とびやうもない	を	たいへん
ごたがひ	を	みりつち
ほんまに	を	ほんとうに
(おくしたも)ぶさいく	を	(くんなくだらし)ざまア
あんぢよう	を	すつかり
めんざい	を	おつこう
てうぶく	を	たきつける
すこをなぐる	を	あたまをはる
ねぶる	を	なめる
いらふ	を	くじる
ごろぼう	を	□しら
ぬすつと	を	ごろぼう
め ろ	を	あ ま
おやま	を	ぢようろ
げいこ	を	げいしや
まひ子	を	おどりこ
ひごや	を	きりみせ
見 せ	を	けんげん
すこい	を	こすい
ほんづめ	を	としま
ちうづめ わかづめ	を	はんげんぶゝ しんぞう
おかみさん上々	を	おかみさん町家
ひこはち	を	まめぞう
芝居のば	を	きりおとし
ね き	を	そ ば

と、以上が擧げてある。尙、これに注意を要するは、發音表象の文献上には、定論があるかも知れないが、この本にも、主に撥音を、〇を以て現はしてゐる事である。此の撥音に、〇を用ゐることは我らは、洒落本に多くを見受けた。寬政期のものに、これが多かつた。然るに、これが、京都版の、文政四年巳春正月發行の此の「烏歌話」にも應用せられてゐる。此の撥音符號〇は、何時から用ゐられ

何時に已んだか。少くとも寛政頃の洒落本と、此の文政の滑稽本には用ゐられてゐる。その前後にあらば、教を受けたい。撥音を○にて現はす、例へば、此の本にもある「まよつた」を「まよつ゜た」と書いたり、すつかりをすつ゜かりの類である。がまた暢音にも、この○を代用したらしい。（洒落本は、撥音のみの記憶である。）即ち此の本の、京のおやまを、江戸のぢ゜ようろと書いたり、江戸のすつかりを京のあんぢ゜ようと書いたりしてゐることである。さうかと思へば、本文には、「ちよつと」（一寸の意）を「ち゜よつと」と書いてゐたりしてゐる。

扨、此の「烏歌話」その下巻は、ある新町の果の姿形の美人お芦といふのが、臑右ヱ門の居宅へ年頭に來ての話。その家内のお杖との對話に始まつてゐる。その中、左の會話がある。

おあし「さやうかへ、わたしはアノ大坂の丹那さんに、江戸繪をたんともらふさかい、子達への年玉にとおもふてもつて來た、ちよつと見なされ、ゑろううつくしうかいてある、おつる「それはマアおかじけなう、ヲヽほんにきようというつくしいものじやナア、マア此やうなきりやうのよいおなごがよの中にあろかいな、おあし「これはナ、ゑどの吉原の太夫さんじやハイナ、あつちではナ、おいらんといふといナ、錦畫はどう見ても江戸のことじやナア、からす「フン、そりやアまた、おめへ云はずとも知れたことつた、ドレ見せなせへ、なるほどよくけへた、こりやア吉原でも名に聞えた女郎だ、つる「何んといふおやまさんじやいナ、からす「爰にこれほど、名がかいてあるは、おめへ目くらでなくは、讀んで見なせへ、つる「わたしはようよまんハイナ、おあし「からすさん何んと書いておますいナ、からす「此うへの字をいち字わすれた、つる「それは扇といふ字かいナ、からす「ヲヽ夫／＼扇と云字だ、おあし「其下の字ハへ。

で、これで扇屋内花扇だといふのである。以下余り面白くもないもの。奥附によると、書林、京繩手通り大和橋下ル町山田屋五兵衞。著作は、洛東伴中義、書賛は、同じく春川五七。江戸、小林東園の彫刻とある。伴中義とは不詳。（恐らくは、假名、春川五七の事でもあらうか。）春川五七は、卷尾豫告によると、此の烏歌話後編上下二卷を、作弁自書賛で著してゐるやうであるが、未刊であらう。倘、奥附の次に、「神社佛閣心願言」といふのも、春川五七書作、近刻とある。

京版滑稽本の零本、抄出する事如斯。

寄贈紹介

○東海道に關する圖書　第八、第九　金田晴正編

右二輯、稗史小説、隨筆物等に觸れたものである。板本、飜刻本と一々擧げ、悉しい解題である。編者の努力尊むべし。（價不明、大坂市南區日本橋四丁目高尾書店）

○江戸時代東海旅行圖書繪畫展覽會目錄

帝國圖書館主催の目錄である。品川驛より島田驛まで。卷頭コロタイプ刷二葉。（四六判五四頁。東京上野、帝國圖書館）

○狂歌集目錄　野崎左文編

新群書類從書目本より完璧である。書名索引を添へてゐられる。（非賣。明治聖德記念學會）

○青[illegible]　川上澄生著

同氏の自畫自刻自刷の詩集である。詩のナイーヴな事、繪のエキゾチックな事、共によし。三十部限定出版。（和紙摺和綴、表紙色摺。非賣）

○明治文藝研究資料展覽會目錄

愛書趣味社主催のものである。菊判四六頁、銅版繪數葉。好參考（頒布費一圓。）

○江戸時代文化　創刊號

菊判口繪入三十頁。体裁内容期待以上の出來榮え。要目、隅田川の船（如電）○江戸の櫻見（雄作）○江戸の楊枝店（雪湖）○蔦重三郎出版繪本（天童）○殘口の惡口（省三）○猿若町三座の沿革（岡村金太郎）○竹清饒舌（竹清）等、豊富なものである。（定價三十五錢。東京市外下澁谷、國學院大學内、江戸時代文化研究會）

（一月號）藥蹟五○清元研究十九○集古卯ノ一○書物禮讃五○ブックレビュー○愛書趣味八○江戸時代（一月號並に二月號）川柳鯱鉾○長唄○國學院雜誌○新舊時代○紙魚○歷史地理○傳説○歌舞伎○風俗研究○やなぎ樽研究○墓碑史蹟研究○性の智識（一月二月三月號）名古屋研究○黑潮○國語と國文學○本道樂

依託書目

□半紙○中本△小本■大本

□武勇魁圖會初編（英泉繪本）六十□北齋畫譜上篇（上摺）八十□三部俳優水滸傳序卷（德升著、初代國貞畫）一圓○英泉畫譜初編（美本）一圓○畫本錦之濺（英泉畫本、上本）一圓○妙々戯談下（芝甈評判記）八十○江戸名物詩（方外道人）二圓半△端唄部類都々逸の部（能六齋）横本七十○よしこの四季の詠四編（一荷堂半水）七十○粹のふところ三編（同、粗本）三十□胸算用嘘の店卸（北齋自畫作黄表紙稿本。稀書複製會本）二圓○春色田家の花（春水作。人情本）十五冊大揃三圓□狂歌友の垣穗（拉鬼亭力丸編、繪入）八十○當世虎の卷（田螺金魚）全九冊五圓五十○下界圖會（春扇畫）二圓廿○花街篇（石川巖校訂）二圓八十□群蝶畫英（上本合一冊）二圓八十□立身大福帳（元祿刊浮世草紙。畫入三——六）八圓○俳諧御傘（横、合五冊）十圓■俳家奇人談（上本六冊揃）八圓□浮世繪の諸派（原榮。和二冊）八圓◎中形錦繪六十余州見立（初摺大揃極上）國貞畫十五圓◎同、江戸名所四十八景（上揃、廣重）二十圓（以下洋本）○小夜嵐物語（西鶴著、金櫻堂版）一圓五十○生殖器機能障害論（ヒューネル著、鷲尾浩譯）二圓五十○性欲と我等が文化（ブロッホ著。同）三圓□歌舞伎年代記（新本）六圓半□シルレン紀念號（帝國文學）一圓□花袋集六十□十人十色（鷗外）五十△小品文集（花袋葉舟）二冊七十△花紅葉（博文館）三十○西鶴文集二冊黄表紙十種禪林法語集（有朋堂文庫）四冊十圓○北齋改名考（桑原羊次郎）七十□江戸時代小説飜刻物索引上下二冊揃（江戸軟派研究の内）七十□歌舞伎（前期。一一○、一三一。一四七）三冊六十■風俗畫報（第二號より第五十號迄の内）三十五冊七圓■同（増刊圖會ものなど）二十一冊三圓五十

著者より　別項廣告の浮世繪版畫普及會の事業は、頗る立派なもの且つ廉價物。版は、東京木版畫粋社です。注文してあげて下さい。小生の友人です○拙著「浮世繪美人大首畫の研究」愈々去る十八日發行しました○花の笑む頃、京阪地方を遍歷したい積りです。久しぶりに。（二月二十六日）

定價表

一冊	貳拾五錢	郵税貳錢
六冊分	税共壹圓四拾錢	
十二冊分	同　貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和二年二月二十八日印刷
昭和二年三月一日發行　（貳拾五錢）

編輯兼發行者　尾崎久彌
印刷者　英比貞造
名古屋市中區大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

昭和二年二月二十八日印刷
昭和二年三月一日發行

江戸軟派研究 第九册

定價貳拾五錢 送費貳錢

昭和二年四月一日發行 [illegible]編 第十册（五十五册）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第十册
（通編第五十五册）

本文

淨瑠璃の南朝物
○年表・興行年表・解題など。

催情畫風概論

宮驛遊里異聞
——「幸好古事」と文化二年細見。

宮驛遊里異聞

○稿本「幸好古事」（よしくこと）さいふもの一冊を見た。中本二三十丁。本文には、毎丁、妓女の樣々な姿態の繪が着色で描かれ、その上に、都々一（無論創成頃のどゝ一）が書かれ、その裏には、そのどゝ一の文句の解釋が、こじつけて說かれてある。無論正解のものではない。序文があつて、その筆者は、榮華支不理窟（榮華支は、肩書）さある。誰の匿名かは分らない。參考のために、この本全部に、解さしては附會されながらも、拔かれてゐるどゝ一の文句そのものは、正のものであるから、その全部を、茲に登載しておく。無論、私は、どゝ一が宮で生れ、その生れた當時間もない頃の、即ち原始的どゝ一ださして、これを發表するのである。それは、私の校本「どゝ一ぶし根本集」附錄並に本文頭註、さては本誌に發表した「都々一節起原考」及び「宮のお龜考」其他の、一個有力な傍證さしてである。また昨年その全文を本誌に登載した、宮驛原始どゝ一の大集本「音曲神戸節」との對照にも可なりさ思うての事である。

×

○歸らしやんせさ云ふたがむりかあれをきかんせあけのかれ

客をれかして小庭を行ば月におまへの影法師

二本さしたさけむたいぶろなわしもかんざし二本あし

きつさだきしめ顏うち詠めかうもかはゆいものかいな

思ひだし〳〵またさりあげてふみの先をばかみしめる

朝の馴染に袖引留てしんぼしなよさ目になみだ

蟬さほたるを両手に持てこがれさせたりなかせたり

あかる障子にしら梅かいて客は鶯きてさまる

客をたゝしてそのあさみればにくや枕が二つ有

なまじなま中初會に出ずばこんなくろふはせまいもの

○松の葉のやうにせまいきをもつな廣い芭蕉葉のきをもちやれ

すかんおさこのしんじつよりはすいたをさこのうそがよい

お龜買ふやつあたまでしれるあぶらつけずの二つ折

○橋の上から文さり落し水に二人りが名を流す

長い年季をわしや持ながら女房約束こけな事

わしが願ふはお聖天さまよぬしのこゝろのちらぬよふ

あんな男に氣をかきよよりは山の木にかきよ松の木に

おじやれはなそう小松の影でまつの葉よりもこまやかに

今の大童山は化物さうでないか皃はおく（ぐカ）らもち目は枇杷の目

いふなかたるないろにもだすな諸事はたがひのむれに有

これだけがその全歌で、跋が別に文をなしており、その跋の中には、當時神戸の大樓、永樂・駿河の二個の名がある。さて年代であるが、これは、右の歌の中の、大童山でも知れるが、跋に幸はひ、支がある。曰く「さらの正月」。さて此のさらであるが、恐らくは文化三年の寅であらう。その證は、大童山の番附にあつたのは、寛政七年より九年である。それに、この所謂お龜の源泉――例の宮驛樂出の鷄飯屋は、寛政末であるからである。即ち寛政文化頃で、寅は、寛政六年さ文化三年である。やはり「どゝ一ぶし根元集」にあつた、お龜が宮驛賣女の惣名さなり、且つ神戸などが榮え出したのは、享和二年頃であるから、此の寅はそれから四五年の文化三であらう。その頃まで此の大童山の唄が、殘つてゐたのだらう。

右の「幸好古事」登載の全歌の中、○印を附したるは、例の「音曲神戸節」さ符節を合するものである。即ち此の本の文化三年頃は、これらの歌で、それより暫く後には、この三首くらゐが殘り、他は新歌を生んだ、それがあの「神戸節」ださいふのではなからうか。即ち「神戸節」の數百首は、文化以後、文政間の宮驛の流行歌、さ見るべきであらうか。さしても、江戸のどゝ一の父祖たる資格は、年月に於て立派にある。

○

尙、丁度、これさ同時頃、即ち文化二乙丑五月の記入のある、四六四倍大くらゐの大きさの、番附樣の、摺物一枚を見た。それには蓬萊娼妓位見立細見、さある。蓬萊が宮を指すこさ、いはずもがな。さて、その中の、妓名は省き、妓樓の名だけを擧げておく。以て宮の當時の遊里殷賑を語るものであり、且つ「どゝ一ぶし根元集」など（長谷三へ）

淨瑠璃の南朝物

淨瑠璃（主に、竹本義太夫以後の所謂義太夫淨瑠璃の意味に、限定しておく。）の中で、曾我物義經物、さては忠臣藏物など、皆相當の量に上つてゐる。大阪物（秀頼滅亡、又は太閤存生中の事蹟をも含む。）も、集めたら十種に餘らう。比較的、曾我や義經や忠臣藏程の夥しい類似作の量は產れなかつたにしても、とにかく案外、相當の量を產み、しかもその二三は、年を隔てゝ十回以上も興行せられてゐるものに、所謂南朝物がある。南朝物とは、私の今、特に考へた名目であるが、主に後醍醐天皇を中心として、高時滅亡、尊氏謀叛、正成戰死、吉野行宮、楠氏一族新田氏一族に關するものを一括して謂ふのである。

先づ、京阪並に江戸に於ける、上は正德の近松門左衛門の「吉野都女楠」から、下は、安永の福內鬼外（平賀源內）の「荒御靈新田神德」に至る間の、所謂南朝物約十八種の、作者、年代、座元を列擧してみよう。（此の列擧、主に邦樂年表義太夫之部に據る。）

年月日	外題	作者	座元	備考
正德元・九・一〇	吉野都女楠	近松門左衛門	竹本座	
同　四・四・八	相模入道千匹犬	同	同	
享保八・二・一七	太平記綱目大塔宮曦鎧	（門左衛門添削）竹田出雲 松田和吉	同	
同　一〇・三・三	南北軍問答	西澤一風 田中千柳	豊竹座	
同　一五・八・一	信州姨捨山	長谷川千四 文耕堂	竹本座	
同　・同・同	楠正成軍法實錄	並木宗助 安田蛙文	豊竹座	

年月日	外題	作者	座	備考
享保一八・四・八	（太平記住吉卷）車還合戰櫻	文耕堂	竹本座	
元文元・二・一	赤松圓心綠陣幕	文耕堂、三好松洛	同	
同　四・八・一五	狹夜衣鴛鴦劒翅	並木宗輔	豐竹座	
寬保三・三・一八	（鳴門排務鹿間褐染）風俗太平記	爲永太郎兵衞、淺田一鳥、豐岡珍平、小川半平	同	（赤松圓心綠陣幕の改作）
延享三・一・一四	（祖父は山へ柴刈に祖母は川へ洗濯に）楠昔噺	並木千柳、三好松洛、竹田小出雲	竹本座	
寶曆九・九・一六	（南朝正平四年北朝貞和五年）太平記菊水之卷	竹田小出雲、二歩堂、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衞、三好松洛	同	
明和元・一・二	（後醍醐天皇豐仁親王）吉野合戰名香兜	吉田冠子、竹谷平藏、伊藤衛門、多田大吉	（江戶・）土佐座	（吉野都女楠の飜案）
同　・四・一〇	官軍一統志	黑藏主	豐竹座	（同）
同　二・二・九	蘭奢待新田系圖	近松半二、竹田平七、竹本三郎兵衞	竹本座	（吉野都女楠の改作）
同　七・一・一六	神靈矢口渡	福內鬼外、吉田冠子、玉泉堂、吉田二一	（江戶・）外記座	
同　八・一二・二八	嗚呼忠臣楠氏旗	竹本三郎兵衞、若竹伊輔、八民平七	豐竹座	（太平記菊水之卷の改作）
安永八・二・八	（矢口後日）荒御靈新田神德	福內鬼外、森羅萬象、二一天作	（江戶・）結城座	

右之內、二回以上興行のもの年表

相模入道千匹犬（門左）
正德四・四・八、大阪竹本座。○享保九・四・八、同。○寶曆五・七・一六、同。○同・一一・一六同。○寶曆六・五・五、京、蛭子屋吉郎兵衞興行。計五回。

大塔宮曦鎧（出雲・和吉）
享保八・二・一七、大阪、竹本座。○享保一四・六・一八、同。○安永元・八・一、同。（但し三段目のみ）○安永六・四月、大阪、曾根崎新地西の芝居（同）○文化元・八・一五、同、北堀江市の側西側。（同）○文化七・八・一六、同、堀江荒木芝居。（同）○文化七・一〇・一、同、曾根崎新地芝居。（同）○文政三・八・一、大阪、稻荷境內。（初、二、三段目）○文政六・七・二五、同、御靈境內。（同）○文政一一・八・四、同、座摩境內（同）○天保七・八・一六、同（三段目のみ）○安政二・七月、同、新築地淸水町濱（同）○文久二・八月、同、稻荷境內東小屋（同）。以上、十三回。

赤松圓心緑陣幕（文耕堂）
元文元・二・一、大阪、竹本座○文化八・九・九、同、北の新地芝居（四段目）○文政七・九・五、同、稻荷境內（本間館より新の段）○嘉永二・七月、同、道頓堀若太夫芝居（養朝館の段より本間館の段）。計四回。

楠昔噺（千柳）
延享三・一・一四、大阪、竹本座○安永三・八・九、同、豐竹定吉座本（三段目）○寬政二・七・三〇、同、道頓堀若太夫芝居（同）○寬政三・四・二七、同、北堀江市の側芝居（同）○文化一〇・二・二三、同、和泉式部境內芝居（同）。○文化一〇・五・二、同、御靈境內（同）○文政三・五・一五、同、稻荷境內（初より三段目まで）○文政八・五・一、同、座摩境內（同）○文政一二・一月、同、北堀江市の側。（三段目）○天保三・一・一五、堺、吉田千治郎芝居（同）○天保六・九・一五、大阪、稻荷境內（同）○天保八・一〇・一七、同、稻荷北門芝居（同）○天保一一・八・四、同、座摩境內西門芝居（同）○天保一一・一一・一九、同、天神境

内新芝居(同)〇天保一四・閏九月、同、道頓堀若太夫芝居(同)〇弘化四・一・五、江戸ヵ、竹本辰太夫座本(同)〇嘉永六・七・二三、大阪、新築地清水町濱(同)〇安政元・閏七月、同、天滿天神境内(同)〇安政六・四月、同、稲荷境内東芝居(同)〇文久三・三月、同、阿彌陀池寺内(同)〇慶應元・一月、同、御靈裏門小家(同)〇同元・五月、同、稲荷東小屋(同)。計二十二回。

太平記菊水の巻 (小出雲・半二等)

寶暦九・九・一六、大阪、竹本座〇天明八・八・二九、同、堀江市の側芝居(初より三段目まで)〇寛政二・七・三〇、同、道頓堀若太夫芝居(初より二段目まで)〇寛政四・八・二九、同、北堀江市の側芝居(初より三段目まで)〇寛政九・五・五月、同、道頓堀東の芝居(初、並に三段目)〇文化一三・六・二二、同、御靈境内(二段目)。計六回。

蘭奢待新田系圖 (半二)

明和二・二・九、大阪、竹本座〇安永六・四月、同、曾根崎新地西の芝居(初段)〇寛政九・三・二六、同、道頓堀東の芝居(初より三段目まで)〇文化一〇・四・八、同、御靈境内(三段目)〇文政元・五・四、同、稲荷境内(初より三段目まで)〇文政六・一二・二八、同、同(同)計六回。

神靈矢口渡 (鬼外)

明和七・一・一六、江戸、外記座〇同、一一・一五、大阪、竹田新松座本(初段、二ノ切、四段目)〇安永六・四月、大阪、曾根崎 新地 西の芝居(四段目の初―道念談議場)〇寛政二・二・廿三、同、道頓堀東の芝居(四段目ノ切)〇同八・六・一七、大阪、市の側芝居(初段、二ノ切)〇寛政一二・三・七、同、道頓堀東の芝居(二段目)〇文化九・三・三、同、御靈境内(大序・二段目)〇文政二・八・二、同、稲荷境内(初より四段目)〇天保五・五・一〇、同、同(同)〇天保一二・閏正・二九、大阪、座摩境内西芝居(四段目中より―頓兵衛住家より渡し場)〇文久元、大阪、稲荷境内東芝居(初より四段目まで)〇文久元、大阪、御靈裏門(大序より渡し場まで)。計十二回。

右を、更に、回数の多より外題だけを列記すると、楠昔噺(並木千柳)二十二〇大塔宮曦鎧(出雲)十三

○神靈矢口渡（福内鬼外）十二○太平記菊水の卷（小出雲、半二等）六○蘭奢待新田系圖（半二）六○相模入道千匹犬（門左）五○赤松圓心緑陣幕（文耕堂）四。といふわけである。が例外として、後代に數次飜案又は改作せられたものとして、門左の「吉野都女楠」、また無論記憶さるべき作である。

勿論、右の回數の多少は、後に、全段中よりの或部分、特に民衆的に喝采せられた或段（主に三段目なるが如し。即ち一曲の山であり、且つ作者も特に力を注いでゐる。）のみ興行せられたものも、その回數に入れてゐるから、强ちこの多のみを以て、全曲の喝采程度と推すわけにはいかない。と最高レコードの「楠昔噺」は、殆ど三段目のみの場合が多いから、これは、遙かに實質からは、後位である。此の意味から謂へば、作の近世であるといふせゐもあるか、或は、所謂名作なるが故か、とにかく「矢口の渡」が實質上にも回數の上にも、最たりである。これに亞ぐは、「大塔宮曦鎧」であらう。

勿論、義太夫の比較的古き時代のもの程、全曲の演奏は遺れられて、その中の或る段（一個又は以上）のみ世傳せられるといつた傾向もある。それが、作の誠の藝術的價値といふよりも、當時の大衆にうけた程度により、その所謂名作と極めのついた部分のみ傳り、他は、丸本の上に傳はるのみとなつた、さうした事情もあり、又一概に斯うといへない事情もあらう。とにかく南朝物として、出雲の「大塔宮曦鎧」（特にその三段目）、千柳の「楠昔噺」の三段目「半二の「蘭奢待新田系圖」の初より三段目、鬼外の「神靈矢口渡」の初より四段目まで。の如きは、粹中の粹、喝采藉甚なりしものと謂ふべきであらう。此の中に、門左の「相模入道千匹犬」を入れたいが、これは、稍南朝物には、純粹のものとして取扱ひにくいから（後說）、姑らく略いたのである。

×

偖、江戸時代人の喝采（興行回數と假に正比例するとして）の程度如何は、これくらゐにして、次は、公平に全部に亘つて、右南朝物の內容に若干觸れたいと思ふ。

南朝物の大体は、敵役は、大体に於て初め高時、後に清忠。人氣役になつてゐるのは、大塔宮と正成とがその尤で、これに亞ぐは、正行、新田一族の類であらう。案外、尊氏は、てんからの惡玉に取扱れてゐぬらしい。殊に、「車還合戰櫻」の如きは、尊氏、義貞、正成を以て三柱石のやうに說いてゐる。以下、略梗概。

先づ門左の「吉野都女楠」は、義太夫淨瑠璃の南朝物として、最初と思はれるもので、朝廷、清忠と正成の論、亞で櫻井驛の訣別、湊川の戰死から、最後に正行母子、名和長年のお連れ申した後醍醐帝を、吉野の行宮にお迎へする、といふのである。此の間、正行が、天皇の追手を追ひ散らすくだりは、荒唐無稽とも思はれる程のヘロイズムで、名和長年は從、正行が主となつて活躍してゐる。要するに南朝成立の初期に材を藉りたものとして、一例である。湊川の戰死、例の自害の場面、或は、天皇かちぢのみゆきの件など、太平記の文脈を巧みに脫胎してゐる。「相模入道千匹犬」は、高時鬪犬を好んで狂暴から同じく滅亡に藉りてゐる。がこれは、純粹の南朝物ではない、材料自身からも南北朝史の前期、高時の滅亡であるし、それにまたこの鬪犬を好んだ云々には、五代將軍綱吉の例の畜類愛護の妄政を揶ませてゐるからである。「大塔宮曦鎧」(外題署、「太平記曦鎧」)は、命題の如く、大塔宮が一篇の樞軸で、初め、宮の高時追討の御計畫から、官軍の敗北、宮の十津川落、六波羅滅亡に終つてゐる。就中三段目の中、齋藤利行が、義の爲に孫の力若丸を殺すの件、即ち「身がはりおんど」の一節は、後世に名高いものである。大義と私情との相剋、よくある手法ではあるが、丁度彼の一方の名作「菅原傳授手習鑑」(「曦鎧」より後、即ち延享三年八月)の松王丸の苦衷、さては作者は異り時代も遙か後なれど、松貫四作の「伽羅先代萩」(江戸に於て興行、天明五年)の政岡の苦衷など、同樣、日本國民性の寧ろ强所を捉へたものとして、千古、新たなる感激あるものである。殊に、手習鑑や先代萩が、同じく身替りとはいへ封建時代の又かと思はしめる、例の第二義的の君臣關係(諸侯とその家臣)であるに、この「曦鎧」は、

第一義（禁裏と臣民）に徹底してゐるだけ、一層好ましいと思ふ。（即ち力若丸は、後醍醐の若宮の身替りである。しかもそれが、檢使の役としては、齋藤は、六波羅の臣である。このからくりは、全く時平方と見せかけた松王の、わが子の首を菅秀才に見屆ける首實檢と、同工異曲であらう。）尚、此の「曦鎧」、その第四段は、「大塔宮熊野すゞかけ」であるが、例の、太平記の熊野落の名文を、他の作者同樣、流用飜案してゐるが、流石に鮮やかな手法の仄見えるのは、自分の贔屓目であらうか。「南北軍問答」は、楠正行が主で、宇都宮公綱がワキといつた役。正行、首尾よく師直を生擒にするに終つてゐる。その間、正行の、北條の殘黨共を心服せしめるに足るだけの德量のあつた者として、描いてゐるのである。「信州姨捨山」は、太平記をその儘受けたと思はれるもので、金ケ崎城の應援、落城後、義治を擁立する新田方勇士の奮鬪を描いたものである。第二段目切の、瓜生保の母岩橋が、足利高經の名代として、義治の僞首實檢に里見友繁邸に赴く件は、後の歌舞伎の「鳥目上使」の原據となつたものと謂はれてゐる。「楠正成軍法實錄」は、正成初期の忠節苦戰、終に天皇を隱岐より迎へ奉り、千早城に據つて、六波羅を滅すを以て立筋としたものである。此間、兒島高德等の忠義苦衷も盛られてゐる。「車還合戰櫻」は、南北對立の初期に材を藉りたもので、湊川の戰後、來年は正成の七回忌といふ時、尊氏の正成に對する寬仁なる襟度、湊川に楠の碑を立てんといふのである。曰く、「いやとよ干戈を以て治むる國は危く、仁德を以て治むる國は全し。故判官正成は、日本の亞聖といひし忠臣、彼が菩提を追福するは、弓箭の冥加、武士の情ならずや。たとへ楠一家尾籠の怨を含むとも、情に敵たふ及はなし、此方より招かずとも味方に降るは必定。大塔宮の忘れ形見もその如し。武家の政道、清忠の思慮に及ばぬ事」と清忠をやりこめる。その清忠は、かねて謀叛を目論んでゐるのである。以後、正行、楠家臣などの活躍、大森彥七の苦忠。父は孫助、子は加藤次の、大塔宮若宮の隱匿、忠節。併賣二郞作事本間孫四郞重氏、五一兵ヱ事平賀權太郞後綱などの忠臣義臣、本間が娘を殺し、大塔宮の

若宮（鄙の宮）の身替りに立てる例の手法。第四段、太平記より想を得た大森彥七の佯狂。第五段正行正成の墓前に於て元服。鄙の宮、本間、平賀などの集り、義擧の旗揚。最後、淸忠の生擒、尊氏正行の和解、光明院の御跡目に、鄙の宮御相續といふので芽出度く納るのである。尊氏に大分旗を擧げてはゐる。が正行などを描いて、歸する所は、吉野朝讃美の聲である。史實を枉げてはゐるが、そこに當時作者の、所謂判官びいき曾我びいきの心理が顯れてゐて、同一揆である。（此の曲、尊氏の寛仁大度であることは、或は家康あたりをモデルにしてゐはしないか。とも思へる。）

「赤松圓心緣陣幕」は、赤松圓心の勤王を描き、村上義光の、大塔宮の御身替、阿新丸の佐渡に渡つて復仇等、しかし終に六波羅の滅亡といふので、主に太平記の筋を追うてゐる。「狹夜衣鴛鴦劍翅」は、義貞の戰歿後、天皇より賜つた尊氏追討の綸旨と新田家の寶劍鬼丸との二品、高師直の手に入つたのを、塩谷高貞と勾當内侍とが奪還する一部始終である。この曲では、師直は、徹底的の惡ではなくして、義貞の依託を重んじて、かほよ（内侍の變裝）に戀慕の体を裝ひ、誠の內侍たるか否かを探るといふ事にしてゐる。脇屋義助なども傍系の人物として現れて來る。「風俗太平記」は「赤松圓心緣陣幕」の改作であつて、これに俠盜日本左衞門の巷說を取入れ、圓心が强盜の張本日本左衞門であり、一味勤王の士を糾合。その間、皇子尊良の隨身縣長宗の忠節苦心などあつて、トド赤松と協力、六波羅滅亡、續いて高時誅滅といふに結んでゐる。（日本左衞門の仕置は、「江戸眞砂六十帖廣本」第七の傳ふる所によると、延享三年十月のことである。すれば、この曲は、この仕置よりも四年前のことである。即ち此頃、未だ縛に就かず、强盜としてやかましかつたのであらう。巷說應用に、作者の多少の機智が見える。それが赤松圓心となつてゐるから、一層苦笑である。――尙、この左衞門は「實事譚」によると、仕置を延享四年三月十一日としてゐる、此時、左衞門事濱島庄兵衞は、二十九歲と同書罰文にある。）

「楠昔噺」は、初段、後醍醐帝靈夢に感じて正成を呼び出さるゝ、その間清忠の奸策、それがまた百姓正作（後の楠正成）の夢であつた。正作は、河内松原村の百姓德太夫の後妻のおとはの入聟である。千太郎（後の正行）といふ一子まである。そこへ武士姿に風を扮した藤房卿の訪ひよるあり、勤王の事をうけがふ。八尾の別當の息女折鶴姫と藤房の緣組きまつての、甘いシーンがある。第三段、これは、後まで度々演ぜられたものである。昔々の爺と婆との物語めいて、正作妻おとわの養父德太夫とその妻の物語である。〔これ、此の外題「昔噺」の據つて起る所以である。〕爺は柴狩、婆は洗濯。しかるに此の爺の德太夫には、以前勘當した實子竹五郎がある。（これが、賊方の宇都宮公綱だといふのである。）折から百姓の噂に、宇都宮が勝つた、楠が負けたの話。爺は、楠を妻の聟と知つて、その義理ゆゑ、又、聟が、我子と知つて宇都宮に花を持たせたのだと、楠の意中を存じて、公綱勝つたと聞いて腹立つ。婆は、竹五郎を公綱と知るからに、義理ゆゑ、これは喜ぶ。律氣な爺には、それが氣にくはぬ、「ヤイコリヤ婆、よつ程に悅んだが可い。貴樣は宇都宮と緣があるか近づきか。イヤまあ、緣もなし近づきでもござらぬ。近づきでもない者が、何で夫程に嬉しいぞ。あた面妖なわろではある。此方も最前楠が勝つたと聞いて悅んだでないか。ヲ俺が悅んだのは些と譯がある。俺も嬉しがるには譯がある。其譯聞かう。まア此方から聞かう。イヤ云はぬ、俺もいはぬ。われが云はぬからは、宇都宮が勝つたのは嘘じや。イヤ楠が負けたのが定じや。嘘じや定じや。イヤ此奴が口が過ぎるがな、コリヤ先刻に遣つた雀返せ、俺もやつた橘返しや。（これ以前、婆洗濯に拾つた花橘と、爺、袖口から飛び込んだ雀とを取り換へこする件がある。）ソレ戻す、ヲ返すと、互にやつたを取戻す。八十の三ッ子と喩に異らず愚かさよ。橘取つて、コレ親仁、聟の氏じやと祝やつた花橘を、コレ此通りさかなぐり捨つれば、われが竹に雀に祝うた雀を、舌切雀にしてくれると、嘴折つて追放し、あた鈍くさい去んでくれう、俺も去ぬる、勝手にせい。勝手にすると、負けず劣らず腹立紛れ日の暮紛れ、爺は靈をい

たゞけば、婆は柴を脊に追ひ、むしやくしや腹の取違へ、我家へこそは立歸る」といふのである。これが三の口である。つまらぬ技巧であるが、昔噺の爺と婆をきかせ、それに花橘（桃の代りに）と雀（舌切雀の）、さうして楠・宇都宮の家紋をそれ〴〵匂はしてゐる。

　德太夫家の場では、そこへ、宇都宮の妻の照葉が、竹五郎の勘當御免に、娘みどりをつれて來る。楠の妻おとわも一子千太郎を連れて來てゐる。爺と婆とは意中を明しあひ、宇都宮と楠とを和睦させるために、孫の千太郎とみどりを結緣にしようと計らふ。それを、おとわ照葉の、それ〴〵夫自慢から止めだてする。爺は、妻の婿正成への寸志に、柴刈百姓どもに賴んでおいた烽火をあげ、大軍來ると見せかけて、宇都宮の天王寺の五百余騎を追ひ散らさせる。たうとう、爺と婆と、義理と義理とで刺し違へる。その臨終に、此家へ入り込んでゐた商人の男が公綱であり、奥の一間にかねて來てゐた正成と對面、槍と塵とを以てせりあふのを、爺の亡體が止める。

「二人の妻は涙と倶に、夫々に取縋り、四十九日が其間は、魂其家を離れずと、聞きしに違はぬ今の有樣、お痛しきは父御のお心、思ひ計つてせめてまア、五十日の忌明まで勝負を待つて下さんせと、歎くも道理理りと、流石に猛き公綱も、元より仁義の楠も、睨みあふたる目は涙、互ひに待つとも待たぬとも、云はで別るゝ猛將勇將、妻は子供を呼出して、死骸に逢すも片葉の蘆の、たより少き眞菰草、菖蒲勝負は時の運、粽は軍の血祭と思へば悲しき槍長刀、建てし幟は大旗小旗、冥土へ靡く白旗も此の世の名殘と正成が、父の死骸を掻抱けば、公綱も母親の死骸を抱へ、是れまでの義理の情の一禮に両將並んで亡骸を、押戴きし志、二人の妻は廻向文、唱ふる聲が鯨波、互ひに戰場〳〵と、詞を殘し別れゆく。」

　といふので第三段は終つてゐる。アト終に公綱これに感じ、且つ正成藤房の志に動かされて、勤王方となるといふのである。

淨瑠璃作者のくどい所謂因果關係、それが爺と婆、公綱と正成、みどりと千太郎と揃まつてはゐるが、とにかく比較的無理がなく、それに天王寺の戰などの史實も取入れて「大衆向きにも興味が多い。殊に此の第三段、その口の野趣、後半は所謂淨瑠璃(又は轉じて歌舞伎)の定つた型であるものゝ、又かと思ひ乍ら、傳説に養はれた我らの頭腦には、面白いと見られる。そこが、この第三段のみが、後世永く持囃され、以て最高レコードの回數を占めてゐるせゐであらう。

「太平記菊水の卷」は、正雪、忠彌の事件を南北朝に織込んだもので、即ち純南朝物ではない。宇治の紺屋左兵衞事勇助は、佐々目憲法の子となつてゐるが、これが實は正行で、四條畷で戰死した正行は、憲法の實子であつた。勇助が宇治常悦と名のり、刎川主膳事鞠が瀨秋夜その實新田義興と共に、足利滅亡を計つたが、成らず。最後、常悦自害して、南北和合を計るといつた筋である。「吉野合戰名香兜」は、新田足利の確執を材としたもの、第四段に、小山田高家が吉野の合戰に、名香を兜に焚きしめて義貞の身替りとなる件があつて、外題の起りである。終に、尊氏は、豐仁親王を立て、京の內裏と呼び、後醍醐帝を吉野の內裏と稱へて、双方和を結ぶといふのである。「官軍一統志」も「吉野都女楠」の飜案であつて、やはり小山田の身替りを描く。但し此作、高時滅亡までの事を主筋としたが故、此の外題ある所以である。

「蘭奢待新田系圖」は、これも小山田が中心で、この作では、小山田は、本來兒島高德の子幯太郎で幸內と呼んだ。これが、求女塚で、義貞の身替に立つ。その妻は、勾當內侍の身持となる。それと知りつゝ義貞と內侍を見遁す足利方の妻鹿孫三郎は、高德の次男助市だといふのである。外題は、高家が蘭奢待の名香を兜に焚きしめるから起つたのである。(この間、大塔宮の傅育をとつた淵邊伊賀守が宮方となつて、新田の臣篠塚伊賀守となるの件、又、正行の年少聰明な所にも筆を著けてゐる。「神靈矢口渡」は、人口に膾炙せられてゐるから謂はでも著きが、これは、江戸附近に地名等材をとり、且

つは、徳川氏の祖新田であるに當込んで、江戸の人氣に投じようとした點もあらう。とにかく材料風韻凡て反上方式のものである。がそのくせ永らく上方でも榮えたものである。例の義興の子義峰が、矢口にさしかゝつて、渡守頓兵衛の娘お舟の犠牲によつて、危難を遁れるのが落で、頓兵衛住家、渡し場の段は、歌舞伎にも屢々用ゐられてゐる所のものである。「嗚呼忠臣楠氏旗」は、「太平記菊水の卷」の改作である。更に一つ、鬼外の「荒御靈新田神德」は、矢口の後日で、結局惡人たる管領畠山が滅んで、足利新田の和といふのである。

以上、あらまし、南朝物（高時滅亡物を含む）の梗概を說いたが、人物の上で、最も多く出で、諸作者によりて稱美の筆を執られてゐるのは、既にも述べた如く矢張り正成父子である。次は大塔宮である。兒島高德もちよい〳〵顏を出してゐる。肝腎の義貞は、左程はつきり、（主題として）現れず、却つてその遺族又は家臣に多い。新田遺族を取扱つたものも多いのは、例の徳川氏の先祖といふ傳說にも支配された所が多からう。敵役は、清忠、及び足利の臣たる高經、師泰、師直の類で、却つてまた尊氏は、はつきりしてゐない。中には、同情の筆を用ゐたのもある。以上を、更に、高時滅亡までに材を執つたもの、及び尊氏謀叛後に材を執つたもの、南北朝對立後に材を執つたもの、各々此の三個に分けてみよう。（内容からである。）

一、高時滅亡まで。相模入道千匹犬。（但し寓意あり。）大塔宮曦鎧。楠正成軍法實錄。赤松圓心緑陣幕。風俗太平記。楠昔噺。官軍一統志。

二、尊氏謀叛後。吉野都女楠。吉野合戰名香兜。

三、南北對立後。南北軍問答。信州姨捨山。車還合戰櫻。狹夜衣鴛鴦劒翅。太平記菊水卷（寓意作）。蘭奢待新田系圖。神靈矢口渡。嗚呼忠臣楠氏旗（寓意作）。荒御靈新田神德。

○

以上で、長々とした自分の記述は、暫らく打切とするが、最後に一括的な、直下の感を述べてみよう。
太平記の影響は、軍談讀みとしても又飜刻の高級又は童幼向きの讀本又は繪本としても、即ち耳からも眼からも親しいもので、江戸期人心を永く支配した。徹底的の議論からは、新田氏の子孫といふ美名（事實であるか否かは論外）に憧れて、幕府も、太平記ばかりは、太閤記同樣には取扱はなかつたらう。寧ろ奬勵したかとも思へる。がとにかく正成正行、小山田の孤忠、さては大塔宮の御最期、新田一族、殊には源内の名作「矢口渡」によつて、義興義岑の名は、江戸時代人の心に深く喰ひ入つたらう。系統的な南朝正統論は、大衆的でなかつたにもせよ、これら南朝の人々の悲慘な末路、但し死して榮譽あるその奉公的精神には、崇敬とまでいかなくとも、相當の感激はあつたらう。私は、これが明治維新の倒幕勤王の導火の一だとは、敢ていはぬ。が、日本外史の楠氏新田氏が、士人に感化する所ありとせば、この戯作者側の就中、比較的稗史小説繪畫よりも一層民衆的な、直截的な享樂と敎訓とを兼ね與へたこの時代物淨瑠璃の中でも、此の所謂南朝物からの受けた力も、無論沒却すべきものではないと、信ずる。殊に、「楠昔噺」の三段目が、作として最高ではないにもせよ、數十回の興行を續けてゐる所を見れば、且つは、正雪忠彌の妄動すらもこの南朝の舞臺に藉りたものまで二三出てゐるのを見れば、（正雪忠彌物は、尙他にもある。「白石噺」など現に。）そこに色々な意味から、反幕府、大義名分思想が醸されてゐた事であらうと思ふ。その量の多寡は、不可測としても。思へば、幕府の弱點に觸れて痛い所のものである。門左の正德元年の「吉野都女楠」から、鬼外の安永八年の「荒御靈」に至るまで、約七十年、淨瑠璃の極盛期から、晩期へかけて、此の尠くとも第一義の忠君を取扱つた南朝物准南朝物が、かくの量に上り、且つその中の數者は、二十回以上、少くとも五回以上、年次を隔てゝ幕末に及び、しかも嘗ては文化の先進を誇り、後は後進となつたもの丶、京に近い關係か、又は反幕府の思想

が自然に生れてゐた町人天下のせゐもあり、太閤恩顧を思ふ點もあるか、とにかく作者も多く大阪人であり、興行も多く（その殆ど）、大阪であつた事も、非常に意味があると思ふ。但し此の中の數者は早くから歌舞伎に流用せられ、又樣々脱胎して、江戸府内のものたちにも、相當の刺戟は與へてゐたらう。却説、晩期、福内鬼外（源内）作「矢口渡」の前後二曲は、纔かに上方作者に對する東作者の氣を吐くに足るものであり、且つとにかく（德川氏と緣故のある新田氏讃美ではあるが、）第一義の大義を說いたものが、將軍の膝下に生れた事は、面白い現象であると思ふ。殊に、他の作が、史實の關係もあるが、多く攝河泉紀を舞臺にした（これが上方作者の柄にも合つてゐた）に對して、始めて江戸附近に材を求めて描いたこともである。

○

尙、義太夫以前の淨瑠璃、さては方面をかへて、繪本類、浮世繪版畫類、又は假名草子、浮世草紙、靑本、黑本、黃表紙、合卷などの世界の南朝物を見るも有意味で、且つ興味ある探究であらうが、今は、姑らく右の記述に止めておく。尙、飜案と改作との異同、原作との關係、又は、歌舞伎に流用せられてからの諸種の變化、問題、これらに就ては、すでに「歌舞伎細見」等の示す所であり、且つ南朝物淨瑠璃の本文も、丸本の存在乏しきものもあるが、その中の數種は、旣に帝國文庫・續帝國文庫等に飜刻せられてゐる。よりて彼此比較の機會も、容易であらうと思ふ。

終りに、南朝物の中、飜刻物の所在を左に示しておく。

○吉野都女楠　續帝文十三（續近松）○春陽堂版近松門左衛門全集第六○有朋堂文庫（近松中）其他。
○相模入道千匹犬　春陽堂版、近松門左衛門全集第七。
○大塔宮曦鎧　續帝文六（出雲）。
○信州姨捨山　續帝文廿七（文耕堂）。
○車還合戰櫻　同。
○楠昔噺　續帝文十九（宗輔）。
○太平記菊水の卷　帝文六（出雲）。
○蘭奢待新田系圖　續帝文十四（半二）。
○神靈矢口渡　帝文廿二（風來山人）。
○荒御靈新田神德　續帝文九（江戸作者）。

——此稿、了

催情畫風概論

催情畫風と、自分は假りに名づけた。或は、これを廣義のあぶな繪とも、又は暗示畫風とも謂はば謂ひえられる。要するに、催情氣分の豊かな謂である。勿論、この催情畫風は、他の、浮世繪派以外の肉筆物にも偶々にして見かけぬではない。がそれらは、凡て此に比較するに、風韻に於て稀薄である、臆病である。平氣で放膽にやつつけてゐるのは、凡て浮世繪派あるのみと思ふ。

然しこの催情、と名づくるのにも樣々ある。畫樣によりて樣々の區分を持つて來る。大凡は左の如きものかと思ふ。

催情畫風
- 1、男女二人（或は立、或は坐）を描けるもの。
- 2
  - A、女一人、閨事前後の暗示。
  - B、女一人、日常時の催情暗示。
- 3、三人以上（男女とも）。

さうして、更に、此の第二のBは、

B（日常時の催情暗示）
- 一、立像
  - 偶然事。
  - 故意。
- 二、坐像。
- 三、大首。

といつたものに、分類が出來はしないか。こゝで今少し、催情といつたものに、悉しい說明が必要である。同じく催情というても、露骨なるものは、（それも程度があるが）その露骨であればある程、所謂催情ではない。無論露呈である。其の露呈の度の酷(ひど)いものは、所謂オブシーンであると思ふ。があそこまで突詰めざる程度で、微かに胸に觸れるもの、古今東西、人間共通の、成心あるものには直ちに感得せられる好色的刺戟を與ふるものを、催情と、自分は名づけたので、態度をいへば、無論露

呈ではなくして、暗示である、示唆である。露呈でない所に、想像も伴ひ、比較的遠心的ではあるが、さりとて畫家目的の中心には、仄かに觸着の出來るもの、寧ろ露呈よりも効果の多きものである。此の畫風は、誠に浮世繪一派の各畫家の殆どが、精魂を蒐めた所で、努力重ぬるに努力を以てした機徴であると思ふ。これを謂ふのである。

勿論、浮世繪の作畫の中でも、この手法斗りで始終してゐるのではない。が、その畫家殆どの、今日、否永遠不朽の生命を殘してゐる畫蹟は、寔に此に盡きてゐると自分は思ふのである。したがつて謂ふ迄もなく、自分の叙述は、美人畫に重きを置く。美人を描かなかつた寫樂などの連中は、姑らくこの圏外である。此のやうな特例あるにも拘らず、大多數は、私の論法に當て嵌められうると思ふ。ふしぎと――否ふしぎでもなからう――元祿頃のあの華美風流、寛政から文化文政のあの頽廢靡爛、その時代相時代心が生んだものは、無論好色氣分の示唆、即ち浮世繪の所謂催情風一派であると思ふ。見給へ、時代を遡れば遡る程、この示唆の程度は、まだ婉曲高雅である、微温である。然るに、末になればなる程、それが機微に入る事益々機微、愈々皮肉を極めてゐるのである。

こゝで、會本の作畫家の溜息(寧ろ愚痴、或は手前味噌か。)を應用すると、此の間の傾向變移が、一層明らかにせられると思ふ。曰く、國虎畫のある繪本には、冒頭本屋の愚痴に借りて、かうした意味の事を述べてゐる。即ち――昔は、かうした物の本の人物の詞書も平凡であつた、細かく書かなくともすんだ。人物の描態も無論である。然るに此頃は、御見物衆が見巧者になられて、そんな生温い事ではすまされなくなつた。詞書も、いろ〳〵ひねつて、冗く書かねばならぬし、人物の描態も然りである。そこに新版の苦心、畫工の細心が要ります。――とその本の自慢半分、後代の苦心、奇巧を衒はねばならぬ當然の歸趨に對する苦心を述べた件があつた。私は、これは誠に面白いと思ふ、尤もでゝあると思ふ。此の傾向、苦心の問題が、一般公刊畫の上にもありはしないか。即ち初期浮世繪(主

に版畫に就ていふ。)から末期浮世繪を一貫した催情畫風は、ありはあるものゝ、その推移は、著しいものがある。丁度人間から、惡魔へ、或は極樂から、地獄へ、人の年齢でいつたら、簡單な催情せられに充ちた青少年の頃から、あゝでもないかうでもないといつた年配の中年以後、といつた、さうした推移は、當然踏られると思ふ。

殊に、成年してからは、示唆、所謂催情を好むものである。露呈、暴露ではいけないのである。それらに慣れて、鈍くなつた神經は、寧ろ一端によつて全部を、姿態によつて氣分、事件の中核を、今となつては眼新しくもない畫の手法であるが更にいふと、屏表にあつて屏裏を、といつた風のものを好んで來るのである。それが激しくなれば、單に顏面、それ自體の表情で十分なのである。それが何の意味か、その意味する所の臆測を逞うする方が、彼等成年者にとつて、頂上なのである。他人はいさ、これは少くとも自分の實感として詐らぬ所である、と明言して憚らぬ。現に、自分の友人側にも私よりより以上の年配者にも「年よつたら、生きた女性は危險である。命が惜しい。やはり繪の女かね。といふて、それが平凡な一人立でも困る。何とか、そこに色氣がなければ。」即ちこの色氣が、催情である。この催情によつて、彼らは、聯想の快感に耽り、實感以上の第二の實感を不識に味ふのである。それが、私のまた謂はんとする眼目である。

借、これで、私の謂ふ催情畫風の效果、その輪廓は、大凡そに分明にせられたであらう。次には、愈々本文冒頭に表示した所謂我流による區分の、私だけの説明である。即ち更に、内容に或る程度まで喰ひ入つて、考察してみようと思ふ。

先づ、1の男女二人の、立或は坐といふのは、すでにしぜん明暸であらうと思ふが、この畫風は、浮世繪の全期を通じて、割合に平凡で、それだけ多量に、各畫家が描いてゐるのである。これは、私の催情といふのには、實をいふと少々遠い感がある。即ち主に戀愛の、唯甘いシーンといふに過ぎな

いものが殆どであるからである。唯、二人相凭る体の、面白いものもあるが、これとて、催情といふには稍意味が違ひ、その程度の越えたものは、寧ろ露呈に近いものである。が、此の露呈氣分も、二人の立よりは、二人の坐に多いこと無論である。2のA、女一人の閨事前後の暗示、これは、後に夜具があるとか、屏風があるとか、行燈が前にあるとか、いつた構圖であるが、これは、比較的、男女二人坐又は立の畵様の單調を破らうとした、明和安永、湖龍齋頃に發途してゐるかと思ふ。以前は、この種の一人が與ふる閨事の示唆、その却つて仄かな氣分には物足らなかつたのか、或はこの種の皮肉さを知らなかつたのか、寧ろ絶無であると思ふ。(然し、師宣から政信、豊信、清滿、春信の全業蹟を見てゐないから、何とも斷言は出來ない。が、自分としては、見當らぬ、といふのである。)この女一人、閨事の暗示は、後代にあつては、哥麿も割合に少い。この畵風の最も進歩したものは、例の英泉にあり、その亞流といひたい國芳、國貞、又は末々期の芳年あたりにあらうと思ふ。この女一人の閨事暗示には、坐、立、さま〴〵あること無論である。謂ふ迄もなく、これらの畵家を並べて來てもその手法にも多少の違ひがあり、(根本は、しぜんと出來上つた、又人間として誰しも考へ出す所の手法を以て一貫してゐるが。)その効果にも様々あるが、自分としては、英泉の數點、國貞の初期のものなど、この辛辣な甘い催情が豊かであると思ふ。2のBは、叙述がうるさくなるから、暫く飛ぶ。3の三人以上、これは、男女三人以上や女三人以上や様々であるが、主に男女とりまぜてのものである。描かれた男女、全部にそれがあるといふのではない。無論その中の誰にかである。女ばかりであつても、それがしぜんに、姿態や何やかやで、この催情を示すものであつたり、又は女と男ととり〴〵であるにしても、その中の女に、(主に女にである。)それが窺はれる。野郎といふものは、元來、浮世繪一般の上では、水の垂るやうな若衆はいさ知らず、その他では、この催情の中心ではない。女性だか男性だか見分けのつかぬやうな男性を描いた春信あたりには、この男性の畵から與ふる示唆がある

が、これとてもこの示唆、催情を感ずるものが、男性のみ（殆ど）であるだけ、やはり畫家の狙ひ所も女性で昔からあつたのである。――話は違ふが、なぜ外國でも日本でも、人物畫に於て、女性が多いのか。殊に浮世繪を見るもの、全部が男性では無論ない。がこれは過去の人文が男性中心であつた事から考へて來ると、自らにして肯づける事と思ふ。即ち女性としては、主に、此の催情畫を見て、男性に媚を投げかくる教科にこれを用ゐはしなかつたか。現代のモダン・ガールやモダン・ウーマンはいさ知らず、昔は、男性好尙の中心は、遊里にあつた。即ち遊里美人の樣々な扮態姿樣、その最も粹の粹たる此の催情を、彼ら當時の女性は、これより學びこれを摸倣して、以て當時の男性に向つたのであらう。こゝに女性だつて、此の催情畫を見得る自由があり、寧ろ評價者の一人であり、從つて畫家からいつても、女性をまた鑑賞者の一部分に置いてはゐたらうと思ふ。――とにかく、この3の條件に合するものにあつても、案外示唆、催情の豊かなものあるを喜ぶのである。

さて、2のBの叙述にうつる。先づ小別の立像である。この立像にも、偶然事と故意とに分れ得ると思ふ。無論女性一人の畫である。偶然事といふのは、これが、所謂本義のあぶな繪で、（私の定義した廣義のものでなく）風に吹かれたり、猫に裾をひかれたりしての露出、無論脚部ぐらゐに過ぎない。この畫風は、春信などに、隨分ひどいものある事、人の知る如しである。これが、この畫法、いつから始まつたか、やはり政信くらゐからぼつ〳〵現れ、面白い、しぜんの畫家的な思ひつきで、また昔から空つ風のよく吹いた江戸――この江戸に住んだ婦女の偶然の姿態として、それを捕捉する所に、また當時、風俗畫、寫實畫風を以て本領とした彼ら浮世繪師の一層の特徴があり、それが各時代踏襲せられたことは、當然である。この畫風、春信から、淸長、哥麿、以下末期の諸君に至るまで、凡て行はれてゐる。川風に吹かれたり、路上砂風に吹かれたり、雷の鳴る、雨のふりこむ、その驚き、（これは、主に戸內）、色々あるにしても、此の畫樣は、一貫始終してゐるものと看ねばならぬ。（此の畫風に於て、此の手法

を守り、しかも婦女二人以上の立像の畫に、また之有ることは謂ふまでもない。）

次に故意といふのは、偶然事に對する故意であるが、女性自身からいへば、寧ろふしだらな習性である、そのふしだらさをいふのである。がこれとても、寧ろ女性の樣々の家業、仕科によつて、當然故意と名づけたらば、彼女ら畫中の者は、柳眉を逆立てるかも知れないが。即ち洗濯の形、張り物の樣、その一例である。或は、湯上りの如きも然りで、此種畫樣の傑作、催情畫と認めらるゝもの、政信にあり、豊信に、また清滿（鳥居）に傑作多き事人の知る如しである。春信のは、清滿に比して、感じが鈍い。張物、洗濯の如きも、清長に、豊國に、哥麿に樣々見受ける。入浴の姿態もまた然りである。がそれらが末期程、雋鋭になつてゐる事は、人の知る如しである。次の、坐像に於てまた然りで、大抵、膝を三角にあけてゐる。背のうねり方、肱のつき方、凡て然りである。それが末期の英泉あたりになると、坐の背景が冗くなつて、この催情味が一層皮肉に且つ豊かである。とにかく、凡て春信以前よりは春信に、春信よりは清長に、清長よりは哥麿に、哥麿よりは英泉にと、此の間の機微が益々濃厚である。これは、前にも述べた單調平板に倦む時代傾向と、一層の頽廢した時代の影響とであらうと思ふ。最後の大首、これに就ては、すでに拙著「浮世繪美人大首畫の研究」に縷述した、仍りて略く。この大首にありても、哥麿の（例へば、「北國五色墨」のてつぽうの如き）一二の例もあるが、概して此の催情畫風に、うつてつけのものは、英泉以下にありと思ふ。

（尙、役者繪等に就ては、暫らく論外としたが、此の傾向のものを見ぬでもない。此方面の事及び、美人畫の相偶（戀愛シーン）のものに就てなどのより悉しい事は、又別の機會に於て說かう。）

――三月二十四日夜

(表紙二より)と對照の便あり、益あるを思うての事。

×

えいらく。たい。するが。あふみ。てうちん。はまだ。しま。ふじ。さがみ。大にし。やましろ。こめ。いせ。たま。まさき。すみ。なかれ。ひした。あふた。かみ。みの。ぜに。まつしま。すみ。(このすみ、二軒を有したと見える)やまと。やなぎ。まつもと。もりした。やまだ。ちきり。しま。みうらながさ。しん木白。みやくち。さ、以上である。

此の中、大槻、中槻樣々あることは、家號でもわかる。(ごく一ぶし根元集を參照の事。)

尚、この細見のをはりに、左の豫告があつた。この角書によつても、當時、(文化二年)宮の娼婦をおかめといふた確證である。

尾龜評判獨案内　此書右細見同樣ニ近日出來

○

右の宮驛遊里に關した白筆洒落本の一に、「浮れ鳥」といふのがある。家藏本は、その下卷小本一冊であるが、これは、お龜の賣笑生活を描いたもののうちでは、私個人では、最も江戸系洒落本に近いものかと思ふ。他の同種のものが、寧ろ滑稽本的であるに比して(何れ紹介の機があらう。

寄贈紹介

○日本文學講座　第四卷

第一卷から第三卷までも既に寄贈せられてゐたが、遺れてゐたものである。此の第四卷は、執筆諸氏保科、折口、笹川、源美、高須、松居、岡本の諸氏。江戸文學に關しては近世の歌論、近世の俳論、南北研究、京傳研究等がある。雜錄の無聲氏の小歌雜考も、かうした普汎的のものには、惜しき程のものである。(東京市牛込區矢來町新潮社。非賣品)

○書史　第一冊

大阪書史會の發行である。會員諸氏の研究發表であるが「岩井半四郎最後物語」の想出、夕霧の命脈と文獻。難波に因める古書よりなどは、我らにも親しき文獻である。(非賣品。大阪市東區淡路町三丁目三八、其會)

○變態資料　第六　梅原北明編

第六輯は、全部、梅原氏執筆の明治新聞雜誌資料並に筆禍を以て埋めてゐる。口繪銅版數葉、本文また所々挿圖がある。漫談、資料縱橫無盡、時節柄氏としては最も皮肉な事業である。好著。(東京市牛込區赤城元町三四、文藝資料研究會)

墓碑史蹟研究(第四十二冊)○愛書趣味(第九)○紙魚(第六冊)○歌舞伎(三ノ三)○歴史地理(四十九ノ三)○川柳鯱鉾(三月號)○早稻田文學(三月號)○長唄(廿四)○集古(丁卯の二)○やなぎ樽研究(三ノ三)○國學院雜誌(三月號)○葦躅(第六輯)○江戸時代(三月號)○風俗研究(第八十二)○江戸時代文化(一ノ二)○東京新誌(一ノ五)○娯樂の名古屋(二月號三月號)○淸元研究(二十)

著者より

○本冊卷頭のものは、稍通俗的、且つ硬いものであるが、これには自分としては、意味があります。これは、辱知日比野先生に献げたものです。日比野寛先生、先生が名古屋の生んだ世界的人物、近世日本の体育熱鼓吹の先覺者であり又た日本臣道の古くからの提唱者であることは、恐らく知らない人はないであらう。私情に亙りますが、私は、先生に最も親昵してゐる一人で、實いへば、私の今日までの生活上には肉身以上の父の關係があり、また私の性格の上にも感化少からぬものがあると思ふ。やつてゐる仕事は、先生とは數歩の距離があるが。その先生の、還暦祝賀記念文集の稿者の一人として、何がなと思ひ、つひ先生の日本臣道と仄かに通ふ所もありと愚存ずる此の「淨瑠璃の南朝物」を以て、これに代へたのであります。丁度、これを以て二重に書く勞を略いた狡猾さだけは、先生はじめ讀者の方々にも見逃して頂きたい。○三月一日、次男が生れた。名は、春來(ハルキ)と命じた。藤村氏の本名春樹にしようかと迷つたが、結局春來にした。春生(ハルチ)といふ案もあつた。所が結婚滿七年にして六兒を生んだので、これで少々弱つたのか、最近、荊妻心臟を弱らし、そのせゐで全身を腫らしてゐる。此許亭主大案じの体です。○それやかれやで、この月末、好きな京大阪の旅に一寸出れさうもない。先は、

(三月二十六日夜)

定價表

一冊	貳拾五錢	郵稅貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	稅共
十二冊分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割増の事
○照會は返信料添付の事

昭和二年三月二十八日印刷
昭和二年四月一日發行
〔貳拾五錢〕
名古屋市[illegible]百五十七番地　編輯兼發行者　尾崎久彌
名古屋市中[illegible]大津町二丁目三[illegible]　印刷者　英比貞造
名古屋市中[illegible]大津町二丁目三[illegible]　印刷所　扶桑社
名古屋市[illegible]　發行所　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

尾崎久彌氏短册の會趣意書

尾崎氏の「江戸軟派研究」は、同氏の個人經營で、個人執筆で、しかも地方から生れて既に滿四ヶ年を經て、その既刊册數五十以上を算してゐることは、諸賢の御周知の事と思ひます。且つこの「江戸軟派研究」が、最近江戸軟派文學研究の曉鐘であり、その提唱者尾崎氏が、斯研究の陳勝吳廣の意味に取扱れてゐらるゝことも。誠に、同氏の此誌以後、個人に同人に、生れた同系の雜誌は、諸賢の御指呼によつても十種に近きものあらうと存じます。然るにその「江戸軟派研究」も、やはり最近世間の所謂不景氣の影響をうけて、經營困難に陷られつゝある事は、私たち親昵者にはよく分ります。同氏は、孤軍健鬪してをられ、生活費までこれに割いてゐられる現狀です。私たちは、これがお氣の毒です。といふて私たち微力なものたちでは沖もさしたる御後援も捧げられない、によつての思ひ付です。この短册の會は、同氏の內諾だけは得ました。同氏の作られた所謂江戸軟派式、狹斜情調の豐かな句や歌には、中々嘗て斯道の玄人であつただけ、佳作に富んでゐます。それを今、書いて頂かうと思ふのです。又、同氏自筆の文字が、凡て硬ならず軟ならず、獨得の雅と婉と具へてゐられる事は、最近頻發せられた同氏單行本の自署題簽又は屏文字によつても窺はれます。で私たちは、此の機會に、同氏の短册を得たい渴望を醫すためと、且つは同氏の「江戸軟派研究」應援の爲と、此の一擧両得のためとから、大に諸賢の御贊成を得たいと思ひます。申込所は、便宜上「江戸軟派研究發行所」を借りました。左の規約です。何卒御贊成を下さい。金額二圓又は以上としたのは、本來は三圓くらゐが、普通でせうが、私の獨斷から二圓、又は二圓以上としたのです、多きは辞せず、少きも咎めず、要するにいくらでも御喜捨の意味でよろしくお願ひしたいと存じます。

規約

一、尾崎氏の自筆短册、句又は歌。（半折は、他の機會に讓る。）

一、頒布、一枚一組。一組二圓以上。句又は歌指定隨意。句と歌とをとりまぜまたよし。一人にて數組勝手たる事。なほ、句は、嘗て江戸軟派研究三編第一册に、同氏の作句五十五句載りをれり。その中より拔き希望せらるゝも妨げなし。なほ短册、當方負擔、なるべく適宜、氣の利いたものを選ぶつもり。

一、申込期限、四月二十日。

一、送金は、四月二十日以後、現品と引替たる事。現品送費は、當方持の事。

一、申込、並に送金先は、江戸軟派研究發行所。

右

同志總代　市場直二郎　拜

昭和二年三月二十八日印刷
昭和二年四月一日發行

定價貳拾五錢　送費貳錢

昭和二年四月二十八日印刷
昭和二年五月一日發行

參編第十一冊（通編第五十六冊）

文本

尾崎久彌著

第十一冊
（通編第五十六冊）

朝倉無聲氏を悼む

朝倉無聲氏の長逝は、お氣の毒であつた。享年五十一であられたさうな。

氏とは、生前、面識がなかつた。が私又文通も一回だもなかつた。私淑も昔はした先輩の畏敬した、一人である。昨年來一度、手紙をおくらうと思ひ〳〵、筆不精が祟つて、たうとう所期を果さずに終つた。今、私は、靜かに、氏に關する、或は氏も知られなかつた氏の晩年の事蹟に、私の少し拘りあつた事を述べて、せめて氏の靈に告げたい。何も自分の吹聽それ自身ではないのだ。

それは、氏の晩年の大作、(現れた上での)その一たる、新修日本小說年表の發行である。かれ〳〵この增補が、氏の手によつて成されつゝある事は聞いてゐた。丁度一昨年の秋十月十七日、私が春陽堂氏に招かれて、恐らく十五年ぶり位ゐに二日程在京してゐた時の事である。私は、春陽堂編輯部の今村氏から、相談をもちかけられた。「何か、絕版物で、發行していゝものはありませんか、大分ぼつぼつ再版が出るやうですが。」といふ話である。私は「列傳体小說史は如何。君の方に版權があるでせう。」といふと、「それは、日下考へてゐますが、その外には?」といふ。「それならば、朝倉の小說年表がいゝ。これに越したものはない。舊版のまゝでもいゝが、著者へ賴まれたら、增補をしてくれるでせう。」といふと、「その朝倉といふのは、どういふ人ですか。」といふ質問である。その時の今村氏の頭には、私の(一個眇たる)存在はあつても、偉大な先輩――朝倉無聲氏の存在はなかつたのである。私は虛名を賣られざる氏の境遇が悲しかつた。時々人のいふ所では、(名古屋へ云ひに立ちよる人々の話)東京の知友間で、朝倉氏は評判がよくないらしかつた、が然し業蹟の上では、私たちの大きい先輩の一人であるのには相違ない。人と業蹟とは別物である。私は、今村氏に、朝倉氏の偉大を說明した。丁度、その頃「新小說」にも氏の短文が載つたことがあつた、あの人だといつた。やつと今村氏も氣がついて、感歎し直した。「では早速、著者にぶつかつてみませう。版權はどうなつてゐるかなア」と、それからは余談になつた。その後、名古屋から、手紙で、「日本小說年表の增補出版の事は、如何成つたか。著者に依賴する手蔓はあつたか。何だつたら坪內さんから紹介して頂けば、著者もうんと云ふだらう」とも云ひやつた。とその返事に、「其後、朝倉氏に逢ひ、あの本出版の件を進め、版權讓渡の事も話がまとまり、日下增補原稿整理中です。」との返事であつた。あけて昨年二月頃に、ポツ〳〵新聞に豫告が載り始めた。古本屋ではそろ〳〵この舊本の買入に警戒し出した。たうとう此の本の發行を見るに至つた。が然し私の話を持ち出してからは、余程の時日が經つてゐた。即ち昨年九月三十日の發行となつてゐるから、約一ケ年の經過である。即ち春陽堂版の氏の新修年表の存在には、誇張していつたら、此の私が、そのとりあげ婆の役ぐらゐには、當つてゐるのである。

昨年末、今村氏が名古屋へ來た時、私に逢つた時も、すつかり朝倉氏のものを引受ける本格になつてゐて、中央公論へ出てゐる氏の見世物硏究が完結したら、出版する筈だといつてゐた。愈々結構だといつた。

私は、氏をありがたい先輩と思つてゐるのは、舊版「小說年表」による恩惠の傑れて多い事による事は勿論であるが、又、「東京版此花」や「江戸趣味」などによる事も多い。三田村氏も私の尊敬する先達の一人であるが、氏よりも此の朝倉氏の方は、一層文學考察の上に於て、私を益して下すつた事が多い。「江戸趣味」に載つた洒落本の分類だけでも、私は最近、その恩惠にあづかつて、氏をありがたしと思うた。殊に、氏の校訂した國書刊行會本の「洒落本」二冊の存在に於ても。

氏の見世物は、中絕に終つたらしいが、氏の從來の雜考類は、まとめたら、相當の量に上るであらうと思ふ。殊に氏の業蹟の大なるものは、從來、風俗などの硏究に於て、當時の又は後代の隨筆類に依る諸家の傾向であつたのを、同氏が洒落本(主に)や黃表紙、川柳などの、文學的作品を材證としてその立論推定に力められた、此の新しい傾向を始め、また云ひ出した人は、たしか同氏が最初、(少くともその色あひの濃厚な事に於て)であるかと思ふ。

氏の遺文並びに從來の分を、纏め上げたい。系統的なものはないかも知れないが、後輩を益するヒント、資料に富んでゐるだらうことは、論を俟たぬ。私など、至らぬものであるが、進んで編纂の事に當つてもいゝ。唯、親戚からと

(表紙三へ)

黑本の一つ

黃表紙から青本、更に黑本、更には赤本と、遡ると、面白いものだ。殊に此の黑本、青本などの味は、棄て難い。丁度、稚拙、といつた感じ、そのものである。恰も、浮世繪が、末期頽廢派のものも面白いが、往昔、肉筆板書並行當時のものにも、稚拙にして自由、こだはりのない、却つて凡人不及の域が窺はれて、懷しく尊まるゝと同樣にである。文學上の、此の黑本・青本も然りである。元來が藝術の內容論からいふと、（藝術の藝術味自らからいふと）江戸期文藝は、頗る藝術らしからぬ、怪しいのが多い。なる程、戲作と彼等が自稱した通り、戲だと思はるゝのである。それが多い。その中でも、黑本―青本―黃表紙―合卷（草雙紙）では、凡て此等は主に童幼婦人趣味であつて、文字の驅使からいうても、構想の偉大奇拔から謂うても、秀作は尠ない。その中にも、自然とそれはそれなりと固まり、一個の風趣を出してゐるものもあるが。諷刺・風俗直寫の意味では、まだ黃表紙が採れる。人は、洒落本と併稱し、時には洒落本よりも黃表紙だといふ人もあるが、それは、調子をうんと下げて、黃表紙の、あの滑稽と諷刺と世態描寫、まだあくどくなりきらぬ洒落（割合に上品な）に興味と執着とを持つてゐる者には、一二なき境地であらう。がこれが、絕好の藝術境でないことは勿論だ。迚も、それが愛欲といつた一局部に限られてはゐたが、とにかく人間性の中核にまで滲入しようと企てたらしい洒落本の或者とは、較べものにならぬ。黃表紙は、まだ、それでも、獨立した文學らしい形と匂とを持ち來つたものであるが、以前の青本・黑本・赤本になると、その非藝術味、大衆味―寧ろ童幼婦女子味―は、一層烈しい。その大半は、當時の劇內容の影響を受けたか、又は金平本さては古代の物語小說の飜案、その通俗化（寧ろ短篇化と時代化）を圖つたかと思はれるものが多い。青本・黑本の時期は、大凡そに同じ年代で、即ち延享から安永へかけてゞあるが、「新修日本小說年表」の示す所では、黑本は、延享元年

から、青本は、同二年からのやうであるが、無論、一方黒本、一方青本、即ち表紙が此の二樣に行はれたものであつて、內容は、類似の、赤本の金平本と御伽草紙の繪本化の時代から稍進んで、歌舞伎淨瑠璃に材を藉りてその梗概、概念を示すもの、流行事物見世物などに藉りたるもの、古武將勇士の物語(平家、盛衰記、曾我、義經記、太平記などの軍記物の一部分、又はそれに出典を求めた)などの童幼化、さうした主に童幼化のものであつたのである。が時には、少年少娘に與ふる敎訓的のものもないではなかつた。即ち童幼の單なる享樂・刺戟の他に、敎訓味のものもである。これらが、多く作者不詳であり、且つ畫家のみが僅かに傳はり、それも繪本としての方に存在が多く、小說としては、比較して貧弱であることは、すでに定說の如しであるが。さて、自分は、最近發見した黑本の一つに、敎訓味の著るしいのを見た。以て當時稗史の形式を具へてゐたらしい此等が、猶は立派に童幼婦女子向きで、しかも敎訓などを主に含ましめたものであることの、一證左として、左に、その一個を紹介したいと思ふ。

それは、「しのぶ賣俄分限(うりにわかぶんげん)」と稱する、十丁物(二卷物)である。年代は不詳。(因みに此の黑本、新修日本小說年表には、年代不詳・外題不詳の部に組入れられてゐる所のものである。柱によりて、外題がはりに、「にわかぶんげん」とせられてゐる。さすがに十丁(二卷)は謬つてゐない。貼外題散佚のためである。幸ひ家藏本、下卷の分が全部保存せられてゐる。それにより、此の命題のものたる事、明瞭となつたのである。)

內容は、虛榮高い父母に養はれた派手に育つた某女の、末凶の身の上と、貧乏な大酒呑みの寡居(やもめ)の父親によく仕へた孝行娘の某女が、末吉の身の上と、といつた二人の娘の型によつて、敎訓を與へてゐるのである。

○

「山州八せ(瀬)のへんに、五兵へといふしごとし有、つねに酒をすきて、おやわんにて五はいづゝいきをもつかずにのむゆへ、人名づけておやわんの五兵へとあだ名をよびけり。おいちといふ娘を持けり。母におくれ、てゝおやひとりにかう〳〵をつくす。(とゝさんさゝが過るぞへ、わづらふて下さんすな、)長介といへる酒のみ友だち、はなしにきたる、(おむすだの)。」

これが初丁の表、その全体で、即ち貧乏で孝行娘のおいちの素性、生ひたち、人がらである。畫は、凡て鳥居風で、(無落款)五兵へが、親椀を手に持つてゐる。肌ぬぎ、手拭を肩にしてゐる。左の腕には、一心と彫物がしてある。また右肩へかけた手拭には、太の字が見えてゐる。此奴(こいつ)、一心太助氣取りでゐるのか。お市は、藤の模様の振袖を着てゐる。友達の長介は、皿に盛つた肴を箸で挾み上げてゐる。傍に、酒樽(たる)一個があり、それに、仝の印がある。

「圓山よりきたの(北野)ゝ邊に、ひらのやとく(徳)介とて、大ぶげんの人有けり。娘もちけるが、てうあひははなだしく、いろ〳〵のげいをならはせる。こきんまんねういせ物がたり、其外ことさみせん又はおどりをならはせよねんなくたのしむ。女ぼう(房)ともに悦ぶ。(あれあのこしのしなふ事、中とみをまかします。)」(久彌補—この中とみは、云はでも著き當時の名優中村富十郎の謂である。)

これは、初丁裏から第二丁表のヒラキの光景で、大盡の徳介、頭巾をかぶり長煙管を手にして、あぐらをかく。傍に立膝の女房、娘に見恍(と)れてゐる。中央、左右の手に扇を双(もろ)に持つたお雪の踊り姿。(菖蒲の模様の振袖を著てゐる。)左、三味を彈く腰元、右、銚子の番する腰元。左、おたいこを打つ男一人。

次は、清水參詣の徳介と娘お雪、腰元一。それを見染めた「四でうへんのぶけん、よどや與四郎といふもの」、宿の妻に貰ひたしと伴の平兵へに賴み入る處。櫻の滿開で、うしろ幔幕である。(第二丁裏から第三丁表)

次ぎ第三丁裏で、お雪を島原(嶋原)の太夫道中に見たて、一杯飲んでゐる徳介。曰く、

「ひらのや徳介、げいのあまりにむすめ(娘)にしまば

らのけいせいのまねをさせてたのしむ。こゝんのたわけ也。太夫が道中あげや入、こんな物かとこづまとり、さぎのごぢようの八もんじ。(ごふもいへぬ、一生おとこはもたせぬぞ)。(障子から覗く腰元)(こしもとのぞきわらふ、おらがだんなは、きついばかものだ)。」

次ぎ、與四郎の手代平兵衛、お雪を貰ひに來る條の定、斷る德介、その口上、

「とく介はら立、いやおれがならぬといふ。むたいにもらおうとは、いやはやかたはらいたい事だ。あれはむこもとらず、ゑんにもつけず、一生むすめでおきます。そなたの若だんなのよるのなぐさみものにせうとは、思ひもよらぬ、ならぬぞ〳〵、なく〳〵ならぬでござる。」

といふ親爺の變態心理は、益々募つて限(きり)がない。是などは、自分の娘ながら、享樂に徹底してゐる點、遊戯物視してゐる點、性的關係こそなけれ、江戸時代の心持とは思へぬ程、變態に於て近代的であると思へる。

次ぎが第四丁裏と第五丁表で、五兵への娘お市を與四郎見染めの段がある。これが命題の「しのぶ賣俄分限」の外題の起りで、お市が生業(なりはひ)のためしのぶ賣に出るのである。

「おやわんの五兵へがむすめおいち、しのぶをうりておやをはごくむ。わしがざいしよは、京のいなかのかたほとり、やせやおはらのせりやうのさと、しのぶいらんせんせんかいにやア、しのぶかはんせんかいなア。

與四郎は、とく介がむすめをくれぬゆへ、何とぞ又も女ぼうを見たてんと、くらまへんに行けるが、しのぶうりがきりやうのよき事、とく介がむすめよりすぐれければ、これをもらはんといふ。なるほどしのぶうりはかういふがかわいらしくてよい、ふとつたぶこつなは、おりやきらひじや。手代平兵衛、思ひまふけし所とよろこび、おやの五兵へへもらひてともなひ、わが家へつれてかへる。」

往來の馬子・飛脚、までもが、お市の縹致(きりやう)にうたれて、通る体である。

次ぎは、第五丁の裏で、伴ひ歸つた平兵衛は、

女房もろとも、お市を飾りたてるに腐心。

「これは思ひもよらぬわたしがやうなふつゝかないなか女を、おせわになされ、ありがたふござんす。」（お市いはく）

〳〵ぐわんらいきりやうがよいから、かくべつこしらへばへ（越の西施）がした。たうの（唐）やうきひ（揚貴妃）、かんのりふじん（漢の李夫人）、ゑつのせいし、せ川のきく（瀬川菊之丞）中むらの松江といふてもかなはぬ〳〵。）（これ平兵衛の言葉である）

〔これおまへのとのごは、大ぶげんじやぞへ。〕（平兵への女房の詞）」

というて、感嘆久しうしてゐるのである。こゝで、此の年代不詳の黒本の、大凡その推定年代が分る。前に出でた中富（中村富十郎）からも分るが、此條、即ち菊之丞、中村松江の名によつてもである。即ち寶暦末明和にかけて、清滿（鳥居）ゑがくなどの紅摺繪によりてよく見られる松江、並に二世瀬川菊之丞である。即ち此の黒本、明和初期の作で「或はやはり清滿畫くのものではあるまいか。

次ぎが、下巻（第六丁より第十丁まで）で、この下巻表紙は、貼外題とも保存せられてゐる。五兵へ大分限の舅と出世、体の節のうづくのを防ぐための、どうづきの体、である。

第六丁の表は、五兵へ宅へ平兵への來て、挨拶の体である。それにも五兵への律義な性と、子を持つなら美しい娘、さうした美女禮讃（わるくいへば日本人の傳統である、娘によつての親の安逸欲求）の意が現れてゐる。

「長介（五兵への飲仲間である。平兵へからの贈物であらう樽を抱へて）悦ぶ。〔五兵へはしあわせものだ。子をもつなら、をなごがよいぞ。〕

（平兵衛の詞）（われら是へまいる事は、御そく女おいち殿をわかだんなの御しんぞにいたしたいから、なんでもせつしやに下されい。そこもとはしうと樣じや。かごにのつてやしきへござれ。」

（五兵への詞）（わたくしは、酒をたべるよりほか、なんにもわるい事いたいた覺へはござりませぬ。おめしなさるゝ事は、ごめんなされて、下されませ。）」

次ぎ、與四郎、お市の父の五兵へに對面、舅の盃の体。お市、すでに與四郎の妻として榮えて

ゐる。

「おいちは、思ひがけなく與四郎とふうふのけいやくをなし、よろこぶ。これもおやかう〳〵のしるしとぞきこへし。

與四郎、おいちをつまにもらひ、ちゝの五兵へをすぐに引とり、むこしうとのさかづきする。五兵へはついに出つけぬざしきへ出て、びんごおもてのたゝみにては、大きにすべり、口上も出かね、あせはぢばんをしぼり、とうざいのわかちもなくもみでをしてゐるこそおかしけれ。（むすめゆへに大きにめいわくをいたします。あてこともない。かう〳〵なやうでふかうものでござります。ほんにはなしのやうな事だ。）

「とゝさん、わたしがかういふ身になつたは、平兵へ樣のおかげでござんす。たんとおれいをおつしやつてくださんせ。」

次ぎは、第七丁裏で、女中たちが「このお小袖をめしませ、どふでも木綿ではおさむうございます」とすゝめても、「いや〳〵わしは木綿でなけりやわるふござる。やわらかものは、ぐや〳〵してさりとはわるい。」と、五兵へ辭退の体である。こゝにも、貧乏な五兵への、昔忘れぬ素樸な性格が現れてゐる。作者は、寧ろ分に甘んじて非望を持たぬ、（非望を持つたら、それは借上であり、やがて零落衰亡の基である。）五兵への性格を中心にして、或る敎訓を與へてもゐるし、且つ五兵への素樸さから、一種のしぜん的滑稽味も現はしてゐると思ふ。

次ぎ、五兵への愈々五兵へたる眞骨頭の現れである。即ち、（此分、第八丁表）

「よどやの大（釜）がまのへんに、いびきのこへきこへければ、こしもとあやしみ、手しよくをともしてみれば、ゐんきよふしていたりける。

五兵へれい（例）のおやわんの酒にゑひて、ねどころをはいで、かまもとにねてゐる。ごう〳〵〳〵（慶元と見にきたお市が）おいちおどろく、（こりやとゝさんじやないか）。」

こゝまで來なくとも、すでに氣附かれる事であらうが、念を推すと、この五兵へは、形の上では例の院本「義經腰越狀」の五斗兵衞を借りてゐること

である。作者の故意であらう、(無論)名も五兵へ五斗兵衛、紛らはしい。或は、元來、五斗兵衛の形から、思ひついた此の作ではなからうか。即ち泉三郎館の段を淀屋の段に替へた、とんだ腰越狀の世話化である。がとにかく、此の五兵へには、名からも形からも、無論「腰越狀」からヒントを得てゐる事、疑ふべくもない。或は、讀者に、この飜案化の認識によつての二重の興味を起させようための、作者の智慧かも知れない。

次ギ第八丁裏から第九丁表へである。

「おやわんの五郎兵(マヽ)へは、手あらなる事にてくらしけるものが、いつしかけんぷにくるまれ、ゐずくまりになりけれぱ、ほね〴〵うづきわづらふ。むこ與四郎、そのやまひをさとりて、どうづき(蒔繪)のぼうにまきへをあつらへ、その竹までひぢりめんにてまき、五兵へ方へおくり、手代共をかわり(木遣)〴〵にやり、きやりをいはせて、びやうきのようじやうとする。

(そろばんはぢくとちがつて、ひるめしのくへる事、山のごとし。いかさまよいはらへらしだ。)」

これは、手傳に來てゐる手代共の言である。面白いではないか、こゝにも五兵への如き下層、筋肉勞働階級に對する、寧ろ讚美がある。勞働によつての快感を强調してゐるやうである。凡て淀屋與四郎の態度、貧家の娘を貰ひ、その娘の父に對する、かうした階級を絕した親愛介抱の態度、これにも當時の作者の考へてゐた貧富に對する理想が、あるやうにも思はれる。即ち富は貧に待ち、貧を貧として貶しない、貧は貧として、その貧に樂しむ、しぜん貧富の懸隔が大調和の域に進みゆく、さうした人間自然の要求が、作者の心にうづいてはゐなかつたらうか。とにかく貧を貧として悲しまず、勞働を下賤なり、人間の欲望にあらずとしてゐないだけは、慥かだ。唯、美女を中心にして、女性の美を男性の玩弄物化した、(延いては女性を玩弄物化した)所謂日本在來の「玉の輿」なる思想、これがまた物語の主調を爲してゐるが、これだけは、當時として已むを得なかつたらう。唯、分限と貧者とを交涉させ、勞働の快を强調してゐる所に、此の作の、我らの讀むる價値、及び當時(こ

の寶暦明和時代）必ずしも絶對の分限讃美、華奢讃美ばかりではなかつた、その思想の流れが仄見えて、床しいと思はれるのである。

「三（石）ばんめのますどりがはかりしこめ（米）はいの、さんごく三斗三升三合三才まではかりおさめて、四ばんめにわたした、よい／＼のよいやな）。（鉢巻、扇をひろげて、音頭をとつてゐる五兵への詞であらう。）（人が見たら、いかいりこうものだといふであらう）。」（手代の一人）

次ぎ、第九丁裏、第十丁表。即ちお市、お雪の榮華と沒落との對照である。

「おいちは、まづしきおやをもちけれども、かう／＼の心ざし、天につうじけるや、思はずぶげんのつま（妻）となり、おや五兵へを心のまゝにくらさせけるこそめでたけれ。

（けふは、てんきもよいからきよ水のくわんおん樣からやせへ行ましよ。）（お市いはく）

（おあついかへ、そろ／＼おはこびあそばせ。）（腰元の一人）

（あれうつくしい女中が、じしんおかべをかふてさ。）（女中の他の一人、お雪を見つけての詞。）

（あのとうふは、さぞうまからふ。）（挾箱を擔いたお市の供の男の詞であらう。視線は、お雪に向つてゐる。）

いつしかしんしやうをおゆきがけいにいれあげいまはうら店へはいり、女ぼう（房）にもおくれ、むすめとふたりくらしける。むすめをよこ町へとうふをかひにやるのにも、あとよりじまんがほにてほめる人はなきかと思ふも、いんぐわなたわけなり（と德介の話である。）

（あれは、しごとしのむすめ、しのぶうりのおいちじやの、よいかみ樣になつた。）（お雪の詞。）

おゆきは、一しやうおとこもたずくらせしがおやのこゝろのおろかなるをうらみくらしけるこそ、だうりなれ。」（作者の批判である。）

次ぎ、親椀の五の字入りなのを三方に載（の）せ、大黒樣然と、頭巾を冠り、福々しい五兵へ、跪坐（あぐら）をかいて、「九十の賀百さいの命をむかへ、子そんはんゑい」めでたしといふ所である。

「御いんきよ樣、ちとおこしをもみませうか」は、聟の方から附けられた小僧（子坊主のやうな頭）の詞である。

以上で、此の「しのぶ賣俄分限」は終つてゐる。初めにいうた通り、文學的作品としては、内容の單調な、空疎といへば空疎な物である。が、一縷ふしぎと我等に快感を與ふる稚拙味、（その某ゑがくの繪畫が與へる此の感じもある。）と、含まれた五兵への淡白な單純な性格、お市の素直さ、分限與四郎の宏量。それとうらはらの初め分限後零落の德介の、當時としてはまた一種の型たる性格とその始終、これに禍せられたお雪の始末、凡て我等には、假想物ではあるが、割にしぜん的に讀まれた。殊に、五兵への分を忘れぬ勞働享樂主義――榮耀に溺れきらぬ態度にも。

當時と雖も、貧乏人が大勢であつた筈である。今日のやうな切迫した、苦しい貧乏人はなかつたかも知れぬが、が貧富の懸隔はあり、中、かうした稗史讀物の讀者も、其の大部分は、非分限であつた筈だ。それが所謂古今同一の所謂る大衆の過半である。此の貧乏な大衆どもに對する、作者の同情、足るを知り勞働にいそしむ者には、此の善因によりあの善果を得ると、さうした大衆に向つて、一般的の慰撫の言葉が、大に籠つてゐるやうであると思ふ。こゝが、此の作者の唯一の狙ひ所ではなかつたらうか。が、此の中にも、美女禮讃の因習的觀念のあることは已むを得ぬ。正直いへば、いかな五兵へだつて、お市といふ美娘がなければ、稼いでも追ひつく貧乏で、一生親椀の酒にも不足がちであつたかも知れない。が此だけを去ると、（一方お雪も美娘だつたから、此點では公平だ。）德介と五兵へとの、此の二人の性格、享樂狀態の相違が、劃然と此の作の善と惡とである。此點、初めからの無理な拵へといふ感も起る。然し當時の作、何れか拵へ物でなからう。

以上、「俄分限」の紹介かたぐ\、思ひついた事ども。

一九の飜案小咄

一九は、從來、自作の滑稽趣向を昔の狂言あたりから材料を得てゐる、といふ事は、よく謂はれてゐる事柄である。現にその「東海道中膝栗毛」の類には、それが多いこと、人の指摘した如くであるがそれが小咄にもある。勿論、彼は、初め此の小咄形式に於て、此種の飜案を爲し、後に滑稽本にもそれを採入れたのであらうが。彼の製作經過から見ても當然な事と思はれる。

彼の享和四歳甲子初春の自序を載せた「落咄腰巾著」は、然りで、稍長い小咄數篇を纏めてゐるが、その中の「高慢」といへる一篇など、歴然然りと認められるものである。尙、此類、此の「腰巾著」並びに同時代の彼の小咄本にも著しからう。今知り得た一つ、しかも餘りに著しい一篇を拔いておく。「高慢」は、歌よみならぬ侍の、俄仕込の風流の化の皮が現れる、即ち狂言の「萩大名」をそつくり採り入れたもの、即ち全く飜案、寧ろ剽窃と目すべきものである。原文、狂言の「萩大名」は、これを略く、狂言記卷一によりて、對照せられたい。でなくも、人の知る所、今更引抄する必要はあるまい。左が、その「高慢」である。

○高　　慢

ある侍草履取一人つれてたち出。ナント可すけ。けふはどこへいかふ可介「ハイわたくし宿に。ことの外よい萩がござります。御見物に入らつしやりませぬか。侍「ヲゝそれはよかろふ可介「しかし旦那さまをお供いたしますからは。ちとお哥でもおよみなさらずば。御威光がござりますまい。何なりとも遊しませ　侍「ハアそれはなんぎじや。身共侍だから武藝にばかりくつたくして。和哥などといふことはいたつて不得手じや可介「さやうならばよいことがござります。こういふうたをあなたがおよみなさつたぶんでおつしやりませ　侍「ムウ何と申す哥だ可介「ハイ七重八重九のへとここそおもひし

に。とへさきいづるはぎの花かな。と申うたでござります 侍「ヲヽよい〳〵。しかし身共年罷よつて物覺がわるい。何というふうたであつた可介「ハアさやうならこういたしませう。あなたのお扇子をおかしなさつて下さりませ 侍「ヲヽ何としおる可介「イヤ此おせんすの骨を。七本ひろげますと七重八本では八重。九本だと。九のへとこそおもひしにとおつしやりませ。十本ひろげた所で。とへさきいづる萩の花かな。ナントおわすれなさつたとき。わたくしの手もとを。御らんなさればよいではござりませぬか 侍「でけた〳〵。なか〳〵そちは利口なものだ。しからば直に罷越ふと。ほどなくかの可介が宿に來りければ宿のていしゆ「イヤ可介かなぜきやつた可介「けふは丹那をお供したが。さだめて萩がさきましたろふ ていしゆ「ナニ丹那様がござつた。イヤこれは。むさくろしい所へよくいらつしやりました 侍「ヲヽそちがていしゆか ていしゆ「さやうでござります 侍「べくすけがはなしにきいた。はぎはどれだ。ていしゆ「ハイあれでござります 侍「ヲヽ見ごとによくさいた。コリヤ〳〵ていしゆ。身共武門に育たれば劔術鎗じゆつはもちろん。風雅の道では。りつくはしうきく。ちやのゆはいかい。其内わけて哥道にしうしんだ。あの萩について。一しゆよんでとらそふ ていしゆ「それはありがたふござります 侍「しからばコリヤ可介。今だ〳〵。ヲヽよい〳〵ていしゆもふでけた ていしゆ「これはおはやくできました 侍「イヤ身共考へるなぞといふ事は嫌じや。たばこ一ぷく存ぬうちによんだ。はやかろふ。アヽなんとか。コリヤ可介ヲヽよい。ていしゆかうだ。七重八重九重とこそおもひしに。アヽなんとか。ヲヽそふだ。十重さきいづるはぎのはなかな。どふだ〳〵名哥であろふ ていしゆ「ぞんせぬ事ながら。おそれ入ました 侍「コリヤ可介。ていしゆへ何ぞとらせたいものだが。イヤ御酒調へてまいれ可介「かしこまりましたと出て行。ていしゆ硯箱をもち出「たゞ今のお哥を書付ておきたうござります。今一度おつしやつて下さりませ 侍「ヤ何だ今いちどいへか。コリヤ可すけ〳〵 ていしゆ「イヤべくすけはお使に參りました。今に歸りませう。先おうたを 侍「はて扨折のわ

るい。アヽなんとか ていしゆ「そのかわり。おみやげにこの萩を。七八本もあげませう 侍「ヲヽそれ〳〵七本八本、九ほんとこそはおもひしに ていしゆ「イヤそれでは。おうたがちがつたよふでござります 侍「イヤ〳〵ちがはぬ ていしゆ「下の句は 侍「とんとわすれた。イヤこうせう。そち此下の句をつけやれ ていしゆ「さやうなら。こうつけませう 侍「何とつけた ていしゆ「たはごとついてけつをされるな

といふのである。狂言の「萩大名」そつくりである。唯、その中の、をはりの、亭主が「おみやげにこの萩を。七八本もあげませう」の言葉によつて、七本八本と侍がつゞける件が、小咄らしいといへば、さうである。がそれにしても、いやに咄が長つたらしくて、飜案としても巧みではない。此の「腰巾着」は、○初買以下計十三篇の咄を集めてゐるが、內、一ばん短かく、小咄の体裁らしくて、且つ一九の創作らしいもの一、「痲疹」といふのを、事のついでに擧げておく。

○痲疹

市ぼう。ゆふべ はとけへいつた 市「しんゑびやの花月をかつて。ごうてきにふられた 友だち「ソリヤアごふして 市「ごふしたとやら。そけへくると。夜の明るまで。ぐつとねてしまやアがつた。あんまりごうはらだから。けさすぐに。てうじやのこのさとをかつた所が。こいつもねてしまつた。いま〳〵しい。とんだめにあつた 友だち「イヤ此頃はよし原もねることがはやる 市「なぜねるがはやる 友だち「ハテみんな。はしかになるしたぢだからさ。

因みに此の本、鶴屋金助板。小本。序四、本文三十三。巻頭、治郎庵の序、自序、自畫口繪及び自畫像を載せてゐる。そのヒラキの口繪自畫は、彼の是れより後（文化十年）の狂歌繪本「江戸名所繪本」の或る一圖と、全く同じ構想である。

地方色の描寫（上）

――「田舍芝居」の亞流と鄙遊里本

第一、「田舍芝居」の亞流に就て述べたい。「田舍芝居」は、人も知る万象亭（二世風來、竹杖爲輕）の作で、當時の洒落本界に恐慌を來した、皮肉な作である。後、中本に再版せられた、寧ろ洒落を滑稽と同義に取扱つて、滑稽本に入れて可なりの作である。これが天明七年の板行。此の「田舍芝居」の亞流は、文化頃の三馬などに至るまで、をり／＼摸倣、追隨作を得た。今、それの一斑を、年代により書目を擧げてみるならば、

書名	作者	年代
○田舍芝居	万象亭	天明七年
○野鄙安誌	淇水	寛政十三年
○風流田舍草紙	一九	文化元年
○見通鄙戲場	蘭鷄	文化三年
○同　後編	同	文化四年
○田舍芝居樂屋雜談	鬼笑	文化五年
○狂言田舍操	三馬・馬笑	文化九年
○右、操を主材にせるもの。		
○田舍芝居忠臣藏	三馬	文化十年
○旅芝居田舍正本	正二	文化十一年

以上である。なほ、此の傍系として、素人芝居（凡て江戸物。同内容の田舍物は、前掲に含む）の類を擧げると、

書名	作者	年代
○滑稽素人芝居	慈悲成	享和三年
○素人狂言紋切形	三馬	文化十一年
○口豆飯茶番樂屋	慈悲成	文化十三年
○方言競茶番種本	一九	文化十四年
○茶番早合點	三馬	（初）文政四年 （二）文政七年
○其他、茶番もの多し。		

といつたものである。江戸物を除き、田舍物に就て、主に述べたい。

元祖「田舍芝居」は、有名周知のものであるから、姑く措き、第二の「野鄙妄誌」から謂ふ。「野鄙妄誌」は、摸擬作の中では、割合に古い方で、初めの「叙開一齣」は、寧ろ田舍芝居の概説で、隨筆体のものである。次の「八王寺村の一齣」では、田舍役者のおひからし芳川權七の宅、そこへ小佛在から買に來る。こゝもと權七、引張凧の体といつたもので、肝腎の田舍芝居の直接描寫には觸れてゐない。勿論、作者の積りでは、中編以後に、愈々の本舞臺を書く積りであつたらうが、これは未刊に終つてゐるやうである。とにかく、此の本、田舍芝居の豫備智識ものである。

「風流田舍草紙」は、一九の作、例の東海道膝栗毛の初編(享和二年)によつて、彼の地方色描寫が中りを取つた、その傍系で、かねて彼の得意を强調したと思はれるものである。主材は、忠臣藏で、その七段目からでその雰圍氣、卷三以後が、田舍芝居そのものゝ描寫である。五卷に別れ、卷一卷二はる。元祖「田舍芝居」よりも、一層車輪になつて、彼の田舍通、方言通を振り舞はし、如何にも得意滿面であるやうな氣がする。「見通鄙戲場」は、後說。「田舍芝居樂屋雜談」は、雜談と名の示す如く、京大阪の記事も見え、またその近在又は東海道筋、上總などに觸れてゐる。描寫といふ程のものなく、平叙のまゝである。奇聞雜談集といふのみで、從つて方言を基本にして、小說体のものではない。「狂言田舍操」は、三馬と馬笑の合作、恐らく三馬は、添削であらう。これは、一寸風變りな、操の主材である。初め、田舍操芝居舞臺正面の圖や、同正面より向の方を見る圖や、人形機關の說明圖、操芝居賣主證文、同買主證文、樂屋掟書の寫などを揭げ、すつかり本式顏である。上卷は、ヘボ太夫どもの道中の体で、下卷は、はじめ乘込手打、勸進元の光景、などで、最後、妹背山お三輪の出の光景がちよつぴりあつて、時ならざる夕立雨(雷)「そりやおかんだちさまだぞよ」で、打出の太皷といふのである。

「田舍芝居忠臣藏」は、三馬の作で、上卷は、田舍の自稱役者連中の法螺話、通な話。役々の振當相談。下卷は、愈々相談決つて設備。當日の狀況、押合へしあひの繁昌、忠臣藏第三段目の始まり、滑

稽な破綻で、終つてゐる。これも、忠臣藏は、外題だけで、寧ろ田舍に於ける芝居享樂の現狀、江戶京阪の芝居趣味が、如何に鄙に滲潤してゐたかを、如實に描き出したものと思はれる。

以上で、所謂、通り名の「田舍芝居」の摸擬作は、一通り終つたが、途中拔かした「見通部戲場」と、この田舍芝居もの丶最尾に來るべき（年代に於て）「旅芝居田舍正本」との、稍々はしき敍述に移らう。

「見通部戲場」は、文化三年版、柳陽舍圍鷄の著述である。中本一冊、序は二個あつて、冒頭は、櫻田氏誤而敬白といふのと、他は自序である。櫻田氏とは、恐らく櫻田治助の謂ではなからうか。その序の一節に「予が友各柳陽舍主」云々。「拙子もおなじひとつ穴の狸にあらぬ豚のかるくちおん目まだるきところはともに御免と　櫻田氏　誤而敬白」とある。この序から推して、作者は、櫻田（治助カ）と同じ作者の仲間、その弟子とでもあらうか。扨、此の本の內容は、

第一　戲場の發端曲兵衞白猿が寄な語

第二　曲兵衞始て旦那寺指南の大會な催

第三　曲兵衞が新作事な行杉破より大に笑

第四　行杉妙言な咄曲兵衞が正本な難

梗概を述べよう。

銚子邊の、往古より狂言といふことをなさなかつた邊田村といふが有る。「庄屋年寄組頭うちより、何れの村邑にても、みな豊年の狂言を取組なすに、當村ばかり其催なき樣、外聞わるしと、庄屋方に寄合付、幸このほど三十年ぶりにて江都より歸國たる、年より與次作が家兄曲兵衞を招て相談に及ぶ」。この曲兵衞は、「曲兵衞年は四十七八、廿五六年いぜんだんなでらのいもばたけにてござなりよろまかし、せんぞのはかわらだけがせしだん、すまぬとちうじにこぢられ、ぜひなく江戸へいで、てらかたのぞうりとり、大たなのめしたき、しやごのくすりばこもちといろ〱へんくわし、おやぢのほうじについて、くにへかへりしが、なかにも江戸の事はせうちしていると、よばなしひまちのおり〱に、よしわらをはつこくといふは、さむいところで、女臣のこゝろつめたいといふ事かしらんと、みゝがくもんにきゝかじり、わかひものはいちどうに、どうらくをして、江戸へいて、しゆざやうするがいゝと、いつもこゝうにはなす。」といつた人物である。それが今日は、狂言方催

しの顧問として、庄屋殿からの招きで、正客になり、大跪坐で得意である。庄屋が相談をかけると、曲兵衞、愈々圖に乘つて「おらがせわのし申せば、大當りヲぶんでかし申して、きんむら(近村)のきやうげんのヲみての、ござんねへ。當むらなア、へたむらと、いふからへただんべいと、おもふ所を、おらアがせわのし申せばな、きんむらの人々なア、たまげ申スべい、はねいるがよふござる。[庄]そりやハア若ものどもが、よろこびますべい。シテふりつけとやらのやくしやどのは、なんといゝ申スがよくござるべいなア。

でふり付には、市川白猿がいいと云ひ出し、倚、此の白猿に就いて知つたかぶりをする。その親玉(白猿)を振付に賴むに就いては、千両はいると曲兵への詞に、庄屋共口あんぐり。そのあとが面白い。曰く、

[曲]……そんなら金のいり申されへよふに、おらがふりつけのチ、し申すべいか[庄組]わりさま、きやうげんのふりつけしつてい申すか[曲]おらアおや玉さまのチ、一チばん弟子に、なり申シテ、團十郎になるところだけれど、鼻さアひくいおしいこんだアと、いわれ申た、それだアから白猿どのゝかわりにやアほかのやくしやたちに、おしへ申たヨ[庄]そんならア白猿どのは、おやくしやのお地頭さま、お身さまは御家老さまかア[曲]チヽサあんまりけんべいのチ、つよくふるうてにくまれ申たから、いゝ時ぶんだアとおもつて、國へかへり申たよ[組]そりやてうどよふござつた、むら中の若いものゝあつめ申して大相談の、しますべい[曲]それがよふござる、今夜はまづけへりますべい[庄組]よふござりました。

以上で、第一は終つてゐる。第二は、再び丹那寺で大寄合に及ぶ。住寺(持)から「お代官様のヲおふれだアと、おもひめさつて、曲兵衞どのゝ下知を、うけなさろよ。のふ庄屋どの[庄]そふでござるといつた大變な曲兵衞、持て方である。曲兵衞、まじめにて、

[曲]まじめにてそも〳〵きやうげんとチいふことの、おつぱじまつた事を、はなしますべい[庄組]みなの衆、しんびやうにきかしやりませ[寺]なむあみだぶつ〳〵[曲]エヘン〳〵むかし〳〵あつたとサア[みな]なにがなア[曲]天道さまが、天の岩戸の中へかくれさしやつた事がサア[みな]ハテナア[曲]そこでこのよがくらくなり申たから、頼朝さまが義經さまに、いゝつけめさつて、公時さ

辨慶と巴御前とよつて、きやうげんのおつぱじめ申たから、天道さまがのぞいてみなさろとした所を、公時と辨慶が岩の戸をひつぺがし申して、そこで天道さまが、かんだしたアだ［寺］なむあみだぶつ〱［みな］ハテナア［曲］そこできやうげんにやア、頼朝さまと義つねさまと公時と辨慶と巴御前によく似たつらが、なけりやアなり申されへ、マアよくみんなのつらをみせなさろ［庄］さても曲兵衛どのは、ものしりだみんなこゝさアへ、つらをさんだしなさろ［みな］ハイトおしあひへしあひかほを出す、おらがさきだア、わりさまはちつくり、まちなさろ。いろ〱こんざつする［曲］これははアやかましいそれでやア、わかり申されへ、一人りヅゝこゝへきなさろよ［みな］ハイ［曲］庄屋どのゝ兄ア與五作殿よりさもさまに、なりやり申セ、あたまのづれへがよふござるよ［與五］ハイ〱ト出る［曲］與五作がかほを見て、あたまさアづなくてよふござるが、あんまり鼻さアちよつぽりだア、こふしなさろ庄やどのゝこんだアから、お大將にしますべい。大がまへ湯さア、わかしてつらを、おつびてめさつて、鼻さア釘貫で、ひつつまんでひきのばしなさろ。はなせへでこうなり申せば、お大將にやアぶつつけだア［庄］心得てござる。ちつくひはなだア、釘貫にひつかゝればいゝが。（下略）

色々役の振當があつたが、トド辨慶がない。到頭住持に決る。住持、イヤだといふのを、曲兵へどのゝ詞は、お代官様と同じに思へと、下々にいつた手前、已むを得ず承認する。但し齒がない、で入齒の工夫を曲兵へから授かる。［曲］かぼちやの種さア、飴んぼうへくつゝけ申て、はぐきへねじりつけ申すだといふのである。で、本堂の疊をあげて、稽古場にする事になつた。鼻さアひんのばしたり、眼をひつひろげ申したり、つらのかわをむくり申したりする稽古である。第三は、本堂の雨戸を立てゝ白晝ながらうちに燈をてらし、無用の者の入るを禁め、稽古場の体である。その門前を通りかゝつた半可通の行杉、その人品の叙述がいゝ。曰く、

年は三十くらい、むすこかぶなりしが、かんどふのみさならのはしげるこの村はばんさふの在所にてものさみしくくらせしが、（鬼狂言）ちきやうげんのうわさをきゝ、しぐみはたしかだんなでらとこの所へたどりしが、さなしめきりしほんどうのやうす、ふしんながらうかゞひきけば、

例の牛頭馬頭の、罪人苛責の体さながら、鼻を釘抜で引かれたり、本堂の柱へ若い男二三人を素裸になし、荒繩で縛りつけ、一人がそれを引張つて、癖直しにヒー〱いはしたり、たわしで面の皮を

こきむくる、次は戸板に裸身を挾んで押し潰してゐる、様々の体。正座の大壯子(おとこ)が曰ふ、狂言のヲ大あたりぶんでかしたくば、しんぼうしめさろ〳〵。行杉始めて合點が行き、ハヽヽヽと笑ひ出す。それを曲兵衛見咎めて、引張り入れて、痛吟味。それが江戸の客人と分つて、俄かに介抱。とゞ、曲兵衛と行杉との芝居の論。白猿の所在、近狀の詮議になつて、曲兵衛は、逆(ぎやく)にシドロモドロ、行杉こゝぞと半可を振廻す。村人の尊敬は、一旦にして地を變へる。正本、世界の議論が面白い。曲兵衛のトンチンカンな受け答へ。曰く、

[曲](またおかゝなりつてちよぼなどゝいふはござりましねへ [行]かききやうげんかへそんなら、正本(せうほん)がありやせう、これもしばいのはんかつうは大帳といふ、箱の中へ入れて頭取がたからものゝよふに、あづかりやす、その正本がだいいちさ。狂言のせけへはなんでござへす [曲]せけへは豊年だからはじめ申す [行]ハヽヽそんなら時代かせわかへ [曲]せわゝこの通りやけ申すから、おきやく人までたのみまするの ちだいは江戸とちがつて出申されへ[行]ハヽヽこりや大わらひだ、きやうげんのすじの事をきゝやす [曲]狂言なアよりともさまとよしつねさまでござる [行]ハアそんなら千本櫻のやきなをしかへ、こりやひれつたれ、正本をみせなせへ [曲]その本なアこゝにやアござんねへ [行]そんならまだできねへのかへ [曲]顔(つら)やからだのすなおし申て、本のこしらへますべいと、おもひ申す [行](わらいながら)モシ名主さんへ [庄](こいつきやうげんの事はよくしつたやつとおもひ、きうにはいつくばいて)ハイ〳〵。

といつた体である。次ぎ第四で、正本と證文と取違へて、地狂言正本の事、一此與五作與次作ハ庄屋組頭の居跡に相違なく候間頼朝様と義經様と申付候事、云々。右之通此人々狂言のうち役目出來兼候而欠落等いたし候ばふり付役人我等方より尋出し急度埒明申べく候後日のため正本仍而如件

月　日　ふり付役人曲兵衛㊞　といつたものである。曲兵衛益々旗色悪しく、[組頭]どふし申てもあのやつは、所拂ひにしめさるがよふござる、と大變な事になつた。[行]先代萩はどふだね、となつて、贊成。[行]そのうちてうど正本ができやす、トみな〳〵立わかれてかへる。尠くとも牛頭馬頭の苛責(稽古)が止んだだけでも儲け物である。「これより曲兵衛このうわさをきゝかけおちする跡は行杉が趣向

となり是もふでかしのみにて終に曲兵衞同樣の評判となればあとしら波と尻帆走るところへ實の優妓がくわゝりて漸く狂言と成滑稽は後遍へ編す」といふので、この册は終つてゐる。最尾に、柳陽舍蘭鷄述の跋三丁がある。さて此の本、後編が發刊せられてはゐるが、未見、如何に筋を追うてゐるか、此の前編豫告通りか否かゞ分らぬ。前編、挿繪計三面、(ヒラキ。即ち一丁分づゝ)人物の主要なるに、(即ち曲兵へと行杉など)一々、行又は曲とその衣に記入してゐる。或は、庄、組などである。

別に、とり立てゝ異つた趣向、上作といふのでもないが、唯未飜刻物であるから、比較的くはしく解說した。扨、次の一作、「旅芝居田舍正本」、これは、田舍芝居其物の雰圍氣に直ちに入つてゐるが、舞臺面そのものゝ描寫は少ない。(無い事はないが、それが中心ではない。)一、夕立によつての中止、婆どもの歸路の体。二、雜用場であすの狂言の相談。三、芝居當日、樂屋の体。といつたものである。唯、此の作の風變りな所は、凡てが、命題の如く、正本仕立で行つてゐる所である。あす狂言の相談、あすの狂言を菅原と決めての相談、その諸道具の準備なども色々面白いが、今、試みに、芝居當日、樂屋の光景を一寸抄いてみる。

本舞臺の脇より土俵を傳ひ下へおりる是則樂屋にして立役女形の差別なく一群に居ながれその中にも座頭二まい目一ッ〳〵に葭簀などにてへだてを拵ヘ下は殘らずわらを敷並べそのうへに有合の薄べり琉球莚など敷風呂場小道具部や床山などおの〳〵仕切を拵へうしろはかけはなしの青天井にて上野信濃の山〳〵を見はらしたる野中の一間芝居菅原の二ノ切段切にてまくになる。

トがく屋うちにて大勢の聲にて

大勢にて 一しばらく中入じやア〳〵〳〵

トよぶ是につれてはやし方シャギリを打ト表より木戸番その外來りてその日の札をあげる大勢の聲

表方 一サア〳〵みな札を上なさろ。

一札のふ上なさろ〳〵

トめい〳〵に錢をとつてあるく田舍は正直にていれいに錢

一見物を出し談義場でめうが錢を上る心にて壹人りにわたす
一コレ木戸番の人よ札錢のゥ早く遣るべヱから
　中入のふはやくはだつてくれさつせへ
一同
一夕立のふしたら札錢のゥ未來へ六道錢にやる
　やうなもんだ
一。幕はおきだア中入りも早く遣り升はよサアサ
　アはやく札のゥ上なさろ〳〵
トだん〳〵に札を上てあるく聲きこへる、都てまへにしろすごく中入まへは樂屋のそん中入のちは見物の損ゆへ中入まへは道具もよくかざり役者のこしらへ都てのしたくも手まわしをする也今日ゥはいつもより暑さもつよくあまり日和過たればどうやら又も夕立の氣づかひありとて二の切まではむせうにはやめて幕をあけしがまづ中入までこぢ付ケたれば樂屋も是からちつとゆつくりやらかすつもりにてをの〳〵中食などしたゝめ汗をしぼり風を入レてゐる中にも座頭の桃十良が部屋はまづ此芝ゐの大立者北陸道での最屓役者なればば居候の弟子を壹人遣ッてゐる但シ此男も役者になる存念にておりふし申上升や駕かきのたぐいには出て給銀はとらねどまづ喰だけの事をばやつてのける役者の部なり親方桃十郎をほぐ張のうちわの大きなるにて餅やの小僧がおそなへをあ(を)ぐやうにやたらにあをぐ桃十郎は菅丞相をつとめかづらをとつて顔を落しながら

一桃　ヤレあつい〳〵茂左吉よつばらあをいでくれ
ト茂さ吉が顔を見てはなのさきに墨がついてあるゆへ
　ヤイ我が鼻のさきなアあんだぞ墨がくつついているはへ
一茂さ　ヱヽ
一桃　ヱヽじやアねへそんなざまアしてぶたいへ出ばつたかへそれ鏡で見ろ
一茂さ　アイ　トうぬが顔をかゞみで見て　アニ是さアふくろで厶り申ア
一桃　馬鹿へヱこくはへ墨だアがな
一茂さ　アニサにせ迎ひにくつついて出た供だからふくろの付ケ升たので厶り升は

——(未完)——

（表紙二ヨリ）

られた養子の方と未亡人とが、此の亡氏の業蹟に如何程の理解があるか、又世間が如何様の認識を以て、同氏の業蹟に向ふかゞ疑問であるが、私は、斷じて氏の全集を欲しいと思ふ。恐らく斯界のためには、巨然たる存在價値を齎すであらうと思ふ。

私の「洒落本集成」は、内閣のために行き惱んで、その第一卷が昨年九月、四校全部終了であるに拘らず、未だに發行の運びにならない。發行したら、第一にデツケートして教を乞ひ、又自分の發表と校訂の勞も認めて貰はうとした、その氏は、すでに亡いのである。が今更、何とも仕方がない。殊に、この洒落本をやる相談の決つたのは、一昨年の秋、在京の折で、その折一寸口を利いた小說年表の增補の話と同時である。一方同氏のものは、とにかく生れ、私のものしかも同氏に因緣の多い（内容から）この第一卷は、まだ出ない。

何だか妙な廻りあはせだと思ふ。

新潮社の「日本文學講座」最近輯の「洒落本研究」は、同氏の眞正の絕筆であるさうな。その中にも、私が早く同氏に手紙をよせ、私の意見をも書きおくればよかつたといふ遺憾さがある。既に、この「洒落本研究」で、同氏が、同氏だけの新發見のやうにいはれてゐる「寛政三年、京傳作絕版」の京傳の事情は、すでに私も昨年、當誌上で二回に亘り、論議してゐる。氏よりも私は、他の絕版方面にも說及してゐる。私のくさ〴〵の疑問も、或は、氏によつて、——早く氏に交渉を持つてゐたら、——氷解出來たかも知れない。とにかく京傳事情だけは、少くとも兩者の暗合一致だと思ふ。

が、これは私情の話。今更何と詮方もない、私は衷心から、今更乍ら人生朝露、同氏の長逝を悼むと同時に、同氏とも限らず、私とも限らず、凡て命のある中、十分な——比較したらつまらぬかは知らぬが——自分の万全と信ずるだけの程度に、己の業蹟をコンデンスさせて、完成させて、さうして死にたい。それまで死の方で遠慮してゐてくれるか、どうか、それが分らぬ。誠にはかないもの、やるせない、じれつたいものだといふ事を、同氏の長逝、同氏自ら、又周圍のものたちも思ひがけなかつた（が同氏は、晩年病弱ではあつたさうだが、誰だつて今死ぬといふ氣はない。皆己惚れてゐる筈だから。）事を、唯一の教訓としたいと思ふのである。（五月一日）

寄贈紹介

○現代隨筆大觀（正續、[illegible]刊行會編）　私もその一篇を送つてゐるが、とにかく五十一家の隨筆を集めたものである。蛩庵氏の「虱」などは最も面白いものである。讀んでゐて、搔くなつた位である。色とり〴〵人とり〴〵。賣れたら、凡て會の基金になるのである。江湖の一粲を望む。（四六判五三六頁。布裝。貳圓五拾錢。新潮社）

○日本文學講座　第五卷　渥美氏の南北研究。高須氏の京傳研究、加藤（順三）氏の近松研究就中亡朝倉無聲氏の「洒落本研究」は、洒落本で苦勞した同氏だけあつて、短かくてしかも纏まつた好個のものである。他數篇。科外の石川巖氏の「元祿以前の花街文學」も御手のもの、好文獻。（菊判非賣品。新潮社）

○桃太郎に關する書籍（[illegible]著）　年代順、原版、飜刻版等に及んで諸種の解題である。好著、挿入寫眞版別摺もいゝ。（非賣品）

□芳賀先生（單行）國學院大學）○書物禮讚（六六）○國語と國文學（四月特別、五月）○長唄（廿五）○明治文化研究（三、四）○紙魚（七）○日本道樂（四月、五月）○國學院雜誌（四月）○墓碑史蹟研究（四十三）○川柳鯱鉾（四月）○歷史地理（四月）○歌舞伎（四月）○風俗研究（八十三）○三等席（三ノ二）○凡（四月號）○性の知識（四月、五月）○早稻田文學（開化期明治文學研究號）○趣味の名古屋（十、十一）○やなぎ樽研究（三ノ四）○古本屋（創刊）○變態資料（第七號）○江戸時代文化（五月號）○北隆館月報（五月）。

著者より

○今月號は、色々他用にかまけて本誌の執筆が遲れ、只今やつと全部仕上げた次第故、發行は後れるが遲くも六日には出來よう。○先月で急に發表した市場氏發起の小生短冊の會、好況であり、望外の欣びです。何分打撃を受けた現状お救ひありたい。都合により〆切を本月二十日まで延期しました。尚此上とも御聲援が頂きたい。（五月二日午前二時）

定價表

一冊	貳拾五錢　郵稅貳錢
六冊分	稅共壹圓四拾錢
十二冊分	同貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和二年四月二十八日印刷
昭和二年五月一日發行
（貳拾五錢）郵稅貳錢

禁轉載

名古屋市[illegible]
編輯兼發行者　尾崎久彌
名古屋市[illegible]
印刷者　英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社
名古屋市東區東新町一五七番
發行所　江戸軟文學研究發行所
振替名古屋九六七二番

綵房綺言自序

昨日の花は今日の夢。二十歳の夢三十路の夢。凡て昨日は今日より美しきものぞかし。追憶といふ辛きさがなきされど悲しき懐しき面被の絹に包まれて。仄かにいと仄かにこそ現はれ。その面差あたかも。いたいけなる。いまだ色氣知らぬ小娘の初々しき。精一杯なる頼り心か。さては熟れたる樹の果の酸つぱき臭とひとしき年増盛りの。飢ゑたる肉體の呻吟。さりとて申譯ばかり背向に。生娘のやうに耳朶を赧めたる。さては今時の半七・蘭蝶もどき。三角四角の絆に惱まん狂ひの絲もあるべし。

男の戀の戯れは旅にすてゆく情のみと打消たん。しかく我意猛しといふにもあらず。右よし左よし。中よし。すてんとしてすて得ず。斷ち難き染著の心の染絲は。あやに悲しき心根を生み。いつそこんなにうるさければ。われも人並み煩惱の業苦ぞと。羅切とやら生きながらの不犯と果てうか。まゝよ菅笠横ちよに被り山の奥がの獨り棲。とく／＼の雫を結びもあへぬはかない境涯に。と思はん節なきにしも非ず。あゝされど／＼。坐しては。浮世繪師ゑがくの諸々の美女に虐まれ。起ちては。行きずり見越の松に黒板塀いきな音締に死ぬばかり女房子供を遺れんとする。かゝる斯世は。わが爲に終に悲しき苦しき悔しいけれど嬉しき綵房にこそ。助けてくれェ。やりきれぬ。是れ悲鳴に似てあらず正直いへば。己惚過半の綺言・囈語にこそ。

人々よ。此の新著。人間軟派に變替へたるかとな笑ひ給ひそ。唯凡ては昨日の花を今日の追憶に泣くと。見宥し給はん宏量に訴ふと云爾。

昭和丁卯初夏

久彌誌

江戸軟派研究 第十一號 定價貳拾五錢 送費貳錢

昭和二年五月二十八日印刷
昭和二年六月一日發行

參編第十二册（通編第五十七册）

本文

尾崎久彌著

第十二册（通編第五十七册）

雑事引抄

○第三編九十八頁にいはれた「謎的狂歌の本」さは、安永七年に濫版せられたもじり繪草紙の一種ではないかさ思ひます。此頃地口秀句に關する小文を「國語教育」に發表するに就て引用した、兎園小説下卷（文政八年）のうち、地口さはいかなる義ぞの答の中に、左の如くあるのは、何等かの指示的ではありませぬか。

『前略――されば狂歌にもじりさいひしは、いひかけくちあひさは聊異にて、おふそ猥褻の意をふくみて、あらはにさしていはざるなり。安永七年の春、もじりづくしさいふ繪册子の、いたく行はれしこさ有りけり。そが中に、おくさまのおれまへいつかそろ〳〵さはいかけて來る朝顏の花、これらは、もじりの人がらよきものなり甚しきに至りては、絕倒するこさ多かり……下略』（十一月六日。綿谷雪氏）

○貴著「江戶軟派雜考」四六二頁―四六三頁に、吉原の大籬半籬について、「其の區分、慶應の末まで繼續されたりさいふ」さありますが、今日偶然、新吉原細見　明治三庚午春　玉屋山三郎藏版を見ましたら、其表紙裏（第一丁は序文）の御高札之寫の下に、次のやうにありました。御參考になりますか、ごうかわかりませんが、一寸御しらせ。

一、大まがき大見せ　▬印
一、半まがきまじり　▲◑印
一、惣半まがき　◑印

右、此の三ッのしるしは、家名の上にしるしあり候。（三月八日、母袋光雄氏）

○（前略）洲山（薩摩）おかめを發見仕候。「山家鳥虫歌」明和八年、薩摩の歌に、

「洲山おかめ女は洲山の狐、尾ふり尻ふり人をふる」

（大正十四年、三月廿九日、加賀寺齋氏）

○左は、西の宮住、西ノ宮研究の權威で、小生の舊學友である吉井太郎氏に、夷講の起原其他で問合せた返事である。件は、先是井篦節三氏から訪問を受け、氏の夷神の研究に必要なため、資料はないかさの事であつたが、小生では少々島違ひ、で吉井君に云ひやつたのである。その返事。

「一、夷講の起原年代は、結局いつのこさか不明。室町期を溯らざるものさ存候。二、十日戎の唄の創始時代、これも不明。十日戎は、永正十七年には確かに存せし明徵あるも其の以前分り不申、いつか呈上したる西宮小志御參照被下度。（十五年、九月十一日。吉井生）」

さあつたが、その「西宮小志」十日戎の項を、序でに引抄しておかう。

○十日えびす、古く居籠祭さも、御狩神事さもいふ。昔は、民家前後即ち九日夜、門戶を閉ぢ、門前の門松を逆に立て、門戶に簾や蓆を垂れ、聲響を禁じ、靜肅を守つて終夜忌籠をなし、翌日未明に至つて、社頭の開門を待ち、而して社參するの例であつた。九日の深更に戎神が市中を御巡幸になるさ言傳へられ、それに關聯する傳說が殘つてゐる。

それは、或年の事、此の九日の夜、紺屋を職さする者、神の姿を拜せんさて、夜更けて後便所の中に姿を隱しつゝ、神幸を窺うてゐる折ふし、神、その戶前を過ぎ給はんさするに、ふさ人の氣配がしたから、忽ち何者ぞさお咎めがあつた。彼の者、恐れ畏みて、畜生なりさ答へたので、神はそのまゝ宥されて、御通過になつたのである。これよりして、此の家を「畜生紺屋」さ呼び習はしたさいふ。

また足利季世記に、「永正十七年正月十日ハ、西宮ノ神事ニテ御狩ナリ、居籠トテ人音モセザル事ナルニ、高國神事チモ憚ラズ合戰チ始メ給ヘバ、神罰ニテ、斯ク打チ負ケ給フト沙汰シケル。」さあるを思へば、四百年前には、已に此の慣行があつたこさが察せられる。

現今も、隨分多數の參者があるが、九日深夜は、必ず門を閉づるの例さなつてゐる。（下略）

○小生昨日手に入れ候死繪一枚に二人の死者を描きなり候、御存知かさは思ひ候も、構圖なご御しらせ申上候。死者は、坂東三津五郎瀨川菊之丞の兩人にて、

天保二年卯十二月廿七日
寶嚴秀作居士　坂東三津五郎　行年五十七才

天保三壬辰正月七日
㊚

（表紙四へ）

天保改革と春水

天保十三年七月(イ六月)、例の水野越前守から春水が手ひどく痛しめられたのは、その宣告文と共に周知の事である。然るに、此に我らの疑點の起るのは、その春水の歿年である。壽は、五十四歳と一定してゐるやうであるが、その歿年である。普通は、同(十三年)七月十三日、手鎖中に歿した、とあるがである。「戯作者小傳」などには、これを明確にしてゐない。「天保十三壬寅年公より絶版仰付られ、重き御咎を蒙りしが程なく歿せり」とある。墓地は、諸書凡て一定、築地本願寺中妙善寺とある。(江戸時代戯曲小説通志の妙傳寺は誤。)御咎め者であつたから、歿年等もわざと明確にしなかつたのか。それにしても、出版物に於て、それを裏切るものあるは、どうしたことであらう。

唯、自分の所見では、春水歿年を、翌十四年に繰り下げてゐるものが一個ある。「増補續青本年表」、天保十四年癸卯年の項で、その雜記に、「十二月二十二日爲永春水歿す、享年五十四、築地本願寺中妙善寺に葬る、法號釋龍音居士」とある。天保十三年七月とするのと、天保十四年十二月とするのとでは、約一ヶ年半の相違である。藤岡作太郎氏の「近代小説史」はじめ、近世の著述殆ど十三年説を取り、佐々氏の如きは、間もなくの韜晦流義である。唯一個、此の青本年表説を取られたか否か不明であるが、十四年十二月歿としてゐるのは、村上氏の「人情本略史」(その二〇二頁)である。

偖、此の十三年七月(それも十三日)説と翌年十二月説と、どちらが正しいか。私は、今、春水の過去帳其他を調べてゐないから斷言は出來ないが、これは、十三年説は、全く誤り、種彦の歿と混同せられた結果だと思ふ。二人共、幕府から責を受けた身である。(種彦は、身分柄、又組頭の辨疏もあつて、直接の咎はなかつた。が暗々裏には、謹愼を強要したと見られる。)つまり境遇が似てゐたのと、

業蹟も略々似てゐる。で、種彦が、この天保十三年七月十三日歿して、十八日か十九日に發喪した、その種彦の死を、春水にまた混同したのではなからうか。（種彦の死を七月十三日とするもの、「青本年表。」）その混同から、藤岡氏の如き、御叮嚀にも、左の如き二重の錯誤があつた譯と思ふ。

「（前略）種彦自らには何事も無かりしが、折ふし病あり、恐懼の余愈々身を害し、幾くもなく七月十八日年六十にして歿す。春水も痛心のあまりにや、同月十三日手鎖中に歿すといふ。嚴令一下して同時に二作者を殺せるなり。云々。」

偖、天保十三年歿説を裏切る著作といふのは、「勸善美談益身鏡」の中本上下二冊である。從來此本刊行年代未詳の部に入れられてゐるが、（「新修日本小說年表」には、書名だけあつて、作者も畫家も刊行年代も現れてゐない。）紛れもなく初代春水の作、天保十四年春の出版、英泉畫のものである。上卷の作者自序を見るがいゝ、刊行年代も立證せられ、且つ上司の責に懲りて、鞠躬如、如何に春水が教訓屋に裏返らんとしたか、その苦慮の程が窺はれる。無論この署名の春水は、染崎延房の二代春水ではない。（二代春水は、弘化二年頃からの存在である。）まづ、序の全文を拔かう。

勸善益身鏡の序

三人の行ひを思慮して察時は可否ともに我師となるべき教こそ古聖の金言なり、又他の風俗見て己風俗正とは俚俗の諺、今やこの益身の鏡は古き物語の中より撰出して、幼稚のよみ采て身の益となりぬべき事をのみ記したれば其まゝに表題を益身の鏡とはなづけはべる、朝夕に向ふ鏡の塵をはらふて姿の花はうつせども心の曇を常にみがきて淸くする事稀なり

我こゝろ鏡にうつるものならば
さこそ姿の見にくかるらん

とは、むかし人のよみたりけん、是この艸帋は文辭をかざらず、唯教訓となるおもむきをうつし

出たれば、あしきを悪む心より善にうつるの便ともなりなんか、斯るはかなき筆のすさみも讀て勸善のはしとならば、內侍所の神鏡に不恥と、書林が梓に壽ぐ事とはなりけらし

敎訓亭　春水　誌

卯の春

敎訓の押賣、彼の衷情尤なるかなといひたい。「內侍所の神鏡に不恥」とは、吐いたも吐いたり、然し「これでは、禁止も下されめへ」と皮肉に出た所もあらう。さて此の卯の春である。これは、紛れもない天保十四年の卯である。假りに今一廻り前に遡つた卯とすると、天保二年であるが、此頃は、これ程に、敎訓や勸善の押賣をせねばならぬ事情にはない。と、狂訓亭を敎訓亭とまで變へる必要もである。（尙、狂訓亭と稱したのは、天保三年の「梅曆」からだとの一說があり、果して然らば今更謂ふまでもなからう。）即ちこの本、恐らく初代春水の最晩期に屬するもの、しかも已むを得ずの作であつたらう。それにしても、よく上司の御示しを恪守したものと、今更感心せざるを得ない。

內容に及ぶと、まだ〳〵勸善や敎訓の押賣はひどい。口繪の終りに、道歌やうの「曇りなき胸の鏡ぞ尊とけれ、心のちりを常にはらふて」があつて、それに、勸善堂（春水の、當時窮余の別號）とある。これでもかこれでもかといつた調子である。序でに、本文の內容、その目次だけを拾ふと、〇雅俗の善惡。〇神靈の感德。〇武士の信實。（以上、上卷）。〇相者の陰德。〇旅路の陰德。（以上、下卷）。末尾に、此本第二輯があるやうに書かれてゐるが、未刊であらう。

奥附、如左。

忠孝名譽 三十六佳撰	全本三帙	英泉畫 國直畫	春水著
勸善美談 益身鏡	第二輯 全二冊	同畫	同著

江戸	教訓亭春水著
江戸	溪齋英泉畫
書林	京橋彌左ヱ門町東側 大島屋傳右衞門版

とあつて、次に一丁、爲永春水精劑の、處女香一廻り百二十文の宣傳がある。

この「益身鏡」、かうした際物的のもので、內容は、却つて下らないものであるが、（彼の苦衷には同情はしても）まだ英泉の挿繪に於て、とりえがある。なか〳〵堅確な手法で、彼の版畫の美人などとはまた違つた、山水田野の描寫、なか〳〵にいゝものがある。即ち、初代春水は、この一本によりても、十四年存在說が裏書されると思ふ。但し、十三年說を何處までも固執しようとすれば、十三年七月以前に、初代が書いたもので、それを翌年正月、出版したものだ。序の卯の春は、出版を見越して作者自ら半年の以前に、かく記したのだと。かうした半歲以前執筆の變則もあるにはあつたかも知れぬ。がそれならば、出版時、春水遺稿とすべきである。この本第二輯のあるやうな豫告も益々をかしいではないか。遺稿とすれば、物が物故、却つて上司からは賞められようし、また問題の起つた、筆禍のために自滅した當時の一流大家の遺稿とすれば、賣行も倍加したであらう。即ち商策からも、果して事實死んでゐるなれば、遺稿とすべきではなからうか。今一つ、反證がある。即ち十四年に於ける彼の著作物が他にもあるからである。未見本であるが、「新修日本小說年表」に、その書名が現れてゐる。

その合卷の部、天保十四年の項に、「敎訓本と草双紙とを折衷せし左の四部も開板せられたり」とあ

る中に、「意見早引大善節用　一冊」、爲永長次郎、溪齋善次郎」とある此の一部である。雅號を斷たれて、爲永長次郎、溪齋善次郎としてゐるのが面白い。長次郎は、無論、春水。善次郎は、無論英泉である。これが十四年の生存中の作で、死後のもの、即ち遺稿と思はれるものには、尙、左の二書がある。

○教訓ちかみち　四　狂訓亭春水　歌川貞重　（天保十五年）

○孝信開運日記　三　同作　浮世庵國直　（同）

弘化元年とあるが、元來此の改元は、天保十五年十二月二日であるから、無論出版は、天保十五年中であらう。是れ紛れもない彼の遺稿出版である。

「益身鏡」奥付の「三十六佳撰」は、たうとう未刊に終つたらしい。執筆の存否程度も、曖昧である。とにかく、初代春水が、天保十三年七（六）月の嚴しい處分には、大痛を感じ、但し著作者としての彼の生命・地位は、苦しまぎれにも、此の「益身鏡」やうの妥協的著作を爲さしめた。その心情がいぢらしいといふのである。かねて、彼の歿年を、十四年說に取る反證としても、此の一眇作を紹介した、までゝある。

（補）當時、初代春水の相棒であり、畫家であつて戲作の才もあつた英泉には、彼獨自の此種教訓的の輸入戲作があつた。無論彼の過程には、前後數十種を見受けるが、此の天保改革の直後の十四年十五年にである。即ち同十五年辰春は、名古屋永樂屋の江戸の出店から「白癡問答」、翌弘化二乙巳の十二月廿八日の序、出版は翌弘化三年の春であらう「道戲問答」（白癡問答の二編）。弘化二巳春賣出しの「教諭謎々春の雪」の如きである。凡て中本である。

三世歌と三世三津との競爭

三世中村歌右衛門(前名、初代芝翫)と三世阪東三津五郎(この三津五郎は、例の土器小傳と五世菊之丞との三角關係の男)とが、文化八年三月、七變化で張りあつた事は、有名な話であるが、丁度、三世歌右衛門を主題にした「錦畫姿」に、その詳細、兩者の甲乙等に就て、が出てゐる。此の、「錦畫姿」は、文化九年申年十月發行、浪華　文金堂藏版であるから、無論歌びいきの度が烈しいものであり、從つて幾分割引して讀まねばならぬが。とにかく、歌本位の記述ではあるが、割合に明細に書かれてゐる。

此の「錦畫姿」は、中本二卷、八文舍自笑の著、無論擬ひの自笑である。江戸者と大坂者とより合うて、初め、歌右衛門の生ひ立ちを大坂者が話す。文化五年三月、江戸へ下つてからの評判巨細を、江戸者が話す。といつた仕組である。今、左に、まづ、三世歌右衛門の逸話で、他書になささうなものを擇つて錄さう。

○江戸「ム、おめへも芝翫がひいきかな　大坂「イヤモ加賀屋を好いでよいものか。廣い大坂中に誰有て嫌ふものはムり升ぬ。江戸「上方には璃寛といふ色男が大立者じやと聞やしたが左やうかな。大坂「岡嶋屋をひいきするは多く女が勝まする、歌右衛門は不男ゆへむすめや内義は左ほどにも思ひませねども、狂言の仕打に功者面白みを見やうなら、中〱嵐吉と一口にはいわれませぬ。

○大坂「ヲ、それ〱芝翫の實父も中村歌右衛門といふて、實惡の名人、老年に及んで、かゞ屋哥七といひ、天明八年申霜月中の芝居で一世一代を首尾よく勤め程なふ寛政三年に七十八才での死去、其時芝翫はやうやく十五才ゆへ、哥七が六十四のお茶湯子とやらなれど、親はなふても子はそだつ

と、何とゑらい者に成たじやムり姊ぬか。江戸「待——のとし、今年が三十六かい、大坂「其通りに違ひな
なさい トゆび折てさしながぞへて見て そんなら安永六年の生れで酉し云々。

こゝで注意することは、三世歌の生年である。これによれば、安永六年生である。それに違ひなしと大坂者はいうてゐる。これ即ち作者が言うてゐるのである。「近世日本演劇史」は、安永七年生を取り、これに斷じてをられるが、此の三世歌の人氣の沸騰最中、割に彼の事情に通曉してゐたと思はれる此の作者によつての此の著作によれば、更に一年遡らねばならぬ。一説として特にこゝに掲げたい。

○歌右衛門が幼名は加賀屋福之助といふて、天明八年大西の芝ゐで首ふりのちんこの座へ出られましたが、初ぶたい、まことに頻伽鳥は鷇のうちより聲諸鳥に勝れ云々。ずつと出るから大役を請取、堀江の市の側荒木の芝居、又稲荷の宮芝居などへあつちこつちと修行して、寛政七卯年の顔見世に、角の芝居中村金藏座へ立役中村歌右衛門と改名しての出勤が、是大歌舞伎のはじまり。……

江戸「……そんなら十九の年だの。

○それから一両年は立役も勤、敵役へも廻り、日増に出情（ママ）いたされました。其比は同輩の役者に、藤川八太郎が八藏と成、淺尾奥次郎じやの、此春木挽町へ下られし阪東重太郎、又さかゐ町に居らるゝ市川市藏など、皆同じ年そこ〳〵なれど、歌右衛門一人ぐつと出ぬけた出世狂言といふは、享和元酉年角の芝居中山德治郎座の二のかはり、けいせい忍逢淵の狂言に、淺尾爲十郎が病氣ゆへ石川五右衛門の大役かはりを首尾よく勤められ云々。

○文化五辰年の二のかはりは、中の芝居へ出勤にて、けいせい品評林の新狂言、コリヤ江戸の滑稽者京傳先生が著述せられし稲妻草紙を題にして、作者は奈河篤助が筆をふるふて書あげた趣向。（此頃は、まだ彼は、奈河篤助と親善であつたのであらう）嵐三五郎といふやつしは、お家の役者が有ながら、奴鹿藏に遣ふて歌右衛門へ名古屋山三の役を割、二役大津繪師又平との大役を出かされ、殊に角の芝居の二のかはり、けいせい輝艸紙とて同じ世界の新狂言、名古屋山三は

花がたの岡嶋屋、又平は淺尾工左ヱ門、小手きゝと色男とに立ならんで、負けずおとらず大當りの最中、江戸下の相談きはまり、いとま乞の切狂言は隅田川續俤、法界坊の此役は云々。殊に評判よく、二月廿一日に初日を出し、三月朔日迄わづか十日の興行故、大坂中には猶々別れをおしみ、芝翫丈の發足には、嶋の内からげいこが三十人ほども同音に、江戸三界へ行んして、いつもどらんす事じややら、とうたひさゞめく花やかさ云々。

○江戸「ヲ、それ迄ははなしもならふが、是から先がかんじんの所。江戸の評判は、わつちがかわつてはなしやせふ、芝翫丈が江戸著有て乘込の日は、さかゐ丁の見物おびたゞしく、今や〳〵と待所へ、旅合羽のまゝ駕籠に打乘、すぐさま樂屋へ舁入しゆへ、諸見物大きに不興し、上方の中村歌右衞門は、不躾な野良だと口々にのゝしるうち、黑羽二重の小袖に麻上下を著て、鼠木戸より這出、一禮せられた時は、始とやかふいつた男も閉口して、それがひいきのまづ發端。

　これによると、江戸者の最初の印象は、よかつたやうであるが、さて惡かつたのは、蜀山人並びにその亞流の毛嫌ひ連中だけであつたのか。がこれとて何とも保證は出來ぬ。根が、芝翫（三世歌右衞門）ぴいきの作者、殊には大坂出版物でもある事故、何ともいへぬ。

○三月（文化五年、江戸初下り）廿三日ゟ出勤にて目見へ狂言云々。五月節句より義經千本櫻にて云々。狐忠信は寄妙で一統に肝心いたした。又靜との道行半ばに、七八才の小兒六人かけ合の譽詞がよくできやした、一寸文句を申ふか「東西〳〵、しばらく〳〵、芝から神田の八丁堀淺草ふか川麹町四ツ谷のはて迄、譽詞ちと下町の長言も御ゆるし御めんの櫓まく、勘三が芝居の大當り、まづ音に聞音羽屋の評判よし經千本櫻、まづさきかけて色も香もさかりは今の濱村屋、しかも今度の役廻り、しづかおだまきくり返しほめてもあかぬ新下り、新中納言知盛にいがみの權太の二役、三やく見にこそ狐忠信は、ほんに歌舞伎の玉づくし、坂東市川二瀨川外にあらしよ中村よ、ヨイ富本の一節に

晝の枕はつがもない、當り狂言大入をはかる三桝は瀧の屋が、川越太郎稲荷福よもや横川のかくあらん一座の幸ひ、座本の實いりはづさぬ的の彌左ヱ門、愛敬よし野の下市に、釣瓶すし屋の娘方、ゆひ綿着せわたしら髪のすけの局もうつりよく、おやまの開山所作事もかくれ名にあふ浪花町、身をつくしても此君に、誰も一夜はねんころり、はやり歌右衛門日の出の路考、仙女萬歳ばん〳〵ぜい。いつも芝居のさかゐ町・ひいきの江戸ッ子江戸そだち、江戸のきほいの誉詞と、ホ、うやまつてもふす。

〇江戸「まだ面白い物があるトこて〳〵と紙入よりかきたるものを取出し　これもよんで聞せるから、おめへも何なりとめづらしい事をいわつせい。

中村歌右衛門評判

大坂からゑらい火の玉が飛で來て

市川男女藏ハ　丸やけサ

坂東三津五郎ハ　風下であぶない

澤村源之助ハ　こゝら氣づかひない

松本幸四郎ハ　そろ〳〵きかたづける

なんとゑらい事をかきおつたではねへか。

×

大概にしておかないと、中々本題に入れない。さて御両人七變化の對抗は、「錦畵姿」下卷の記事である。(右の逸話逸聞は、主に上卷。)この七變化の競爭は、文化八年三月の事で、かたや市村座の三津五郎で、此の三津の七變化の方が、先手を打つてゐた。かたや中村座の三世歌で、先是七變化で坂三津が大入を取つてゐるので、歌は、金主に強請して、急拵へに七變化を出した。所が市村座は、これがために壓倒せられ、興行を中止したとの事。その彼此の事情は、其の双方公平なものはこれを缺くが、歌側の評判は、「錦畵姿」に、左の如くある。

江戸「………七變化の所作も面白かつた。大坂「其――聞ましたが(久彌曰く、これは事情を轉倒してゐる(く))。江戸「さやうさ、三津七變化はふきや町に坂三津もはり合て勤られたと――五郎の七變化は、小野の小町に梶原源太振ましはし

に老女、ちよんがれの願人坊、汐くみ海人と關羽をつとめ、芝翫丈はおやま人形に座頭の坊、在原の業平越後獅子辨慶と海士朱鍾鬼大臣をつとめやしたが、両方ともに評判がよけれど、七役も勤るうちには、たがひによしあしもある筈だ。そこで両方見合た勝負附がありやすト懐中より出して渡す、大坂者取て見る、

七變化所作事の勝負附

中村歌右衛門	坂東三津五郎
おやま人形	小野の小町
座とうの坊	梶原源太
業平	猿まわし
越後獅子 勝負なし	關寺の老女
大津繪辨けい	ちよんがれ 見事〳〵
相撲(ママ) 見事〳〵	汐くみ
朱鍾鬼	關羽

大坂「これじやござふか坂三津の方がすこし勝と見へ升、とて物の事に、此評もお聞しヒ成ませ江戸「成程そふいつてじやも無理でねへ、坂三津の七變化に小町源太猿まはしは、近頃木挽丁でも勤て評よく、老女がよは〳〵としたあるきぶりに見物一統にかんしんさせ、ちよんがれの願人ぼうずおかしく、早口文句よく出來やした、汐くみの海士あまり美し過て、天人が羽衣うしなつたやうにあつた、關羽の神靈と成、赤兎女に乗て出た所は、誠の美髭(ママ)公と見へたれど、芝翫丈の鍾鬼大臣は、一番とよく出來やした、あのちいさなからだがしかけの装束でかけ地から出た時は、舞臺いつぱい有て、大歌舞伎の所作事サ、第一番のおやま人形珍らしい扇の手で評判がよくあつた、大坂「その時につかふた扇は、わざ〳〵大坂へあつらへにおこし、平野町の鶴卯といふ末廣師がこしらへたので厶り升、江戸「其鶴卯聞及んで居やす、扇は一番とよくするとの事だ、大坂「難波町の濱村屋とは別して懇意に厶りました、時に七變化のおはなしはごふで厶り升、江戸「二役座頭の坊は手足のつかひやう面白けれど、ちと強過た座頭じやとの評判さ、大坂「其座頭は、大かた先年市紅丈が勤られた伏見座頭といふのじやないかしらぬ、江戸「さやう

さ、淀から伏見へ一飛にこした鳥いの角の玉屋で休んだ床几のおりかへりといふ文句が有から、大かた伏見座頭といふので有ふ、大坂「それなれば市紅が勤た時もつよふ見へました、業平は嵐小六の六歌仙見た眼では詰られ升まい、江戸「イヤ芝翫丈も位有てよく仏つた、越後獅子布さらし一ッばの下駄の所作は面白く、坂三津の老女と勝負なしとは、無理のねへ所サ、橋辨慶が相撲蛋となる仕かけには、肝をつぶしやした、朱鍾鬼は、先にいつた通り目ざましい事であつた（こんな歌の提灯専門を見たら蜀山人はどんなに怒つたらうか、三津びいきの彼であつたから。がその蜀山人も、晩年には、歌をひいきにしたとの事であるが）

といふので、一向、三津五郎の方が不入で中止した、といつた記事は見えてゐない。流石に遠慮してこれを書かなかつたのか。

大坂では、美男の嵐吉（二世）と競爭、江戸では變態性慾の坂三津（三世）とはりあつた。同じはりあつても、藝道の上であるから、まだ結構である。しかしその競爭相手の嵐吉は、文政四年に急歿した。また一方江戸の競爭相手坂三津は、天保二年病歿、而して彼歌（三世）のみは、とにかく全盛・流行・豪奢をし續けて、文政九年の評判記には、「無類」に上り、天保六年末改名玉助、歌右衛門の名は、次代の名優、彼の門人二世芝翫（四世歌右衛門）に讓り、間もなく天保九年七月病歿、「近世日本演劇史」では、六十一歳とあるが、生年を一歳遡るとなれば、六十二歳といふわけである。

○四世歌右衛門の七變化など

右の三世歌の門人、後の四世歌にも、七變化の類があつた。本人の個性もあつたらうが、師匠からの讓りもあつたらう。二世焉馬の作「返咲浪花の裡梅」から拔く。曰く十一子年（文政）三月狂言（略）大切所作事七變化「けいせい」「こみ太夫」供奴「乙ひめ」「浦島」「瓢箪鯰」「石きやう……大評ばん大當り大入也。（當時、芝翫と稱す）其以後にもあるが、就中、丁度師匠と似てゐるのは、巳年（天保四）三月二番目所作事奥九重彌生花道「文使の娘」「でつち」「老女」「雨乞小町」「雷」「越後獅子」「座頭」「朱鍾鬼云々である。

自笑の家婦・娼婦の論

自笑の作、祐信畫の「情ひな形」（枕本、五冊カ）といふのがある。その一は、けいせい風であるが、その本文の冒頭（これを序としてゐる。）は、家婦と娼婦とに對する男の氣持を區別して、當然な話ではあるが、古今誠に穿つた推論である。近松などは、その戲曲に於て、かうした心持にゐて、不言に作した。自笑などは、不洗練ながらこれを文字に現してゐる。それだけ、近松などは詩、自笑は散文、形だけではない、頭もであると斷じたい。

序　太夫と間夫と客の目を拔俄盲

諸國里〳〵浦々迄に遊女とて、男の心をなぐさむる女をこしらへ置ぬれ共、京江戸大坂三ケの色町におよぶ所さりとてはないが定なり、其中にわけて都は女郎の生れつき、各別艶にしてゆたかに、よは〳〵としてから底心のつよく、自然とくらゐそなはれり、さればいつの世から女良と云事を袮初て、人の心をなぐさめけるぞ、尤金銀にて買ける物に定め置ながら、其男晬といふ物にならずしては、我物つかひながらおかしからずして、しかも氣の毒かさなり、たとへば×に入り×はならべながら、心にあはねばふるといふ事、是常の女とは上したのちがいあり、×取て男のかざがすると、はや目の色がちがふて、身をもだへて待かねける地女をなげやりにして、つめひらきのむつかしきけいせいをすけるは、よく〳〵よい所がなふては、此金銀の大切な世に、あればとてめつたにはすてはせまじ、いかさまにも太夫といはるゝ程の器量は、きせる盃の持やう迄も常に替り、抑は賤しき者の娘なれ共、歷々につきあい花車事も見なれ、哥よみ琴をひき、又は香を聞覺へ、筆とつての

文から、よしある人の息女といふ共、何をひとつ見おとす事もなし、さ程にようはこしらへおける事ぞ、浮世の戀といふは、面影を見初てより其傳手を聞出す迄に心をくだき、□□と仲立をもとめて又文に身をやつし、數〳〵つかはしけるに封じめもきらずかへされ、又は其人の手にもわたさず、下々にて引さがされ、笑ひ草に成て其儘すてられし事かぎりなし、されば女良は姿を道中にて見すまし置て、その名をさしてよびにやり、心のまゝに成事扨も氣散じ成戀ぞかし、金にてならぬものならば、世に人の命は有まじ、器量のよき男にもなづまず、法師年寄にもかまはず、身は寶物と斗心得て、きのふはきのふ今日はけふぎりに、其日の大臣の氣を取ければ、是がおもしろかるまじき營かなし、此うまき女良の味に喰付ては、手前の内義の手もりもいやに成て、むしやうといふ物にさはぎ出しては、着のまゝにならねば、やまれぬ物なり、又女郎にも間夫といふ物を仕覺へては欲の事も德の事も目に見へず、身の爲になる大臣を脇になし、我に癖に成てもかくし男に吹付ては、親方のこわい顏も、やりてが異見も聞ものにあらず、是程思案して見るにがてんのゆかぬ事はなし、然らばけいせいといふものは、町の徒なる奉公人よりは欲のないものとしられける。

以下、さる歷々の太夫殿、あげやの又市といふ料理人と年をかさねて念比せられ、……と話の本筋に入るのである。

×

此本、まだ年代、作書者等の明示せられた頃のものとして、好評本である。序の末に、大和繪師西川祐信筆、作者八文字自笑とあつて、正德二年辰ノ新春とある。尙、此の當時は、かゝる本と共に、藥品を添へて賣つたものらしい。現に、この序の中に、婬女堪悦術　一包　本ノ終ニそへ申候とある。かうした事が行はれてゐたのであらう。

以下、なほ、この序卷の本文を書ひつけておかう。

さる歷々の太夫殿、あげやの又市と云料理人と年をかさねて念比せられ、しのび／＼の文のとりやり、ゆきちがふ格子に手などしめあひ、人なき首尾を見て帶ひもといてあいたや……と、ふたりの心いなものに成て、女郎は客のいふ事耳にもいらず、間がな透がなと、又市にあはん事のみおもひくらして、座につかるゝよりきよろ／＼として、あたら太夫樣の御目つきが盜人眼じやと、內證しらねば末社どもわきから笑止がりて、あのお目つきはなをされたらよかろふと色外にあらわれぬ、又市は臺所にてまな板にかゝり、めづらしき獻立がな工夫するかと思へば、是も大臣の酒きげんでおやすみはなされてござらぬか、太夫樣は小便しに裏へは御出なされぬかと、酒燗さす所へ酢をいれ、鯉に胡桝をふつて出し、あたら料理のあんばいをちがへ、うつゝのやうにてようも／＼、二年は置もし、勤もしつるが、正月買の大客に、人の手たらいで、二階へ下より膳をさしあげしに、すまし汁打あかりて又市が顏にかゝり、……(ミスル)……入りしや、それより両眼くり出す程痛、目醫者にかゝりてもはか／＼しからず、十五六日して物の美事な盲目と成て、扨もふびんや……今は闇夜にともしびのなきごとし。

これから、この又市、按摩とりに仕立てゝ、これまでの料理番で臺所ばかりで働いてゐた身が、座敷へも上り、お客のお和手をして、澤山祝儀も貰ひ、幇間同樣按摩半分の身となつた。とこれがその實はからくりで、臺所に働く身では、思ふやうのんびり太夫とも逢へず、窮餘の一策、すまし汁を浴びて僞盲目になつたのだ。

そこで、大臣客は、金は散々出して、汗水たらしても、間夫の十分一も眞の姿を見ぬ事、損といふは大抵の僉儀、といふのである。そのまた太夫に迷ふ客があるから、面白いものである。

地方色の描寫（中）

一桃　ふくろ（異態）のふ、はなのさつさきへ付けて出はる馬鹿ナア日本にねヱこさダア、ゆ（余）のさけへくつつけろサ

一茂さ　道外師の心いきで、こんたんのし申たのだア

一桃　こんたんだらわりいこんたんだア、猫が出はつたやうだア

トしかゐ、いづかたも道外形ハぜひほくろをこしらへ出るこさにやさ、（野役者方）あらしやばの役者ゆへさんだ所へほくろを付たるもおかし

一茂さ　ハアその冠ナアマアア入り升ねへナ

一桃　二の切のふしまつたらハア入らねへこんだア、しかしマアぶつちやつてをけヱ、またなんぞ遣ふ事があんべヱハ

一茂さ　イヤハア冠ナア平皿にさつま芋のウつんざいたのだから、べちやアムんねへが、此紐サア引切り升べいから

一桃　ひぼは我ガアくつつけたが、みぢかくつて、咽がぎく〳〵ゞつてくるしかつたア

一茂さ　アニ此紐ナアわしがさるまたのッひぼのふくつ付けておき升たア

一ゲヱ此馬鹿めヱてへげへに馬鹿のふこいたがいゝ、天神さまの冠に越中ふんどしのひぼのふつける馬鹿があるもんかへ、そんだら我も一生ウおくりばなしだア

トしかゐ、おくりばなしさは、花道よりついて出て供をしたなりには入る、せりふも何もいはぬをいふ也、折から雜用場の男ひるめしを御膳籠に入めい〳〵部屋〴〵へくばる

一男　ハアけふはげへにひるめしがおそくムり申、よ兇

許ろさつしやり升

トいひながらだん〳〵（何）において行

一桃　雜用のさいはあんだ

一茂さ　またふじ豆のよごしだんべヱ

一桃　ごめんなさい善光寺だア
　トちんきやうじといふを善光寺と心えたるハ、信濃に近き國なるゆへ、洒落もおのづから間違ひていふなるべし
一茂　中茶屋のふ見て來升べヱカ
一桃　モウ汕あげはくゐねへ、お稲荷さんじやアあんめへシ
一茂　しやけのさし味が有けが
一桃　吸もんナアあんめへか
一茂　ヤレほんに吸もんナア有ましけが
一桃　あんだんべいナ
一茂　アニすいどん汁に手ながゐびのふ入たんでムリ申ス
　トいふ所へ頭取、拍子木をチヨン〳〵ト打ながら
一かす　げヱにおせわしなかんべへか、表でいらち升から
　ト氣のどくそうにいふ
一實事し　コレかす藏どん、せわしなくいらつこんだが、わしらはまだ這入ツて晝飯のふ喰升ねへはよ
　ト小言をいふ、隣の部屋にて
一女がた　ばア樣から娘になるだアいらだてちやアいぎ升ねへハ
　トおなじやうに小言をいふ、是も旅でハ一まいの女形なれど、旅から旅の日にやけて、首すぢは畨喜せるのごとくまつ黑に、夜討の合印見るやうに白りあしを付ケ、二の切りに覺壽ナ勤おやぢかづらをさかさまにしたるを、うこんもめんにてぼうしをかぶり、でんがくぐしに紙をまいて、是をくろめさすが旅役者なれど大はだぬぎにもならぬ女形のたしなみなるべし
一實事　粟三郎さんナア、車引ナア休足だんべへ
一女形　ハアそんだからちつくりぶつたをれるつもりでムリ申は
一敵　わしやアハア時平のおとゞだから、せわしなくムリ升は
一女　そうだつけなア
一敵　小細工のふする人がハアぶさいくだから、桃十良どんのかぶつた冠に金がみのくつつけて出はる了簡だが、かまひげにやアこまりきるだア、幾次郎どんの龍田のまへでかぶつたさばきの毛は、ムんねへか

一女　一アニアリヤアつくり付だア、どれ舛ねへ
一敵　一そりやハアあんとしべヱ
トいふ所へ、小ざいくの皿八、さうもろこしを四五本もつて來て
一さら　一何とハア見やつしやい、わしが工夫のこらして持て來申たが手ひどかんべヱ、
一敵　一ヲ、コリヤハア南ばんきびのひげだら打つけだが、色が赤くて猩々のやうにやア思ひ舛めへか
一さら　一あけへがりきんでよく厶るがや
一敵　一くろくなくつちやア時平のおとゞに見へましねへ
一さら　一ハテそこが狂言器用だア、時平の弟だといはずに時平の兄貴だアて出はらしやいナ、けふ一日のこんだア了簡のふしてくれさつしやい舛シ
一敵　一そんだら時平の叔父さまだアていひ舛べヱか、よし〳〵マアこれがよかんべヱ、コレ皿八どのや金かうじの冠ナアどうしけ間にヱ、舛カヨ
トいふに、つんぼゆへきゝたがへ
一さら　一善光寺へはハア三日路有舛

（中　略）

トいふうちに皿八、まだらうしをのたり〳〵と引かけて來る、もはやしらせの拍子木にてまく明きになるト
一さら　一ヤレハアコリヤアあんとしべヱ、牛が小便のうはじめ舛たア
ト樂屋にて牛ジヤア〳〵ト小便をするゆへ元より土間の事なれば、莚をまくり菰をさり、らんさわぎを入ル
一女　一それ〳〵ハアそつちへ流れていき舛ハよ
一茂さ　一ヤレあんたるくんだ、澁川へ出水のふしたやうだア
一かす　一そんだら口上のいひ舛はよ
トぶたいへまはり、カチ〳〵トひやうし木を打
一かす　一東西〳〵、扨此所は中入のつゞき菅原でんじくろま引のだん、はじまりさう思ハッしやり舛ウ
トキッカケをわたせば、はやしかたぶまなるみやかぐらをうつさよろしく

幕　あく

で、此の豫告ごほりは、二編は生れなかつたやうである。文化十一年戌春新板、木石町四丁目西村源六、新橋南大坂町伊勢屋惣右衞門の合板である。作者の正二は、萬壽亭と呼び、鳳凰軒、戯場家、葛葉山人等の號もあつた。本來は、狂言作者で、初代並木五瓶の門人、篠田氏、通稱金治、後二代並木五瓶となつた、明和五年生で、文政二年七月七日歿した、享年五十二。深川靈巖寺中正覺院(「戯作者小傳」は、下谷池之端□□寺に葬とある。)に葬る、法號善覺淨光居士、一に並木舍葛葉居士と名けた。木母寺境内に辞世の句碑があつて、秋や今淸しと桐の一葉ちる　とある。尙、「戯作者小傳」には、「菩提所並に梅若の地内二ヶ所の碑は、狂歌堂眞顏、山東京傳、歌川豊國三大人世話人となられ、勸化帳へ右狂文を書して、江戸中へ配り、無程成就せしといへり」とある。篠田金治後の二代五瓶とあるからは、例の溪齋英泉が、嘗て狂言作者とならんとした時、師事したのは、この金治であつたのである。(英泉、その折の名は、千代田才市。)

偖、此の金治即ち正二は、戯作また少くない。合卷に於て、「愛敬絣屋娘」(文化十年)以下計十四種程、中本(滑稽本)に於ては、この田舍正本と、先是文化十年の「假名手本藏意抄」が、三馬補で版行せられてゐる。

此の「田舍正本」も、恐らく彼の体驗から來たものらしい。現に、此の序文に、

一年北陸道に漫遊して其わたりの旅芝居を見物するに、俳優の鄙ぶりたる其さま幕ごとに腹をかゝえ頤を解く、猶その樂屋の見たきものと擴張のこも〳〵かきさがしたる風情をみては淸女が言の葉も思ひ出られなん　(下略)

挿繪は、春亭の畵で、村中へ明日の狂言を觸る圖(ヒラキ)、つぎ田舍狂言の車引(同)、次ギ右、丞相と覺壽、左は毛むくじやらの野良が女衣裳を被る樂屋の体(同)、ウラ、晴る日は芝居もいそげ夕立の樂屋も濡れぬ村里もがなと狂歌があつて、下に茄子、眞桑瓜などあり、上は、びらになつて、しん上、當

村若者中、一、まくわ瓜二百、一、なす一俵、座元様とある。
次ギ全くの正本体裁で、

戌のとし
げる新板
旅芝居田舎正本
第壹冊目

女形娘形　桃重郎八
婆々見物　巻國左ヱ門
雑用小僧　粕太郎兵衛
上るり太夫　さくら八
はやしかた　ゐんきよ
重八　孫三太
わかいしゆ大勢

越後の蒲原郡の場

頗る凝つた、道楽氣分たつぷりのものである。（口繪右の外、挿繪なし。）春亭の口繪も中々の力が入り、最初の、明日の狂言を觸れる、田舎暇を太皷の廻る圖などは、野趣豊かなものである。偶然、合巻の一つ、文政十年版の一九作、貞秀畵の「諸國滿作豆」（二巻物）は、上に田舎芝居とあつて、そのつゞきがあり、下は、農家の一年の行事、御年貢納までを描き綴つてゐる。その田舎芝居が、またちやうど此の本題の補遺として適當、左に冒頭若干を拔いておく。

田舎芝居

毎年さだまりて氏神の祭。出來秋のよろこびとて芝居をくはだて。旅役者をかゝへて初日を出せしに、秋空の俄にくもり。大雨ふり出し。筵張のしばゐざらぬけし。これはならぬと。見物辨當箱をひつくりかへし。酒樽ひつくりかへし。うろたへ澤ぎ逃出せば。樂屋にては衣裝箱おきの太刀に。

紙合羽打きせ。まづ初日からぬれがあたつたと。べらぼうにしやれをいへ、勸進元がにが笑ひして。明日のひよりを待に。八専ぶりとて。惜に八日は降つゞくものと。たとへにちがはず。きのふがまだましかとおもふ程。何くを見ても。雨雲かさなりいつあがるべき氣色も見へぬ所。やう〳〵五日目の朝日の目を拜みて。けふこそはといきりだし切落の水溜を掃ながし棧敷の濡簀子に莚打敷て。はじめたりしに。もとより役者すくなく。一人に五人前ほどの役割三味線ひきの太平次めりやすしまふと。野良あたまに手拭かぶりて遣手になるつもり。幕引の兵藏は。挑灯もつ奴になつて貰ひたいといへば。それでは西念坊がないといへば。それこそ天窓はやつこでもよいから、つゐ衣ひつかけて。腰元役の三人まへ。間のぬけぬやうにこぢつけてやれと。さりとては事の欠たる芝居。どうやらかうやらひとまくすむと。その間に口上いふ男。かき付をもち出。なじみの役者へ花を下されしを一々に讀たつるをきけば。「とうざい〳〵牛房三把、鳥目三十疋、大庄屋伊五太夫さまより。花水垂三郎へ下さる。麥一斗。白木綿一反棚田の彌平次樣〻鳥勘左エ門へ下さる。繰綿一斤。下村の長助さまより。立役武惣次に下さる、炭二俵葉たばこ三斤、元庄屋權太平さまより。淨瑠璃太夫酒本春太夫に下さる。新そばこ一袋、太五助後家さまより。小哥の彥十へ下さる。杉の曲物一つ。さる御方さまより。わか女形かしくへ下さると口上いひたて。惣名代にかのかき付をおし戴き。ひつこめば。樂屋にては一座の役者うちより。かしくどのゝもらはれし。曲ものゝ内は何でがなあらふぞ。下されし先さまによりて。推量のしやうありといへば。さればこれを給はりし御方は。此本宿でさるところの後家さま。去年こゝへ來た時からのお馴染。ゆふべ藪下の茶やでおめにかゝりしが。さきはれき〳〵のお方。かならず此事穩便に賴むといへば。みな〳〵聞て（未完）

寄贈紹介

○墓碑史蹟研究　磯ヶ谷紫江著

氏の月刊同名の著作の増補合綴その第二巻である。口繪銅版十葉計四十個の墓碑。本文は、朱樂菅江、默阿彌以下桂山彩巖に至る、中、なほ我等の記すべきものに、歌麿、初代種彦、三代種彦、清水次郎長などがある。例の如く縦には墓石誌、横には、正確なる傳記の類である。名人大家の生涯、やゝもすれば訛傳多き今日、此の新著は以て存在を強要するだけの價値ありと思ふ。（菊判一〇〇頁、非賣品。東京府下代々木四三〇、後苑社）

○三味線組唄　藤田斗南著

大阪にて古曲保存の運動の中心斯道の通たる同氏の著である。内容、三味線組唄――三味線最古の曲、同傳來、同樂の大成、組唄の名稱等八項。次ぎ、組唄、歌詞、表組、破手組以下の歌詞の紹介であるが、鼇頭に親切な註が附いてゐる。附錄に、未定稿と斷られてゐるが、殆ど既定稿と目すべき「三味線樂系統表」が附いてゐる。好著々々（菊五十二頁、八十錢。大阪市東淀川區十三西之町八三、上方藝術保存會。）

○日本文學講座　第六巻

内容の中、我等の嗜好題目――南北研究、近松研究、明治の演劇日本文學に現れた經濟生活、同婦人問題など。（非賣品。新潮社）

○浮世繪版畫研究　第一號

月刊雜誌、同好を唆る記事多し發達を祈る。（四六二倍六頁。十錢大阪市南區問屋町五、浮世繪版畫研究會）

○東海道に關する圖書　最終刊

金田晴正氏編。好著、これで完尾を告ぐ。目次等を附す。（非賣品）

○變態資料　第八號

相變らずはらはらさせる内容である。口繪色摺等二枚なども、奇抜さエロさの混合である。朝鮮の半陰陽文献（今村）など、注目すべきもの。酒井潔氏の「中國愛情小説」も面白き譯。八百屋艸紙（北澤久峻山人）は、くだらぬものとの評も出ようが、その熱心な猥雜ぶりは、驚嘆に値する。（非賣品。東京市牛込區赤城元町三十四。文藝資料編輯部）

江戸時代文化（六月）○性の知識（六月）○淸元研究（二十一）○國學院雜誌（五月）○墓碑史蹟研究（四十四）○川柳鯱鉾（五月）○やなぎ樽研究（五月）○早稻田文學（戯曲篇五月）○柳屋（三十二）○歴史地理（五月）○集古（丁卯三）○明治文化研究（五月號）○歌舞伎（三ノ五）○紙魚（第八）○風俗研究（八十四）○長唄（廿六）○國語と國文學（六月）。

依託販賣書目

○菊判△四六判大●菊判以上▲小本

―往復ハガキ御照會ありたし

（以下洋裝本）△近世實錄叢書（早稻田刊行）二十冊揃十八圓○長崎市史風俗篇（上下二卷合本）美本十一圓△事實叢編（鼠小僧など）九冊合二圓五十△花街篇（新從吾所好の一）一圓二十○西行法師傳（梅澤和軒）一圓△續德川實紀（揃五冊）十五圓△旭廓物語（名古屋遊廓の沿革）五十△近松門左ヱ門全集（春陽堂版）十冊揃廿二圓○評釋挿圖近松傑作集（早稻田刊）十八圓○高野山千百年史一圓半○東京史稿（皇城篇揃四冊）八圓○續々群書類從地理（二冊揃）三圓半○尾三遠鄉土史論（日本歴史地理學會　三圓△近松の人々（高須梅溪、美本一圓○日本風俗志（加藤咄堂）三冊揃十圓○攝津鄉土史論（日本歴史地理學會）二圓半○武相鄉土史論（同）三圓○大日本文學史（鈴木暢幸）二圓○日本經濟史（瀧本）二圓半△西鶴文集（藤井乙男校、有朋堂文庫）二冊四圓○雨月物語評釋（鈴木）一圓五十△自然と文化の諧調（臨風）一圓半△浮世草紙（向陵社本一名西鶴全集、欠字入）七冊揃十五圓（和本の部）△群書一覽（尾崎雅嘉）六冊揃上本四圓△江戸軟派叢書（初編より揃）五冊三圓八十△新落し噺（嘉永三年版、立川焉馬作國直畫）八十△講學余談第二。養生雜誌第十、官報五十日誌第二十七、江城日誌第六、（明治初期雜誌と官報）一括、八十△江戸名物詩（方外道人、狂詩本）二圓▲よしこの本二冊（横本）七十▲端唄部類部々逸の部同、（能六齋）五十○書目（艷書本好色本の部、大正五年新撰書入あり）六圓○傳神開手（北齋畫、中に婦女入浴）一圓△源平總勘定（蜀山人作、歌麿畫黄表紙）初版五圓△國芳雜畫集（上本）一圓半○武勇魁圖會（英泉畫）五十○艷道俗説辨卷一（小松百龜）三圓。

定價表

一冊	貳拾五錢	郵税貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	税共
十二冊分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割増しの事
○照會は返信料添付の事

昭和二年五月二十八日印刷
昭和二年六月一日發行
（貳拾五錢）

編輯兼發行者　名古屋市[illegible]　尾崎久彌
印刷者　名古屋市[illegible]　英比貞造
印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目[illegible]　扶桑社
發行所　名古屋市[illegible]　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

（表紙二より）

勇擧才阿哲甕信士
行年三十七才　瀬川菊之丞
國春畫（極）（岩）　（女）

二人共、下衣は白、バックも白にて候。又小生の怪訝に堪へざるは、菊之丞の死せる日にて候。死繪菊之丞のもの今一枚持合せ有之、それには正月六日と書かれ、畫家は國芳にて候。六日にや七日にや御教示被下度候（練木準氏）

なほ、練木氏の解説には、右の兩人描きの圖柄、男は、坐して手紙を讀む。女は、立ちて首を男に向けてゐるとの事。此の男、女は無論男は三津で、女は菊之丞である。この構圖にも、兩人の變態關係を暗示してゐるやうに思はれるなほ、倚々書の國芳の菊の繪は、丁度、只今この机上に齎されたた「歌舞伎研究」第十二輯の表紙畫に應用せられた國芳の菊の繪と、恐らくは同一のものであらう。これにも六日とある。無論これは、七日が正しからう。六日とあるは、國芳の誤書であらう。（昭和二年五月廿七日、尾崎）

×

以下は、小生、ノートの抄書である。あれこれなし、隨讀隨記の一部分である。反古の整理にもと。

〇安永に潮来節あり

普通、潮来節は、深川あたりの流行は、寛政末、享和頃、一般はこれより先、天明、寛政頃といはれてゐるが、古く安永四年、例の「寸南破良意」（蒟蒻島―現今の靈岸島の遊里を描いた、初期洒落本の名作）の中に、此のいたこぶしがある。即ち此頃、一部、かうした船着に縁のある所には、流行してゐて、女郎たちにも流行追從氣どりで、唄はれたものであらう。

無論この輸入は、この女郎が潮来出であるといふよりも、船頭たちが、潮来とこんにやく島とに連絡の勞を取つたものであらう。

〇女郎いたこぶし「何をいふてもまだ年わかでヨ、ぐわんぜないのがわしやかはい」

とある、これである「かく『いく所だ、うそアれへ」（同書、年季者のうち、三丁裏）とつゞけてゐる件である。

〇名古屋永樂屋版の硬派物

永樂屋東四郎（略、永東）は、名古屋に於ける近世の出版の親玉、（恐らく空前絶後か）軟派物も、北齋もの他繪本など可なり多いが、硬派物により多く多量の出版を爲してゐる。古事記傳は勿論、他數十種の書目を數へる。今古事記傳四十四の尾に、附せられた歌道神道物の一斑目錄を抄記しておかう

無論、これらも普通永樂屋本と同じく、江戸の須原屋以下の凡そ十二肆との合梓の形になつてゐるが無論主は永樂屋であつたらう。古事記傳四十四は、天保十五年甲辰九月再校、尾州名古屋本町通七丁目永樂屋東四郎、江戸日本橋通本銀町二丁目同出店の名があるから同年現在のものと見てよからう。

萬葉集略解三十二●三大考一●神代正語三●出雲國造神壽後釋二●御遷幸長歌、折本一●參考熱田大神緣起一●直毘靈一●萬我能比禮一●葛花二●麻須美能鏡二●花能志賀馬美一●詞つかひ合鏡折本二●天祖部城辨々一●地名字音轉用例一●手枕一●冠位通考一●やなぎの日記一●消息案文一●繪入新板伊勢物語合本一●つれ〴〵草新板繪入二●後撰集新抄十五●新古今和歌集新鈔四卷六本●新古今集美濃の家苞五●美濃の家苞折添三●尾張廼家苞五冊九本●三代調和歌類題六●江戸職人歌合二●玉勝間十五。

無論、此の中には、求板ものもあらう。また比較的軟派に屬する北齋漫畫等の繪本類は、普通現存のそれら繪本の表紙うら、見返しによく見られる。平凡、周知の事であるから、略いた。

〇品川海苔

品川海苔は、余り見ない洒落本だが、關東米事振鷺亭の作、中本ものである。數學と角書のあるだけ面白くない。無論寛政三年以後の作たる事は、數學と斷つたので分る。今その目錄だけを載せておく。

心學振出泊〇俠八齒膾てこぎり
折助冷飯〇粟餅榮花
發明心學〇大通會讀

〇おしのおもてへ

普通此頃では、おしがふさいといふ。成程太いでは分らぬ、おしだつたら、重い輕いである筈である。おもたいとした例が、「白狐通」（谷峨作、寛政十二年）にあつた。其の七丁ウラに、「おしのおもてへ、なんだわけもいわれへ、おれがいわれへでもうぬが胸にあろう。云々」といふ所である。

〇指　輪

指輪が、同じく「白狐通」にある八丁表の「あんまりしらをきるなうぬがゆびの輪もあのあまにもらやあがつたじやれへか」とある。凡ておゐんといふ切見世女郎が、色男の世事吉といふのを責めてゐる件である。

昭和二年六月二十八日印刷
昭和二年七月一日發行

参編　第十三册（通編第五十八册）

本文

尾崎久彌著

第十三册
（通編第五十八册）

謎々沿革考

——六月四日名古屋放送局にて

謎の沿革に就て、極掻い摘んで述べてみませう。

先づ、語原の詮索です。さて此の謎、原義は、「何ぞ」、であつてそれが約まつて「なぞ」となつたことは、謂ふ迄もないと思ひますが一方謎々ともいひます。古く「枕草紙」(平安朝、清少納言の作、有名な隨筆)には、此の謎を合せる遊戯、即ち謎合の事がありましてそれには、謎々とある。謎と單にいひ、謎々と重れていつた、結局は同一のものです。別に違ひはないのであるが、されば、どうして此の二様になつたか。これは、何ぞと單にいうたのみでは、問ふ意味が弱からうので、何ぞ〱と二重に謂うた、それが約まつて、やがて「謎々」といふ成語を爲したのに過ぎないと思はれます。これで語原は、片づけて、扨、歴史に移ります。

先づ大体の變遷を述べてみますと、支那に古くから隱語(かくしことば)の習慣が行はれてゐて、それが句になつたり、詩に現されたりした。その風習が、奈良朝時分でせう、日本に傳はつて、平安朝頃からは、これを日本流に飜譯して、應用して、一種の隱語の遊戯が行はれ出した。それが益々發達して江戸期に及び、江戸の寶永正徳(今から二百年以上の昔です)の年間から、二重謎というて、××と××かけて、××と解く、心は××といつた形になつた。即ち以前は、問から直ちに答であつたものが、問と解と心とになつた、つまり謎が一層複雜化したのであります。以て幕末明治に及んでゐるのです。

これが、大体の歴史でありますが、これを一々例を擧げて述べてみませう。

支那では、古くから隱語が行はれた。文字の稍くはしい事に移りますから、略きますが、例へば、三人同行去観花で春、百友元來共に一家で夏、禾火二人相對坐で秋、夕陽橋下一双瓜で冬、即ち春夏秋冬の意であるといつたものです。倘、この文學の隱語の極卑近な例をいひますが、誰でもいひます出頭天の如きです、答は、夫です。天の字の頭が出たら、夫でせう。扨、日本でも、この流義からして古い歌に、「ふたつもじうしのつのもじ、すぐな文字、ゆがみ文字とぞ君はおぼゆる」、といふのがあります。これも一種の隱語であります。即ちこれは、ふたつもじで假名のこ、うしのつのもじは、牛の角みたやうな假名のい、すぐな文字は假名のし、ゆがみ文字は、くの假名、即ちこいしくの謎です。即ち日本では、支那の詩謎が歌謎となり、形は異つても、意の用ひ方は同樣です。この歌謎からまた短かい形の句の謎――句謎も生れました。

さて此の謎、日本の文獻に現れた中では、枕の草紙の第百二十四段が最も古いかと思はれるものでありまして、ちやうどそれにはエピソードのやうに使用せられてをります。次ぎは、室町最初の例の兼好法師の「徒然草」にあります。(その第百三十五段です)第百三段にもありさす。扨、凡てこれらを性質上から區別すると、文字の現れた形の上からの判じ物と、また詞の内容に含まれた即ち意味からの判じ物と此の二つが行はれました。例へば、前の二つ文字牛の角文字の歌などは、文字の形の上に現れた謎ですが、なほいひますと即ち次の歌の如きものです。これなどは、この歌の言葉の謂ふ通りにしたら、すぐ分るのです。即ち「秋風の拂へば露の跡もなし、萩の上葉もみだれてぞちる」といつた歌です。これは、秋風の拂へばは本題にはいらぬ詞で、即ちこのせゐで、露のあと、(つゆの下の音)即ちゆが消えてつだけになつた。また、萩の上葉もみだれてぞちるで、はぎはき、その上の葉のやうな、はといふ音、それが散つてなくなつて、きだけになつた。即ちこれは、つきの謎であるといつたものです。なほ、詞の内容の意味から考への謎といふのは、これは、歌の謎には、今適當な例を見出しませんが、句の謎で、例へば、海ばたは十里に足らぬ、その答へは、貝の一つで蛤、即ち濱が九里だからです、文字の表面上からでは、この謎は解けない、この「海ばたは十里に足らぬ」といふ詞から、その意味を考へ、それから答を案じ出すのです。即ち詞の表面に直ちに現れてゐる謎と、その内面に影を寓してゐる謎と二つあるのです。支那の詩謎、日本の歌謎などは、前者の方で、後世發達した日本の謎々は、後者の方です。それが更に、江戸中期になつて、一旦、その間から、思ひもよらぬ他の事物に轉化し、さうしていかにも牽强附會ではあるが、心はと、いうて、その問と答の二者の間に聯絡を求める、これなどは寓意の謎の複雜化といふべきです。

今度は、一々例をあげて、述べてみませう。及び謎に關する逸話を述べませう。枕草紙、徒然草と(表紙三へ)

東里山人（鼻山人）の業績

東里山人、一名鼻山人の業績を査ねてみようといふのである。傍流作家ではあるが、洒落本から人情本への推移期に於て、また文學史上その數頁を飾るに足る活動を爲した。彼は、洒落本又は人情本趣味を以て、殆ど終始したと思はれる。彼の著作全部に亘つての考察ではないから、何とも斷言は出來ないが、彼の滑稽本には動もすれば、洒落本と相似たり、分類の困難なるものを見うける。（例へば「驛路の鈴」など。）また彼は、業績、その著作の全過程よりいへば、合卷がその量の尤にゐるやうであるが、さてその合卷も、偶々は、滑稽本とも人情本とも又は、洒落本とも似通ひたるものを見受ける。（「出放題無智哉論」や、「傾城客問答」の如し。）決して、單なる古物語の時代化や、傳奇小説・童幼趣味・敵討物一點ばりに、合卷の筆を著けてゐたのではない。春水（初世、爲永）ほどには、衒はず賣らず（流石に武家出の素性は爭はれぬと賞めてやるべきか。）且つ遊蕩卑俗の生活趣味にも比較的純な心持で徹底もしてゐたやうに思はれる。（當時一般の御家人らしくである。自己享樂が先づ第一で、賣らんかなの作者態度は二の次といふ意味に於て。）それだけ、今日からは、我々の同情が餞けられる。春水や其の門流などの目に見えた氣障さがないといふだけでも。殊に、その晩年落魄、世外に窮死したといふに於てをやである。眞に自己酣醉の、戯といふ文字のふさはしい戯作者らしい、憫れな生活、一生を送つた男として、私は先づ、彼の名を銘したいと思ふ。先づ彼の業績を語る、その總論として、小傳並びにその著作年表を、ものする。

○東里山人小傳

彼の傳は、諸書、大同小異である。唯、未だその精なるに至らぬ憾みはあるが。今姑らく、諸書の

記する處を綜合して、左に、錄さう。

東　里　山　人

九陽亭と號し、又鼻山人と號す。「麻布三軒家に住す。公の典事たり。通稱を細川浪次郎(イ二)といふ。（鼻ノ圖アリ）如斯印章あり。俗に京傳鼻といふ。山東庵が門人なり。」（戯作者小傳）

イ麻布に居宅せる御家人（御勘定付御普請役）實名を忘れたり。（江戸作者部類）

イ元幕府の與力たりしが（下略）（增補續靑本年表）

「文化四五年の頃、和泉屋市兵衞に請うて、初めて臭草紙（當時合卷既に行はる）を印行せられしより、年毎に此の人の作出でたり。然れども拔萃（僻なるノ意カ）なるあたり作なし。其作り狀南北と相似たることあり。前輩の舊作を剽竊して作れるもの多かり。」（江戸作者部類）

と、馬琴は、酷評を加へてゐるのである。强ちかうばかりでもないかと思へる。

「中本の作あり、書名は覺えず何にかありけん、三卷は見たることありき、忘れたればいふがひなし。」（同）

と、人情本作家として、（馬琴のいへる中本は、此の意）彼東里を知らないやうな、無視したやうな口吻である。春水すら、「明烏」のみを擧げて、「此餘は耳に入るものなし」というてゐる馬琴であるから、東里山人の此の業績など、てんで頭にはなかつたかも知れない。或は、東里山人、鼻山人、同一者であることを知らなかつたのかも知れない。

尙、東里山人の、中期に於ける業績、例の洒落本を人情本となして、後世の作者例へば春水などの僞を爲したといふのは、古記錄には見當らぬが、彼の、著作年表の上からも、これを他人情本作者のそれに比べたら、尤もと肯づける話である。「戯曲小說通志」は、此の意味の事を書いてゐるが、藤岡氏講述の「近代小說史」も、またそのまゝこれを承認してゐる。即ち「後の人情本の僞を作りて、爲永

春水の先蹤を爲し、人なり。」とある。が、先蹤を爲した、価を爲した主動力であつて、決して唯一、その者ではないと、私は思ふ。現に、晩期洒落本に、猥的な筆を弄して多作した一九は、どうか。彼が、この種の洒落本から、鼻山人（東里山人）等に與へた所も多からう。殊に、「由佳里の月」（東里山人作）などを、人情本の最初に持つてゆくならば、（自分は、此の「由佳里の月」などは、人情本とも斷定は出來ないやうにも思ふ。どちらかといへば、洒落本だと思ふ。）〔此の、由佳里の月を人情本の最初におけるもの、「新修日本小説年表」也。〕すぐその翌年の、初代一九の「清談峯初花」なども、注目に足りると思ふ。唯、性質上、なる程、東里山人（鼻山人）の作は、一九などの初期人情本に比べて、比較にならぬ程、既に人情本形には出來上つてゐる。此點、人情本の發達を說かば、彼東里の名は、沒却し能はぬまでのものはある。

「活東子云、吾師無物老人話に、浪次郎晩年漂泊して、芝切通しにて傳授屋といひて、奇方妙術などを小さき紙に記して賣れり。而も流離して、隰書繪（イ倩）となり、俱に相隣りて活計せしが、後に江戸橋四日市の小店に移りてより、聲聞せざれば、其淵瀨を知らず、云々。」（「戲作者小傳」）

安政六年九月を以て歿す、享年七十四歲なりき。（「戲曲小說通志」）

此の歿年は、明治廿六年「小說家著述目錄」の著者及び同廿七年「戲曲小說通志」の著者の合致して謂ふ所である。とにかく後來の著書、これを踏襲してゐるやうである。次に示す著作過程からも、恰もこれは、眞實らしくも思へる。唯、享年に、異說がある。即ち安政六年七十四歲歿とすれば、天明六年生となる。然るに、「靑本年表」文化四年の項では、「天明五巳年に出生し、本年廿三歲」とある。これに、一年の相違がある。即ち何れが正しいか。假りに、靑本年表通り天明五年出生（したがつて安政六年歿七十五歲である。）とする。によつて、左揭著作年表に年齡を附してみよう。

著作年表冐頭の、「曉昔の茶唐」は、艶示樓の作名であるが、これは、鹽屋艶二の艶二とは別人？新

修日本小説年表は、混同してゐる。即ち艶二、艶示楼、この二と示、楼の有無に氣づかなかつたのか。御丁寧に同人だと駄目を押してゐる。とにかく予は、凡て己惚の意味に通はしての作名であつて、唯類似といふばかり、全くの別人だと見るのである。しかも艶示楼は、京傳門人であつて、例の鼻印もある。）これが後の所謂鼻山人（東里）と同一人であらうことは、嘗て本誌に述べた。姑らく、？として附記しておく。（著作の外題は、「年表」を基とし、他を參着した。年表に洩れたるもの、他を以て補ひ、又全く何れにもなきもの、家藏本によつて、補足した。）

●東里山人著作年表

――○は東里山人署名、△は鼻山人署名のもの。●を最初におけるは、翻刻活字本あるもの。
種別、洒（洒落本）、合（合卷）、黄（黄表紙仕立合卷）、滑（滑稽本）、情（人情本）、噺（噺本）
讀（讀本）の謂也。

（種別）（署名）	（外題）	冊（合卷ハ卷數）	畵者	年代	年齢
洒	艶示楼 晴昔の茶唐	一	豊丸畵	寛政十二年	一六
合○	菊童子配盃	六	豊國畵	文化四年	二三
合○	觸た新形	三	美丸畵	同	同

•右、青本年表のみにあり。疑問のもの。

（種別）（署名）	（外題）	冊（合卷ハ卷數）	畵者	年代	年齢
●黄○	復讐大全筆の山物語	六	春英畵（青本年表）	同	同
黄○	鄙舍者富多無禮話	三	月麿畵	同六年	二五
黄○	清川文七元結濫觴	六	美丸畵	同七年	二六
黄○	首尾松秋葉楓照天姫黄昏艸紙	六	春扇畵	同	同

•右、文化十二年、再摺せるが如し。（久）

（種別）（署名）	（外題）	冊（合卷ハ卷數）	畵者	年代	年齢
合○	お伽歌之助念猫物語	六	同	同八年	二七
滑○	田舍通言驛路の鈴	一	同	同	同
滑（合卷仕立）○	河精茶番口切のせりふ	三	同	同	同
合○	小町櫻花之面影	三	國丸畵	同九年	二八
合○	梅若姫松若姫梅柳筆繼分	六	春扇畵	同	同
合○	敵討道成寺清姫太郎繭兩國	三	美丸畵	同	同
合○	玉喜久全傳　イ（玉喜久全傳天岩戸曙草紙）	六	國直畵	同十年	二九
合○	玉屋新兵衛餘光事跡室粒花魁	六	春扇畵	同	同
合○	酒は爛酌は嬢浼木氣戲作口開	三	同	同	同

合○葉櫻姫卯月物語　六　同　同十一年　三〇
黄○登客浮世元陽意氣　三　同　同　同
合○六合雜劇樂屋雀　三　美丸畫　同　同
・右、青本年表は、文化十年。
合○今昔宿直物語　四　同　同
・右、青本年表のみにあり。
合○趣向は大幟振袖揚卷若衆助六　六　國直畫　同　同
滑○馬鹿多譯合鑑　一　豐國畫　同十二年　三一
・右、青本年表は、同十三年。
滑○片言雜話山舍講釋　一　歌川國信畫同　同
・右、青本年表は、合卷に入れ、二卷（十丁物）とせり。
黄○人はみめより たゞこゝろ敎草戲言試筆　三　同　同　同
合○よきことをきく　累返すぐ諢草紙　六　同　同　同
合○目出度いしこ二度目淸書　六　國丸畫　同　同
合○藤中將姫糸綿繊　六　春扇畫　同十三年　三二
合○觀音樂觀哀怒註文通書物語　五　美丸畫　同　同
・右、一名、松浦佐與姫榮枯奇談。
合○大當八卦開卷見通安部清明辻筮帖　二　國信畫　同　同
合○色と酒欲は敵ぞ花の頃浮世街道敎速解　三　美丸畫　同　同
合○魁（一分イ總）浪花梅枝　六　同　同十四年　三三

合○物見松女熊坂　六　春扇畫　同　間
酒△娼妓美談雛の花　一　北溪畫　同　同
黄○節季夜行馬鹿物盡　三　春扇畫　文政元年　三四
黄○寶船黄金桅　三　同　同　同
黄○山吹長者欲物語　三　國丸畫　同　同
合○註文逆作滑稽多新形　三　美丸畫　同　同
合○當意即妙出傍題無智哉論　四　國直畫　同　同
酒△雛の花後編廓宇久爲壽　一　白水（英泉）畫　同　同
情△雛卯角談晦日の月　二　同　同
・右、後の「春色由佳里の梅」第二編と同一ならん。
情△廓中余情由佳里の月　二　英泉畫　同　同
・右、後、「春色由佳里の梅」第三編全部として收錄。―（後說を看よ。）
合○金王櫻兜鉢植　三　春亭畫　同二年　三五
合○胡蝶夢幻物語　六　春扇畫　同　同
黄○餘計の仕業　三　同　同　同
合○よしの園花薄雪草紙　六　同　同　同
合○書組は京傳趣向は楚滿人其俤嫩丹前　六　同　同　同
合○よみ本じたて敵討暗夜鳥　六　同　同三年　三六
合○虛實分解傾城客問答　五　同　同　同

●合○聞道女自來也(きくならく)　六　同　同　同
合○音曲情絲道　四　初代廣重畫　同　同
合○(去程に是は亦)哀也女刈萱　六　二代春好(春扇改)　同　四年　三七
合○十種香秋の白露　五　國直畫　同　同
・右、青木年表のみに見ゆ。
合○安達原男一軒家　六　重信畫　同　同
合○(噓氣傳來)開(あけて)卷未來記(みらいき)　五　美丸畫　同　同
合○(高尾全傳)菊累配羽觴　六　豊國畫　同　同
・右、文化四年「菊童子配盃」の再摺カ。
情○(生死流轉)玉散袖　三　英泉畫　同　同
・右、安政四年再版。
噺○(仕形落語)工風智惠輪　一　二代春好畫　同　同
・右、天保二年「仕形ばなし」を改題再摺、弘化二年三版。
合○其行衛白浪日記　六　同　同　五年　三八
合○小町(こまた)誂差込　六　英泉畫　同　同
合○(出放題)無智哉論(二編)　六　初代廣重畫　同　同
情△廓かゞみ　六　同　同
●洒○(玉菊全傳)花街鑑　二　英泉畫　同　同
・右と同物異裝か。
讀○源平外記染分草　五　二代春好畫　同　同
合○大内山月雪花志　九　國直英泉畫　同　六年　三九

合○(童子教訓)昔製(むかしじだて)譬近道　四　二代春好畫　同　同
合○(東里一偏)海道茶漬腹内幕(三)　英泉畫　同　同
洒○(竅學問後編)青樓女庭訓　一　同　同
情○仇競戀浮橋　三　同　同
・右、一名、仇比二世物語。
情△契情意味張月　六　英泉畫　同　同
合○金儲傳授書　三　國丸畫　同　七年　四〇
合○釣狐花面影　六　英泉畫　同　同
讀○(夢の浮世)白壁草紙　六　岳亭春信畫　同　同
●情△(傾城此糸)蘭蝶記(初より四)　三　英泉畫　同　同
洒△傾城肝粒志　二　同　八年　四一
洒△青樓曙草　一　同　同
●情△風俗粋好傳　六　英泉畫　同　同
●情△契情肝粒志(初より五編)　一四　泉政 壽信畫　同　同
・右、洒落本同名の再摺改裝、補綴にして、初編八年、貳編三、三編三は翌九年、四編三・五編は同十年の刊也。
合○(出放題)無智哉論(三編)　六　英泉畫　同　同
合○初霞江戸立入　五　同　同　同
合○(三ヶ月お仙物唄おせん)其俤錦繪姿　六(青本ハ十二)　同　同　同
・右、翌年の「三日月お專物語」と同本カ否カ。○小說家著述

目録は、同翌年の「三日月太郎」と三者同一に認めたる如し

合○夫は豊前是は近江彦山靈驗記 五 貞雅畫 同 九年 四二
合○兒鑑東孝經 六 英泉畫 同 同
情△永明間記廓雜談 九 同 同
情△三曲廓日記朝霧全傳 五 玉成畫 同 同
・右、年表、人情本畧史等なし。
●情△廓鑑余興花街壽々女 三 白水（英泉）畫 同 同
情△婦人孝經江戸花誌前後編 八 同 同
・右、「人情本畧史」に出づ。年表になし。
嘶○流行嘶安賣初より三編 三 同 同
情△傾城胸中極秘傳 三 菱川政信畫 同 十年 四三
情△松籟美談紫草子 三 同 同
・右、「人情本畧史」は、十卷と云。
●情△珍説豹之卷 六 政信畫 同 同
情△廓雜談余興北里通 六 英泉 壽泉畫 同 同
・右、一名、人情早引娵節用。（廓雜談後編）
讀△賢女全傳千代物語 一〇 英泉畫 同 同
讀○足利持氏鎌倉小双紙 一〇 同 同
讀○敵討繪本天下茶屋 一〇 同 同
合○三日月お専物語 六 英泉畫 同 同

合○みかづきおせんの後へん三日月太郎物語 六 同 同 同
・右、松本幸四郎補助の名を入る。尚、此本、「お専」の後編なりと叙にもいへり。（久）
合○しほくみ第二番目面白妙須磨雪平 六 國安畫 同 同
情○人情奇縁言葉花 三 英泉畫 同十一年 四四
・右、文政四年刊「玉散袖」の後編。
合○千葉模様好新形 六 二代豊國畫 同 同
合○七種薺物語 六 英泉畫 同十二年 四五
・右、墨川亭雪麿と合作。
讀△都鄙物語 一〇 同 同 同
情△廓の意氣地 二 文政年間 不詳
・右、「人情本畧史」は、文政十年と云。
情○恐可誌 六 國貞畫 同 同
情○お染久松艶の油屋 六 同 同
・右、鯉丈と合作。
情○傾城腹の卷 六 政信畫 同 同
情△孝貞婦鑑寶の卷 九 英笑畫 同 同
情△春色記原花街櫻 三 國芳畫 同カ 同
・右、一切の書目になし。（家藏本による）
●情△廓中余情由佳里の梅 九 天保元年（文政十三年） 四六

・右、春水序を加へて、「春色由佳里の梅」と改題。(天保十二年)

情△朧氣物語　三　英泉畫　同　同

合○出放題無智哉論 四編　六　廣重畫　同・二年・　四七

合○天津空(イ雲)村雨物語　六　二代豊國畫　同　同

合○大龢假名懸想文賣　五　泉晁畫　同　同

情△人間萬事心意氣　三　英之畫　同・四年・　四九

・右、「心意氣」、三編三・四編三は天保五年。尚、四編挿繪は英泉カ。

情○言語光澤合せ鏡(イ春色合鏡) 初、二、三編　九　同・五年・　五〇

・右、天保八年、三編にて完結。

情△さとのいろ花物語　六　同　同

・右、翌年完結せり。

●情△四季眺望恩愛二葉草　九　國直畫　同　同

・右、年表になし。

情△神田雜談お玉が池　九　英泉畫　同　同

・右、年表になし。

情△妙塵記　六　政信・國平畫　同　同

合○風俗伊勢物語 初編　四　貞秀畫　同・六年・　五一

・右、天保九年、同六編にて完結。計二十四卷。

滑△浮世洒屋喜言上戸　三　同・七年・　五二

噺○明増而目出度咄　一　同・十年・　五五

情△風流脂臙絞　六　貞秀畫　同・十一年・　五六

情△絞花志　六　刊行年未詳　不詳

・右、「風流脂臙絞」の續編也。

情△春色廓の鶯　六　歌川國種畫　天保年間　不詳

噺△緣取ばなし　一　胡蝶園春升畫　弘化二年　六一

噺○腹筋寄合噺　一　貞秀畫　同・三年・　六二

合○滕栗毛余興讀而未來記　四　同　同　同

合○滕栗毛余興讀而未來記 二編　四　同　同・四年・　六三

・右の二、年表等一切に無し。

噺○放生會　一　嘉永三年　六六

▽僞作

合○有職鎌倉山　三　美丸畫　文政二年

・右、寛政三年版、蘭徳齋畫の同名のものを、東里山人として、且つ畫のみ更へて再刻。

滑○浮世滑稽附會案文　英泉畫　刊年不詳

・右、一九の文化元年版「附會案文」を改題、挿繪を更め再版せるものといふ。

總計(概數百三十一種)

○合卷（黄表紙風とも）七一　（僞作一とも）
○滑稽本　六　（同）
○洒落本　七　（疑「時昔茶居」とも）
○人情本　三五　（洒落本の改裝本一とも）
○噺本　六
○讀本　六

（以上、内譯）

備考——勿論、此概數百三十一種の中には、合卷物などの初編、二編なども、刊行年代又は繪組の違ふものは、それ〴〵一種づゝに數へた。例へば、「出放題無智識論」の如し。

○存否未詳の部

「慶長以來小說家著作目錄」に據れば、右と重複せざるものなほ若干あり。試みに左に錄す。存否の次第は、凡て後考に俟つ。

○さて〳〵長物語　六　　○高慢男物語　不詳
○黄金花作も陸奥　四　　○滑稽奇談尾笑艸　三
○大磯虎物語　三　　○忠信芳野双紙　不詳
○天狗の話　三　　○一夜源氏　三

・右、種類竝に刊行年とも未詳。

尙、「讀而未來記二編」（弘化四年）の奧附にありて東里山人著なるもの、その中、右々に洩れたるもの左の二あり。此類の雜本、他にまた多かるべし。

○川柳きな〳〵艸紙　二編　貞秀畫

・右、二編とあれば、初編も無論刊本あらん。

○風流謎の親玉　全二冊　同畫

・此二本、「讀而未來記」と同じく、森治版也。

——以上、著作年表、完。

次に、二三の作品から得た彼の、傳記閲歷に關したるものを、資料的に扱かう。

○「（前略）予多年滄浪のこん八となつて、餔其糟歠其釃而後に、卓案の皓々の白よきを味ふ。（下略）」（敵討大全筆の山物語。文化四年版）

によれば、彼若うして、京傳に食客たりしが如くである。

○「（前略）既に先師京傳翁も壯時、種々の小冊子を編んで、世に鳴る事最も大なりき。云々。」（珍說豹の卷後篇序。東里山人）

右は、東里山人、鼻山人別樣のやうに、しやれて書いた自叙である。これにきつぱり、先師と京傳を

崇めてゐることも、注目に足りよう。

○東里の全盛期

東里は、右の著作年表にも知られる如く、その活動期は、文化・文政・天保へかけてであるが、その全盛期は、文政を前後してのやうである。「雛の花」、「廓宇久爲壽」、「花街鑑」などの、人情本に刺戟を與へた諸作、「意味張月」、「蝴蝶記」、「肝粒志」などの人情本の名作、凡て此期である。年齢からは、彼の三十歳前後から五十歳前後の約二十年である。偖、この人情本界にも相當に刺戟を起し、合卷物にも、相當の量を殘した、その彼が、晩年の落魄、失意の位置は、どうしたものであらう。これに就て考へたい。それには、合卷に於て種彦などの蹶起、人情本界に於ける春水の開祖の誇稱、これなどが祟つてゐるのかも知れない。或は、例の天保十三年の取締で、彼も睨まれた作者の一人であつたかも知れない。現に、文政頃の刊本和印本には、明らさまに、鼻山人を署名したものさへ見受ける。(此の本の書、英泉ならん)さうした大膽さは、他の彼編作の和印本にもなほ多く見られたであらう。さうして、前にも述べたが如く、彼の作は、たとひ合卷と雖も、人情本臭味、洒落本臭味のものが多い。忠孝一點張り、義臣貞婦の押賣は割合に少いやうである。それに、一「花街鑑」の作者としても、睨まるゝ事多かつたであらう。かうしたしせんの壓迫觀と、一つは、後進どもに彼の文壇に於ける地位を奪取せられたためとによつて、彼の晩年は、あの如きみじめな逼塞を來したのではなからうか。彼の才が、永久性がなかつたのだとは、彼のために、いひたくない。先輩の摸倣ばかりしてゐたのだから、思想枯渇は已むを得ぬ、とは、謂ひたくない。先人の摸倣剽窃に耽つたのは、何も彼東里の一人ではないから、凡てが然りであつたから。矢張り私のいふ通り、最後まで時運に乘りえなかつたのと、性質がねばり強くなく、割合に聲聞利欲に恬淡であつたのと(カ)、それに彼の遊里(延いてはこれを作物化した戯作)に、純な享樂心、陶醉感があつて、強ひてこれを賣物にしなかつたせゐだ

としたい。丁度、純洒落本作家の誰彼が、京傳の如きは例外として、多く割合に生命（作物の上の）が短かゝつたやうに。彼が合巻の多作、とにかく極の晩年まで作物があつたのは、文政當時の隆々たりし聲名（作家としての）の餘波、その末勢を示したものに過ぎぬと思ふ。恐らく、彼は、彼の眞の文學的生命は、天保の終りに、その終焉を見たと、彼自身も考へてゐたらう。聲聞に恬淡であつたらう、或は、彼の文學的生命は、天保末に既にその終焉を自らも覺知してゐた、さうした私の推斷の根據を左に示さう。それは、人情本「春色由佳里の梅」の發兌に就てである。

〇「春色由佳里の梅」に就て

由佳里の梅は、初編三冊・二編三冊・三編三冊九冊揃の人情本であるが、年表によれば、文政十三（天保元）年、彼の名（鼻山人）に於て刊行せられ、それが更に天保十二年、春水の序を添へ、春色の二字を冠らし、（此時は恐らく鼻山人の名は削られて）刊行せられた、とある。その爲永春水の序のものは、帝國文庫「人情本傑作集」上卷に所收せられてゐる。今、それを見ると、校者は、全く春水の作の如く取扱つてゐる。がこれは、全くの誤りで、序が春水といふだけで、實は、初編は、初代一九の洒落本「廓の意氣地」を丸抜き、貳編は未詳、三編は、鼻山人作の「由佳里の月」そのまゝである。帝文の校者も、後に、續帝文の「續一九全集」を編むに至り、その所收の「廓意氣地」が、すでに「人情本」上に收めた「由佳里の梅」の初編なることに氣がつかなかつたのだと見える。とにかく全く同じといつてよい。（その末節に、一二語の修正はある。）で、この由佳里の梅の初編は、一九の作を竊んだとは分るが、その二編は、何を持ち來つたのであらうか。恐らく鼻山人作の「晦日（みそか）の月」ではなからうか。これを此の二編に充てたのであらうと思ふ。三編は、これは確實で、予の藏本「由佳里の月」と、帝文「由佳里の梅」の三編とを照合すると、全く同じである。唯、序の鼻山人を、爲永春水に代へたのみである。「卯（兎の繪あり）のはつ春よい事を聞く耳のながき日しるす」といふ年月の暗示まで同樣である。無論これは、序者名だ

けを埋木(うめき)したのであると思ふ。と、此の「由佳里の梅」は、全然春水に關係がない。唯、序をものしたといふだけである。さてこの春水の序のものは、「廓の意氣地」や「由佳里の月」からいふと實は三版である。（或は再刻か）。その前に、鼻山人の作名で、天保元年に「由佳里の梅」があると年表は教へてゐるが、この「由佳里の梅」（天保元年版）と、天保十二年版の「由佳里の梅」とは、全く同一物であり、版も同じ物(もの)であらうと思ふ。即ち天保元年は、まだ初代一九生存中の事である。然るにその當時、一九の「廓意氣地」をそのまゝ取り入れたものを初編とし、（二編、三編は、自分の作としても）以て、「由佳里の梅」と題したその不良心さがである。こんな、これ程露骨な場合が外にもあらうか。（一方、原作者生存時に於て。）と、そこにまたをかしい事は、鼻山人作として、別に「廓の意氣地」といふのある事である。一九の外題と同樣である。これは、一九のものに、語句の二三を作りかへた位ゐのもの、即ち、これが「由佳里の梅」の初編となつたものではなからうか。此の鼻山人の「廓の意氣地」（單行本として。「年表」の文政年間といふもの。）と一九の同名とを較べてゐないから、何ともいへないが。恐らくは、本屋からの注文が動機で、此の一九の「廓意氣地」の版木に、少部分の埋木をして、作者名も更へ、鼻山人とし、後（天保元年）これを、自分本來の「晦日の月」「由佳里の月」と合冊して、「由佳里の梅」としたのではなからうか。かうらしく思へる。とにかく、惡くいへば鼻山人の不良心、よくいへば、以て當時の斯種作者としての彼の聲名を窺ふに足りる。それが、をかしいことは、因果は覿面で、自分の爲したと同じ事を、今度は、自分の物までもそつくり、春水のものゝやうな風に拵(こしら)へて、次期天保末に出版せねばならなかつた。すでに、此時、彼は、一九から奪つたものを、更に春水に奪はれた、即ち自己の文壇的生命は、凋んだと見ていゝ。しかも、これも一九と同じく、自己生存中に爲された事である。彼は、無論、鼻山人の代りに春水と埋木せられた後版「由佳里の梅」を見てゐたに違ひない。そこに。如

何の悲哀があつたらうか。或は、三版料（由佳里の月などの單行からは、春水序の物は、三版目である。）を、しこたま取つたかも知れないが。

かうした一寸とした事柄にも、一九――鼻山人――春水、此の三者の文壇的推移の跡が、窺はれると思ふ。

○東里、鳥蟲を描く

というても、鳥は雀、蟲は蝶の例を發見したばかりである。雀は、餘程本人得意であつたと見えて二本に描いてゐる。藏本の中で、「於玉ヶ池」上卷の扉、「心意氣」後編上卷の口繪終りの半丁分、此の二である。「於玉が池」は、單なる雀で、此雀東里山人畫とある。「心意氣」では、竹にとまつた、羽ばたきの雀で、此半丁、東里山人畫㊞（此印は、例の鼻印）とある。共に描ではない。蝶は、「心意氣」三編の上冊で、蝶一匹、此蝶　東里山人戲墨とある。見樣見眞似で描いたものであらうが、人物よりも此種のものに、長じてゐたのか。

○東里人情本の風格

「心意氣」三編の上の叙、ヒラキ一丁分の上欄に、秘傳の七ヶ條といふのがある。これなどは、東里の人情本が、洒落本の臭を未だ多分に包藏してゐた例證として好ましいものである。それを左に、擧げておく。

秘傳の七ヶ條

一すがゝきをひくは、新造の役なり、じゆん番にこれをつとむ、三味せん番といふ、よく日ばちこまをそろへておくり渡しする時、糸は內しやうよりうけ取なり、

一豆いりをくふて口中の匂ひを消すには、侑が妙なり、そく座にそのうれひをのぞく、

一空き請には、御ばつうをかうふるべきと書なりこれ文字に當らざれば、よし罰にならずといひ

傳ふ、
一空病キをおこす時は、糸にて二のうでをしつかと縛りおく也、萬一脈を見られても、ゐしやの心をまどはさんがためなり、
一内しやうのせはの禿と、おゐらんのせはの禿とは髪結せんの高下あり、コレ拂ひの滯ふるとゞかふらざるとのゆへなり、
一年明キまへと成、おのれと恥を知ッて、お針部やにいたりて、習ふもおかし、
一待人のまじなひ、いろ／＼あれども、先はうなぎの串を疊のへりの四ッ角へさすなり、

○彼の逸作の三

彼の作物一斑（その合卷。洒落本・人情本・噺本など）に就ては、別に「東里山人の作物」に於て述べよう。今は、唯、年表其他あらゆる書目類に逸せられたるもの、三に就て紹介しておかう。

一、三曲廓日記　朝霧全傳　中本五册　文政九年正月より　文政十年正月

これは、東の朝霧、都の花桐、浪花の夕霧、此の三人の傳といふので、現に此の朝霧全傳の第五卷の終りにも、三曲廓日記全部十五卷、二編鳳都の部、花桐全傳近刻、三編波花の部夕霧全傳とある。此の十五卷全部が刊行せられたものか否かを知らないが、恐らく刊本があらう。現に、讀本風に製本し直した、後に上方で再版したらしい「夕霧全傳」といふのを當て見たが、（半紙本五册物）此の續編のやうに覺えてゐる。此の朝霧全傳は、中本五册で、畫は、瑤齋玉成、一向知らぬ名であるが、英泉の筆のやうに思はれる。然し英泉としても、いかなる理由で、かうした眼なれぬ匿名を使つたか、且つこの玉成といふのが、一向他に見はれてゐないのも、をかしい。後考に讓る。題名の三曲といふのは、「雛節纖節投節の三曲もその頃の事とかや、亦いふ衣紋坂より三曲にまがりて廓へいたれるちなみもあれば、外題に是を冠しむるもの也」と凡例にある。内容、「第一、因果應報の道理を説」から「第五、解脫發心の出離を説」まで、主家の再興、惡人の跋扈、忠臣貞婦の苦節、孝子の身賣、など丶寧ろ讀

本の內容を具へたものである。朝霧の情客は、仙八といふのである。

二、春色記原花街櫻　中本三冊　刊行年不詳

上中下三卷のその下卷一冊、によつての概念である。國芳畫であることが珍らしい。人情本の挿繪は、殆ど國直か英泉かであるにである。（國芳畫のもの、此の「花街櫻」の他に、天保元年「昔語土手編笠」（浮世山人作）、同三年「奇談和可紫」（喜久平山人作）同年以後の「沈魚傳」（金水作）天保三年「須磨の月」（風亭馬流作）の四種を「年表」に見るだけである。）此の國芳の畫、下卷に二葉を見るが、流石に英泉とは、違つた風格が見えてゐる。主人公の男女は、重蒔といふ傾城、錄之介といふ若者である。

三、膝栗毛余興讀而未來記　合卷初編上下（二十丁）二編上下（二十丁）　弘化三年春　弘化四年春

貞秀の畫で、賣出しの若手畫家貞秀と、老大家との東里とである。これだけ見てゐれば、晩年でもなか〱東里は東里として文壇的に存在してゐたやうにも思はれる。二編の上下續キ錦繪表紙は、海岸茶見世の体であるが、それに吊した提灯に、一は貞秀、一は東里作とある。晩年貞秀に、此他にも畫かしめてゐる處から思ふと、貞秀と何か特殊な關係を生んでゐたのかも知れない。

此の本梗概は、「膝栗毛物のいろ〱續々」に讓つて、今は說かない。

以上、ほんの東里に就ての一走りであるが、今回は、主に彼の業績の羅列のみに止めて、作品の品評、彼の作者としての價値論などは、凡てを他日、「東里山人の作物」に於て述べたい。—六月二十三日—

○東里の歌句

題春光賛。七言。けさたつ春に鳥も縫てふそよ佐保姫も衣や著そめぬうす紅梅の一重ふたへに、山もかすみも帶なしめゆく。（心意氣四編上）■咲花に心遣ひの朝な〱來てみよし野のくもまさりけり（同後編上■襦の模様もいやな柳ごしはなの毛まりにはづむ客達（九陽亭。驛路の鈴）■渡しまつ人よ朧のしるし笠（九陽。由佳里の月の上）など。

座敷操（あやつり）と正徳頃の東西二座

正徳頃刊といふ遊女細見本体の無論小形枕本（評判記の大きさ）「遊女懐中洗濯」、の第四巻鄙（ひな）の巻に、此の座敷操（あやつり）がある。無論、名寄せの次の、小説体のもの丶中にあるので、その小説体は、鐘木町（ママ）や奈良木辻やそれ〴〵一篇を爲してゐるが、これは、「つい吸付た乳守の色里」、即ち堺乳守の遊里の狀を主材とした、その小話の中にあるのである。挿繪（ヒラキ一丁分。）も附いてゐて、それに、此の座敷操の景が出てゐる。先づ、此の座敷操に關した小話の本文の件を抜いてみよう。

「……ちもりの女郎の初心（しよしん）な所が有がたいと、毎日の大さはぎ、ある時やしはといふ女郎、あやつりしはいが見たいと甚切にねがへば、それこそやすき事と、大坂も西國方へ賣切つて行、旅しばゐの元（もと）じめをよびよせ、急に此家に手すりをかけ、人形（にんぎやう）まはしをして見せてくれよと、何がなしに是でよいかと三十（ママ）はいつき出せば、さない宮嶋へゆかふよりは、是忝じけない御さはいと悦びいさみ、さつそく屋躰をこしらへ、おこのみ次第に上るりは百段でもかたらしますと、三番叟よりして見すれば、おかげでよいなぐさみをいたしました、とてもの事にかぶきのおどりが見たいといふ、それ又心やすきせんさくと、だうさんぼりよりあまたの役者をまねきよせ、時ならぬ俄おどり（下略）」

といふのである。挿圖のヒラキの左は、此の座敷あやつりの体であつて、大盡、遊女、禿、幇間などがをり、幇間の言葉「さつてもつかふたり」、遊女「上手でござんす」、禿の詞らしく「よう〳〵」。とあつて、上に「堺ちもりのあげや」、下に、「ざしきあやつり」とある。座敷の左を唐紙を取拂つて、幕を張り、（その幕は、浪摸樣）その向う、丸に九枚笹の竹本紛（まが）ひの紋をつけた黑い幕を張り、上に簾が見えてゐる。手前の幕（浪摸樣の）が裾短かで、人形使ひの腔のあたりから下が見えてゐる。遊女買ひの体裁で、扇子で胸を煽いだ客らしい男の人形と、迎へる傾城の人形。人形使ひは二人で、即ち一人形に一人附添の形である。が此の時分、人形に足が生えてゐてい丶筈であるが、此の繪は、男女とも足がないやうに見えるは、どうか。

（人形に足の生ひたのは、竹本豊竹對抗の頃といふから、既に此正德頃はあつた筈である。即ち竹豊故事に、「元來足付人形などは曾てなかりしなり、其後次第に操芝居繁昌に付、道具建衣裳等漸々に向上になり、別して竹本豊竹両座と成てより、東は西に負けまじ、西は東に勝らんと（中略）人形の衣裳にて、縮緬、緞子、繻子、金襴等にて美麗を盡し、諸人形の外は、皆々足付と成り、出遣ひの外は、介錯足遣ひ立懸り、歌舞伎役者の所作より增りて、天晴見事なり云々。」曉晴翁の「雲錦隨筆」卷四には、「木偶も往昔は今の如く委しからず、足などは無かりしを、山本土佐掾角太夫の時代、源氏烏帽子折の狂言に、藤九郎盛長、澁谷金王丸等の二の人形に初めて足を付たり、（元祿年間より以前也）爾後、宇治加賀掾嘉太夫の時、世繼曾我の浄瑠璃に、朝比奈の人形に足を付しより、諸流ともに擧つて立者の木偶には足を付る事となれり云々。」ともある。なほ、人形の手を付けたのは、先是、佐渡島日記に、「石井飛驒」、一說には、足が此の飛驒守だともある。）

さうして、此の「遊女懷中洗濯」の人形遣ひは、二人とも頭巾を被り、別に社衤も着てゐない。所謂これが突込といふのであらう。高野氏「淨瑠璃史」八二頁に、「……國性爺合戰の如きは、加ふるに辰松吉田の如き人形の妙手ありて、愈々世にはやされしならむ。當時、突込と稱して、下より両手をさし込み、人形一つを一人して遣ひ、手摺の上へ首を出さず、力を極めてさし上げ」とある、此の突込ではなからうか。（尙、隨筆「飛鳥川」に、「操人形は、昔les誰より手を入れ遣ひし也。其後辰松八郎兵衛……の工夫にて、手足を別ち遣ふるを始」としてもある。）

社衤着用の、出遣ひが、辰松八郎兵衛から始まつたことは、諸書に一致してゐる。現に、近代世事談卷三、態藝門の中に、

「出づかひ、辰松八郎兵衛これをはじむ。惣體人形をつかふものは、黒き帳の影にて、黒き頭巾など被りて、已がかたちを見せざるは常也、かくする事は、人形の動くに從ひ、己れが身をもそのさまにうつすものゆへ、見苦しきを耻ちてなり。辰松は、人形に手煉し、上下を着し、手摺をはなれて、無量の手づまを使ふに、全身少しもみだるゝ事なし。古今人形の妙手といへり。辰松幸助これに亞ぐ。（下略）」

とある、これに依ると、此の「遊女懷中洗濯」のものは、無論、出遣ひではない。此の臨時雇はれの人形遣ひ連中、まだ辰松ほどには修練が積んでゐなかつたと見える。（或は、これは、出遣ひは當時まだ辰松一個のみで、一般は、昔の蔭操り——こんな稱へは無からうが。——であつたのだらう。とも

思へる。）

人形に足がないらしい、人形遣ひの様子も古來のまゝで、余り工夫がないらしい。幕の紋こそ竹本風だが、これは、竹本の聲名を書家が借りただけで、かうした第二流の人形遣ひ――それも旅稼ぎを時々したらしい、現に宮島へ行く所だつたと、本文にある。――が果して存在してゐたのかも知れない。或は、誠の、竹本の人形一座の寫實で、中には、辰松もゐたのだとすると、恰も聲曲類纂卷一の上るり、樂屋の圖と殆ど同じで、その表(おもて)を行つたものといふべき此の原始的な挿繪がをかしい。或は此本寶永頃のもの、若しくは、辰松の新工夫以前のものかも知れぬ。

とにかく、正德頃は、操の極盛期である。大近松まだ健在、大阪は、西に竹本、東に豊竹、兩座相對抗して繁昌を競うてゐた。作者には、竹に、大近松あり、豊に海音あり、太夫（淨るり）としては、西の竹には、義太夫改め筑後掾、座本は出雲に讓つたが、猶ほ太夫として存在、（彼の死は、正德四年、六十四歳）その死後と雖も、後繼の政太夫がゐた。同じく東の豊には、義太夫の舊門下豊竹若太夫（後の越前少掾）の名手がゐた。さ、作者、淨るり語りの名は、誰でも容易に口に上せ得るであらうが、然れば、肝腎の三拍子（作、語り、操り）の一たる操り手は、如何の對抗狀態に居つたか。今、淨瑠璃大系圖の類によつて、これを窺つてみよう。まづ、人名を擧げてみる。

▲西（竹本座）、人形遣ひ（但し正德頃）

○竹本三郎兵衛 ○辰松八郎兵衛 ○桐竹門三郎
○桐竹助三郎○後に吉田文三郎

▲東（豊竹座）人形遣ひ（同）

○中村勘四郎 ○豊松藤五郎 ○若竹東九郎
○藤井小三郎

などの對抗であつたらしい。

右の內、各人形遣ひの年代を一々吟味すると、先づ西座で、竹本三郎兵衛（初代）は、元祖山本飛驒掾の弟子で、竹本座創立（貞享二年）當時から入座、立役人形遣ひの名手として評判をとり、かねて同座の頭取役をなしたといふ。延享四年三月歿、次代の名人吉田文三郎は、その實子である。辰松八郎

兵衛、これは有名な女形人形の遣ひ手であるが、（同人形の中祖とも讃めてゐる。）天和の頃から天晴勤め、貞享二年道頓堀で竹本座興行の初めから櫓看板人形の立者である。元祿十六年癸未五月七日より前淨るり日本王代記、切に曾根崎心中おはつ德兵衛なり。（作者近松門左衛門、是操り歌舞伎ともに世話狂言の始也。）此の時、觀音巡り道ゆきのだん。始めて人形の出遣を致す。とある。正德四年十月、竹本筑後掾の歿後、門弟引連れ江戸へ赴き、彼地にて芝居興行御免有つて、櫓幕を上げ、辰松座と號る也。夫より興行怠りなく、……享保十九年甲寅五月九日、江戸で歿したと。從つて此の正德頃は、辰松の大阪興行に於ける最後の筈である。それにしても、竹本座の中心筑後掾の歿後、間もなく江戸へ下つた事は、座に對して薄情冷淡のやうであるが、後進に地位を讓り、自分また活路を新興の江戸に求めんとの考であつたか、又は江戸ひいき客の熱望に動かされたのかも知れない。

桐竹門三郎は「勘十郎の門人で寶永正德とつとめ、享保の初めから立者となる」とある。同苗助三郎は、同じく勘十郎門人で、正德の頃より西（竹本）の座へ出勤、享保より寶曆の頃まで立者也とある。吉田文三郎は、竹本三郎兵ヱの實子であるが、まだ此の正德頃は、現れなかつたやうである。彼の出座は享保二年丁酉二月十五日から西の芝居に於て、（種は日本 産は唐土）國性爺後日合戰、此時始めて出座、此人おやま立役共、古今の名人にして、今人形遣ひの吉田姓を名乘る者、此人凡て元祖なりとある。

一方の豐竹座はどうか。

中村勘四郎、これは、元祿十五年、東座の開發から立役立者で、爾後出勤怠らず、享保十五年八月一日からの楠正成軍法實錄、此時和田七人形に眼を働く事を仕かけ、始めて大當りを致し、其後、陸竹座再興のため退座して、陸竹座座頭を勤め云々とある。豐松藤五郎、これも門葉の盛んな男であるが、この男も東座開發よりの立役の立者であつた。若竹東九郎、東座の立役座頭にて、正德元年の頃から出勤怠りなく、元文五年九月十日から武烈天皇艤、此時佐手彦の役にて、眉毛の動く事を仕始

め、大當りをした云々とある。藤井小三郎、この男も正德の末から東座へ出勤、座頭をつとめたとある。以上は、主なる豊竹座の人形遣ひであるが、尚此外に、西の辰松の弟子の同小四郎といつた男も、反對に東の豊竹座に働いてゐたやうである。

さて、當時、大阪の此の連中が、旅興行に出たことがあつたらうか。此の「懐中洗濯」所説の如くに。今、邦樂年表　義太夫の部を見ると、竹本義太夫（竹本）一座は、貞享四年三月より、中國地方、夏、大津地方、又伊勢。元祿二年夏、堺、紀州、同冬、京都。翌元祿三年夏より秋、堺、奈良、和泉。元祿五年春、京都。同年秋より冬、中國。翌六年秋より冬、和泉、美濃、尾張へ。翌元祿七年夏、京都。元祿八年、堺、奈良、和泉。翌九年、春、伊勢。夏、讃岐より宮島。元祿十年夏、堺、奈良。元祿十一年秋、伏見、伊勢。元祿十二年春、堺。同秋、備中宮內。安藝宮島へ。元祿十三年、夏、堺、奈良。秋、京都。元祿十五年春の末、伊勢へ。元祿十六年春、堺、奈良。寶永五年夏、奈良、伊勢。同、秋より冬、宮內と宮島。寶永六年夏、伊勢。同年冬、伏見。同七年、秋より冬、堺、伏見、大津。正德元、夏、和泉、伊勢へ。正德五年春、伊勢へ。（例の艶女が喜んで見物したらう。）以上凡て竹本座である。勿論、歷史の古いせゐもあり、評判も地方的により多く響いてゐたのでもあらうが。豊竹座は寶永三年の再興から、旅興行は、寶永四秋（堺、紀州）、正德元夏（堺）、正德三秋（京）、正德四夏（堺）に過ぎない。（二座共に、正德までの中。）

とすると、此の竹本紛ひの紋をつけた「懐中洗濯」中の人形遣ひどもが、宮島云々というたのが、どうも唐突のやうに思へる。が、寫實的になつてゐた作風から考へても嘘ではないらしい。年表の示す寶永五年の宮島行を思ふと、或は、此本、正德頃を、寶永に遡らせる必要があるかも知れない。

「懐中洗濯」部の卷の座敷操から、引張り出した、不得手な操の詮索、大方の是正を得たい。（六月二十三日夜）

（表紙二より）枕草紙にもあるやうに、皇室の方にも此の遊びに興じられて、したがつて、宮中又は公卿の家庭で、謎合さいふ事が始まつた。數人集り左右に分れ、互ひに難しい謎を出して、勝負を決するのであります。まだ一般民衆にこれが普及するまでには至らなかつたやうですが、可なり高貴貴族の方々には、これが行はれました。その頃、謎で出來た歌合もあり、また室町期の末には「後奈良院御撰奈曾」さいう天皇の御撰まであつた程ですて、慶長（江戸時代の初期）の頃には、京都に宗鐵居士さいふのがゐて、謎々に巧みで、謎百句を作つたさ記錄にあります。その頃の帝後陽成院、お次の後水尾院樣にも、謎の御作があつたさ槐記さいふ本にあります。また天和貞享の頃の帝靈元上皇樣にも、謎の題を御出しになつた事があつたさいはれてをります。

それが、次第に、民衆的に、一般に流布せられたのは、元祿以前であらうさ思ひます。丁度その頃元祿頃の版になつた「新がはりなぞづくし」さいふものがありますこれなごは、慥かに謎が民衆的になつた最初で、その第一烽火であるさ思ひます。此の「新がはりなぞづくし」には、色々當時の謎がありますが、例へば、問が「ふみもかくまい君もござらふ」さいふので、それを筆捨松さ答へるさいつたもの。「昨日今日明日明後日まで賣買」さいふ。が問で、答は、四日市さいつたものです。「麓に風なし」の問で、答が「山吹」。「天狗のゐごころ虫のゐごころ」が問で、答が「杉原」さいつたもので、凡てやはり雅やかな、いかにも京都風なさころがあります。がまだ後世のやうに、二重謎、問さ解さ心さのこの形式は具へてゐません恐らくこれが、此の三つの形式が具りかけた、即ち謎が複雜化したのは、寶永正德の頃でせう。何さなれば、その頃の刊行「御伽新二重謎」さいふ本がありますこれに、この表題にも既にある通り新二重謎さある、此の通りで、此の本になつて、始めて、――さかけて、――さ解く、心は――さいつた形を立派に具へてきました。今、此の本に現れた二重謎の例を述べてみませう。

春ごまさかけて　舟村の大湊さ解く　心は乘りこんで來る。

新參の奉公人さかけて　下手相撲さ解く　心は勝手を知りませぬ。

高雄山さかけて　羽二重さ解く　心はもみぢがようござる。

せんだく物さかけて　お鏡の餅ささく　心はほしおくもので御座る。

（表紙四へ）

寄贈紹介

○萬比加惠帖

天釣居氏よりの寄贈。時々寄贈をうげる同氏篤志頒布物の一。これは、大雅堂の控帳の複製。玻璃版精巧なもの。玉瀾との夫婦生活仲のいゝ脫俗生活が見ゑて、羨まるゝ物。大雅堂の日々の買入帖で、中に處々夫妻の歌句が見ゑてゐる（池田金太郎氏）

○野夫鑑

天明七年版の洒落本、藪醫を材にした風變りな物、その複製である。用紙体裁凡てよし。唯表紙の色が洒落本を裏切り、題簽も原本のそれでない事を憾む。校訂まづ無難。（非賣品、駿河庵原村、西ヶ谷潔氏）

○淡路さ西宮に於ける人形操の調査　吉井太郎氏著

題名の如きもので、西宮戎社の記錄及び淡路殘存の操座により出來る限りの調査であの明細な、出來る限りの調査である。これによつて、淡路の例の十八座沿革も略了知せられる。唯操其物の原始的記錄には、また、模糊たるものが多い。がこれは、迚も詮索の出來ぬ話でもあらう。同氏のまづこれ丈の勞も多させればならぬ。（四六二倍、圖版四葉附、二〇頁。非賣品）

○デツサン　第七號

紅繪の研究特輯號で、例の紅摺繪紅繪の區別問題で、仲田氏始め諸家の論、研究を併む。口繪數葉もよし。（五十錢、東京市京橋區南八丁堀、金泉社内）

風俗研究（八五）○江戸時代（六月）○江戸時代文化（七月）○葉研究（四五）○東京新誌（一ノ六）○日本道樂（六月）○紙魚（九）早稻田文學（明治文學自然主義前後號）○明治文化研究（六月）○文藝市場（同）○川柳觥鉾（同）○やなぎ樽研究（同）○歌舞伎（同）○キネマと文藝（創刊七月）○浮世繪版畫研究（二ノ六月）○國語さ國文學（七月）○國學院雜誌（六月）○日本文學講座（第七冊）

定價表
一冊　貳拾五錢　郵税貳錢
六冊分　壹圓四拾錢　郵税共
十二冊分　貳圓八拾錢　同

○郵券貳錢一割增の事
○照會に返信料添付の事

昭和二年六月二十八日印刷
昭和二年七月一日發行　（貳拾五錢）

名古屋市東區[illegible]町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目
印刷所　扶桑社

名古屋市東區東流[illegible]町一五七番
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

著者より　本冊の操の記文は、吉井氏の冊子から剽竊された結果である。唯、寄せ集めただけだが。（最近、某誌に小生執筆のもの、獨乙で出版するとかで、引ずられ氣味で、目下修補にかゝりつゝあります。何れ某誌でいひませう。（暑くなつた、諸兄の御壯健を祈る。（六月廿九日）

（表紙三より）といつたもので、凡て都（京都）の地名、産物等に材料を借りた、さうしてどこかに、複雑化し乍らもまだ單純な、原始的な臭のするものであります。次ぎ、八代將軍吉宗の時分、即ち享保十三年申正月の新板「新撰何で遊び」といふものは、當時又は、古代の謎を集めたもので、新出來のものもあれば昔から云傳つたものもあり、俗なものや、高尚なものや、材料は色々に面白く多く集りをるものですが、その中の、古代の謎として擧げてをるものには「切重れたる繪生鳥」、といふのが問で、答は、蟋蟀です。即ち、きり重れるで、きり／＼、繪の生をとるで、す、二つよつてきり／＼す。といつたものです。かうした單式謎は、古來のものでありまして、しかもこれは、前にも述べました文字の形の上から判斷を要する、即ち表面的の謎であります。同時に、詞の内容、意味からの單式謎も例として擧げてをります。例へば「雨か霰かさては木の葉か」、答は、桔梗きゝやうです。新樣式の二重謎はまだ原始的のせゐか、後世のやうな、意想外の處へ解を持つてゆくといつた處がありません。が上品といふ點に於て勝つてをります。例へば、一匁とかけて、毛氈ととく。心は、毛が千だからです。倘分銅とも解く、心は分が十であるからである、といつたものです。

この都に生れた謎、複雑化した二重謎が、文化學藝の東遷と共に江戸にも生れた、行はれた。しかし無論享保以後であります。明和安永の頃は、江戸でも、此の謎に關する出版物――さうした小册子が生れました。明和の頃は「謎かけぶし」といつた唄まで流行つたとあります。享和の頃は、端唄に作り、はやり唄として相當に流行したともいひます。それが更に江戸で大流行を來したのは、文化十一年十月に、有名なかの「春雪坊」、奥州二本松の生れで、坊主頭の某、號して春雪坊が、淺草で小屋をかけて、人を集せて、この謎をといて營業とした、その春雪坊が大人氣を博してからの事です。この時の春雪坊の小屋の樣子、人氣の樣は、色々な隨筆にも現れてゐますが、見物から錢十六文づゝを取り、若し解き得ないやうな難題を出したお客には、景品として傘、米俵、菓子などを出したとあります。此時、此の春雪坊の年配は、十八九だとも二十一二だともあります。この春雪坊の眞似手、同じやうな興行者が、向兩國にも現れましたが、迚も人氣は春雪坊に叶ひません。この春雪坊は、間もなく、一年ばかりで旅へ出たとありますが、一頃の人氣は大したもので、江戸中、この男の解いた面白い謎を覺えてきては、人々云ひ觸らしたとの事です。

この春雪坊の謎の例は、火のないこたつとかけて、片輪な娘と解く、心は、手の出してがないといつたものです。これは小屋がけの謎坊主でありますが、翌文化十二年正月、三笑亭可樂といふ噺家が寄席で此の謎々を入れました、と昨日迄百人位ゐのお客であつたのが、一時に二百人に殖ゑたとの事です。次の流行は、例の都々一を江戸で流行した江戸に於ける都々一中興の祖都々一坊扇歌は當時の寄席藝人、浮世節、どゞ一トッチリトンなどゝ看板をかけました、この男がまた、都々一の片手間に謎を解いたり、又は謎の難題を、直ちにどゞ一の節をつけて解いたりしました。大阪興行の時の事が「守貞漫稿」といふ本にありますが或人が天王寺の塔とかけた、と扇歌は、直ちに三味線をとつて（彼は自身で三味も彈いたのです。）天王寺の塔とかけては、ハヱ／＼虎屋の饅頭と解くわいな／＼。とうで五十じやないかいな」といふたとの事です。天王寺の塔と饅頭の十、五十は、五重の塔と錢の五十文とにかけたのです。當時、大阪名代の饅頭虎屋の饅頭は、一つが五文、十で五十文したからです。この扇歌の謎々の鼓吹が、刺戟を與へまして、當時江戸では、謎の流行再び盛んに、以後謎の本も、繪入で數十種刊行されるやうになりました。天保十六年春の「春の雪」といふ本は、浮世繪の美人畫を描いた英泉の編輯と彼の畫でありますが、その「春の雪」は、昔の春雪坊の解いた謎や、當時の謎を、集めたもので、その中には左の如きがあります、

年の市とかけて素人の角力ととく、心はかつたものよりまけた／＼が多い。

日本橋とかけて菖蒲刀と解く、心は人のきれる事がない。

黒繻子の帶とかけて日あたりの雪ととく、心はそら解がする。

これなどでありますが、此頃から時々猥褻なものが平氣でいはれるやうになりました。江戸の末期瓦版の「新版なぞづくし」といつた小册子は、殊にその程度のひどいもので、大抵お座へ出せないといつたものです。しかしこれにも、こんな言葉の遊戯に過ぎぬ僅かな物にも、時代の頽廢氣分が窺はれてゐて面白いとは思ひます。或はこゝらが、江戸ッ子趣味の精髓かも知れません。

なほ此外、謎のひろい意味の使用方面、即ち判じ物判じ繪の類やまた、謎々の本に就ても、まだ大阪方面の末期出版物に就てなどもありますが、まづ以上を以て大体の謎々の沿革として、その一般論として、今回のお話は打切ります

昭和二年七月二十八日印刷
昭和二年八月一日發行

參編　第十四冊（通編第五十九冊）

本文

尾崎久彌著

第十四冊（通編第五十九冊）

幕末の彌次と北八

――六月五日、名古屋放送局にて

幕末の彌次喜多くはしくいつたら、彌次郎兵衛と北八といふ私の話題は、例の寛政から天保へかけての戯作者十返舎一九のものした東海道中膝栗毛及びその續編續々編、所謂膝栗毛物の摸倣――眞似をした作物が、その以後に盛んに現れた、その中の代表作の、格別幕末氣分の著しい、元祖の一九の取扱つたのと大分隔たりが出來てきた、その末期膝栗毛物の二三から、此の彌次喜多の風變りな滑稽氣分を拔き出して、一つは當時の世相が、こんな作物にも現れてゐる、それを主題にし、一つは大衆的な興味を以て、變つたタイプ、作としての彌次喜多を紹介しようと思うたのです。ところが、いざとなつて、當時末期の此の膝栗毛の摸倣作をくはしく調べてみると迚も、お座には出せない、公衆に傳へるべく憚らればならぬやうないかゞはしいものが多い。それで殘念ながら、くはしい輪廓は、一寸控へればならぬ事となりました、それ程、末期本の全体の氣分が、頽廢と猥褻であり、一口にいへば無意識の裡に下卑たものになつてゐるのです。で、主題の幕末本の話は、大体の事にしておいて、附錄として、一般的には知られてゐない、これも膝栗毛物の一つで、特にこの名古屋には緣の深い、名古屋見物道中膝栗毛、一名四編の綴足といふ本について、述べませう。

まづ、元祖の一九の膝栗毛本の話から、及びその摸倣作の大体の數を述べてみませう。

一九が、彌次郎兵衛、喜多八といふ二人の人物を案出して、東海道中膝栗毛に始めて筆を起したのは、さうしてそれの出版を見たのは、享和二年の事です。以後殆ど毎年のやうに出て、文化七年にはすでに續膝栗毛の金毘羅道中膝栗毛、それから宮島、木曾街道と次第に移つて、文政二年には、善光寺道中となり、文政五年には、その十二編（續膝栗毛の）が出版せられました。正編の膝栗毛が、發端ともで十編十八冊、續膝栗毛（金毘羅道中以下）が、十二編で二十五冊、その外に江戸に於ける彌次と喜多の其後の滑稽を書いた續々膝栗毛の初編二編の四冊があります。さうして此の續々膝栗毛の生れた天保二年に、彼は死んでをります。又、この元祖一九が生存中に、此の膝栗毛の大當りにつれて自分もまた此の膝栗毛と同じやうな趣向で、彌次と喜多とは使ひませんが、外の名にして名所見物をさせた、滑稽的旅行小說とも名づくべき物の類は、彼自身の作で、「江の島土產」以下六種程あります。

此の元祖一九の膝栗毛の筋をそのまゝ受けて、一九の生存中に、また死後になされたこの一九膝栗毛本の書足しといつたものがあります。それが今晩話題にしようといふ名古屋道中膝栗毛の二册（これは、一九生存中の文化十一年です）や、續々膝栗毛の三編や、三代一九によつて成された「奥羽一覽道中膝栗毛」など、數種があります。また、この彌次喜多の直系ではないものゝ、一九を眞似て、當時一九の生存中又は死後に成されたその摸倣作は、これは版本自筆本を通じて、夥しい數ですが、版本だけでも、約三十種は僅かにあります。昨年の秋、當放送局から私が放送しました第二日の話、增井蘂齋といふ名古屋の作者が拵へた「津島土產」といふ滑稽本も、この類であります。これらのくはしい、凡て本の外題などの話は、一切略きますが、中には、意匠の奇拔な點に於て、元祖一九を負かすものがないでもありません。殊に、元祖一九の使用したこの彌次喜多の其後の物語、其後もずつと其後の、彌次と喜多が死んでから冥途での物語、これに材料を借りた弘化三・四年版の「膝栗毛余興、讀而未來記」といふ四册本、東里山人の作で草双紙風のものです――これなどは、僅かに珍作であります。彌次郎兵へが、冥土で「ゐんぐわばなし、うそつき彌次郎兵へ」と看板をかけて高座へ上り、因果話をするといつたふざけた趣向があります。

幕末の出版で、橫濱あたりの描寫もあつて、ちよい〳〵外國人なども出て來る「膝栗毛」もあります、それは、元祖一九の「東海道中膝栗毛」の作り替へともいふべきもので、その筋を運びながら、形は當時の幕末氣分のものにした、新しい材料も採り入れたといつたもので、岳亭春信といふ男の作で、芳幾の挿畫「東海道中、栗毛彌次馬」といふのがあります。これは文久元年初秋の序がありますから出版は其の翌年文久二年の春でありませう。此の本の輪廓をいひますと、元祖一九の作と、大体話の筋は似てゐますが、挿繪が每頁にあり、それが思ひ切つて幕末氣分です。殊に元祖一九の東海道中膝栗毛と違ふ點は、處々外國人や支那人が現れてきます。さうして宿（長五三一八）

めりやすの二つ

――きゞすの烏盡し替歌と、新内明烏「昨日の花は今日の夢云々」の本歌。

めりやすに就て、その二者に關する智識である。一は、自分からは、昨年洒落本「三幅對」の原稿（此本、拙編「洒落本集成」第二卷に所收）校合當時氣のついた事で、今それを纏めたに過ぎないが、一は、最近未見の一氏から明快なる說明を送られたのによる。共に錄して、（聊か玉石同架）江湖の一粲に供へる。

一、きゞす、に就てである。

きゞすは、めりやす豐年藏（寶曆七年）の續編かといはるゝ「歌撰集」（寶曆九年）に、その名と歌詞とを見受けるものである。

然るにこのきゞすは、僅かに樣を變へは變へたが、依然名曲化の如き觀の下に存在した。遠く文化三年に、即ち其の年刻成かと見らるゝ「東風流、初篇」（三馬序）にこれを見るのである。とにかく、此のきゞすは、寶曆から明和・安永・天明、此の天明頃、尙、最も口近きものとして、人々通士に鑑賞せられたものであらう。――知らるゝ如く、天明の「江戸生艶氣樺燒」（京傳）の中にも、當時口近いめりやすの一として、その名を擧げてゐるからでもある。――それが更に、此の文化にも傳はり榮えたものであらう。が更に面白い一例が此にある。それは、寶曆から天明の中間、即ち安永七年正月序、無學堂大醉著の洒落本（小本）「三幅對」の中にも、此の雛子がある。但し此の「三幅對」のは、その儘、又は若干の異同とは謂ひ難く、即ち全く歌詞の語呂を藉りて、形は似せ乍ら、これを烏盡しに作り替へたものである。元來「三幅對」は、通人がつた男の群と妓との對話、靑物盡しなどの手紙のやりとりに興味があり、終りのめりやす「きゞす」も、これを烏盡しにしやれてゐるものである。無論、此の安

永頃に、此の鳥づくしに變へられた「きゞす」が、一種の通型として流行したといふのではあるまい。即ち此の「三幅對」のみに現るゝ、「三幅對」作者の愚案戯作であらう。が、とにかく鳥づくしの「きゞす」として、「三幅對」の讀者には、本歌の「きゞす」と對照の興味もあらう。本歌のきゞすを知るもの、またそれが「三幅對」作者によつて、如何に鳥づくしに作り替へられたかを知るも、興味深からう。で今此の二者を對照してみる。尙、傍ら文化三年刻、「東風流」初篇に載つた「きゞす」も對校しておかう。歌撰集に載つた寶曆頃のきゞすとは、歌詞の末に僅少の異同を見受ける。寶曆と文化とでは、僅かながらも是だけの異同を生んだのである。が、「三幅對」ほどの別物の觀あるものではない。此のAの本歌、Bの鳥づくしの替歌、Cの文化三年「東風流」の物。此の三者を、共々對照してみよう。便宜上、Aを本位に、その右に、Cの異同を明らめ、別にBを物しよう。（尙、此の「歌撰集」所載の雉子の更に本歌かと思はるゝもの、即ち日本歌謡類聚上卷所收の「長唄の部」きゞすがある。幾分の異同はある。これによれば、此のきゞすは、上方系統、本來の長唄、又は上方唄にこれが本を求むるのであらうか。序でに、左記。日とあるは、此の本々歌（カ）との異同である。）

（日とあるは、「日本歌謡類聚」のもの。東とあるは、「東風流」のもの。——以外は、三者同一也。）

○き　ゞ　す

三下り〽きゞすなく野べの若くさつみ捨られて 合 人のよめなといつかさてこがれこがるゝ 合 くがいの（コレ文東ニ無之、日ハアリ。）（コゝ東、合）（日及ビ東、の）（東、てノ下ニかアリ、日ハナシ）（日ダケ、これのう男トアリ）（日ダケの蝶はトアリ）

舟のよるべ定めぬ身はかげろふにあづまが顔も見忘れてうつゝないぞやこれなふほんにあれむしさへもつがひ離れぬあげはのてふ我々とても二人づれ粋などうしの中々に春にもそだつ花さそふ菜種は蝶の花しらず蝶はなたねのあちしらずしらずしられぬ中ならばうかれまい物さりとてはそなたのせわになりふりも我身のすへのはなれごまながひ夜すがらひきしめてむかしがたりとあすか川（徳川文藝類聚本歌撰集に據る。）

（東、コゝ合）（東ダケ、むいにはにぬ）（日ダケ、の）

日本には加茂川のしほ作、島野勘七若村藤四郎調とあり。）

○雛　子

三下り〽雛子啼野邊の若艸雀鷄すてられて　合鳩の雛と鶍鴝鷺鵥こがるゝ　合孔雀の羽のよるべ雀ぬ身ハかげろふにあづまが鴨も鷄て鶉ないぞよこれのふほんにあれ鴛さへも燕はなれぬあげ羽の鳥鷲〳〵さても鵜たりづれ水鷄ごふしの鷹〳〵に春にもそだつ花さそふ菜種は矮鷄の花しらず鳥は菜種のあじしらずしらず鴫れぬ中なれば鶚れまいものさりとてはそなたの鶸になりふりも鶫のすゑのはなれごま長い山雀鴻てむかし鷗とあすが川

といふので、寔に苦心慘澹、さりとてふざけたものではあるまいか。

次に倚、一のめりやす、それは、新内明烏の有名な文句、（有名でないかも知れないが、私の大好きな、秀絶と思はるゝ文句）「昨日の花は今日の夢」云々の本歌が、めりやすにあり、それが、「めりやす豊年藏」に現れた「いもせ川」だといふのである。「めりやす豊年藏」は、未見。高野斑山氏も、德川文藝類聚第十俗曲には、未見として、めりやす校本としては、これなきを憾み、その續編とも見るべき「歌撰集」より以後を載せてゐられる。自分も無論未見であるが、幸はひ、原本所藏家の佐藤鳳二氏よりの指示によつて、その中の「いもせ川」が、この少くとも新内の明烏、「昨日の花」あたりのウタの本であること疑ひなく、（單に、昨日の花は今日の夢のみではないのである、これ以下のウタと、此のいもせ川の歌詞とを對照せられよ。以下凡てその本と末、母と子たる事分明であらう。）人口に膾炙、少くとも吾人の口に慣れた新内の名文句が、彼を巧みに借りたことも了知せられるであらう。に就て、右の佐藤氏の書簡の一節を掲げる。

（前略）それから高著江戸軟派雜考中「昨日の花は今日の夢」は、豫てより特に面白く拜見しました。これに就て御發行當時からお知らせしたいと考へてゐた事がありましたが、當時北海道へ行く事になり、少しばかりの藏書も置ばなしに出かけましたので、其後暫く忘れて居りました。昨今歸つて來て藏書を整理して居る間に、又此の「昨日の花は今日の夢」が思ひ浮んで來ましたので、おくればせながら、氣づいた点をお知らせいたします。貴說に此の「昨日の花は今日の夢」の文句は、「恐らく明和安永年間、或はそれ以前にすでに存在したものであらう」とせられた、今この名文句が、明和を遡る事七年即ち寶曆七年正月刊行の女里（安）彌壽豐年藏に既に見えて居る事であります。こゝで私藏の女里安壽豐年藏の刊行年代に疑問を抱いて居りますから、一寸記して置きます。

高野博士著日本歌謠史九五一頁に、「女里安壽豐年藏、めりやすは寶曆七年正月、始めて普通の江戸長唄と共に、女里安壽豐年藏と題して、次の七十五首を收めて、刊行された」とあつて、次に七十五首の目次が揭げられて居ります。所が私藏のものは、さよ嵐の一首が脫落してゐます、而も奥付を佚して居りますから、刊行年代は不明ですが、自ら兩者の間に刊行年代の相違がある樣に思はれます。この書に就ては、色々他の本も檢索して見ましたが、刊行年代の記してあるものを見出しません。前述の明和を遡ること七年としたのは、高野博士の歌謠史に依つたものであります。

さて此の七十四首の内の　妹背川（勿論、歌謠史にもあり）こそ、この「昨日の花は今日の夢」の文句を取入れた最初のものではないでせうか。左に全文を揭げて、御參考に供へませう。

○いもせ川

きのふの花はけふのゆめいまはわが身につまされてぎりといふじはぜひもなやつとめする身のまゝ
な（す）らぬわかれとなればいまさらにいなせともなき（い）はなれぎはいとし（好いた男に）おとこにわしやいのちでもなん

のおしかろ(かろぞ)露の身のきへばうらみもなきものをなんぼたづねてもかげ清がゆくゑ水のそこまであこやはしらぬどふでもしげさますいじやもの　カヘシ　のちのあしたの文ばかりつもるおもひのいもせがわ。

御承知の通り、豊年藏に所收のものには、上方歌を其儘用ゐたものが尠くありません。この妹背川も上方歌(新千代の壽、天保十三寅年十月增補)に全一の名前が見えて居りますが、歌詞は全く相違して居ります。

女里安壽豊年藏に收められた七十四首の內、前半の長歌を除き、後半の短歌の中には、言々味ふべき秀句が極めて多く、昨日の花は今日の夢の名句も、爰に收められてゐることは、餘りに偶然ではないやうに思はれます。

以上、ほんの氣が付いたまゝを述べさせて頂きました。倘、貴說(雜考四二七頁)に、『此の唄、當時の流行唄であつたらうと思はれる。或はやはり「めりやす」などの勃興と殆んど時期を同じうした、恐らく此の明和前後の詞曲であらうか』とせられたのには、誠に御卓見の程敬服致しました。

以上で佐藤氏の書簡の要領は、盡きてゐる。成程、此のめりやす「妹背川」からに違ひない。此の妹背川が、上方唄か否かは今知るよしもない、が景清と阿古屋、重忠とから見て、さうではないかと思ふ。景清が時次郎、阿古屋が浦里、重忠は、稍型を違へて、(但し浦里が、お情あるお詞なれど、と山名屋の亭主をいうてゐる所からは、似てゐる。)山名屋となつた。新内の作者は、(恐らく若狹掾ではあるまい)境遇の似た歌詞を應用し、更に纏綿たる情緒に生かしたもので、上方化して江戸、吉原情調となつたのである。琴責が雪責、責は責で同一である。

佐藤氏の最後の、小生に對する推奨の詞は當らない。自分のは、まぐれ當りのさくずりである。で

あらうかが功を奏したのである。尚、佐藤氏は、途中で、御承知でもあらうがと謙してゐられるが、私はまだ、めりやす豐年藏なるもの丶細内容を知らない。從つてそれが多く上方唄のものかも、いづれ機を見て、同氏の原本謄寫の便を得て、公表の價あらば、その全斑を傳へ、且つその折再び謂ふ事もあらう。

なほ、此の妹背川、誠に、明烏の作者が、如何に巧みに此のめりやすを活用したかは、右の妹背川の詞句に附した私の圏點の跡を辿られたら、自ら明らかであらう。右傍の括弧内に記したものは、明烏との相違點で、他はその儘である。寔に、佐藤氏の指摘あつて、始めて此の明文句の出處を明らかにし得たのである。新内歌詞考究上の一ヒントでなくて、何でこれがあらう。

それにしても、此の明烏の新内作成當時、（今日こそ文献埋沒、全く何人にも氣づかれなかつたもの丶）此の種めりやすの名作物が、妓樓に於て行はれ、また端的な挑情歌詞として、遊妓嫖客の心膽をして慄へしめたものであらう。恰も新内それ自躰が短かく壓搾されたもの丶如くに。

偖、余言なほ一。佐藤氏の手紙の中に現れた、他の一妹背川（新千代の壽に所載といふもの）と同一か否かは不詳であるが、尚一、妹背川といふのはある。それは、日本歌謠類聚（上巻）にもあるもので（その長唄の部。四六二頁）水木辰之助作、山本喜市調、佳川撿校改調といふもの、即ち本長唄（カ）の一「口説は宵の夢なれや……」云々の唄がある。（例の、三勝半七酒屋の段の、お園が三勝の手紙を讀む件の、隣りから聞ゐて來る唄は、これであらう。）

なほ、佐藤氏は、豐年藏の刊行年代を實曆七なりや否やに、若干の疑問を藏してゐられるやうであるが、それは、やはり實曆七年のものかと思へる。但しめりやす豐年藏の原本を見ないから、大それた事はいへない、が、その續編の「歌撰集」の叙に、

去る丑の歳新版めりやす豐年藏と題して、長歌座がくり新古の書キ本を撰集して見やすからむがため假名書六行にして……。

云々とある、その丑の歳は、丁丑で、實曆七年ではあるまいかといふのである。

膝栗毛物のいろ〳〵（續々）

前稿及び前々稿と重複するもの、または新出のものである。重複のものは、重複ではあつても、前稿には、單に書目だけであつて、全く概念を缺いたものである。それを今、原本の新渡によつて、（栗毛彌次馬は、初二の摘本、新入手。）その概念を明らかにしようといふのである。

まづ、その書目を擧げる。年代順である。（中、書名の右に、黑圈を打つたもの、前稿・前々稿に、その書名すらなかつたものである。）

○東國滑稽羽栗毛 初編　宇多樂庵嬉丸　文化四年春
○滑稽有馬紀行 初編　平安 大根土成　文政十年春
○膝栗毛余興讀而未來記初編　東里山人　弘化三年春
○同　同　二編　仝　弘化四年春

○甲州道中膝栗毛　鈍亭魯文　安政四年作
○彌次喜多旅日記　岳亭春信　文久元年春カ
○栗毛彌次馬初編・二編　仝　文久二年春カ
○昇平鼓腹三府膝栗毛初編・二編・三編　松村春輔　明治十四年六月

以下其の解題である。

○東國滑稽羽栗毛　中本一冊

狂蝶子文應の序があり、それに文化第四丁卯のとし孟春とある。「此の文應は、東都の作家で、文化頃洒落本の作もあり、現に書繫禿筆といつた、人情本形式ではあるが、とにかく洒落本作もある男である。（其他に文化九年版、「淨瑠璃姫物語」（これは大阪版であらう」）文化十一年版「五大力後日物語」といつた讀本もある。）文應は、狂歌も詠んだとみえて、現に羽栗毛の口繪、北溪書の淺草觀音の遠景の賛に、「うめわかがゆかりにあらぬ觀音も江戸むらさきの雲の上人　文應」とある。」

さて序の次、目次であるが、此の目次の切り方、頗る洒落本を思はせる。即ち、此の當時洒落本●中本（滑稽本）が頗る接近してゐたことを思はせるものである。

目次、左の如し。

以下、本文。扨、此の著者の宇多樂菴嬉丸、これも、別に洒落本作のある洒落本作家で、出自は不詳であるが、とにかく、文化三年版の「夜慶話」――此の羽栗毛より前年の作。また曩には、享和元年の作「傾廓比翼紫」の二作がある男である。成程、そのせゐか、此本、頗る洒落本臭味の多き中本である。略筋は、

第一回、怠惰者の田助、梅ゲ枝の手水鉢の故事に倣つて、淺草觀音に詣で、手水鉢から金が生れぬかと柄杓で敲く。と金にはあらで、ひら〳〵虚空から舞ひ下りるもの、何かと見ると、鳩の羽である、はねとかねとは飛んだ茶番だと、觀音樣を怨んでゐる處へ、觀音の御告があつて、その羽で羽衣を拵らへ、飛行なせ、面白き事あらうといふ。で先何にもせよ觀音の敎にまかせん物をと、こゝに三枚かしこに五枚、拾ひ集めて引括り、わが家をさしてぞ歸りたる、といふのである。

第二回は、さて田助、羽衣の製作にハタと當惑したが、幸はひ隣り裏の「雷門の内へ出る、はねたり飛んだりかはつたりの親父に賴む」が上分別と、これに賴み込む。こゝに一寸、一九の膝栗毛との

比較話がある。飛んだり跳ねたりの親爺の言葉である。

「おや父　是〳〵もう皆まで聞に及ばず、夫は何よりの思ひ付サ。近年一九が膝栗の大當り、是ハ又其上をこす羽栗毛、おまへの御あんじきめう〳〵（トむしやうにほめられ）」

云々とある。さて「かの羽衣に連尺をつけ、羽根のあがきは、紐にて使ふやうに拵へ上げ」、早速試飛行、そのお蔭で、親爺に仕拂ふ駄賃もごまかしてしまつた。第三回、田助は、飛び續けたが、余つ程來たらうと松ヶ枝にチョイと留つてみたが、それがまだ待乳山と知れる。こんな飛行のぬるさでは、諸國飛行は迚も覺束ないと、悲觀。それに腹は減つてきた。此のあと、屋臺店の婆さんの團子をさらつてみると、間違へて看板の土の團子。下界では大騷動、田助は便通を催してきたが、マヽよと尻を捲つて、空での心まかせ。鳥類に糞をかけられると、運が直るといふ。通りかゝつた慾深爺、「ハテ何だか、今の鳥はとんだくさい糞だ、つねの鳥より匂ひが酷い〳〵。其かはり又運も多からうかしらん（トいひながら）欲ざうしさに臭さをこらへ、糞をもふかずに行くのもをかし。」田助、漸く秋葉の杜へ來た。腹はまだ滿ちない。堂の緣の下へ這こんで、鼻高大先生の御出を、今やおそしとまつ所に――以下の描寫、頗る達者、空想と實感とを綯ひ混ぜて、且つ名文だと思はれる。見らるゝ如く、洒落本臭味の烈しいものである。こゝの件、要文を擧げる。

いづくともなく大風さつと吹來る、「すはや先生はお出ならん（トこわ〴〵やうすをうかゞへば）御堂の内には、あまたの先生たちのお聲にて何やらんおはなしなさるゝ故、緣の下より、そろり〳〵とはひ出して聞所に、「一人の先生（すこし黄いろなる御こゑにて）なんと夕邊の公が世界はどうだの。「今一人ほんにあいつア大間違よ。仲の町の樣子とは格別さ（なぞといふのをきゝて）「田助（おもふやう）ハテ不思議な事を聞物かな。たゞしは廓中の女郎の天に背きし者ありて、先生がたのお出ありて、おたゞしなされしか。夫にしても、お聲からおはなしの樣子、さかく此方ごものやうすなり。何にしろかう隱れて居てははじまらず、思ひ切つてお目

見へをしやうト様の下からはひ出してこしながめて（中略）
「田助も少は心おち付、まづ先生方のやうすをながむれば、こはいかに、天狗さまのやうなれども御形りは皆々當時流行の短羽織に、ふとき紐をむねのあたりで、引つめてむすんだる御すがた故、
「田助まず〱心おち付辨ざつなさだめてハイ別な事でも御座りません、私は淺草觀世音の敎によりまして、羽衣をこしらへまして、此お山までは參りました物の、甚飛にくう御座りますゆゑ、何とぞあなたさまがたのおあはれみ御世話を持まして、モチット早う自由に飛ばれます御傳授を、サヽヽどうぞおさづけ下されませうならばなごゝれがひかくれば惣座中殘らず御笑ひにて、「一人の先生扨々おめへもまだ正直なもんだの。そんなに苦勞にする理窟にもあたるめへ。どうするもんだ。隨分其自由に飛所の傳授さづけてあげやせうがすべて凡俗をはなれる迄に、夜三度晝三度の行が御座りやす。それをどうだといふに先常に山屋あたりの名酒を取よせておきの、ソレなんぞちよつぴらとした物か、又は近所だから武藏やあたりで吞かけの、とゝつまる所が北國の魔界サ。其魔界の大門へ足をいれる所がむづかしヽサ。サアかの七軒のあたりで、むしやうに呼こまれサ、どうもならねへの、大門に入りて事ごとに問ふとやら、ソレ論語よみの一物おや父せへいさヽか洒落やしたアな、マア〱しづかに聞ねへト一ぷく〱はたきながらサアそこで馴染のよしみのありがた迷わく、むげにもならずで、チヨツト寄ると、かヽアがなんだのかだのといやみをいふから、腰をかける。するト煙草をつけて出すのを吞で居ると、天の岩戸ヂやアねへが、神どもが直に見付てのがしやせん、むりに押付買サ。仕方なしに坐をきめて見ると、サア段々と聞つたへて、同勢がまんとふへやすから、そこを切りぬけの大げへにして、歸なんいざトいふと、娘やかヽアやみんなが、モシこの間のも、あれを打すてヽお置はあんまりむごいの、おいたはしいの、アレヂヤアおかれません、罪でごぜへますの、何のとむしやうにすヽめるから、どうもうるせへけれど、仕方なしにかの高樓へ上りやすのさ、勿論其大勢どももドヤ〱ト

おしかけるト、見せで見付るのがありやア廊下であうのがあり、かの傾々がとり／＼に、ヲヤよくお出なんしたネ、かわいさうにさうしなんしたがようざんす、宗て外のお樂しみに義理合もわるうざんせうが、あんなに思つて居なんす物を、せめて此廓へお出なんしたお歸りがけにでも、時々はおよんなんして、おいらんにも私どもにも、うれしがらしておくんなんしなぞといふから、それをなんとかかとか、ゑゝ加げんにまじくなつて、座敷へ行つた所が、しらせにやつてからあんまりあひがあつたによつて、カノ傾のやうすがちつと思はせぶりにふくれの形よ。そんなら又直に新か自分でも迎ひに出さうなもんだと、註を入れて見た所が、定めし自ぶんは飛立つやうにおもふだらうが、さうしねへでせへ、内中で、わつちが行と、なんだのかだのとなぶられるから、はたをはゞて居るだらうと、こつちが推量してやりさ。サアそれからが大さわぎよ、みんなはむきに色々と愛敬をとりたがつて、いやもう氣のぼせがしさうさ。それから程よくしてみんなけへして仕まつて、寢所を定めやす。是からが其行をつむとつまぬにあつて思ひ／＼の名言をうまくいはうといふやつさ。まづ一寸かう聞くと何のざうさもねへやうだが、此修行がたりやせんとどうも自由に飛ぶ事が出來やせんのさ（トロへつばなためて鼻たか／＼さのおはなしなり）○定めて此先生たちも、下界にては高慢のあまりに此お仲間へさそひ入れられたると覺ゆ。

ちよつと挿話といつた形である。

扨、然し此の天狗共では、役立たず。

第四回、立去つた通人天狗共の食物のお餘りを、ガッ／＼食つてゐると、悠々然たる一個の先生が現れる。で此の先生から、早飛行の呪文を授ける。（其の呪文、トンピヒイトロロウヤントヘトヘヨ、スマンギソハカ、といつた、ふざけた物である。）で以後、田助、しせんと隱身の術も會得と見えて、

人間どもにその姿を見られぬやうになつた。さて、日本ならぬ女人崇拜の島らしい處へ來たとあるが其の實は、深川を斥してゐるらしい。傾城を子供衆といふなど然りである。黑き小石やうなものを籠に入れて賣歩くとあるのは、蜆賣でもあらうか。第五回、田助、すつかりいゝ氣分で、一個の古石塲へ來、仙女に御目見え、そのお氣に入つて、閨中に入る、とで終つてゐる。此の古石塲は、無論深川の一區劃たる事、無論である。それを外國めかして書いてゐるのが、洒落である。

右、膝栗毛の摸擬といふよりも、風流志道軒傳（風來。寶曆十三年）和莊兵衞（遊谷子、安永三年）などの亞流といふべきが、がそれらよりは、寧ろ洒落本的だともいひ得られる。とにかく、膝栗毛物の中では、作者の御本人は、自ら膝栗毛の摸擬のやう謂うてゐるが、とは全く受取れぬ程の、異色ある物だと思ふ。（但し、馬琴の「夢想兵衞胡蝶物語」よりは先である。夢想兵衞は、これより三年目の文化六年、その前編を生んでゐる。）〔按、此の羽栗毛、桃陣房太郎藏 藏版）と奥附にある。〕

○滑稽有馬紀行　初編三冊

半紙本三冊（但し中本仕立のものも、曾て見たり。每丁輪廓は稍、半紙本に比しては小さければ、兩樣に製本可能也。半紙本、初版なる如し。）三冊とはあるが、上中下ではない。上が、二冊に製本せられ、結局卷上卷下の二卷である。表紙は、黃で、墨で有馬筆を五本組ませてゐる。題簽は、白、黃摺。凡例の第一に曰ふ「此書は、すべて有馬道中より入湯男女の客、又大湯女小湯女をはじめ、旅舍の奴婢に至るまで其情を穿て新しき洒落をあつむ」とある通りのものである。主人公は、これは、膝栗毛の本筋を追うて、都五條邊りに住居する惠來屋太郎助と、東國方より出たる食客才六との二人である。挿繪は、主に白瑛の畫。作者は、大根土成といふが、無論變名であらう。平安の士たることは、自ら標致するによつて知られる。別號、しやれて無着舍主人ともいうたらしい。此の名で、序をものし、又篇中の挿繪に、此の名で賛（狂歌）をものしてゐる。恐らく土成、無着舍、同人であらう。所々對話の終りに、狂歌を挿める事も、膝栗毛の本格通り。上の前半、京よりの道中、後

半、有馬。下は入湯記事である。描寫、相當に方言を混へ、實感多きものであらうと思はれる。合幕、男女入込湯之圖などは、下卷にある。版元は、跋にある文暉堂であらう。但し奥附には、京の本屋宗七、同山城屋佐兵衞、江戸大阪屋茂吉、尾州美濃屋伊六、大阪河内屋長兵衞、堺住吉屋彌兵衞の合梓形式である。上卷の見返しの有馬湯女之圖（白瑛畫）の上欄説明を抜いておかう。有馬湯女の懷古資料である。

大湯女　一名かゝ湯女

年四十才斗か五十四五才までかゝ湯女と呼ぶ

小湯女　一名娘湯女

亦名おふじお光の類、其宿の前々か通名を受つぐ年十二三才より廿二三才まで、但し十二三才の湯女にても宿を取歯にかねをつけ、帶を前にてむすぶ、酒の席に呼ば有馬節をうたふて太鼓を打舞ふ、其さま古雅にして興をますなり。

因みに、此本三冊、本文は墨の一版。彩色なし。

○膝栗毛余興讀而未來記　初編・二編

東里山人（鼻山人）の著で、玉蘭齋貞秀の畫。東里山人としては、晩年の作である。貞秀は、國貞門下の新進である。板元、錦森堂（森屋治郎兵衞）。中本、合卷風で、各編上下の二冊づゝ。作の動機は作者の序にある如きものであらう。

（前略）されば浮世に滑稽を拾ひし膝栗毛の彌次郎兵衞北八も鶴龜の齢を貪ること能はず終に黄泉の旅に亦々可笑味を盡せしと朝比奈が地獄巡の記行に誌せしを獨りともし火のもとに寫しさりて夜をふかしぎの種本となし今年書肆錦森堂の主人へ贈りて販さすること爾也。

弘化三丙午初春　東里山人識 印

膝栗毛の本格（地方の見聞）からは離れた、非實感も甚しいものであるが、また趣向に窮したら、當

然此の冥途の主材も生れねばならぬ筈だ。丁度、一九・二代一九の「續々膝栗毛」を承けて、その拾遺御両人の緣を結んだものとしては、適當で、生るべくして生れた思ひ付であらう。處が、此の弘化になつて、東里山人によつて爲されるまで、天保年間に、いかな他の多くの滑稽本作者も、此の趣向を思ひ付かなかつたのが不思議である。

彌次が先へ死んで、北八、焦れて追死の形。冥土で出會なす。で豫定の如く、冥土の膝栗毛と來たのである。茶店へ寄る。そこでは、角の生えた顔は美しい茶店娘が給仕してくれる。物は、まくらだんご、百ヶ日牡丹餅などが、名物だといふのである。三途の渡、奪衣婆の住家など。婆に、着物を捧げて、「こゝがほんのはだかの せきといふのだ、」と洒落てゐる。で、腹掛と股引だけになる。途中出會つた大鬼と、極樂行の賄賂として、「ときに親分に一ぺい上げてへもんだが、そこらに酒屋はねへか」などゝあつて、地獄の内田屋へより、うまい物のありたけと酒を飲みかはす。鬼がふら／＼に醉つて、歸りは、北八が金棒を擔ぎ、浮れた鬼を彌次が介抱する始末。やう／＼鬼の住處へ連れ戻つたが、此様に醉つては亡者の番人もつとまらぬといふのを、彌次と北が、これになり代り、番人を勤める。かけがへの虎褌を締め、借り物の金棒を突き、角は、鰹節か薩摩芋でごまかす。とんだ茶番だといふのである。と通りかゝつた大風呂敷を背負うた婆さん、「ソラ三途川の板の間稼ぎか、晝鳶」と騒ぐと、娑婆から念佛を一杯背負つてきたといふ。「年寄には重たくて、いかう困りますから、お前方にわけて上げませう。」婆の言葉に、背負つてきた念佛を三つ割にし、婆の通行を許す。アト、鬼右衛門（例の醉つた鬼）の醒めるのを待つて、念佛を婆から分捕つたとはいはず、鬼に案内されて、閻魔の廳へ行く。ナントいゝ智恵じやアねへかといふのである。色々あつたが、地獄の沙汰も酒次第で、鬼右衛門の執成で、業の秤にかけられ、そのあと、手形を貰つて、一百三十六地獄の見物ときまつた。血の池へ來て、此のまゝ捨てゝおくは勿体ないと、猩々緋染上所といふ看板を上げて、五六日逗留、諸處の注

文があり儲ける。次ぎ、くらやみ地獄、こゝでは北八機轉をきかして、餓鬼道から飯の椀を取り來つて、提灯の代りにする。こゝでは、因果話　うそつき彌次郎兵への看板をかけて興行する。八寒地獄では、氷餅氷豆腐、氷蒟蒻の製造を思ひたつ。焦熱地獄では、干瓢雷干の類の製造にかゝる。かくて後、焦熱からの思ひ付で、此の大熱を追拂ふため、彌次はかねて醫者心もあつたから、「もし間違つた所がどうで死んだものなればあぶなげもなし」と大膽になつて、つひには地獄の藪醫者と呼ばれるやうになる。など錢儲けに腐心、慾ばるも、十萬億土といふ極樂の道中のためだと胡麻化す。

以上などが初編の上下である。

次ぎ、大王の勅命で、五道の冥官より六道輪廻の有樣を見すべしとの沙汰で、獄卒共に誘はれて諸處見物。此篇、稍趣向を變へて、因果を說き、それ〴〵の地獄に、娑婆の樣を却つて述べてゐる。ひつてん地獄は、ひつてん（窮迫）の娑婆の樣を描くといつたもの。さうして、終りにひつてん地獄も、「やつぱりその憂目を見ることかくの如し」といふのである。ひつてん地獄、餓鬼地獄、畜生道、修羅道、人界、これなどが、凡て人間娑婆の事にして、其樣を御兩人（彌次と北）が見る事にしてゐる。從つて以下、彌次と北との直接の行爲に、關係はないのである。二編下は、天道の見物を終つて、一休み。次は鬼と名のつく物の鬼の說明に託して、鬼やらひ、姑の鬼、正月三日の目黑不動尊愛宕大權現に行はるゝ鬼の神事などの話に續けてゐる。

〔「毎年正月三日目黑不動尊愛宕大權現に鬼の神事といふ事あり。その出たち猛しき鬼の姿にて錦の陣羽織を着し、小手脛當に身を固め、大俎板の上にて生大根を無二無三に切り散らし、獅子奮迅の勢にて、不動尊へ參詣なし、見物の中若き婦人を見たてゝ抱きつかれる時は、必ずその年身持になると恐をなして東西へはしる、愛宕さんもこれに似たる祭なり」。〕

次ぎ子供の子を捕ろ、などにかけ、次ぎ、六道地獄の朱引の外なる、のつぺらぽん地獄の說明を鬼から承る。すこたん地獄、虫けら地獄、魔道地獄などの說明がある。但し凡て娑婆界を映したもの、

即ち眞人間姿に作爲、描破してゐる。最後の丁は、両人は何處へやらけし飛んで、「さてこれ迄の地獄の有樣は娑婆界にさのみ異ることなし。これ地獄遠きにあらずの本文なり云々。この地獄の苦みを見るにつけても、善根功德の菩提心を起すべし。さすればいかばかりかめでたし〳〵〳〵。」さて、五道冥官そのため口上さやう引といふのである。此の口上によれば、三編四編續刊のやうであるが、恐らく此の二編のまゝであらう。

表紙は、錦繪摺。初編は、上下で續繪をなし、女客と娘の馬子、富士の遠見。二編は、同じく上下の續き、高輪あたりの茶店の景、右は親方と供、左は茶屋女。

○甲州道中膝栗毛　中本一冊。

魯文の「日光道中膝栗毛」（前、補遺に說けるもの）と類本。身延參詣と角書がある。芳盛の畫で、合巻の体裁、二十五丁一冊である。が、口序には、膝栗毛街道茶漬とある。「（前略）成田詣大山詣に引續甲州道中より身延參詣の巻迄編述仕候（中略）古人一九の風味を假地口秀句の小書等成丈美味大安賣仕候間（下略）」とある。一九本格の膝栗毛といふよりは、内容体裁、「金草鞋」を摸したらしく見える。每半丁づゝ、宿の名があつて、両人（彌次と北八）の對話など。繪もそれに伴つてゐる。江戸から、「新宿」、「高井戸」など順路を經て身延山に到り、歸宅「住家」に至つて終つてゐるのである。挿繪稚拙、末期赤艶本の如きもの、現にしかる卑陋なる描寫も、チョイ〳〵見受ける。此本、安政四丁巳初春發兌と口序にある。無論、如何なる名にありても、新修日本小說年表などに洩れてゐる所のものである。（尙、此類魯文の作に、此の「甲州」の口序にも謂ふが如く、成田、大山等があらうが、但し未見である。「日光」の類本あると、前に謂へるが如しである。）

――未完――

地方色の描寫（下）

「さればこそ後家さまからの進物なら、精分のつくやうにと、牛房のみそづけか、いや〳〵露の染ぬところを見ては、豆のはいつた金平糖か、砂糖にしては、かるいやうだといへば、云々。」

（幕が明きかゝつても、此の詮索に、すつたもんだこつた返してゐるのである。）

「氣のみじかき役者が、もう幕があく、精のつきるに、ゑいかげんにしておけ、おれはなによりかその曲物の中が早く見たいと、いひさまひつたくりて、むぞうさに蓋おしあけてびつくりし、コリヤなんじやとつまみて引いだすは、蕎麥切色の越中ふんどし、延の紙に、女の筆にて、書そへあるをよみて見れば、外の詞はなくして、ゆふし御わすれと見へ、此しなふさんの下に御ざ候まゝ、持せ進じ候とも人めをはゞかり、かやうにいたし上り〳〵、との添状、コリヤならぬハと、むしろばりの藥屋のうごくほど大わらひとぞなりにける。此しばゐ、はじめのほどは、さのみ評判もなかりしが、豊作年にて、村〳〵に錢金のまはりよく、しだいに大入大はんじやうして、勸進元の金儲け、たからの山をなして千秋樂をうたひ、万歳をさなへて、榮えゆくこそ久しけれ」

といふので、終つてゐる。文壽堂（丸屋文右衛門）の板である。此の越中褌との落は、一九らしい巫山戯氣分が出てゐて、彼常套の挿話のやうに思へる。

田舎芝居（万象亭）の亞流としては、右等の如きものであらう。作者は、凡て都會又は都會住居の作者ではあるが、書かれてゐる事は、大抵實感を以て爲されたらしい。或は、個々の實感・見聞が、稿を織り成して、第二の新しき實感・見聞として、彼らの頭腦に盛り上つたものもあらう。一九などは、これが多かつたやうに思へる。直感と想像、それを彼の個々の實感にこね廻して、到る處隅々まで實

感らしく仕上げたものである。が、彼（一九）とても、壯年及び大家となりかゝつた以後も、時をり旅を續けたらしい。旅行趣味は多かつたらう。寧ろ、地方色描寫、又は反都會描寫を以て賣出した彼の事であるから、知人の編纂者にこれを聞いたり、また自己實際踏査の迹を綜合したりして、以て自己の聲名を愈々繋ぐに腐心したらう。彼の膝栗毛類も、半ばは彼の實感、半ばは知友他人からの傳聞、それを尤もらしく纏めたものであらう。現に、膝栗毛の系統なる「金草鞋」には、處々、彼の知友から聞き傳へて、それを冊子に纏めた、第一實感でない事が謝まつて書かれてゐるものがある。此の正直さが、彼の寔の樂屋であつたらう。が、とにかくまだ／＼一九などは、比較的、尤もらしい地方色描寫の作家（彼の業蹟の全部は、かうばかりではないが。）であるといへると思ふ。

「旅芝居田舍正本」の作者正二や、「見通部戲場」の作者蘭鷄なども、一は御職掌柄、旅興行の途次知つた實感であらうし、一は、外題にも眞を標榜してゐる通り、實感に即いての見書聞書であらう。がとにかく、此の田舍芝居の描寫、その好例は、万象亭などより出でたとしても、一面三馬などの都會文學に對抗して、田舍文學、――時人のいかものを喰ひたがる趣味に打つてつけといつた迎合臭味もあらうが、とにかく彼等作家の勞は認めねばならぬ。殊に、これを田舍芝居と局限しないならば、無論地方色描寫の筆頭は、先輩も四五見受けるが、とにかく初代一九の、それであらう。

○

次ぎ、附錄に、鄙遊里本に及ぶ。無論浮世艸紙の三ヶ津以外の遊里描寫のもの、西鶴本、八文字屋本などに、一局部として、全篇として取扱はれたもの樣々を有するが、これらは、今姑らく略く。今は、江戸晩期、洒落本以後の、一層寫實的傾向を負び來た頃の物に就てのみいひたい。

まづその一作として擧げるものは、東里山人作の「驛路の鈴」である。

「驛路之鈴」は、無論昔の（寛永六年、京版）同名のもの（半紙本五冊、東海道の案内記。大曾根佐兵衛著。）に題名を似せたものであるが、

内容に於ては、全く別物で、鄙遊里一處の描寫である。田舍通言と角書のあるもの、何處と明らさまには出てゐないが、九州の或る邊土、その遊里だと本文中から窺はれる。中本一冊、勝川春扇の挿畫であり、文政六年版である。序に曰く、

前に膝栗毛あり、後に舊観貼(帖)あり、いづれか花のさく意を尋、いづれか雪の面白き、趣向を著て、普く世界の滑稽、此に盡ぬ故に描き筆の不及ことは承知して元相(沅湘)日夜東に流行洒落を拾ひ、邊鄙の花柳園を穿、客と娼妓の可咲身、言妙なる滑稽を集て、驛路之鈴と題號たれども、(云々)

即ち、膝栗毛などの追隨のやうには思へる。が彼の如き道中小説體のものではなく、全く鄙の雰圍氣描破を目的としたもので、唯夫等にヒントを得たといふ點はあらう。さりとて膝栗毛の都會者の田舍見物、舊観帖(鬼武の作)の田舍者の都會見物とは品變り、田舍を田舍として描いたらしいものである。それが、江戸生れ。江戸在住の東里山人と如何ばかりの交渉があるか、如何程か其の實感程度であるかは不明であるが。目次は、頗る洒落本式に、(内容も然りである。)

前話　宵の光景は　蚤虱馬の尿する枕もと。後談　東天光の眺望は　道端の木樁は馬に喰れけり。

とあり、即ちこの二話である。

前話の一節を拔く。案外、自由に文字を驅使した、流暢味もあつて、名文と謂へるかと思ふ。

「茲に九州の傍示杭はづれに、一村の花柳園あり田舍には似合ざる繁花にして、すこぶる光景ある土地なり。固てこゝに遊べるいなかの通人、晝夜櫛の歯を挽がごとく、兩側には數多の茶屋馬宿軒をならべて、黄昏よりは殊に賑しく、いづれも軒先へ麁末なる提灯を出して、銘々其ちやうちんのまん中へ、鶴龜や松竹屋などと、目出度家名を書記して、ひとへに繪中の見世先のごとく、内には垢染おかさんが手洟拭く客人と噺して居あれば、二八斗なる娘のみせ先に蹲行て、立小便たれながら禿の、目上を聞もあり風のまに〱黄壺より吹送匂ひ、萬客の鼻を劈き、天窓の身柱まで突りたつ、藁草履に目分制にして、もつとも丈夫なり。稗だんご米の團子よろしうございは、叢間の馬其淺ひにして安摩ア

針は目の亡れた、御納所様なり。（中略）反古張りの屏風に、大津繪の張交は、お職株のざしきにして、床の間の氣色いかにも失禮なり、いづれも今戸焼の火鉢の中へ、籾糠を火活にしたやつを煙艸盆の名代に遣ふ、賣殘た嶋田粉な挽臼の手傳に雇れ、内ばたらきの子供馬の飼葉の世話役を勤る。二階の姥さん裏の畑をも見廻り、導僕は牛臺の上にて馬の沓を拵ろ、状使の男來りて小便桶の類母子をたのみ、洗濯屋のおばさん褌の洗張りを請合。云々。

以上などが、まづ大体の雰圍氣を示したもので、即ち一篇の序說ともいふべきもので、以下、此うした空氣で、方言雜りに、馬宿、さては傾城屋の客と遊女、藝者などの魂膽に移るのである。体裁は中本（滑稽本）であるが、內容は、寧ろ鄙遊里の洒落本とも謂へるものかと思ふ。最後に、口稟として板元川口宇兵衞の、全部二冊で、後一冊「刀豆屋晝見せの氣色居續客のこんたん駄賃增の輕尻馬に乘合の色道は古今たわけの骨稽を盡すまで、右艸稿出來云々。來申春の梓にゆづりぬ」とあれど、右後編は未刊に終つたものであらう。

此類の鄙遊里本（純粹のもの）、まだ探せば、此當時にいくらもあらう。挿話として取扱はれたものは、無論その數の何倍であらう。現に、一九の膝栗毛の類は、これで、挿話としての地方遊里、簡にいへば飯盛情調に、駄洒落まじりに、描破すべく努められてもゐる。稿本（その殆どが）として傳存してゐる鄙遊里の洒落本——三都以外のもの——も、また時をり見當る數である。此種の中で、名古屋宮の遊里本などは、寧ろ平凡の方で、家藏稿本の一にある「鄙風流眞垣」は、これらの中では、出色のものであらう。といふて、これは名古屋宮ではない、信州田中の温泉宿の情調、しかも遊里の体を爲したものゝ、その描寫である。作者不詳、小本（より稍大）で、序とも廿七丁半の量、いづれこれなど細說の機會があらう。

以上、龍頭蛇尾には終つたが、以て姑らく此の稿を打切ることゝした。

（其の二より）の名も、神奈川の次に、横濱さいふくだりがあります。これなごは元祖一九の夢にも知らなかつた事であります。（横濱）の所を少し讀んでみませう。通りかゝつた南京人にわるさをする所です。

「さても彌次郎喜多八は、横濱に至り見るに、あさより來る南京人、いつしか先にたちてゆくにぞ、北八は、忌々しく、「イヤべらぼうにあしが早いぜ。南京さいふから、小さくつてのろそうなものだにさいひながら、ぬぎすてたるわらじをひろひ、かの南京の後にさげたる髪（辮髪の事です。）の毛の先へ繋ぐに、南京は一向知らず、ずる／＼さ引摺り乍ら行つて了ふに。彌次郎は呆れ返り「これさ北八、悪戯もいゝ加減にしろ。怒られたらごうする積りだ」「そんな事は恐れるものかな、今方アノ南京さ口をきいた人があつたが、何を言ふか分られへ。所での思ひ付だつ向うで理窟ないへば、俺は謝罪る眞似をして、思ふ樣惡くいふ積だ。そうしたらよもや勘忍するだらう。何さえらい智惠だらう」「何にしても知らずに行つたからいゝが、これからは止すがいひぜ。そこで一首浮んだ

「髪の毛に草鞋を繋ぐ徒は、ふみ付にした仕方なりけり。」云々

さふざけてをります。

それから遊廓内の岩龜樓（有名な、ふろあめりかに袖はぬらさじさいうて、あめりか人をふつた花魁がゐたさいふ傳説のある樓です。）――この岩龜樓へあがるさ、隣坐敷に和蘭人がゐて、騒いでゐるから、つひ嬉しくなつて、それこそ日蘭同盟、和蘭人さ彌次さ喜多さが一緒になつて遊ぶさいふ件になります。

なほ、これより一年先の出版、文久元年の「彌次喜多旅日記」さいふ本もあります。此本も、前述べました「栗毛彌次馬」さ同じ樣な、幕末氣分の烈しい、奇抜さ卑猥さ烈しいものですが、横濱趣味は「栗毛彌次馬」より一層漲つてをります。現に、表紙も、すつかり當時の開國氣分で、外國風に描いた洋服で帽子を冠つた金髪の美人さ、下に日本の女さが描いてあります。口繪は二枚ありますが、一枚は、喜太八が、岩龜樓に登樓、その二階で遊女さ逢つてゐる圖、軒にはギヤマンの風鈴をぶらさげ、海の遠景には、汽船が大きなもの二艘も浮んでゐる。すつかり外國情調であります。本文は上下の二卷で上卷は、江戸に於ける二人の生活から旅だち。下卷は、殆ご横濱の見物で終つてをります。横濱以後即ちこのあさの續きはありません。この「旅日記」は、末期本ではあるが、珍本の方で、あらゆる書目、年表等に載つてゐません。前にお話した栗毛彌次馬さ同じやうに、岳亭春信の作で、芳幾の繪です。毎頁に繪があり、文章は、細かい平假名です。下卷のせめて横濱、両人の行動を御紹介するさいゝのですが大分脫線してゐますから、少々遠慮して、唯、挿繪の面白い繪柄だけを、言葉で述べませう。

例へば、横濱遊廓の大門口で、例の二人が風呂敷包を背負つたり菅笠を手に持つたりして立つてゐる。さ、洋杖をついて、洋服を着た外國人が、二人三人、日本人の、丁髷姿の間に立ち雜つてゐる、犬も走つてゐるさいつたもの。又一つは、吉岡さ記した箱提灯を手に提げた番新が先に立つ、後ろに花やかにした太夫が行く、その後を幇間（當時の男藝者）の一人がゆく。それを振返つて見てゐる外國人さ支那人さの二人さいつたもの。次の一枚は、尚滑稽で、廓内の格子先、花魁の顔が見えてゐる。格子外から、覗いてゐる洋服姿の外國人の二人、それが帽子を冠つて、其上に手拭で頬冠りをしてゐるから面白い。丁度ォワイ屋か掃除人夫のやうな格好です。その手前に、これは本式に頬冠りをした日本人の素見客が二人ゐるさいつたものです。こゝで、彌次さ喜多が、大闇着を起す話がありますが、それは割愛します。凡て幕末の横濱氣分に、彌次喜多を飜譯したやうなものですが、幕末氣分の、膝栗毛物又はこれに類した滑稽本は、尚此外にも色々ありますが、此機會に、「名古屋道中膝栗毛」さいふ余り一般には知られてゐない滑稽本のお話を附

（表紙四へ）

定價表

一冊	貳拾五錢　郵税貳錢
六冊分	壹圓四拾錢　税共
十二冊分	同 貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割増の事
○照會は返信料添付の事

昭和二年七月二十八日印刷
昭和二年八月一日發行　（郵費貳錢）〔貳拾五錢〕

禁轉載

編輯兼發行者　名古屋市東區[illegible]百五十七番地　尼崎久彌
印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　英比貞造
印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　扶桑社
發行所　名古屋市東區車道東町一五七地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

(表紙三より)
錄といたしませう。此本も上下二册で、これは元來が元祖一九の「東海道中膝栗毛」が宮の驛からすぐ桑名へ舟で渡つてしまつて、肝心の名古屋見物をしてゐない所から、その膝栗毛の第四編へ綴足したといふ意味で、一名「四編の綴足」ともいひます。文化十二年春の出版、江戸の生れで當時名古屋に來てゐた東花元成といふ男の作で、立派な版木です。版元は、尾張靜觀堂、只今の靜觀堂の、これが先祖に當ると思ひます。扨、この本、例によつて、宮に於ける彌次と喜多の遊興、散歩、それに當時文化十二年頃の宮の神戸や傳馬の遊廓情調、例の當時お龜と惣嬌した宮の遊女氣分などが現れ、これにごく一節がすでに此頃此の宮で行はれた事も書かれてあります。神戸をひやかして歩いたり、お宮へ入つて、例の佐久間が寄進した大燈籠を見て驚いたり、とにかく當時の名古屋辯や名古屋宮の風俗が、大分突つこんで織り込まれてゐるものであります。倘、この本に就てのくはしい内容は、本題以外の事でありますから、略く事としませう。とにかく、膝栗毛本の、原作者一九の生存中に成されたしかも他人の手によつて――補足本の好例として、記憶せらるべきものであります。稿本には、此の例を見ますが、板本としては、餘りない例だと思ひます。以上。

寄贈紹介

○變態見世物史　藤澤衞彥著
川意の周到な本である。例へば第一章序論として、畜・蟲・草木・金石・人などの妖を說き、且つそれを年表に示してゐる。第二章は變態見世物の位置、第三章は變態見世物概觀で、1、人癎、2、巨人、3、侏儒などから、12、性的見世物に至る、凡て四章、各章細節がある。圖版數十個、卷頭蜘男の木板書着色も、上乘の出來である。單に序論のみをいふも、異妖の年表等に於て好參考。まして第三章以下見世物の細說がある。圖版材料の好蒐集と共に、好著である(頒布會費二圓、東京市牛込區東五軒町二十七、文藝資料研究會)

○日本文學講座　第八卷
本卷には、拙稿「江戶文學と遊里生活」の前半を載せた。別に藤村作氏の馬琴研究、なども有る。(非賣品、新潮社刊)

○東海道に關する圖書　圖版　上
金田晴正氏著の續刊。(非賣品)

○變態廣告史　伊藤竹醉著

○變態仇討史　梅原北明著

○變態遊里史　青山倭文二著
會費各二圓。(東京市牛込區東五軒町二十七、文藝資料研究會發行)

早稻田文學(南北と默阿彌號。諸家執筆、とりわけて舊友沼波守君の執筆が嬉しかつた)○江戶時代文化)八月號。號を追うて益々面白し。大江戶遺聞集とも見られ、趣味的にも好題目多し。)○變態資料(第十號)○文藝市場(七月號)○歌舞伎別册(南北春水物上演の記念册子。全和本仕立。色摺口繪數枚入の贅澤さは、驚異、それでゐて價三〇とは、尙更。)○歌舞伎(三ノ八)○風俗研究(八六)○長唄(廿七)○歷史地理(五十ノ一)○史學(五ノ一)○國學院雜誌(七月號)○川柳鯱鉾(七月號)○やなぎ樽研究(三ノ七)○紙魚(十)○本道樂(三ノ三)○愛書趣味(十一)○逸文斷片號。眼新しきもの多し。)○古本屋(第二)○墨蹟(第七輯)○墓碑史蹟研究(四六)○月刊奨英(第二)○北隆館月報(七月號)。

著者より

○近年にない暑さのため、仕事が手につかぬ。○此の七月二十六日以後は、大抵は、愛知縣知多郡古見村、龍雲院方に居る。家族一同がです。毎年行つてゐて、心易くなつてるため、今年もです。避暑なんて柄ではないが、子供の保健のためにです。荊妻は一人で四人の子供を引廻さればならず、海水浴どころかと、大零しの體です。○本誌本册の本文記事、膝栗毛物の續々稿は、表紙に印刷した放送內容と重複のやうであるが、両方別時のものであるから、お許しありたい。○本誌も愈々、滿五周年に近くなつた。東京震災直前あたりの數は出ないが、とにかく、細々ながらにも繼續してゐられるのは、御同情篤い諸賢の賜物である。結局現在、日本で個人月刊で而も一人の執筆で今日迄生きてゐるのは、河上博士の「社會問題研究」と小生の小誌のみかと思ふ。○世間からは、小誌は金に困らぬ樣好意的宣傳せられてゐる樣だが、實はこれで每月原稿製作其他の勞働を一切無償として、本誌を每號出すためには、印刷所の拂や發送費などを賣高から差引と若干のマイナスになります。若し原稿料までも損に加算したら、一月の生活費だけは、損といふ譯です。○がこんな內幕はいひたかありません。凉しい顏はしてゐたいのです。○が自分の骨身を削つても、これを續けてゆく、今後も續けるといふ自己保證の爲にです。不惡。(七月二十四日)

本文

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十五册
（通編第六十册）

都々一の起源

——六月六日、JOCKにて

　都々一の起源、その沿革に就て述べてみませう。初めに御注意することは、以下私の述べる事は、決して奇矯な話ではない。確實な文献資料に據つての事です。悉しく謂へば限りがありませんが、大体私のこれまでの詮索・研究を概括して申ます。結論から先に申しませう、都々一節は、決して江戸のものではなかつた。當名古屋、更にくはしく謂へば、宮即ち熱田で生れたものだ。その生れた年代は享和三年頃であらうと思はれる。今から約百二十四年前です。何故かといふ事を、大体お話しませう。

　事は、名古屋の遊女町の歴史にも關係しますが、丁度寛政の末頃は、名古屋にも熱田にも遊女町はなかつた「從つて表面に現れた賣笑もなかつた。丁度その寛政の末十二年頃に、熱田の築出に、鶏飯屋といふ茶店が出來た。築出は、今の熱田傳馬町の東、姥堂の橋の附近であらうと思はれます。鶏飯といふのは、唐のきびを煮て其汁を用ひ、是にて飯を炊いて、鶏飯のにせを仕出かし賣出したもので、けいはんと音讀にしました。元は名古屋の男が、こゝへ移つて始めたとあります。その飯の菜には、蜆汁を肴に、酒をすゝめた。無論酒間を斡旋するため數多の女中を置いた。これが傍ら賣笑のやうな事をなした、此の數多の女中の中の一人に、名をお龜といふのがゐた。此のお龜が、當時茶店の人氣の中心となつた。いつとなしに此の茶店を〝お龜の店〟といひ慣らすやうになつた。當時この茶店は、なか〱構へが廣大で、築山等物好きな眺めに凝らしてあつた。千客萬來、雲集蝟集といつた有樣で、間もなく、その附近にこれに類似の茶店が、びつしりと出來た。從つて女中たちも殖ゑた。さうして、初めは、單に其處の草分け、鶏飯屋の女中の一人の名であつたお龜といふのが、次第に、當時同じやうな茶店の女中たちの一般的の名となつた。丁度寛政が明けて享和の二、三年頃には、立派に（余り立派にでもありませんが）此のお龜が、當時の、賣笑的女性の惣名となつてゐた。先是、當時傳馬町には、表面は旅籠屋であつたが、その實遊女屋の如き内容のものが數軒ありました。それが此の、築出の鶏飯屋の繁昌、お龜の流行によつて、此の傳馬町も一層の繁昌發展を促した、と丁度、此の鶏飯屋の女中のお龜が一般の名となりかゝつた享和二三年頃、當時海岸に接した南北の町、即ち神戸町の東西の側に、傳馬町にも勝る遊女屋が續々現れた。神戸には古くから旅籠屋はありましたが、こんな現象はなかつたのです。即ち享和二三年頃には、宮驛の東海道すぢ船着き場に最も近い神戸は、第一等の遊廓地。東西の筋の傳馬町は、第二等の遊廓地の狀態。築出には例の茶店が次第に遊女町のやうな樣子を作りつゝあつた。即ちA、B、Cの三つが宮に生れたわけです。さうして、此の神戸、傳馬町、築出、の三所の女性を凡てお龜といふた。お龜は、遊女の惣名となつた。丁度此頃に、名古屋から宮へかけて、潮來節に似たやうな唄が流行つた。その唄は、

「おかめ買ふ奴、天窓（あたま）で知れる。油つけずに二ッ折れ、其奴はごいつじや〱」といふので、この唄の終ひの囃子の「其奴はごいつじや〱」、このごいつじや〱、が面白いことは、ごゝ一節の名義上の起原となるのです。即ち此のシマヒの囃子の、ごいつじや〱が、ごゞと訛り、いつの間にかドヾイツドイ〱〱とかはり、浮世はサク〱、ドヽイツドイ〱〱、浮世はサク〱と折返して囃すやうになつた。それ故、誰名づけるともなく、此の新しく生れた節を、ドヽイツといひ始めたのであります。

　さうして、此のドヽイツが、新しい節の名となつたのは、恐らく享和の次の文化頃であらうと思ひます。

　これで、ごゝいつといふ名前の生れた年代、その起原、語義なごがお分りと思ひます。次に、此の當時の唄の系統は、如何なるものであつたらうか。これには、少々自信のある答の出來ぬのを遺憾とします、私の思ふには、潮來節から來てゐはしないかと思ひます。或はそれに類似したもので、人情自然の發露として、此の廿六字の唄の形を使用したのかも知れませぬ。唯、江戸では、古く安永の頃から此の潮來節が流行り、深川なごでは、寛政から享和へかけて最も榮えた。其の潮來の節が、しぜん五十三次の驛路を往來する旅人の口によつて、五十三驛の各所に傳はつた。その節がしぜん、當時宮にもあつたかと思ひますが、これは、強ひて、ごゝ一の母を、潮來に結び付けようといふ議論で、少々自分としても、不得心です。とにかく、鶏飯屋の女中の發展、神戸傳馬は、すつかり遊廓化した。その間、お龜が、宮の賣笑

（[illegible]三二八へ）

謎々の發達

「謎」は、語原、「何ぞ」の義であらうことは、間違あるまい。さて此の謎は、言葉の上の一種の遊戯として、古くから我朝に行はれてゐた。無論その母胎は、支那である。但し、我々は、此の謎に、近世の謎と古代の謎との區別があることを知らねばならぬ。問と解と心との三つ揃つたのは、(これを三重謎ともいふ。)江戸期――恐らく寶永正德頃かと思へる。それ以前は、三重謎にあらず、問から直ちにそのまゝに解く、即ち二重謎であり、後代三重謎の如き外物轉化の意想外を見ないのである。さうして、謎といひ、謎々といふ。「枕草紙」などにも、古くすでに謎々とある。然るに一方謎ともいはれた。此のやうに謎と謎々とは、名稱は二であつても、畢竟同一である。唯、「何ぞ」と單にいひ、強めて「何ぞ〳〵」と、即ち重ねていつたのとの、それだけの違ひであると思ふ。が、江戸期の中期以後からは、主に謎々と普通に稱したもの丶やうである。

又、性質にも、幾分變化があつた。支那の昔の謎は、無論隱語の意義である。日本でも、所謂我々の今日使用する謎々の性質のものもあるが、多くは隱語の類、一般には判じ物の意義で使用されてゐたらしいのである。(即ち此等は、詩謎、句謎、歌謎、字謎ともいへよう。)一筆庵(英泉)編輯の「教訓謎々春の雪」一冊は、天保十六年春の出版で、其頃(化政・天保)の謎々の傾向を示すものだが、其の題辭とした數丁の文章は、浮世繪師として一般無學なやうな印象を與へる英泉としては、たとひ附燒刄にしろ、驚く程の學殖(?)を衒つたやうなものである。それに、昔の和漢の隱語(本來の謎)の例が擧げてある。これと類似の事項は、我等も、江戸期諸家の隨筆に見受けるが、此等を纏めたもの丶やうであるだけ一寸重寶である。今その要文を拔いてみる。

往古の謎は、今の謎とは大いに異り。今は何々と係ると云へば、更に事の變りたる言を以て答へて

是を解と云。其心はしか〳〵なりと云ひて、はじめ係たる事の趣意を合すを謎と云へども、昔は和漢ともに隱語と云ひて、判事物の類也。玉篇に謎は隱レ言也とあり。亦廋詞と云へり。代醉に曰く、古の所謂廋詞は即ち今の隱語にして、俗の所謂謎也とあり。字謎と云ひて、文字の義理を詩に作りたる例多し。譬へば、春夏秋冬と云ふ字謎の詩に、三人同行去觀レ花（是春の字の謎なり）百友元來共一家（夏の字のなぞなり）禾火二人相對坐（秋と云ふ字のなぞなり）夕陽橋下一双瓜（冬といふ字のなぞなり）皆如此し。倭國の歌にも多くあり、誰も知りたる歌に、「待宵に更行鐘の聲聞ば（卜云ふは、來る間憂しと云ふを、車牛といふ。同じ訓(よみ)にきかせたるなり）「あかぬわかれの鷄はものかは（卜云ふは、離れ憂しなど放牛にかよはせたり。）「ふたつ文字うしの角文字すぐな文字ゆがみ文字とぞきみはおぼゆると云ふはこいしくといへる隱語にて、こひしくおもふといふ謎なり。是等の類夥多ありて其意を悟るを解といふなり。實に幼きものばかりにあらず、人の才不才を知る稽古となるべし。(下略)

原文は、なほ以下に、魏の曹操に關して、揚修と試みた數個の字謎に就て述べてゐる。さて右の春夏秋冬の例にも見えたる如く、支那の謎は、字謎又は詩謎の類である。それが詩の形を成してゐたら、詩謎といふだけである。

日本では、古い所では、枕草紙に、その百二十四段の中に、中宮のいはるゝ挿話として、此のなぞ〳〵合が出てゐる。室町期の徒然草にも、馬のきつりやう云々(百三十五段)は、作者が解いたものだが、全く一種の文字形成の謎、即ち表面上の句謎である。(或は、これを說明的謎ともいはうか。)まだ第百三段の、醫師忠守に關する、唐瓶子と解いた謎々の方が、後世の謎々に近い、即ち寓意上の謎であると思ふ。とにかく古く王朝時代から、支那の字謎詩謎の飜案であらうが、文字の形の上の、即ち表面的のものと、詞の寓意からのもの、即ち內面的のものと、此の二樣式が行はれてゐた。が、主に室上の人々の、少數の智識階級者の、一種の智的遊戯として存在してゐた。王朝から鎌倉期、室町期に入つて、其の期末には、「後奈良院御撰奈曾」といふものまである。(永正十三年正月成ると豊芥

子日記は傳へてゐるが、當時は後柏原天皇の御代であるが、どうか。一例として、前なは目あき後ろなは目くら、見不見で、蚰蜒と解く体の二重謎の風である。）戰國時代、武士の間にもあつたと見えて、「甲陽軍鑑」十二、永祿十二年甲州勢の小田原攻の條下に、内藤修理と馬場美濃守との謎のかけ競べといふものがある。江戸の初期、慶長の頃には、都に宗鉄居士といふのがゐて、謎々を巧みにし、現に謎百句を作つたといふ話である。丁度その頃の帝後陽成院、次代の後水尾院にも、此の謎々の遊戲に耽らせ給ひ、その勅作が多かつたと槐記に出てゐる。後の、寛文延寶天和貞享頃の帝靈元上皇にも、謎の出題があつたと、「筆のすさび」に現はれてゐる。

さて此頃までの古代の謎の例としては、枕草紙や徒然草にも例が出てゐたが、「三養雜記」に、古代の謎として、其の標本が出てゐる。一種の句謎である。例へば、

「こばたひつくりかへして七月半、」を、「たばこぼん」と解したり「雀が利を持ちながら目をぬかれ、されども子をば羽の下にあり」を、「硯ばこ」といつたものである。其他では、歌謎の類も、往古並び行はれた謎々であらう。前に引用した一筆庵の「春の雪」にもあつたが、其他では、秋風のはらへば露の跡もなし萩の上葉もみだれてぞ散る。この歌は、謎であつて、答は、月（つき）である。即ち、上の句露の跡が無ければ、つゆのゆが消えて、つ。下の句、萩（はぎ）の上は、上のはが散つたら、きだけ殘る。加へてつきといふ答といつたもの。さうして此等は、凡て私の前に區分した句又は歌の表面的の謎――普通謂ふ判じ物の程度――に過ぎぬのである。

かうした一種の貴族、有識階級に限られたもの丶やうな謎々が、大衆的になつたのは、江戸期である。（元來、謎合が、民間的になつたのは、萬治・寛文の頃。（地理的江戸の流行は延寶の頃といふ。京は、それより古きこと無論。））さうして歌謎の類は、古典的となつて、内容の通俗的平民的な、句謎となつたのが多い。（さうしてそれも、昔のやうな詞の上の直接の謎よりも、轉義的のもの、稍、考を必要とする程度の、複雜化したもの、即ち我

等の區別した寓意的－内面的の謎が多くなつてゐるのである。）

元祿版「新がわりなぞづくし」といふものに、左の例がある。

問	答
海ばたは十里に足らぬ	蛤（濱九里）
ふみもかくまひ君もござろふ	筆捨松（待つ）
昨日今日明日明後日まで買々	四日市
かの事はふぐりでつかへた	きんつば（い錢）

天狗の居どころ虫のゐどころ	杉原
宇治に母あり	茶袋
麓に風なし	山吹
雨降の嫁入	ぬれえん

といつたもので、凡て轉義的のもので、即ち内面的のものである。が、まだその形は、問と答との直接二者の關係であつて、それだけ單純であつて、後代の如く、「、、、と解く」と、意想外の他物にこれを解する、その理由、說明としての「心は」といつたものはない。此の三つの形式（即ち謎の複雜化である。）を具備してきたのは、謎々の一轉化であるが、これは恐らく寶永正德の頃であらう。さうして此の三つの形式が具つて來ると、問は、從來の單純な問答形式の折の問とは全く性質を違へて、それ自体では、單にそれだけで、外に意味のないのが多い。それが、「、、、と解く」の外物轉化の妙其の意を辯ずる「心」、この二者の力を藉りて、複雜化、益々其の度を加へて來るのである。（即ち謎の二樣式の一方寓意的又は轉義的ともいふべきが、此の三重關係によつて、一層の複雜さを增したのである。）寶永正德頃の刊かといふ「御伽新二重謎」といふものに、左の例がある。（但しこれは嚴密には三重謎であるが、これを三重謎と謂はず、新の文字を冠らして、これに換へたのである。即ち、、、とかけて、、、、と解く、心は、といつた此の三重の關係になつた謎の新形式を、新二重謎と當時云つたらしい。誰人の創案か、とにかく此の新二重謎（三重謎）の發生は、謎々界の一進展であり、後代幕末明治へかけての謎々の形式の起原であるともいへよう。）

とかけて	と解く	心は
春ごま	舟村の大港	のりこんで來る
節季候	綿荷物	押結めてくるものじや
新參の奉公人	下手相撲	勝手を知りませぬ
高雄山	羽二重	もみぢがよふござる
八瀬大原の馬	士筆	しばに出まする
手本紙	西陣のはたや	おりおくはさて
せんだく物	お鏡の餅	ほしおく物でござる

といつたもので、此の新二重謎の發生當時としては、成程、幕末、あの繁縟、下卑たものとは比較にならぬ程の、幼稚な、然しどこかに御所風な所のある、古雅なものであらう。この例からも、當時の新二重謎は、都で生れたものといふことが、詞の雅な所、又は材料の點からも考へられよう。（八瀬大原、高雄山、西陣など）。心の詞の丁寧な所も都風である。

尙、寶永三年には、須原屋版、「御所なぞの本」がある。その內容の一般、豊芥子日記に見えてゐるが、主に和歌の謎である。

享保十三年、戊申正月の京版「新撰何會遊び背紐」といふものは、當時又は古代の都鄙のなぞを集めたもので、新樣式の三重謎もあれば、舊樣式の謎もある。隱語の類も附してゐる。通覽すると、材料は、未だ自然事物に借りて、江戸末期の如き人事本位のものは、少ない。また三重謎のものも、相應關係が無理で、附會ともいふべきものが多い。

古代の句謎の例としては、「切重ねたる鱠生鳥」、答は、蟋蟀である。即ち、きりを重ねると、きりぎりす。鱠の生を取つたら、す。加へてきりぎりすである。また別樣の、意から來たものには、「雨か霰かさては木の葉か」答は、桔梗である。即ち聞きやうである。

新樣式の三重謎は、まだ原始的のせゐか、二重關係の古來の謎と餘り相違がない。即ち中間の「、、と解く」が、その外物轉化の程度が、後代の如き意想外をなさずして、心の重複の如き形を爲してゐるのである。

曰く、「臆病武者の軍評定」挽木(ひきぎ)ととく。心は引氣なり。「一夂」、毛氈ととく。心は毛千なり。分銅ともとく。心は分十(ぶんじう)なり。の類である。（當時、所謂、願人坊主が、此の謎の流行につれて、謎、判じ物の鼠半切に摺りたるを持歩き、錢を乞ふものあるにいたつた。其の間强請がましき事に至つたので、翌（享保十四年）四月廿五日にはこれを禁じた觸書も出たといふ。）

中の新春版（享保十三年）の「謎車氷室櫻」には、二重謎、三重謎、四重謎。もぐり謎、當字謎、常の謎と目錄に出で、二重謎は、我々の稱ふる三重謎であり、常の謎といふのが、二重謎である。今、此書のいふ通りの一々例を擧げよう。

○二重謎。夫婦の緣むすび（解）山椒太夫五人娘
（心）出雲の作

○三重謎。夢とかけて　竹奉行と解く。心は、船着。其心は、伏見。

○四重謎。別(わかれ)の言葉（とき）荒馬。（心は）疊はさゝらの音。（其心は）笹あたらし（心は）さらば

○もじり謎。匂になやむ女房　伽羅くさい
（しやらくさいを）。

○當字謎。七とかけて（解）棚（心）七夕の七の字

○常の謎。太夫の扇　松風。

といつたもの。（悉しくは、豐芥子日記卷下の十一を見よ）其他、享保十四年には、「謎檜東文字理」上下二冊などが出版せられてゐる。（同）

扨、江戸に於ては、二重謎の流行の初めは、延寶の頃であるが、以後漸く一般に此風染み、享保から寶曆へ、古拙ながらも、未だ都風、所謂御所風の感化、又はその飜案、假用ではあるが、出版物も追々出づるに至つた。寶曆初期には、鱗形屋版の「新板なぞづくし」五葉一冊がある。がこの本、なほ二重謎であつた。「まつにはやきた、まつばやし」の類である。（各丁下段に、富川吟雪風の挿繪あり。その繪も謎の問と答を一しよにしたやうな繪である。）以後、明和安永の頃まで、間斷ありて榮えた。が、此頃すでに三重謎が生れてはゐたらう。明和に至つては、なほ謎を營業的にする藝人の一種を生んだ。「明和七年三月には、湯島天神開帳の時、非人に彌太坊主と

いふ者社内に往來し、木魚を叩き、衆人のかける謎を解き、一錢二錢の合力を受けしは、人皆珍らしがりし」（明和風俗集）といふ。一筆庵の「春の雪」にも、その題辭の内「「明和安永の頃までは、世に流行して、小冊となして童蒙の弄となしたり」とあるからは、これら非人彌太坊主の類が相交涉して、出版冊子（例へば、新板なぞづくしの類）も當時多かつたことであらう。但し童幼の弄び、多く湮滅して、查ねるに由がない。なほ、明和の頃、讀販として、「謎かけぶし」といふのが流行つたともある。天明・寛政を經て、享和の頃には、端唄に作り、時花唄させしに、大いに世に行はれたともいふ。恐らく、此の謎々は、樣々の樣式を具へて、江戶に、他の都鄙に榮えてゐたであらう。

それが、更に勃興したのは、例の春雪坊の淺草境内。出演からである。出演といふ文字は仰々しいが、とにかく淺草境内に粗末な小屋がけをして、懸賞つきで客を呼んだ。有名な春雪坊の事である。

武江年表文化十一年の項に

十月より、淺草寺奥山へ、謎坊主といふ者出る。頓智なぞといふ看板を出し、十八九歲の盲坊主、高座にありて、見物より謎をかけさせて、即座にとく。若し解き得ざる時はかけたる人に品を與へて詫ぶるとて、傘、米俵、菓子、器物などを飾り置くに取られたる事なしといへり。奥州二本松の產にして、名を春雪と云ふ。春の雪の如く謎を早く解くよし也。是を學びたるもの、向兩國へも出たれど、これには及ばざりし也云々。

とある、此の謎坊主の事である。奥州二本松の產、年は十八九の盲坊主、本名は、順三といつたといふ。春雪坊は、謎を速かに解くことからの無論假名である。（或人、順三に此の名を與へたのだといふ。）間もなく類似者が兩國に現れた、この記事を以てしても、當時江戶府内の流行の魁となつた事が分る。が此の謎坊主、「明和誌」には、一とし計出で、いづれへか行く。としてあるが、とにかくこれが與へた刺戟は、大衆的に大きかつたであらう。（一に、去冬—文化十一年—淺草に年の市の立つ頃から休みゐ、當（文化十二年）春から、此處彼處の席を勤めたが、後輩の可樂に壓されて、二月の頃消えたといふ。）現に蜀山人の「四方の留粕」に、「……都下に流行して、辻々に謎の番付をひさぎ、家々に

謎の警句をつたふ。まことに謎の世界といふべし」とあるのでも知れる。「塵塚談」には、此の春雪坊を二十一二歳と見ゆるものとしてゐるが、これには、「この時の春雪坊小屋の入場料の記載がある。曰く、「見物一人につき、錢十六文宛にて入る」とある。（一説に、十二文、七八度解き終ると、休みといひて、客を入れかへたといふ。中）尙、重複を厭はず、豊芥子日記下卷（近世風俗見聞集第三所收）から、（細部についての異說もあるが）春雪坊に關する記事を拔かう。

文化十一戌年十月頃より、淺草奥山において、謎坊主といふ者出て、見物より謎をかけさせ、如何なる難題を申けるも、即座に解くの妙あるよしにて行る。普く江戸に流布せり。此者は、奥州二本松の產にて、名を春雪といふ盲人なり。春雪とははやく解るといふ意なり。松井源水奥山にて獨樂廻技曲名人是とはかりて、葭簀を以て、圍(ひ)たる小芝居を設け、遠近の人群集して金錢山をなせり。衆人謎をかくるに、春雪解く事すみやかなり。何曾二十回を解き終れば、聽衆を入替とす。一席を十六穴と定め、後には二十四穴に成る一龝の限りとす。又高座の脇に米俵(云々、略)予も一席見物に行きしに、年の頃十八九に見ゆ、其容貌色白くうるはしく、黑縮緬の羽織小紋の衣類なりし、高座に居り、前に煙草盆、脇に湯呑を置き、藤にあんかを置きて、是に頭を傾け、聽衆の題を考へ即座に解答ふるなり。

本町庵三馬先生の話に、予も一席聞きしが、拙き事限りなし。元來僻地の產にて、都會の流行に疎く、盲目にて物に博からざれば、事を解せず、たまたま解き得るとも、俗腸にて殊にあさまし。是を愛する人は、各々三津五郎が功を廢て、歌右衞門が拙きを採るもの、俗物なればなかなかにとるにたらずといはれし。扨、かの解く所の謎を、二三枚づゝ册子に摺りて街を賣歩行、また往還に此本をならべ、讀ながら賣るに、是を聞て求むるもの數多にして、日々に摺立て賣出しと云々。

と、三馬は、歌右衞門によそへて惡口をいうてゐるが、事實流行したことは、右の摺物册子の例でも分る。「我衣」の著者曳尾庵は、春雪を讃し、此年（文化十一年）十二月十二日から同十五日迄降り續いた大雪によそへて、「かけわたす春の霞におちこちの雪さへ解けて笑ふ山々」と詠んだといふ。なほ、此の頃、春雪の眞似で氷雪といふものもあつた。武江年表の向兩國云々といふのがそれである。（芝神明にも、眞似が出來たといふ。）豊芥子日記に、なほ曰く、

斯く流行せしものから、春雪の眞似をせしもの、名を氷雪として兩國などへいでゝ、同樣に頓知謎と看板を出したれども、春雪には及ばざりしや、間もなく廢席せしよし。

此節謎の本、或は一枚摺數板あり。
市川團十郎とかけて、たんくみの人宿、心はなんでもかまわぬ
嵐三五郎とかけて、あべのやすな、心はきつれがいゝ。
中村歌右衛門とかけて、助平おさこ、心はなんでもする。云々。

これは、當時の、春雪の謎の解きの一部分でもあらう。（なほ、此の豊芥子日記の此項、古謎の本にも觸れて、その一斑内容を記錄して、好參考である。）

「甲子夜話」卷六十二には、此の春雪の事に關聯して、謎の記錄がある。春雪の自身の創作か、否かは不明であるが、とにかく、當時（春雪の文化十一年より八九年ばかり後）の謎々の樣式として、一般に使用せられたものであらう。

きせるたばこ入とかけて、獨吞の酒と解く。意はついだりのんだり。
火のないこたつ、片輪な娘と解く。意は手の出してがない。
しゆろぼうき、みごばうきとかけて、大食傷と解く。意は、立てはく、坐つてはく。
鈴なしのみこ。つんぼの雨夜。ふる音がない。
比丘尼に簪、一人飲の酒。さす所がない。

といつたもの。

謎坊主の興行は、文化十一年十月から一ヶ年位あとの事であるが、これが、寄席物として摸倣せられたのは、つひその翌年にある。例の三題噺に妙であつたといふ三笑亭可樂は、謎合せにも妙を得て文化十二年正月七日（一說二日）より、芝神明の社地に於て（同處に、これ以前に、別に春雪の摸倣者があたやうである。）札を張出し、「今日より中入の間に謎を解て御聞に入申候、何なりと難題を御考の上、御入可被下候　可樂」と記したビラを出したところ、百人程の客が二百人程にふえた。物は、後奈良院御撰の何曾合を據として、客より題

を乞ひ、即座にこれを答へた。落語の中入の間に行つた。すると、可樂は、謎のために客をふやしたといはれては、落咄を興した效がないとして、其後は斷然これを止めたといふ。(「講談落語今昔譚」及び「江戸の落語」)が、成程、咄と謎とは、共通の點があらう。元來、咄の落には、この謎の、解と心とに似よつたものに、我等は屢々出會ふ。でなくとも機智を重んずる點からは同一である。三題噺に巧かれば、なほ更である。かけて、解く、こゝろは、これを引伸しても、三題噺になりさうではないか。

次の流行は、例の扇橋門人、都々一坊扇歌である。扇歌は、どゝ一の創案者でも何でもないが、當時、名古屋府内(主に宮)で生れたどゝ一節一名神戸節、一名お亀の節が、江戸へも流れ込んで、文政頃から漸く盛んになり出した。(名古屋の發生と流行は、寛政末、享和、文化頃)天保九年には、これを即席にして飯を食ふ藝人を生んだ。それが扇歌で、其の年八月から牛込の藁店へ出席して、當意即妙の得意藝を賣物にした。それに、此の謎があつて、聽衆から題を求めて解き、又、即席都々逸などものしたといふ。其の謎を解くに、彼は直ちに三絃をとつて、どゝ一の節をつけて唄つたといふ。彼の大阪興行の折の事が、一例として、「守貞漫稿」第二十五編に載つてゐる。曰く、

「近世江戸に扇歌と云ふ遊民坊主あり。三絃及びドヽ一節と云ふ小唄を能くし、寄せと云ふ席に出て、錢を募つて行レ之。其時諸人、何曾を掛る。忽ち三絃をひき、ドヽ一の節を付け解レ之。故にナゾナゾ坊主とも云ひ、どゝ一坊とも云ふ。其の謎の一、左に記す。或人、天王寺の塔とかけたり。是れ大坂にての事也。かけるは問をかけるの略也。忽ち三絃をひきて、「天王寺の塔とかけては、ハエ／＼虎屋の饅頭と解くわいな／＼。さうで五じうじやないかいな。」天王寺寶塔、五重也。又大坂名物高麗橋虎やのまんじう、一價五錢、十乃ち五十文也。十と塔と、五重と五十を通じ解けり。豈頓才ならずや。」

とある。さて此の扇歌が、いついつまでも、都々一、トッチリトンの他に此の謎を解いてゐたかは不明であるが、無論本業は、都々一、さうして彼の當意即妙の智が幸はひして、時々此の謎も、時人の求むるまゝ解いたのであらう。此の扇歌は、木戸錢五十六文を取つて、當時としては最高のものであつたといふ。彼は、嘉永五年十月二十五日、歿した。

此の扇歌の謎の兼興行が、刺戟となつたのか、或は、前代からの流行が、不斷にあつたのか、とにかく、扇歌の牛込藁店の出席たる天保九年から約八年、同十六年春には、一筆庵（英泉）の中本一册、「春の雪」が著されてゐる。見返しに、一筆庵輯、英泉畫とあるが、一筆庵も英泉の事で、即ち同一人である。板元は、玉泉堂（布袋屋市兵衞）である。勿論、これより以前、此の類の、末期繪入の謎々本が、或は他の輯者によりてあるにはあつたらうが、所見としては、此の天保十六春の英泉輯である。序文によれば、此の英泉の「春の雪」は、昔――文化十一年の春雪坊の謎々の册子に、補作の三四をなし、繪抄としたもの丶如くである。題名の「春の雪」も、此の春雪坊から借りてゐる。

「（前略）書肆玉泉堂予が新道の僑家を訪ふて曰、曩に世に行れし春雪坊が謎の一小册あり。童蒙の爲に繪抄をなし、新春の發市にせばやと思へり。（中略）嬰兒に通曉易き謎を三ッ四ッ補綴して櫻木に再板をさせん事を頻りに乞へり。（中略）畫工作者の二人前耻も迚ものかき序つまらぬ事を話て書く紙員には限りあれども限り無きは、愚老が魯鈍を獨嘆じて走り馬の放屁の如き事を讀めに誌し、首卷の餘柿をふさぐ者は、例の楓川の馬鹿市隱云々。

即ち、春雪坊の小册子の補綴、繪入といふのであるが、眞否は分らない。序や題辭で七丁分取つてアト十三丁が、肝心の謎々である。半丁（つまり一頁の事）を、四つに仕切り、それをまた上と中と下に仕切つてゐる。上はかけて、中は解く、下は心は、である。計半丁で四個の謎々である。かけて、にも、解く、にも、心は、にも、それ〴〵その詞に相應した簡單な繪がついてゐる。今その繪を略いて、詞句だけ、それもお座へ出せるものばかりの若干を例として摘んでみよう。（特に、此の册子あたりでいひたい事は、此の頃から漸く、謎々の解くや心が、怪しからぬ外聞を憚らねばならぬやうなものに、再三ぶつかる事である。これだけ、天保以後の時代の頽廢の影響を受けてゐるのであらう。）

ト　かけて	ト解く〱	心は
福神双六	婚禮の盃	めでたくあがる
年の市	素人の角力	かつたものよりまけたが多い
おやしきの御門	七福神のわりふんどし	六ツぎりだ
日本橋	菖蒲刀	人のきれることがない
川ばたの柳	座頭の小便	みづにたれてゐる

おてらの炭斗　狐のすかし屁　こんぶゥ　｜　黒繻子の帯　日あたりの雪　そらごけがする

以上など、無理なのもあり、素直なのもあり、きれいなもの、汚ない感じのもの、様々であらう。

幕末に至つて、此の謎々は、益々流行、中本型の繪入本が夥しい數に出版せられてゐる。大阪末期の戲作者（明治中葉へかけて製作）の一荷堂半水は、戲作もあるが、主によしこの選者又は選著者として有名な男であるが、この半水にも、謎々の繪入本がある。よしこの本の如く、繪は、貞信の挿繪であらう。今その著に係る「謎々玉手箱」（二編）から、目星しいものを拔いてみよう。

トかけて　トとく　心は

（割　木）（悋氣ぶかい女）（たきつけると火になる）　｜　（ゆうれいの色事）（腹のへつたときのめし）（あじなふてもよゐ）

（きせる）（つとめの女）（あたまと下口が金じや）　｜　（すきあふた中）（とりもち）（そばへよるとはなれにくい）

（こ　て）（婆アげいこ）（しわのばす）　｜　（意氣張のつよいおいらん）（さみだれ）（毎ばんふりごほしじや）

（田葉粉入）（横濱の風呂や）（ばつばがはいる）　｜　（地車の引ちがへ）（そう嫁ぞめき）（濱でする）

以上の中にも、現れてゐるが、ちよい／＼下卑た、猥的なものがある。引抄しなかつたもの〻うちには、まだ酷いのがあるのである。

これより稍古いかと思はれる「新板流行なぞ／＼合」（中本一冊、芳藤畫、金殖堂壽梓。大坂版）にも、

あきの野山　いやひぬきの引出し　おちばがゝさなる　｜　くすりのにんじん　はしのうへの駒下駄　から／＼わたる

さなりのおさ　楠のもんどころ　みずにきく

の類で、多くは先人の受賣り、繪柄も、英泉の「春の雪」と同じ形、圖柄である。

恐らく江戸版であらうが、、瓦版の「新板なぞづくし」といふものがある。これなども幕末氣分を現はした、無論頽廢味の愈々勝つたもので、その例をいふと、

ト掛る　トとく　心は　｜　十六七の娘　はんじやうの商人　儲がたくさん

ゆで玉子　大内のみす　なかにきみがある　｜　すりきれた筆　てんぼふのしつかき　さつばりかゝれない

おかやきもち　三ッ目ぎり　きばかりもむ　｜　手のある女郎　秋のそら　ふりそうでふらない

よたかの××××	こふ山(こふやか)の定燈明	數多くさばす
ばゝアの藝者	つよい關取(せきとり)	誰も轉(ころ)ばしてがない
こうかの出合	葱(ねぎ)のなまにへ	くさくつてこわい
れすみあな	よたかのお客	あくさはいる
平家御一門	四ツ谷の馬方そば	もりが多ゐ
××××のでき物	旅人の忘れ物	大方かさであろふ

といつたもの、中には、隨分恐縮せねばならぬものもある。

都々一本の選集もある光盛舍作丸(くわうせいしやさくまろ)(江戸の作者)の、やはり編集になつたなぞの逸題本がある。これは、内容から見て、恐らく元治か慶應年間のものと思はれるが、その若干を左に引いてみよう。

トかけて	トとく	心は
寶船	女郎の手	枕の下へ×××
さしだま	三月廿九日	はろくれる
こうゐき(交易)	雞(にはとり)	さつけへこう
男だての親方	豊國の女繪	いゝ顏だ
さみせん	龜井戸	てんちんしやん
ばくちうち	相模下女	かぶせてころ
やすげいしや	よい〳〵	轉(ころ)びそうだ
おかる	橋の上の番屋	風に吹かれているわいなア
むひつ	づぬけな××××	よめ(嫁)ない
おんなゆの評判	ばんたの賣り物	××××
座頭の芝居見物	くすのきのもん	みゞにきくだ
檀八の墮落	八犬傳のはじめ	犬が起りだ
うへのゝ花見	ごちやうじ(御停止)	三味線がならぬ
ゐざりの×××	ほりたての薩摩芋	砂だらけだ
ほれたどうし	田圃道	こひかぜが身にしむ

最後のものなどは、これが本當に臭い仲といふのであらう。此類、擧げてゐたら限(きり)がない。概して所謂臭い文句だらけである。

明治版、本爲板の「なぞ〳〵森のこうり」といふものもある。その二編には、

文明開化とかけて	ひぜんかきトとく	心はへうつりやすひ
人力車とかけて	古氷トとく	心はへふゐるいつぽう
舶來の上沓とかけて	忠しんぐらトとく	心はへギシ〳〵なる

同、「なぞづくし」加賀吉板には、

棟瓦づくり	人殺し	つみつくる
長ぐつ	さんちきの女郎かい	ふられてはいれる

といつたものだが、此本、頗る猥雜である。以上の二などは、まだ大人しいもの。

○

これで大体、私の乏しい材料からの謎々の發達觀は終るのであるが、(尙、江戸初期中期などの噺本其他から、此の謎の例を拾へば、また際限がないであらう。)最後に、謎々合に就て一言したい。歌合といふが如くに、此の謎を以て勝負を決する遊戲用に供した事があつたらうか。現に、江戸末期本にも、「謎々合」といふのは、その外題に見る所であるが、である。なる程、王朝時代は、慥かにこの謎々合の遊戲は、實際に演ぜられた。無論宮中又は堂上の人々の間にのみであらう。「枕草紙」の記述（前に引けると同一のもの。)によると、やはり左と右とに分れ、その中には男も女もあり、次々に謎を合はせ、知らずというたのは負、解けるは勝、それを順次と進めて、左一番右一番が、兩大將で、これによつて最後の双方の勝敗が決つたものらしい。(小野宮右衛門督家五番三番の何曾歌合といつたものは、此間の產物であらう。尙、此類、無論多かつたに違ひない。)さうして、此の謎々合は、無論宮中又は堂上家には行はれて、江戸期中葉に至るまでも、此の風が此の貴族間には行はれてゐたらう。至尊の方々の御作、御選等のある所から考へると、至尊の方々も時々此の遊びに加はらせられたに違ひない。民間では、此の謎々合は、つひぞ聞かぬ。唯、藝人同然の春雪坊や才二（不詳であるが、光然舍作丸の逸題謎々本に出づ。或はこれが豐芥子日記の氷雪か。)や、都々一坊扇歌のやうな者に、大衆が問ひかける、無理な題を如何に彼等が處理するか、そこに興味がひたすらあつたやうである。春雪坊の興行當時には、各家喧傳して、その名解を誦諭したといふが、さてこれを以て堂上者流の如き謎々合に應用したとは聞かぬ。唯、所謂合の如き仰々しき形をとらず、問ひかくる者、解く者と二人あつて、機智を衒ひあふ問答体の事はあつたであらう。

――未完

江戸小咄の話

江戸小咄の話をいたします前に、落語の大体の沿革を述べてみませう。一口に落語といひますが古くは、落しの話、それがのを取つて落話、それを更に音讀にして落語というたのです。又、輕口ともいひましたが、これは主に上方、江戸では初期の事のやうです。小咄といふのは、その中の、極短かい話に附けた名で、これは、特に江戸での呼び方、それも安永頃からのやうです。さて、此の落咄は、元來、その初期中期、（この中期は寛政の頃までです。）此の間は、文藝的作品と、間々町での辻講釋の流義で、人々に直々聽かせるのとの二樣でありました。末期の文化文政以後にあつては、文藝上の作品、即ち出版物としては、また夥しい數ではありましたが、それ以上、寄席小屋の發達と共に、此の落語が、他の講釋や人情話など丶共に演ぜられ、後には、咄家といつた一種の藝人も生れた、無論これは、天保以後だらうと思はれます。さうして、此の寄席で盛んに演ぜられる樣になつてからは、此の落咄も、小咄變じて長咄となり、追々と人情話的のものも加味して、肝心の落語らしい元の本領は、その結びにあるといつたものになりました。で、末期並びに現今のものは、本來の落語の延長で、寧ろ一種の滑稽話ともいふべきものなのです。初期中期にも、可なりの長い咄もありますが、がその妙々、上乘なものは、無論寸鐵人を殺す小咄風のものにあり、就中京坂に發達した落の咄輕口を承けて、安永頃から江戸に榮えた小咄に於て、無論此種滑稽文字の精髓があると思ひます。したがつて、私たちは、此の江戸で生れた小咄を最も愛するものでありまして、格別、それが今日に傳はつてゐるその代表的名作を集めたと思はれる當時（安永頃から寛政文化頃までの）江戸版小咄本を最も愛するものであります。まして、それは、當時江戸文壇に於ける第一流の人々、その人々らの自作や又は當時の無名の人々の名作を集めて、なつたものが多いので

すから、一層の事であります。尙、簡單に、當時の小咄本に現れる小咄と、只今の落語（長咄の滑稽物語）とを比較すると、私は、いつも、現代の落語の例の下げには、必ず此の昔の小咄の筋が、あるひは變化して、或は其儘に應用又は使用せられてゐる。人々は、その下げに無限の興味を感ずるが、これを最も簡單に縮め、要領をよくしたものは、それが昔の小咄である。即ち江戸小咄の生命は、その傳統が儼として亡びず、今日に傳はつてゐるのを見て、會心の笑を漏さずにはをられません。

それはさておき、以下、落咄の實際上の起原、江戸時代初期の京坂の名家、轉じて江戸の話に移ります。

偖、無論この落咄に似た一種のおどけた、座興話は、その發現は、古い事であります。日本でも恐らく古來からの事でせう。室町（足利將軍）時代にも榮えてゐて、或は將軍を大名を、或は庶民を喜ばせたものでせう。轉じて戰國時代になつた。と、こゝに、近世落語の祖ともいふべき名手が現れた。それが、安樂庵策傳といふ男で、豊太閤に仕へた事もあります。狂歌で有名な曾呂利新左衞門は、これも同樣、太閤に仕へ、時々落語のやうな滑稽話のお相手をしたが、が、今日曾呂利の咄として傳はつてゐる落語風のものは、實は此の安樂庵の創作だといふ事です。傳說では、曾呂利が狂歌を述べ、安樂庵が落語を述べて興じたといふ事です。此の安樂庵の咄を集めたもので、有名なものは、寛永年間に出版せられた「醒睡笑」といふ本です。此本、以後何度も改版せられましたが、とにかく非常に行はれた本で、尙且實質上からも近世落語の祖ともいふべき内容のものです。今、その中の咄一個を御紹介してみませう。

○大名のもとへ客あり振舞に湯漬出たり、其席へ又客あり、それにも膳をすゑたり。又客來あり、膳を出させあれどもつひに出かぬる時、物まかなふ者をよび出し、何とて手間もいらぬ事のおそきや、湯を得わかさぬかとはをぬかるゝ時、手をつかれて湯は御ざるがづけが御座ないと申たるにぞ、どつとわらひになりける。

といつたもので、此の話は、よく人の知つてゐるものですが、元は、醒睡笑にあるのです。丁度

かれこれ三百年前になるのです。が此の策傳の咄は、根が生活が生活だけあつて、咄の内容は、僧侶か大名に關したものが多く、それに關した偶然の失敗談が多いのです。言葉は、稍近世ばなれのした、雅味のあるものです。丁度、此の「醒睡笑」出版當時の寛永年間に、「きのふはけふの物語」といふものもあります。これは、隨分猥褻な話が多いのですが、矢張り一種の噺の本です。以後京都を中心にして、曾呂利や一休（例の一休和尚）に關する此の人々を材料にした、本の名前にもした噺の本が年々出版せられてをります。其後京に、露の五郎兵衛といふ名人が現れました。この男が、また京の祇園や北野などで、露店を張つて、辻話をした、辻話の先祖だ、否咄で金を取つた、その祖だといひます。年代は、延寶天和の頃からです。此の男の話を集めたものが、元祿年間に、幾種も出來て居ります。今、その中の一種から咄の一例をいひます。

此頃、既に輕口といつたもので、（その最も古いのは、延寶の年間でせう。）現に此本は、「輕口露がはなし」といひます、その中の一。そろ／＼町人や田舎者が材料の大部分を占めてをります。

〇或る在郷に七十ちかき姥あり。似合ひたる者の方へ嫁入をするに牛に乘り、二十許の孫に牛の口を引かせ行く也。道にてさはる荷物の有るを見て、孫、牛に聲をかけ、のいて通れと云ふ。姥これを聞そうて、通れといはんこそ本意なるに、のいてといふ言葉は氣にかゝり不吉也、いや／＼けふは行まいと、嫁入を止めけるも興あり。

中々含蓄のある話です。これなどは、比較的短いのを拔いたので、もつと長いのもあります。丁度これより稍遲れて、貞享元祿の頃に、江戸の長谷川町にゐた鹿野武左衞門といふ男が、坐敷咄並に仕方咄といふものを始めた。丁度一種の今日の寄席の落語の如き形です。此男本業は、塗師の職人でした。貞享の頃は、中橋廣小路に莚張の小屋を作り、木戸錢六文で大に人氣を呼んだともあります。此の男、後に或る危禍に引かゝつて、大島へ六年間流罪に遭ひました。此の男の作を集めたものに、有名な「鹿の卷筆」といふのがあります。「鹿野武左衞門口傳話」といふのもあります。余り人に知られてゐない「口傳咄」から、一つ例を擧げ

ませう。江戸小唄のそれこそ誠の祖です。

○三人輕口

上野の茶屋に女、茶を立て居る所へ高野の坊主と座頭と、こんやと立より、茶を飲み居て高野の坊主申けるは、上野ののゝ字は高野のやの字と申ける。こんや聞いていや〳〵片假名ののゝ字じやと申しける。座頭聞いていや〳〵杖つきののゝ字じやといふ。茶を立てし女申けるは、いや〳〵上野ののゝ字ハ、襷がけののゝ字で御座りますといふた

といつたものですが、概してまだ小唄といふ程短かくはありませぬ。さて愈々江戸小唄の話に移ります。以上は、江戸小唄の生れる前提のやうなものです。(以後、江戸で小唄が流行してゐた當時大阪・京にも輕口で流行ましたが、又出版物もありますが、が量と質とに於て、迚も江戸の比ではありませぬ。で一切、京阪の問題は省きます。)

江戸小唄の眞の發生は、明和末、安永の初めであります。即ち小松百龜(藥屋の主人で、浮世繪も描いた)、此の男の作、「聞上手」が、安永元年に生れてをります。翌年その二編が出で、翌々三年には、その三編が出てをります。尙百龜と同時に木室卯雲の「鹿の子餅」といふ本が安永元年、その後編の「譚嚢」が同六年にも出版されてをります。此の百龜と卯雲との著作、期せずして安永元年でありますが、これが要するに、江戸小唄興隆の曉鐘となつたのであります。無論、江戸といふ土地人間の氣風が、上方系統の生ぬるい、比較的長唄にも飽いてきたせゐもありませう。鹿野の咄は、丁度それを江戸化した最初のやうで、それが愈々押進んで、あの明和頃から文化頃へかけての、奇警寸鐵、何とも形容の出來ぬ小咄、(文學上からいつても、特殊のもので世界に誇つてもいゝ一種の型)が出來上つたのです。當時狂歌、川柳と、短かい文字の滑稽文學が殆ど同時に榮え出した、それにも無論伴つてもゐようが、とにかく狂歌川柳以外、一種の小說体をなしてゐる、(即ち會話と地の文とがあります)しかも泣き笑ひするやうな人生の生きた或る斷面を我々に見せてくれる事は、とにかく我々は、無數の此等の小咄作家に感謝していゝと思ひます。作家といひましても、これは無論當時の民衆そのものでありませう。或る一人の作家が、澤山の小咄を作つたといふよりも、小咄本

の作者は、本の作者で、即ち市井の間、大衆がしせんに作つた小唄を唯彼らは筆記し、集めたといふものだと思ひます。それが寛政文化頃の末になると、一人の男が、それが本の作者でもあり、又その内容の小唄の作者でもあつた、即ち强ひて工夫し考案して、一人が小唄を澤山作つたといふ傾向もありますが、しかしそれ丈、此等の末のものには、わざとらしい不自然さがあります。たとひそれが文壇の大家の作であつても。(たとへば、此點から、一九や馬琴などの唄本は、初期の、無數民衆のしせんの創作を寫したと思はるゝものよりは、嫌味が多いのです。が、中には、これらでも、二三、名作の小唄がないでもありませぬ。)さてさうして、此の安永頃になつて、始めて、小唄は、材料に於ても、町人に徹底した。武士階級では、大名もあり家來もあり、又最も多いのは仲間であるが、それらは、凡て町人から笑草になるために必要なものとなつたのです。さうして、範圍は、ひろくなり、遊女買ひも夜鷹買ひも、その材料。好色の上に、利欲の上に、凡て人間諸相のあらゆるものに行き亘りました。丁度當時の長篇的文學、即ち洒落本や黄表紙や滑稽本などの大衆化、町人生活中心であるのと同樣です。

さて、今、當時此の小唄又は小唄本の作家で有名な文壇的大家としては初期の百亀など、天明頃の蜀山人、朋誠堂喜三二、寛政頃の山東京傳、振鷺亭、烏亭焉馬、感和亭鬼武、曲亭馬琴、櫻川慈悲成、十返舍一九、東里山人などがあります。が寔は、此等の文壇的大家のものよりも、素質に於て、輕妙、皮肉なものは、安永天明頃の、(江戸小唄としては、初期であります)無名の人々の編輯した小唄本です。前に列擧したやうな文壇的諸大家も、實は小唄に於ては、素人の方で、露骨にいつたら、無名の玄人側を眞似たり、その儘借用したりしてゐるからです。で、此の安永天明頃までの、從來余り活字にも現れなかつた珍本の小唄本の中から、今原本に就いて、その三四を例として擧げてみませう。此年代の小唄本は、形も洒落本と同じで、(即ち小本)私の最も愛好するものです。

○夜鷹講參。夜鷹講參、夜中時分、内の戸をたゝく。コレ嬶ア開

けてくれ「こなたは、もう歸らしやつたか」「イヤひだるくてならぬから、飯を喰ひに戻つた」女房「ひだるくば、なぜ荷の蕎麥でもまいらぬ」「ごふこれがきたなくて喰れるものか」（安永二年の「再成餅」といふ本）

○茶釜。麁相者、茶釜のふせて有るを見て、何かこゝに黒いものが有。チヽそれは茶釜だ。なぜ此茶釜には口がない。「はてふせてないたといへば「引くりかへして底もない。（安永三年の「茶の子餅」）

○花見。けふ花見に行つたが、惡い時行つた。花がみんな落花してしまつた。おぬしも花でも見に行く者が、そんな文盲なことないはぬものだ。落花したとは、馬から落ちたことだ。（安永年間の「梅やしき」から）

○大屋。貸店の札を子供がいたづらに放す。度々に及べば、大屋どの案じをつけて、厚板にかし店と書て、釘にて丈夫に打つけ、是では二三年はこらへる。（天明五年の「猫に小判」）

○新宅。友達が普請をしたと家見に行き、「コリアいゝ普請だ、餘程かゝつたらう。然し何ンぼ裏でも間口をば、もちつと廣くして置ばよい」「是じやア葬の時に、棺が出れへぞへ」「此男は何ンの事つた。家見に來て、いまく\しい事をいふ」「コリヤアあやまつた、それなら出るく\」（天明六年の「あふぎ賣」）

○麁相。急病家へ行くとて、脇差と思うて擂古木を差して行。病用相濟み、病家にて擂古木を見て、扨もお前は麁相千萬、取違へる物こそあらうに、脇差と擂古木とはと笑へば、憎き女房め、か樣なる事を氣を附けべき事なるに、立歸り叱らんと、暇乞もそ

こく\に眞一文字に馳せ歸り、我内を取違へ、隣りの内へはいり内義の縫物してゐる所を、おのれ憎い奴脇差を取違へ指たるを知らぬ顔に見なし、萬座の中にて耻を與へ、言語同斷不屆者めと叱れば、是はしたり、隣安さま、何を仰有りますといふを見れば、隣りの内義、是は麁相と我家へ飛んで歸り、女房が前に手をつき、只今の不調法御めん下されませ（これも「扇賣」からです。）

まだ例は、幾らもありますが、時間の都合上、略くといたします。偖、この小咄の榮えたのが文化頃まで、以後もないではありませぬが、大抵古人の糟粕を嘗めてゐるのです。末期、後の仮名垣魯文などの一派によつて、盛んになされた三題噺（勿論此の三題噺もその最初は、文政前後の三笑亭可樂ですが）などの話や、又は、天保頃からの寄席に於ける落語の流行、右の三笑亭可樂や、その門流、前にも一寸名前だけ出た烏亭（立川）焉馬の後世落語興隆の上の功績、並にその傳統の話、及び現在の各派に關する話、などもありますが、それは別の機會にいたしませう。

――八月廿二日、ＪＯＣＫにて

依託書目、（御購入御希望の向、一應御照會相成度候）○アラビアンナイツ（[illegible]協會本）十五圓○雜誌性の增刊未亡人の性的生活、情死の研究、主婦之性的研究計三册一圓半○（松田、平井）性的隱語集成初版三圓○長枕褥合戰他二篇和裝四六判三圓○慶長物語（和裝大形）三圓半○嫩柳（バレ句集）橫本三圓○變態資料一より五、七より十一他臨時號計十一册十五圓○變態十二史本（社會、藝術、見世物、人情、

（表紙二より）婦の惣名となつて、お鍋買ふ奴云々、其奴はごいつじや〳〵の唄から、ごゝ一の名を生んだ、それが、文化のはじめ頃といふのは、斷定していゝ事です。

偖、此のごゝ一、原始的ごゝ一を、誰が唄ひ出したか、これは、鷄飯屋の女中の一人であつて、宮の須賀生れで、お仲といふ女が、唄ひ始めた。此の女が、所謂後にいふごゝ一を流行させ、當時、宮の遊女はじめ一般が歌つた。といふのが、「都々一節根元集」といふ本に現れてゐます。此のお仲に就ては、また、當時宮の花柳界に於ける一女性ではあつたが、一種の傑物、成功者として、今日でも宮の古老の口の端に上る位ゐでして、このお仲に關する傳說は、樣々ありますが、それは本題以外でありますから略きませう。このお仲は後、神戸町第一等の遊女屋鯛屋の女房になつたとも、仲居だつたともいひます。

扨、ごゝ一の別名として、當時お龜のふし、お龜の唄ともいひました。即ち宮のお龜が一般に、酒席などで唄つたせゐでありませう。又、神戸節ともいひました。無論此の神戸は、當時、第一等の遊廓地、出來た年代は、一ばん新しいが、大樓の多かつた事、遊女の階級の優れてゐた事で、明治以前まで、第一等の地位を占めた此

（表紙四へ）

寄贈紹介

○變態商賣往來　宮本良著

特殊商賣物の資料を多く集めたもので、好個の風俗資料である。就中現代篇が面白いと自分には思へる。却つて眼に觸れ易い此の現代篇などかうして根よく並べ、解說を附した所後代へ遺す珍である。凡て各時代暗黑面の諸相の一端を捉へたもので、讀んでも見ても、面白い。挿圖多し。（會費二圓。東京市牛込區東五軒町二七、文藝資料研究會）

○日本文學講座　第九卷

例の續輯。藤村作氏の馬琴研究石川巖氏の明治寫實主義以前の小說などがある。（非賣品、新潮社）

○稀本百種　第二

杉本梁江堂氏の特志出版。氏の蒐集に係る物の中百種の解說、その第二編。初編の百種とは重複しない。初編に比して圖版多く、軟派本の說も一層微に入つてゐる。解說もまた多し。（非賣品、梁江堂）

○川柳大山みやげ　安藤幻怪坊編

單式印刷ではあるが、氣が利いたもの。大山石尊の總說から、各參詣の順序を踏んで分類、一々解說、又は引用せられてゐる。一つでに大山に關する小說雜著類の目錄などを附したら、一層興趣を添へたらう（袖珍、本文五八頁、六拾錢。東京市神田區表神保町十、坂本書店）

○稽古所　創刊號

新内の岡本文彌氏を中心とする道樂的音曲雜誌。硬からず下卑もせず、然し藝人の樂屋談も見えて面白い。唯餘り藝人素顏の寫眞かが多くて、記事が負けてゐるやうな氣がする。部門は、音曲界の凡てである。要めれば新味潑剌たる音曲畫報。編輯の氣の利いた事は非難なし。（菊三二頁、三十錢。東京市神田區多町一ノ四、川津書店）

○江戸往來　第一號

謄寫版摺。江戸名所の名寄、八犬傳めぐり、隱語考、狂歌江戸舊蹟誌など、好研究に富むもの。執筆同人諸氏の熱心さが紙幅に滿ちて、賣物雜誌の比ではない。（會費二十錢。東京府北豐島郡長崎町四一三五地、江戸文藝同好會）

○浮世繪傑作集　第三集

寫樂、歌麿、三蝶の三枚、原圖大の着彩複製。まづ上乘の出來、中、歌麿の湯上り美人に猫の戲るゝもの、最も人氣を呼ばう。（三枚二圓。大阪市南區問屋町五、飯田尙書）

（八月號）歌舞伎○長唄○演劇藝術○柳樽研究○鯱鉾○風俗研究○文藝市場○變態資料○本道樂○祇魚○國學院雜誌○歷史地理○國語と國文學○[illegible]史蹟研究○上○北隆館月報○學燈○（九月號）國語と國文學○國學院雜誌○本道樂○演劇藝術○江戸時代文化。

著者より

今月の原稿、海岸に一ヶ月子供と暮してゐたので、稍舊稿に屬するものと、先月下旬依賴されて放送したものと、先回の殘りとで全部を埋めた。都々一の起源は、以前の都々一起原考の通俗化、また諸々の發達は、先々月發表の講演原稿の底稿、（本年五月頃の執筆）即ちその廣記で、未發表だつたもの、それに十枚許りの量を今度書き加へたもの。一寸通俗的讀物たらけのやうな氣がするが、偶にはお許しありたい。○家內一同無事。○來月は、本誌も滿五周年を過して六歳目の門出、筆硯を新たにして、お伺ひしよう。（九月二日）

定價表

一册	貳拾五錢　郵稅貳錢
六册分	稅共壹圓四拾錢
十二册分	同　貳圓八拾錢

○郵券[illegible]一割增しの事
○照會は返信料添付の事

昭和二年八月二十八日印刷
昭和二年九月一日發行　（貳拾五錢）
禁轉載
編輯兼發行者　名古屋市[illegible]　尾崎久彌
印刷者　名古屋市中區[illegible]三丁目二三番地　英比貞道
印刷所　名古屋市[illegible]　井桑社
發行所　江戸軟派研究發行所　振替[illegible]七二番

廣告、刑罰、仇討、崇拜、遊里、傳說、作家）計十一册十四圓○明治性的珍聞史上中二卷六圓○無果貢（澤田五倍子）一圓半○覺後禪、[illegible]子、杏花天、牡丹奇緣、情海奇緣、桃花庵、和尚奇緣、金瓶梅（小形石版本）計二十册十圓○浮世繪之研究（日本浮世繪協會編）增大江戸名所號一圓半○同（同）大津繪研究其他七十○同（同）小林清親號七十。

（表紙三より）

の神戸に名を籍りて、神戸節といつたのです。即ち私の考へでは、初め、名前のない一種潮來に似た唄を、筑出の鷄飯屋の女中のお仲はじめが唄ひ出した、それが、間もなく、神戸傳馬一般のお龜が唄ふやうになつた。當時、神戸節又はお龜の唄、お龜の節と、いろ〱名づけた。丁度其頃生れた、一お龜買ふ奴、そ奴はどいつじや〱」の唄のはやしから、どゝ一の名を生んだ。で、このどゝ一の名は、お龜の唄、神戸節など稱したより最も新しい。これが文化頃だらうといふのであります。

宮では、この都々一が、文化年間、なほ榮えてゐた。現に、昨日一寸御紹介した「名古屋見物道中膝栗毛」、これは文化十二年版ですが、その中に、どゝいつぶしと肩にあつて「宮の宿から雨古渡り、ぬれてゆくぞへ名古屋まで」といふのを載せてをります。即ち此頃は、どゝ一ぶしとして、宮にこのやうな唄が流行つてゐた立派な證據です。それが江戸へ流れ込んだのは、判然分りませんが、文化の次、文政の六七年頃には、江戸の内外で大分流行つてゐたらしい。文政七年の筆記「遊歷雜記」といふものゝ、三河岡崎の本陣大津屋での話の中に、「當時、ドヽイツは東海道筋を始め、江戸市中は固より、府外の大塚邊まで流行つてゐた」といふ記事があります。即ち此頃はすでに名古屋の宮のごゝ一が、江戸へ流れ込んでゐた譯です

江戸では、都々一が二上りになつてしまひましたが、當時名古屋のどゞ一、（即ちどゝ一の本としては）三下りの調子であつたものゝやうです。三下り都々一。そんなものがあるかといはれませうが、現に、守貞漫稿にも「此節、江戸にては、三下り都々逸と云ふ。」とあります。さうして、都々一といふ名は江戸に奪られて、本來名古屋の都々一は、一般では名古屋節といふたらしいのであります。守貞漫稿も、この名古屋節で說明してをります。

扨、私のこれ迄のお話を一括すると、潮來から名古屋宮のお龜の節一名神戸節、一名、どゞいつ節とが生れた、これが後に名古屋節ともいはれた。これが生れて、それが江戸に流れ込んで、二上り都々逸となり、大流行を來し、名古屋へも逆輸入といつた形になつたといふのです。丁度これと同じやうな事が、文政十年七月江戸市村座に上演せられた「忠臣藏となせ小浪道行の常磐津の中に、「ういて潮來も名古屋と代り、そしてどゝ一ごんな洒落。」といふ文句がありますが、これが、以上の推論を丁度裏書きします。即ち、此の文政頃には都々一元祖の名古屋宮の都々一ぶしは、都々一といふ名は江戸に取られて、名古屋節と代り、都々一は、江戸チャキ〱の物のやうに思はれてゐた、その證據になります。

江戸の都々一流行を若干述べませう。江戸では、文政の末から流行、天保九年には、例の都々一坊扇歌、（一昨夜の謎々の話の中にも出ました。）この男が、都々一をまた流行せ、浮世節の名の下に、非常な勢を見せた。以後今日に至つて此の都々一は滅びない。即ち都々一中興の祖は、此の扇歌といふ男です。が從來、近世の著述研究多くは、否殆どは、此の扇歌の天保年間を以て、都々一の元祖、起原としてゐます。それ程扇歌が有名であつた事は、よろしいが、それは、單に中興の祖で、決して元祖ではないのです。即ち元は、この名古屋の宮、お龜の女たちが、その名譽（名譽かどうかは分りませんが）とにかく元祖たる地位にあるといふのです。

尙、大阪方面、即ち上方の、丁度此の都々一と同じやうな唄に、よしこのといふのがあります。歌の長さも文句も似てゐて、唯節が違ふ。このよしこのとの交涉もあります「通常は、よしこのが都々一より古いといひますが、これも誤り、都々一が享和から文化に生れた以上、よしこのは無論之より後の事であります。此のよしこのに就て、又、どゞ一の江戸へ行つてからの話、よしこの本、どゝ一本の色々な出版物の話などは、又の機會に讓ります。扨、以上の私の推定の根據となつたものは、小寺玉晁といふ名古屋幕末から明治へかけての生存した雜學者の、嘉永四年の自筆本「どゞ一ぶし根元集」といふものによつたので、此の自筆本が、少くとも今日發見せられた都々一文獻の最も重なるものゝ一である事を申しておきます。

最後に、まだ少々時間がありますから、此の機會に、私の所藏に拘る、「音曲神戸節」といふ大分古い寫本一册があります。これは、名の如く、神戸節を數百首、いろは別で書いたもので、これが即ち都々一の宮の神戸で流行つた時分文化頃の唄を殆ど載せてゐると思ひます。凡て古めかしい、遊里氣分を唄ひ乍ら、雅味のあるものばかりであります。その中から、數首を拾つて、お傳へしておきませう。即ち、都々一の江戸へ亘らなかつた以前、原始的都々一の標本であります。（下略）

定價貳拾五錢　送費貳錢
昭和二年八月二十八日印刷 [illegible]

昭和二年九月二十八日印刷
昭和二年十月一日發行

参編第十六冊（通編第六十一冊）

本文

尾崎久彌著

第十六冊
（通編第六十一冊）

爲永春蝶が事

爲永春蝶は、爲永春水（初代）の門人、尾張一の宮にゐた男、ぐらゐの事は、誰人にも簡單に知られてゐる事であらうと思ふ。

最近、一宮市市史編纂の森德一郎氏から手紙を寄せて、此の春蝶に就て知る所なきやと質して來られた。成程、氣がついて、先づ普通活字本の類を探ると、先輩の誰人からも、此の春蝶に就ては何とも書かれてゐない。仕方がないから申譯にと、家藏少々の人情本をひねくり廻した。行き當りばつたり、春蝶々々と探すのである。と、二三材料らしいものにぶつかつた。それを先づ御披露しよう。

一、春告鳥三編の春蝶が序。二、閑情末摘花卷之三の卷末廣告。三、玉兎壹の卷の口繪。以上である。帝國文庫の梅暦春告鳥にも無論ある。今、その序を原本によりて、その儘記錄してみよう。

春告鳥三編序

來る春もまた來る春もいちはやく。おなじ音をなく鶯の。玉の聲よりうらゝかに。明る初春初日影。光りかはらぬはつ空を。珍しそふに見はやすぞ。寶太平の人ごゝろ。三都はいふもさらなり。おくれがちなる片田舍山里の侘住居も。心ぞいさむ春の色。梢の雪の眞しろきも。いつしか梅の初花や。その立枝さへ佐保姫の。霞の袖の深みどり操たゞしき姫小松。野邊も賑ふ若菜つみ。こほりも今日は解そめし。若水汲や澤邊の水。四澤にみつる春水先生。御ひいき多きに人そばへ。幸ひ今度下りし序に。狂訓亭をたづねれば稽古ながらに此本の。序文を綴りて見よとし。いざれんごろなる言葉にあまへ。藪鶯のさえもなき。音色を恥ず片言を。こわ〴〵ながらならべしにして爲永大人の門に入たる。戲名を世に春告鳥。初音をやう〳〵出すのみ。狂訓亭をひゐきの諸君何とぞ予が名をも。呼せ給へと願ふになん。

江戸人情本の作者の元祖
狂訓亭爲永春水門人
尾州一の宮　狂花亭爲永春蝶述

といふので、これによると、此の年（春告鳥三編の年、即ち天保八年）又は前年（天保七年）末に江戸へ下り、かれ〴〵田舍で敬慕してゐた春水に逢ひ、入門を許されて早速此の序文の執筆となつたのであらう。また春水としても、始めて逢つた田舍出の當時の文學青年（又は文學中年）、普通だつたら序文を書かすのでなからうが、才幹に見所ありと思うての事か、又は田舍者でも入門料の澤山も持參したので、内々添削し作ら、春蝶の名の下に此の序文を發表したのか、その所は何とも分らない。氏名不詳の文學的田舍青年（又は中年）が此の天保八年から、春水門人、春水に因んで春蝶、更にそれに因んで、狂花亭と號した事は、事實。

さて此の春蝶、狂歌又は發句をもよくしたと見えて（とよくせずとも人眞似にやつたと見えて）此の春告鳥三編に、ところ〴〵狂歌の讃をものしてゐる。それを拾ふと、戀したふこゝろはともにつきそはん歸り木曾路の夢もうれしき。薄雲にかはりて狂花亭春蝶（春告鳥三編上の口繪）○うき旅や泊り〴〵の枕にも高き山ありひきゝ山あり尾州狂花亭春蝶（同）○引涙になく音も遠し小夜千鳥。門人春蝶（同挿繪）○氷烈たちまちに春暖にいたるを艸紙の勸善懲惡に輩ぎて、連れになる蝶も花見のうらゝかさ、尾州一宮の住、狂花亭爲永春蝶（玉兎壹の卷の口繪の中）

右の玉兎の句、その下の款によると、此の玉兎當時は、故郷へ歸つてゐたものらしい。と江戸滯在は、天保八年だけの事か。

閑情末摘花卷之三、これは無論金水の作であるが、その卷末に、廣告の中に、この春蝶作の人情本の廣告がある。如左きもの。

吾妻名所婦女八景　全六冊　爲永春水校合　爲永春蝶稿本

尾張の國なる山鳥山人東都旅寢のなせしころつれ〴〵に戲作をたのしみ狂訓亭の門人となり、中の鄕偶居のうち、つゞりならべし女八景師匠もおよばぬ人情の極意古今稀代の新板なり。

と大分響めあげてゐるが、これによると彼は、江戸にゐた一年位の間中の鄕に偶居してゐたと見える。此の「婦女八景」は、天保九年頃の新板でもあらうか。前號は、（狂花亭の他に併用もしたか）、山鳥山人——これは無論尾張に因んだものであるが、——といふたらしい。然るに、此の「婦女八景」は、新修日本小說年表に據ると、十二とあつて、靜齋英一（英泉の門人）の挿繪とある。この冊數は、さてどちらが本當なのか。

尙、此の「婦女八景」は、「春告鳥」「末摘花」などと同じく、小傳馬町三丁目東側中程の文溪堂丁子屋平

（長良の三へ）

洒落本改題本の新記錄

洒落本改題本の目睹二三に就ては、既に述べた。(「江戸軟派研究」既載「洒落本雜記」等。「早稻田文學」昭和二年九月號「疑問の縮本と洒落本」參照。)がそれ以後の分、しかも「新修日本小説年表」等に記載なきことは無論、即ちその四項に就てゞある。

一、「言葉の玉」と「廓の種」。二、「傾城買四十八手」と「余慶話」。三、「野良玉子」と「通子遷」。四、「傾城買花角力」と「娼客四十八手」。

一、「言葉の玉」は、小説年表の類を見ると、寛政六年(年表等は五年におくけれど跋に同年霜月とあれば出版は六年であらう。)版、春光園花丸の作である。廓の種も、作者は、華鷹で、年次は、文政六年である。此の廓の種は、石川氏の騰寫版復製本もあつて、相當に知られてゐるが、言葉の玉は、余り原本を見かけない。自分は、京の小山源治氏藏の原本を借覽して、知つてゐた。が、知つてゐたとはいひながら、二本(言葉の玉と廓の種)が同一だとは、知つてゐなかつたのである。即ち一々別物に扱つてゐた。白狀すると、拙編「洒落本集成」(未刊)の原稿にもと、小山氏から、「言葉の玉」を借り出したのであるが、その折は、何の氣なしに原稿を作り終つた。「廓の種」は以前から、原稿になつてゐた。それが最近末期大阪の洒落本に就ていふ必要があつて、右原稿の「言葉の玉」などをひねくつてゐて、ふと(若しやと)両方對校したら、容易に分る二者同一であつた。唯、序文と挿繪の點だけが違ふのである。本文は、全くの相同じいのである。序文が、「言葉の玉」では自序であり、「廓の種」では、不詳氏の序(但しこれが、「言葉の玉」の跋。)である。

言葉の玉序

海士龍宮に至りて。採得し玉は。面向不背の玉。我又青樓に遊びて。拾ふて戻りし玉は。言の葉艸の露の玉。新造禿の心を磨く。世理分の玉の教の玉章。されば彼玉の徳とおなじく。何處から見ても微塵も違はぬ生根玉。四方八方のお子達と。目玉なさゞめて、

さつくさ見玉へ。

あら玉の春日

春光園花丸書

その次、序歌の如きがあつて、（廓の種では、これが、句となつてゐる。）色と酒これにつきては錢かねもふるほど雪と月華の友、とあつて、池のへ鷺見がいふ、とある。この裏、皿に鯛、鉢、銚子に杯、うしろ衝立、といつた圖が半丁ある。この衝立に、竹を描いて、勝川春童と落欵してゐる。以上で序が二丁、序歌と口繪とで一丁計三丁。尙、挿繪として、第十七ノウ、第十八ノオのヒラキに、一圖がある。これは無落欵であるが、これも春童のものであらう。右、妓の甲、鏡に向ひ化粧、左、乙、鐵漿つけ、丙、文をよむ、背景は、部屋の体、簡素な筆であるが、生活がよく現れてゐる。最後に跋があつて、それが「廓の種」の序文と稱するものと、全く同文である。唯、そのをはりに、寛政五癸丑霜月廿八日とある。（この年月の記入は、無論「廓の種」では文政五年に變へてゐる。）署名のなき事は、「廓の種」の序と同樣である。その次に左の如き廣告一丁がある。

燭光西郭記　近刻　華麿作

新町晝夜のけしきあげやのもよふおきやのありさまきやくのあそびかた太夫のせりふ天神のまぶぐるひげい子の

いろ事までまめにみるやうにかきたる　おもしろきよみ本なり

うきふし雅話　花丸述　近刻

とあるが、これらが、刊行せられたか否かを知らない。尙、此當時、既に、華麿、花丸、共用してゐた事が知れる。（右の豫告の例によつて）此の「言葉の玉」は、小本、（廓の種もである。）序二、序歌と口繪一、本文跋とも三十一、廣告一、計三十五丁である。

二、傾城買四十八手は、京傳の作、寛政二年版たる事、誰しも知つてゐよう。余慶話は、今昔物語と角書があつて、宇田樂庵嬉丸の作である。然るに、此の嬉丸は、享和元年に「比翼紫」（品川本）の作もあるから、此の「余慶話」も創作かと思ふと、大間違ひ。全く「四十八手」の再摺改題である。唯、四十

入手とは、序と口繪とを變へ、且つ四十八手の初丁、題と名（京傳著の）の部分、二行までを改刻、以下は（第三行目）四十八手の版木を再摺してゐる。滑稽な事は、最後の丁ウラの「西行も」云々の句までもが同じである。尚、「余慶話」の序と口繪に就ていはう。

夜慶話叙

女衒女を見るに法あり。一に目。二に鼻すじ。三に口。四にはへぎは。膚は凝る脂のごとし。歯は瓠犀のごとし。家々の風。好々の顔。尻の見やう。親指の口傳。刀豆臭橘の秘術ありてこれを撰らむこと等閑ならねど。牙あるものハ角なく柳の翠なるハ花なく智あるハ醜し美しきに馬鹿あり。靜なるハはりなく。賑なればきやんなり。顔と心と風俗と。三拍子そろふもの。中座となり立者と呼る。人の中に人なく。女郎の中に女郎まれなり。貴な得がたきかな。或は骨太毛むくじやれ。猪首獅子鼻棚尻。虫喰栗のつゝくるみも。引ヶ四ツの前後にいたれば。餘つて捨るは。一人もなくひろいところがア、夜慶話。

五年ぶりにて　宇多樂庵　嬉丸述

文化三つのとし
寅の春日

と誡らしく書いてゐるが、殊に「五年ぶりにて」は、比翼紫の享和元年から數へての事であらう。誡にこれが、食はせものである。そのうら、花魁道中、若い息子客とそのかみらしきものと二人、これを見る圖、そのうら茶屋の提灯二つ、一個に仲之町とある。次ぎ一丁分、四十八手になきものがあつて、これが、書き出しである。その全文を拾ふと、

今昔物語　夜慶話　嬉丸著

物言へば口びるさむし秋の風實に翁が秀句の通りとかく人間は此大門口の出入を愼べきところなり口から彌陀を吐れし祖師あれば又虚をいはれし曾呂利どのあり虚から出た實でなけりや根はとけんとは大星が名言におかるが心を喜せしも宜哉されば口よりして似山客だヨト囁かれ初心に當る息子有女郎も又然なり

はしくは、本文の第三丁目ォ)の、
で晝夜をくらつちやアあやまるぜ。ノウ定公
に續いてゐるのである。以下、そのまゝ續いて、野良の第廿五丁ゥラ、この半丁分丈が全部彫り直され、但し文句は野良の通りであるが、漢字を多くし、字を詰めて、野良の廿六丁表の一行目、いふことだ」までが七行に彫り縮められ、その次ぎ本文一行分の處に、狹つくろしく、通子遷卷之二終とあるのである。

次、通子遷卷三であるが、これには、冐頭の青樓夜話通子遷卷之三(以上で一行)○(これ丈更に一行)、此の二行分入用の余裕を作る爲、この卷三の初丁表。(野良では第二十六丁ォ)だけを彫り直し、但し野良の文句は「其儘うけて、一句も違はぬが、漢字を多くして、即ち野良第廿六丁表の末行「アノねざうぞねんが」までを、彫り直し、以下野良の版木(第二十六丁ゥから)に續けてゐる。卷之三、本文の初めの一行分の○などは、この伸縮のやりくりのため、その胡麻化しである。以後、ずん／＼野良のまゝで摺つて、野良の第四十丁裏の五行目、「……………べし。此内主」が、丁度、通子の第四十丁ゥ(この丁數は、出たらめ。但し卷之二よりの追丁。凡て野良の版木のまゝ、手を入れてない。)の五行目終りである。然るに滑稽な、舊版繼ぎ足しの塲合の過失といふのか、粗漏といふのか、ヅボラか大膽か無心か、「此内主」で、以下野良は、「尙ほ次丁の表に亘つて數行の文字があるに拘らず、これで中斷のまゝ、通子では、第五章と、章をかへ、(これで一行)「よしはらの春の夕暮……」と、以下は、全く見知らぬ版木、書体も、漢字假名の使用程度も違ふ、これまでと違つた(野良とは違つた)漢字の多いのが、眼につく。さうしたもので、更に人物と事件を變へ、これが以下四十の丁數を追うて、四十八で、この卷三は終つてゐるのである。さて此の第五章以下が何であるか、卷四が何であるか不明であるが、恐らく以下も創作ならず、舊版木の同じく流用か、それとも或は、此の第五章からが、本當の

創作（新版木）であるのか、それも不詳。が、卷二と卷三の大半との實跡に見て、これも舊版借用だらうと思はれる。さて此の通子遷は、年代不詳であるが、恐らくは、文政末か天保のはじめか、或はまだ初代一九（野良の原作者）の生きてゐた時であるかも知れない。（此通子遷、無論、天明年間刊の通志選とは別物である。雲泥の差、內容体裁の上からも。但し共に小本。）

四、倡客四十八手は、最近自分が「早稻田文學」に書いた通り、疑問の洒落本として、何の改題舊版應用本かと査ねたが、まだ誰からも敎示がない。がそれが、筆者の自身にすでに答解を得たのである。何だ、矢張り洒落本（但し大ごんにやく）の文化元年版「傾城買花角力」（雲裡作）の舊版使用本である。頃日、この花角力を見つけて、容易に分つたのである。

即ち此の花角力は、中本、序以下丁を追うて、序、口繪、發端で第五丁を數へてゐる、その次ぎ第六丁目表の一行目に、あどけない取組（云々）と二行分を取つてゐる。唯この標題やうのものを取り除けて、その代り、娼客四十八手卷の中と彫り直したのである。その次、「金谷千樹の春の花」云々以下本文、すべて花角力の版木のまゝである。即ち、「四十八手」本は、その中卷は、第六丁から始まつてゐるのであるが、この第六だけは、丁の所を（舊版にあつたのを）削り、次から七とそのまゝ摺り出してゐる。さうして、此の卷之中は、花角力の第二十二丁裏の七行目、「……。そんなものかね」までゝあつて、「本や」云々の以下は削つてゐる。恐らく、卷之下が、花角力の次ぎの第二十三丁から、依例舊版應用といふのであらう。で、下卷は分つたが、上卷が分らない。花角力のまゝの僅か序とも五丁だけでは、いくらにもなからう。何か、それだけ、他の版木を持つて來て、くつゝけたか、又は新たに作して彫つたかとも思ふが、判然はせぬ。さうして、此の「娼客四十八手」本の作製も年代不明であるが、これも文政末か天保の初めであらう。版元も江戸か否かゞ分らぬ。

以上、自分最近自ら發見した洒落本改題舊版應用本の例であるが、第一の例は、共に同一作者であ

である。それが最近、剽窃は剽窃（或は原作者承諾の上かとも思へる。）であるが、尤もな筋だと思へてきた。それは、笑馬を三馬系かと思つたが大間違ひ、三馬の門人のは馬笑であつて、別人である。この笑馬の事、別に傳記はないが、「慶長以來小説家著作目錄」には、單に、尾張藩士だとのみある。唯、これだけである。これにヒントを得て、「玉の語言」を調べると、その例言に、笑馬は、數年來江戸新橋の近くに假住居してゐて、此の本の年（「玉語言」の文政五年）からいうて過ぎつる夏（文政四年の事か）、江戸から西百里の田舍に留る云々の意味の事が書かれてある。この江戸より西の百里とは名古屋の意味であることは勿論、これが尾張藩士の一方の說を裏書もする。江戸は、假住ひだつたといふからである。然るに此の「玉の語言」の例言によると、彼は、先に同じ洒落本で、新宿本「角雞卵」の作の合著があるといふ。所が、此の先にが、此の文政五年から數へて、余程の昔である、即ち天明四年だからである。天明から寛政、文化、それから文政、即ち、三十年以上の隔たりがある。〔此の天明四年の、間違ひない事は、「角雞卵」にそれ／＼に相當する干支を記入した笑馬（花山道人と署す）の叙があるからである。即ち此の干支、甲辰、これを天明四年に見ないと、文政五年以後になるからである。〕するると、尠くとも、此の男、天明から文政の四年頃まで、江戸にゐた、尾張藩のお留守居役ともいふべき男だつたのか。「玉語言」の例言を見ると、合著のやうにあるが、「角鷄卵」を見ると、月亭佳笑編、花山道人閱となつてゐる。（月亭可笑の佳笑は、花山亭の花、笑馬の笑と即ち花笑と音が似てゐて何とかいひたいが、矢張り別人だらう。）此の花山道人が、無論笑馬である。佳笑といひ、笑馬といひ、此の笑は、何處から來たか。月亭佳笑の笑から來てゐるなれば、笑馬が閱といふのもをかしい。とにかく、笑馬の、尾張者たる事は事實らしき事、並に、天明四年の「角鷄卵」にも關係のある事、三十年以上江戸に寓居してゐた事だけは、以上から確實である。唯、これだけの作の上の先輩たる笑馬が、如何して彙齋の稿本の筋並に文章を丸抜にして、吉原の地名にした「玉語言」を再現させたか。彙齋は知つてゐた事で存中（殊に、當時、彙齋の名に於ても二三の出版物があつた。）の事であるから、彙齋生

あらうか。或は、彙齋が、笑馬の古い稿本（未出版だつた）を借りて、そのまゝ丸拔、神戸の洒落本にしたのか、それを再び笑馬が、もとのものにして、出版したのか、その間、何とも分らない。が、唯笑馬は、金でもやつて、代作させたり、又は、稜閣の名を取つて、嬉しがつてゐた男のやうにも思へてならない。現在、「玉語言」も、氣がさしたか、あれには、作とせず、編としてゐる。（勿論、此當時は、編も著もごつちやにしてゐる例が多いが。）以上、疑問のまゝ。

〇附たり三、一九の「敎訓竅學問」

これは、倡客竅學問の再刻本であつて（中本であるからである。輪廓も、中本の大きさに變つてゐる。倡客竅學問初版は、小本。）その奥附に、此本の後へん青樓女庭訓（東里山人著）が既に賣り出されたともあるから、即ち文政六年（青樓女庭訓の年）以後のものであらう。或は、このなほ後、天保初期のものかも知れない。とにかく、これだけは、東里の名ではない、一九である。敎訓とした所にも、時代の關係（上司の壓迫もあらう）が窺れて面白い。が中はすつかり倡客である。これなども、改題本の異例。（但し、敎訓本は、口繪だけを、拙なものに更へてゐる。）何を敎訓するのか、分らないから面白い。尙、爲念、敎訓竅學問本の奥附（豫告）を載せておく。

穴學問後編　青樓女庭訓　完
先達而うりいだし有之候

通客玄話　假宅文章　全本三册　狂訓亭主人　柳山人　合作

とある、この狂訓亭は、春水である、すれば、春水の狂訓亭の存在その最初は、今自分としては、不確ではあるが、天保三年頃であらうと思ふ、即ち此の頃の、此の敎訓外題本は、再刻、又は再刻再摺本（初刻本からは、三本目）ではなからうかと思へる。尙、敎訓竅學問の丁數を述べておく。序が細字にて半丁、そのウラ口繪にてヒラキ、その裏が、本文の初まり、こゝに倡一と丁數が打たれてある。全本文卅五丁、即ち序の一とも全丁數は三十六丁である。

めりやす唄の話

分り易く、めりやす唄としましたが、本來は、そんなものはありませぬ、單にめりやすです。が、シャツの話でも始まるのかと間違へられさうだから、特に唄の字を附けたのです。

今日では、恐らく一部の人々を除いては、このめりやすの名の存在すら知られぬのが多いでせう。が、實は、めりやすといふ名前こそ廢つたが、その物自身は、他の流派の節に採り入れられたり、又は、廣く江戸長唄（略して長唄）の名の下に、極僅かではあるが、傳へられてゐます。現に今日でも、子供でも知つてゐる黑髮、五大力、明の鐘（宵はまちの事です）などが、これです。

一寸、江戸長唄の起原から述べます。江戸長唄と私が今名づけたのは、本來、單に長唄といふのは古く、上方唄にもあつて、現に元祿の「松の葉」には、上方唄としての長唄の存在があります。嚴密には江戸で生れた杵屋一門のこれは、江戸長唄といはねばならぬからです。此の江戸長唄は、普通の説では杵屋勘五郎の孫、杵屋喜三郎（後の二代目勘五郎）、元祿十二年に八十一歳で死んだ此の男が、江戸長唄の祖であるといひます。が、これは誤りで、まだ江戸長唄らしいもの丶体形は此の時に具つてゐませぬ。唯、杵屋一門の劇場音樂の祖であるといふ事は、事實です。即ち劇場と三味線とが結びついて、以後歌舞伎の專屬の形となつたのが、これからだからです。即ちそれ以前は、江戸の劇場では大皷や小皷や笛、太皷を用ゐた。それが三絃を採用するやうになつたのが、喜三郎の工夫だといふので、即ち江戸の劇場音樂は、大革命を起した譯です。但し上方には、すでに三絃が採用せられ、箏と共に、所謂上方唄を爲してゐるのでした。扨此の喜三郎以前、例へば元祖勘五郎などは、元來が一種の役者なのでした、が一方、小唄の名人で、劇場でも時をり小唄を、歌つた、然しこの時の小唄もすべて實質上、上方唄の類で、無論後世の江戸長唄といふ程のものでもありませぬ。

扨、此の喜三郎になつて、代々の俳優を廢め、専門の三味線彈となつたのです。無論時をりは、唄も歌つたのです。が、主なのは、唄よりも三絃にあつたのです。その弟子に名人數人が現れました。唄の方面では、若山五郎兵衛などといつた男。三味線の方面では、杵屋勘十郎、天下一平左衛門などでありますが、又、その子供が四人ありまして、それが、四人共曲節の方での名人で、數々の名曲を作つてゐます。特にその長男、後の四代目杵屋六左衛門、これの門人に名手が多く現れた。その門人の一人に、鳥羽屋三右衛門といふのがゐた、これは、杵屋の三味線の他、當時江戸に來てゐた宮古路豊後掾の豊後節の三味線も習ひ、現に豊後掾の三味線も勤めた。その門人に、松島庄五郎が現れた。寶暦頃の長唄本には、長唄を一口に松島杵屋といふてゐますが、その中の松島の初代が此の庄五郎です。此の庄五郎が、美聲類ひなく、その美聲を活用して、メリヤスを創めたのだと傳へられてゐます。勿論、庄五郎は「普通の長唄」(江戸長唄の意味です。以下單に長唄と略していひます。)此の長唄にも名人といはれ、現に長唄の家元としてその隨一たる名を占めてゐる位ゐですから、想像に足りませう。杵屋一門は、この前後も大抵「三絃の家元」として傳はつてゐます。尙、當時、此の庄五郎の外、長唄の唄ひ手としては、初代吉住小三郎、坂田兵四郎など〻いふのもゐました。偖、此の庄五郎の門人に、初め役者の女方で、大阪下りの佐野川千藏、後に都一中の流れの都和中に弟子入りして二代目都和中、この男が更に庄五郎に學んで、メリヤス並に長唄を唄ひましたが、これがまた頗るの美聲、後に富士田楓江又は富士田吉治と改名しましたが「江戸時代後世の學者(例へば山崎美成)などからも、長唄の世に行はれた元は、富士田楓江といはれる程、都下に喧傳せられたものであります。事實、江戸長唄は、此の富士田楓江の寶暦末期から、江戸長唄の江戸物らしくなつたので、それ以前は、松島でも、他の一派でも凡て上方唄の變態、又は丸輸入時代ともいふべきものです。偖、本題のメリヤスに移ります。

メリヤスは、元來、江戸長唄の中の變態もので、長唄よりは短く、端唄よりは長いものです。さうして、普通の長唄が、場所光景の芝居がゝつた描寫が多いに不拘、これは叙情本位、男女の情のみに

觸れてゐるやうです。さうしてその名實上の發生年代は、寶暦三年頃であります。唄ひ手は、當時の本格江戸長唄の名流ばかりで、無論此のメリヤスは、劇場で用ゐられ、而も獨吟の形であつたものです。が、メリヤスとして最も古いのは、「傾城無間の鐘」で、初代瀬川菊之丞が傾城葛城に扮した所作に唱つたもので、唄ひ手は坂田兵四郎、年代は寶暦以前の享保十六年、中村座で演じられたものと、普通にいひますが、これは、いかにも三下り調で、即ち後世のめりやすとも同一內容を具備してはゐましたが、但し當時は、無論めりやすとこれをいはなかつた。當時の正本には、唯、長唄とだけ記してゐるのです。即ちめりやすとして、まとまつた体形は、まだ出來てゐませぬでした。それが、後、寶暦年代になつて、名前の上にもメリヤスが生れた。それは、寶暦三年の「花のえん」で、唄ひ手は坂田仙四郎、小屋は中村座です。つまり名前の上では、この坂田の二代目が最も古いのです。然し、當時すでに一方松島庄五郎といふ名人が存在してゐて、これが前にも述べた長唄の大家でもあり、又このメリヤスの大家でもあつたのです。

從來、めりやすの祖に、三人の說があります。鳥羽屋三右衞門說、松島庄五郎說、富士田楓江(前名は佐野川千藏)の說です。(坂田兵四郎は、メリヤスを唄つた記錄の上では古いが、此の一流の祖にはしてゐませぬ。)さて考證的なお話は略きますが、私の判斷した結果だけを申しますと、鳥羽屋は、メリヤスの三味線を工夫した、從來の杵屋の本格の長唄流と、豐後掾の豐後節とから來て、更に低調遣瀨ない此のメリヤスの三絃を工夫し出した、それ丈だといふのです。次は、松島の問題。さて先是享保十六年には、例の坂田兵四郎が、「傾城無間の鐘」で獨吟を唄つて喝采を博したが、寧ろ此の坂田よりは先輩で、旣に本格の長唄の名手として地位を爲してゐたのが、松島庄五郎です。元來、此男、杵屋四代目の弟子、鳥羽屋と同門で、本格の長唄語りでありましたが、後鳥羽屋にも弟子入りして、メリヤスの三味の呼吸を飮み込み、遂に本格の長唄もさうであつたが、別にメリヤスの唄ひ手として名を高め、單に獨吟の名手だつた坂田兵四郎のお株を奪つたのが、此の松島庄五郎だと思ひます。そ

れを更に師に比して劣らぬ美聲でメリヤスを大に流行させたのが、庄五郎門人で、これも一方本格長唄の名手、寧ろ實質上の江戸長唄の祖といつてもいゝ所の富士田楓江だと思はれるのです。さうして當時の人々が、僅かにメリヤスの名實共にの祖として信じたのは、松島庄五郎であります。それは、寶暦七年に出版せられたメリヤスの集め本「メリヤス豊年藏」に松島杵屋とあり、即ち此の意味は、唄は松島、絃は杵屋の意味であるからです。富士田が、佐野川千藏改め二代目都和中を更に富士田楓江と改めたのは、その以後の寶暦九年の事であるからでもあります。

次に、それなれば、なぜメリヤスといつた變つた名をつけたか。そのお話です。つまりメリヤス名義の研究です。メリヤスと名づけたのは、いつからかは分りませぬが、その名の最も古いのは、前にも述べました寶暦三年正月の「花のえん」といふもの、中村座で坂田の二代目仙四郎の唱つたものらしいのです。恐らく此の頃でありませう。なぜメリヤスと名づけたか、これは、やはり色々な説があります。第一、その唄を聞いてゐると、氣がめいるから、吉原の里詞(さとことば)で、花魁が「氣がめいりんす」といつた、それが約(つゞ)まつてメリヤスといふ説。其他色々ありますが、やはり當時すでに手袋や足袋に用ゐられてゐた莫大小、此のメリヤスの名を假りて用ゐたのでせう。此の舶來の一種の布メリヤスは、本來はスペイン語で、天文年間に既に輸入せられてゐまして、それが種々のものに應用せられ始めたのは、享保頃からです。このメリヤスの伸縮自在の事と、當時流行しかけた、劇場で俳優の所作に應じて、長い短いを自由にすることの出來る江戸長唄の變態もの、此の唄を直ちにメリヤスと呼んだ、これが一番もつともな名の起りと思はれます。機智に富んだ江戸人のやりさうな事です。

次に、其の全盛時は、いつ頃か、その唄ひ手の名人は？といふ問題。めりやすは、前にも述べた如く寶暦頃から一流を成して榮え、現に、寶暦七年刊行の「めりやす豊年藏」といふ本には、めりやすの名の下に、本來のめりやすの他に、江戸長唄即ち本格の長唄形式のもの、古いもの（例へば石橋、道成寺の類）を採り入れてゐる處から考へると、一時、此のメリヤスが、狹義の江戸長唄とメリヤスと

の凡ての名に、又應用せられたらしい。即ちメリヤスの名に於て凡てを包含したと思はれる程に、此のメリヤスが大流行を來したのです。寶暦の次、明和安永天明と益々榮え、その頃遊里や市井で如何に持囃されたかは、(つまり劇場の役者の振の相の手から、座敷用、しんねこ用のものとまでなつたのです。)それは、その頃の社會小説又は遊里小説の黄表紙洒落本に、此のメリヤスの名が現はれ、或はその中の或る曲が、實際に、その描寫のスケとして採用せられてゐる事から考へても不思議ではないと思ひます。就中、遊里描寫に徹底してゐる洒落本に、此のメリヤスが出て來るのは當然、また氣分打出、光景描破、情調表現の爲には、持つて來いの材料。我々が、洒落本をひもとく度、いつも見受ける、作者が、男女の光景を描くため時々活用してゐる三味線音樂の類は、主に新内とメリヤスです。新内も、相當に出てゐるのです。が、その洒落本の極盛期即ち安永天明寛政頃の作物に、寧ろ平凡的に現れるのは、新内よりもメリヤスの方が多いかと思ひます。即ち一面、メリヤスは、我が愛する江戸文學寫實主義の中心、遊里描寫の精髓たる洒落本と終始してゐる觀があります。で此のメリヤス、その末期は、これも洒落本と殆ど同時代、文化文政頃ですが、文化三年の式亭三馬の序文のある長唄本「東風流」初篇には、メリヤスを收めて居りますから、此頃まだ榮えてゐたでせう。(文化五年の「東風流」二篇にも、若干のメリヤスがあります。)それらの中の數曲は、今日にも辛うじて傳はり居りますが、尙喜ぶべきことは、他の節の中に、このメリヤスが採り入れられて、今日なほ殘り居る事であります。丁度、文學的作品の洒落本が、光景の描寫を力づけるためメリヤスを中へきかしたやうに例へば新内淨瑠璃、この新内などの中に、此のメリヤスの一つ〳〵が、一曲の全部、或はその半ば以上が入つてゐるのがあります。明烏の中の、浦里のくどきの中へ現れてくる「昨日の花はけふの夢」以下のウタの如きものです。これは、寶暦七年版の「メリヤス豊年藏」と安永頃の「同袖鏡」とにあつて他には無いメリヤスの妹背川といふもの丶三分の二以上をそのまゝ取り入れたものなどです。其他劇場でのチヨボにも、此のメリヤスは殘つてをります。例へば、新口村の花道の出、それにメリヤスが

入ります。次に、メリヤスの終始を通じてその名人大家（主に唄ひ手の上での）といふのは、初期、坂田兵四郎、二代目の仙四郎、及び一代の人氣を得た松島庄五郎、次ぎ富士田楓江。その次、荻江露友――この露友は、別に荻江節の一流を開きます。――それらなどです。但し注意することは、これらの名人大家どもは、メリヤスに於て然りであるが、又本格の江戸長唄に於ても、無論大家名人、現に、今日の長唄の家元に、その系統が傳はつてゐる如く、彼等は、長唄に於ても、各時代それ〴〵の權威であつたのです。つまりメリヤスは、その彼等長唄の大家によつて、別に案出せられた、獨吟を主にして、沈痛悲哀、江戸中期の人心の頽廢加減に巧みに投合した、それがメリヤスであつて、此の副業の唄の系統が寶暦から文化へ約七十年間續いた、その唄文句の主なるものは、初めは上方唄から引き、又は脱化し、後は、山東京傳などの戯作者の作も相當にあり、江戸生粋のものとして發達した一種の、起りは違ひますが、とにかく新内と並び稱せらるべき江戸中期に發達した遊里物中心の三味線音樂、寧ろ清濁併せ飲み極めて雜駁な本格の長唄よりは、此の方が、彼等の名を日本音樂史の上に殘すに足りると思はれるものなのです。さうしてこのメリヤスが、後に生れる歌澤や又は江戸後期の所謂小唄や端唄の上にも、主に節の上に影響を與へたらうといふ事は否めませぬ。

　次に、めりやすの三絃とそのウタの詞とに就て、一般概念を述べませう。凡てめりやすは、劇場に於ても三味線のみを用ゐて、他の鳴物は一切入れなかつた、さうしてその調子も、間を延し撥數を少くして、極めて閑かに歌つた。（これはつまり、役者の振に伴ふ必要上からでもあります。）長唄に比較して短いものばかりで、特徴は、獨吟である事であります。古い川柳に、めりやすは「女の愚痴に節をつけ」「蚊屋うりがめりやす程な節をつけ」これで大体の節が分ると思ひます。松島庄五郎や富士田楓江は、めりやすの名手、さうして何れ勝り劣らぬ美音の持主だつたといひます。此の美音と、あの靜かな沈んだ調子、そこへ彼等の顏が美貌であつたら、一層の事でしたらう。恐らく劇場内全部の男女の神經をして寒からしめたものでありませう。唯その中、富士田は、以前女方の役者でもあつた

から、當然相當な美貌の持主でしたでせう。三味線には、今その傳り殘る稽古本を見ると、本調子もあり二上りもあるが、三下りが多いやうです、例へば、五大力、宵は待ち、凡て三下りです。がとにかく原武太夫の「斷絃余論」にも、めりやすを文句も節も野鄙淫靡だとけなしてゐますが、それは、河東品の彼のいふことだからといふ斗でなく、慥かにその通りのものです。しかし洒落本に現れる男女の詞のやうに、「メリヤスはイキなものだね」と當時の一般男女は喝采したものでありませう。次に唄はれた唄の詞は、初めは主に上方唄か又はその變化の類で、丁度本格の長唄が、やはり長唄と今日いうても、その中の古い物は、實は上方唄で、それが江戸へ來て江戸長唄となつたと同樣であります。(例へば、長唄でも、石橋や道成寺は、上方唄としても存在するが如きにです。)めりやすでも然りで、その最初といはれる「むげんの鐘」も、元は、上方唄なのです。

以上で先づ大体のお話を終りましたが、最後に、今日余り知られてゐない、特にめりやす本としては最も古い珍本中の珍たる「めりやす豊年藏」から、めりやすの、比較的上品なものを拔いてみませう。

題は、荻の露。はぎの露こぼれ易きに月ぞすむ、誓ひし人も諸共に世に住み乍らまゝならぬ、文はあれどもたよりなきあはれうきよの川がな、二瀬、思ひ切る瀬と切らぬ瀬と、あふて辛さを語りたや。

この中に採り入れられた「思ひ切る瀬と切らぬ瀬」といふのは、「松の葉」にもある有名な昔の小唄、それを入れた所など、それに言葉のけだかく古めかしい點など、そのまゝ詞だけは上方唄、といつたものです。新内の「藤蔓」には、かういふメリヤスがあります。

「花さそふ蝶は霞の野べを待つ、日かげの木々は花をまつ、人は情の夜すがらの二つ枕の花を待つホンに勤めはまゝならぬ」といふもので、これなどは、もう全くの江戸の爛れるやうな遊蕩氣分に觸れてをります。此のメリヤス、唄だけを、メリヤス本、その他派のものから又は洒落本などの小説から拾へば、二百にはあまりませう。以上を以て、メリヤスの大体のお話といたします。

——八月二十二日、JOCK。

謎々の發達（續）

以上は、凡て公刊物からのみの概説であるが、非公刊物の中でも、私の所見はあつた。即ち假外題「好色の何曾」、小横長本で墨摺、てつきり磯田湖龍齋の畫である繪本に、此の「なぞ」があつた。右に小さく此の謎があり、その左にこの謎に因んだ繪が、描かれ、しかもそれが數十回あるのである。以て、湖龍齋の年代即ち明和安永天明の間、此の謎が此種繪本にも存在した、爾程の流行を思はしめるものあるに足りよう。自分の所見としては、記憶まづ此の一冊であるが、末期赤本類（此種の）には、無論多からうと思ふ。

扨、此の謎が、右のやうな何曾の形ではなく、隱語又は暗示示唆の例としては、院本又は稗史類に多い。直接自分が眞相を傳へ難い場合、植物又は其他で示す。例の太田道灌の山吹の故事も此の類である。また稗史などによくある筋だが、惡人が忠臣を陥れんとして、人型に呪文を入れて埋めておく、それを勝手に掘り出して、忠臣に無き名を被せる。その呪文も、自分が拵へた謎的のもので、それを掘り出した當人が、尤もらしく解釋して、君公又は君公嬖妾を陥れるための意味だと附會するのが多い。これなども、ひろい意味の謎の惡用である。

又、判じ物の類としては、此の謎が、看板又は衣裳に用ゐられた。衣裳に、斧と琴と菊とを描いてよきことを聞くと意味したりすることは、周知の事であらう。「曲亭雜記」第三輯にもこれがあつて、この衣裳の風は、慶長から寶永頃までの流行のやうに書かれてゐるが、これに局限せられたものではないと思ふ。看板の謎は、これも「曲亭雜記」や「皇都午睡」等に擧げてあるが、分り易い二三をいふと、饅頭屋の店頭にはね馬の看板は、あらうまし。湯屋の入口に矢を出しおくは、いる（射ると入る）の

謎。白粉屋の出箱に凸の形あるは、中高な顔には、白粉のよく移る意。燒芋の行燈に、八里半は九里(栗)に近き味。同じく十三里は、九里四里の意。生燒を十里といふは、五里〳〵じやと云ふよき惡口。酢を賣る家の看板に、水嚢或は味噌篩を出したのは、す有りの謎。など丶いふのである。又これらは、物品からの判じであるが、繪判じは、よきことをきく以外に樣々ある。寛政頃には、これが浮世繪版畫の上にも現れた。例の初代歌麿畫くの大首美人畫の「高名美人六家撰」や「五人美人愛敬鏡」などにもよく現れてゐる。即ちその人物名が、凡てこの繪判じであることである。例へば、菜二把と矢一本と沖の景色と田とを描いて、難波屋おきた。松葉と矢と、煙管の半分と、下に川。これが、松葉屋喜瀨川。富錢の箱と藻と砥石と、戸と行燈と紙雛とで、富本豊雛といふが如きものである。これは、凡て歌麿の寛政後期、彼の爛熟の極點の作である。さて此の繪判じは、末期普通繪の上にもあつて、(但し主に玩具繪)國盡しなどが、凡て此の繪判じである。田に火を放つて、飛騨。繪を見てゐる稚兒を描いて、越後。蒲團から起き出した男を描いて、隱岐といつたものである。(其他、初代國貞の「流行美人合」の類にも、此の繪判じの外題はあつた。)

諷刺も、また謎の意味に、その表面からは扱はれぬでもない。とすると、幕末無數の禁裏公方を問題にした一枚物二枚續などの時世諷刺畫も、謎の畫である。など丶述べてきたら際限がない。で、私の此の謎、謎々の談義、詮索も、これで暫らく打切りとする。

補記―唄ひ物の謎は、前にもあつた謎かけぶし、此類は、無論無數であらう。我等幼時から聞く萬歳の太夫さオ三さの受け渡しにも、節のついたこれがある。天明三年春版の「粋辨當」(改補版)初篇にも、なぞおんごうがある。かけるのがいかゞはしくて、落すのは平凡、それを幾つもつられたもの、三下りの調子である。全詞句は、發表を見合はせる。

(表紙の二より)兵衛が版元である。尚、此の春蝶は、春水の門人の中では、新米ながら相當に重んぜられたと見えて、この「末摘花」三の卷末、同じく廣告の中に「春告鳥」の初編二編三編四編の出來うり出しの廣告があるが、これにも推奬の意味の廣告文を、狂訓亭門人爲永春蝶述として書いてゐる。(此文略)

右は、今差當つての人情本原本からの引抄、綜合であるが、市史の森氏から得た新材料には、一ノ宮在丹羽村の鷲津塾に春蝶が學んだらしく、當時大沼枕山と相知り、枕山、天保六年江戸へ歸り、その頃から春水に、春蝶を紹介してゐたらう。春水への入門は、かれ〳〵鷲津塾で同門の佐藤牧山や枕山の紹介によつたものか。同十年春、「爲永春蝶情史題辭」を一宮の森春濤に依賴して居る。などの事があつた。この森氏材料の最後の春蝶情史、これが所謂「婦女八景」の事をいうてゐるのではなからうか。とにかく其他分らぬ事が多い。御存じの方あらば、斷片記錄なりと、御教示を願ひたい。一宮市史材料の喜び斗りか、鄉土を同じうする小生の喜びである。尚「婦女八景」の所在これなきや、是非一度、その內容に觸れたいと思ふ。

◇寄贈紹介

●日本文學講座(第十卷)●(九月號)北隆館月報○風俗研究○歌舞伎○學藝新聞○趣味の家庭○學燈○歷史地理○早稻田文學○やなぎ樽研究○紙魚○川柳鯱鉾○典籍の研究○集古○莫讀●明治文化研究(三ノ七)○同(三ノ八)○愛書趣味(第十二號)○史學(第六ノ三)●(十月號)國語と國文學○江戶時代文化。

◇著者より

拙著「綵房綺言」が漸く出來た。實は、七月中に四校了、今か〳〵と待つてゐたのが、八月十日になつて漸く小村雪岱氏の表紙並に箱張の版下(肉筆着色)が來た。それに依例題字などを書入れたのであるが、その時、少々雪岱氏の表紙に小言が湧いた。表紙の表も裏も共に、娘を描かれたからである。姿勢は今度、出來上つたのと同じであつた。私は、私のこの本の內容、無論年增本位で、(女を主調にしたら)娘ではない。が娘を焦れた時代もあつたのだから、娘が半面位あつたつて惡くはない、が娘斗りでは、少々昔の田山花袋氏の江戶化で恐れ入る。で丁度、姿勢が裏の方の娘が、年增ぶりであつたから、版下の上に附箋をして、「此の女眉毛を落し襟の色を更へて、年增にしてやつて頂きたし」、と談じ入れた。さて愈々出來上つたのを見ると、大分よくなつて ゐた、着物の柄も原畫よりは、年增らしく變つた、眉毛は落しては ないが、一寸變つた、髷も變つた。先づ襟は無論、年增らしくなつた。先づこれなら表裏對照されて、申分なし。箱張りは、元から異存なかつた。箱もオフセットかといふのを木版を主張した(結局あの如き、箱も表紙も錦繪趣味の木版五六版摺が出來た。唯、少々廢頹味が足らず、上品さが多かつたやうにも思ふ。內容は、自讚に値せず、唯小生の二十代三十代の夢の巢窟―殆ど諸賢の、從來お眼に留らなかつたものである。呂昇の合邦を聞いて、玉手御前の幻に醉うたのや紙治の變痴氣論、二十代の時なりの隨筆、日本の秋を淋しがつたり浮世繪の贊、英泉と廣重に憧れたり、春の夜場末の劇場で見た吾妻與五郎を讃じたり、或は、熱い心を載せて旅に出たり、路上に待つたりした自作の戀歌(と書くと氣恥づかしいが)九十二首、または十九二十の時分からの時々の飽のカタ式の情緒とやらを、色々な手法で描いた短篇(これでも當時は小說だと思うてゐた)、その中の名殘り惜しきもの數篇や、さては英泉と新內とか、或る年或る春の廣重とその弟子を取扱つたものや、自分を大分濃厚にモデルにした或る女性掠奪の夢や、さては、愛慾の(らしきもの)や、さに苦しみを嘆いた感想數篇や、とにかく色とり〳〵、私の踏んで來た道は、多端であるが、一貫して、愛欲と聖愛との惱は滲み出てゐると思ふ。挿繪は、小生の肖像とも十一葉、內十葉は、英泉の大錦の寫眞で、三葉は原色版である。挿繪も表紙も箱も、先づ所期の九分まで、これまでの本で、一ばん我儘を通した本である。機があつたら見て評して頂きたい。(九月二十五日夜)

定價表	
一冊	貳拾五錢 郵稅貳錢
六冊分	稅共壹圓四拾錢
十二冊分 同	貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和二年九月二十八日印刷
昭和二年十月一日發行
(貳拾五錢)
第貳號

禁轉載

名古屋市東區東芝居東町西ノ十七番地
編輯兼發行者 尼崎久満
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者 英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社
名古屋市東區車道東町一五七番地
發行所 江戶軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

昭和二年十月二十八日印刷
昭和二年十一月一日發行

参編　第十七冊　（通編第六十二冊）

本文

洒落本雜抄

地口尻取の話

江戸後期の小咄

都々一好此本解題貧補（綿谷雪）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第十七冊（通編第六十二冊）

都々一好此本解題貧補

綿谷雪

貴著「歌派漫筆」自一一四頁至一一三二頁、貴下及び畏友川柳寺雀羅君の解題に對しての御約束の補正です。但し重複の分を除いては實に〳〵貧弱。（貴著に無い分だけを擧ぐ。）

● 都々一本

○富本文句入都々一ふし　（刊年不詳）
序なし。見返しに――松風を廣うけけりさくら草　柳橋――とある。柳橋が編者であらう。中本一冊。

○櫻どゞ逸　初編　（安政四年）
見返し外題には「新もんくさくら度獨逸」とあり。歌澤能六齋閣、梅暮里唄補編、歌澤小蝶正律・光晴舎さく丸畫。花林堂梓。無物老人の序あり。蘇武挿畫ともに馬鹿によい。二編以下寓目なし。

○繪本どゞいつ總まくり（己酉春）
貴著一三一頁、川柳寺君の分に「新板どゞいつ惣まくり」とあるものは是の誤記でせう。先きに「書物往來」誌上で逸名「都々一本」として騷がれた物、やつと全誌第十四冊目で竹山人氏が十圓とかで完本を得て正體の知れた物、其の實、そんな珍本ではなく、ザラに入手出來る本。

○大津繪どゞいつ　（明治板）
一一七頁「都々一大津繪」とは別本也。東都、井上勝五郎板。中本一冊。

○浮世辻うらどゞ逸　（明治板）
貴著に似た名多し、尤も別本。榛木主人の序。表紙見返しに「極粹仇文句の一粒より拔」とあり。内容は錢占ひと唄。中本一冊。

○新文句度々一はつ音集、初編　（刊年未詳）
鶴亭秀賀作、一鶯齋國近畫。錦橋堂梓。秀賀の序あり。中本一冊。

○同右書、二編
作者畫家同前。序なく、扉に秀賀の都々一一首あり。曰く、「津賀伊濱奈禮努於志覺利佐江茂、詩場新王加留留阿左阿羅志。」三編以下寓目なし。

○さはりどゞ一、大阪本屋爲助板
小横長本一冊。

○珍笑闔々都々一、第一號　（明治頃）
上村清助編。中本一冊。綿畫表紙

○新製五目どゞ一　（刊年未詳）
錦繪表紙。中本一冊。

○役者選どゞ一　（明治頃）
錦繪表紙。中本一冊。

○圓々都々一　（刊年未詳）
藍摺表紙。中本一冊。

○端唄都々一圖會　（弘化カ）
貴著一一八頁に全名の書あり。畫者も全じく貞房なれど、序者を異にす。野狐庵主人の序なれば別本。中本一冊。

○しん作いろはしりとり並に五十三次都々逸　（弘化以後）
見返しには○しんさくいろはしりとりどゞいつ○五十三次沓冠都々逸、と並記あり。矢倉山人松作筆とあり。品川屋朝次郎板中本一冊。

● 好此本

○よし此花袋、雪の卷（文久二年）
大阪河内屋板、袖香園主人の編序。表紙は長谷川貞信。雪の卷を初編として雪月花三卷あり。小横長本。

○粹の婦ところ　初編　（文久頃）
大阪河内屋、堺の具足屋合梓。一荷堂半水輯、、、貞信畫の十冊本中、初編がよしこの集である。小横長本。

○よしこの華袋、松竹梅三卷　（文久三年）
今、松竹の二卷より手元になし。一荷堂半水編、貞信畫。「よしこの華袋」といふも、其の包含する所好此の以外に端唄入芳此、佐和理どゞ一、大津繪、伊よ節、一中節、二〇か、浮れ好此、流行歌、手妻の種等各卷に入る。小横長本。

○よしこのさわり淨瑠璃、三編　（刊年不詳）
貞信畫。編者は半水だらう。佐わり入よしこの本。初、二は未見。本屋安兵衞板。小横長本。

○芦の花よしこの集、初編　（嘉永五年）
小の原公春序。春貞畫。京都の丸屋、伊勢屋、浪花のかじま屋他三店の合梓。初編より十編まで追々出板致升と卷末にあれど刊否不知。小横長本。

○よしこの袖みやげ、三編　（刊年未詳）
大和畫師西川祐春筆。東柳園花粧の序あり。よしこの各唄に作者名見ゆ。京都の丸屋他二店、浪華の河内屋他四店の合梓。十編まで十冊の由。小横長本。

○開化よしこの、初―五編　（刊年未詳）
大阪石川屋板。「何でもかへ歌」の卷末廣告に見ゆ。

○小歌梅里の花、初編（刊年未詳）
大阪大和屋板。小本全三冊中、初編がよしこの。

―十月六日夜。貧補終―

○洒落本改題本の新記錄（補遺）

その中の「夜慶話」に就てであるその叙（此の叙と本文の第一丁だけが、四十八手本と異る。）が、平賀源内の「細見鳴呼御江戸」の叙を

（表紙の三へ）

洒落本雜抄――上

○未飜刻のもの數種から、諸種の參考資料となるべき物、數條を拔く。但し此の抄、山中氏の「砂拂」などゝ重複せざるものである。（窪は、「日本文學講座」の中、小生の分擔、江戸文學と遊里生活を執筆の砌、景品として獲たるもの、その中の一也。此の分、彼には除す。）

○言葉遣ひの事

「魂膽總勘定」（半紙本三冊、墨摺。寶暦四年版）に現れてゐる。

魂膽總勘定　卷一　（第八丁表より）

○遊里言葉遣の事。郷に入ては郷にしたがふといへる事あり。孔子も大廟に入つて。こと〳〵に問ふ。是禮なりとの給へり。先其所の言葉作法をしり給ふべし。其里に入て其ことばをしらざれば。萬の理通ぜずして。あだかも馬鹿のごとく。初會に馬鹿と内かぶと見すかさるゝ時は。其女郎に逢ふ内は。一代その疵いへがたし。是本をつとむるの第一なり。たとはゞ。

こは。すかや。きついげいさ。きついすきさ。おがみいす。おがむによ。きつと。きざ。らしい。もてる。はねる。むかふの人。ごてさん。あにさん。ぬし。おいらがとこ。諸凡此類なり。此外時により家によりて。少ゝづゝの言葉あり心を付見聞し給ふべし。こはとは。事の枕言葉なり。たとへば。こは何をしなんすへこはあきれへすにへなどの類なり。すかやとは。すかぬと云ふ事なり。むかふの人とは。商人のこと也。きついげいさとは。しそこない。又はこしらへごさなどしたることとの。あらはれたるをいふ。きざとは心がゝりなることなり。きつとゝは。たしかなる事なり。たとへば。きつとよひ杯の類をいふ也。きついすきさとは。わやくをすること

をとがむる言葉なり。おがみいすとは。いやがりあやまる事なり。おがむによとは。頼む事也いはい。これなおがむによ。此文を一寸と屆て下さいなと也。ごてさんとは。茶屋船宿のていしゆなり。あにさんとは。茶屋船宿のむすこ。或は兄弟の事なり。らしいとは諸事の下つかさ也たとへば。ばからしい。いやらしい。にくらしい。氣の毒らしいの類なり。ぬしとは。客の事なり。もてるとは。女良の氣に入て悦たる事なり。おいらがとことは。あね女郎の事なり。又若ひ者茶屋などが。一分二分ないし壹匁二匁百匁などゝいふは。銀遣ひの事にあらず。金壹分を一分といゝ貳分を二分と云。金壹両を一匁とし二匁と云は二両の事百両を百匁といふ。是手形證文にはかくは書ねども。口ずさむときはかくいふなれば。おの〳〵心得給ふべし。

○

これとは、較違ふが。文政五年の京版「箱枕」（中本三冊）にも、當時の花柳界に於ける方言（無論、京と局限されたものであるが）が載つてゐる。それを要記しておく。

少許ちよつぼりといふ事にて此里の通言也。云々○少兵衛ものくせわすることなり云々。○包耻なに事によらずてれたばをいゝくろめたりまたははしらぢにてをしかくす事をいふ。○抱懐たいこもちとわけあるをいふ。そのこゝろは越後じくが、まへにたいこをだいているといふから、いひそめしなり。○著褌みせのをさことわけあるをいふ店のをさこをまはしといふより、しめてゐるといひはじめしなり。○問非やまをかけていふとおなじことにてなき事もあるやうにいゝかけ、又はかくしてゐるを、しつてゐるやうにいふて、くりだされたを、問非にかゝつたといふなり。○食糟これはがくやことばにて、しかられたことをいふ。云々。○西走東走ざしきに、じつとねずにあちらへゆき、こちらへゆきしてあはてるを、ゐらいちよかじやといふ。○白似まことのやうにうそをいふたり、あるいはみすく〳〵しれた事を、きやくにたづれたりするをいふ。○四郎様御ぞんじのらうそくの事也云々。○神代子野暮なきやくやすべて當世に合ぬ事をいふものをいふなり云々。○幕内やくしやとなじむ子をいふ云々。○講外（略之）○御託宣云々。見る事きく事人につげる子を、ゐらい御たくせんじやといふ○缺徳利又かけざとも略していふ。云々。よく〳〵しやべるをいふ。あるひはわるくちをいふをもかけざといふは、くちのわるきといふ事也云々。○仁兵へふたり寝るをいふ。こゝろは人べんに二の字ゆゑ。云々。○十字曲とは、十の字をまげれば七の字也。質置といふ事を云々。○北方わかさよりぶきの肴をいだすゆゑ、ぶきなといふ事をいふてうなり。○闇中とは、しらぬ事もしつたやうにいふものをいふなり云々。○筋とは、闇中と同じ

こゝろにて、しらぬ事もしつたやうに、大ていはなしのすぢにていふから、能かげんなことをいふものを筋右衛門共云。○御剃刀云々。さづかつたといふところなり。○彌付云々。かゝりてゐる者がついてゐるといふてう也。○鑄懸先年大坂にて、ふうふづれにてあるくゐかけ師があつてへうばんたかゝりしより、相かたとふたりづれにて歩行事を、ゐかけといふはやりことばなり。○置錢云々。なじみをおきせんといふ也。それを何にてもわけあるを、おきせんとはいふ。○金つぶとはもつさりじやといふ事也。うへは金にてよく見ゆれど、なかゞつちじやといふ事にて云々。○穿山甲云々。ちよつとあたればどこいでもかゝるといふこゝろにて、合羽の裝ぞくといふとおなじ。云々。○糸篇云々。やくそくのことなり、きんらいはたへていはずして、多く東といふ。○光琳とは畫師の名なり。此人の畫はかたち俗にぶさいくに見ゆるゆゑ、貌かたちのよろしからぬをくはうりんだちともいふ。○御持參とはあつちにそれほどに思はぬを、こちからはおれにほれていると思ふてゐるをいふ。云々。○帽子鉢卷とは女のはらをたてるをいふ。云々。○蜻蛉尻とは、ながじりするをいふ。云々。○鐵とは、ふぐの事なり。さる御國にてはふぐをあきなふ事きんぜいゆへ、てつぽうと異名して賣買するなり、これはあたるといふ心にて、てつぽうといふ、それをまた鐵とばかりいふなり。○冷ひやめしともいふ、これは小屋出といふことも也、もらふためしなくふといふことなり○起鬼念とははらをたてることも也云々。○軍次兵衞とはしわんぼうをいふ。云々。

右の拔記中、解に云々とあるのは、その出典の意味に關する説明であるが、その多くは歌舞伎芝居の人物名から起つてゐると解いてゐるのである。いづれ此の「箱枕」は、拙編「洒落本集成」などに全文收載の機會がある事と信ずるから、こゝには略いておく。

尙、言葉は、「辰巳の園」などにもある事、無論であるが、これは、飜刻本もある事であるから、略いておく。

○傾城の讃美

「息子部屋」（京傳作、天明五年版、小本一冊）に、床藝者踊子と傾城との比較論がある。曰く、

女郎の口さきでほれて、心で舌を出して居るをばしらず、實になつてかよふ客を、すこしはむごいともおもひそうな物なり。それを思はぬ女郎は、とても行末よかるまじ。さりながら兩親は下に居る二階で出合、屋根舟で色をし、親をば艫へ出して竈の番をさせ、飯焚同然におもひ、しかり廻し

て不孝するとも思はぬ床藝者踊子などからくらぶれば、傾城ほどまこと有ものはあらじとおもへども、色をも香をもしる人ぞしるなるべし。（以上、色の事の末尾）

○天明頃、深川流行妓の列擧

「通人枕言葉」（天明元年版、小本一冊。歸橋作）にあるもので、其木といふ男の話。此の其木は、歸橋自身をモデルにしたやうである。現に「深（富賀）川拜見」を作るというてゐるのでも分る。「深川拜見」は、彼の作である。

其 コレ仙丁。深川拜見といふほんを拵へよふとおもふ。（仙）仲町ハてゑげへしれましやう 其 てめへにそうだんしよふ。まづ子ども衆でも。美しひ所が。お今。お梅。おたよさん。手の有る所が上がたのおいち。おみな。おらへ。おこと。おこよ。一ト通りの所が。おその。おかね。おいく。おつる。おまち。おくめ。おぬい。いまの。お百。おしげ。新ぞう衆で。おみき。小とめ。羽おりで美しひのが。おとめ。おちか。おいち。歯を染たのが。甚介。義太夫のおいよ。としまの春治。此土地では。此三人より外は。歯を染た者はねへ。じやアねへか。いきな所は。大吉。八十吉。かね吉。ぶんごで佐名太夫。義太夫で八重太夫聲色で長次仙丁。龜。幸吉。さはぎで三吉。加兵衞。伊八。仙吉。まづあらまし。人の知つた所は。こんな物さ。くわしくは內に書付て置た 仙丁 さつゐもんさ。私どもも。高へ中だね（下略）

といふのである。

○寬政年間の吉原、女藝者男藝者の禁令

寬政年度に、女藝者などの禁、これらに對する手入があつたことは、いはれてゐるが、それが何年

の事か不詳である。多分七八年の事かと思ふが。或は、以下所引の「房情記」を、（小本一冊、年代不詳）寛政五年の版とすると、事件は、寛政四年の事になる。何か、此の年間の該禁令、本據あらば御敎へを願ひたい。さて、その噂が、吉原本「房情記」にある。房情記の序者は、匿名であるが、京傳に違ひなく、且つ同三年の京傳處分後に違ひない。それに懲りたやうな意味の事が書かれてあるから。で先づ此の作、寛政四年又は以後のものと見るべきであらう。それに曰く、

〔客〕アノこの間女げい者や男げい者が。會所へよばれたそうだがなんだの〔茶や〕さしたることつてもねへさうでござります（といひかれてゐる、いつたい廓中のことを茶やなどにきくは甚めいわくがるものなり）〔客〕おんなげいしやは。例のころぶ一件だそうだがほんかの〔茶や〕マアそんなこつてもございますそうさ〔客〕此間ほかで聞たら。なんだといつたつけ。アノ女げいしやが十人ヅヽ、組でる内のせわやきが一人に成たそうだ〔茶や〕ヱ、〔客〕そしてもしそのうちに何ぞわりイことがあると。のこらずゑんりよするじやアねへか〔茶や〕ヱ、〔客〕そしてかゝへでも地めへでも。その内は勿論両どなりをも當分せうばいをさせねへそうだの。なんぎなもんだ。しかしそのくらゐにせざアどうもなるめへよ。ともぎんみをさせるやうにしたアいゝ思ひつきだが。かんざしを二本より外にはさすなの。夏うらのついた物アきせねへのといふそうだが。こいらアいらざることだの〔茶や〕へヱといふのである。

○入墨の法

同じく「房情記」に、妓入墨を爲す件がある。他の本にも見た覺えであるが、此の「房情記」のそれを抜いておく。

〔客〕そのすゞり箱をこつちへよこしな。ときにこの針をまく糸がねへ〔女ら〕ほんにネヱ。ばからしいことをしいした。さつきとつておくのでおざりいしたものウ。きのつかねヱ〔客〕そいつアとんと

はじまらねへせんぎだ。よしにしようか［女ら］（しばらくがんがへ）もしい丶ちゑがありイす［客］どうするのだ［女ら］この中のネ。ふとんのうらをすこしほころばして。いとをぬきイせう［客］あとでこまるだらう世。［女ら］なアにようおつさア（トふとんをまくり糸をひいて歯にてくひきり針をまく）さアぞんぶんにおほんなんし［客］目をねぶつてゐな（ト左の手をまくりほりさうにして）こいつア　あかりうけがわりい［女ら］ほんにのうおれつてへ。もしこつちのほうへお出なんし［客］こうか［女ら］やつぱりおんなじこつておすネヱ［客］どうしたらよからう［女ら］こうしひしよう。そのみせたばこぼんをおよこしなんし。それをこけへ置イしてネ。灰ふきのふたをうらがへして。それへろうそくをおたてなんし。こう蠟をながしてさ［客］ヲ、あぶねへよし〳〵しめ〳〵。イ丶かじつとしてゐなよ。

○料理茶屋に對する品評

「遊僊窟烟の花」（小本一冊、寛政年間版）に見えてゐる記事である。

［素見人］そういつても鱸挺子、おらア料理茶やはよつぽど明るひよ、ソレ両國で大にし菊銘は、はいけいでちかづき、向ふへわたつて權佐がとこなら、地ぬしのいこうでつらねをよんで、狂哥をしやす。王子で近江や、ゑびすや、袖が浦で海上、桃林、しゆくの藝者をつれて、三軒屋の平七が所でのんだことも有た。目ぐろ歸りなら、日野どの橋の新月庵、ほりの內で手がるひ所がしがらき、ぞうしがやで耕向亭、浮花川でゑびすの宮の半次がとこ、荏土むきでうなぎのい丶が畢町のすゞき、鷲澤町の輜、ちよぴりのみには洛橋で澁屋、高橋でむかでやなどが今でのうがちさ、ソレかういつちやア板まへでもはたらひたやうだが、どこの茶やじやアすゞりぶたの積かへに、玉子やきも目にかける。何屋の內じやア濕の日には、芥溜にすて丶有隈笹をせんたくして、海苔ずしのふとんに敷、三ツもの丶丼を間にあはせるさいふ事まで、しつてゐらアサ。（下略）

○噺本・草双紙・浮世繪師の噂

「銚子戯語」(天明年間版、小本一冊)にこれがある。[芳]はなし本もまふふるい、ことしのくさぞうしの大通(だいつう)の山入や、弟(おとゝ)の甚六はいゝ出來だ[九]山入とやらは、ひやうしに金つかふ人のうわさや江戸の春とかいふほつくのあるのかへ[芳]あいそれさ[九]ありやあみやせんが、弟の甚六はみやしたが、いきだね[芳]ゑをよくかきやした(中略)、、芳丸路州源七ハさなりのかよひぢか部屋へ行[芳]はなやかなてんしきだ、かけものはなんだ[路]文覽さんの山水さ[芳]かくべつのものだ、小ふすまの梅ハ湖龍だの、湖龍といふものハきようなものだ、うきよ繪もいゝが、かうした手づよひこともいゝ。花は四季咲の杜若か少(すこ)庸軒流(ようけんりう)といふきざりがあふかた花屋だらう。(云々)

○書家と芝居の噂

同じく「銚子戯語」である。右の件(くだん)より少し前、茶屋での光景である。

、、路しうハがくを見て[路]篆書は、親和のことだ[芳]爰の額ハできがいゝ、しかし氣しやうハ九皐、かるいハ其寧、品(ひん)といつちやア東江だ[路]東江はとんだきれいだね[芳]こゝにもよつぽど弟子があるが、中にも花あふぎなどは號を五明といつてかきやす。三めぐりの額にも五明樓遊女花扇とかきやした[源]きざりは杜若、かるいは友右衞門、品といつちやア路考だとへ[芳][路]いゝゝ[源]坂三津が道成寺は、ごふでござりやすね[芳]是業(ぜげふ)は上手なものだよ、やつぱりせうの慶子(けいし)さ[源]そふでござりませふ、此あいだに見(み)にめへりやしやう。(下略)

右と右々とによつて、此の「銚子戯語」の年代を慥かめようとしたが、駁とは分(わか)らない。三津五郎の道成寺などヒントになるが、でも徒勞に終つた。が天明を下らぬ事だけは窺はれる。

○通人の名よせ

吉原假宅本、山宿の世界を映した「通俗雲談」(寛政年間版、小本一冊)の中に、通人の名を列べた所がある。當時の通人として、事實に近いものであらう。人名も實在のものと思へる。

[太志](前略)おそらく江戸中の通者は、文魚が死でこのかた、はし場の石子、石町の雷せん、藏前ではナ東里、黑十、文星、信夕、調宇、覺嘉、小田原町の戀東、八町堀の五方、神田の遊夕、松國、萬喜、文東、向河、卯柳、中之郷の機遊、本郷の左月、品川もみんな死でいまではおくまと草嘉斗(單カ)りだわへ、まだいけへことあるけれど云々。

○あらさがし

口の惡い男が、妓の床での、妓の留守中に始めるあらさがしである。一面、妓等の生活樣式を示してゐると思ふ。天明の「通士選」(小本一冊)からである。

(前略)大喜も一所に表座敷へ行き、仕の江が床へ入る、千どりハたんすから何やら出して出て行[淸]「コレ大喜や、おらがやつは餘ッ程きん〱物だの[喜]「アイサ美しいものでございます[淸]「何サ夫よりマア此夜具を見やれ、仲間市へ出しても百四五十匁斗りが物は有、こん地の錦にそして緋ぢりめんの三ッ[喜]「もしへもん所は三ッ柏でございます[淸]「ヤそりやアおれと同じ紋だ、なんときつい〱[喜]「ヤモすごい事さ[淸]「此茶だんすの中はどうだ、ハ、ア一ッはざせん豆、一ッは梅ぼしの煑たのだ、是さ此ように酒しほだくさんに煑るから此あまつたるさ[喜]「モシ〱それハきつい惡でございます[淸]「しかし此たばこぼんは安イ、コレ〱下の引出しには、みす紙の殘りが少し、こりやアなんだハ、、、引ッぺがしが四五枚有、こちらの引だしはなんだ、ハア金龍丸だ[喜]「モシ今に來やせうにヱ[淸]「扨とちがひ棚はどうだ、ハア淺草のくわんおんのみゑいと三河じまの不動が有ル、こつちらはなんだ、ハ、、、改名が張ッて有。(下略)

地口尻取の話

江戸時代に生れた、一種の言葉の上の遊戯、その中の地口と尻取の話及び地口尻取の合体物の話であります。先づ地口から申します。

地口といふのは、本來は、江戸での稱へでありま す。(名古屋でも地口といひました。)大阪では口合といひました。無論此の遊戯、當時の他の文化諸産物の如く、上方がその發祥地です。で、大阪の口合に就て一寸、述べます。

此口合、これが江戸での地口と同じ物ですが、口合とは、如何なる意義か。無論、口を合せる、口は言葉の意味で、つまり一句で両義(二つの意味)を兼ねた樣なものをいふのです。がその両義の中、一つは、從來世間に周知の或る句で、その句に音を似通はせた句をいふので、それによつて世間周知の句——成句を聯想して、興味を涌かすといつたものです。大阪での此の口合に就ての最も古い本は、寶暦七年版の「穿當珍話」一名、比言指南といふ本ですから、此頃に既に立派な流行となつてゐたでせう。江戸でも上方の此の風が古く傳つてゐて、當時江戸では、これを地口というた。

さて此の地口といつたには、色々語原の詮索がありますが、両説になると思ひます。即ち地の口合、地とは、當地といふ意味で、江戸を指し、即ち江戸の口合、それを約めて地口としたといふ説。又一つは、似口、此の似は、似るといふ字を書いて、似た言葉、それが似口、それが更に、似の音に土地の地を宛てゝ、地口とした。と此の二説があります。曲亭馬琴などは、江戸の口合の意味で、地口だといふ方です。

偖、以下、私のお話、時々大阪方面の口合や口合の本にも觸れますが、結局は、異名同物、口合と名は變つてゐても、江戸の地口の事だとお聞きとりになつて、口合といふ折があつても、反射的に地口と御諒解の樣、望んでおきます。話は、年代

順にして、或は上方を說き、或は江戸を說きます。大阪方面での、口合の發生は、餘程古く、享保頃には、すでに体形を爲してゐたと思ひます。享保から寶曆へ、寶曆には、一種の口合敎科書ともいふべき「穿當珍話」が出來てゐます。此本、小本一冊、分類上では、洒落本の中に入れてをりますが、決して小說体のものではない。筋は、比言指南と看板を懸けた雅人の處へ、これも雅人出立の烏溪といふ男が訪ひよつて、比言に就ての指南をうける。所へ、他の門人たちも參上する。さうしてとりかはす師弟の座談、先生の指南手解きの言葉、並びに擧げる實例などを記して、唯それだけに終つてゐるもので、一種の風變りな作物、一名比言指南の名に背かないものです。此時、先生は、烏溪の問に答へて、口合に就て、かういうて居ります。

「(前略)何、口合と申す物は、云敎ゆるといふ事もなり難い物で御ざります。云々。とかく其時のとりあひよく拍子よくいふが第一でござります。余所へ參りては一通りの挨拶すみて、煙草盆其外其あたりにある道具類又は盃にても出れば其器やうの物に付ケて隨分輕くいふがよい、もし又前かたよりいふべきと案じ置きたる口合あらば、其時の張合よく即座に出でたる樣にいふが上手、僅か一つ言はうとて前置をなが〳〵といふは下手の癖。云々。」

さうして、此處へ門人數人が來て、口合混りの會話をとりかはす事になります。終りに、諸道具盡などの口合の實例が載つてゐます。片手桶つゞれの錦(敵討と片手桶と口合です。)茶瓶はいながら名所を知る。(茶瓶と、茶人とです。)茶釜てる〳〵鈴鹿はくもる。(茶釜と阪はと口合です。)家名盡では、足袋やを入れて、足袋や道づれ世は情。弓屋を入れて、弓屋ひだりの御長者樣。人倫盡しでは、姉妹の姉を入れて、姉てたがひに取かはす、(姉てと豫てと。これは、一寸無理なやうです。)弟を入れた、弟は氣でもて(男と弟と口合です。)、其他獸盡などがありますが略します。また、これより以前、享保頃には、江戸でも地口附といふ事が流行りました。同八年の頃です、がこれは、一寸口合とは違ふ物のやうに思はれます。天明の頃には地口が變じて語呂(語呂合せともいひます。)となつたとありますが、此の語呂が、又後には、地口として取扱はれてをります。即ち、上方の口合、

江戸の地口には、元は、或る句の一部分丈、他の語に似せてゐた。即ち一部分丈に、両義を兼ねてゐた。それが、此の語呂では、その語全体を全く他の語の意味に作りかへてしまつて、その巧いのは一々の發音までもすつかり變へてしまつて、しかもそれが言葉の上の調子から、世間周知のある成語を聯想させるといつたもの、つまり地口が長くなつて、惣体が音や調子を似せて他の語に變つたもの、それを語呂として取扱つたやうです、がこれが後には、地口として取扱はれます。即ち後世の地口は、その殆どが語呂であるのです。

天明の頃の語呂は、「言葉つゞきによりて、さもなき言のそれと聞ゆるなり」とありますが、その通りで、一二の例をいふと、九月朔日命はおしゝ、これはふぐは食ひたし命は惜しゝのふぐは喰ひたしと九月朔日と語呂が合つてゐるのです。ぶざな客には藝者が困る、これは芝の浦には名所が御座ると語呂です。これなどは、句の全体が語呂を為してゐます。然しこの中の、河豚は食ひたし命は惜しゝの語呂九月朔日命は惜しゝは、一方地口としても既に取扱れてをります。即ち當時、地口と語呂とが、殆ど同じ物であつた證據であつて、天明より以前、安永二年版の江戸版、「當世風流地口須天寶」は、大阪版の「穿當珍話」と同じ様な本で、その一部分は、「穿當珍話」をそつくり引用してゐる位ですが、この本に、此の九月朔日命は惜しゝを、河豚は食ひたし命は惜しゝの地口として擧げてをります。當時、この地口は、落噺にも、應用せられて、その地口ばなしの例が、此の「須天寶」にも載つてゐます、忠臣藏の炭部屋の話で、「此の炭部屋こそ怪しけれと一槍ぐつと入れるに、手ごたへする、扨こそ師直は、こゝに隠れゐるに相違なし、尋常に出て勝負あれといへども音せず、大星は大音あげ、もろなふ〱といひければ、炭俵の奥よりどうれといふた、――といふ咄。これは、師直〱が、ものもう〱、でどうれと落をとつたのです。この師直とものもうとが地口だといふのです。つまり地口を應用したものが、地口咄といふわけです。

偖、此の地口(語呂合を含んだ)は、江戸末期益

々流行して、諸神社の祭禮に、余興として懸ける行燈、それに畵を描き上に地口を書く、所謂地口行燈が最も流行しました。地口行燈の本は、繪入本中形本で數種出版せられてをりますが、今その中から、末期地口行燈の地口の例を拔きませう。惠比須大根喰(これは惠比須大黑の地口)、大雜喰てこたへられねへ(これは誰もいふもの、即ち寒くつてこたへられねへ)、子僧とおかみさんの繪を描いて、小僧でざんすお女房さん(これは、ごせうでざんす拜みんす。これなどは、全くの語呂です)、夏になりやこそ涼み臺(待身なりやこそ疊算)、飯なくて釜のぞき(氏なくて玉の輿)、文は小僧の使(夢は五臟の疲れ)、鯛はよいもの使ひもの(旅はういもの辛いもの)、下手な寒聲欠伸に似たり(下手な考休むに似たり)など、末期の地口は、右に擧げたやうに、地口とは云ひながら、殆ど語呂で、しかも句の惣体がさうなつてゐるものと、過半がさうなつてゐるものと、その時々によつて違ひます。幕末の假名垣魯文などは、又これに熱中して、「地口雛形駄洒落早指南」といつた本もあります。

それには、魯文の連中の地口があります。ぎやうさん吞ずにおさへます、(酒はもういらないの意味。これが、へうたん鯰でおさへましよの地口。)これは、魯文自身の作です。土間の又ふへ(芝居の土間が又ふゑる。これは、吃の又平の地口。浮世畵師の芳幾の作です。)いなせあまのくだまき(お俠な女が醉つてくだまく意味、この本句は、妹背山のをだまきといつたもの。)これも芳幾の作です。この本は文久二年秋の出版であります。倘此の頃、すでに地口を洒落又は駄洒落として、當時の不良老年不良中年どもが、言葉の上に平氣でこれを使用し、その創作又は飜案、古人成句の剽竊に苦しんだ事は、この魯文の連中―粹興連と彼ら自ら稱しました―彼等の駄洒落を集めた此の「駄洒落早指南」などにも窺はれますが、これより稍以前、小說の上に、當時の此うした不良逸民ども(それが當時では、頽廢に徹底した享樂兒どもの最理想でしたが)その彼等の生活、日常を描いた即ち滑稽本などの上に、盛んに窺はれます。即ちその好例は、「八笑人」や「和合人」、「七偏人」とい

つた、鯉丈や金鵞などの作です。その地口即ち洒落が一層冗くなつたのは、鯉丈の「和合人」などによく見えて居ります。その一例、連中の頭分和次郎の宅、その和次郎の留守へ上り込んで、食物を探す矢場七、張吉、茶見藏の三人。其頃名うての銘酒宮戸川を見つけて、

矢場「ヤア強氣なものを見付けたぞ。張「なんだ〳〵。矢「此封のまゝ宮戸川が一ト陶、なんと歸命頂禮だらう。（有難いといふ意味です。）茶見「どうして歸命頂禮のが今日まで有るものか、今日到來のだらう。張「ナンダ又洒落か、さつぱり分らねへ。茶見「ヘン本當の地口をいふとどうも分らねへからいけねへ。余所へ行つて耻をかゝねへ樣に友達のよしみに訓讀して聞せよう。マヅ歸命頂禮といつたのを昨日到來と聞たヤツダ。そこで貰つたのが今迄有る家ではねへから今日到來だらうと洒落たのだわ。かういつたら分るだらう。是で分らねへければ聾だ。張「此方も聾だらうが其方も耳が遠いわ。茶見「ナゼ〳〵、張「ナゼとつて歸命頂禮といつたのを昨日到來と聞違へるからよ。」と。（これは和合人の初編の上にあります。）

さて此の地口洒落の趣向で出來た末期の落噺や又はこれを應用した茶番の類は、殆ど無數ですから、略きます。唯、江戸といふ當時唯一の大都會に住んでゐた都會人たる事を己惚れてゐた所謂江戸ッ子は、居住座臥、此の地口即ち洒落の主要部分を常に練磨してゐた、といへば分りませう。即ち此の地口に對する機智、その巧妙な程度が、彼等の主要なる教養として無くてはならぬものなのでした。

名古屋にも此の地口はありました。現に、文政五年春、私が度々御紹介する名古屋の增井棠齋といふ文化文政天保度の戲作者の手になつた、「似口早指南、鸚鵡返」といふ小本が名古屋から出版せられてをります。此の地口には、似口と書いて、じぐちと訓ませてをります。此本、廣義の洒落本の中に入れてをりますが、初めに地口が三百ばかり載つてゐ、終りに本文として、その本の句（即ち成句）が書いてあります。即ち名古屋にも當時地口が流行つてゐ、その教科書といつた

物であるが、此の本の地口は、「宇治は茶摘の花やかに、（これが地口で、その本は、瓜や茄子の花ざかり）。下戸に御飯（それが本は、猫に小判）といつたものです。さて大阪では、相變らず、此の地口を口合とはいうてゐましたが、江戸の地口行燈式の中形本が、これも繪入で大坂で澤山出版せられてをります。半紙本、（狂歌本のやうな）ものもあります。中形本で「繪口合集」、半紙本で「畫口合瓢の蔓」といつたものです。「繪口合集」では、鬼一法眼三略卷、これが本で、それを口合で景氣豊年歡樂の秋。天の岩戸の神遊びが本で、それが口合では、花の都の春遊びといつたもの。「畫口合瓢の蔓」は、口合の方法を、五十音の音の研究から始めた一種の教科書で、それに繪入で當時新作の口合が載つてゐます。それに、本文が、西に長崎薩摩潟、それが、四季に花咲さくらばなと口合でいふ。本文が、こがれこがるゝ紅蓮の氷り、これが口合で「堪へ忍ゆる無念の草履」（鏡山の草履打の繪が描いてあります。）といつたもの。その外數百口合即ち地口の實例、その中の秀句が載つてゐます。さうして末期大阪版の赤本に、「一ト口俄」の本が澤山ありますが、その俄なるものには、此の口合を應用したものがまた多いのであります。例へば、破三味線といふので、こないに朝から晩まで彈きづめ、やめていればチンともならず、アッア辛い、落「三すじやナア」。此の三すじが身過ぎと口合になつてゐます。

次は、尻取。これは、言葉の尻を取つて、それを頭にしてまた續け、その尻を取つてまた頭にして續けるといふ遊戯で、これも大阪では、だん／＼と稱して、すでに享保以來寶暦頃にはありました。それが單に言葉の尻を取つてゐるものは、だん／＼又は江戸で尻取。また言葉その物がまた地口になつてゐるものは、それが大阪では口合だん／＼、江戸では地口尻取。つまり地口であつて尻取といふ物です。寶暦七年版の「穿當珍話」、江戸の安永版の「地口須天寶」、共に、また口合だん／＼即ち地口尻取の例を收めてゐます。又、地口でない單なる尻取の類は、都々一や端唄や童謠、手まり唄、などに、尻取もん／＼として、江戸中期

末期、無數に現れてをります。又、洒落本、滑稽本などにも現れてをります。今「穿當珍話」にある口合だん〳〵、即ち地口で尻取を兼ねた物の例を讀んでみます。

やしよめ〳〵京の町のやしよめ、やしよめ久松（ひさまつ）さいもんで、さいもんでかはらの地藏菩薩、菩薩さめましやこなたへさ、たへさのふろふきせうがみそ、みそのつさめは嶋原で、ばらでこざかし牛うらぬ、うらぬ暮雪（ぼせつ）の雪よりも

云々といつた此の口合段々が、二枚斗りの量で續いてをります。（此の部分は、どういふものか、普通の「穿當珍話」の原本にも、又帝國文庫などの活字本にも洩れてをります。私の原本丈（だけ）にはあります。即ち附錄の三枚、この附錄が、全部口合段々です。）丁度これと同じやうな地口尻取が、「地口須天寳」にもあります。童謡にもある事、前にも云ひましたが、その中の好例として、名古屋の古い童謡、その一つを擧げます。これは、古いぼんならさんの唄の一つで、大体に於て尻取りになつてをります。但し普通の尻取で、地口尻取ではありませぬ。

にゝ柳の下のおひゝり様は、なぜ色黒い〳〵、お色が黒くばお日傘（ひがさ）お召（め）せ、お日傘京へ誂らへたれば、京ではやる紅葉傘（もみぢがさ）〳〵、紅葉傘に千鳥をかけて、あちらむけ千鳥こちらむけ千鳥、千鳥や〳〵濱千鳥〳〵。

此の唄の意味の說明もありますが略きます。倚此の尻取の類、童謡・俗謡等に多き事、それが全國的に普及せられてゐる事は無論であります。例へば「開いた〳〵、何の花開いた」の如きものは、日本全國殆ど共通の、尻とりで出來たやうな子供唄で、私の子供の時分もこれを唄ひ、又私の家內、越後生れですが、家內も唄つたと云ひます。

以上、地口（即ち口合）、尻取（即ちだん〳〵）、地口で尻取を兼ぬるもの（即ち地口尻取、上方流ならば口合だん〳〵）、の三つのお話でありました。殘念な事は、時間の都合上、尻取の話が簡單になりましたが、これは、この話の尻取といふ私の洒落にもなります。分りましたか。

――十月二十三日、JOCK。

江戸後期の小咄

此の夏の「江戸小咄の話」のつゞき、主に寛政年間から以後の江戸の小咄、一般には落語、延いては寄席の發達にも觸れてお話しようと思ひます。

初めに、寛政—私の認める江戸の中期—頃の一般落語中興の祖たる立川焉馬の話、及び當時の他の二大家櫻川慈悲成と三笑亭可樂との話、續いて彼等の門流並びに寄席の發達などを說き、最後に當時の噺本から、適當な小咄の實例——品のいゝ然しなるべく穿つた小咄を出來るだけ、お傳へしたいと思ふのです。

偖、立川焉馬の話。焉馬には、二代も三代もありますが、これは初代の話。元來此の焉馬は、落語中興の祖ではあるが、寄席で興行して錢を儲けた即ち藝人ではありませぬ。本職は大工の棟梁で、傍ら足袋木綿類を商つた、本姓は中村氏、俗稱を和泉屋和助といひ、本所相生町に住しました。文筆の才も多くあつて、天明頃からその作物は相當に出、殊に洒落本などにも、名作が數種あります。一種の町人出の文學者なのでした。此の男、元來多能多藝で、戲作の他、俳諧も巧み、狂歌も堪能であつた。號を烏亭焉馬、又談洲樓とも號しました。又狂歌の上では鑿てうな言墨曲尺（大工の本職を現してゐます）ともいひ、又洒落本などでは桃栗山人柿發齋などともいひました。寛保三年に生れ、文政五年六月二日に、八十才で歿しました。

さて、此の男が、また落語にも趣味を持ち、自分に創作の才もありまして、すでに天明四年以後時々落語の自作を披露しましたが、天明六年四月十一日には、向島の武藏屋といふ當時有名な會席で始めて落噺の會を開きました。當時、有名な狂歌師小說家などは、大抵集り、此の擧を禮讃しました。爾後時々此の噺の會を催し、追々門人も現れました。元より當時は、彼も彼の門人も、同趣味の人々を、日をきめて、場所をきめて招き、自作

の落語や狂歌などを披露し、披露しあつて、批判をしあふといふ程度でありました。が、此の噺の會が、町人風情としては、華美に流れ、又は、噺そのものが、聽衆（寄ろ來客）の興味を一層峻るため、興味中心から隨分野卑なものとなつたのか、爾後、幕府から此の噺の會は、時々禁止をうけ、文化頃は此の禁令が誠にうるさくありましたが、それでも流行の勢は、一二の禁令では迚も止み難く、で已むを得ず、文化十三年には、「昔物語忠孝の道ばかりせよ」といふ條件つきで、此の噺の會が許される事となりました。かうした落語流行につれて、その門人又は客分即ち同格の者に名人が盛んに現れ、それが、即ち二派に分れて、一は今日の藝人としての噺家の元を爲し、一は、趣味者同士の素人の會合、さうして主にこれは非營利的、といつた二樣を生みました。偖この焉馬の死んだ時は、葬式は非常に立派なもので、藝人作者俳優は勿論、大工左官だけでも三百人以上は見送つたといふ事でした。

當時、此の焉馬と同格で、主に噺の創作斗りに力を盡して、實演には余り與らなかつたが、噺の材料を、實演家どもに與へた點で功勞のあるのが櫻川慈悲成です。慈悲成は、芝の宇多川町に住んで、彫物を業とした男でありましたが、焉馬の客分となつて、焉馬同樣落語の皷吹に骨を折り、從つて、當時彼の創作になつた噺は、多く、また彼の編集になつた小咄本なども數多くあります。此の男、元は親の慈悲成ともいひましたが、後五代目團十郎から芝樂亭の號を讓られ、芝樂亭慈悲成ともいひました。勿論彼も相當の文筆家で、噺の創作の他に、他の小說類の著作がないでもありませぬ。この慈悲成の流れが、多く櫻川姓をついで名乘るのが多いのは、これから來てゐるのです。即ち幇間に櫻川を例の幇間を爲してゐるのです。即ち幇間に櫻川を此の慈悲成の傾向、——實演よりも噺の創作に力を盡したことに刺戟されまして、當時の一方文壇の大家たちも續々噺の創作、編集に耽り、小咄本などを多く出してゐます。例へば、京傳、一九、振鷺亭などといつた當時の洒落本讀本滑稽本などの大家が凡てさうなんです。馬琴にも噺の本があ

りです。此等の、作一方の人々の噺も、實演家の人々や又は一般大衆の讀者には、興味と材料を與へたに違ひはありませぬ。

こゝで、一寸當時の寄席の發達に話が移ります。寛政三年二月頃に、大阪から岡本萬作といふ男が江戸へ下り、橘町二丁目鶴屋の二階を借りて、輕口頓作の夜興行をした、それが同十年六月には、神田豊島町で頓作輕口噺の看板をかけ、辻々には繪びらを貼つて、即ち寄席の起りを爲した。これから此の形のものが殖ゑまして、文化十二年には此種よせの數が七十五、文政末には、百二十五、天保には七十六に減り、それが更に同十三年の、例の水野越前守の儉約令により、古くからのもの十五軒だけになり、弘化元年冬からは再び許可が下つて、六十余、翌年には、七百余軒に激增しました。一方この數は、噺ばかりでなく、軍談（即ち講談）の席も混つてゐました。安政度の本に、軍談の席二百二十、噺の席百七十二とあり、座料が一人前四十八文だつたとあります。

此の寄席の發達につれて、現れたのが藝人としての噺家中興の祖、近世噺家の先づ凡ての流派の祖ともいつてよい三笑亭可樂です。此男は、元、馬喰町に住んで、櫛屋を業としました、俗稱を京屋又三郎、寛政十年六月に、始めて下谷の柳の稲荷社内のよせを勤めて、連中三人と噺を興行しました。時に彼は二十三歳でした。後焉馬慈悲成などと交はり、相刺戟する所あつて、寛政十二年には、可樂だけの落語の會を開き、これに、焉馬や慈悲成は應援するといふ形になりました。文化元年には、可樂は、三題噺を始めました。三題噺といふのは、客から題を三つ貰つて、それを時の間に一の咄に作りあはすといふ、噺の一種の技巧です。つまり此男が三題噺の祖ともなつた譯です。當時此の可樂の噺を集めた本がまた夥しく出版せられました。さて此の可樂が、門人並にその一門に、多くの名人を生みました。即ち朝寢坊むらく、東亭鬼丸、林屋正藏、翁屋さん馬、桂文治、など凡て然りで、殊に近世落語の大家元、所謂三遊派は、圓生が祖でありますが、その圓生は、可樂門人の東亭鬼丸の門人で、此の圓生の二代目即ち二代目

圓生の門人に橘圓太郎といふのがあつて、その子が明治へかけての大家圓朝となるのです。かうした風で門流の大繁昌の中に「彼――可樂は、大成功を土産に天保四年三月五十八歳で歿しました。爾後、此の三笑亭派と焉馬の立川派とが入り亂れて榮え、藝人としても盛んなものとなりました。（初代焉馬は、藝人ではありませぬでしたが、その門人たちには、藝人を多く生みました。が此の立川派は、後には、三笑亭派のやうには、榮えてゐませぬ。）當時、長咄といふのも始まつて、石井宗叔といふのがその祖、二代目宗叔は一層此の話術が巧みで、これが近世人情話の續き物の祖となつてゐます。一方、奥平家の臣であつた藝名船遊亭扇橋は、音曲咄を創めました。此の扇橋も、此の流派では、記錄すべき大家なのでした。これが文政十二年に歿してをりますが、その門人に有名な都々一坊扇歌などを生んでゐます。が矢張り當時咄の中心は、三笑亭可樂の門流です。土橋亭りう馬は、三笑亭派の初代圓生の門人司馬龍生のその又門人で、當時（天保頃）の大家。林屋正藏は、初代可樂の門人で、師の前座を勤めた男で、これが、例の怪談話一派の祖となります。此の正藏にも、噺本其他の著作が多くあります。

以上は、主によせ藝人の方面の話でありますが、素人連の趣味的噺の會も、焉馬以來相變らずありました。その席上で自作の優劣を競つたのです。これらの藝人と趣味者とが創作した咄、それに又本格の小說家などの噺の作、それらがすべて出版せられて、從つて末期へかけて、噺本の出版は夥しい數であります。が此の時代の噺の本は、天明寛政頃の小本と違つて、次第に中本、今の四六判の形に多く出版せられてゐます。また咄も多少異つてきて、昔の小咄一點張りのものが二三枚の長咄も混るやうになり、寧ろ此の長咄の方が多くなり、又、結びも昔は、何々であつたとさと說明で止めてゐるのが、此頃では、出て來る人物の、下げを意味する言葉――會話そのもので、切つて終ふといつた傾向を生んできました。その內容も、即ち下ゲが、考へるもの即ち意味の上からのものと、地口でこじつけたのとの二樣が多く、後ほど

輕妙を放れて、冗くなつてゐます。又、慶應前後明治へかけては、昔の可樂が創めた三題噺が、盛んに、行はれました。此の三題噺の中心は、幕末明治の大家圓朝であつて、幕末明治當時、假名垣魯文、落合芳幾などといふ作者や畫師などゝ、三題噺の會を催し、趣味的にも此風を流行させました。かの幕末明治の大脚本家河竹默阿彌も此の連中であつて、現に明治には、此の三題噺を脚色した芝居も二三種出來てゐる位ゐです。

以上を約めますと、寛政前後に、初代立川焉馬の實演奬勵、櫻川慈悲成の咄の創作、他作者の咄の創作、及び近世咄藝人の大家三笑亭可樂の活躍その門人に名人輩出、これによつて、明治大正、延いては今日にかけての落語（それは、小咄變じて長咄、或は怪談話、人情話ともなりましたが）その祖を爲してゐるといふのであります。

偖、當時――寛政から幕末へかけての數多の噺本の中から、なるべく氣の利いた、即ち小咄風のものを、一々その原本から引いてみませう。唯初代焉馬の作は、小咄よりは長咄が多くありますから、焉馬の物は略きます。他にもいくらも名作がありますが、幕末の特徴として、總体が野卑に流れてゐますから、その中から上品な、しかし輕い滑稽ばかりを拔きます。

○雷。此の間大かみなりが落ちて隣の三介は臍をとられましたと見えて即死いたしましたと話せば、ハテそれは氣の毒千萬、拙者もアノ神鳴で肝を潰しましたが命にはさはりませぬ（寛政四年の鬼武の作「富貴樽」から）

○喧嘩。生醉の侍に行當りければ、侍大きに腹を立て、不屆千萬な奴、此の両ごしが目に見えぬか。きやん「二本さしたのが恐ければ燒豆腐はみんなこわひ。武士「なんじや燒豆腐じや。きやん「燒豆腐だといつたがどうしたといへば、武士「柄をひれくつて、おれが竹光をどうして知つてゐる。（寛政十年の慈悲成の編んだ「鶴の毛衣」から）

○風流初夢御枕紙。此枕紙をあてゝ御寢なりますれば、めでたい事を夢にみますといへば、ある人この枕紙を求め、其夜何でもめでたい夢を見ようとかの枕紙をあてゝねる、其の夜の夢に太神宮と荒神さまと大喧嘩をする夢を見て、大きに腹を立ち、目をさまして見れば、其筈、紙がもめていたトサ（三笑亭可樂の「東都眞衛」といふ本。享和四年版です。）

―未完―

（表紙の二より）丸抜きにしてゐる事である。飯島花月氏が先づ氣づかれて、云ひ越されたに甚く。同氏のハガキを示す。

「……傾城買四十八手を夜慶話と改題した再摺本が出て居る事を始めて知つた。然るに其「夜慶話叙」といふものを見て、「全然平賀鳩溪の有名な「細見嗚呼御江戸」の叙文を丸取りにした不埒ないたづらである事なも知つた、唯末尾の一句「ひろい處がァ、御江戸なり」を「ひろいところがァ、夜慶話」と拙い文句に改められ、「午のはつ春（安永三か）福内鬼外戯作」の文字を「五年ぶりにて云々」と直してある、大方名も知れぬ青年作家か書林の若主人などが嬉丸の作名で不埒なしたものと考へられるのである。云々」

成程その通りであつた。が、最後の舊版を拵へた當の責任者は、私はやはり嬉丸自身だと見たい。花月翁の推測も、面白い見方だが、傳、此の「夜慶話」、四十八手の再摺といふ事を氣づかれず、別物と見て取扱はれ、此の「夜慶話」から拔いてゐるのが、春陽堂版「砂拂」（山中共古氏著）である。中に、（同書二七〇頁以後）夜慶話を文化三年の眞作と見て、當時の文化の風俗と思ひ違へて拔いてゐられるが、その實四十八手の寛政二年であるのだ。「同書三三五頁にも文化三年の夜慶話にも云々とある。僞作者の罪こゝに至つて極れりである。（久彌）

寄贈紹介

○駿州府中阿部川の流 上

名だけ傳へられて、寫本で稀に傳はる駿河府中二丁町遊里の洒落本、版本のなきものである。文化十年春の稿成、作者は不詳。が地方洒落本として先づ貴重な一。その複刻本で、活字に直し、但し組は一切原寫本の儘である。今その上册刊行。此の複製本、用紙体裁先づ結構。百部の限定出版である（頒布實五拾貳錢。靜岡縣庵原郡庵原村庵原一四八五、茂林修竹山房）

○變態浴場史 全 藤澤衛彦著

變態十二史本の一。が、裝幀内容、最も出色なもの。序説、浴場の變遷、變態風呂種々相、變態浴場風俗等、等、凡て日本浴場に關して、著者自身索獵の文献の集成である。飜譯本や燒直し本の比ではない。挿繪豊富、好々著。（菊判本文一一八頁和綴、會費二圓。東京市牛込區東五軒町二七、文藝資料研究會）

○大蘇芳年版畫目錄（一）

○東海道に關する圖書（圖版下）

右共に、金田晴正氏の編。前者はその第一輯、出づべくしてこれ迄出でなかつたもの、好編著也。（菊各謄寫版。限定參拾部の内。同氏）

○日本文學講座 第十一卷

江戸時代のもの、三馬研究（臨風）蕪村研究（碧梧桐）並木五瓶研究（青々園）八文字屋物研究（不倒）江戸文學と遊里生活（久彌）で、拙稿は、前回の續き、その中です。（非賣品。東京市牛込區矢來町、新潮社）

○明治文學史 岩城準太郎著

例の絶版物九圓十圓と稱してゐたその改裝修正版である。此の改裝、前版に勝る事數等、目論も新たに數葉を附せられた。本文の斷種文献の唯一に價値づけられてゐる事は、言を俟たず。尾に年表等を附す。（菊本文五〇二頁、三圓二十錢。東京市神田區表神保町二修文館書店）

○文献 第一輯、第二輯

第一の二代男索引。第二の新永代藏、武家義理物語の索引、第二の賣笑文献考等よし。特志研究物の尤。謄寫版各々三二頁、非賣品。岡山市門田屋敷九一、文献研究會

○（十月號）早稻田文學▽歌舞伎▽演劇藝術▽變態資料（一周年記念號共二册）▽民謠詩人▽やなぎ樽研究▽川柳饒鉢▽國學院雜誌▽歷史地理▽北隆館月報▽藝術通信▽風俗研究▽江戸往來▽紙魚▽本道樂▽墓碑史蹟研究▽東海美術新報

著者より

○從來「變態資料」を主に經營してゐる上森君が別に單行本屋を始め、その第一に小生關與の「雜話叢書」六册を刊行する。執筆者は過半本誌の誌友です。第一回刊行は「書語遊戯考」綿谷雪氏著です。○今度小生達が主になつて、名古屋に名古屋浮世繪協會を設立しました。來春早々に第一回展覽會も催す筈です。○最近、市島謙吉氏の藏書入札が東京であつた。總賣上四萬圓以上との話。例の豆本は、これ丈四千圓斗で落ちたとの噂。（十月廿六日識）

定價表

一册	貳拾五錢	郵稅貳錢
六册分	壹圓四拾錢	稅共
十二册分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割増の事
○照會に返信料添付の事

昭和二年十月二十八日印刷
昭和二年十一月一日發行
（貳拾五錢） 送料貳錢

禁轉載

名古屋市東區[illegible]百五十七番地
編輯兼發行者 尾崎久彌

名古屋市中區[illegible]町二丁目[illegible]番地
印刷者 英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社

名古屋市東區[illegible]番地
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

昭和二年十一月二十八日印刷
昭和二年十二月一日發行

参編　第十八册（通編第六十三册）

本文

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第十八册（通編第六十三册）

近世語物雑談（上）

私の此のお話、上下二回に分れまして、先づ今晩の所は、説經節さ説經源氏節さで終り、下に至りまして、祭文さ浪花節さに及ぼうさ思ひます。但し此の説經、説經源氏節（略して源氏節）、祭文さ浪花節、凡て此四つのもの、お互ひに關係しあつて、切り離しては考へられぬものである事を前以て申しておきます。

先づ説經節、略して説經のお話であります。普通は、説教さ、教は教へるさいふ字も書きますが、正しくはお經の經であります。此の説經、歌説經さもいひます。即ち本來の坊さんのお説經、それさ區別するため、音曲化した遊藝化したものゝ意味で、歌説經さいふのです。偖此の説經、無論もさは坊さんのお説經、法談から生れてゐる事は謂ふ迄もありませぬ。それが、稍一種、職業的に獨立したものが生れかゝつたのは、鎌倉時代の初めであります。平治の亂で源義朝に殺された信西、その子の澄憲、及び後嵯峨院の御時の定圓さいふ僧、此の二人（澄憲は叡山、定圓は圓城寺の僧でした）が、歌説經の起りで、即ち佛寺の本地、又はその榮枯、因果應報などの道理を、俗傳に作つて節面白く唱つたそれに起つてゐるさ申します。さうして其の節は、和讃から脱化して、内容も一種の叙事詩さなした談義から唄ひ物に變化させようさしたもので、これが遊藝の一種さして全く体形を具へてきたのは、此足利の頃でせう。その頃既に、此の説經で口すぎをした、即ち説經を事業さした、後の説經藝人の祖さもいふべきものを生んでゐました。即ち此の時代の「徒然草」にも「説經などして世渡るたつきさもせよ」云々の言葉があるのでも知れます。丁度其頃から、當時流行の平家琵琶、謡曲、幸若等の舞曲を折衷して、材料も小説的な物語古來のあはれな傳説などに重きを置いて、一種の職業的の歌曲さなり、淨るりより先に世に行はれるに至つたことは、推定されます。が間接には、やはり佛教の教理を説き、それを臭はしてゐる事は、説經さいふ名の通りです。例へば説經の代表作の一、かるかやは、信濃の親子地藏の本縁を唄つたもので、例の刈萱道心さ石童丸の傳説、小説体ではあるが、結局は、憂世の無情、出家遁世の極樂を説いてゐる、教理に基いたものなのです。丁度此室町期盛んに現れた文學上の作物お伽草紙の中の、何々本地の類の所謂本地物は、その出所は無論この説經でありませう即ちお伽草紙の本地物は、文字に現れた説經、それを唄で行つたら歌説經。寧ろ文學の方が、この音曲から刺戟せられ、材料の配給を受けて出來た、それ程に此の説經は、當時流行したさ思はれます。さにかくこれが、下層社會に、人生上の或る信念さ並に慰安さを、その内容の宗教的意味さ小説的意味さから與へたに違ひないでありませう。要するに、歌説經は、本來の説經が間ゝ俗談を混へた、それが墮落の始まりで、遂には、一種の遊藝、本義は佛法の尊ささうき世の無常、形は色々なあはれな小説的物語さなつた、それが更には軍談や浮世話を混へるやうになつた。即ちこれを唱ふ人も、佛祖宗祖の傳記やお寺の本地に關するものは、僧、小説俗談になつたのは俗、さ人にもこの變化があらうさ思ひます。扨、此の説經（以下凡て、説經節即ち歌説經の意味であります。）、或は淨瑠璃の祖、又は淨瑠璃の江戸派の祖であるさもいひます。是は、直接の祖ではないが、元來、淨瑠璃は、平家琵琶さ謡曲さ説經及び祭文などを折衷し、脱化したものさ見ていゝのですから、此の説經、淨るりを生むさいふ説も、半面の眞理はあります。偖此の説經は、次第に純然たる遊藝さなりました、それを門説經、又その藝人を唱門師さも當時謂ひました。この門説經は、辻藝人の一種で、寬印さいふ僧が起りさいひます。當時立派な唄ひ物になつてゐて、彼等は人の門口に立ち、樂器さしては簓を用ひ、これに拍子を合せて唱つた、又身には十德の衣を着け、長柄の傘をさして人目を惹いたさもあります。丁度これが慶長の頃であります。後にはこの樂器が複雜さなり、又人も三人さなつて門口に立つた、即ち簓さ胡弓さ三味線さ互ひに持つて、拍子を揃へて、悲しい痛し物語を唱つて、人の涙を唆つた。かうなるさ全く一種の物貰ひで、伊勢の相の山から來たのもあるさ書かれてあります。以後益々盛んで、津々浦々に流行つた、現に西鶴の好色一代男の第二卷には、歌説經のあはれな事が、江尻の宿の中に現れてゐます。但し此等は一種の辻藝人旅藝人の類ですが、當時既に今でいへば藝術家階級さしての説經語りを生んでゐました。即ち劇場に於ける出演です。先是説經が正本の刊行を見ましたのは寬永八年のかるかや、山莊太夫な

（表紙の三へ）

○著者より。○正月から改編しようかさ思うたが、材料の都合上、また二三冊は此儘にします。未完物が多いから。△此册の出る頃には拙著「江戸時代小説脚本淨るり隨筆翻刻物索引」が出ませう。版元は春陽堂。嘗て小誌に載せたのに大増補し、且つ脚本さ淨るりを新たに編入、且つ全部に書名總索引を附したものです。重寶請合ださ自信があります。△今度の吉原天神、「東京新誌」で名古屋の二五里木をやるからその通さいふでもないが、少しそんな氣味合。挿繪は來號に入れます。（十一月廿九日夜）

「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」の正版と僞版

寛政三年春正月版の山東京傳作洒落本の三作、「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」と「錦之裏」、これに就て、正版と僞版と二種あり、今日殘存の多くは、僞版本のそれであり、且つ飜刻(活字)本の底本も、此の僞版に據つたものであることを明らかにしたいと思ふのである。但し以上の三作の中、「錦之裏」だけは、未だ容疑すべき箇處もあるのであるが、前二者に就ては、これが的然謂ひ得る證左を攫んでのことである。無論、此の事實は、非文献の間に、我々の先覺(現に、以下述ぶる如く、大久保葩雪氏の如き)に依つて存知せられてゐるのはあらう、が此の僞版のしかも三部全部に出來てゐる事は、まだ文字の上には書かれたことがないと思ふ。――。

偖、「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」と「錦之裏」とは、出版は寛政三年春正月であるが、その作執筆は、前年七月頃である。普通に、京傳の此の三作は、禁令が出てゐるのにも拘らずそれを冒してとあるが、事實は然りではなく、禁令以前に、脱稿はしてゐたのである。(脱稿後、即ち寛政二年十月二十七日禁令出づ。しかも此の禁令は、洒落本と限定はしてゐない。一般好色本に就てである。洒落本を包含した意味ではあるが、が、此の禁令を洒落本「と特に限定して」の禁令と謂ふのは、穩かではない。)さうして禁令發布後、禁令の趣旨に循つて、版元蔦屋は、行事(依托檢閲官)の檢閲を乞ひ、立派にその許可を得て、出版してゐるのである。がその間の事情を謂へば、蔦重(版元)では、禁令以前の脱稿であり、且つ出版準備(版木等)も出來てゐたことであり、且つ民衆の傾向は、なほこの洒落本類好色物に向つてゐることを察し、奇利も博し得られると思ひ、行事に鼻藥をかませたか、或は、行事自身、嚴しい御禁令の出たはなでもあり、それに上包の敎訓讀本としてあるのに、(この上包まで檢閲したか否かは分らぬが、でなければ、敎訓讀本の意を、版元は、口頭で强調したらう。)すつかり安心して、許可の極印(きはめ)を捺したものに相違ない。で翌三年正月出版、それが出版間もなく、三月に絶版、版木押收

版元作者、並びに行事共の失體とあつて、それ〴〵版元は身上半減、作者は手鎖五十日、行事の二人は、商賣お構ひの上追放、とそれ〴〵處分せらるゝ所あつたのは、無論上司が自發的に、その內容に氣が附いたのではなからう。或は、蔦重（版元）の奇捷的なやり方を嫉んで、密告する所あつた、それによつての司法權の發動といつたものであらう、即ち同業者の密告に依るかと思ふ。たとひ禁令以前の脫稿、行事の許可がありとはいへ、その內容が洒落本であることは、作者版元は夙知の筈、即ち行事の疎漏を利用した奸策と、判斷せられたのである。が正當を以て爭へば、事情が右の如くであるから、全然、禁令を冒しての出版、ではない。寧ろかくの如くしても、京傳版元が罰せられたのは、罰した方が酷に過ぎる。今ならば、直ちに控訴すべき性質のものとも思ふ。――これが今日一般、京傳は、此の三作を、禁令發布以後、惡いと知り乍ら脫稿、書肆また奇利を博するための秘密出版かの如く傳へられてゐるが、眞相は、全く反對、禁令以前の脫稿、形式は立派に取つて檢閱官の許可ずみ、といつたものであつたのである。

が、とにかく、此の京傳作の洒落本三部の筆禍は、洒落本歷史の大事實の中の一、しかもこれが京傳が、洒落本作家として、文才体驗並び適せるに不拘、讀本合卷などに移らしめ、晚年は却つて後輩に押され氣味のやうに思はれる、その動機となつたのである。が、この寬政三年以後の出版、作者不詳の洒落本「房情記」の序文は、署名は明らかにしないが、いかにも京傳であり、その京傳が、暗に洒落本の未だに尻押しをしてゐるやうな皮肉な語氣の見える、自分の筆禍に對する鬱憤ばらしとも見えるのは、（足を洗ひし老込作者、などと自分を稱してゐる）寧ろ同情すべきである。

閑話休題、此の寬政三年春の版、京傳の三作に、僞版があつたのである。無論此の僞版は、三月絕版を命ぜられ、原版木押收の目に會つた以後である、――但し此の僞版の作製せられた年月は、明らかではない、禁止直後の寬政三年下半期の中か、いかに大膽でも然りではなからう、此の時の禁に懲りずに、ほつ〳〵再び洒落本の出かゝつた同五・六年頃の事か、又は遲くとも寬政十年頃からの洒落

本再興――出版成績の上から見て――ともいふべき頃に、複版作成、いかにも禁止以前の正版顔をして或は摺り出されたものであらう。

偖、以下は、此の三部の正版（絕版以前のものに名づく）と僞版との異同の說明である。最も異同の烈しいのは、その中の、「娼妓絹籭」である。

第一、「娼妓絹籭」の正版と僞版

「娼妓絹籭」そのものゝ本文內容に觸れることは、姑らく措く。本文は、僞版本正版本同文であり、帝國文庫「京傳傑作集」其他にも活字本があつて、周知のものであるから。序、口繪、跋などの有無又は異同のみが、正版僞版に於て烈しいのである。普通に見る「娼妓絹籭」本は、茶表紙、元題簽は、白に子持輪郭ありて、中に、稍小さく、楷書体に、娼妓絹籭　完とある。次ぎ、自序二丁半（署名は、山東京傳）、口繪（京傳自畫像らしきもの、將棊の盤面に對す、盤面より煙だちて傾城の見ゆる圖。）半丁。次ぎの口繪（將棊盤面の如きもの、上に解說があつて「右　惣傾城とあるもの　半丁。目錄半丁。計四丁である。以下本文が、三十七丁。跋は無いのである。但し、序の分が、四丁であるに不拘、數は、「五になつてゐる。即ち序ノ一の裏が「可恐巧計のために都逼と」で終り、序ノ三の表が、これをうけて「ならんことを。」云々となつてゐるのである、即ち序の二を缺き、文は續いてゐるのである。これだけの事實を以てしても、此の序の四丁、跋を缺くものは、再版（又は再摺）本かといふことは、容易に起る疑問であらう。さてこれが、帝國文庫などの飜刻底本であるのである。然るに、最近、序五が完全に在り、且つ跋三丁を有するものゝ一本を寓目した。

此の一本、流布本とは表紙からして異る、更紗模樣のやうな表紙で、題簽も、帯黑の黃色に、太い子持の線で圍み、文字は、流布本より更に硬く、なほ大きく、娼妓絹麗　完とある。此本こそ、僅かに絕版以前のもの（即ち絕版を命ぜられたその原本）と思へるものである。（此の一本、元、大久保葩雪氏

市島春城氏藏本）その見返しに、大久保氏の識語（朱書）がある。先づそれを擧げる。

寛政三年

此書は原版なれど、直に絶版となり、其後に重刻（僞版）せり。序末巴山人の印を白字になし、挿畫にも駒子の箱なく、盤の四足を黒色にて筋を白く出し、盤上の駒子は三箇のみにて、圖の上部に居る妓の帶も違らしく見ゆ。又柳浪館の序と跋の全部と目録（久須日、蔦屋の書目錦の繪本）と、蔦重出版の所を闕けり。巴山人の印章を割を誤り、且白字とせしにて、僞版なることを感じたり。

芭　雪

といふので、一々列擧せられた項目は、流布本（僞版）に就てゞある。「僞版なるを感じたり」と、まだ大人しくいうてゐられるが、これは紛れもない僞版、尓く斷定して構はないのである。即ち以下此の一本（原版、即ち正版）に就てのみいはう。

正版本は、序五、その中の序一は、西江月云々の柳浪館主人の序がある。その次、自序二丁半、以下流布本の通りである。即ち目星しい異同は、流布本に於て柳浪館主人序一丁分を全く闕く事である。自序以下は、大抵に於て、原版（正版）の字劃を眞似て、作られてはゐる。細かい相違は、自序の山東京傳の下へ來る例の巴山人の印が、正版本は、二線の圓の中に、巴山人が、黒く、普通のまゝに、但し篆体で、傾き乍ら收まつてゐる。流布本は、外の圍みの二線も、極細いもので、しかもその中の巴山人は、正版と似て居ながら、全く文字を白ヌキにしてゐるのである。さうして、巴の第一劃の曲げ目が、彫り違へて、開いてゐること、及び山の形も正版よりは拙くなつてゐる。

次ぎ、例の盤面に向ふ口繪（半丁分）は、これも小部分には、相違が烈しい。即ち左に列擧する。

箇處	正版本	僞版本
柱にかゝつた拂子の柄	白	黒
右の柱の色	白	黒
人物の羽織の紐	有	無

人物の帶の色	黑	白
京傳鼻	鼻柱が太い	鼻柱が細く長い
將棋駒の箱	有	無
盤の側の散つた駒の數	三つ	四つ
盤面の駒の數	七つ	三つ
煙管	雁首細く、全体に長い。	雁首太く、全体に短い。
盤の足	白	黑
妓の帶の結び方	正	逆
妓の裾模樣	菊	形だけ似て、菊には見えない。
煙の描き方	畫の上へ巾狹く	畫の上へ幅廣く、右の線は、柱まで至る。
妓の笄の數	四本	畫面に現れた數は九本。
妓全体の描き方	襟のあたりなど凡て丁寧。	粗雜

など〻、違つてゐるのである。（正版僞版の存在を明らかにはしてゐないが、外骨氏著「筆禍史」中の「娼妓絹籭」などの挿繪は、此の正版本の原寸大である。參照せられたい。）殊に、滑稽なことは、正版本では、此の煙から出た妓の裾摸樣が、菊の花を三輪描いてゐる、これは無論彼の昔の娼妓今の宿の妻菊園を意味した（菊園は寛政二年二月から京傳の妻。同五年秋病歿した。）お安くない所であるが、その折角の吹聽も、僞版本では、何だか譯分らぬものにされてゐる。其他、人物の羽織を後ろへ撥ねた、その部分が、正版本では見えてゐるのが、僞版本には無いとか、拂子の毛の垂れ加減だとか、眼鏡の縁の形だとか、人物（京傳）の襟の描き方だとか、跪坐をかいた左脚の線のうねりだとか、一々謂へば、凡てが違つてゐる、凡てに於て僞版本では、胡麻化した筆使ひである。

次ぎ、將棋盤の部分の半丁、目錄の裏半丁は、正版僞版、大体に於て似てゐる。本文も然りで、嚴密にいへば、一點一劃凡て違ふが、見た眼は同一である。唯、第一回が、正版本は、第一回と振假名

のあることなどである。なほ、丁數の打ち方は、僞版本では、凡て綴ぢ目の裏半丁分の下にあるに拘らず、正版本では、本の柱の下にあることである。なほ、正版本では、丁の打ち方が、一寸繁雜に打つてある。即ち、柳浪館主人の序が序一、自序が序二序三、序四の表まで、口繪の人物はその裏。將棋盤面の圖と目錄との表裏が一、（即ち正版本では、これが本文の一）肝腎の本文のはじまりは、二よりである。以下順に追うて、第廿六丁に至つて、これが、廿六ノ卅とあつて、即ち四丁分を飛んでゐる。それが四十一丁に至つて、再び三丁分を飛んで、四十一ノ四とある。で、本文の終は、四十五とあるが、正味を數へたら、盤面の圖から、三十八丁、純本文は三十七丁、即ち僞版本と異りはない。尙、本文の字詰、大小、凡て正版本僞版本類似で、一行一字も間違はない。正版本、その後に、跋一跋二跋三があり、蔦屋目錄が二丁分あり、最後に奥附半丁分、例の「珍らしき新板云々。書林　蔦屋重三郎」があるのである。

よつて、流布本に全く闕く序一、跋三丁分を、原文の儘、左に載せておく。

○

西江月（以上第一行）
莫レ戀二歌樓妓館一。休レ貪二（以上第二行）美色嬌聲一。分明是箇（以上第三行）陷人坑。可レ嘆愚人不（以上第四行）レ省。樂處易レ生二愁怨一。笑（以上第五行）中眞有二刀兵一。等閒失（以上裏の第一行）脚入二他門一。便是蝦蟆（以上裏の第二行）落レ井。（以上裏の第三行）

柳浪館主人

○

跋娼妓絹籭後

山東京傳、金馬門にあらぬ。牛糞橋の（以上表、第二行）傍に世を避て。性氣の長き事。牛（以上、第三行）

の小解のごとし。上ハ天人の尻を摘。（以上、第四行）下ハ閻羅の鼻を撮。滑稽虚を以（以上、第五行）て實を獲。好て著述をなす。中に（以上、第六行）娼妓絹籭あり。嫖客と娼妓の風（以上、第七行）情を細碎て。恰も飛切の糝粉の（以上、第八行）ごとし。僕一たび味て其美なるをしる。（以上、裏の第一行）嗚呼京傳子が筆頭の滚。奇とする（以上、第二行）に堪たり。須評而求。

寛政辛亥孟陬　曼　鬼武識

飯　顆　山　鬼武

○

後　叙

花炮家も身揚をして點（第二行）して不覽ば不買。膏藥（第三行）も脚を刱て不覿バ不賣。（第四行）況實情娼妓においてをや。（第五行）應馬呼牛なくんばある（第六行）べからず。娼妓に春の季（裏第一行）指なく。自有の盟章も（裏第二行）なし。彼に截り。是に誓（裏第三行）は。身をたつるの業可憐。（裏第四行）高飛の鳥も美食に死（裏第五行）。深泉の魚も芳餌に死。（裏第六行）娼妓も亦濡安の爲に（表第一行）謬ことあり。豈虚のみ（表第二行）ならん乎。雖然未きかず（表第三行）娼妓に正札附請合賣（表第四行）のあることを。余以爲其（表第五行）實を信せず其虚を（表第六行）悪ざるが輙是識趣人（裏第一行）歟（裏第二行）

京—傳—艸—廬—食—客

煙—花　涙—子跋

有名無人　漂蕩三昧

次の洒落本類目錄は、「傾城買四十八手」以下、計二十種。別に山東京傳戯作として行を更へて、

「穿廓」以下計七種の外題と下に略解題とを擧げてゐる。（此分二丁分、僞版本になし。最尾の奥附半丁、これもない。）

第二、「仕懸文庫」の正版と僞版

此の「仕懸文庫」は、同じく同時の出版、三部とも禁を食つたその中の一でありながら、正版本と僞版本とは、「娼妓絹籭」の如き異同が、全くない。二本全く同樣、但し、版木は別である。かるが故に二本を綿密に對照すると、字劃は、甚く細部に違ひがある。が口繪の如きは、正版本僞版本似てゐて大した違ひがない。相違は、正版本には、例の末尾、洒落本類目錄が二丁分あり、此分正版「絹籭」と全く同じ物である。最尾、奥附半丁、正版「絹籭」と同樣同版木のもの半丁ある。此の二丁半分（目錄と奥附）が、僞版本には、全く闕くのである。及び表紙を違へてゐる。僞版本は、此の記事の底本としたもの、元表紙ではないから何ともいへないが、恐らく僞版「絹籭」と同じく、茶表紙であらう。正版本（と私が認めた）の「仕懸文庫」は、正版「娼妓絹籭」と全く同一な、同模樣、唯色ざしが違ふかと思ふだけの更紗表紙。題簽も、正版「絹籭」と同樣、帶黑の黃色な地紙に、太く大きな楷書体で、仕懸文庫　全（この振假名あり）とある。

第三、「錦之裏」

これは、家藏本と他本との二本對照からである。が家藏本が強ち、正版本とも斷言出來ないやうにも思ふ。即ち、此の現在二本は、僅かに異版木本であるが、さてその表紙が、正版「娼妓絹籭」、正版「仕懸文庫」と同一の更紗表紙でないからである。（此の更紗表紙云々は、私の正僞判定の大部分の根據であつたから。）で何ともいへないが、まだ比較的、家藏本が、正版本かと思ふ。それは、此の二本、全く同じやうである。が、版木を異にしてゐる。即ち一點一劃を嚴に調べて來ると、二本異種である。唯、似てゐるだけである。が、これも「娼妓絹籭」の如き、二本著しい異同がない。唯、違ふのは、他

の二本「絹籭」と「仕懸文庫」とにない、特殊の異同が、一點だけある。即ち極印の有無である。他本の「錦之裏」にはこれを闕く、家藏本の「錦之裏」には、これを見るのである。即ち私が嘗て（大正十五年八月、新小說、「浮世繪趣味號」）で、極印の使用期を、寛政二年十月末頃に遡るべしの論據としたその極印で、即ち京傳の此の作を行事が檢閱した、その許可の印で、但しこの洒落本は、十二月二十日頃に之を捺したとしても、同一の極印が既に、禁令發布の十月二十七日以後存在してゐたと見て、極印の使用が、寛政三年ではない、以前の二年十月末としたものである。その極印がある。即ちそれは、序の第一丁表、靑樓●乃世界錦之裏自序の、「裏自序」（二行目）の下の、餘白に、捺されてある。上に文字二個（不詳）の長方形の印、下に丸形の中に極、即ち極印があるのである。私が、此の家藏本を正版かとしてゐるのは、此の極印があるからである。が、表紙は、此の本、（家藏本の分）茶表紙で題簽は、辰巳婦言などの寛政末期に多く見うける大きな方形のもの（作者又は貸本屋と、買主のあるじとの對話、中に大きく外題を現はすといつたもの）である。此の方形大形の題簽は、自分の知る限りでは、寛政六年の「北廓雞卵方」にこれを見るが、此の「錦之裏」の家藏本は怪しい。が果して寛政三年頃に、すでに此の方形大形の題簽が現れてゐるなれば、此の家藏本は、更紗表紙（他の二部の正版と同樣な）ではなくとも、正版かといふに近いが。さてどうか。若し、更紗表紙子持細長題簽の「錦之裏」が現れ、これと家藏本と較べ、若し同一版木であつたならば、家藏本は、正版の異種、若し異版木であつたならば、家藏本は、僞版本の第一、さうして此の執筆のため借り出した家藏本と異版の「錦之裏」は、僞版本の第二といふ事にならう。

倘、後叙の小部分に於て、家藏本と他一本とは、異る點がある。今それを列擧しておく。（此の他一本と「德川文藝類聚」第五所收の「錦之裏」とは、同一本のやうに思はれる。）即ち此の二本、左の異同がある。

後叙の第二丁表、四行目、ましやう（一切の衆生身の用心。さつしやい「ましやう」。）までは、二本

同一であるが、その下に、倘、一行半、他本には文字がある。即ち、「亦人間の渡世利は心氣の一住」とある。これが、家藏本では、此の一行半、余白になつてゐる。その裏、第二行目、春正月（時寛政三年辛亥「春三月」）の下が、他本には、食二雜煑一之日とある。家藏本は、余白である。さうして家藏本と他本とは、製本の順序に、左の如き異同がある。これは、或は家藏本が、綴ぢ誤りかも知れない。（但し家藏本は、綴糸元のまゝ。）

家藏本。自序－口繪－後叙－本文－附言。

他　本。自序－口繪－附言－本文－後叙。

○

以上「京傳洒落本」絶版三部の正版僞版の對校であるが、此の發見――自分としての――の動機は、自分の仕懸文庫が異つた更紗表紙であり、題簽も異種であつた。爾來、此の共表紙の「仕懸文庫」に出會はず、さりとて同時異裝本ぐらゐに輕くこれを思うてゐた。一方、絶版本の殘る二部、「娼妓絹籭」も「錦之裏」もありはあるが、「仕懸文庫」の更紗表紙ではない。が共に、ひつ括めて、漠然、同じく絶版本で、絶版となつた版木で摺られたもの、即ち原版だと輕く思うてゐた。まさか僞版があるとは、氣が付かなかつた。「筆禍史」には、娼妓絹籭の原版挿繪があり乍ら。氣も附かなかつた。それが、最近、「娼妓絹籭」の茝雪氏書入市島氏舊藏本を見るに及んで、はしなく先づその共に更紗表紙である事及び茝雪氏の書入を讀んで、家藏一本の「娼妓絹籭」（この僞版家藏本は、關根只誠氏幸堂得知氏舊藏本）を對校、成程と思へた。茝雪氏の詞を更に強めて、正版僞版と明らかに謂うてよいことを知つた。同時に、共表紙の家藏「仕懸文庫」と、他の「仕懸文庫」とを求めて、對校、これも全く異版二種たる事を知つた。「錦之裏」は、右に述べたやうに、稍不確ではあるが、これにも少くとも右に述べた二版木ある事を知つた。即ち凡ては、更紗表紙の「娼妓絹籭」（序跋計四丁多きもの）のお蔭であるのである。

――このやうに事實が明らかになつてみて、さて分つた事は、現在洒落本騰貴、拂底の世の中でも、

此の京傳絶版の三作は、絶版でありながら、まだ割合に平凡である。賣出しと禁とで三月の間があるとしても、余りに本が平凡である。その理由が、釋然分つたのである。即ち、僞版本が、平凡として横行してゐるからである。しかも落丁の如くして落丁に非る別本「娼妓絹籭」如きが存在し、これをして僞版なりと氣づかしめないからである。

偖、此の僞版は、いつ頃出來たものか。それは不明であるが、前にも謂うた如く、禁の直後は、まさかやりかねた事であらうから、やはりほとぼりの冷めた寛政五年か、或は遲く三馬・一九などの後進作群出した寛政末享和初め頃の事でもあらうか。

なほ、最後に疑問一つ。少くとも仕懸文庫と娼妓絹籭とは、絶版後の僞版の存在が明らかになつたが、然らば、一方、「仕懸文庫」を正版僞版同樣になしたに不拘、「娼妓絹籭」だけは、正版の序一、跋二を僞版には、なぜこれを削除したか、といふ疑問である。これは、この序一、跋第一第二、共に京傳以外であり、累の他に及ばんことを恐れて、他人の此等は、これを僞版時には、惜しみ乍ら削つたのではなからうか。仕懸文庫には、此の他人の序跋を混へてゐないからでもある。恐らくこれだけの理由であらうかと思ふ。

なほ、本考、「錦之裏」に就ては、自他の後考に俟つて、一層明らかにしたいと希つておく。

―昭和二年十一月六日夜―

補――「絹籭」本に就て。

その正版本の後摺もある事だ、その後一本に據つて知つた。瞭かに、更紗表紙本とは、版は全く同じでも、摺が惡い。即ち此の正版本も、相當に刷り出されてゐたものと思ふ。（此の後刷本、元表紙不明）或は、版木を隠匿、これが刷出に力め、寛政九年頃、愈々正版本版木押收、よりて僞版本はその以後の製作といふのではなからうか。――十一月廿七日夜

江戸後期の小咄 ——承前

○下手淨るり。ナント一段語つて聞せようか、友達「イヤ〳〵貴樣の淨るり。唯はきかれねへ、錢でも奢るなら、聞いてやろふ 語り人「チヽ跡で何でも奢るから、聞かつせへさ、頓て語り出せば、皆々「コレハ迷惑、跡での奢りは御めんださ、殘らず歸りたるも知らず、一段語りしまひて、「ヤア皆歸つてしまつたか。コリヤア儲つた。モウ一段語るべい。（文化八年の十返舍一九作の「妙伍天連都」から）。

○宿引。よき宿をさりあてゝ見つ藤の花、エヽコレもし〳〵貴方方は、のべつとけの道中では御座りますまい。いづれお泊りで御座りませう。ヘイ手前は中宿の角やで御座ります。内もひろう御座ります、先づ櫻の間が十六疊、柳の間が十疊、狸の間が八疊、小狸の間が四疊半、アハヽヽヽ至つて奇麗で御座ります。家は普請の仕立、夜具は拵へたて、膳椀は塗りたて、お茶は入れたて、茶碗はきつたて、御膳はうつしたて、嫁は貰ひたて、婆さんは死にたてゞござります。（土橋亭りう馬の作つた「百面相仕方話」さいふ本、天保十三年春の出版です。）

○慾心、しわんぼうの親子、田舍へ用事ありて行きけるが、親父川へ落ちし故、息子慌てゝ引あげんさするに、辷りて上らず、まご〳〵してゐる所へ、人が來て、息子さん百出しなせへ、あげてやらうさいふ。息子は七十二文にまけろさいふ。イヤ百でなければ上げぬさ互ひに論じあつてゐるさ、川の中で、親父が、がぶ〳〵し乍ら、さうだ〳〵、俺が死んでもいいから百は出すな。（嘉永三年の梅亭金鵞作、「落ばなし」さいふ本から）

○長つ尻（ちり）。面白くない話をする爺様來り、いつまでも〳〵べん〳〵さ話をしてゐる故、女房いやがりて、棕櫚箒を障子の蔭へ立てるさ、爺様はそろ〳〵煙管を了ひかゝる。その時箒が横に仆れるさ、又爺様煙管を出しかける故、女房はあはてゝ箒を立てる。爺様煙管を了ふ、又箒が仆れる。爺様煙管を出す、又箒が仆れるから起せば仆れ、爺さま、煙管を出したり入れたり出したり入れたり。（右さ同じ本からです。）

以上は、凡て江戸の話でありますが、上方も、江戸末期相變らず、幼稚ながらも噺が流行（はや）り、これが俄の流行さも伴つた。大坂版末期本の中から例一つを拔いてみませう。

○ゑそらごさ。△「コレハ先生、月に時鳥さは間違で御座る。畵師「ハテ月に時鳥は出合ものじや。△「イヤ〳〵時鳥には、箒木星をかくがよい。畵師「ハヽヽヽコリヤ珍らしい。時鳥に箒木星さは、どういふ譯で御座るの。△「知れた事、アリヤ血をはく鳥じや。（「春のはつ風」さいふ本からです。）（丁）

——十月二十一日、JOCK——

「吉原天秤」の体裁と全内容（上）

はしがき

吉原評判記物もの丶一、「吉原天秤」といふものである。此本、種彦の「吉原書籍目錄」及び他の類似書目の中に見ぬ外題であるゝ恰も此頃、予が寓目した「讃嘲記」と同用紙、同寸かと思はれる体裁、本文書体も頗る「讃嘲記」とほゞ似てゐる。序文等あれど、年次を示さない、恐らくは、讃嘲記と略同年代、讃嘲記が寛文七年刻といへば、これもその頃かと思へるが、はて確證はない。或は此本評語の中の、高尾、小紫などにより、その何代目であるかを擧證さるれば、随つて此本年代も類推される事とは思ふが。がすべては自他の後考に俟ち、今は、此の本紹介に急ぐ。

体裁。此の本、恐らく原寸の儘であらう、縦六寸三分、横四寸五分、用紙は粗雑な、纖維の多いものである。第一丁序。次ぎ、本文、よし野より始まりて、第三丁を數ふ。以下第二十八丁まで、本文。最後に半丁、跋形式のものがある。即ち序以下、追丁と見て、第二十八丁半のものか。（但し、此の原本、一の序より三の本文の間に。二の本文一張分落か。）

菱川風の挿繪が三圖ある。第四ゥ第五ォ。第十一ゥ第十二ォ。第十八ゥ第十九ォである。

序と跋は、稍細字、序は三十一字位一行、十四行半丁。跋は二十九字位一行、半丁に一行の餘白を殘して、全文十三行。序以下本文跋とも凡てに、一重の輪廓がある。丁数は、柱の下に打ってゐる。元表紙不詳、題簽また。

以下は、その全内容である。（原本、句讀点ナシ）

×

吉原天秤序

むさしの丶廣、うきなハたゝばたて、一寸さきハ夢のうき世そ(ぞ)、いかばかりしんほ(ぼ)うつ(づ)らをめさるとも、ついにはさ(ご)てのけふ(ぶ)りとならぬ(ママ)に、くすみてなにのせんかあらん、君か(が)心は淺草川の、なか(が)れにうかふ(ぶ)ろかひをはやめて、おせさゝさゝの一世のたのしミに、ちとせをさてのべんハう(が)れしいこんだと、うかれ心ひよくらひやうたんのまか(が)きに、ふ(ぶ)らりとなりさか(が)りたる身もはち(ぢ)らハて(で)、たわと(ごと)つくハ、君にえにしやむ(す脱カ)ひしおひ(び)の、はじをいふよと、たうよりきゝの、ふさくでらるゝお

てきたちハ、いよこのまどにかたはらいたくおほ(ぼ)すらん、しかしたかきいやしきこのさとに、うかれきぬれハ(ば)よしなかそ(ぞ)めのいろにそめ、やか(が)てとんぢやくのおもひにひかるゝ、しやミせんのこゑを聞てハ、あひしうのこゝろいつしかふかまさなる、まことにしゆんせう一こくあたいせんきん、はなにせんしやう月にちわそさゝりんほうか(が)口すさみたるも、むりにてハないそ(ぞ)、雨をも風をもうわきものハ、りさ(ざ)んのあそひ(び)にことならぬあけ(げ)やのさ(ざ)しきにしとねをのべ、たつとからす(ず)してつうゐに（以上、一表）まし(じ)わるも、たゝ(ゞ)これかねのとくとかや、いそばたそゝりのやほ(ぼ)はんぐわんは、ゆひまがむろにもおどりたる、せばきつほね(局)にミをそは(ば)め、たは(烟草カ)にむせび水をのミ、ひぢをまけ(げ)てまくらさし、またハさんちやのうすきなさけに、ミをやつし、あるハおかしきかしは(ば)たの、あをのうれんのかひまみて、かミのふすまをかさぬるも、しなこそかわれ、たのしむところにもとつ(づ)きてハなにのへだてかあらん、こゝにいたつていくは(ば)くの人か、へいせいをあやまり身をほろぼすと、しゆふ(ぶ)んこうのおしやるも、け(げ)にさると(ぞ)かし、（以上、一裏）

よし野　三浦内

このきみの御ありさまハ、なにしあふ花のかほりもいとふかみ、柳のこしつきしなやかにして、ならべていはんかたもなし、御身のさかりもやゝすき(ぎ)給へバ、なにとなくいしやうのりやうもばしならす(ず)、ふんたいもかつて事とし給ハね共、てんねんとうるハしおもてに、すこしあばたのあめるも、月のかつらにひとしく、いとしほらし、御しゆせきハくるハぶさうののうしよなり、一さ(ざ)のあいさつ、さかつ(づ)きのさしあい、たちふるまひのあぶき(ぎ)のて、いやはや、とこうハ申されまひか、なんにいわく、はなのしたのびすき(ぎ)て、口もといやし、御心た(だ)てハうへミぬわしのしやうをゑられしとそ(ぞ)、た(だ)うちうあしは(ば)やに、そりすき(ぎ)て

通らるゝハ、（以上、三表）惣太にあひとふおほ(ぼ)し
めすか、さい〱はらまるハ、おちやの事ハ、
いふもくだ(じ)じや、つとめもあきたるよしなれと(ど)
も、今に身ぬけ(じ)のならぬハ、しうとめに中あし
からんとすもしして、さそふおてきのなきゆへ
にや、またハごふくやかミやこまものゝ、たん
ざくのへんかならぬゆへにや、

ちかぶりて人をはるかにみくたす(だ)は
これそ(ぞ)よしのゝはなのさきちる

ゆふきり　新町　宗玉内

此きみの御よそおひハ、めんかうふはいの玉も
ひかりをうしなふべし、されば(で)にや、このさとの
なさけをそふる夕ぎ(ぎ)りに、たちいてんかたもなき
なみた(だカ)よさ、おてきのよみしもとハりじや、もと
よりもしんようせいの三ッを(で)（以上、三裏）まんそ(ぞ)く
し給ふのミか、わかのミちまてに(じ)心とめ給ふよ(す)し
なれハ(バ)、たゝ(ゞ)よのつねのけいもしとハみえす、こ
れなん江戸のきみの衆生さいと(ど)のために、いまこ
のよしハらへしゆ(だ)せましますかと、なさけのみち
いさたうとし、たうちうしとやかにして、さはい
心にくし、おみきも少しきこしめせハ(バ)、おちやあ
しからぬとそ(ぞ)、あはれ〱、
なんにいわく、めもとわろく、せい今すこしひ
くし、此君にぬらされしふかまのありしが、す
てに(で)身ぬけをもいそかれし(が)に、いかなる事にや
かれ〱にならるたるよし、さそ(ぞ)〱ほゐなく
おほ(ぼ)さん、ことにつとめもやかてあく(が)ときけは(ば)
なにとかなして(づ)、やハらけがいれてやりたい(で)と
心なきしつのミまてもおもわれ侍る、

心(だ)たてなにゝたとへて夕きりの
はるゝまもなきうきつとめかな（以上、四表）

（次ギ四裏五表へ第一の挿繪）

うす雲　三浦の内

このさまの御ありさまハ、とを山にかゝるうす
雲の、花にまかれるなかめあり(が)、かのしやうわう

の夢にみられしおもかけ(け)も、もしこの君にてハあるまいか、しかるをありこし(マゴ)なんど丶そしれる人あり、いさふつ丶かなり、こしハそわうきうりのやなき(ぎ)のこ(ご)さし、たれやらか(が)ふせし詩ハ、美(び)人をほめたる、心ならぬもろこしのすへ(べ)らきハ、きうちうにこしのほそき女をのミおかれたれハ(バ)、うへ死にする人おほかりきとかや、その比この君、いまそかりせハ(バ)、あつは(ば)れ一のきさきにも、そなハりたまはんものをと、我ハおもハる丶、

なんにいわく、めんていすこしけんそにして、御物(ご)こしわろし、ゐさ(ご)ころもいてすき(ですぎ)たり、いまた(だ)つさめに出たまわぬころより、つねならぬ人さぬけめのならぬおもわく(以上、五裏)のよし、八まんうらやまし、やか(が)てあとつき(ぎ)をまうけて新丁のおきちやおしちにあやかり給へ、すべてなにやらとやまひにはかたれぬさこそ申、またいなか人に六と申人さふかきよし、この比は六もぬけめのならぬおもわくあるよし聞、すこしかせ(ぜ)心になりまいらせ丶(候カ)よし、た丶(ゞ)ならぬ人のおもわくふかけれは(ば)

よそのなさけはうす雲のきみ

八橋　新町　宗玉内

此きみの御皃は(ば)せ、一めみたらハ(ば)、いかなるくすみた車そうも、こしうちぬかして、うこ(ご)きをとらし(じ)、かのむかしおとこが、なみだこほ(ぼ)し、かれいゐをほさばかしたるも、このきみのすゐの世にいて(で)たまはんとをすいして、をのがミのなからぬかをかこち(以上、六表)たるものならん、た(だ)うちうしさやかに、ざはいけた(だ)かし、御しゆせきもあしからす(ず)、しよくわいのざはいなどハ、きのつまりたるやうなれさ(ご)も、なし(じ)むにしたか(が)つて、なさけふかし、うれしや〳〵、

なんにいわく、御皃なかく、めもとすさまし(じ)、御心た(だ)て、すんとしてよりつきにくし、いかなる事にや、あねき(ぎ)みと御あいだか(が)らよからぬよ

し、せうし、今のふ(ぶ)んにてハ、御せんせい、もしやうすくなる事もやわらぬと、それハ申さす(ず)とも、御心にとい給へかし、とかくゆう女ハ、ゆう女のごとくに身もちする事、よからぬと(ママ)そ(ぞ)んし(じ)申事に候、

とりんばう戀渡りゆく八はしの
なか(が)れにながすなそ(ぞカ)いとをしき

つ　し　ま　　江戸丁　伊右衞門内

此きみのか(が)んしよくハ、たいゐきのふようも色をうしなはん、(以上、六裏)た(だ)うちうの御ありさまハ御たけすらりとして、ひようの柳になをまさりつへ(べ)し、さ(ざ)しきつき、ほ(ぼ)つとりとして、うつ(づ)たかし、されハ(バ)大し(じ)んとみらるれハ(バ)、つゝ(ど)けてふる事、かす(ず)か(が)きりなくすきなり、そのふられものか(が)、さ(ざ)こやら(いカ)につなとしていへるハ、いしゆならん、そうし(じ)て世の人のわかあふきみハ、たとひあしき所か(が)ありても、ほむるものなり、またとし月しうしんかけてあひにしきみも、つゝ(ど)けてしゆひ(び)あはぬハかへつてぬれき(ぎ)ぬのなきなんた(だ)いをいふものなり、人の口なれハ(バ)、とさ(ざ)しハならねと(ど)、あつは(ば)れ天のせめもおそろし、御心たて(だ)やわらかに、なさけふかし、御しゆせきもいとうつくし、御せ(ぜ)んせいはよしハらふ(ぶ)さうなり、

是なんせハ(バ)、御めもとねおき(ざ)を見るやうなり、おつとせのやしよくゆへ、すきにしとし、御へいさんしたまふ、それもにくからぬわけあるよし、あわれ〳〵、

一天にふたりともなき月のかほ(以上、七表)
みてあこか(が)るゝあきつしま人

高　尾　　三浦うち

此きみの御名ハ、あきつ嶋ハくたしや唐てんち(ぢ)くまて(で)、かくれなく、やつか(が)れか(が)百里のむかい、松前と申所にすま(ば)ひするゑそ(ぞ)まて(で)も、聞つたへはん(べ)へる、御良はせのいつくしさハ、三千第一とほ

めたりし大しんもこれほど(ご)ハあるまひ、道中の御よそほひハ、さなから(が)にまん月の海をいつるかと(いづるがごと)し、そて(ぞ)をつけられて、一きハうつくし、御心た(だ)てもさそ(ぞ)おもしからぬ(まご)、三うらか(が)太夫にみたてたるも、けに(げ)とハりしや(じ)、なんせハ(バ)、御貞少しもふくらなり、うわ口ひ(び)るをかミ給ふ事くせなり、道中にてかしらをすこしふらるゝ、さしき(ざ)今少をもし、世の人あたまに口のあきたるまゝに、いぬたかをの、くらゐたふれのといへるハ(ゞ)、めのなき人の言葉なるへ(べ)し、(以上、七裏)たゝほひなきハ、なさへ高尾のわかかゑて(で)にましか(やのしかカ)、あまり口(あカ)つらへつけてのころに(だ)、くたをまきしゆへ、人みなうとみて、しはし(ば)せん(ぜ)せいたるミしにより、かくなんさか(が)なき世のそしりにあひ給ふこそ、しかしのち(じ)〳〵に、かのめうしんにもおとり給ふましき御きりやうと、おもハるゝ、ときにあはぬハ、せいしん(じ)さへも、せすやうかな、いそかたつまと(カ)いふおのこ、ふかくおもひをかけしか(が)、いとまあらぬミにし侍れハ(バ)、いまたし(だ)はし(ば)のあふさもなさす(ず)、いとゝ思ひにしつむ(づ)よしのとりさたなり、おらをきミにせ口(バカ)、もしさゝの一やの之にしあら(バ)ハ、むまふねゝさゝよとおもハるゝハ、いか(ゞ)ゝ〳〵、

あた(だ)人のうきな(が)高尾と(ご)いひたつる
きみはみうらかやとにこそすめ

西　尾　　　　新丁　彦左衛門内

此君の御よそほひ白れんけ(げ)のつゆをふくめるか(が)(以上、八表)とし、道中のつとりとして、ざはいおもしろし、御心たて(だ)、いさむくやか(ぐ)にして、一たひ(び)枕をならへし(べ)やほ(ぼ)ハ、はなれきわ(ぎ)をしらぬとそ(だ)、けに(げ)はもつもしや(つゝカ)、するて此君にかきらす(ぎ)(ず)、みめかたちこ(じ)そむまれつきたらめ(ご)、心ハなさかやさしきよりや

さしきに、うつさハ(バ)うつらさ(ざ)らん、とかくけいくんハ、よろつ(づ)しなやかに、なさけふかゝらんこそよろしかるへ(べ)けれ、

なんにいわく、御たけつまりて、御言葉つきわろし、過にし比無二のふかまに別れ給ふ、さそ(ぞ)やちからおとされき、其人今そかりせは(ば)、今は身ぬきし給ふ事もあるへ(べ)きに、さて〳〵まゝならぬうきよ、せ(ぜ)ひなし、

すりきりハあさきゑにしをかこちけり
そのミまかりしてきにあらねと(ど)

(以上、八裏)

こむらさき　三浦うち

この君の御全盛、尤よしハらふ(ぶ)そう也、ようか(が)んのうるハしき事、かのげんし(じ)のうちこみ給ひしきみが、なにおふむらさきのうへも、これほどはあるまひ、道中の御よそ(ぞ)ほひ、いと櫻の風にしなへるがごとし、さしきつきしとやかなり、心だてにくからす(ず)、

なんにいわく、道中あまりそり過て、へたのきぬ表具といふ人もあり、めんていゝ少しやくミて、せゝこましき所あり、あばた(だ)も少あり、されと(ど)も、三方もてなしから(が)なれハ(バ)、もつはら(ば)にはりつよし、これなん、しやくしくわほうとや申へ(べ)き、すへハしらぬ事じや、

聞しより見てうへもなきかほよ花
なさへいろさへこむらさきさま

唐崎　三浦うち

此君の御ありさま、もとよりなにおふからさきの松の、みと(ど)りのわかは(ば)へにたちならふ(ぶ)へ(べ)き、君しあるまひ、そて(で)を付られて(以上、九表)、一きハおとなし、ざしきあしからす(ず)床のうちおもしろし〳〵、

なんせハ(バ)、道中おと(ど)り馬のやうなり、心たて(だ)りこうすき(ぎ)て、やゝもすれバてきをふらんとし給ふ、これそ(ぞ)ひとつ松のつれなき御しんといひ、またハあぶなし、ふるふちぬハ、てきをよくみ

さだめての事成べし、かへりをうけたまわぬやうにたしなミ給へ、

　ふた葉より松は太夫となにたてば
　いま唐崎の身もちむつかし

と　も　へ　　新部　久左衛門内

この君のようほう(ぼ)ハ、たうくわ雨をおひ(び)、りうはく風にゆらめくがごさし、御わらひ顔、今一きハうつくし、ざしきつき、わさ〳〵と御心だてやわらか也、初會よりいさしミ〳〵(じ)とかたりなくさ(ぐ)め給へハ(ば)、いかなるてきも、ころりとこしをうちぬかれて、またのあふせをまちかぬるとかや、床のうち思入ハ、さふ(ご)もかふもいわれん事じや、なんせハ(ば)こだけにして、御良ミじかし、道中よけれども(ご)、（以上、九裏）えりつきわろし、ごこやらにふかまおハして、まとのなさけをほとこし(ご)給ふゆへにや、さりし比へいさんし給ふ、あわれその人に、つゆほどなりともおやかりたや〳〵、

　つわものゝなにしおひたるかひもなく
　いまのともへはてきにまわれり

小　長　門　　芳　順　う　ち

此君は、りしやうの御よつぎのよし、け(げ)にさもあらん、御良は(ば)せあてやかに、らうたく、た(だ)うちうの御よそおひ、とをめには女ともみえす(ず)、おとこなりひらもかくやハあらん、一さしゆへか、あふき(ぎ)の手に、ほとけ御ぜんもちりを少しハひねらん、

なんせバ、道中かたはりてわろし(マヽ)、ざしき今少うきやかならす(ず)、しかししつはりとくらゐをふまへて、今さハ(ご)後にハはやるべきとのとりさたじや、きのとくや、もはや〳〵かうしにおりられたるよし、（以上、十裏）

　しほらしきたちふるまひのあふき(ぎ)のて
　おやハなひかやこのこながとに　（鬮出）

（表紙の二より）

ごでありまして、淨るりの正本さ略ゝ同年代です。さうして樂器さしては、鼓胡弓は止め、三味線だけを伴奏さして、操人形を使ひました。また淨るりさ同樣、當時說經の名人日暮小太夫さいふのが現れて、これが京都四條磧に座を構へて、所謂操說經を興行しました。說經語りに權式を作つたのも此男で、當時自分は嵯峨御所御免音曲諸藝司さ稱してをりました。從つてその一派に日暮の姓を名のる者も多く現れました。この日暮さ名づけた譯にも說がありますが、略きます。この日暮小太夫は、此の名古屋へも興行しに參つてをります。尾陽戯場事始さいふ本に現れてをります。丁度寛文五・六年の頃です、名前は、說經操芝居さいふので、場處は尾頭町です。この本には、日暮小太夫も京上るりなりさして、說經さ淨るりを混同してをります。それ程似てゐたのでせう。なほ、天和頃にもその一派が來てをります。この小太夫の末路は、前半生が花やかであつた丈あはれな物で、丁度近世浪花節の大家雲右衞門さ同じやうで、寶永四年版青木鷺水作の「近代因果物語」の中には、この小太夫の末路を小說風に描いてをります。猶、貞享四年頃には、說經座が江戸の堺町に三座あつたさいひます。以て當時の江戸の流行が想像されます。元祿頃は最も盛んで、三都に斯流の大家が割據した、即ち京は日暮小太夫、說經與八郎、大坂は說經與七郎、江戸は結城孫三郎、天滿八太夫・江戸孫四郎などです

（此の上、未完）

寄贈紹介

○新聚歌舞伎役者繪畫集　吉田暎二編

吉田氏校訂の歌舞伎年代記の添編、その圖録である。無論、年代記原本には無きもの、新聚さ名づくる通りのもので、年代記所載の年代に吻合すべく、範圍は稍狹い憾みがあるが、それ丈年代記の圖錄さして完全に近いものである。清倍、二代清信、清滿等の鳥居派春草一派、寫樂、春朗、初代豊國等に及んでゐる。圖版九十八（內四個は原色摺）、これを單に役者繪畫集さして見るも、初期より興隆期へかけての浮世繪版畫の或圖面を語るものさして結構なものである。（菊判布裝天金、三圓半。東京市京橋區木挽町歌舞伎出版部）

○浮世繪に關する文獻（一）　金田[illegible]編

前編、明治以後浮世繪研究書解題第一總說の一半、及び序說が可なり長い。（價不詳。和體寫、大阪市南區日本橋四丁目、高尾書店）

○あべ川の流　下

る「駿府洒落本複製、その下卷である「珍品たる事贅言を俟たず（和二十丁。五十錢。）靜岡縣庵原村庵原千四百八十五、茂林修竹山房）

○明治文化資料展觀書目

明治節制定記念に擧行せられた展觀書目、主催は日比谷圖書館、十五項に分類せられて、地圖錦繪其他に及び、好參考。（非賣、菊二〇頁、東京市日比谷圖書館）

○JOCK講演集　第四輯

十五講、十三氏の講演集。內、小生の趣味講座三講を入れてゐます。（四六判一九二頁、五十錢。東京市牛込區津久戸町九、創生社書店）

○日本文學講座　第十二卷

三馬研究、五瓶研究、八文字屋物など、豊富。（非賣、東京新潮社）

○變態妙文集　內藤[illegible]編

主に徳川時代の戯著稗史の類より好むに從つて拔かれたるもの、艶本類にも及んでゐる。此の種の本は、嘗ても明治年代に數編を見た。當代また之を必要とするだけの意味は無論あらう。（頒布二圓。和、百四頁。東京市牛込區東五軒町二十七、文藝資料研究會）

○性象徵に根ざす生命象徵

イ、イ、ゴルドスミスの譯だ　さ、いふが、殆ど譯者（鈴木蘇水氏）自身のものにこなされ、日本の例も豊富に引用せられ、圖版も多く、面白い本である。決して硬くない、上品なユーモアを語るものさして、私は、飽かず讀んだ事を正直にいふ。（四六判四〇六頁二圓五十錢。東京市牛込區東五軒町二十七、文藝資料研究會編輯部）

○言語遊戯考　[illegible]谷[illegible]著

雜誌叢書の第四編さして出來、內容此種の、文獻的書物の最初さして、謝するに足る苦心經營のもの。唯材料あり過ぎて說く事稍疎の嫌はあるが。秀句、口合、地口の話、尻取の話、早言の話、言語遊戯雜談、その各章、細項に分れてゐる。圖版も最も適當。內容だけは、小生牡丹餅大の印を捺してお勸めしたい。但し小聲でいふが、表紙の地紙及綴糸が稍不得心。袋紙の出來は上乘（和半紙本百三十二頁二圓八十五錢。東京市牛込區東五軒町二十七、發藻堂書院）

定價表

一冊	六冊分	十二冊分
貳拾五錢　郵税貳錢	税共壹圓四拾錢	同貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增のこと

○照會は返信料添付の事

昭和二年十一月二十八日印刷
昭和二年十二月一日發行
（貳拾五錢）

禁轉載

編輯兼發行者　尾崎久彌
印刷者　英比貞造
印刷所　扶桑社
發行所　江戸軟派研究發行所

昭和二年十二月二十八日印刷
昭和三年一月一日發行

參編　第十九冊（通編第六十四冊）

本文

「吉原天秤」の体裁と全内容（中）

作者生活の諸相

洒落本雜抄（下）

近世語物雜談（續）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十九冊（通編第六十四冊）

近世語物雜談（上ノ下）

倩當時の說經、その內容に觸れてみます。此等は多く六段物でありまして、文体結構は古淨るり物と同樣、佛說に關するものが多いのでありますが、重言反覆のうるさいことは、今日の浪花節に傳はつてゐるといはれてゐます。當時既に祭文が並び行はれて、五說經八祭文というて有名でありましたその五說經といふのは、愛護の若、山椒太夫、苅萱、信田妻、梅若の五ッで、其他に小栗判官、俊德丸など十種ほどあります。例の豐後節を口汚なく罵つた太宰春臺は、同じく「獨語」で、此の說經に就て「俗說に任せて慥ならぬ事も多けれども、節は昔の詞にて賤しき俗說を交へたる中に、やさしきことも少からず、其の上幸若舞の詞の如く定まれる數ありて、いつも古き事のみ語りて、今の世の新しきことを作り出さず、且聲も唯悲しき聲のみなれば、婦女これを聞きて、そゞろに淚を流して泣く斗りにて淨るりの如く淫聲には非ず。」と、まだ何方かといへば褒めて貰つてゐますが、然しこの評語にもあつたやうに、說經が唯舊い事斗り語り、それもせゐ〴〵二十篇內外の題目を繰り返してゐるに過ぎなかつた事が、軈て此の說經の亡びる基でした。當時、說經よりは稍後れて生れ、說經の影響をうけて同時位に發達し、同時位に三味線と人形を用ゐ、共に座を構へた淨るりの方が、まだ世間の氣を見るに敏でした。江戸では、薩摩淨雲及びその門下の名流が現れるに及んで、說經は從來の地位を淨るりに讓るの已むなきに至りましたがまだその頃は上方だけは說經なほ流行を極めて名流も多くあつて新興の淨るりを壓倒してをりました。然るに、淨るりは、爾來著名なる作家輩出、語り手にも名人續々現れ、且つ說經とは全く變つた新生面を開き、所謂世話物時代物に、文學上音曲上極致な花を咲かせましたから、徒らに、舊い殼に巢くつて餘生を保つてゐた說經は到頭滅び、以後田舍に斗りその餘風が存するやうになりました。享保の頃は、殆ど滅んだのでありますす。これが第一期、寧ろ本來の說經節の起りから亡びまでです。が滅びはしたものゝ、この說經の節は特にその特徵たるウレとの節は、諸流に採り入れられ、長唄の如きにも入つて居ります。普通にウレイの三語りとして、義太夫、新內說經といひますが、此の三つは、成程慥かにウレイに長じてゐる、その中でもこの說經がウレイの親玉、且つ先輩である事は、謂ふ迄もありませぬ。其他、說經の小栗判官武勇鑑のお鍋の述懷の節所謂お鍋ぶしが、義太夫のさわりそのまゝ、小敦盛の捨子の場の、暗さは暗しの節が、クラサハ節と名づけられて、夜道の形容に一般に用ゐられてゐるなどは、誰も知つてゐることで、江戸半太夫の如きも初め說經を學び、後淨るりに移つた、故に江戸節一名半太夫節の中には、此の說經を混へてをります試みに、一般俗曲の中から、殘り傳はつてゐる說經の目星しい箇處を擧げてみます。長唄「勸進帳」の實に〳〵これも心得たりのくだり同じく鷺娘の、しのぶ口說の種のといふ處「淚ながらに取上ぐる酒を」などは說經ブシ。其他說經がゝりのものは、幾らもあります。

以上が本來の說經節の由來、その盛衰でありますが、それが變態ながらも、說經節又は說經祭文の名の下に、復興しました。それが享和頃です。先是、江戸に、薩摩淨雲（江戸淨るりの祖ともいふべき地位にあります）の、末流に、廣瀨式部太夫といふのがゐた、その門人に米屋千八、略して米千、これが廢れた說經節を好み、初め錫杖を相方にして語りました。此の、初め錫杖を相方にしたことが此の男が形の上からも說經と祭文とを一つにしたといはれます。此の錫杖が祭文と伴つてゐる事は、次の祭文浪花節の方で悉しく申します。これを更に錫杖の代りに三味線を用ゐるやうになつたのが、同じ長屋の京屋五鶴であつて、即ち此の二人で後期說經淨るりを作り上げました。即ち千八改め薩摩若太夫（後に若松若太夫）となり、これが說經語りとなり、五鶴は三味を勸めた、さうして若太夫の姓をとつて、薩摩座の名前で、說經芝居を興行、人形を操つた。此の若太夫の門人色々あつて、門葉は榮えました。が此の初代若太夫は文化八年に歿しましたが、それ以來此の後期說經節は、各人群雄割據で、從つて團結力に乏しく、斯流の衰微を招きました。が、此の後期說經節は、節の上にも當時說經よりは比較して命が長く絕えては續いてゐた祭文もとり入れて、結局此の二つを一にして、說經祭文と名づけてもよいものなのでした。丁度此頃、西に浪花節（初期江戸時代の浪花節）が生れてゐました。即ち祭文を中心にしていふと、祭文から西に初期の浪花節、東に復興した變形の說經節を生んだ譯です。現に、稍極端ではある

「吉原天秤」の体裁と全内容（中）

京町　三郎右衛門内

ちさと

めんていうつくしさ、月花にもたとへかた（が）し、この比のしんそ（ぞ）う太夫のうちには、出來物なり、いまた（だ）こまかにハ評せす（ず）、ほと（ど）よきかたちなり、あとたくわしくハ、玉のさかつ（づ）き（に脱カ）しるす

うつせミ　三浦うち

うす雲のとりたてなり、めんてい大かたなり、よくいきぢをあねさまにならひ給へ、わや事ハいらぬもの、新造のうち出來物也

和泉　同隠居内

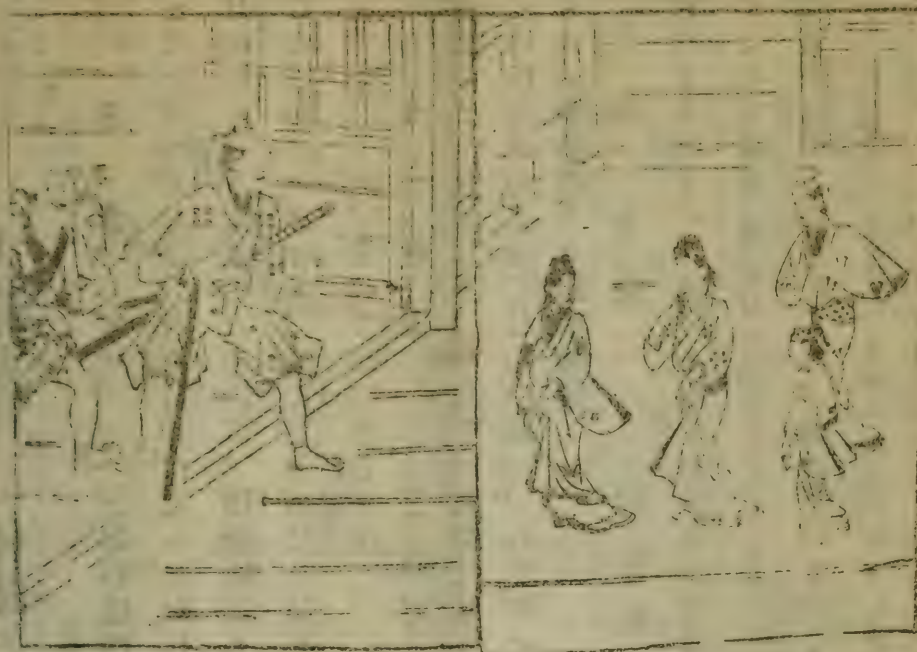
此君のようは（ば）うハ、かの小町か（が）わかざかりもかくやわと（だ）おもほゆ、道中けたかくふうりうにして、いかなるやほ（ぼ）めもさなか（が）らに、御の字のすか（が）たとおもひしに、世もつまりたるゆへにや、かうしにおり給ふハほ（ば）ひなし／＼、御字にて（以上、十裏）おハし（ぜ）まさは、ゆくすゑハ御せ（ぜ）んせいにおハしますへきに、さて／＼残念／＼

なんせ（ぜ）ハ、ざはい今少おも／＼し、御心だてあ（す）ねこ（ご）ぜたちににられさうで、きのどくじや、す（で）いぶんきをしとやかに、いひすつる言葉まて、なさけふかくすると（ご）になきやうに、かね／＼た（ど）しなみ給へ、世はなさけの下にすむといふ事をハ（バ）、よく／＼こゝろへ給へかしや

新町をふつて出らるゝいつ（づ）ミさま
いつあひみてもいとしかるらん

河内　角町　五郎兵衛内

此君の御良は（ば）せハ、かのたかやすのさとの、たれやらが思ひものも、是（以上、十一表。此のツラより七ウキにて、挿絵第二）（以下十二裏より）ほ（ご）とにハまさらし（じ）とおもわる、道中のてい、さなか（が）ら梅香をさくらの

挿絵第一（四ノ裏 五ノ表）

花ににほはせて、柳の枝にさかせたるがとし(ごと)、又一ふしをうたひ給へる、しやミせんの糸もけた(だ)かき音にひかれて、一ざ枕をかハせしやほ(ぼ)は、雨のふるよもふらぬよも、風のふくよもふかぬよも、かわちか(が)よひに身をやつすとこそ聞、源五兵衛がぼんてんこくへのぼりしも、此君ゆへか、御心た(だ)てにうわ(柔和)にして、ざはい床の内いふもくだしや、かく山いこく身ぬけの後ハ、ぜんせい此君にならふハなし、これなん鯉魚さまとや申さん

なんせハ(バ)おかほのほくろめにたちて、わろしといへば、またし(ぎ)ほらしとおしやる人もあり、やか(が)てねこき有ハきのどく

松　枝　　　二丁目　庄左衛門内

此君の御よそほひ、御たけすらりとし、まつのみと(ご)りの色はへて、千世をみせたるそのふせ(ぜ)いあり、た(だ)うちうさら〳〵として、つくろひなし、ざはいこうしや、御心だてにくげなし、むかしハ（以上、十

二裏）おみきのなる事、てうはくりんもさかつきをもちにけ給ふほどの御きさしにて、おわせしか、この比ハたしなミまいらぬよし、ミぬけし給ふなら、さけハとかくつい忘とおほしめしとまり給ふか、おちやもとのほかむらきよし、おもわくのはなしちや、しゆせきもいとおさ〳〵し、尤つしまよしのしゆせきよしといへど、このきみのふてにハおよはし

なんに、どこやら大名のおく方のやうなると申人あれども、さやうにもなし、よしハらのてならひしたくハ、この君になれたるかよし、つたふど申おのこどつれたち、おり〳〵さかつきに預りし事有

うきはし　新町　九兵衛内

此君の御良はせ、いつもにこやかにして、ふちよひやうの梅花の春風にえめるかとし、小哥しやミせんよしどいへども、なミ〳〵にて聞たる人もなし、せんせい日出なり、後ハしらぬ事しや、おはれ露のなさけに預りたきといふものあり（以上、十三表）

なんせハ、いろくろし、たう中もしやくミて、しさいらし、やどを出給ふ時に、かならすかたをひねり給ふ、さはいよけれども、いつも極月の十三日のやう成り、心たてむくやかならす、されどもはりつよし、末ハ不知

ときお　ほうじゆん内

この君のようぎ、いとあてやかにして、さながらときわ木の、いつもかわらぬ御けはひ、もつともしのハし、りしやうかく山身らくの後ハ、御家の白ねすミなり、心たてすき〳〵ならん

なんせハ、いろあひわろし、さはいうきやかにしてやりたや、されどもなしむにしたかつて、おもしろき所ありと、誰やらかものかたり候

丹州　新町　三郎左衛門内

此君のめんてい、見るにおもひもふかみ草の、あかつきの露をふくミて、にほひをはくにとならす(ず)さ(ざ)はいうき〳〵として、さかつ(づ)きのさしひき、床入のそらた(だ)きハ、とかういはんもくたしや、むかしのたんしうもよもこれほと(ご)ハあらし(じ)とおもほゆ

(以上、十三裏)

なんせハ、今少しこたけなり、た(だ)う中のてい、かひさ(ご)りたかくて、すそか(が)れにみゆる、しゝつきよけれハ(ご)、おちやもあしからぬとそ(ぞ)、あわれ〳〵一ふく申うけたや〳〵

ね　に　は　　二町目　山三郎内

此君のようは(ば)う、咲く此花冬こ(ご)もり、今を春へ(べ)とかをはくにたり、た(だ)う中ほじや〳〵として、人のいわらしめきたり、ゐこくつとめの内ハ、なにかとわる口いふ人もありけれと(ご)、せんせい今にめいりたまわす(ず)、あはれあねさまにあやからせたいと、よそなか(が)らも思ハる、

なんせハ(バ)、物こ(ご)しわろし、されと(ご)も御心た(だ)てハきやしやとそ(ぞ)

小　太　夫　　三浦隠居内

此君のかんはせ(ば)、大はくの菊花を、かめ(が)に一本さしたるか(が)とし、前ハ御字にてありしか(が)、おりられたり、ざはいあしからす(ず)、さゝもつよし

なんせハ(バ)、御心た(だ)てあまりよからず(ず)、床の内あち(ち)すき(ぎ)て、つくろひか(が)まし、おもてに白ふんぬりすき(ざ)て、雪□(不明、母の如し。たしかに雪にて、さりとて、上は、雲母にあらず。)かとも(以上、十四表)あやしまる、た(だ)う中もとよりこたけなるに、こしからみて、なにとやらしさいらし、されと(ご)もつハ(パ)らはりつよし

せ　い　し　ゆ　　すミ丁　三左衛門内

せいすらりとして、さなか(が)ら五しやくのあやめに露をそゝき(ざ)たるか(が)とし、百躰ものおもハしきふせ(ぜ)いあり、さ(ご)はいとしまゆへにこうしや(巧者)なり

なんせハ(ば)、た(だ)うちうこしからみて、みにくし、

心た(だ)てわるか(が)しこくて、しかもてゞりものなり、あハんとおほ(ぼ)さん人、かまへて心ゆるしたまふな、もはやつとめもあきたるよしなれと(ど)も、なにやらくびたけおひ給ふゆへ、身ぬけか(が)ならぬよしのとりさたじや

かしう　角町　九郎兵衛内

ようき(ぎ)、せ(背)いたかく、もつたいよし、さ(ざ)しきつきさしまゆへこうしやなんせハ(バ)、かほた(だ)ちけんそにして、にくらし、心た(だ)てあくまて(で)いや（以上、十四裏）なところあり、てきをた(だ)ます(ず)事すいぶんじやうす(ず)也、おちやハ、かたのごとくわろし、これもつとめハあきたるよしなれと(ど)も、すくせか(が)わろくて、みぬけか(が)ならぬとみえる

はつせ　たてたし　伊左衛門内

ようき(ぎ)いとうるハしく、た(だ)うちうしとやかなり、さ(ざ)しきこうしやめきたり、心た(だ)てにくけ(げ)なし

挿絵第二（十一ノ裏 十二ノ表）

なんせ（ば）ハ、今少しこたけなり、たれやらとおも
ハくにて、過しころ平産し給ふ、けいも（じ）しのう
へにてしんじつの見つゝ（以下マヽ、見え、頭痛カ）うハたのもしき心入な
れ（ど）とも、かつうハ御せ（ぜ）んせいのさわりにやなら
んと思ふも、いら（ざ）さるせんしやうか

はな野　三浦内

めんていきわめてうつくしさとハいわれ（ず）す、いにし
へ品川におわせしかど、このさとにしゆ（じ）つせして、
（ご）や（が）とやかよひをし給ふ事、けいもしの（ぼ）めんほくこ
のうへハあるまし（じ）（以上、十五表）
なんせ（ば）ハ、おとがいすほ（ぼ）りて、いろうきや（だ）かな
ら（ず）す、床のうちこせりたり、うす雲とあひた（ど）か
らよきやら、いつもつれたち給ふか、たゝしば
せのしか（じカ）〳〵

ふちおり　二丁目　庄左衛門内

よう（ぎ）き大かたなり、ざはいあしから（ず）す、心入よし、
あまたの上ろうさんちやへ下られしに、松枝この

君ハ、たし（じ）ろき（ぎ）たまハん事、てから（が）、それか（が）し少
し御なさけにあつ（づ）かりたふ思ひ、十八さまをたの
ミ候へ（ど）とも、か（が）つてんなされぬハ、とかくまつ（ご）と
のに申（ぶ）ふんあり

よしだ　新丁　彦左衛門内

かほた（だ）ち大か（が）たなり、ふとりつよし、もとハ御の
じなりしか、おりられたり、心た（だ）ておもしろき所
あり、さゝをのまるゝゆへ、ざはいもあしから（ず）す、
もはやつとめもあきたるよし

はつ雪　たてたし　伊左衛門内（以上、十五裏）

よう（ぎ）きうつくし、口もと少しいやしく心だてやハ
らかなり、びやうじやゆへか、かつこうほそし、
す（ず）い（ぶ）ふんやさしきふうなり、ねすか（が）たハよけれ（ど）と、
おちやハよからぬよし

はつね　すみ丁　七左衛門内

せいすらりとして、ふとりし（じ）ゝなり、ざはいあし
から（ず）す、こうたしやミせんす（ぐ）くれたり、心た（だ）てす

さまし(じ)き人なり、やほ(ぼ)はうつかさかゝるへからず、身おもくして、しハ(バ)らくひつこみたまふ、つとめもはやあきたるよし

しつか　三浦うち

かほた(だ)ちよし、少して(で)びたいか、心だてやわらかなり、ざはいとこのうちよし、たれもすくかたきなり、おちやハよからぬとぞ、たゝ(ゞ)し身ぬけし出たるよし、とりさた也

よした　京丁　三郎右衛門内

せひたかし、めんてい大かたなり、めもとしほらし、さ(ざ)しきつき（以上、十六表）小うたよし、心だていやな所あり

きよはら　新丁　九兵衛内

ようき(ぎ)おもハしからす(ず)、道中くびつきわろし、さ(ざ)はいすき／＼ならん、心た(だ)てすさまし(じ)き人なり、やぼはうつかさかゝる事むよう、こうたしやミせんよし、おみきそこしらず

とやま　ゑさ丁　四郎兵衛内

ようき(ぎ)大かた、いろ少しくろし、ざはいあしからす(ず)、こうたよし、心だてハいやさいふ人あれと(ど)も、おもしろき所あり

正つね　同人内

ようき(ぎ)大かたなり、だうちうざはいよし、心入よし、たれやら口もとにほのじのよし、とハり／＼

まんしゆ　新町　三浦隠居内

せい今少しひくし、かほた(だ)ちあしからす(ず)、ざはい大かたなり、とこの内にてなにやらそつといふ、つねならぬふかまゆへにや、三月廿一日の夕に（以上、十六裏）御へいさんおわしますよし、めて(で)たし、心入あまりよからす(ず)

千代　同人内

かほた(だ)ちを見れハ(バ)、天狗のむすめかとやあやしまる、ざはいよし、誠にたてくふむしもすき／＼かとおもわる

いこく　同人内

みめよしからず、ざしきしさいらし、きた(だ)てあさ〲し、山三か(が)いこくつとめのうちハ、此人を大いこくとわるくちいふかたもありき

せいしゆ　同人内

かほたちにきびふきいて(で)ヽ、あらびれたり、た(だ)うちうハこしかヽ(ゞ)みて、あしヽ、としまゆへかし、か(マヽ)しこの人にあふてきの心ねがしりたい、もつともとをりものて(で)ハあるべけれど(ご)も、

たかせ　同人内

ようき(ぎ)ざはいよし、しやミせんよし、小哥ハはなにかヽるやうて(で)、きヽにくし、た(だ)うちうしさいらし、さわき(ざ)ものなり、ふみ（以上、十七表）きもなるゆへにや、ふちやもよしと、ふてきのはなしじや、少しいけん申たき事あれど(ご)も〲

唐さき　新丁　久右衛門内

かつかうよりかほ(貝)ちいさし、色白くざはいあしからす(ず)、ふみきもよつほと(ほど)つよし、心だてかしこくみゆる

金太夫　同人内

かほた(だ)ち大かたなり、せいたかし、と(ご)こやらいやし、道中ふもハしからす(ず)、ざはい床の内あしからず、心だていやなところあり

あかし　同人内

めんていうきやかならず、ざはいおもハしからす(ず)、前はつきおにおハせしが、今ハかうしへあか(が)られたるハ、ほゐ(本意)なり、床の内こせつきて、わろし、心だておもし

たミや　すみ丁　吉兵衛内

かほた(だ)ちおとがいすバりて、さるまなこなり、さこのうちこうしや（以上、十七裏）なり、心た(だ)てわたにてくびをしむるやうなり

ときハ　江戸丁　伊右衛門内

こたけにして、ふとりしヽなり、かほた(だ)ち大かた

なり、た(だ)うちうおもハしからず、ざしきつきこうしや、ふられてめにたつ、床の内初からこちしだいなり

い　な　は　　同人　うち

めんてい中なり、目もとしほらし、まへは太夫なりしが、おりられたり、心いとをし丶、ざはい大かたなり、床の内あしからず、しゆせきもよし、

は　な　野　　同人　うち

かほだちくきやかならす(ず)、はなこ(ご)ゑにて、ものごしわろし、心た(だ)てやわらかなり、しよてからこまなるよし

八　千　代　　すミ丁　喜右衛門内

めんてい大かたなり、どこやらあいきやうありて、いさしらし、目もと(以上、十八表)(コノ次ヤ、十八ウより十九オへヒラキ、挿絵第三)(以下十九ゥより)よし、さ(ざ)しき心た(だ)てにくけ(げ)なし、とこのうち初からこちした(だ)い也

ち　さ　と　　角丁　長右衛門内

めんていあしからず、だう中しとやかにさ(ざ)しきよし、こうたしやミせんもあしからず、どこやらおもしろき所あり

ゑ　く　ち　　同所　権右衛門内

せいすらりとして、めんてい大かたなり、た(だ)うちうしさいらし、ざしきうきやかならず、こうたよし、よくねらる丶、とゝ(ぐカ)のまごかとおもふ、あけ(げ)や町の中ほどにふかまあるよし

み　か　さ　　同人　うち

皃た(だ)ち中なり、じまんらし(じ)くて、いやなり、道中しとやかなり、心入ハすさましき、ざしき大かた、小うた吉

小　源　太　　京丁　三郎右衛門内

ひたいおか(が)りて、皃なか(か)くみゆる、ざしきつきよし、きた(だ)ておもしろき所あり、おちやハおもハしからぬ(以上、十九裏)

と　や　ま　　同人　うち

貞(だ)たち大かたなり、だうちうなんなし、座敷あしからず、心たて(だ)ハおもしろき所あり

て　い　か　　同人うち

貞たちわろし、としまゆへ萬事こうしやなり、しかし自飯米(じまゝの意カ)(で)てもあふ事ハ、しんしやくなり、とにおちやもよからぬよし、此人をあるもの、けいせいくだしといはれしハ、もつともじやと、我も思わるゝ

き　ち　や　う　　新町 三郎左衞門内

せいひくし、貞(だ)たちうきやかならず、道中もよからず、ざしきつき大かたなり、小うたよし、きた(だ)てやハらかなるよし

花　　月　　同人うち

みめわろし、ひたいぬけあかり(が)たり、たうちう(だ)ふもふじからず、心たて(だ)のところにあつかまし、つりをとりてもあふ事はいやなり、いやもちやうすのやくとみえたり（以上、廿の表）

せ　き　し　ゆ　　すミ丁 三左衞門内

貞(だ)たちよろしからず、道中みすほ(ぼ)らし、おひむ(び)なたか(だ)にて、いこくじ(じ)んをみるやうなり、ざはいぬらりとして、おもしろげなし、心だてやハらかなり、とこのうちハ下されしだい也

せ　ん　じ　ゆ　　同人うち

貞だち大かた、道中わろし、ざしきおもハしからず(ず)、心だてやわらかなれど(ご)も、あつかまし、小哥よし

さ　か　た　　江戸町 又三良内

めんてい中なり、道中よし、ざはいあしからず、小うたしやミせんよし、さゝもつよし、よきたいこ上らう也、心だてかしこし

さ　く　ら　木　　同人うち

かほだ(だ)ち、ひはんにおよばす(ず)、はなひくし、道中をよく〳〵みれハ(バ)、なきあまのおもてをかけたるとし(ごさ)(ざ)、さしきよし

挿絵第三（十八ノ裏 十九ノ表）

はなさき　同人うち（以上、廿裏）

めんてい中也、ざはいしとやか、心だてにくけ(げ)なし、いかなる事にや、世にあまりさたのなき人なり

まさつね　京町 彌左衛門内

みめ中なり、はな今少しひくし、さ(ざ)しきうき〳〵としてよし、心入おもしろき風也、道中おもハしからず、せいひくし、能たいこ女らう也

こよし　新町 彦左衛門内

めんてい(面体)いろくろく、にくらし、せいひくし、心だてたれあつてよしといふ人なし、前ハ御のじなりしが、おりられたり、ざはいよし、こうたよし

しのゝめ　角丁 庄左衛門内

かほた(だ)ち大かた、しゝつきすぎたり、た(だ)う中わろし、心た(だ)てあつかまし、うた大かたなり

はなの野　同人うち

かほた(だ)ち大かた、た(だ)う中よくもあらず、心だてか

しこし（以上、廿一表）

きんさく　　京丁　孫兵衛内

かほたち(だ)よからず、たうちう(だ)わろし、さけつよし、心だてやはらか成り、ざしき大かたなり、やほ(ぼ)をぬらすがしやうす(上手)成よし

きちやう　　同人うち

みめよからず(ず)、こづくりなり、たうちう(だ)いなもの(初手)なり、心だてよし、しやミせん上手なり、しよてからてきにまはらるゝよし

きさら木　　同人うち

みめいつくし、たう(だ)中いゑのふうならめど、よろしからす(ず)、ざしきうきやかならず、きたて(だ)はよけれと(ど)、さい／＼のむしんにこまるとおてきのうわさ(噂)じや

はつしま　　角町　喜三郎内

かほだち大かたなり、せひ今少ひくし、ざしきとこのうちよし、心だてかしこし、しゆせきよし、ぶんじやなり、まへはさんちや(散茶)なりしが、あから(が)れたり、ちんちよう(珍重)／＼（以上、廿一裏）

いなは　　同人うち

ようぎあしからず、道中よし、ざしきはけ(げ)山のとし、心だてやはらかなり、とこのうちあしからぬよし、これもまへはさんちや(散茶)なりしが、あがられたり

とやま　　新町　宗玉うち

かつかうよけれと(ど)も、いろ／＼ろし、ゑりつきわろし、此(こ)ころまて(で)御のじなりしが、おりられたるよし、もつともじや、また今まて(で)はおそかつたとのさたじや、そうじて此一家の女らうは、わるきくせありて、しりさがりをせうとそ(ぞ)、とりさたなり

はつしま　　同人うち

かほだちおもはしからず、少ししやくミたり、ざはいうきやかならず、あまりしげ(げ)くむしんをいはるゝゆへ、すゑとけてあふてきなきよし、さもあらん（以上、廿二表）ー（闕出）ー

作者生活の諸相

作者所謂戯作者としての、俗傳化した戯作者ぶりに就ていふのではない。作者（今の言葉では、作家）としての彼等の、その出途、並びに作者としての生命の長短、業蹟などに就ての、短評を下してみたいと思ふのである。無論、すでに諸家によつて言ひ古された事であり、別に新味とてはないが、彼等を一堂に集めて、總括的に物してみるだけのものである。

先づ私の謂ふ作者といふのは、これを營業的作者の意味に限定しておく。それ以前にありても、無論作者と稱し、彼等も自ら稱へたのであらうが、此等は、多くは半營業的、且つ出發點も余業であり後期純作者の如き、文學人としての全生活をまだ具備してゐない。殊に、京傳の如き、途中筆路を枉げはしたものゝ、前期喜三二などの輩に比べて、まだ文學に生き文學に死なん（寧ろ作に生き作に死なん）の心底が見えてゐた。喜三二や歸橋の輩、作者としてまた半面の偉大さがあり、嘗て、純作者に比し勝るとも劣らぬ――質的に考へて――作を殘してゐるが、が要するに、全的な努力ではなかつた、と見做して、除外する。即ち主に町人の手に作者の株を奪ひつゝあつた京傳の出現以後に、これを劃りたいと思ふ。即ち今、俎上に上さうとする人物は、これを出世の年代から列擧すると、京傳。馬琴。三馬。一九。種彥。春水。の六輩である。

先づ、その出世作、一般出途の形式に就て比較してみよう。

作者傳の如き、傳說まじりの說話は省く。唯、業蹟の上からの比較をしてみたい。先づ、出世の年月と死歿の年月とを、六家全部に就て示さう。

	（處女作）	（歿）		文學生活年數
京傳。	天明二年	文化十三年	（寶曆十一年生）	三五
馬琴。	寛政三年	嘉永元年	（明和四年生）	五八
三馬。	寛政六年	文政五年	（安永四年生）	二九
一九。	寛政七年	天保二年	（明和三年生）	三七

種彥。文化四年－天保十三年（安永九年生）　三六一春水。文政四年－天保十四年（寛政元年カ）　二三

右のやうに表示して來ると、初代春水の案外、文學者としての生活年月の淺いことに呆れられる。馬琴の最も長いのは、彼の長壽のせゐであるから、例外として、他京傳と一九と種彥とは、似たりよつたりの數である。三馬が、春水に次ぐ少い數である。それにしても、黃表紙――洒落本――讀本と、一身によくその部類の名作を最も多く殘した、（此の他の五家に比較して）京傳は、その天禀の偉大であつたことが、京傳びいきならずも肯がはれはしないか。（自分は、京傳は、洒落本に於て特り偉大なりとは思ふが。）

以下、その出世作の考察である。

京傳は、政演（畫名）として、既に安永七年に、お花半七開帳利益札遊合　二（十丁）といふのがあるといふ。但し此本、政演畫ではあるが、政演作なりや否や不詳のものである。尙、天明二年の「御存商賣物」に移る以前、安永八、安永九、天明元に亘りて、畫一方のもの、又は畫作かと思はれるもの、書目年表等には見られるけれど、不詳なれば省く。がとにかく、京傳の出發點は、作家としては、黃表紙である。天明五年に初めて息子部屋（令子洞房）を出した、これが洒落本の初作である。以後洒落本作として、十數篇を數へる。が同時に、黃表紙の作としても、名作「艶氣樺燒」以外數十篇がある。寛政三年の處罰以後、洒落本には手懲りして、以後黃表紙、合卷、讀本と、漸く彼の天禀に背く（？）作が出で始めた。それは、洒落本作家としての彼自身の優秀な伎倆を掣肘せられたため、さりとて作家生活を維持するために生じた已むを得ぬ現象である。が、彼は、誰しも考へてゐるやうに、洒落本作家として、十數篇（現在の數）の洒落本作を遺してゐるといふ點のみに於ても、尠くとも文學史上の王者であると謂へると思ふ。（悉しい事は、外骨氏著の「山東京傳」などに、比較的悉しい年代別、作の年表がある。それに讓つて、今は省く。）

馬琴も、その初めは、黃表紙であつた。京傳門人大榮山人と署名した「盡用而二分狂言」は、丁度寛

政三年の版である。即ち馬琴（しかも未だ馬琴の名ではないが）の擡頭は、京傳が洒落本に筆を絶つた、後世我等が、認めて、彼の眞骨頭を奪はれたと觀察すべきその記念すべき年に始まつてゐるのである。がその馬琴とても、まだ、片々たる黄表紙作家であり、又その執筆の內容に於ても、時流の所謂戲作を追うたものが多い。彼が讀本作家として、斯界、否當時文壇の覇者を以て自認したのは、はるか後年文化期の事であり、即ち先是、享和期、曲亭傳奇花釵兒の如きは、（享和三年版）宛然芝居脚本に擬したもので、彼の讀本作家としての後世の自負には、これを裏切る事甚しいものである。（その作をおとしめるのではない。私は、他の機會に於て、此等初期の彼の讀本類や黄表紙、又は他の編著例へば戲子名所圖會の如き類によつて、彼の初期俳優讚美、芝居禮讃などの事實を擧げてみたいと思ふ。）

〔なほ、馬琴には、「高尾船字文」五册が、寛政七年版で、讀本としての第一作といはれてゐるが、此作、當時の振鷺亭などの先蹤諸作に追うたもので、未だ、馬琴の眞個のものではないと思ふ。馬琴の讀本作家としての胎生は、享和期にありと思ふ。〕

但し、此の「花釵兒」もまだ中本型で、勿論二册の讀切、未だ後年の八犬傳の著者の如き、空前なる傳奇小說の大家たる風手を示してゐない。傳奇小說家としての過程を踐み來つたのは、文化三年の「椿說弓張月前編」に始まり、その地步を愈々確實にしたのは、文化十一年の「南總里見八犬傳初輯」の發兌によつての事である。

三馬は、これも京傳などゝ同樣、その出發點は、黄表紙であつた、即ち寛政六年の天道浮世出星操三卷（十五丁）がその處女作であるといふ。間もなく寛政末には、五六の洒落本（戲家山人は、三馬に紛ひなしとの予の判斷により「仲街艶談及び三人醉酊などを含む」）を生んだが、その洒落本も、多く次期の中本（滑稽本）に似かよつた內容、筆致を既に孕んでゐた。が、まだしも彼は、他に較べて純一な道を步んでゐたかと思ふ。即ち黄表紙――洒落本――滑稽本と道は異つても、內容には、殆ど一貫して、彼の作家的個性が純一に滲み出てゐるやうに思はれるからである。彼の本格は、無論事後から考へたら、中本（滑稽本）作家としてであらう。即ちその中本の初作は、內容の上から、文化三年の「醉酊氣質」であるかと思ふ。文政四年の「茶番早合點初編」に至るまで、作としては、二十篇內外、多作

の方ではないが、よく彼の本領らしいものを殘して死んだ所に、彼の幸福さがあるかと思ふ。

一九も、三馬と同じやうな道を歩んだ男である。即ちその處女作には、大阪に於ての丸本の補助作木下蔭狹間合戰がありはするが、(寛政元年)、これは、小說物以外であるから省く。彼の小說壇上に於ける處女作としては、六樹園飯盛の趣向に據つての作だといふが、とにかく寛政七年の「心學時計草」三(十五丁)である。此歳他の二作の黄表紙作、同八年以後、毎年十篇以上を數へる多作を黄表紙に殘してゐるが、これといふ程のものはない。以後文化年度に至り、合卷形式に移つてからも、彼は驚くべき多作を遺してゐる。洒落本にも、「見通し占」(寛政十年)を初めとして、享和期に至つて、十篇以上の作がある。まだしも、その作中、「商内神」、「素見數子」、「起承轉合」、その後篇「遊冶郎」、「吉原談語」などは、洒落本作家としての彼の名を銘するに足りるものであると思ふ。が彼の事後より見ての眞骨頭とも思はれるのは、享和二年版の、東海道中膝栗毛初編の類である。爾後その續編、並びに類似作が多い。が氣の多い彼は、この期以後と雖も、黄表紙又は合卷、時には讀本類にまで、筆を著けてゐる。駄作秀作とりまぜて、彼ほどの多作家は、この六家の中では、長壽にして而も精力家であつた馬琴を除いては、誰も及ぶはなからう。それだけ膝栗毛の作者、洒落本十數種の作者としてより以外には、彼は、印象が稀薄であるかと思ふ。それだけ、彼は、場當り作家たるの随一人だつたと謂へるかと思ふ。

種彦は、ちやうど浮世繪師の細田榮之と感じが似てゐるかと思ふ。勿論身分は、榮之は高く、種彦は低く、較ぶべくもないが、同じく俗文學俗書の類に遊び作ら、何處ともなく他の作者他の書家に比して、氣品を保つてゐる點、さ程賣らんかなの態度にも出なかつた、と思はれる點など、二者相似であるかと思ふ。その種彦——、彼の處女作は、文化四年の「阿波鳴門」、讀本がその發途である。洒落本にも一作を存し、その「山嵐」は、翌文化五年の出版である。人情本にも、一作があつて、晩年期天保十年に「縁結月下菊」がある。が彼の本領は合卷(草雙紙を含む)の作者であつた。合卷としての初作

は、「鯖庖丁青砥切味」であり、文化八年の作であるが、その長篇作家としての出途は、「芝居狂言に借り根本を草双紙形式で行つたと思はれる「正本製」(その初編は、文化十二年)であり、名作「田舎源氏」の初編は、文政十二年である。即ち彼は、文化四年の出途以後、初期讀本の作數種、洒落本作一を除き後期人情本の一作を除いては、彼は全く合巻(草雙紙)に終始してゐる。それが、合巻作者としての、彼に活動の地を與へた天與の機會の、恩惠のせゐもあつたらう。加へて彼自身の天禀技倆のせゐもあつたらうが、とにかく彼は、幸運兒であつた。唯、晩年、田舎源氏に由つたか、又は例の秘本「水揚帳」に由つたか、不明であるが、とにかく恐縮して命を縮めたのは、可哀想であるが、戯作者としては、比較的純一な途を歩んでゐたやうに思ふ。又、合巻(草双紙)に於て、今日いまだに彼の獨壇場であつたかの如き觀を與へるのは、それ丈まだ彼は瞑すべしだと思ふ。人情本に容れられず、洒落本不振、合巻に於て、彼の活路を見出したのは、強ち彼の利口さばかりとも謂へないかと思ふ。

春水は、初め二世振鷺亭を名のつたが、後、二世楚滿人となり、文政四年始めて鯉丈と合作になつた「明烏後正夢」の作があり、翌五年には、讀本「撫子草紙」の作があつた。即ち彼も讀本及び合巻に於て、(合巻には二十種近く)相當の作を殘してはゐるが、その本領は、無論人情本であつた。洒落本を巧みに變形、一層その取材を豊富にして、社會百方を採り入れたのは、少々(或は大いに)臭味はあるが、とにかく、それで天下の宗と自分も認め、人も許したらしい業績を殘してゐるだけ、わらいと思ふ。即ち人情本に於てとにかく出途し、これを以て畢生としたらしいだけ、彼もまた比較的、純一な道を歩んだ、惠まれた作家であつたと思ふ。(因みに、初代振鷺亭は、文化四年に歿したといふ一説(戯曲小説通志)を信ずると、それ以後例へば、文化九年に、合巻「四月八日物語」三巻の作を初めとして、以後振鷺亭の名に於て、合巻又は滑稽本、人情本類などに、數種の作がある。即ちこれ等を、全部初代春水の初期作と見做されねばならぬが、それは、未だ信ずるに躊躇もあると思ふから、今は、二世楚滿人としてが彼の處女出版であり、二代振鷺亭當時は、現れた業績はないとしておく。尚此の問題は、今一度考へてもみたい。)

以上で、大体の觀察を総つたが、とにかく比較的純一な道を歩んだのは、此の六家の中、三馬一九種彥春水であると思ふ。馬琴の後期は、順風に帆を孕んだやうな形迹である。唯これらの諸家の惠ま

れた機運作家としての)を生んだ先驅者となつただけ、筆禍を受けたことは論外として、相當に焦慮し、また創作的に苦しんだのも、京傳であるかと思ふ。後進のために、凡ての道を拓いてやつたやうな所がある。洒落本に於て、三馬一九の先驅を(更には、人情本作家の春水に暗示を)垂れ、合卷に於て種彥の先鞭、また滑稽本に於ても、三馬一九などの先鞭、讀本に於てまた馬琴の先蹤、即ち江戶後期、色々な戲作形式の元を生んでゐるだけ、(勿論彼と同期の他の傍流作家の功績もあるが、)彼は、恰も、文藝復興期のダ・ヴヰンチの如き地位にあつたかと思ふ。アンゼロであり、ラフアエルであつたものは、以下の三馬、一九、種彥、馬琴、春水の輩である。

とにかく、馬琴また京傳門人として名を出し、其他、春水のやうな自惚氣の强かつた男でも、楚滿人の名を借りた中に於て、系統なくして、戲作界に飛び出し、凡ての潮流を拓いた如く思はれるのは彼の偉大さである。勿論、三馬一九種彥の三者は、誰の門人とも斷らず、又誰の二代目も名のらなかつたが、此等がまた戲作で立つてゆかれる基を拓いたのも、京傳であることは、無論である。

門人關係を調べると、京傳は、天才的の所がより多くあつたせゐか、馬琴及び洒落本「囀昔茶唐」の作者艶示樓(これを、自分は東里山人だと思ふが)の外は、餘り大した人物は、生んでゐない。(關亭傳笑、感和亭鬼武も、京傳門人であつたともいふ。)三馬一九には、門人は多かつた。三馬は、浮世繪師の國芳と肌合が似てゐたかと思ふ。即ち彼の肌合に惚れて、しぜんに門人が多く寄つたかと思ふ。(春水も、初めは三鷺と稱して、三馬の門人であつた。)一九は、彼の自己宣傳によつての取込法によつてである。殊に彼は、屢々旅行して歩いて、その先々、江戶の大家を振廻したせゐか彼の門人と稱する者が多かつた。勿論滑稽本の宗として、彼の名聲を利せんとする田舍作者も多かつたらう。春水にも、東都文壇の花形、人情本の宗たる偶像美に憧れて、門人となるものが多かつた。(が、傑出した作家は出てゐない。)一番弟子が比較して少いかと思はれるのは、種彥であるが、これとても、仙果の如き校合を受けた者は、相當に多かつたらう。絕無とも謂ふべきは、馬琴である。

貧乏の体驗者は、最も謙であつたらう。これも京傳ではなかつたらうか。商人七分で、鄙吝だつた

と謂ふが、それも貧の体験からだらう。一ばん儲け出した、金にもけちなやうであつたのは、文献的にはいへないが、一九と春水かと思ふ。がその二人とても、今の流行作家の印税ほどは、無論無かつた筈である。まだ三馬の化粧品業（「江戸の水」）は、確實な財を小三馬に遺すだけのものはあつた。

此論、纏りないものに、なつたかと思ふが、以上、姑らく此の筆を措く。傍流作家であつた京山。東里山人。振鷺亭。金水などの論は、以上六家の補遺論と共に、後々の事とする。

この余白、何がなと思へど、差當り此の行數のものなし。新著市場直二郎氏「廢頽大津繪節」に寄せたる小生の叙を載せておく。一種の戯文もどきなり。乞失笑。（久彌）

廢頽大津繪節叙

蹴出し赤きよ　赤からずともよし。形また痩れくづほれたるか。さなくともよし。われは横たはれるがよし。眼あきゐるもよし。最もよきは、うたゝ寐の枕もと也　勿論すでに眼ざめゐる事肝要也。相手は御存知なし。談でも取りにゆかんとして。そゝくさ踏み越えんずる。さなくば立ちはだかりて。いとしもよさゝ（人が見てゐたら、め。め。めといひたげなる）寐顔を挟みても見んずる悪戯がきの刹那。わが鼻頭をかすめて強き。ホラいつもの事ながらその裾さばき――、腐れたる梔子花の臭の如きより、男心ひきつけんはなしと。事めかしくいはんも野暮。これをしも婦女子の体臭が與ふる示唆と。事むつかしくいはんもうるさし。そのかの如き酸つぱき甘きさりとてしやつきりと情の根を浮き立たしむる如きは。これをしも大津ゑぶしの情趣なりといはんも、誰か是ならずとせんや。

われ幼きより大津ゑぶしなるもの。その音曲物の一として耳に慣れたるは淺し。さりとて知らるゝ如き中本・横本様々なる形を傚せるしかもその色摺表紙、就中挿繪の。卑に猥にまた狂に綺に、様々織り成せるを見慣れたるは深し。年頃　江戸軟派てふ標語を創り、視野、淺深轉　淺廣袤　年代も伸び範圍もひろまりぬれど。嘗く都々一好此大津繪、就中此の大津繪節本の懷しさ。快さ。さりとて餘り人前には忸怩たらん心の失せ難さあの蠱惑とやらを遁れたるに非ず、とか殊勝にいひ來れど。とにかく大津繪ぶしは、眼學問本位のわれの自家論ならずとも。その歌詞の内容に於て、廢頽第一。否廢頽その物也。時代これを生みしか。われ此の論を措く。嘗て西の國ボオドレエルの奇怪なる卑猥なる詩を、難解の譯によりて味解に力めたる事ありき。そのしかあるよりも端的に。ひしひしと思ひ知らるゝ頽廢、腐敗、淫靡、糜爛、しかもまざまざと恐ろしき迄に時代相を浮き立たゝせをるは。此の江戸末期我が持てる大津繪節なりと。今に於て信ずるや切也、（下略）

洒落本雜抄（下）

○吉原振興策

安永六年の「郭中掃除」に現れたるもので、主人公祖禮（徂徠に擬す）のいふ郭中掃除制談の下半である。當時吉原の狀にも觸れてゐるが、先づその振興策だけに止めておく。

（前略）かくいはゞ必いはん一躰上方と此里とは、其風俗別なり、上方ははりなく此地ははりを第一とすなどゝいはん、是亦いはゆる負おしみといふものなり（云々）客がだん／＼わるずれになり、安店へは茶屋は損なり、舟宿より行がよいといへばそれなりにて濟をもつて知るべし、しからばはやく其機を察し、費少く遊び面白くなる樣に心がくる肝要なり、（中略）費さへ少く遊び面白くなりたらば、つつかけより茶屋へ行が面白く、初會より裏に行が面白く、裏切より名染が又面白きは人情なれば、誰か壹人せわ／＼敷き磯せゝりをする人あらんや、（中略）すべて春夏秋冬の初までは人の心も浮き立ものなり、それよりそろ／＼淋しくなり、引込思案の出るものなれば此節一ト趣向なくんばあるべからず、九月は兩側へ菊を植へ、籬を結ひ、夫より紅葉を菊と植替にすべし、扨十二月初より座舖へほうれい綿をしき、投入立花砂の物等をいかにも目に立やうにありたし、此月別して人の氣の傷む時なれば年忘の設ともなるべき事なり。人の心は愚なるものにて、なんぞかこつけ事なければ行ぬものなり。（下略）

などといふのであるが、誠に穿つてゐる所から考へて、この作者福輪道人といふものの、えら者であつたことが、窺はれる。さてこの作「郭中掃除」は、徂禮に借りた制談に終り、此の後編として、春會（春臺に擬す）の著はす「郭中經濟錄」といふ本のあるらしげにいひ、又奧附に豫告もしてゐるが、この洒落本は、未刊か若しくはしやれの存在である。

田區表神保町十、坂本書店）

○日本文學講座　第十三卷

近松時代物、西鶴好色本、並木五瓶等、江戸時代もの多し。（新判。非賣品。東京市牛込矢來町、新潮社）

（表紙ノ二ヨリ）が、人によつては、大坂での祭文即ち初期の浪花節と東の後期の説經節、この二つは殆ど同じ物、名が異るだけといふ人もあります。此の後期の説經節、その語り手は男性であつたが、それを女性にしたのが即ち説經源氏節といつているのです。

説經源氏節は、本來新内語りの岡本美根太夫が、薩摩若太夫の後期説經節の節をとり入れて、一流を創つたのが、即ちこれです。源氏節と名づけたのは、明治初年の事で、さうしてその譯は、恐らくは、普通の淨るりが、牛若と淨るり姫のその淨るりから來た、それに眞似て、寧ろ淨るり以上の淨るりといふ意味で、淨るり姫の相手牛若の姓に借りたのでせう。がではなぜ牛若節といはないかといふと困ります。此の美根太夫は明治十五年八十三で歿して居ります。此の初代美根太夫の門人が數多現れ、中にも、その中の一人初代美住太夫は、松處齋と稱し、これが名古屋に源氏節を入れた最初の人であります。名古屋に於ける源氏節門下は、大抵此の人の門人です。先是、此の源氏節は皆三味線に合せて語るものでありましたが、明治となつてから、此の美住太夫は岐阜の豊松藤助といふ人形使ひを呼びよせて、此の名古屋で、源氏節に合せて人形を使はせる事を試みました。又初代美根太夫の女門人名古屋生れの美家登司といふのが、人形の代りに、人間を使ひました。即ち源氏節の節に合せて、女役者に人形振を踊らせましたが、これを首振と稱しました。これが明治五年の事で、此後更に此の首振を止めて、口跡を附し、芝居風となしました。やはり女役者にです。明治十八年頃には、名古屋の嘶家連が、又人形を用ゐ、大阪の人形方を雇つたといふ話であります。其後三四ヶ月に、後の源氏節芝居が、全く形の上で出來上りました。即ち、初代美根太夫の門人で名古屋に來り住んだ美咲夫太の門人、女性の岡本美狹松といふのが、明治十二年頃から既に源氏節語りとして、名人といはれてゐましたが、此の明治十八年頃に、此の美狹松の工夫で、美人數人を集めて源氏節につれて身振、興行、これ即ち源氏節芝居の基を開き、一時が當時の人氣に協つて、一時に有名になりました。明治三十年頃には、その派の岡本美狹三といふのが女優五六名をつれて東京へ遠征したが、當時は例のタレ義太夫がはなやかに盛んなので、餘り流行らなかつたが、女義太夫衰ふるに及び、源氏節が俄かに盛んに、一時は名古屋の名を揚げました。然るに、其の興行が、芝居と紛らはしい爲、警視廳の取締が八釜しく、それが爲間もなく衰ふるに至つたといひますが、名古屋は本場だけあつて、明治年代なほ榮え、（勿論、後ほど芝居が主で、節は餘興同樣となりましたが）つひ此頃までも私は何處かで、あの痛ましい新内紛ひのやうな節廻しと、侍になつた女優が腹を切る、晒布で卷いた乳房の痛ましさは、よく見かけたものです。なほ、美狹松の話、源氏節が忠孝貞と戀と惡、此の五ッを語ることを主意とした事、その代表的な語り物の話もありますが、これはよく知られてゐる事ですから、略きます。

○寄贈紹介

○日　錄　　尙美社編

十一月十九日に行はれた尙美社主催の浮世繪入札目錄である。コロタイプ數十葉、墨摺時代、紅摺繪時代、錦繪時代、各時代に亘つての名品が中々に多い。珍奇な構圖のものもある。好參考。（頒布價貳圓五拾錢。東京神田區元佐久間町一、尙美社）

○長ふくべ　　川柳寺雀羅編

假外題。川柳江戸やなぎの第五である。（謄寫版。東京市外野方町下沼袋一五八〇、川柳寺雀羅）

○校訂柳多留初編

今井卯木花岡百樹兩氏校訂に成る。底本として推すべきものたる事、謂ふまでもなし（小判和紙刷和裝。八拾錢。岐阜市金屋町二、柳書刊行會）

○緣の挨拶　　寺下長夫譯

シモンズの譯詩集である。裝幀此種のものとして最もふさはしく内容また淸新、選擇せられたる詩もまたよく、譯筆また流麗正當である。（布裝四六判一五二頁、シモンズ小傳二〇頁、貳圓。東京市神田區南神保町十六、交蘭社）

○日本風景畫展覽會目錄

日本八景並に浮世繪風景畫展覽會の目錄である。「浮世繪風景畫の部は、發達史上の參考としてよし（横和綴、寫眞版數葉付。大阪市大阪每日新聞社）

○辰づくし　　乾坤六枚

伊藤晴雨畫伯の筆、木版數度摺江戸趣味横溢してよし（各拾錢。東京市外下澁谷、國學院大學内、江戸時代文化研究會）—以下欄外

（十一月號）學燈○愛書趣味（十二月號）民謠詩人○藝術通信○歴史地理○江戸往來○境地○北隆館月報○文獻（風俗研究）國學院雜誌○本道樂○川柳雜詠○紙魚○葉蹟○歌舞伎○學燈○變態資料○墓碑史蹟研究○史學。

［著者より］號刻物索引、遲れて、只今、此の原稿執筆中、机の向ひ側で、家内が、奥附に捺印してゐます。今度こそ、この小誌以前に生れませう。御推奬下されたし。○年末匆忙、各自の御多幸な御超歳を祈る。同時にこれを發送する時は新年である、即ち賀正の意も共に含めておく。（十二月二十六日ひろ）

定價表

一册貳拾五錢　郵稅貳錢

六册分　稅共壹圓四拾錢

十二册分　同　貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事

○照會は返信料添付の事

昭和二年十二月二十八日印刷
昭和三年一月一日發行　〔貳拾五錢〕

編輯兼發行者　名古屋市[illegible]　尾崎久彌

印刷者　名古屋市中區南大津町二丁目[illegible]　英比貞造

印刷所　名古屋市中區南大津町二丁目三番地　扶桑社

發行所　名古屋市東區[illegible]一五七番地　江戸軟派研究發行所　振替名古屋九六七二番

寛政九年版 「津きぬ泉」李の卷又三ノオ

アサヒビール

大日本麥酒株式會社

名古屋支店

昭和三年一月二十八日印刷
昭和三年二月一日發行

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第二十冊（通編第六十五冊）

本文

近世語物雜談（下ノ上）

祭文と浪花節の話であります。

祭文は、もと山伏が唱へた祭文から出てをりまして、小さな錫杖を振り、小さな法螺貝を吹き、これに合せて神佛の靈驗又は緣起などを語りましたが、後にはこれに小唄を交へ、又錫杖の代りに三味線に合せて俗間で唱つたものです。説經から變化したとも謂ひますが説經よりは稍遲れて、殆ど同時に一種の遊藝として發達し來つたもので、後になる程、説經と祭文は混同され易く、又時には殆ど同樣の事もありましたが、最初には劃然たる區分がありました。即ち説經は佛の緣起、祭文は神の由來又は死者を弔うたに始まり、又説經は鉦を叩いて拍子を取つた、祭文は錫杖を振つて拍子を取つた、これ丈の相違があると思ひます。さうして爾後遊藝化してからは、説經は、多く古傳説又は教義、祭文は時事を唱つた、これ丈の明らかな區分があります。が、その節には、説經の感化が多大にあつたことは否めない、一に、祭文は説經節の柔きものゝやうなりと古い書物にもあります。先づこれが祭文の概念です。以下くはしく申します。偖、元來、祭文は、古く天台宗などにあり、その風が神道に用ゐられたらしいので、文体も純漢文式のものと、純神道の祝詞宣命式のものとありましたが、足利期すでに京都太秦の廣隆寺(眞言宗)の牛祭文は、宣命の風でありますが、内容は頗る滑稽的に作られてをります。即ち此時代、此のやうな砕けた祭文が出來、それが益々俗化して、祭文の形は取つてゐても、内容は、神祭りの意味を離れて全く娛樂的のものを生んだ、さうしてそれがいつか山伏のする所となり、後には、藝人化した山伏が現れて、その頃は、山伏の實は失せて、宿に伏して衆人の座興のために、教訓まじりに、この新工夫の祭文をよんで聞かす、さうした事が行はれ、それが後には、説經などの節も參考して、一種の陽氣なものを拵へた、それが江戸期に入つて、次第に俗化し、後には、三味線を使ふやうになり、名前も遊藝物らしく、「歌祭文」といふに至つたと思はれます。その俗化した祭文の烈しい例は、江戸時代の初め、神おろしを眞似て、遊女や役者の名よせを唱つた、祭文といふ本來の意味からは隨分と怪しからぬものも生れました「當時、祭文語り(つまり山伏)の風采は、胸に袈裟のやうなきれを掛け、腰に短い刀を佩し、手には短かい錫杖を持つてをります。即ちこのやうに、初めは、まだ山伏の風を傳へて、此の錫杖を振つてよんでゐたのが、後には、錫杖の外に、小唄をまじへて三味に合せるといふ風に變つた、これが歌祭文の名の生れたもとです。此の三味線を用ゐ始めたのが、寛永の頃だともいひます。此頃、京歌祭文は、一人が三味を彈き、一人が錫杖を振つて歌つたとあります。が、一方元祿版の人倫訓蒙圖彙には、錫杖を振つてゐる一人だけの圖がありますから、此の時分、普通の祭文と、歌祭文の錫杖と三味線、人も二人位といつたものと、二種あつたらしいのです。一説、此の時分の歌祭文は、既に説經節の影響を受けてゐたともいひます。此の歌祭文――祭文の一層遊藝化したもの、――は、所謂心中歌祭文を生みました。お俊傳兵衛、お染久松、此等の事實や傳説やをとり混ぜた心中者を弔つたものを歌ふのが、それです。が文句は、凡てその時々の芝居や淨るりから取つてゐますが、材料も、又流行したのも、上方であります。西鶴の五人女や近松の淨るりから取つたのもあります。此の歌祭文が、間々上方の芝居の中へ用ゐられたのもあり、又淨るり(義太夫)の中へとり入れられたのもあります。甚しいのは、淨るりにこの歌祭文の名をそのまゝ入れた「お染久松新版歌祭文」(安永九年九月、大阪竹本座興行、近松半二の作です。)といつたものもある位です。此の歌祭文は、古い所は、元祿の「松の葉」に載せた祭文もありますが、特に軟派の祭文即ち、此の元祿から享保頃までの歌祭文は三十種位ありますが、當時説經の代表作と共に五説經八祭文といふのがあります。その八祭文といふのは、八百屋お七、お染久松、おさん茂兵衛、小三金五郎、お初徳兵衛、おちよ半兵衛、お夏清十郎、お俊傳兵衛の八つであります。偖此の祭文が、これは、説經とは異つて、大した流行も無かつたかはり、滅びもせず、後は大阪方面では、淨るりや其他に壓倒せられて微々たるものであつたが、それが地方へ擴がつてをります。各地の地名を冠らせて、即ち江戸祭文、大阪祭文、生玉祭文などゝいうて、流派らしいものを生んでをります。が、多くは、賤民階級の人々によつて、田舍を廻つて歩いたのです。無論本職の山伏はとつくに絶え、山伏風をしてゐたに過ぎません。その田舍へ渡つた、その田舍によつて、幾分、節も異つてゐたでせう。

(表紙三へ)

「吉原天秤」の体裁と全内容（下）

かづらき　　角丁　庄右衛門内

せいすらりとして、かほた(だ)ち大かたなり、ざしきとこのうちよし、心た(だ)てやわらかなり、まへハさ(散茶)んちやなりしが、あか(が)られたり

よしおか　　同人うち

さ(ざ)しきうきやかならす(ず)、心だてかわゆらしき人なり、た(だカ)うしんといふせか(が)れ、今少ふかきよし

かつ山　　同人うち

ふとりすき(ぎ)たり、かほた(だ)ちしゆきをさしたるやうなり、た(だ)うちうわろし、ざはいしとやかならず、心だていやな所あり、前ハさんちやなりしが、あか(が)られたり

はつやま　　京丁　権左衛門内

みめよからず、ざしきつきよし、小うた(ら一字カ)ハお町(五カ)一は(ば)んのうたひてなり、いかなるしからむしも、一ふしきいてハ、あしが（以上、廿二裏）たゝぬよし

わかやま　　三浦うち

こたけにして、かほしやくミたり、色も少しくろし、物ごしよし、ざはいあしからず、と(ご)こやらにかくしまぶのあるよし、一だんの事じや

みよし　　同人うち

めんていおもハしからず、目もとわろし、た(だ)うちうおよぎにんぎやうのやうなり、ざしきつき、口はしたなくて、きゝにくし、さけつよし

こふじ　　同人うち

めんてい大かた、色少しくろし、きだてにくからず、さ(ざ)しきよし、さけもつよし

さかた　　同人うち

かほた(だ)ちわろし、おとか(が)ひなか(が)し、ものこ(ご)しつくろひか(が)ましくてきゝ（以上、廿三裏）にくし、ざはい

よし、床のうちにてうつといへと(ご)、さやうにもな
し、ぬらししやう(上手)すなり

さんしう　三浦うち

かほた(だ)ち中なり、せい少しひくし、さ(ざ)はいよから
す(ず)、きた(だ)てやはらなり、あまりこのもしからぬふ
うなり

かはる　同人うち

かほまろうと(ゞご)して、まゆすミ(ず)いろらし、た(だ)うちう
べた〳〵として、みにくし、心たて(だ)やはらかなり、
なし(じ)むにしたか(が)つて、いやな事があるぞ

さくら木　同人うち

かほた(だ)ちほそし、ざしきよし、床のうちおもはし
からず、こゝろた(だ)ておもしろきところなり

ちよの　同人うち

かほた(だ)ちおもはしからず、ざはいよし、心た(だ)てお
もしろき（以上、廿三裏）ところあり、うたよし

はつね　同人うち

かほた(だ)ちおもはしからず、ざはひよし、心た(だ)てか
しこく、ぬらしじやうす(ず)也

小太夫　同人内

めんていよからず(ず)、ざしきよし、心だてやはらか
なり、いつもかうしのなすばかりなり

柏木　ほうじゆんうち

めんていうるはし、ざしきとこのうちあしからず
心だてすこしすけなき所あり、道中よけれど(ど)、し
りつきわろし

はつはな　同人うち

めんてい大かた、ざはいしとやかならす(ず)(カ)、うきな
らす(ず)、口きゝすき(ぎ)てにくらし、心だてやほ(ぼ)はいや
か(が)るへ(べ)し

かつやま　同人うち（以上、廿四表）

かほた(だ)ちいやし、まへは御のじなりしが、おりら
れたり、きだておもしろき所有、ざはい大かた、
床のうちよし

藤　な　み　同人うち

かほた(だ)ちあしからねど(ご)も、いろくろし、心だてよし、ざはひうきやかならぬよし、かつてはやらず(す)

か　ゝ　り　う　すみ丁　半兵衛内

よ(ぎ)うき大かたなり、さ(ざ)しきしとやかなり、きたて(だ)にく(げ)けなし、しゆせきもあしからず、おちやゝおもゝしからねど、下されした(だ)いなるよし

か　し　わ　ざ　き　新丁　九兵衛

㒵(だ)たちまるくいろ白し、だうちうしりひらめ(ど)にてみにくし、心だ(だ)てやゝらかなり、ものこ(げ)しつくろひあるやうなり、さ(ざ)はい大かた、けいなし

こ　さ　ら　し　同人うち（以上、廿四裏）

みめあしからず、た(だ)うちうしさいらしく、こゝろ(だ)たてかしこし、床のうちおもゝしからぬよし申ものあり、いまた(だ)しんざうにおわしませゝ(べ)、さぞあらぬもんど(ど)ころに、ゆかりと申だら(マヽ)は(が)、かつてんか

玉　か　つ　ら　角丁　吉兵衛内

めんてい大かた、目もとねをきを見るやうなり、心だてかしこし、こうたあしからす(ず)、ざはい大かたなり

み　な　と　同丁　権郎(マヽ)門内(おさノ誤カ)

かほた(だ)ちながし、ざはいとしよりとおなし、心だてにくからず、こうた大かたなり

こ　ゝ　の　へ　同丁　吉兵衛内

㒵(だ)たちおもゝしからず、ふとりし(じ)ゝなり、めもとわろし、心だてこまさくれたり、よくまひをまわるゝよし、すこしのあいた(だ)御のじなりしが、おりられたる也、（以上、廿五表）はだへゝわろし

た　か　せ　すミ丁　吉兵衛内

㒵(だ)たちわろし、たう(だ)中おもゝしからす(ず)、小哥もよからす

た　ま　よ　同人うち

めんていひはん(批判)におよばす(ず)、たう(だ)中わろし、かう

しにはおこりか

つねよ　伊左衛門内

みめうつくし、たう(だ)中よし、ざしきやわらかすぎたり、心たて(だ)よし、こうたも大かたなり、のち〳〵ハはやる(べ)へし、きりやうなるほど(ご)よし

わかまつ　芳順内

貞(だ)たちよし、ひたいあがりたり、かわゆらしき風也、たう(だ)中よし、心入やわらかなり

きよ河　同人うち（以上、廿五裏）

貞(だ)たちよろしからす(ず)、心たて(だ)やはらかなり、はし(じ)めハいつ(づ)ミといひしが、ひやうじやなりとて、なをかへられたり

しかの　同人うち

貞(だ)たちよからす(ず)、たう(だ)中わろし、心たて(だ)むくやかなり

ときおか　同人うち

めんていよからず、だうちうしよしんなり、心入やわらかなり

いつミ　江戸丁伊右衛門

めんてい大かたなり、色少しくろし、御のじなりしか(が)、おりられたり、ざしきとしよりおとなし、心たて(だ)よし

いくよ　同人うち

めんてい中也、たう(だ)ちうよろしからず、つほ(ぼ)ねにゐられしか(が)、かつらねごきのあとめにあから(が)れたり

げき　新丁久右衛門内

めんてい中なり、ざはいやわらかなり、心だてかしこし、たう(だ)ちうわろし（以上、廿六表）

からまつ　同人うち

貞だちあしからす(ず)、たう(だ)ちうよし、心たて(だ)にくげなし

えもん　同人うち

かほたち(だ)よからす(ず)、ふとりし(じ)丶なり、だうちうわ

ろし、心だてやハらかなり

と　さ　　同人うち

めんてい中なり、たうちう大かた、心たてやわらか、さしきあし〳〵

つ　し　ま　　三浦うち

かほたち大かた、たう中よし、心たていとしらし〵

い　な　は　　同人うち

めんてい大かた、たう中よし、心だてあまりよからぬよし

お　の　へ　　同人うち

ようき大かた、ざはいおとなし、心だていとしらじ〵

よ　し　だ　　同人うち（以上、廿六裏）

めんてい大かた、道中わろし、心はおとなし

あ　つ　ま　　同人うち

めんていたう中あしく、心だてにくけなし

こ　よ　し　　同人うち

めんていおもハしからす、たう中大かたなり、心たておとなし

ふ　ち　な　ミ　　同人うち

めんてい大かた、だう中しよしん也、きだてやわらかなり、よき大じんつきしよし、珍重〳〵

さ　こ　ろ　も　　同隠居内

めんていよし、たうちうあしからす、心たてやハらかなり

か　し　わ　き　　同人うち

めんていよし、たう中わろし、心だてよし、うたよし、いつそやまといふものにあい給ふとき、わかミにつゆのま、はだへをゆるし給ふハうれしや、いまにわするゝへきさハ、そんせす候、ゆくする（以上、廿七表）はやるへき人なり

う　き　ふ　ね　　京町　彌左衛門内

めんてい水いたちのやうなり、口もとわろし、た

うちう大かた也、ざしきよし、うたは中なり

ちとせ　　同丁　三郎右衛門内

めんていよし、めつきわろし、だう中よからす(ず)、なにとやらひわずに見ゆる太夫なりしが、おりられたり

あわぢ　　角丁　五郎兵衛内

めんていあしからす(ず)、たう(だ)中よし、心だてやわらなり、よくあねさまにいきぢをけいこ(稽古)し給へ

しのざき　　同丁　喜三郎内

めんてい大かた、だう中よからず、心だてやわらかなり

こさつま　　同人うち

かほたち目もとわろし、だう(だ)中よからず、しやミせん大かた也（以上、廿七裏）

（以下の分一丁分、丁数を打たず、書出しの体裁上、或は、他の丁の紛れ入りたるかと思はるれど、錯かにもいへず、しばらくこの儘にしつ。即ち假りの廿八、そのオウ也。）

はなさき　　彦左門(マヽ)内

みめすいぶん(随分)きめこまかなり、口つき十めん(澁面)つくるやうにて、わろし、かつかう今少ほそめなり、座敷つきやハらかなり、とこのうちさわがし、前ハ御のじなりしか(が)、おりられたり、あるもの、この君にあいしに、とのほかなる御なさけ(じ)、まとに二葉の松のちよかけて、かハらしとのおふせの、かたしけ(じ)なきまヽ、ならぬ御身なれハ(バ)、せめてかたみともなれかしと、此おのこ日比(バ)てなれししやミせんをさヽけ(げ)給ふ、されハ君もあはれにおほし(ぼ)めされけんが、いかヽ(かど)したる事にや、あすか川となりゆき候(が)、われ錢かなふじさん(富士山)ほど(ぞ)〳〵

なんをいはゞ、とこのうちしんそう(ぶ)らし、はだへあらし、おちやハやふれせうし(じ)、三うらのたかをと此君きやうだい(契約)けいやく被成たるよし、誰やらに聞たのもし〳〵

松しま　　伊左衛門（たてたし）

めんていよからす(ず)、た(だ)う中わろし、少ふとりし(じ)ゝなり、心た(だ)てよし

はつ野　同人うち

かほた(だ)ち中なり、た(だ)うちうよからす(ず)、き(だ)たてよし

（以上、假廿八表）

よあらし　江戸丁 又三郎内

めんていよし、た(だ)う中大かた、うたひを少うたハる、心た(だ)てやハらかなるよし

しら川　同丁 四郎兵衛内

めんていあしからす(ず)、た(だ)う中大かたなり、心た(だ)て雀めのなくをにせ給ふ事むやう

たかはし　新丁 宗玉うち

めんてい大かたなり、た(だ)う中わろし、心た(だ)てわろし、かいしきうれす(ず)、かうしにおごり

しらたま　角丁 喜左衛門うち

かほた(だ)ちあしからず、た(だ)う中大かたなり、心た(だ)てかしこし、小うたよし

いつみ　新丁 彦左衛門内

めんていわろし、た(だ)う中しよしんなり、心た(だ)てにくげなし

さらしな　すミ丁 太郎門内

めんていまろりとして、ふとりし(じ)ゝ、た(だ)うちうわろし、心た(だ)てやわらかなり　（次ぎ、一行分アキ）

（以上、假廿八裏）

右此一まきを、わたくしのおもひいた(だ)したるにてもあらず、もとよりそれか(が)しハ、いなかのやでんよりも、はる〲と、はじめてこの花のお江戸へ上りつゝ、あさゆふの玉のをゝつなか(が)ぬやうのはべらんまゝ、せめてはいとなミのわさ(ざ)にもとおもひ、びやうぶのしたはりなんして、からきよの中を渡らんとおもひ、ふるほうごをなん、かいあつめしに、ある時せぞく此書物をもとめきたりぬ、たがひがきをみれハ(バ)、よしハらてんひ(び)んとかや侍る、めつ(づ)らしくおもひ、しやうふのりのかわかん事を

もいとわで、よみ侍れハ(バ)、こよなふおもしろさのまゝに、おてきたちのおほ(ぼ)しめさんもいかゝ(ど)なれ(ご)とも、このまゝにても、むげのふおもひ、はん(版)にのするものなり、まとに見るにめのどく、さわるにほ(ぼ)んのうとハ、よくいひつたへ侍る、その日(暫)〱のいとなミさへおくりかねたるそれかしが(ガ)、見るとひとしくかきうつす、そのつい(費)ゑいかはか(ば)りとや、おもひ侍るものなり
あとよりくわしくハ、玉さかつ(づ)きにしるす者也

（此次、一行分余白。即ち此の跋形式のもの、廿九字位一行、正十三行也。）

（以上、廿九表）

（奥附缺クカ）

○

以上が、全篇である。最後の、跋形式の言によると、此本、前篇であり、その後篇に、「玉盃　盞か觴か」といふのがあるやうである。悉しくは、後考に俟ちたい。また、引かれたる妓女たちも、その二代目なるもあり、初代二代の關係より、大凡そに、此の本年代を知りえられるものもあらうが、今は姑らく措く。なほ此本作者は、跋に此の作の動機を色々と假作してゐるが、然しその作者身元(みもと)は、此の跋のいふ通りであつて、即ち田舍生れのものであらう。

豆男物の三部作

八文字屋本が豆男物の濫觴であり、しかもその最初は、「魂膽色遊懷男」であらう。これが時好に投じて、以後その摸倣、追隨作が現れた。浮世繪艶書にも採り入れられた。鈴木春信畫の中判「まね右衞門」二十四枚がある。これに倣つたのか、湖龍齋筆畫の畫帖、「(假)豆女夫」の豆の夫婦を點景にした中判二十四枚物もある。小説の方でも、豆女を主材にした「潤色榮花娘」五卷(中本)が、明和年間(カ)に刊行せられてゐる。黑本にもあり、黃表紙にも京傳作など其他にちよい／＼見かける。洒落本の「南閨雜話」(安永二年刊)は、ちよいと序文に於て此の豆男を臭はしてゐる。(尙、此の豆男の筋を、豆男とならずに、唯魂の入れかへだけするものは、一筆庵英泉の「魂膽夢輔譚」「滑稽本」である。)がその本系は、凡て「魂膽色遊懷男」だと思ふ。此本、懷男といふ外題からして、既に支那の「和尙奇緣」(一名、燈草和尙、燈花記、小和尙とも云ふ。元の高則誠の作と云。)の、大小自在、時には女性の袖中にも收まるといふのを受けたものかと思はれる。即ち此の飜案かと、誰でも氣がつかう。但し趣向と形式だけ、僅かに借りただけで、內容は全く二である。即ち「和尙奇緣」は、大入道にもなり一寸法師にもなる自在なある男性的妖物が、到處女性を荒して歩く、女性の夫に見つけられたりすると、忽ち一寸法師となつて、匿れる。ゐなければ、女性の喜ぶ張大な入道となつて、逢會する。といつた趣向であるが、此の「懷男」は、それとは違ふ。即ち此は、豆大の男が、他の普通人間の男に魂を入れかへて、女性に逢ひ、かねて祕事を探り歩くのである。尙、此の「懷男」の趣向を、貞享版の「好色四季咄」(後、改題、「浮世榮花一代男」など)の脚色に倣つたと普通に謂はれてゐるが、今両者を對比すると、倣つたとは謂へないと思ふ。唯、前世に戀の運の拙ない男が、願かけする件と、事後、祕事を見聞する、その片破れだけは似てゐるが、然

てしまふのである。それに、「四季咄」の方は、全く見聞だけであるが、「懐男」は、主に當事者となるし「四季咄」の方は、普通大の人間であつて、隠れ笠なる道具がある。「懐男」は全く、豆大の男となつのである。即ちこの「懐男」は、僅かに部分的に(即ち素性と事後の一部分似てゐるのみで、「四季咄」に全く倣つたとは謂へない。寧ろ「和尚奇縁」に近いのである。(尚、この「四季咄」の直接の摸倣作は多い。桃隣作の「好色赤烏帽子」(元祿八年刊)などは、然りである。)

借、要するに豆男物としての祖は、「魂膽色遊懐男」であるが、これに、後篇と續篇とあるのである。從來、朝倉氏の「新修日本小説年表」などでは、「懐男」を説いて、「榮花遊二代男」をその後編とも謂ふべきものなるべしの意を説いてゐるが、これは誤りである。自分は、嘗て本誌執筆「驪竈のひま」のうちに、「女男色遊」一の卷の紹介を爲した。それに、懐男の後編かと謂うておいた。(「軟派謾筆」に此文所收)然るに、昨年であつたか、靜岡縣の「本道樂」に某氏が、朝倉氏は、榮花遊二代男を後編ならんと云ひ、尾崎は女男色遊を後編ならんといふが、さて何れかと疑問を出されてゐた。自分が、「女男色遊」を懐男の後編と見做したのは、内容もさることながら、その外題の角書に、豆右衛門後日と二行にあるからである。が、自分としては、朝倉氏の後編なりといふ「榮花遊二代男」も、また前編なりといふ「魂膽色遊懐男」も見なかつた當時であるから、「女男色遊」だけでは、どうにも斷決が出來なかつた。それが、只今、釋然疑惑を解くに至つたのである。それは、多年疑問にしてゐた「懐男」も「二代男」も、共に一堂に集めて見る事を今、得たからである。さうして、やはり自分の想像してゐた通り、「女男色遊」は、立派に、確かに、「懐男」の後篇であり、「榮花遊二代男」も、その原本を見るに及んで、同じくこれはその續篇、寧ろ摸倣作といふべきもので、決して「懐男」と「色遊」との如く、前後密接なる筋の聯絡あるものではない、と、「二代男」を斷定して構はない、その事實を見るに至つたのである。

最初に、此の三部作の解題、次にその梗概に移らう。

○魂膽色遊懷男　中横本五卷（五冊）　色三味線作者（自笑、但し實は其磧也）作　西川（祐信）氏插畫

自笑（實は其磧）作であることは、卷一目錄のはじめに、色三味線作者とあるから、明白である。によつて、又年代も略々了知せられよう。即ち傾城色三味線發兌以後（元祿十五年以後）と見るべきである。此本、後、再摺改題、「榮花遊び出世男」といふ。本稿の底本、この再摺本に據つた（或は、これは三摺本か。朝倉氏年表にいふ、後改題して「色道假寢枕」といふのと、先後いづれであらうか。）但し、表紙外題に、「榮花遊び出世男」とあるだけで、表紙以外は（本文は）、凡て懷男である。目錄初丁表の外題も、魂膽色遊懷男としてゐる。

○豆右衞門後日（後）女男色遊　同五卷（五冊）　同作カ　同畫カ

豆右衞門後日の角書に據つても、又「色遊」の本外題によつても、「魂膽色遊懷男」の後編たる事を暗示してゐるが、今、懷男五之卷の終りと、「女男色遊」一の卷の書き出しとを見較べると、全くその前後脈絡あるもので、即ち一は前編、一は後編、疑ひないものである。本稿底本とした「女男色遊」は、初摺本（但し三之卷一冊を缺く）であるが、別に家藏本に「色道後日男」の外題になつた零本（その第四卷一冊）がある。これは、最近、「女男色遊」の第二第四第五の三冊を入手するに及んで發見した事であるが、「女男色遊」の第四卷一冊と全く同一の物、唯、外題だけを彫り更へたものである。即ち、「色道後日男」は、或は、別物に從來見られてゐたやうであるが、「女男色遊」の改題再摺（再刻ではない。）である。倚、此の「女男色遊」は、作者と書者とを明らかにしてゐないが、懷男と同作同畫。否、作者は、明かに其磧であらう。畫も、祐信の挿畫であらう。「懷男」は或は、寶永（元祿の次）年間の版かも知れないが、（年表說）此の後編は、享保四年以後刊のものにてもあらうか。即ち、此本五之卷尾に谷村淸兵衞とあるからである。（尙、此の作者と年代に就ては、後に詳說。）

○榮花遊二代男　作者不詳　書家不詳　寶曆五年刊

これは、「懷男」「色遊」の續編ともいふべきもの、即ち、寧ろ承繼作と謂ふべきもので、外題にも、二代男とあるが如しである。即ち、「懷男」と「色遊」は、豆男一代男の前と後、これはその二代男である。作者も書者も不詳であるが、この二代男は、江戸版かと思へる。即ち本の型、体裁だけは、前二者を摸してゐるが、筆耕、書法、又は行文內容等は、江戸本位、即ち江戸版かと思はれるのである。（が、枕本形式のもの、江戸になしとの證明が出たら、自分の考違ひである。）尙、此の本刊行年代は五之卷最尾に、「寶曆五乙亥のとし　正月吉日」とあれば、此の年春の刊たること間違ひはない。尙々、此の本には、なほ後篇が續刊せらるやうに書かれてある。即ち、二代男後篇　榮花遊吾妻男全部五卷と云ふのがそれで、「右之本追而出し申候御求御覽可被下候」とはあるが、恐らくは、未刊に終つてゐよう。

以下、前編「懷男」、後編「色遊」、續編「二代男」の梗概である。

○

「魂膽色遊懷男」　全五卷（五册）

全五卷の目錄を左に、併記しよう。（但し原本には、一卷分づゝ、それ〴〵その卷頭にある。）

仙女ハ假寐の雲を枕　凡夫のむかしは酒屋の娵、樽の底打あけて身の上咄、戀の元手にあふさかやま、されかづらハ女の道びき　○奧樣ハ機嫌のよい榮花枕　××ごさハ命をむしりざかなゝれ酒ハ×の手がゝり、心底ハくもらぬ月夜にかまぬかれたおさこ　○大盡に紋日を括り枕　島原の曙の横雲は引たり三味線ばち利生ある女郎、客によりての×あしらい　○姉の異見耳痛樫木枕　浮氣手代色つれて通しかご、算用ハ尻からぬけ參り、おもわくハかくべつの×ちがひ（以上、一之卷）

——注意。前掲、大見出しの下、六號二行分は、原本、一字下げ、小書の所也。以下同じ。

嫁入はわさくさひ新枕　當世女ハ衣裳でばかす畫狐、こん〳〵の盃あいのしてはしれぬ佛、聟ハ腹立たり浮名　○內儀をまげる臂枕　長命丸ハ水もらさぬ中のよいきゝ藥、目のまへの無常は夜食の妨、千夜を一夜のしやうじんがため　○妾は船に揖枕　道頓堀の見世物両頭の蛇、尻頭のはたらく若衆、今にふり袖きて子共心、ちや屋のくハしやハ火の車のもゆる思ひ　○野良に咎を塗枕　內證ハし

らぬが那、太夫様の御來迎、涙もろき出家客、舞臺衣裳ハ×前の約束、ふくれぬまへなき、（以上、二之卷）

女房に鼻の下の長枕　野郎の樂屋歸りハ姿のはな見、よいめにあふて金とろ役者は、うまいせんさく、うなぎハ密夫の餌飼　○女郎を茶糟中込枕　らうじんの水揚あたらしい新町、太夫もなうんた顔付、誠ハなひにほれました、しゆもくづえついての×入　○若後家見せ掛珠數の房付枕　牛四郎芝居ハぬれのはじまり、三番つゞきハ×の逢者、思ひハはる〻月に村雲姥が目代　○大名戻り小判で頬を張枕　子ゆへの闇と金のひかりにまよハる〻母親、戀の闇にふみかぶる浮氣男、（以上、三之卷）

太夫をこなす晬の皮枕　じやく〳〵馬にのりならひ、おつる所ハ戀の淵、おはまりの女郎吉原すゞめの忠が不忠は、太鼓のでゝしだて　○おかさまに思出をさし枕　相性ハ木と竹、ふしく〳〵のある女夫中、×は佛の軍場兵法の奥の手ハていしゆがちゑぶくろ、楯もはだし　○浮氣後家寄合枕　上野の櫻色女中の花盛、下戸も酒にくだを幕の中、蘇ハ身をたすくる乞食の隱遁ぐ　○花嫁を三人一所に入子枕　淺草の觀音ちかいのあみにかゝつて來るつり物、きせんほつしが聟にふり袖を三人そろへもつならバ、世をうち山と人ハいふなり（以上、四之卷）

瞽女と見せたハよい手枕　鑵子ハ男の花一枝なりて女中の家づと、もらハぬさきの心づもり、おつ取て千両やしき　○腰元が算用ハあハぬ算盤枕　親に似ぬ子ハ鬼味噌、しろ氣のないむまれつき、蓮生の地黄丸、なづまする内儀のいろばなし　○太夫をよばす麥藁枕　けいせひ買のなれのはて、おさだまりの一重紙子、火打の石のかたひ誓紙は二世のかため、眞をあける小しんごが心中、　○奥勤の女中獨寢枕　さすがハ家老の妻女發明の一言、おなじ中間の花軍、ぐんばひのうちわ破、行所のない魂も知行とり（以上、五之卷）

梗　概

都ちかき山科に、身貧にしてぶ器量な男がゐた。今廿三才迄、戀と云字は知り乍ら、相手に成る女なければ、今に獨棲み、夜は宵からねた。然るに、此母「壚の長次にはあらねど夢中に馬をのむ」と見て懐胎したる子なるゆへ、拍子もない太鼓を打つ、で所の人荷馬といふ心で、にんだの大豆右衛門と名をよんだ。戀のないのを悲しみ、いろ〳〵したが、道ゆく女も詞をかけても相手にもなつてくれず、たうとう「せめて女の手にふれる物のもと手のいらぬ商ひ物を」と思ひ付、さねかづら取て、京の歴々の女中方へ賣べし」と、逢坂山に分け上り、爰かしこ、さねかづらを探し廻ると、はしなく一人の仙女に逢ふ。此の仙女、もと大津松本の里酒屋の娘であつたが、廿一歳まで男の肌知らず、兩親の物堅さに呆れ、此上に戀を祈る山神ありと聞いて、分け入つたが、あるいたづらな仙人に出あひ、これ

の洞穴に引こまれたが、それより自身も身輕く、所謂仙女となつたといふのである。此の仙女から、豆右衞門、金の丸藥を一粒授かり、ありがたやと飲めば、直ちにその身芥子人形の如き男となつてしまつた。（懷男の發生である。）これハと驚くと、汝、その小人となつて、見當る男の懷に入れば、その男の魂ぬけ出、汝かりに其男に入れかはつて、相手の女をまゝにする事、又なき樂みならずやと仙女から聞かされる。揚句、床內の秘傳書まで一卷を授かつて、大津街道の米積み俵の蔭に飛び上つて、都を志した。（以上、一之卷第一、仙女は假寢の雲を枕の條）

都の眞中、立賣大名の御用きかるゝ、歷々の町人、棟高く、屋作り美をつくして、今世ざかりの最中、その奧方は、十六の春の花、櫻御前とかや名高き御方のおとし子といへり。云々。ある夜、丹那樣は酒きげん、腰元共に煙草すい付させながら、近日初狂言見せにやらふが、どの芝居がよからふぞ。今からきわめておけと仰せらるゝ。（以下、數行、原文のマヽ。當時の役者評判の一端であらう。）女共いさみをなし、小佐川がよふござりませふといへば、かたはしからは、おやまの宇源太が見たいといふ、こちハ幸左衞門がにがみはしつた所と、幸十郎がつくろハぬ藝とが見たいと、心々の物ずき、おくさまハ喜世三郎が顏見せに眉のつくりのけうとく見ちがへたが、誰いふてきかしたやら、今年ハまゆを京風につくりなをして、いかふ見なをしたと申ますれバ、逆もの事に萬太夫との、おのぞみ、小腰元の小ざんハ心に有事、其まゝに三軒ながら皆見たふござりますと是ありやうと、丹那樣御きげんに入て、明日まづ萬太夫見せふほどに笹やかたへいふてやれ、ゆふ食ハ下屋敷で我らもおく樣の相伴するぞ。」云々。それから寢らるゝが、その以前、豆右衞門、宵からお煙草盆の火入の陰にかくれてゐたが、蚤の飛ぶが如く丹那の懷へ入れば、ふしぎや我は丹那のからだを我身の如く自由にする事となつた。暫らく經つて、豆右衞門は、丹那の体から脫け出し、丹那の魂は元へ歸つたが、以前の事を知らないため、ちぐはぐになり、「そんなら芝居もなりませぬと、其夜ハあるじもはなあいて、いな

事で万太夫がさじき二軒のそんになりけり」といふのである。（以上、同、第二、奥様ハ機嫌のよい榮花枕。）

次ぎ、島原の幕、ある太夫と大盡客。その大盡、女郎の正月を押付ける下心と、かねて用心をしてゐたのが、豆右衛門に魂を入れかはられて、散々失敗、明日入用に用意した五両貳分の金は、豆右衛門のために亭主とやり手に當座の手付と花に持ち去られる。（亭主の方では、霜月朔日から、正月の約束、島原きつてない事と恐悦がるのである。）女郎からは、約束をせがまれる。自分は、正体ない間の事、さては酒に醉うて前後不覺と、以後酒を止められたと云々。（以上、同、第三、大盡に紋日を括り枕。）

今夜は、豆右衛門からは、しけの夜であつた。ある手代の廓がへりの羽織に取着いて、室町通を上へあがり西側のさる大家へ入る。その家の奥で、夫婦と思うたのが、姉弟で、弟に魂をうつした豆右衛門、困りはて、寐ぼけた体で、逃げかへる。室町を下へさがれば、廿三夜の月あかく、東側の露地の中の、植込の作り松の表の方へさし出した枝に、女帯が括りつけて、溝石の際まで下つてゐた。盗人にしてはをかしいと見てゐると、十八九の腰元らしい女が、かの帶を傳ふて下りてきた。その後ろから飛びつき、一さんに走るをついて行けば、川原を過て、月水くだしの薬賣家のあたりにて、廿五六の若男、女郎切（ひざよきり）のねいろハいとほそ／＼とふきなす。（宛然、「鳴門秘帖」の弦之丞ときた体である。）是が相手と見えて、二人手を引あい、六波羅の門前を通りて、安井の新地に白壁作りの棟高き下屋敷の軒下の小闇き所へ入つた。これが心中者であつたので、魂を入れかへた豆右衛門は、そのまゝ驚いて女の脇差から逃げる。逃げ／＼て、松原の板橋渡りかゝる所へ、うしろから女が是といふ。ハア悲しやと振返れば、所の惣嫁であつた。豆右衛門は魂を返した。と男は、心中の積りで、脇差を振廻して、先づ女を先に殺さうといふ。惣嫁は、感ちがへて、「高が貳拾の錢を喧嘩仕舞にして、すまさ

ふとさつしやるは、　ぬす人といふもの」とわめいてゐる中に、夜は明ける。小便取が通りあはして、漸々に扱うてすましぬ。といふので、心中の仕損ひ、それも却つて豆右のお蔭といふのである。

（以上、同、第四、姉の異見耳痛樫木枕。）

以上で、一之卷は、終つてゐるが、全丁數は、目錄以下追丁にて、目錄全一丁、本文（第二丁表より）は、第十丁が、十ノ十九とあつて、こゝで、十丁分を飛んでゐる。さうして、三十二丁裏で終つてゐるが、誠は、二十二丁である。（即ち一之卷總丁數、二十二。）挿繪は、四ノウ五ノオ。廿ノウ廿一ノオ。廿七ノウ廿八ノオ。のヒラキ三がある。

二之卷の第一、嫁入は云々の初め、當時の娘風俗を描いて、好個の資料ともならう。その一節、「むかしは姿端手めかず、男を見てはおそろしがり、万はづかしさふに道ゆく時も見る人あれば被笠をかたむけ、ずいぶん初心に物每あどなきを、人の娘子風とて稱美せしに、近年の娘嫁ごは浮氣になりて、替り狂言のしばゐの噂、うまき仕組を實に見なし風俗遊女かぶきものゝなりさまをうつし、男のすなる袖口ひろく胸高に帶して胸あけかけて腰をすへての蹴出し、道中大臣らしきわかひものゝそばを、わざとすれてとをり、八文字の足づかいに、すそのひらめくやうにして緋ぢりめんの內衣を見せかけ、往來の男を有頂天にするぞかし。」

さて此の第一は、嫁入の夜の花聟と換魂するのである。第二は、「內儀をまげる臂枕」。

初めに、長命丸に就て記述「佐々木氏の調合して、四ツめゆいの紋所を包紙のしるしとし、唐人より傳受の秘法能德書にちがいなく」云々とある。即ち本姓佐々木氏であつたのであらうか、それがための紋所四つ目と來たのか、とにかくそれらしく書かれてゐるではないか。此の段は、衣の棚のつきぬけに呉服物あきなふ家の丹那、夜に入つて、折から三條の伯父御臨終との知らせに、急いでゆく。その臨終の塲に、水盃をうつかり飲んで、宵から溜つた藥の効目、　　を　　し、それを二つの子供

が乳を垂らしたにかづけて、着かへる。そのひまに、懐男、魂を入れかへ、用にかこつけて歸宅、非禮の談合をするといふのである。

第三は、妾は船に掛枕。以下は大阪の卷である。淀川の川下り、船の中へ、美女が乘り合はす。此女は、大阪のさる野良の妾になるための下りである。荷の中に隱れてゐた豆右衞門、此の女にとりつき、駕籠にとり乘り、大阪へ下り、此の役者と會合の場へ出會はす。此の野良四十を越してゐるが、まだ若衆として動いてゐるのである。これと魂をとりかへる。處へ、茶屋から野良の迎ひが來る。第四、「野郎にさがを塗枕」はその續き、お客は、十八九の法師客である。勤める野良は四十を越してゐる。暫くして野良の道は不案内なれば、魂を返す。野良は、妾のお吟と心得て、その身が客に呼ばれてゐるとは知らない。といふ筋。此卷目錄以下廿一丁。挿繪五ノウ六ノオ、十ノウ十一ノオ、十八ノウ十九ノオの三圖。

三之卷。さるじみなる人の内儀の左の袂の中にかくれて行くと、野道へ出て勝曼寺の方へゆき、愛染樣へは參らずして、近所の旅籠屋へは入。姥も女中も平氣で、旅籠の嫁に預けて去る。そこで旅芝居廻る傳七といふ色男に出會ふ。歸りに内儀に取りついてゆけば、平野町の紙らうそく錢など賣家。亭主は、さぞかし白痴かと思へば、亭主も承知の上の不義であつた。即ち亭主、濕ゆへに羅切してゐたとの話。(以上、第一、女房に鼻の下云々の條。)

第二は、女郎を茶かす中込枕。新町へ來かゝると、手代二人役者三人、座頭まで付いた老人客の駕籠が來る。揚屋入、今宵ある新艘にあはんとの事。然るにその場にゐ合せた一家の女郎、この老人に盛んに我からとりつく。これも老人から金・銀の××一本づゝを貰はんとの事である。八十を越して棺桶に足の入つた老人でも、成程遊べる道理、これなら、いかな老人客でも女郎にふられる氣遣ひはない。太夫には金、天職には銀、かこい女郎には銅、局は鉛といふのである。これを見てゐた懷男、

老人客と入れかはり、金を使はず、一人の女郎に當をはづらすといふのである。この段の冒頭、當時の女郎氣質を穿つてよし。拔記してみる。

「まゝならぬこそ浮世なれといへど、金さへ有ば万に自由なる世界ぞかし。いかにつとめなればとて、御前へは出しにくひ男に、なづんだるかほつきするも、金のひかりとはいひながら、形ハいやしくとも、分里かさばければまだしもなり、もんもふ無事なる男をかねとればそかし、こふしてやれ、かふした身にもまちかぬる客があるほどにと、茨木やのかほるまじりにのみかけて、花七椀箱なごいふ末社が長堀の材木大臣のお髭のちりをとり〳〵のもてなし、新町もむかしとちがふて、ぱつとした大臣も見へず、歷々の太夫たちずいぶん心をつくして、醫者の脉とるほどに客の氣をとりたまへ共、近年はつきりとした紋日をつとめてやらるゝほどの大臣なし、是ハ世上にむかしより金がなきかとおもへば、いにしへより多くなりしハ世界の金銀ぞかし、中比ひすい男がいひ出して、金大分につかハずしてよい事するを、此道の粹とたてゝ、むしようにつかふ人を前方な大臣と笑ひ出してこのかた、親方女郎共にふ勝手といへり。云々。

第三、若後家云々の段。お太皷醫者が、さる若丹と若後家との仲をとり持ち、芝居で出あはす。仕切の戸をはづして、両方酒のとりやり、厄病神の姥を金で追ひやり、やがて二人は近くの茶屋へ入る。と懷男が魂を入れかへる、といつた趣向。

第四、大名戻りに小判で云々。伏見町の唐物屋唐右衛門方へ、此の醫者が來る。名は、云ひ忘れたが、作の藏安といつて、針醫である。これが唐右衛門の所へ、子供の針に來て、さる所、大名の妾歸りの女があるといふ。それに唐右衛門引かゝつて、取持を賴む。で、藏安の肝入で、唐右衛門存じよりの本町の古手屋茶平次方へ、大名の元妾だつた女(問題になつた女)の女中を呼び出す。で此の女中を納得させ、此の女中の計らひで幸はひ妾の母は物堅いけれど、兄御(妾の)の京へ手代に行つてゐるの

が、使ひ込み、五両程の才覺に、困りぬいてゐる。これを、藏安殿の口入で、此の古手屋が貸す、というて、此の物堅い母をおびき引す。その暇に、と、その日手順よく、母を連れ出させ、自分は娘の所へ行く。豆右が入れ代つてみれば、以前、(前節の筋參照)芝居で逢うた若後家といつたのと同じである。で、その時の若丹那だといふて、散々此の娘や下女の脂を取る。最前、古手屋へ行つた母といふのは、芝居の時の姥だらうと素つぱぬく。魂を戻してみると、唐右衛門は、知らぬ事、然るに娘や下女は、化の皮が現れたと思うて、避ける。お母といふのも歸つてきて、此の上一ゆすりしようとしたのが、外れる。唐右衛門は、合點ゆかずに、五両たゞ取られに終る。これは、凡て藏安のしかけた詐欺で「是は別家に此女を抱置て、針をたてにまはる先々にて、浮氣らしき男共に、我療治する丹那がたの後家の、娘の、もどりの、妾のと、其人のすく咄しにしたがひ、それ〳〵にこしらへ、一ぱいづゝかぶらせて、手をよくかねをとる仕懸、是を好色の仕出しかたりといへり。」といふのである。

以上、卷三、但し六ノ十といふのがあるから、廿七丁ではあつても、正味は、廿三丁である。挿繪は、四ノゥ五ノオ、十三ノゥ十四ノオ、廿ノゥ廿一ノオの三圖である。

四之卷、第一、太夫をこなす云々。江戸の舞臺である。さうして吉原の幕、半風大盡といふのに入れかはるのである。第二、おかさまに云々。以前五年程は不仲であつた夫婦が、殊に、亭主に不愛想な妻が、此頃、優しくなつた。それも道理、亭主、天井に太平記の本文を貼りて、それを聲高に讀まるゝとの事、その亭主に入れ代るのである。第三は、浮氣後家云々。上野の花見に、歌仙後家とて、東に評判の三十六人後家がある。その大將は、金平後家。これに男を取り持つて、金儲けせんと、ある錢屋の手代、鳥越橋に寢てゐた一人の乞食を頼み入れ、本庄(本所)の金平後家の下屋敷、歌仙共のより集る所へ連れてゆく。そこで豆右も入れ換つたが、金儲けは出來なかつたといふ話。

第四は、十八日淺草の御縁日、こゝで有徳人の材木町、飛騨山三木といふのが、來かゝる三人の美

女を見染め、その中一人を嫁にと談じこむ。乳母がいふには、三人共離れてはいかぬといふ。美女三人まで一度に嫁に貰ふは結構と、愈々結婚を濟せたが、一人の懐胎に、他の二人が同時に孕む不思議さ、面妖さ。乳母を詰れば、「あなたはかげの煩ひにて、元はおひとりなれども、煩ゆへに三人の俤、御療治くはへられなば、末々はおひとりにならせらるゝ事も有べし」といふのである。とにかく三人一所に平産、赤子さへ三人、十二度の平産に三十六人、それ〴〵に名札をつけて育てるといふのである。

以上、卷四、三十二丁とあれど、十ノ廿あれば、誠は、二十二丁。四ノウ五ノオ、廿一ノウ廿二ノオ、廿八ノウ廿九ノオ、以上の三圖がある。

五之卷、第一の替女と見せたは云々。堺町を夜に入つて通れば、女乘物がしのびやかに、中間一人付そうて通る。綿帽子深くかづき、白綸子に葡萄の模樣、廿才斗りの替女。その打かけに隱れて隨いて行くと、さる大名の下邸らしい奥へ通る。そこの後室にお目通りする。この替女、實は或る女形役者で、お招きを受けて來たのである。後室のお氣に入つて、お金貰うて「本町あたりに三十兩ほどの邸を求め、京からおやぢをよびくだして家をまもらせ、我身は都にのぼり、知恩院の古門前町に家をかふて、妾二三人置て、江戸の宿代にて一生樂しみくらすべし」と心算用して悦んでゐたのが、大違ひ。臨時雇ひの男伊達、釣髭のあるうはばみ蛇平といふ者に逢はされて、衆道の模樣を、簾越し御覽になつて興じられよう仕掛。野良、驚いて、蛇平に堪忍料の一兩一歩攫ませて、這々の体で逃げ歸つた。懐男の活動する暇なかつた話。

第二は、腰元が云々。通町のさる町家、その舅は六十八、法躰の身で、嫁に戀慕。でそれに腰元をあてがへば、この舅のつらさに、翌日すぐに逃げかへつた。懐男、息子夫婦の樣子を見れば、息子は親仁とは大のうらはら、それも道理、嫁は京の寺町の靈佛蛸藥師の申し子だといふのである。(未完)

…二册　壹圓〇東都仙洞御講（愛花情仙著）一册、壹圓〇街談文々集要（珍書刊行會）第二册、壹圓〇十日物語（戸川秋骨譯）初版美本、拾貳圓〇愛經（大隅版）美本、貳拾五圓〇カーマストラ（京都版）美本正誤表付拾五圓〇ヲチラハスヤ（京都版）美本、四圓五拾錢。

（表紙二ヨリ）天明頃には、歌祭文の正本が、江戸で出版せられました。それには、元祖結城石見掾藤原一角、太夫は結城重太夫、ワキ同じく伊豫太夫、三味線引が拍木八百市、同じく儀泉等の名があります。以上が中期の祭文――遊藝化した、淨るり化したものゝ話。これ以後は三味線を引く事が一時廢れて、また錫杖だけに復活したらしいのです。寛政の頃、江戸の祭文語りの小松大けう、みのわ大けうの二人山伏出立であつたが、此の二人が傍ら說經節も語り、錫杖と法螺貝で江戸の端々で祭文を語つた。大廣袖で細帶、手拭の新しいのを見えといたしたといひます。つまり此の二人がまた古風の祭文に戻つたわけ、當時から此の類をデロレン祭文といふやうになりました。即ちデロレンといふのは法螺と錫杖のその音から來てをります。此の頃の所謂デロレン祭文は、大分內容が變つて、卑俗なる文句にて俗說を語る、大昔の稍滑稽な神佛を祭る詞の祭文、中期の歌祭文とも異つたものとなつた筈です。當時、チョンガレ、チョボクレといふのもありました。これは、元來同じもので、チョンガレは上方、チョボクレは江戸で文化頃にいひました。共に祭文の一種で、此類は、デロレン祭文のやうに錫杖の外に法螺を用ゐなかつた、錫杖だけで拍子を取つたやうです。チョンガレ又はチョボクレは、この錫杖の拍子から、名づけた名と思はれます。さて、此チョボクレ即ちチョンガレは、以前の曲節とは變つて、文句を唄ふ事は少く、詞のみ多く、芝居咄のやうな物になつたのです。つまり歌祭文が、語り祭文と變化したのです。此類を、當時一名、難波節といつたのであります。

こゝで一寸、祭文がゝりやちよぼくれの入つた他の流派の音曲類を擧げてみます。無論此の祭文といふのは、中期の歌祭文の節であります。祭文の入つてゐる好例は義太夫、安達原袖萩祭文の「今のうき身の」云々。一中の辰巳の四季の「あひ〳〵ぎせる煙り草」云々など。祭文がゝりは、長唄秋色種の「月のもろ夜の物おもひ」など。ちよぼくれは、清元の喜撰法師の「色の世界に出家を遂げて」。ちよんがれは、例の義太夫、小春治兵衞の紙づくしなどであります。

寄贈紹介

〇事物原始考　松本茂平著

高尾書店創業十五週年の記念出版である。特志な計らひである。此著、高雅な和紙和裝、羽子板考初午考以下年忌考まで、十三考を收めてゐる。博引に過ぎて、斷決の乏しいかと思ふ憾みはあるが、それ丈一層好資料であらう。圖版豐富である。（非賣品。半紙本本文一二〇頁。大阪市南區日本橋筋四丁目高尾彥四郎）

〇おもちや繪本その一　有坂與太郎著

全紙鳥ノ子を使用し、本文コロタイプ摺、諸國天神像などの圖版集である。簡明なる解說を附してゐる。總圖三十。裝幀は、好みの和本横、宮尾重雄氏の裝幀尤もよし。價また極めて廉。（四六大横、一圓五十錢。東京市外南品川淺間臺一五一七、鄕土玩具普及會）

〇廢頽大津繪節、市場直二郎著

市場氏の本をかく本誌で紹介することの機會の來た事を、親近の小生からは嬉しくもまた光榮にも思ふ。雜話叢書の內。圖版、木版色摺と紛ふ程の上出來。內容は、著者が苦心して分類せられたものに、一々論評印象を下してゐられる。とにかく大津繪節の廢頽味はまづ一通り纒められて、好々著。特に第三篇、廢頽人情の第一章、戀愛閨怨を說くあたり、引例も適切、繋ぎの同氏の文、また最も興趣豐か、妙文である。大方に奬む。（和紙和裝美濃紙本。凡百頁。二圓八十五錢。東京市牛込區東五軒町二十七、發藻堂書院）

〇民俗藝術　第一號

東京、民俗藝術の會の機關誌として生れた物。學知諸兄の稿多し。折口信夫氏の翁の發生を卷頭に諸家、資料豐富、發展を望む。趣味と學究と兼れて、生るべかりしもの也。（菊九六頁、五十錢。東京市神田區南神保町十四、地平社書房）

〇明治短歌研究　第一號

雜賀重良氏の個雜。此種文献の堆積として可也。大方に奬む。（菊判二〇頁、二十錢。名古屋市中區御器所町東畑八ノ二、同社。）

看板史雜考（あく趣味第二）〇（以下正月號）やなぎ樽研究〇川柳鯱鉾〇境地〇國語と國文學〇國學院雜誌〇紙魚〇集古〇本道樂〇民謠詩人〇演劇藝術〇江戸時代文化〇長唄〇北隆館月報〇墓碑史蹟研究〇江戸往來　〇風俗研究　〇歌舞伎〇學燈〇（以下二月號）シネマ王國〇國語と國文學〇本道樂。

定價表

一册貳拾五錢　郵稅貳錢
六册分　稅共壹圓四拾錢
十二册分　同貳圓八拾錢
〇郵券一割增の事
〇照會は返信料添付の事

昭和三年一月二十八日印刷
昭和三年二月　一　日發行
〔貳拾五錢〕　郵稅貳錢

名古屋市東區東道東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社
名古屋市東區東新町一五七番地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

著者より　松の內に出來た小生の句をお目にかける。大半は稍軟派、但し實感か否かは、問題外也。句作順――元□姫はじめ忘るゝ程に醉ひにけり□年がへて逢ふ夜は雪となりにけり□門鎖して二人して聞く靈の雪□人絕えて炬燵の顏をすりよせぬ□うたゝ寐の炬燵の顏や雪しぐれ。まだより以上の駄作ありたれど略く。誰だい、小唄的句だといふのは。〇祕刻物索引、愈々發刊、あちこちから好評をうけて、嬉しくないでもない。がさりとて勞に對する程の數はまだ出ず候。〇節分になつたら、古い厄でも拂つて、又面白い事でも始めませう。（廿六日）

寛政九年版「津きぬ泉」李の巻又三ノオ

アサヒビール

大日本麥酒株式會社
名古屋支店

昭和三年二月二十八日印刷
昭和三年三月一日發行

參編 第二十一冊（通編第六十六冊）

本文

豆男物の三部作（完）

二、「女男色遊」の梗概。〇三、「榮花遊二代男」の梗概。〇四、三部作の比較と他の豆男物との異同。

近世語物雜談（下ノ中）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十一冊
（通編第六十六冊）

近世語物雑談 （下ノ中）

偖、後期の祭文から常陸祭文といふのが生れました。これは、天明頃の結城重太夫の後で、天満某太夫と名のつた男が始めました。語つたのは、當時の俗説、主に夜泣石とか、鬼神お松、とか、其他種々の敵討物などを語つて、節は歌祭文、チョボクレ、上るりなど様々をとり入れて、野卑でありました。此類が、常陸筑波山邊にあつて、諸國に擴まりましたから、これを常陸祭文といひます。一名日本祭文ともいひました、これは當時の泥棒の日本左衛門の話を語つたからそれでいふのかといふとさうではなく、日本一流の祭文といふ意味で、彼等祭文語りが自ら稱したとの事です。此類が間々説經も語つた、無論後期の説經ですが、それは、三味線を相の手に用ゐたが、それは、本調子で、唯何となく鳴らし時々文句に合せる迄でした。又、上州から來た山伏風の上州祭文といふのもありました。但しこれは歌祭文の餘流でした。さて此の後期の祭文は、すでに一般が語ることゝ本位で、名からしても、當時は祭文を語るといひました、（昔は、祭文をよむ、即ちよむから語るへ。名前も、祭文讀みから祭文語りとなつた譯。）これは、愈々所謂祭文が、浪花節うかれ節を生む動機となつた譯であります。祭文が、讀みから、語ると變つたのは、丁度「璧曲類纂」の頃、即ち天保、弘化の頃です。

愈々浪花節の話に移ります。偖此の浪花節、古く文政の頃に既に此の名前が存在してゐます。即ち文政十三年冬の序文のある「嬉遊笑覧」に出てゐまして、大阪地方から始まつた、その爲の名らしいので、その時分は文字は、難波のナニハと書いてゐます。なほ、「俚言集覧」には、大阪の難波節のことを、近江地方で、チョンガレといふとあります。即ち此の原始時代の難波節は、無論祭文ー後期の祭文から變化してきたもので、文句を唄ふ事なく詞のみ多く、芝居咄をするが如きもの、即ちチョンガレの一名のやうであつた。後、いつ頃からか、錫杖の代りに三味線を用ゐてゐた。これが江戸時代の、つまり初期の浪花節で、當時、東に常陸祭文、西に難波節、同型の物であつたらうと思ひます。

さて明治初期に、話は移ります。

さて此の明治初期は、祭文とうかれ節と浪花節と三つのものが存在してゐました。祭文よりはうかれ節、うかれ節よりは浪花節と、順次に品位が加はつてはゐたけれど、まだ此の三つの者が、渾沌として似通つたものといふだけでした。が外形に於ては違つてゐます。さて明治初期にも祭文はありました當時の祭文は、一人が法螺を吹き一人が錫杖を振つて語る、法螺は相の手、節廻しの時は錫杖を振つた、三味線は無論用ゐない。或はかういふ形のもあつた、大人と子供との二人で、大人は山伏風で、兜巾を頂き、袈裟様のものをかけ法螺を吹いて人をよせ、人集れば錫杖を振つて語る、その間子供の方は、錢をよせて歩く、かうした俗人風のものや山伏風のものや色々あつたが、主に大道藝人が多かつた。さうして彼等祭文語りの語り物は、石童丸や俊徳丸で、即ち説經祭文で、説經種のものが多くまた八百屋お七のやうな純粋の祭文物もあつた。これが明治二十年頃の事でありますが、明治大正へかけて、矢張り此の祭文はありました、私も覺えてゐますが、名古屋東別院の彼岸の時分、小屋がけの祭文語りがあつて、法螺と錫杖で語つた、が物はすつかり昔の祭文と異つて、うかれ節と同じ物、仇討物、俠客傳などが多くありました。隨分身ぶりも烈しくありました。風采は、無論山伏風でなく全くの浮れ節語りと同様でした。

次はうかれ節。丁度祭文の一派の常陸祭文のやうなものが、一層語る事本位になつた、それが、此のうかれ節だと思ひます。但しこれも初期の物があつて、例の都々一坊扇歌が天保九年頃、牛込藁店で興行した、その中に、やはり此のうかれ節の名が見えてをります即ち、これは、祭文の斷片的な物のやうな、名前は、節の調子から生れたと思ひます。即ち、その節廻しにうかれ込むといふのかと思ひます。が、此の扇歌時代の物はさて措き、明治初年には、立派な、稍長い語り物として、存在してゐました。即ち處女期浪花節の如き物にです。が此の語物的浮れ節の流行、その元は、何處が起りでありましたか不明ですが、當時關西でも北陸方面關東方面でも、主に田舎地方には、浮れ節の名に於て存在し、また浮れ節語りが廻つてゐたらしいのです。がとにかくこれが、祭文から今日の浪花節、現代流行の浪花節を生む中間、階梯の如きものであります。こゝで一寸、當時の浮れ節（以下凡て語物

（長紙三へ）

豆男物の三部作（續）

第三は、亂舞(らんぶ)といふ大盡、落ちぶれて紙子風情となり、業平秘傳の女悦丹といふのを拵へ、寺々の開帳人だちのある場所に看板を出し、辯にまかせて口傳を述べる。或日、さる歷々の大盡、通りがけに此樣子を見て、一貝(ひとかひ)求め、口上にては少し合點の行かぬ所あればと。我家へ伴ひ歸る。さうして女房に突合せてみれば、これが以前、亂舞と契をかはした吉原の小主水の出世の果。名のりあふを見て此の大盡粹をきかして、百兩を添へて夫婦にして遣はす。亂舞小主水、此の百兩を資金(もとで)に、藥種店をひらき、富貴の身となつた。豆右、餘りに不思議と、亂舞に魂入れかはつて、小主水に尋ねければ、「かならず人に洩したまふな。心にあはぬ客に出あふ時は、能の狂言の樂屋入を、心に忘れず念じます」云々といふ。この落(おち)、尙、註が付いてゐて、さながら小咄の如き趣向である。

第四、奧勤(おくづとめ)の云々。さる大名の淺草の御下屋形に紛れ込む。女中共に發見せられて、人間の虫が〳〵と騷がれる。殿樣、聞召され御前へ呼出される。豆右、仙女から傳はつた一軸の卷物を奉り、又素性を申述べる。殿、卷物を不殘披見あつて、「是ハ好色人の重寶なる一卷、今まで遂に見ざる秘書なれば、心がけのあるすき人は、强ちに見たがるべしと、板行にして世にひろめらるべき旨、即ち題號は、色道閨の笑顏と仰あつて御機嫌限りなく、一偖豆右衞門には役儀仰せ付けられ、向後をんなの掃除役を仕つれと、紙合羽に皮立付、あたまに　　の兜を頂き、毎日の掃除怠らず、知行は人躰相應にしやめ貝にて三百石、「子々孫々に至る迄相違あらざる自筆の狀　　にとりそえ給ハつて候」といふので大尾である。次の行に、下に、稍太く、西川氏筆の四文字がある。

以上第五卷、目錄以下三十二丁とあれど、十ノ丁あれば、誠は二十二丁。挿繪は、五ノウ六ノオ、

廿一ノウ廿二ノオ、廿八ノウ廿九ノオ、以上三圖を收めてゐる。

圖は、五巻を通じて、凡て平凡。倚、此の再摺本、改題たることは、前に謂うたが、表紙貼外題は、如左。

三ヶ津さこの楽しみ
榮花遊ひ出世男　一
ゑいぐわのたましゐ

とあつて、題簽には、紅殻色の色を附けてゐる。表紙すべて、青表紙。本文の字組半丁分、十八九字位一行、十五行半丁である。處々、●の讀点を打つてゐる。又、本文凡て一重の輪廓を附す。柱は上に一之巻又は二之巻とあるのみで、下に、丁数を打つてゐる。

○

後編「女男色遊」の梗概である。まづ三巻缺即ち四巻（四冊）分の目錄を掲げる。無論、前編「懐男」と同様に、各巻の初一丁分にこれがあるのである。

（一之巻）あがり膳すハつた胞衣の紋違ひ奥勤の上﨟は大社の帳はづれ、京の姿は誰藤し戀の種、大事の役めを一のみにする大盃で○相撲取並の御奉公×百貫××給金はかつかうより高い鼻自慢、どこへ出ても耻はかゝぬ冬××ごしふりありく御伽男のつきつけ實。○役めは鶉つかひ同前の身喰ぬ殺生秋の夜の長枕夢にさへ見ぬ殿子のおもかげ、世界の後家大將いたづらの籏頭、組まゝには×らせぬ×の關守。○晝の女夫いさかひは××の始り男を尻に數銀弓矢八貫目、喰あまつてりんきせぬお内儀様、城郭をかためる謀計の作病。

（二之巻）あいの襖間はさしあいの參宮人五十三次をのりづめの長馬場、野良のもうけ、尻からぬける女房狂ひ、旅のねざめにねごいする若手様。○春より賑ふ冬咲花の顔みせ余所のぬれ見て涌て來る水茶や、祇園こがしふりかゝりによい釣物、火燵に×をさしあいのお座敷。○生物預り是にこりよ道西坊あつたら娘の持ぐさらかし、手代と久三が喰ぬ

前の料理好み、色と老さにほれられた禪門。○大盡に氣骨をおる嶋原金銀はよれの薬、一服でまはる紋日、色里に年中すたろ××の算用、心のほどけぬ下帶、結目のかたい×。(四之卷)斷なしに女中の×へ乘合船あだ口の順の舞、まばりのよい水車、淀鯉のはたらきはれまはる小娘、耳に入ぬ十念は砂なかむあみだ佛。○嫁入荷の行所開て來た藥屋のむこ祝言の拵は娘に物入の始り、手代が心は何共しれぬ絲者の筋め、手入すさはおはまりのおさし穴。○蛇じやとは指一本喰れたお乳の人番頭は揺手なうつゝない戀物語玉に焼つけおふせたかくし男、たらいの水に浮名をながす娘の子。○齋米持て浮世後家の入佛事姑は嫁に秋の彼岸まいり、寺の大黒は俵の中のかくしよれ、葬禮の奥に耻なかく坊主の内證に(五之卷)目醫者の娘みるに目の毒さはるが煩惱色男は娘に思ひなかけ薬、異見も薬もきゝにくい戀煩ひ、中食時分に生斉かゝる幸○足の裏の納戸食取ついてはなれぬ男たのまぬ口をたゝきまはる太鞁持、女郎の楽好くふたごうしの集錢、手くだのあい所、立ながら筑山の影。○三味線の調子に乘て行川御座野郎白人前後の色くらべ、見分さちがふ内證遊び、目盲蛇におぢず、座頭が大臣顔。○願ひの叶ふ世に相生の友白髪庵室は消産の養生場、よなへの印もうけたあた子寳、色遊びの世の中、實入のよいまめ男。以下、極概に移る。

初め、ひだるがらるゝ女中の數多なる描寫があつて、さて殿樣、これらの女中に怪我にお手さへさへられず、却て此頃新たに上方より下つた妾に就て、懷男と異名を取つた豆右衛門に檢分を仰せつけられる。(即ち、筋に於て、全く「懷男」を受けてゐる。即ち犇嚢もまだ江戸の續きである。)「此頃は役目麁略に仕るや、折節悪きかざのする女あり、」隨分××に念を入れよとの事で、豆右、畏つて此の新妾に向ふ。然るに此の妾、利口者、「白粉解きの小さき蓋を即座の盃として」酒を飲ます。やがてよろしく復命する。然るに、此の妾、御寵愛六ヶ月で安產の紐を解く。これがため妾は、忽ちお拂箱。豆右は、役目の越度、「褌に包みて小便たごへ沈めにかけよとの仰にて、むざんや豆右衛門を、ふるき下帶に包んで、御長屋小便たごへ打こまるゝ筈なるを、お局さまぐのわびによつて、是も一命を助かり、お館を追出され牢(浪)人の身となり、ちいさき紙子の袖を拵り、こゝの店したかしこの橋の下に影を隱して、僅かなる身をかくし」妾の初めの奸策を怨みもしたが、「とかく役目の中に飲むまじきは酒と」、今此の身にと思ひ知りけり、といふのである。(以上、一之卷、第一。あがり膳云々。)

（同、第二。相撲取なみの云々。）さるお屋形の御隱居の後室、そのお方が御寵愛なさるゝとて、田舍の知行所から召出された數十人の男、その中より、一人が召出される。似馬又助といふ名字を給はつて、御奉公の支度に專心。それにとりつき、晴の日を待たんと、豆右、奥の一間に隱れすむのである。

（同、第三。役めは云々。）當夜、後室は四十ばかりであるが、御縹緻よしにて三十の少し上に見えさせ給ふ。さて此の後室、男女不平等の不平をいはれる。曰く、「誠にいつの代の掟にて、男は心のまゝに、女は夫の外をいましめけるぞ。是ほど片手うちなる事はあらじ。我かゝるたつとき家に生れ、心の儘の榮花、何にひとつ不足なき身とはいひながら、」と愚痴をいはれ、自分の辯護を試みられる。さて豆右、大助に魂を入れかへてお逢ひしたが、懷姙あつてはならずと、引戻され、這々魂を戻す。大助もまたこれに懲り、樣々に嘆き申して、故鄕へ歸つたが、二年半斗り淋（マヽ）病をわづらつたといふのである。

（同、第四。昔の女夫いさかひ云々。）好色の男に普通の女、普通の男に好色の女、此の二夫婦が離緣のなんのと喧嘩して、トド互ひをとりかへた。その談合の決つた折、好色同士の夫婦に、その夫に入れ替つてみたといふ話。（以上、一之卷終、總丁數、目錄以下三十二丁半なれど、十ノ廿あるも故に、誠は、二十二丁半、挿繪、四ノウ五ノオ、九ノウ十ノ廿ノオ、廿五ノウ廿六ノオの三圖。）

（二之卷第一、あいの襖子は云々。）豆右、偶には、京女房にも逢ひたしとて、望鄕の念そゞろ。（その實、作者の筆の轉換である。）品川にて、役者番頭どもを連れた或る駕籠の主。――野良にとりつく。此の野良、京へ行つては又男の機嫌を取つて氣づまり、今の中に養生せねばと、道中を、出女を漁りゆく。番頭の諫めも聞き入れない。關へ來て、大名の泊りとて、仕方がなく合宿で辛抱する。又例の養生が始まる。今夜は、大の好色の出女。途中、豆右が入れかはる。夜が明けて、合宿の者食事中に、間の襖が倒れて轉がり込む。とその客は、この野良が京の贔屓客、それが參宮の途中であつた。この贔屓客、興ざめる。が、魂を替へてゐる豆右は、左程にも感じない。が漸く魂を返す。さて此の野良、京

へ着いて、一日芝居を勸めたが、翌日から病氣に罹り養生、誰がいふとなく、上るり御前（此の野良の役也）が下痢で出られぬと笑ふてはたしぬ、といふのである。（即ち以後、此作、舞臺は、京、大阪である。）びらしやらするのが可なり嘲世的に書かれてゐる。（同、第二、春より賑ふ云々。）初めに、當時の女の風俗、曰く、「笄わげも昔にかはり、つとの出しやう格別花車に一風ありて、さるほどに髪の結ひぶり十年前な遥か上手にはなりける事よ。（此のあたり、此の作と、「懐男」とに十年の距離があるやうにも、取れぬでもない。）目にしむ塗笠もやみて、綿かづきに仕出し模樣見飽かぬ物は、いつまでもかゞ（加賀）笠の新しく、しやんとして見よし。帶胸高に胸あけかけて、雪より白き肌自慢、わざと裾をあげてひぢりめんの肉衣云々、灸のあとさへなきを見せける。いづれかいやなるはひとりもなくて、きせるの雁首は湯となりて、流れ落ちる迄、暉へて見る事」云々。祇園あたりの茶店で、一人の若衆を約束する女があつた。女が先へ行く。間もなくその若衆が來て、今日は芝居を休みましたと、すぐ出かける。偖こそ出あひと若衆のあとを跟け、尻はし折り、汚尻に着いて行く。と途中で、霙まじりの雨が降り出し、若衆は自前の事であるから、尻はし折り、汚れを苦にして驅けつける。豆右、飛びのいて、畠の大根の蔭に隱れる。約束の寺へ入つて、若衆、先刻の女と對面する。女は、誠は此の若衆の妹で、若い時から西國の大名に奉公し、殿の御意に入り、今度び家老の嫁にならうとしたが、知る者あつて、此の者の兄、京に卑しき役者勤めと噂が立つて、家老より御斷りを申上げ、間もなく此女も殿からお暇を給はつた。それに就て、妾は、なほ一度外々の大名家へ御奉公もしたし。妹の身のため、早く若衆を止め、堅氣な商人になつて下されと、いふ。兄は、さう急きやるなと話してゐる。この若衆、若衆というても、四十を越してゐるのである。所へ後れ馳せに來た豆右、魂をとりかへ、思はく違ひの耻をかく。といふのである。

（同、第三、生物の云々。）手代二人が、狐につままれたやうに、道ばたで喧嘩。聞けば、主の出戻りの娘を、手にも入らぬに、俺が／＼と張合うての喧嘩である。仲直りして二人が歸る。あとを跟けてゆく

豆右。その晩、主の姉の平産に、主夫婦は、二人の若い手代を、それ〴〵供に外出。留守は、一人の小僧と女中ばかり、男氣のない心配には、道西といふ八十余りの中風病みを呼んで來ておく。此の道西に魂入れかへて、豆右と娘。一年ばかり、道西が留守居役承るうちに、(即ち此の一年斗りは、その度、道西と換魂してゐた。)娘は懐姙する。相手を責めると、誠は道西樣との事に、道西を呼び入れて尋ねると、珠數に誓つても、さうではないと、莫迦らしい話。よくも何處から此んな趣向を得たかと思はるゝ程。成程、作者が、當時の好色的時代心に媚びて、(又はそのありの儘の表現を試みて、)時人の斯くありたしの欲求を表現したものと思へる。かく見るが當然であらう。相手は、諸階級樣々であるが、要するに、飽くなき欲望滿足の具体化せられた「仮の姿」である。

(同、第四。大盡に云々。)嶋原が舞臺。客と男衆と樣々の噂。と、「女郎の好ける風なる男、千筋染の黄むくの上に、黑はぶたへの紋付すそみじかに、羽織は紅嶋にして八丈紬のひつかへし。きくとぢの大脇指、素足に細緒の藁草履、燒印のあみ笠深く被り、浮氣らしい針立と、呉服屋の手代めきた若男つきそひて」、靜かにねつて來るのがある。これが話に聞けば、さる太夫と馴染んでゐるが、まだついぞ眞の情ではないといふ。さて此の若い風流客と馴染の太夫との塲になり、豆右、この若い客と魂を入れかへてみると、太夫の執心とはうらはらで、此の客は女性であつた。仔細ぞあらんと、魂を返して樣子を聞けば、この客は、此の太夫の以前からの馴染客の妹で、兄が商用で留守中、此の太夫の氣を散らさせぬための、楔として通ふのである。兄が歸國次第、身請する筈との事。結局、芽出度し〳〵に終る。(以上、二之卷、目錄以下三十六丁半、但し十ノ廿あれば、誠は二十六丁半。挿繪、五ノウ、六ノオ、九ノ廿ノウ廿ノオ、廿七ノウ廿八ノオの三。但し第一圖と第二圖とは、本文に隨へば、前後してゐる。)

(三之卷缺)四之卷の初めによれば、此の三は、まだ京滯在の記事らしい。

(四之卷、第一、斷なしにの條。)三之卷の終りが、豆右としては、余程の危機を孕んだものだつたらしい。曰く、「三界無庵、女房なし、もちろん銀もなければ、いづくへ出步行ても氣遣のない豆右衞門、思

ひもよらぬ長持のふた心ある女にかゝつて大事の魂をうしなはんとせし事、一代の仕損じ、かゝる卦躰のわろい時は、所を變へて慰まんと、都を出て、難波の方へと心玉も鳥羽繩手、から車の歸るにかくれ乘りて。」（四之卷第一の初め）とあるからである。時は、丁度夏である。淀川下りの乘合船の景。乘合に十六七の娘とその母親がゐた。豆右、母親から船虱のせゐだと間違へられる。が娘は、隣の同行五人の一人の男順禮の惡戲だと責めつける。男は、更に知らぬ事、同行には罵られる。喧嘩にならうとしたが、母親が、娘が夢を見たのでせうで、やがて納まる。豆右、こそ〲逃げて、舳先へ行て見れば、大阪の新地の茶やへ京から勤め奉公に下るおやまと見えて、三十ばかりに細眉づくりの女、なめ過ぎたる顏をしたのがゐた。それが又眼を覺して、傍に余念なく寢てゐる法師に、「大方のてんがうをしやつたがよい」と喰つてかゝるといふ筋。

（同、第二、嫁入荷の云々。）（同、第三、蛇じやと云々）此の二章は、續きの話である。舞臺は、大阪。さる分限者の、「繼母を持つた縹緻よしの娘が、繼母の縁者に當るといふつまらぬ藥賣の男に嫁入るといふ。親類頭の老人が來てその仔細を尋ねると、手代（相當の年輩である。）が答へて、あの娘御は、不具者である。よつて、私、資本を融通してある藥屋へ嫁に世話し、一生、体よく暮さゝう。その爲に、三百両程の金も持たしてゆくとの忠實話。その話を老人から聞いた、娘付の姥は、不思議がる。いろ〱あつて豆右は、姥から蛇と間違へられる。姥が、手代に逢つて、蛇の話をすると、そこで手代が實を吐く。この手代、誠は娘に思召があつたので、親類の手前を詐り、自分の無理がきく藥屋へ嫁入らせおき、二三日經つて、自分の隱し別莊へ奪ひとる。藥屋へは、娘が男と密通して逃げたと云はせておいて、そのかはり敷銀と荷物を押へて、その儲にする。自分は一生隱れて、妻にするといふ仕掛。それを聞いた姥は、蛇より恐しい手代の惡企みと驚く。と、此の娘には、不具どころか、云ひかはした男があつて、その男がやはり、此の惡手代と同じやうな仕掛で、この娘を二三日して嫁入先から奪はうと、

目論んでゐる。(これは、娘も納得の上。)と、豆右は蛇ならぬが、蛙の仕掛に驚いて、その家を逃げ出した。跡は、どうなつたか知らずといふのである。

(同、第四、齋米持つて云々。)さる殿樣に死別れて暇を頂いて下つた若後家が、寺參りして、住持に逢ふ。豆右、魂を入れ替へてゐる所へ、葬ひが來る。慌てゝ魂を返すと、本堂へ出た住持は、魂が途中で替りそれがまた戻つたとは知らぬから、以前の積りで、うつゝの樣に、とちつた引導を渡すといふ段。

(以上、四之卷、總丁數三十六丁、但し十ノ廿あれば、誠は二十六丁也。挿繪、五ノウ六ノオ、廿一ノウ廿二ノオ、廿九ノウ三十ノオの三圖。)

(五之卷、第一。目醫者の娘云々。)俄浪人が、谷町にかすかな住ひを構へ、目の藥うりとなつたのがあつた。と、坂田藤平次と物まぎれする名をとつた、中の上より上に上らぬ中だるみのした役者が、目を病つて、この目醫者が許に通ふ。と、此の目醫者には、大名道具ともいふべき美娘があつた。これが、この野良上りの坂田を見染める。で戀病ひとなる。親父、子ゆゑに、粹をきかす。豆右、坂田に魂を替へ、やがて魂を返す。坂田の目が痛み出す。親父は留守なり、で、坂田の鼻紙袋から、娘、間違へて媚藥をとり出し、目に注す。それは肉桂丁子などを入れたものであつた。坂田、以前にも增して病み、惱亂といふのである。――豆右の換魂も、趣向に窮して來ると、かうした沒義道な振舞に及ぶのである。さうは、變つた趣向がない筈。まだ、次〳〵と案じ立てるだけ、此の當時の作者の、變態的作意の豐富さが思はれて、恕すべきであるのかも知れない。

(同、第二。足の裏の云々。)新町が舞臺。座摩の前の才藏といふ或る末社、さる女郎に横戀慕してゐる。その女郎の隱し食ひの證據を見つけて、これを丹那に言ひつけると脅し、ト、女郎も仕方なく、その夜の首尾を約する。豆右、才藏に魂をすりかへ、また返す。とは知らぬから、才藏、太夫にしつこくぐづついてゐる。太夫も怒り出す。豆右、今度は、寢てゐる丹那に魂をかへて、二人を呼びよせ、ひだるいは女郎の常と、太夫隱し食ひの肩を持つたが、或るいたづらを思ひつく。とんでもない粹をき

かす。いゝ程に、魂を返す。返された丹那、怒りたちて、重ね斬りにすると聲たてゝひしめく、といふのである。愈々あくどくなつたものである。がこれを上品にしたら、或る喜劇が成りたゝぬでもない。「魂膽夢輔譚」の一筆庵英泉は、教訓本位を強ひられてゐる時代であるだけ、これ程の（此の「女男色遊」の特に此の五之巻あたりなどの）奔放無稽な趣向は、思ひついてはゐたらうが、現にこゝに種本があるから、がこれを採り入れてはゐない。とにかく此の種の文字としては、此邊空前絶後のものであらう。

（同、第三。三味線の云々。） 或る川船で、若衆二人や白人二人を乗せた大盡の二人がある。座頭は、物を食べる暇のない程、三味を彈いてゐる。豆右、大盡に魂を入れかへてみた所が、これは、此の大盡二人共、實は太皷持で、若衆二人が、誠の大盡。親がゝりの身が、親かたを憚つての僞若衆（野良風）、太皷が大盡となつて、船に浮んでゐたのである。豆右、すぐと座頭に魂を入れかへ、その座頭の口から、此のからくりを親かたに云ひ付けると脅して、一人の若衆を責めるといふのである。

（同、第四、願ひの叶ふ云々。） 天王寺につゞいた壇町といふ所、難波の嵯峨と名づけたあたりに、一つの合力庵があつて、後は、なまぐさ庵と名のつく程、一種の待合、さては仲條の家めいた物となつたのがあつた。そこへ、或る日、大阪育ちとは見えず、都にても上京風の美しき當世女房、供大勢連れて入り來つた。庵主の尼に願ふ所は、懐胎せぬ事である。此女、非常な多産で、是迄にはや百四五十人も子を產んだといふ。色々避姙を試みたが駄目であつた。（こゝに、諸法を說明してゐる。）そのため今度世捨人となり、尼となりにきた。但し此の法を誠に教ふるものあらば、一年に百兩づゝの給金出しても召抱へんと愚痴をいふ。これを聞いて、豆右、物蔭より走り出で、「さても芥子程な人」と人々が驚く裡に、「私がその役になりませう」というて、早速召抱へられ、例の芥子の身を以て御奉公する。それがため、「御夫婦の御悅び限りなく。友白髪にならせらるゝ……。豆右衛門もおあてがいにて世

を安樂に過し、すなはち法躰して豆休と名をあらため、十德着し、ちいさき珠數を放さず、」……「萬々歳迄ゆたかにくらすぞめでたけれ」といふのである。（以上、五之卷、總丁數三十六、但し十ノ廿あれば、誠は二十六。挿繪は、六ノオ、七ノオ、二十二ノウ二十三ノオ、廿八ノウ廿九ノオの三。）

この三十六丁裏の末尾に、

五　之　卷　終　　谷　村　淸　兵　衞

とある。この谷村淸兵衞は、江島屋其磧が、八文字屋より獨立して、更に八文字屋（自笑）と和解した、その以後の、多少自分の自由を保留して、以後、八文字屋の外に、二三の書肆からも出版した、その中の一が此の谷村である。即ち、此に谷村と版元のある以上、且つ作風、署名なくとも、「懷男」同樣、其磧の筆には間違ひなからうから、兩人が和解した年、即ち享保四年以後の出版であると考へて來ねばならぬ。即ち私が、前述、この後編は、享保四年以後の作なるべしと推定した理由である。倘、此の後編の書家、また西川氏であらう。「懷男」と同趣である。（尙、此の「色遊」の體裁、「懷男」と略同樣。表紙は、靑。題簽は不明。本文二十二字位一行、十五行半丁。〇の讀点を附し、柱には、唯、何之卷とあつて、下に、丁數を附してゐる。一重の輪廓ある事、「懷男」に同じ。）

次は、續編の「榮花遊二代男」である。

此本、「懷男」、「色遊」同樣の中横本（枕本）型、題簽は左の如くあつて、靑表紙、五冊物。

新板 繪入	榮花遊二代男　一之卷

一之卷に、卷頭、左の序を載せてゐる。（全一丁分）

序

男ハ强し女は弱し一婦一姪をたもたば腎虛は女に有るべけれど强を賴性悪をする故脾腎の虛ハ男の

惣名と成りぬ詩經に君子をまめやかなると云より業平をまめ男と伊勢が物語を作り又夫を小粒の大豆にとりなせし八文字やがまめ男の前後の秀文妙作も春と秋と去れバ櫻木の老なん事もおしく其前後の面影を借て今を盛の榮花二代男と號して思ひ入を書しは見ん人識に××かひゝさと云ふならんかし。

右の序文にもある通り、即ち「前後の秀文妙作」、さては「其前後の面影」などゝあつて、此本以前に豆男の前と後とがある事を明かに證據だてゝゐる。即ち此の「二代男」は續編であつて、後編ではない。後編は、今度始めて自分が立證した「女男色遊」の五冊である事、即ち日本小說年表などの諸說が誤つてゐた事は、これだけを以てしても明々白々な事實であらう。

却說、此の「二代男」、一より以下五までの全五冊(五卷)の目錄を、一括して擧げておく。

(一之卷)第一　ぶ男は女のふる雪の下の百姓　信心の誠に姿を變生男、ころ〳〵 歡大豆右衛門は二代目の強武者。○第二　女房にぬれかゝる水遊の親仁　明日は××せうとは白髮の天窓、振ほどく×××××に幅廣な畫の×入。○第三　強そうに油きつたる五十風の手代　天窓と共に揺て行るゝ乘物の似女、しめつけてしぼらるゝ×水は泪のたれ。

(二之卷)第一　深川ハ水な遊び所　情氣で去て又呼戻す丹鄭の使、鼠の我儘威鑓 文は天窓を書た後悔、×かいたも又後悔。○第二　姿をかねる大黒の小姓　若衆の色事はあ(三字稱手ズン)ちらのくごき、口よ 臨終に廻向する和尚は佛にさす寛より(三字稱手ーン)、儀のまぎらかしハ頓知〳〵あわゝ天窓てん〳〵。○第三　女かと思へハ男業平姿 り×をすぼめる大豆右衛門。

(三之卷)第一　女郎の風も器量も吉原の全盛　欲の皮のあつひ大鼓持に、扣つけられるやつがいもの、請取の證文に一代の仕損。○第二　娘後家に恍惚らるゝ年ハ若女形　思てんと云ふ文に思ひた書立られぬ あんごんの光うそぐらひ情の間違。○第三　戀には胸が踊子の色文　人と互の云わさ、ゆつ 筆ふ床發甚の前貴態を取しハ、かへり討の親の敵。

(四之卷)第一　筆のさゝさへ弱〳〵と女師匠　おとなしたき病人の眞ハよめ氣る手本帯やおりな押付 女房がふるまいに夫は切れる命毛　○第二　戀には尾を出

ぬ尻聲の無イ女　鼻の下もながくさがりしふんどし、大ぼやの迷ひ子ハ、らん塔場の出合。　○第三　師匠の罰當り眼の闘中　入身に骨を折ふしの××、流出る女郎の×入ハ示の方便

(五之巻)第一　六十の老僧に請る五十相傳　筒持せのねだりハからだをゆすりの匠、本人を見定ぬ不念ハ十念の舞納、尻から成佛。　○第二　山伏は女を寄に立て見せる×物　靈よりさきに×××くさ聲を撰錫杖ハ(三字位手ズレ)ばさけた形は物の毛の間違。　○第三　初旅に辰の日門出吉の品川　女房の貞心女郎のみさほ、さしたり引たりの酒盛、足のうらにふみ出ス大豆右衛門ハ暫の西國大名。

以上である。前編後編が、一卷に四章づゝを収めたに反し、これは、一卷に三章づゝを収めてゐる。且つ毎丁、文字も大きく、随つて收容字數も、前編後編に比して尠い。(即ちこの「二代男」、一行十三字位、十二行半丁、輪廓は一重である。但し本文讀点等一切なし。所々假名を附せる事は、前二作に同じい。柱には、唯中央に、ま一【又は一など】ノ一【又は二】とあつて、即ち卷數丁數を共に示してゐる。

即ち、趣向は承け、本の体裁も似せてはゐるが、全く「懐男」と「色遊」ほどの、前後相應の臭が尠い。挿繪も西川風ではない、それよりは、(前二作よりは)大ぶりな、人物など凡てさうであつて、且つ描線も稚拙な感じである。或は文調の畫であらうか。それは、二之卷第一の挿繪に、背景に、布袋の軸があつて、文調との落款がある。さにかく、文調若しくは、春章の若描きの風である。さうして畫の内容は、凡てエロではない。作者は、不詳であるが、恐らく豆男の人氣相變らぬに興を得て、作したもので、即ち本家の豆右の前編後編を承け、黄表紙又は其他を産むその中間にあるものというてよからう。版元は不詳であるが、八文字屋本でないことは、序文にある通り、即ち純八文字屋でも准八文字屋の谷村版などでもなからう。が、以下の内容に觸れて行けば、分る事であるが、この作に限り、作者も江戸、版元も江戸ではなからうかと思ふ。即ち上方の前編後編に摸した江戸版といふ推定よりも以上に、内容その物が、五ノ三の品川であることを除いては、全部江戸に即してゐるからである。

以下、梗概を示す。成程、承繼作だけあつて、凡て前二作よりは、拙い。即ちこの作に限り、極の略筋に止めておく。

（二之卷第一、ぶ男は云々。）三代將軍の舊地雪の下邊に貧成百姓に作藏といふのがゐた。極めてのぶ男でその上、力もなかつた。戀もなく、果は親をも恨んだが、或日、徒然慰むる繪本の中に、豆右衛門の書を見つけ、それを讀んで、境遇が自分に似たり、これを信心せば其如くにもならんやと思ひ付いて「大豆右衛門が法躰して豆休（此の事、「色遊」の末尾、參照。）と成たる姿を、大豆がらにて刻み、かやのからの厨子に安置せしめ、木枕の上におき、毎日大豆を五十粒づゝ供へ、肝膽くだき祈り、我大願成就せば、一生大豆をたち物にせんと、一日の内水三度づゝ浴び、南無豆休大先生と唱ふる事百遍づゝ、假にも怠る事なし。」と、愈々信心堅固、三年願を續け四年目の二月十五日夜に、たうとう豆休の靈あらはれ、其志を不憫と思うて、そのかみ仙女から賜はつた仙薬の殘り一粒を與へ、なほ、よく差合を考へて魂を換ふべし。構へて、人の女房取るべからずなど、教訓めいた事を冗く述べて、消失せる。作藏、感涙に咽んで、その一粒を飲めば、忽ち二代目の豆右（此作では大豆右衛門と名づける）となつた。いよ〳〵門出をして、折節鮮鯛を馬に付、早追にて下るを是幸とひらりと馬子の袖に取付、ひとはね刎ねて、鯛の籠をふつゞら馬にして、江戸へ赴く、といふのである。

（同、第二、女房に云々。）初め、江戸讃美の詞が、數行述べられてゐる。曰く、「大豆右衛門は、飛が如小田原町の河岸へ着ぬれば、馬より飛びおりあたりを見るに、肴どもは山のごとくつみかさね、道いつぱい有れば、扨も能此肴のうれ切るごとく、江戸の繁花を（マヽ）我を折、爰に暫居て樂しまんとおもへど、いかにしてもなまぐさければ、名に聞し本町通りへ定て美しきやつもあらんと鼠栗〳〵行て見るに、白壁作の大家ども軒端せましと立續、瓦の紋は銘々の家名をあらわす、金蘭純子紗綾縮緬を引散したるは、寶の山の仙家に入心。田舍者の大豆右衛門の迷ふほど膽をつぶし、江戸かな〳〵、米かしには肴の山、呉服町には如此目に余るほど歳反物、日本一番蓬萊の國は江戸に極まりぬ。唐にもかほどの所あるまじ。」といふのである。扨、室町のさる商家、隱居は六十に過ぎてゐるが、その女房は、年は廿七八と見えて三十にも成り玉ふべし。息子は、京へ嫁を探しに行つて不在。その隱居に五

日が程、魂をかへるのである。

（同、第二、强そふに云々。）初めに、兩國の夏の賑ひを叙してゐる。さて、大名方の女中と老女とに連れられて、女出立(でたち)になつてゆく手代がある。さては御隱居の男妾かと思うて行て見れば、思ひの外、殿の腎藥を捕らるゝのであつた。さう／＼にして魂を返し、蔭ながら廻向して去るといふのである。（以上、一之卷序一丁錄一、本文廿六丁半、計廿八丁半。挿繪二、本文五ノウ六ノオ、廿二ノウ、廿三ノオ。）

（二之卷。第一、深川は云々。）初めに、深川の繁華なる描寫が、一寸(ちよつと)あつて、偖、路傍で、美しい女の子供と姥を見つけ、その姥についてゆくと、それは、悋氣深きを嫌うて女房を去つた家であつた。その亭主と魂を更へ、手代を使うて、里方へ詫びにやる。トヾ、舅の我儘を通して、向後女房以外の女には振向かず、又女房を大切にすると、本當なら書きさうもない謝(あやまり)證文を書き、連れ戻させ、又女房にも、起請を書いて與へる。魂が元になつて、亭主、驚いて散々手代にあたり散らすが、自分の書いた起請はある、それを見て愈々腹立、さては俺に酒をしたゝか飲(の)ませ、手代共里方とぐるになり、一ぱい箝めたなと、アト大騷動になる。豆右、氣味わるくなつて逃げ出す。

（同、第二、妾な云々。）淺草の寺町邊、ある寺へ、若衆に化けた女を連れ込む。梵妻(だいこく)として連れ來つた、周旋屋は、約束の切米百両、外に骨折賃十両をうけ取り、酒は後日に讓つて歸る。と、さる丹那の宅から、その家内が産後急變、お十念をお授けなされと、迎ひに來る。再三の使でたうとう、行く。と既に死んでゐた。途中、魂を返す。和尙は、知らずに例の梵妻と心得てゐる。と目ざめて丹那の家であるから驚く。お袋どもの死人に魔がさしたと騷ぐのをとりえに、それ体(てい)に胡麻化すといふので、一種のレイチェンツヤンヅングを描いた結末。豆右のいたづらも度を過してゐる。ちよつと、「女男色遊」の第四卷第四の趣向に似てゐる。さう／＼は新しい趣向も生み出せまい、かうなるのも尤もである。

（同、第三、女と思へば云々。）金杉(かなすぎ)の分限者らしい家。こゝに十八九ばかりの女と十六七の前髮のある若衆

とゐる。此の若衆に魂を變へてみると、此の女は、誠は男。此處の主は、大の變態者、以前から馴染んだ此の舞臺子を、娘に拵へ、嫁風にして、おき、親類どものやかましい追求を逃れてゐるといふのである。さて一方の若衆は、主人の從弟。妻に見せかけた舞臺子上りが曰ふには、「此のちは、ぬしの留守の時は」わたしにあふて下され、今日も主は留守だといふのである。豆右、驚いて魂を返す（以上、二之卷、總丁數、目錄一、本文廿三計廿四。挿繪は、四ノウ五ノオ、廿ノウ廿一ノオの二。）

（三之卷、第一、女郎の風も云々。）吉原で、河岸女郎・局・一歩女郎・晝夜三・格子・太夫と廿日ばかりにあつて、最後の日、江戸へ出でんと、さる自惚の新間きじ鳩の權介といふのにとり着いてゐると、この權助が、或る十六七の新造とその樓主とにうまく引つかけられて、とんだ厄介者を背負ひこむ。それを見た豆右、「扨も珍らしい吉原の筒持せ、此男め欲から思わぬ大厄介物を背負うた」と笑ふのである。それは、この新造、不具であり、樓主も外聞を嫌ひ、尼にさせる氣で、そつと連れ出る甘い男を探してゐたのである。女が、「親の讐を討つため、里を出たい」といふ詞に引つかゝり「でも抱へを無斷に連れ出すと、法に問はれるが」といふと、「わたしは勾引された者、請人も口入もないから大丈夫」との事に、愈々乘氣になり、四五日、世話をしておいて、その後親許へ歸して禮を取らうと、欲と色に擀んだ。それが、女も樓主も馴合の上と分つてみて、さて親許へ屆け、その上にて尼にならうれよと親元を聞くと、幼少の時賣られて來たから、親も兄弟も知らぬといふ。だからとんだ厄介者を背負ひ込んだといふのである。

（同、第二、娘と後家云々。）若女形の隨一嵐峯之丞の家である。巴やの後家と松坂やの娘おりつと二人から手紙が來る。峯之丞、娘の方に氣があつて、これへ今夜來らるゝやうに返事を書いて使に持たしてやる。それが、來たものは、娘と思つたのが、後家であつた。使が間違へて、おりつへの手紙を後家に持つて行つたのである。で、後家は、娘の形をして來た。本物の娘もあとから來て、峯之丞、肝を潰す。それへ手代の傳兵衞がからむ。豆右は、時々峯之丞に魂を換へるのである。

（同、第三、戀には云々。）初め踊子が地者に勝る論を約一丁分書いて、偖、橘町の踊子の一人に、松世といふのがゐる。兄とお袋との三人暮しである。その隣に髮結の源助といふのがゐる。これと、松世が文をとりかはすやうになる。或る夜となつて、約束どほり、松世にあひに行く。その最初は、魂を換へた豆右である。魂を戻された源助、再び行く、と松世は居らず、お袋の七十二になつてゐるのだけがゐた。偖、此のお袋は、すでに死んでゐる、兄も松世も驚いて駈けつけ、嘆く。源助をお袋の敵といふのであるが、豆右衞門、あとより來て、お婆々の不慮の横死を悲しみ、廻向して去る。あとの敵討は、如何なつたかを知らずといふのである。（以上、三之卷總丁數、目錄一、本文廿六半、計廿七丁半。挿繪二、七ノウ八ノオ、廿五ノウ廿六ノオである）

（四之卷、第一、筆の云々。）中風病みの亭主を過すため、その女房が筆師匠の看板を懸けてゐる。三年越し看病を續けてゐた。けふは、久しぶりで、弟子の娘のお品に留守を頼んで、氣晴しに芝居へゆく。豆右は、中風病みの亭主に魂を換へた。女房途中で歸つてみれば、亭主は、お品の介抱を受けてゐた。亭主の豆右は、女房の悋氣を癒さうとしたが、豆右が魂を返すと、亭主はそのまゝ臨終。豆右は、ざうせよい〳〵の亭主だから、早く後家にしてやつた方が、あの女房の仕合せであらうと、苦しい辯護をして、立ち去るといふのである。

（同、第二、戀には云々。）氷川へ參詣の暮方、二十四五の利口げなくぬけ〳〵とした男と廿一斗りのいかにもすきさうな女と、此の出あひを見つけて、男に魂を換へる。と此の女は狐で、男は、化されてゐたのであつた。鉦太鼓で探してゐる聲に驚いて、あたりを見ると、卵搭婆で卒搭婆が四五本倒れてゐたといふ始末。あの間拔面では、さても讀めたりといふのである。

（同、第三、師匠の云々。）豆右は、師匠の豆休先生を蔑する心が湧いてきた。その師匠の罰で、とんでもない御難に遭ふのである。「爰に時あつて、寶暦二壬申年三拾三間堂造營事すみ、入佛供食も濟めば」といふ頃、（珍らしく、本文中に、年月を記してゐる。）その深川で、堂前の茶屋での、女郎を呼ぶ客を見つけ、それと一緒になつたことはいゝが、間もなく×中の洪水に遭ひ、半死半生、漸く豆休先生の

靈を念じて、助かるが、小ひどく先生から叱られるのである。

（五之卷、第一、六十の老僧に云々。）前段、これ迄の慢心增長を悔いることになつて、當分は遠慮して愼まうと、隨分堅い住持を見立、寺町邊の我が宗旨の淨土宗の寺へ駈け込、暫くゐた。と或日、廿三四の色白な女が小女郎を連れて來て、庫裡へ案內し。淺草並木町に住む、此頃夫に離緣いたされ宿に居るものなるが、是の和尙は、五十相傳をなさるゝと聞き、それを願ひに來たといふので、銀包を出す。やがて和尙と對面、日を定めて相傳を約し。先づ今日はと、酒など出してもてなす。豆右、傍にゐてこれは坊主に仕かけるつゝもたせと覗み、和尙に魂換へて、明晩忍んで來られよと約して返す。その晩になると、豆右、今度は飯焚の白髮爺に魂を換へ、裏門の路次の切戶に待うけ、くゝり頭巾に顏をかくし、部屋も和尙の居間でなく、さる坊主の學寮へ案內する。その晚、女は、小むつかしく作りたてた男一人を連れてゐたが、これが隱れてゐたが飛び出し、兄だというて、和尙の破滅を詰る。金にせんとの事である。と寺內大騷動、本物の和尙も居るから來る。男女は驚く、相手は飯焚と知れる。飯焚は俗体なれば、普通でない限り、もと〳〵罪にはならぬと平氣である。男女のからくりは、すつかり駄目になる。納所坊主が、此の兩人をゆすりかたり奴と呶鳴り立てる。よき頃に、豆右は、飯焚爺から魂を返す。和尙を救うて、善根を施した氣でゐるのである。さて、此の男女は、その塲で前非後悔、逃もの事にお十念を請けたいとまぎらかす、といふので落。

（同、第二、山伏は云々。）和尙の難義を救うて、大きなる功德した積りで、豆右、その寺を出、並木町の方へかへつて來ると、町並より少し引込み、玄關構ひして、喜妙院と札出した、山伏がある。それへ三十斗りの女と六十斗りの親仁とお婆々と四十斗の男とが來る。此の親仁お婆々の娘が、此頃患つてゐるが、それには、靈氣がある。それを拂ひのけねば、病氣は治らぬ。がそれゆゑ寄に立つ人が入用だといふので、それで、今日は、お婆々の姪（二十斗りの女）を連れてきた。いざ寄にたてて下されと賴み入れる。で寄をかけるうち、外の者は、勝手へゆき、茶を飮んでゐる。あと、その山伏に、豆右が

魂を換へるのである。さて、「是程祈つても寄りませねば、物のけはござらぬ」と山伏がいふと、女が「アノ悪口わいな、……うそつかんすな」と眞顔になつて腹を立てる、トント小咄の落の如きものである。

（同、第三、初旅に云々。）都上りを心がけて品川へ來る。「黒縮緬の羽織、黒紬の小袖、三尺手拭さへ持たずに、紫竹の杖にわら草履、身代のよひ、椀久が旅するやう」な装である。間もなく、或る大屋形に入り込んでゐる。こゝに、品川禮讃の詞が少々ある。曰く、「爰へ來れば爰の氣と成りて面白く、女郎も見づらくなく、おたなのおつまのといふ名も珍しく、中には吉原風の名も有、禿も有、遣手も若者も有て、女郎もきらを磨き、誠に宿女のよきたぐひ成ることもおかしく思ひ、此客のあい方を見るに、まづ美し髪結ぶり小袖の模様、爪はづれも尋常にて、北國の中座でも番頭女郎ともいふべきしこなし、道理で品川へ來る客多し、直段競にしては、遙に吉原よりは徳な物」云々。さて此の女郎と客との塲である。その客に魂を更へると、圖らず、慈姑に出くはす。（此の慈姑は、「傾城禁短氣」にもあつた、女軍法の一種である。）色々仔細を聞くと、此の客は、さる家の入婿であつて、その家の親爺が此の婿の放蕩を怒つて離緣に及ばうとする。とその女房が、昨日夕方この女郎に逢ひに來て、當分亭主に逢はずにゐてくれ、わたしも八九年仲よく連れ添うて、今更養子を更へる氣はない、家の騒の靜まる迄暫くの内の御辛抱、と頼み込む。引受けると、嬉しがつて手を合せて拜んだ。それゆへの策といふのである。豆右、感心して、魂を返す。とその客、何も知らぬから、豆右、正体を現はし、煙草盆の取手へ飛上り、始終を話し、「我は、業平の末社の神也と、、、此後暫く通ひをやめ、女房にも心を休めさせ、女郎にも實相をたてさせ遣るべし。行末は、女郎も汝も共に延命長久に守つてやらん」云々と示す。二人は、有難く三拜する。その折節表の方を西國の御大名、御初地入の行列が花やかに通る。豆右、その儘飛び下り、店さきへ走り出で、お大名のお替乗物に飛乗り、暫く大名になつた心地で、供人大勢引連れ、「花の都へのかしまだち、誠に榮花の二代男とさんざめかして、道中におも

むきけれ。」で終つてゐる。（以上、五之卷、目錄一、本文廿七、計廿八丁。挿繪二、八ノウ九ノオ、廿一ノウ廿二ノオ。）

尙、末尾（二十七丁裏、本文四行の次）に、左の如くある。（版元なし。）

寶曆五乙亥のとし（初一行）正月吉日（次一行）二代男後編　榮花遊吾妻男　全部五卷（次一行）右之本追而出し申候御求御覽可被下候（次一行）とある。

以上で、此の「二代男」の全五卷その梗概を終へた。偖、此の豆男の續編に就て、目星しい相違（前編後編の二作と比較して）をいふならば、此の續編（「二代男」）は、趣向も前二作と相似たり、且つそれと所々交渉を持つてゐるが、筋に窮してきたせゐか、間々、それの焼直しと思はれるのがある。なほ著しい此の作だけの特徴は、例の好色描寫が、此に至つて、頗るひどい。内容からは一層精緻で、近代味が多い。即ち、此作より後至の、例の無數の會本類の、此種描寫の、先蹤、寧ろ範を垂れてゐるかと思ふばかりである。それだけ、筋の變化は、閑却されがちである。或は、作者も、これに密にして、讀者の倦怠を防がんとした狡智さがあつたのかも知れない。

なほ、以上の三部作を通じて、共通であり、それが後世の豆男物と異る點は、豆右が（又は二代目豆右が）或る人間と魂を更へる、とその人間は、形は借物だが、事實豆右として活動する。然るにそれと同時に、一方その人間の魂は、どうするかといふに、魂々交換なれば、豆右の芥子の實程な躰に宿らねばならぬのであるが、それをしない、その間は、丁度眠つてゐるやうなもので、前後忘却、豆右の魂がその人間の体から立退いてから、やつとはつと目覺めたやうに氣がつくといふのである。この點が違つてゐる。京傳の豆男物の黃表紙や一筆庵（英泉）の「魂膽夢輔譚」などの豆男類似の物は、相手と全く魂々交換し終るのである。即ちAにBの魂が入り、BにAの魂が入るのである。尙、此の豆男本格の三部作では、凡て人と人、即ち豆右が人の体を借りるだけ（しかも男の）になつてゐるが、英泉のものなどになると、鳥など非人間な物にも魂を換へるのである。つまり換魂、萬有に自在なのであ

る。それだけ、後世の豆男物は、好色一方の本格を改めて、滑稽にこれを更へてゐる。勿論さうした事は、當時の作者不自然の、不自由な心持から、起つてもゐよう。(但しこの人と鳥などの複雑な換魂がより以上、荒唐無稽な笑と猥を招く事は、謂ふ迄もない。例として、「魂膽夢輔譚」(帝文、滑稽上)を見られよ。)

以上、此の三部作を紹介するに及んでの、偶感である。――完

○「狂訓彙軌本紀」の自跋

洒落本「狂訓彙軌本紀」(天明四年版)は、風變りな洒落本であるが、これには、一層風變りな、嘲世的な自跋がある。此本、石川氏の複製本にもあるが、これには、此の自跋全部を脱してゐる。左にその自跋なるものを載せておく。本文第廿四丁ゥより第廿六丁ゥへの分である。十三字詰位一行、七行半丁のもの。

自跋

清貧(マヽ)ハ常に楽しミ。濁富ハ常に患ふとハ。往昔老夫山に柴刈、婆ァ様川に洗濯するの時代にして天びん棒上へそりたるの定矩(マヽ)にあらず。貧者は甘鹽のさんまを賞し。富者の鯛のミそずを奇なりとせず。升の米に追れて腹中さびしく。百斛の美酒をくらつて寒夜をしらず。豈たのしみ貧者にあらんや。もし古語を當世にあつる時ハ。婆ア様山に柴刈。老夫川にせんだくし。桃太郎も鬼が島へ渡ッて。若衆にさるゝに庚ふべし。猶根からこつちに野暮稀にして銭儲からず。化もの出ずして怪談の書廢れたり。此二ッの外に至つて微なるものは何也。山吹の色事也。今予が著す(マヽ)彙記本紀ハ全く鉦を進むるに非ず。かれを見て。これを聞て以て。其しりのつまらざる事を嘲し。此書を世界の息子たちに見せ。居候の難を免ん事を欲す。かせぐに追付貧乏なし。窮すに追付富貴なし。然りといへども。一概に古風をしたわバ。沈香ハたかずして。屁を嗅のごんちやんあるべし。ゆだんすべからずと。まじめになつてしるす事しかり

甲辰歳孟春

島田金谷述

(表紙二より)さしてのです。)の様子を申します當時、チョンガレの祭文語りは、三尺帯に浴衣がけであつた。浮れ節語りも初めは此のやうで尻も捲(まく)つて跪坐(あぐら)を掻いたものだが、後(のち)品位が出來て、現に明治十四五年頃吉川文鶴といふのが、名古屋の熱田で興行したが、袴を着けてゐました。又チョンガレより進んだ著しい相違は、チョンガレ時分は、露店か大道であつた、それが浮れ節となると、寄席(よせ)小家となつた、つまりそれ丈外形からも進んだ譯(わけ)です。語り物の名前は、一流軍談浮れ節といふので、毎夜連續が多かつた。祭文語りの風はなくつて、格好は、右手に張扇、左手に小さな拍子木、―これは、時々間(ま)をうつために入用です。扇は節廻しの間に、調子をとるために入用です。つまり、祭文語りの錫杖が扇(あふぎ)、法螺が拍子木と變つた譯です。三味線もあつて、これは、男又は女が彈いた。此の三味線は、節廻しの時に彈いて、詞(ことば)の時は、低く間(ま)をおいた、また三味線引も時々文句を合せるやうな事もあつた。つまり此のうかれ節(浪花節でも然りですが)の三味線は、息休めに止まり、實際には祭文語りの錫杖の代用といふ譯であります。が當時の此の浮れ節を、未だに殆どチョンガレと同一に見てゐる人が多いのであります。それ程に似てゐたと思ひます。

次は、浪花節の話。當時、此の明治初期、一方浪花節といふ名目もありました、無論此の浪花節は初期江戸時代の、チョンガレの別名のやうな物よりは更に進んで、純粋の祭文品から次第に變化してゐたでありませうが、此の明治初期は、頗る浮れ節と似てゐたといはれます。つまり浪花節の看板が懸つてゐても聞く方は浮れ節だと思うてゐたのです。勿論これは、明治三十九年頃の雲右衛門擡頭以前の、舊浪花節であります。つまり浮れ節の關西派を浪花節、關東派を關東節と、こんな風に考へてゐた、現にそのやうに呼んでゐた人々が多いのであります。とにかく當時浮れ節にも西と東の區別があつて、關東派は調子が高いが、大阪のは一寸低(ちようさ)くてうま味があつたのであります。が元來此の浪花節といふものは、私の考へでは、名前もその存在も、浮れ節よりは古く、すでに江戸時代に存在してゐたことは證據があり、唯、江戸時代の祭文の一種チョンガレと殆ど同様の物であつたのが、後、いつしか錫杖の代りに三味線を使ふ事となり、(未完)

○著者より。本册は、豆男物の續きで全部を埋めた。一寸趣向が拙かつたが、長くなつたのです。がこれでも、始めて現れた纏つた紹介だとの自信はあります。唯、殘念な事は、家藏本「女男色遊」の、三之巻一册が缺本である事である。誰方か御所藏ないだらうか。有れば、お借りして、影寫がしたい。又は所在を教へて頂きたい。何卒せめて〴〵お心がけ下されたし。○他則にいふ事なし、女房また懷姙、本年七月頃が産月だ、律義者たる證據也、といふ事位ゐより外に無之。(二月廿六日夜)

○寄贈紹介

○きつひむだ枕春の目覺 (全)
右、駿遠豆叢書の第三編、黄表紙稿本の複製である。原本通りに本文挿繪全部凸版にて複寫、終りに本文の活字化を添へてゐる。複寫校訂共に良好。内容は、駿遠の名物を擬人化したもので、嘗て本誌にも紹介した、小生藏の物、その全部の複製了である。好資料、且つ珍作である。(和裝和紙、十八丁頒布實費壹圓。靜岡縣庵原郡庵原村茂林修竹山房。)

○柳樽異同辯 (全)
江戸文藝資料叢書の第一。異本亂丁、重出句、末番句削除表など柳家研究資料の一。好著。(菊半五〇頁、謄寫。價不明、東京府長崎町四一三五、江戸文藝同好會)

○浮世繪 創刊號
井上田中氏などによつての創刊で時代に伴つての新態度の研究が多い、誠に結構である。紅繪の名稱に就て、歌麿畫の洒落本、芳年論おやま繪の事など、凡てよし。(菊洋六四頁口繪數葉付、五拾錢。東京市京橋區尾張町二、福永書店)

○古典 第一册
鹿田の月報を兼ねたもの、老書肆も遂に此形式を追ふかと思ふと何だか時代の影が思はれる。記事として、「源氏物語の繪入刊本」などよし。(菊、非賣品。大阪市東區安土町四、鹿田松雲堂)

○變態萬類誌 齊藤昌三著
變態十二史附錄第三卷。内容、本文圖版とも天下一品。悉しくは小生の「讀賣」紹介記事を參照の事(和裝約百頁。非賣。東京市牛込區東五軒町二七、文藝資料研究會)

○浮世繪入札圖版入目錄(御成會)○御多賀良(島岡周助)○日本文學講座第十四卷○變態資料(三ノ二)○(以下二月號)民俗藝術○風俗研究○國學院雜誌○澁谷文學○江戸時代文化○江戸往來○歌舞伎○演劇藝術○長唄○民謠詩人○やなぎ樽研究○川柳鯱鉾○愛書趣味○古本屋○紙魚○北隆館月報○墓蹟○墓碑史蹟研究○東海美術新報。

定價表

一册	貳拾五錢	郵税貳錢
六册分	壹圓四拾錢	郵税共
十二册分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳割増の事
○照會は返信料添付の事

昭和三年二月二十八日印刷
昭和三年三月一日發行 (貳拾五錢)

編輯兼發行者 名古屋市東區東新町百五十七番地 尾崎久彌
印刷者 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 英比貞造
印刷所 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 扶桑社
發行所 名古屋市東區東新町一五七番地 江戸軟派研究發行所 振替名古屋九六七二番

寛政九年版「津ぬき泉」李の巻又三ノオ

昭和三年三月二十八日印刷
昭和四年四月一日發行

参編 第二十二冊（通編第六十七冊）

本文

洒落本の書形的研究
○寶暦・明和・安永度、三十四種。

豆男物の三部作補遺

近世語物雜談（下ノ下）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第二十二冊
（通編第六十七冊）

近世語物雜談（下ノ下）

明治に至つて、漸く變化して、一方浮れ節の勃興に伴つて、此の二つの物が互ひに似通つてゐたが、到頭浪花節だけは、この同一線から追ひ越して、天才雲右衛門などの努力によつて、今日の新浪花節を作つたのだ、と思ひます。東京での浪花節勃興の基は、明治三十九年頃で、此の年五月に浪花節奬勵會といふのが起り、同七月には、浪花節研究會なるものも生れて、漸く識者の耳に入らうとしてゐた。當時の演者は、虎吉、峰吉、虎丸、辰燕などであります。無論日露戰爭以後の、戰捷の氣分と、浪花節の語り物が、主に義士傳でありその武士道鼓吹と合致したのが主な勃興の原因だと思ひます。がその中心人物は、無論明治四十年六月、本鄕座に旗上げした雲右衛門でした。元來此の雲右衛門は、武州熊谷の生れ、その父親は祭文語りで、自分も幼時はデロレン祭文を語つた、現に九州へ行く以前、幼年時代、この名古屋の廣小路木町附近で、祭文を語つたといふ口碑もあります。これが九州で勢力を作り、大阪から東京へ行く、非常な勢ひで、これ迄浪花節語りは、二流の小屋であつたのが、第一流の劇場で興行した。又語り物も先に義士銘々傳後に孝子傳、節も當時の關東派が祭文風を脫しきらぬに拘らず、これは琵琶と浄るりなどをとり入れた、豊かなもので、加ふるに宮崎滔天氏などの援助になつた美辞麗句を節つけにし、風采堂々、初めて演說口調で、立つて演ずる風を始めた。凡て今日の浪花節としての品位を高め、權式を作つたのは、雲右衛門也というても過言ではないでせう。が浪花節の節そのものを津々浦々に普及させたのは或は却つて吉田奈良丸氏などの、あの万人向きな節廻しのせぬかと思ひます。以上、祭文から生れた浪花節が、江戸時代明治初期と傳はつて、遂に祭文や浮れ節を追ひ越して、今日の生れ變つた第二の浪作節を作りあげた大体の徑路であります。

○「白狐傳」は、洒落本に非ず

艶二の著、享和四年版の「白狐傳」を往々にして洒落本の中に入れ、現に新修日本小說年表などは迷つたあげくにや、洒落本と滑稽本とに重出してゐるが、寔は滑稽本の一種と見做してい〻。今、その輪廓を傳へておく。

見返しによると、此本東都　寶珠堂藏とあるが、これが實在したか否か、怪しい。即ち狐の緣語の寶珠かと思へるからである。初め五口(不詳)書の白狐の贊と畫家不明(恐らくは北溪か)の白狐圖、半丁。その裏よりヒヲキ二丁半分、自叙。その終りに維時享和甲子春正月　駭々關於旅店、鹽屋外史艶二題とある。次ぎ半丁、東溟散人の題。そのウラ燕石陳人の題。以上四丁。以下本文で、書出しには駭々關鹽屋艶二編とある。

内容は、白狐の緣起談で、平將門の亂後、官軍の先鋒をなし戰功のあつた坂東太郎乘行、帝御感のあまり、下總猿嶋の莊をたまはつた。その乘行に、稻荷神の託宣によつて、降つた一個の白狐、これが、主題である。折柄、西國に純友亂をなすによつて、乘行再び帝より召されて、發向、その不在中白狐、乘行の妻に、「尋常(よのつね)の野狐にひとし。云々。今洛陽(みやこ)にのぼり官位を乞ひ受ん事を欲す。」よつて、狐穴の空しからん事を怪しむなと告げて失せた。さて此の白狐、途次、波に遭ひ怪異を現しつゝも西上、洛陽に上り神祇の伯によつて官位をうけ、折柄歸陣の乘行と共に故鄕に歸り來つた。その間此の白狐時々詩を詠むのである。文章もいやに氣どつて、漢文口調である。唯、感じのいゝのは、北溪の挿ヱ三面。奥附には、後編があるらしいが、未刊であらう。

參考のため、奥附の全部を載せておく。(此本中本、本文廿七丁。半丁九行、輪廓あり。)

鹽屋艶二子著

後編白狐傳　近刻
滑稽萬端談語　來春出版

麹町平川町壹丁目
伊勢屋忠右エ門
同所　貳丁目
松本屋新八
梓行

恐らく「南門鼠」などの、作者洒落本作の絕版禁止に驚いての、微温の作物であらう。

洒落本の書形的研究

一寸、命題の意味を、自釋しておく。短かい言葉で、表現の仕方がなかつたからである。洒落本、従來、その名作と稱するものに限り、屢々人を更へて云爲せられてゐるが、その一般を通じて、まだ平等に、その存在、特に、その書形、(私のいふ書形の意味は、本の型、丁數、序跋の有無、口繪挿繪の丁數又はその有無などを含める。)に就し、一々原本によつていはれたのは少い。一般を通じてである。それを今、私が始めようとするのである。内容を疎かにして、形に執するのは、愚だとの話も出ようが、私の信ずる限り、洒落本ほど、書史的に見て、各樣式の出版、且つ一本に就てもその正版僞版の存在、が多いものはなからうと思はれるし、且つ今日、現存してゐる原本の數も、先づ少い方のものと思はれるから、原本渉獵者の便にもなり、且つ挿繪かれて約百種は、飜刻せられてゐて、内容の親睹には容易であるが、然しかうした書形的知識は殆ど掲げてゐない。且つ挿繪あるものも殆ど何の斷りなく略いてゐるから、その必須參考にもと思うての事である。以下、家藏本を主にして、一々原本に當つての記述である。倚、此の記錄二三回に亘つて續ける。一回毎に、年代順を追うておく。且つ、記述を、大体左の如く區分する。

題名。作者。挿繪畫家。年代。(刊年明確なるものはそれを示し、不明なるは、序の年月を示しておく。)及び、型。表紙。題簽。内容の分類(小說吉原。論議。雜の如し。)序跋本文の丁數。柱の体裁。版元。などである。

内容の分類とは、洒落本を内容から大別すると、遊里小說(これが大部分)と、遊里に關する論議(色道傳授、又は遊里沿革誌などを含む。(原本に就ては、更に括弧内、細別する。))と、雜(遊里以外、一般世相の論議。諷刺又は單なる描寫等を含む。)とである。先づ記述を進めてみよう。(倚、本文の字詰、行數の如きは、略く事とする。再刻本又は僞版等在るものに限り、略記する。)

○合刻両都妓品　　　不詳　　　畫ナシ　　　享保十八年

●小本一冊。論議(此作、遊里沿革誌也。)●遊戲堂梓。●總丁數。此稿底本、後摺本の如し、且つ落丁ありやと思はる。即ち、内容の順序を示せば、合刻両都妓品序(癸丑之秋、烟羅館主人題)一、新刻両都妓品 附方言(此分、一丁のみ。恐らくこゝ數丁の落丁であらうと思はれる。)一。史林殘花序一

より三まで。（序者不明。）史林殘花序（前の序と違へり。）四表より五表まで。地理志、日本隄・衣紋坂など、五裏より九表五行目迄。藝文志、九表六行目より十二表三行目迄。律曆志、十二表四行目より十七表五行目迄。關井世家（セキノヰセイカ）第二十巻、十七表六行目より十九裏三行目まで。以上、本文（史林殘花）畢である。但し此の底本、なほ、嶋原と吉原との細見やうのものが附せられてゐる。嶋原の見取圖二丁。吉原の細見、江戸町一丁目云々より全廓の見取。船宿表などに至り、二十一丁。以上が附錄せられてゐる。最尾の裏末行に、新刻改正　遊戲堂梓とあり、新刻の上に、五六字の箇處を、黑くして埋木のまゝにしてゐるから、年月を示した版木を潰（つぶ）したのか、又は、再摺の年代を彫らうとしたのか、何れかであらう。尙、末尾の細見類を除いては、全部、各丁柱、表面の所に、合刻両都妓品序、又は、新刻両都妓品 附方言 の文字。なほ、妓品以下史林殘花、凡て柱に、表裏に亘り、下に遊戲堂とある。尙史林殘花の部のみ、丁數があつて、柱の裏、遊戲堂の上に、一、二の丁數が打たれてゐる。結局、内容は史林殘花が主になつてゐる。が前に落丁がありはしないかと氣懸りである。史林殘花は、無論、吉原の内容である。

○魂膽總勘定　石嶋政植　挿繪無落款　寶曆四早春の序

●半紙本三冊。●元表紙青、題簽は、子持輪廓にて白地に、魂膽總勘定上（又は中）。●論議〔色道傳授〕。●東部書坊、本町四丁目中村治兵衞梓。●上卷、序二、目錄一、以下本文、「大意」より「金銀多く遣はずして能もてる事」まで、序以下追丁にて十四丁。七ノウ半丁分挿繪、十一ノウ十二ノオ挿繪。中卷、本文十二。「遊里に三ツのいましめある事」より「女郎に實の有なしを居ながら知る法の事」まで。五ノウ六ノオ挿繪。下卷。本文十、別に「華里通商考」五、跋奥附とも一。通計十六。本文は、「女郎買極意の事」より「後朝の客に四ツの見樣ある事」。まで。附の「華里通商考」は、一の表は、華里萬國圖。一ノウより吉原國等。國の内情を述べて、終りに土産を述ぶ。跋は、平安、玉

泉女。奥附に、分里年中行事、全部五冊、近日出來、云々とあれど、未刊であらう。●各卷を通じて、柱は、惣勘定、卷一（又は卷二）　○一（又は二）とある。通商考は、華里通商考卷（アトナシ）○一（又は二）とある。此の卷三の附華里通商考のみ、後（又はこれより先か）、別の一冊本となしたものがある。新修年表に、遊里軒に作者名を爲してゐる。（但し此の本未見、体裁等不詳。）が、此の華里通商考、一冊本も此の「惣勘定」附錄も同一內容であらう。さうして、此の体裁內容、無論後の「娼妃地理記」などの、萬國圖解式の形の元たる事、謂ふ迄もなからう。

○當世花街談義　止　藏　坊　挿繪無落款　寶曆四年正月刊

●半紙本五冊。●元表紙青。題簽、子持輪廓、當世花街談議　一（又は二）。●論議（命題の如し）●東都書林長谷川新兵衞。日野屋與兵衞。伏見屋吉兵衞。●總丁數。卷一、序（洛陽　孤舟）二、本文別丁にて、一より九表まで。挿繪四ノウ五ノオ。卷二、一より十八表までなれど、又十三一丁あれば、誠は十八丁半。挿繪、五ノウ六ノオ。又十三ノウ十四ノオ。卷三、一より十三表まで、挿繪三ノウ四ノオ、九ノウ十ノオ。卷四、一より十六まで。挿繪七ノウ八ノオ。十二ノウ十三ノオ。卷五、一より十三、別に跋三丁半（東都　樓船主人）、アト半丁奥附。●挿繪は、畵家不詳なれども「總勘定」よりはよし、古拙味多し。

作者に就て。作者は、恐らくは、洛陽の孤舟といへるものか。止藏坊といへる者の作らしく、その序には謂へるも、こは、志道軒のもじりにて、實作者には非ず。跋によれば、跋者樓船主人の從弟なりとあれど、如何か。●柱は、くるハ第一（又は第二）　一（又は二）とある。●此の本の外題、本文の初めには、問答花街談義第一（又は第二）とある。

「備考」此本、新修年表には、滑稽本に入れてゐるが、体裁は無論「魂膽總勘定」及び他の談義物同樣、青表紙半紙本である。「總勘定」は、內容上、無論滑稽本ではない。が此の「花街談義」も、寧ろ

し、且つ奥附も同様である。但し奥附の同様なる事は、一見後摺甚しきものも然りであつたから、即ち此の有無を以て、直ちに初摺か否かを辨ずる譯にはいかないが。或は、徳川文藝類聚本の「聖遊廓」、後間もなくの再摺が、本稿の底本であり、(その折改題「雪月花」)更に三摺、例の末尾二丁分を脱したるものを見うけるのではなからうか。尙一言、此の「雪月花」には、中本(より稍大)型の艶書本のある事である。青表紙、春信の艶書本である。即ち「雪月花」正本と異る處は、序を全部更へ、初に艶書を添へて、終に「雪月花」正本の本文を刷り足してゐる。(全く同一版木である。)即ち序一丁半、その裏より艶書、(その中に春信の落款あるものがある。)序とも此ら二十一丁。(二十一丁目の裏は、寶船の体、四つ目印の帆、荷は張形などを積む。)あと、「雪月花」の舊版木(三聖戯言の二丁分ありしや否や、記憶なし。)を嗣ぎ足してゐる。然るに此の艶本の序、終りに、明和六、巳のとしの初春とあれば、春信歿年の前年の作であり、即ち此頃には、既に、雪月花が、大坂高麗橋筋四軒町の堺屋市右衛門(徳川類聚本の「聖遊廓」、家藏本、其他の類本、凡て同じ。)から、江戸の某が版木を求めたものか、又は、大坂の堺屋が、遙かに江戸の春信に、艶書を依囑したものか、恐らくは前者であらう。左に、文献として、艶本「雪月花」の序を載せておく。

序

虎穴にいらすんば何だ虎の子を得ん棣棠の花は抛げうたずんバ何ンぞ佳境に入を仍而此書上玉簾の深かきより下井戸端の世話しなき戀に人目の關守よ胸の悶苦を物やとまだき浮名をかこち、太夫が枝のたかきより艸かくれし夜發の意氣味まで今目のあたりに畫に寫し深閨の内にて居ながら眞實不二の妙所を知らしめんと衛利　明和六巳うしの初春

○拾遺枕草紙花街抄　不　詳　挿繪ナシ　寶暦年間刊

●小本一冊。●元表紙、三方折込。白地に松竹梅、突羽根、毬などの藍摺模様。題簽、子持輪廓に

て、命題の如く、下に全。●論議（枕草紙の本文を遊里物にもじり、且つ鼇頭に、猥的の註を附したるもの。）春曙軒藏。（とあれど、此の版元、枕草紙にもじりたるまでにて、匿名也。）●見返し、半丁分。唐草に曲げたる子持の線にて圍み、右上に、清少納言、中央に拾遺枕草紙花街抄、左下に、春曙軒藏とある。●丁數。序（署名ナシ）一丁半、目錄ヒラキ二丁分。そのウラ花街抄引書半丁分。（以上、四。）以下本文にて別丁、二十二丁半。本文は、「にくきもの」より「あそびは」まで、二十八節。●柱、下に丁のみを打つ。

〔備考〕此本、小說年表になし。勿論、純小說ならざれば、無きが普通なり。但し、此類また初期洒落本――混沌期のものとしては、洒落本と目して當然なりと思はれる。（版元不詳。但し內容により、大坂版ならん。）

○袂（たもと）案內　　不詳　　挿繪ナシ　　寶曆年間刊

●小本一冊。●題簽、子持輪廓にて、袂案內　全。●論議「但し大部分は、京各所遊里の沿革、狀態を述ぶ。本文、行合色事なるならぬといふ見分樣の法、には、色道傳授の色彩强きものがある。」●總丁數、序一。（此次、丁附によれば三丁分なし。此の底本、或は落か。若しありとすれば、京各所遊里の圖又は、各所の遊女名よせ又は揚屋遊女屋の名よせの如きものあらうか。）本文、四より十二半。但し十二以下、丁數なし。本文の初めに、「花洛色里袂案內」とありて、以下、祇園町の狂ひなど、各所の沿革、總評。●版元、不詳。●柱、下に丁數。

〔備考〕此本、また勿論純小說体ならず。が、新修年表には、入れてゐる。但し、花洛遊里（以上角書」袂案內とある。恐らく、本文初めの花洛色里の誤りであらう。本稿底本、題簽ありて、袂案內とのみある事、既述の通り也。

○烟花漫筆　　張葛居辰　　挿繪ナシ　　寶曆年間刊

●小本一冊。●元表紙茶、三方截。題簽、子持輪廓にて、烟花漫筆　全。●論議〔但し、主に大坂各地の遊里各品等並に優人等についての、寸評を集む。〕●版元不詳。●丁數、序（張葛居辰）三、本文、一より二十表まで。後序、廿ウより廿一裏まで。計序本文共廿四丁。●飜刻本、浪速叢書、風俗編の中。

○郭　中　奇　譚　　臼岡先生　　岷江書　　明和六年十二月刊

●小本一冊。●元表紙、三方截の茶。元題簽、子持輪廓にて、郭中奇譚　全。●小説吉原、並に夜鷹。●見返し、子持輪廓にて角をとり、三行に線を引き、右は、臼岡先生著、中に、郭中奇譚　とあり、左に、下に小さく書榮堂とある。●版元、日本橋通三丁目本屋吉兵衞。●丁數、序二。本文一ノ表口繪、（岷江畫と落款。圓形に、屋根船を漕ぐ船頭。）一ノウより、船宿笑話。（五ノウ半丁分、挿繪、落款なし。圓形、駕籠舁と通客。）六ノオより二十一ウまで弄花巵言。二十二ノオ挿繪、圓形に客と夜たか。二十二ウより二十五オまで、掃臭夜話。廿五ノウラ余白。跋（淡海先生）、丁數を打たずして一。總計廿八丁。次ギ奥附、〔半丁、裏表紙に貼る〕後編遊仙郭　全　近日出來とあれど、未刊ならん。此の奥附に、明和六年丑十二月とある。●柱、下に丁數。●飜刻本、「徳川文藝類聚」洒落本の部、但し、挿繪なし。

〔備考〕、臼岡先生なる作者不詳。跋者の淡海先生は、「明和伎鑑」の淡海の三麿と同人ならん。但し、「明和伎鑑」と比較するに、刊行年次殆ど相同じく、或は、此の本また「淡海三麿」（栗本兵庫）の自作又は他に書かせての作と思はれる。刊行年次の同じき事は、「明和伎鑑」は、明和六年丑十月、（この廓中奇譚は、同十二月）但し、両本奥附を對比すると、同じく書榮堂とあつても、「伎鑑」は、本町四丁目伏見屋清兵衞。「郭中奇譚」は、日本橋通三丁目本屋吉兵衞、が同じく書榮堂である。此の同じ書榮堂であつて、僅か二ケ月の中に、署名及住所の異つた事は、何というて説明すべきか。

或は、「伎鑑」の處分迅速、それがための代替りと見るべきか。が、「伎鑑」の淡海三鷹が、たとひ身は手代を出して當面の責を遁れえたとしても、平然、二ヶ月後の「郭中奇譚」に、跋をものしてゐるは如何なる事か。我は、「伎鑑」の處分には、稍、余裕があつたのか。(とすれば、本屋の名義住處の變更が分らぬ。或は、二者全く別物であらうか。)後考を俟つ。〔尙、此の底本、安永頃の再刻本なりや否やも不詳。」

○辰　巳　の　園　　夢中散人寢言先生　　挿繪ナシ　　明和七年(寛政三年頃再刻本再摺)

●小本一冊。●元表紙、題簽不詳。●小說深川。●此の底本、寛政三年頃の再刻本再摺、版元、江戸堀江町四丁目多田屋利兵衞。●丁數、序(檜閑街　紫樓)一半、ソノウラ半丁、邯鄲と同じ枕や花の夢　自弓庵祇葉の句、並に扇・稽古本などのコマ繪風を載す。自序、追丁にて三ォより五ォまで。五ゥより本文、廿八ォにて了。第廿八丁ゥに、　再板　夢中散人寢言先生著とある。次に目錄、廓の大帳以下二丁分。その書名を擧ぐ。廓の大帳。婦美車紫鹿(再刊)、郭中奇譚(同)。辰巳の園(再刊)。籬千話。遊子方言敍(マヽ)。美地の蛎売。南閨雜話。かよふ神の講釋。格子戲語。自惚鏡。記原情語。傾城諺種(新版)。即ち此の底本、安永二年に再板すといへれば、その再摺(再刻本の再摺)本ならん。出來は、寛政三年頃と思はれる。●柱、上に辰巳、中に○ありて、下に二(又は三)。但し序の第一丁、辰巳の二字なし。●此の底本、袋あり。角を三つに竪(たて)に仕切り、右上に、寢言先生著。中に、辰巳の園。左の上に、今歲新版。とある。●飜刻本、徳川文藝類聚第五　洒落本及び、賞奇樓叢書第二ノ六。

〔備考〕この底本、再板再摺なる事、いへり。初刻(明和七年)本との異同如何。徳川文藝類聚本と較ぶるに、全く同一也。唯、類聚本は、再板の文字を削りたるのみ。〔然るに、明和七年初刻本との異同を、唯一示せるものがある。即ち朝倉無聲氏の遺績であつて、「江戸趣味」第二卷第三號。此號「辰

巳之園」異版なる記事中に、類聚本校訂後に發見せられた初刻本との異同を示してゐられる。誤字脫句の他、流行事物に就ての異同(再刻本の勝手な改刻)など、十項に亘つてゐる。(此の異同略く。)とにかく流布本は、大抵、この安永の再刻本の初摺又はその再摺三摺本であらう。朝倉氏の謂ふ所に據れば、明和本、安永本、寛政三年本、無年號本とある由である。底本、或は、無年號本といふべきであらうか。(唯、本稿に、底本を、寛政三年頃再刻本再摺、としたのは、奥附出版目錄によつて、その外題に同二年刊のものあるよりの、類推である。)

○遊子方言　　田舍老人多田爺　　挿繪ナシ　　明和七年

●小本一冊。●小說吉原。●自叙一丁半、目錄半、計二。本文、別丁にて、三十四、計三十六丁。●杜、下に丁數。●飜刻本、「徳川文藝類聚」洒落本の中。賞奇樓叢書二ノ二。

〔作者と初刷再刷本に就て。〕作者の多田爺は、後の書肆多田屋利兵衞であることは、既に定說である。が、此の「遊子方言」の初摺本は如何の狀態にあるか、未だに判明しない。一說に、再摺本には書林とあつて、その下に本屋名を削つた跡あり、それに微かに須と讀めるといふ。仍而此の本初刷は須原屋版、再刷は、作者自ら多田屋を開業して、此の須原屋を削りて書林のみを殘したのだといふ。若し然りとすれば、此の遊子方言は、三種本あつていゝ譯である。即ち、1、削らぬ前の「須原屋」とある本。2、書林のみの奧書の本。3、末尾、全く余白にして、書林の二字もなき本。の三である。此稿底本は、此の全くの余白本である。須原屋と刷り出した、即ち正眞の初刷本、果して存在してゐようか。自分の目睹も、此の余白本と、書林の二字本とである。尙、注意する事は、此の遊子方言は、寛政三年頃にも再刷、(又は三刷四刷か)せられて、賣り出されたものらしい。その證據は、再刻「辰巳の園」再刷本の奧附目錄に、これがあるからである。(前項、「辰巳の園」の項參照)再刊とは斷つてゐないから、結局同一版木、その再刷であらう。

○雜說野路の譫言　　樂山子　　挿繪ナシ　　明和七年カ

●小本一冊。●うすき藍鼠色表紙、三方截。題簽、子持輪廓にて、野路の膽言（マヽ）全。●雜（當時の風俗世態を、樹ごもが寄り集りての評。花柳の事にも若干觸れたり。さる遊蕩兒の果の事、挿話に現る。）●丁數。自序二丁半（第三ノウラは余白）以下本文、追丁にて、四十丁半。跋なし。●柱、下に丁數。●此の本年代、序には、いぬの春とあり、安永七年の戌かと思はるれど、新修年表には、本文の事實より推して、明和七年なるべしとしてゐる。（年表、二三七頁參照）

○當世風俗通　金錦先生　無落款　安永二年夏の序

●小本一冊。●表紙うすき青。題簽、子持輪廓にて、當世風俗通。●雜（當時、上中下息子などの髮容風俗などの、圖入解說。小說には非ず。）●序二。目錄一。本文二十。跋一丁半。アト半、豫告。通計二十五丁。挿繪、本文ノ一ォ扉、一ノウ二ノオ。四ノオ。六ノオ。九ノオ。十ノオ。十二ノウ。十三ノォ。十五ノオ。十七ノウ十八ノオ。十八ノウ、十九ノオ。十九ノウ二十ノオ。（二十ノウは、余白）。以上。ヒラキ、又は半丁挿繪、及び、文中に、小さく挿繪。人物物品など。●柱、上に風俗、下に丁數。●作者は、春町の自畫作とすると、文は喜三二、繪は春町、（文字の筆耕、亦春町）との二說がある。後編女風俗通、亦同じである。今遽かに、何れとも定め難い。或は、全部春町か。●複製本、稀書複製會第一期。

○寸南破良意（すなはらひ）　南鐐堂一片　無落款　安永四年仲夏の序

●小本一冊。●小說蒟蒻島。●自序二半、目錄半計三。以下本文、別丁にて四十六、跋一。挿繪十四ノウ、二十九ノオ、の二圖、各半丁づゝ、圓形の中に女性。「郭中奇譚」の挿繪体裁を摸したるものか。書風、春章か。從來春信といふもあれど、春信は、先是、明和七年歿なり。●柱、上下全く無地。各丁裏の綴目の下に、丁數。●此作、年季者以下、髮結まで小篇九、描寫巧みに、所謂地方色も現れ、性格も內面的に近く、名作としての評あるは、贅せず。●飜刻本、江戸時代文藝資料第

一、洒落本。

○後編女風俗通　　金錦先生　　安永四年カ（安永乙未林鐘既望の序）

●小本一冊。●表紙、黑地に白く、絣模樣にて、女中卅二サウ廿四などゝ見える。題簽、後編女風俗通。●雜（當世風俗通の後編、こは女性を主材にす。）●見返し、子持輪廓にて角をとり、三行に仕切り、右に、金錦先生著。中に、當世女風俗通。左に東都　著々蘿館藏。とある。●丁數、序三、扉一ノウ。本文別丁一ノウより、廿六ウまで。跋、二。通計三十一丁。挿繪、扉本文一ノオ。三ノウ四ノオ。四ノウ。五ノウ六ノオ。八ノウ九ノオ。九ノウ十ノオ。十一ノウ。十五ノウ十六ノオ。●柱。上に、後　風俗。下に丁數。●作書者に就ては、當世風俗通の項參照。●複製本、稀書複製會第一期。

○風流裸人形　　不詳　　無落款　　安永五年ト云

●小本一冊。●表紙、緣がゝつたうすき青、三方折込。題簽、輪廓文字とも、茶色摺、子持輪廓をとりて、風流裸人形（ふうりうはだかにんぎやう）　全。●小説島原（カ）。「先度、大坂の客」云々とあるから、大坂ではなく、即ち京、それも島原（しまばら）であらう。上下に分け、上は、出勤の段、（女郎座敷へ出てのせりふのていなり）下は、樂屋の段（女郎部やでのはなしをしるす也。）とある。其他、のつけから、會話で、地の文殆ど無き事、且つ見出しからも芝居の感化著しいと思はれる。（勿論、本文の構成にも、脚本の感化があらう。）●丁數。此の底本、一より十まで。一ノ表、扉の繪半丁、妓と男衆。本文はその裏より。序跋なし、或は之を闕くか。年號等勿論無し。版元も不詳、但し、京阪かと思はれる。●柱、下に丁數のみ。

○當世爰かしこ　　御無事庵春江　　素言書　　安永五年正月刊

●小本一冊。●青表紙三方截。●雜（當時安永初めの風俗に關する記事多し。其他市井雜事に亘る。花柳の事もあり。小説体ならず、一種の韻を踏みたる雜文。）●丁數、自序三。以下追丁にて、本文

三十三ヰまで。三十四ゥは奥附。挿繪、八ノウ九ノオ。十七ノウ十八ノオ。廿六ノウ廿七ノオ。凡て素言(或は云)書の落款がある。此の素言、作者春江、共に不詳。●柱、下に丁數。●此本、全丁輪廓なし。(以上既述の數本は、特に謂はざる限り、凡て、一重のカコミを、半丁づつ)とりをるものと知られたし。以下亦同樣。)

[備考]此本、天明頃の再刷奥附變更本がある。此の再刷本に至り、本膳亭坪平の叙を別に添へてゐる。(卷頭二丁分)。それによつての天明頃の本かといふたのである。即ち再刷本、坪平の序、如左。

序

筆をとれバ物かゝれかねを持バためんとを思ふ春の朝に福壽草の黄なるを見ては莞而笑をふくみ秋の夕邊に懷で空を愁てハ怛然而あくびを催す花に啼うぐひす餅の折詰水に住鶯のなべ燒の旨を味ふもいきとし生者いづれかよくをおこさざりけるこゝに書林某紙屑かごの底をさぐつて小冊の古を尋て新しき序を需余是笑曰是所謂洗濯じゆばんに半襟與袖を新にするが如しアヽ欲なる哉〳〵と言てよくなひ序を著こそ茶の如し

本膳亭坪平題 [印]

奥附の相違は、共に安永五丙申年正月吉日とはあるが、版元を違へる。此の再刷求板本は、本石町四丁目大横町(以上を肩に)堀野屋仁兵衞板、とある。(初刷安永本は、江戸大傳馬町三町目、鱗形屋孫兵衞版である。此の初刷本を見つけて、これには、坪平の序がないから落丁だとか又は後刷だとか若し謂ふなれば、全くのうらはらである。

○瓢　金窟　烏有主人　挿繪ナシ　安永五年ト云

●小本一冊。●論議（大坂新町の沿革を述べたる漢文の戯文体。）●丁數、自序一、別に本文七丁半。●柱、下の表に、丁數。●此本、毎丁輪廓なし。（此稿底本、蜀山人の自筆影寫本と思はるゝ物に據る。稍、竪長の形なれど、小本型也。奥附、年代等なし。安永五年とは、新修小説年表のいふ所、恐らくは、その年代ある刊本あるならん。但し、蜀山人當時、此の刊行本既に珍本たりしは事實であらう。無論大坂版であらう。漢文にて、所々俗訓を振つてゐる。此の底本影寫本の最後に、蜀山の識語と覺しく、「右、瓢金窟一篇印行本有之、両巴巵言史林殘花と同時代歟」とあれど、若し安永五年の刊本ありとせば、此の推定は余りに古く、誤りであらう。

聞きはつり　無知菴　挿繪無落款　安永五年臘月序

●小本一冊。●表紙茶三方截。題簽、當話問答聞はつり　全。●雜（遊里に交渉なし。當話問答と名にある如きもの。例へば、△松かざりを焚て左義長とは如何。○火消の荒ばたらきを鳶といへるがごとしと二行づつ、二百二十一辨を收めてゐる。口合指南の「穿當珍話」を洒落本に入るとすれば、內容上からも、亦洒落本の部であらう。新修年表に、所收なし。）●丁數、自序、序の一より三表まで。三裏は本文のはじめ。但し此の半丁、本文の丁數以外、即ち序の三也。以下、本文別丁にて、三十六表まで、その裏、奥附。以上三十七丁。但し三ノウ四ノオ、挿繪一ありて、此の四の一丁分複丁、よりて誠は三十八丁、通計四十一丁。末尾の裏半丁は、奥附、當話問答集二編　近刻、などの豫告ありて、書林　江戸木挽町四丁目　大坂屋喜右衛門版とある。○柱、全く無地。丁附は、ウラの綴目の眞中に、「問答一」などとある。此本、全丁（挿繪を除き）凡て輪廓なし。●飜刻本、雜藝叢書第一。（但し、奥附を缺く。）

○郭中掃除　福輪道人　無落款　安永六年正月刊

●小本一冊。●論議を兼ぬる小說吉原。（祖禮・三猴・一輿の遊輿。終りに、郭中掃除制談の吉原振輿論を添ふ。三人遊びの形、「雪月花」の亞流也。●丁數、自序二。本文別丁にて廿五、次ギ奥附半

丁。別に、七と八との間に、半葉分、挿繪を入る。(此の挿繪の形式、畸形也)●柱、下に丁數。●稀に見る、小ぶりの文字に成りたるもの。此稿底本、天の余白、甚し。〔奥附。郭中經濟録　繼而出ス(以上、一行)安永六丁酉年正月(以上、一行)東都書肆風流堂梓(以上、一行)とある。〕

○娼　妃　地　理　記　　道蛇樓麻阿(喜三二)　　無　落　款　　安永六年季冬の跋

●小本一冊。●元表紙、茶。題簽、子持輪廓。隷書。全などの文字なし。●論議(「華里通商考」同様、これは主に、吉原各町を、地理書めかして物し、挿繪に、その地圖らしきものを工夫して添へたるものである。戯著。小説体に非ず。)●丁數、扉一ノオ。一ノウより三ノオまで自序。三ノウ、月本國の景、口繪。以下追丁にて本文、四十三まで。自跋、四十五(二丁分)まで。九ノウ十ノオ。十五ノウ十六ノオ。十六ノウ十七ノオ。二十三ノウ廿四ノオ。廿八ノウ廿九ノオ。卅一ノウ卅二ノオ。三十六ノウ三十七ノオ。挿圖。●柱、上に娼妃、下に丁數。●複製本、稀書複製會第四期。

〔備考〕此の本、口繪、月本國の景半丁を色刷にしたるものあり。製本中本型、天がたゞ廣し。無論再摺改裝本である。版の粗悪なる事、一見して肯づける。

○當　世　虎　之　卷　　田　螺　金　魚　　無　落　款　　安永七年春の序

●中本一冊。●表紙、茶。題簽、契情買虎之卷　完。子持の輪廓である。●小説吉原。名作として虚名を賣り、數摺數刻せしもの。誠に、後の人情本風の濫觴としては、文學史上、とにかく功績多し。●丁數、自序、一半、(次のウラ半は、余白。)綱目、一(以上、追丁にて序一より序三まで。)以下本文、別丁にて、四十四ウまで。別に、○やぼに示す傳授事二丁、四十六ウまで。但し此底本、なほ不完全ならん。誠は、更に、此の傳授、廓言葉などある筈。底本は、初刻本の再摺三摺なりや、再刻本の再摺三摺なりや不詳。がとにかく、流布本、此の傳授事を全く欠くもある。尙、初刻本初摺の題簽は、或は、當世虎之卷であつたかとも思ふ。即ち契情買虎之卷の題簽本は、或は、初刻本なりとも、その再摺ではなからうか。(底本、本文の初めには、當世とらの卷とある。)挿繪、本文七

ノッ八ノォ。●柱、下に丁數。●飜刻本、帝國文庫、人情本下。此の飜刻本には、末尾、廓言葉數十行がある。此の帝文本の底本を初刻なりとせば、此稿底本は、再刻本か。或は再摺、末尾闕丁本か。「瀬川が亡魂」の如しである。ちよいと目に着く異同は、帝文本、綱目の、第五、「瀬川が魂魄」が、本稿底本では、「瀬川が亡魂」の如しである。(「虎の巻」の異刻本一册、本稿底本以外に、發見。此の本、三刻本か再刻本か不明。が本稿底本の後らしいその体裁、叙同樣綱目は縮めて、序二の裏半丁に收む。やはり、瀬川が亡魂。以下本文第一丁。本稿底本に比して、文は同じなれども、字を詰め、漢字を殖し、丁を儉約、以下四十三、やほに示す傳授迄。但し廿六ノ七一丁あれば、誠は四十二。即ち序二とも、全四十四丁也。挿繪七ノッ八ノオ。本稿底本に似て描線拙し。)

○三　幅　對　　無學堂大醉　　無　落　款　　安永七年正月序

●小本一册。●表紙、茶。●小說吉原。(魚づくし青物づくしなどの文章の趣向あり。終りに擬めりやすの鎹子(きやす)がある。やはり三人遊びの形式である。)●丁數、序二丁半、ソノツギ裏口繪。以下本文別丁にて、三十五丁。挿繪、十ノオ、三十五オよりウラへ東天紅の景色。●柱、無地、下に丁數。●此本に限り毎丁、輪廓なし。本文、初め十四字位一行、六行半丁。本文途中の、戲手紙は、八字位一行、五行半丁。

〔備考〕此本、新修小說年表に見ざるもの。所在の明らかなるもの、恐らくは家藏本の唯一か。家藏本、嘗て石川氏複製本の一となりたるもの丶底本。●複製本、石川巖氏の筆謄寫版刷のもの。

○美　地　の　蛎　殼　　蓬萊山人歸橋　　挿繪無落款　　安永八年春序

●小本一册。●小說深川。深川本名作の一。かねて歸橋の傑作也。●丁數。自序二、本文、別丁三十一半。三ノッ四ノオ。十五ノウ十六ノオの挿繪二圖。圖凡てよし。●柱、無地。丁數は、裏の綴目の下。●飜刻本、德川文藝類聚第五、洒落本。

○廻覽奇談深　淵　情　　楓　某　　無　落　款　　己亥(安永八年)望春旦序

●中本一册。但し本文には、前篇とあり。されど、後篇は、未刊ならん。●表紙茶。題簽、廻覽奇談深淵情、子持輪廓あり。●雜(遊里小說の變態。遊女を天女に擬し、遊里も羅廓島・平安島などといふ。滑稽本の安永三年の「和莊兵衛」、同八年の同後篇などを、摸倣したるものか。その洒落本化ならん。

●丁數、序一半、以下追丁、前書の類いろ〳〵、上の七丁まで。（即ち上の七丁一丁、複丁。）以下本文は、第七丁より始まり、四十九まで。但し十一、三十五二丁になほ複丁あり、されば誠は、五十一丁、上の七一丁とも通計五十二丁也。上ノ七ノウ、十二ノウ、各半丁づゝ、挿繪あり。前者は、天女風の遊女、琴を彈ずる繪にしてよし。●柱は、無地。丁數は、ウラの綴目の下。

○呼子鳥　　鷺烏亭　　挿繪ナシ　・　安永八年春の序

●小本一冊。●小説品川。（但し品川八景に山下八景を添へたり。）●丁數、自序二。以下品川八景の本文、別丁にて一より十四。やました八景の本文、別丁にて、一より廿三。廿三ノウラ、最尾に馬喰町二丁目　伊勢屋吉兵衞板とある。●柱、無地。ウラの綴目の中央に丁數。此本に限り、每丁輪廓なし。

○南(なん)客(かく)先生文集　　路錢　　春章書　　安永八年。ト云

●小本一冊。●小説品川。（服部南郭の南郭と南廓、それに南客ともじりたるものならん。標題、格別面白し。）氣の利きたる事夥しき本也。●丁數、自序一丁半。ソノウラ余白。本文別丁一より三十四丁半。但し一の前に、挿繪ヒラキ即ち一丁分あれば、計三十五丁半、通計三十七丁半也。本文第三十五丁目裏不詳（即ち最尾）、恐らくは余白ならん。●柱、無地。丁は裏の綴目の下。

○女(お)鬼(き)産(みやげ)　　無氣しつちう　　豐章（歌麿）書　　安永八年正月刊

●小本一冊。●雜（決して遊里本に非ず。寧ろ役者物也。極樂の印文を盜みたる閻魔の野心、その印文を奪還すべく、折から極樂に行つてゐた中村野鹽（のしほ）の苦心、といつたものである。何處かに、田沼時代の諷刺があつて、次掲の「飜卯盲目」など、共通同型のやうな臭がある。●丁數、序一、以下追丁にて、本文、二より三十七丁表まで。同裏奧附。奧附には、書肆、江戸橋四日市廣小路　竹川藤助版、石町四丁目　和泉屋幸次郎版。筆耕　高砂町隱士　鼎峨書とある。月日は、安永八己亥

年春正月吉烏である。挿繪は、五ノウ六ノオ、女裝した野幫が、六道辻の茶店媼（角が生えてゐる。）に、地獄の道を聞く圖。これに、豐章畫の落款がある。十二ノウ十三ノオ。六道辻茶店媼の亭主たる、閻王のお手醫者山井養仙に手を引かれて、閻魔の前にお目見えをしてゐる、野しほ、嬌羞を粧つてゐる圖。此の二圖共によし。野しほの描線、役者紋を衣に描いて、歌麿の初期、こゝにも役者の似顏畫ありの反證になる。歌麿文献の一材である。（第二圖目には、落款がない。落款は、前圖のみである。が同一畫家の手に成つた事、謂ふ迄もない。）●柱、下に丁數。

●芳(ほう)深(しん)交(こう)話(わ)　穴　好　無　落　款　安永九年初春序

●小本一冊。●うすき靑表紙。題簽は、子持輪廓にて、芳深交話　全。●小説芳町。（男色物の一。）●丁數。自序二、本文追丁にて三十一ウまで。但し、七ノ上、七ノ下ありて、（一丁余分）通計、三十二丁也。挿繪、七ノ上ウ七ノ下オのヒラキ。本文、序者（作者）の穴好（これも無論、斯道から來た變名）をまた人物の一人として入れをるなど、一興。自傳的形式、當時としては、却つて新しきかに思はれる。洒落本を、体驗派の小説の唯一のものとする所以、こゝらからも立論せられよう。●柱、無地。丁は、ウラの綴目の下。

○風　流　仙　婦　傳　時雨庵主人　義　明　書　安永九はつ春の序

●小本一冊。論議（吉原の內情を主にして一般嫖兒の心得、敎訓に觸れたり。山崎宗鑑の娘と稱するもの、仙婦となり、それへ若輩訪ねより、お談義を聞くの体也。小松百龜の半紙本五冊「魂膽遊嬋窟」と同想に近し。）●丁數。序二、本文三十八。三ノウ四ノオ、挿繪。●最尾ノ裏、奧附となりて、古今野鐵砲　全部五卷　近刻（一行）江戸名物史　近刻（一行）　板元　江戸橋四日市　竹川藤助（一行）、本所柳原五丁目　半田屋源三郎（以上にて四行）とある。

○當世眞似山氣登里　大香先生門人 上戸庵　無　落　款　安永九子太郎月序

●小本一冊。●雜（二人の田舎者の江戸淺草見物に假りて、田舍者の端的素朴、田舍の戀を挿話に出し、都會との對照を烈しくしたもの。遊里の臭少し。寧ろ滑稽本なり。但しかゝる田舍者の傍若無人なる、觀察と生活とを覗かせて、江戸人の讀者の興味を繋がうとした（でなくとも、異つた興味を提示しようとした）所は、後の「田舍芝居」や又は「田舍談義」などの傾向と均しく、他日、文壇に地方色の描寫を馴致せしめる一原由。遊里洒落本にも「輕井茶話」などの傾向あると同じく、これは、それらと相通じて、しかも却つて都會の眞中に田舍者を投り出し、活躍させてゐる點、異色である。後の滑稽本の「舊觀帖」の形であらうか。似た山氣どりは、此の種田舍者を指したのであらうが、（えせ都會通の意味であらう。）却つて、筆致は同情を持つたが如きものである。●丁數、自序二。本文、追丁にて、廿五表まで。挿繪一、五ノウ六ノオ。●柱、無地。丁數は、裏の綴目の下。

○見脉医術（あだほだ）虛辟先生穴賢（あなかしこ）　京都　福隅軒　挿繪ナシ　安永九春序

●半紙本一冊。●藍色、模樣光澤（つや）出し表紙、三方折込。題簽、右の如く、下に全。子持の輪廓。但し、黃いろく色をつけてゐる。●論議。（醫術に、名前だけをもじりて、その實醫臭全く無く、色街臭のもの。うつかりすると、醫者の本だと、ツブシになりさうなもの。花車、妓婦、ゲイコ、タイコ、中居、亭主など、一々先生の道粹に、診斷を受ける。その診斷の小わけは、凡て一種の色道論議である。純然たる洒落本。）●序、一丁半、その裏余白。以下追丁にて、本文二十二。●柱、下に丁數。●版元不詳、京版なる事明らかである。

〔備考〕此の本、あらゆる年表書目類になし。新修小說年表の、滑稽本洒落本凡てなし。新群書書目、勿論無し。京版洒落本滑稽本として、藤井乙男氏「江戸文學研究」（單行本）中にも無し。蓋し珍。

○貧幸（かよう）先生多佳余宇辭（たかようじ）　不埒山人　無落款　安永九年春序

●小本一冊。●元表紙、うすき青。●小說品川。●序二、以下追丁にて三十六了。七ノウ八ノオ挿繪。●柱、無地。丁附は、ウラの綴目の下。●續刻本、江戸文藝資料第一、但し挿繪なし。

豆男の三部作補遺

豆右衛門後日女男色遊の第三卷を發見した。漫畫家宮尾しげを氏の好意による。左に目錄と內容梗概とを紹介しておく。これで自分の記述は、完全となつた譯である。

三之卷。石の鳥居も腎虛する祇園の花見女（都の色を一見する二軒茶屋、親はないか三人子持の品ものめ、世帶は互に持あひの女房。）妾を岡崎の腰より下屋敷の樂ミ（庭前の花又とならびの內義樣、慰に涎をながす牛の×細工、命のせんたくにかいあそび）出す水宿酒の馳走は女房共が哥一首（家主のむす子が鼻毛をよむ哥自慢、もがり分別ねりつけた伽羅の油屋、心底は割てもしれぬ竹の筒持せ）女夫が下心あけて惜しき長持の蓋（手代も思案にあたはぬいひかけ、思はぬ恥辱に顏の赤ふなる丹波者、手にこらぬ百兩のかね〳〵の巧）

祇園の花見で見つけた美女、子供二人を連れてゐる。聞けば、三人の男に共有せられる妻。買ひ出した銀子の都合で、他の二人の男に七年間共有の契約、そのあとは一人（甲）の妻と決るのである。そこに一寸、貞操帶のやうな記事がある。今夜から他の乙へ替つてゆく、その甲に身替る豆右。魂返してみると、乙がすでに迎ひに來てゐた。甲は俊寬のやうに足ずりして跡に殘る。（第一、石の鳥居云々）○四十の內外で金銀持つた樂隱居、それに本妻と妾三人がゐる。樂隱居、節制に注意してゐるに拘らず、時日經て、其の身も熱などさし出、足も冷えて心地すぐれず、三人の妾もつわりの苦しみ、どうして孕むものだと不審がる。それには豆右の換魂が働いてゐたのである。（第二、妾を岡崎の條。）

○ある油屋の腹の惡い亭主と、同じ仲間の、此間御所方から歸つた歌よみの女房、つゝもたせで、家主の悴を仕かけようとする。その晩、家主の悴は、奸策を見拔いて、謠ひ家へ遊びにゆく。目的持つた豆右、その夜、油屋の傍に潛んで、來る人を待つてゐると、誰か來た。それに入れ換る。亭主うま〳〵と罠にかけた氣で、二階から下りて、二人を長持に入れる。さうして家主へ掛合ふ。家主の妻驚いて、悴のために、百兩を持たせ、番頭と口きゝを送る。そのさなかに、當の悴が、謠家から歸つてきて、譯を聞いて怒り、油屋へ呶鳴り込む。亭主、人違ひなのに、大敗亡。長持の蓋を開けてみると、男は、自分母方の伯父、まんまと百兩の損をした。豆右、長持で死ぬべきをやれ〳〵と助かり、逃げ出す。（以上、第三、宿酒の。第四、女夫がの二回續きの梗概である。）

なほ此卷丁數、目錄以下追丁にて、三十五、但し十ノ二十あれば、誠は二十五丁。挿繪、五ノウ六ノオ、二十一ノウ二十二ノオ、二十七ノウ二十八ノオの三。

豆男の三部作補遺

豆右衛門後日女男色遊の第三卷を發見した。漫畫家宮尾しげを氏の好意による。左に目錄と內容梗概とを紹介しておく。これで自分の記述は、完全となつた譯である。

三之卷。石の鳥居も腎虛する祇園の花見女　都の色を一見する二軒茶屋、親はないか三人子持の品ものめ、世帯は互に持あひの女房。　妾を岡崎の腰より下屋敷の樂み　庭前の花又さならびの內義樣、慰に涎をながす牛の×細工、命のせんたくにかい出す水あそび　宿酒の馳走は女房共が哥一首　家主のむす子が鼻毛をよむ哥自慢、もがり分別ねりつけた伽羅の油屋、心底は割てもしれぬ竹の筒持せ　女夫が下心あけて惜しき長持の蓋　手代も思案にあたはぬいひかけ、思はぬ恥辱に顏の赤ふなる丹波者、手にこらぬ百兩のかね〱の巧

祇園の花見で見つけた美女、子供二人を連れてゐる。聞けば、三人の男に共有せられる妻。買ひ出した銀子の都合で、他の二人の男に七年間共有の契約、そのあとは一人（甲）の妻と決るのである。そこに一寸、貞操帶のやうな記事がある。今夜から他の乙へ替つてゆく、その甲に身替る豆右。魂返してみると、乙がすでに迎ひに來てゐた。甲は俊寛のやうに足ずりして跡に殘る。（第一、石の鳥居云々）○四十の內外で金銀持つた樂隱居、それに本妻と妾三人がゐる。樂隱居、節制に注意してゐるに拘らず、時日經て、其の身も熱などさし出、足も冷えて心地すぐれず、三人の妾もつわりの苦しみ、どうして孕むものだと不審がる。それには豆右の換魂が働いてゐたのである。（第二、妾を岡崎の條。）

○ある油屋の腹の惡い亭主と、同じ仲間の、此間御所方から歸つた歌よみの女房、つゝもたせで、家主の悴を仕かけようとする。その晚、家主の悴は、奸策を見拔いて、謠ひ家へ遊びにゆく。目的持つた豆右、その夜、油屋の傍に潛んで、來る人を待つてゐると、誰か來た。それに入れ換る。亭主うま〱と罠にかけた氣で、二階から下りて、二人を長持に入れる。さうして家主へ掛合ふ。家主の妻驚いて、悴のために、百兩を持たせ、番頭と口きゝを遣る。そのさなかに、當の悴が、謠家から歸つてきて、譯を聞いて怒り、油屋へ呶鳴り込む。亭主、人違ひなのに、大敗亡。長持の蓋を開けてみると、男は、自分母方の伯父、まんまと百兩の損をした。豆右、長持で死ぬべきをやれ〱と助かり、逃げ出す。（以上、第三、宿酒の。第四、女夫がの二回續きの梗概である。）

なほ此卷丁數、目錄以下追丁にて、三十五、但し十ノ二十あれば、誠は二十五丁。挿繪、五ノウ六ノオ、二十一ノウ二十二ノオ、二十七ノウ二十八ノオの三。

依托販賣書目

一、往復葉書にて御照會ありたし

▇特大判。○菊判。△四六判◎菊半截。

(以下和本)△開化浮世度々一っ藝者ごゝ逸。端唄糸の調。新作別品部々一其他。明治初期物二十二冊美本。拾圓。▇蕙齋、略畫苑(人物)色摺版よし。文政三年補刻の奥附。(補修本)参圓△魁武者部類芳虎畫。明治維新、會津仙臺戦争官軍賊軍人物資料。色摺繪本。三圓。◎京傳、奇妙圖彙(明治十七年新刻版)美本参圓○古今東京名所。三代廣重畫。明治初期東京風俗風景畫。色摺。二十枚畫帖風。五圓△畫本柳樽本七冊一括。十圓△よしこの花くらべ初編(嘉永六年京版)八十△滑稽發句類題集(川柳類聚本)文化十四年版三冊揃七圓○怪談雨夜の鐘卷一卷五合本(色摺繪入、妖怪物、一九校)貳圓五拾○墨僊畫(色摺初版、男女狂態集)粗八十▇薄紅葉(艶書体浮世草紙、享保七年版)元表紙元外題付卷三欠四冊揃上本四圓◎川柳叢書武玉川(外骨校)八十△おかげの拔作(お蔭詣りの摺物的冊子)文政十三年版壹圓五拾△繪本手引草(初代廣重色摺)初摺壹圓△西行法師一代記(二代種彦、初代廣重畫・安政五年版)八十△淀川両岸一覽下り船の部上下二冊揃(曉晴翁著、半山畫)色摺初版虫入参圓◎落噺初恵比須(文政三年版。旭文亭)壹圓△やまごゝろ(遊女敷島傳)鐘成編半山畫能畫多し色摺上本貳圓半◎痴婆子、和尚奇縁、富貴奇縁杏花天等支那小説七種十九冊拾圓△諸國合戦圖會(明治維新、會津戦繪本)壹圓△江戸名物詩(方外道人)美本貳圓△國芳雜畫集(初版摺)貳圓○傳神開手(北齋畫)壹圓○畫本魁圖會(英泉畫)初刷五十○あふむ石(聲色、綿繪表紙本)國姓爺其他三、壹圓△新落し噺(二代焉馬編。國直畫。嘉永三年版。繪入噺本、壹圓◎緋縮緬第一より第五まで五冊揃及び俗謡集附(和紙謄寫版)松田俊編六圓△以毛圖流(改卷第一輯より第五輯まで)五冊合本壹圓五拾△(以下洋本)新選繪入西鶴全集石川編(諸艶大鑑)一冊貳圓○世界に於ける日本人(渡邊修二郎)美本五圓△御伽草子(今泉定介、畠山健)二冊揃壹圓半◎伯林夜話(小山内薫)美本貳圓△繪本南總里見八犬傳(明治版、大川屋)厚冊二冊揃壹圓半。△當世書生氣質(春のや朧)(明治二十二年合本七版)四圓半△生殖崇拜論(久保盛丸)初版美本拾貳圓△藤簍冊子(上田秋成作、宮崎三昧校訂)八十○南總俚俗(内田邦彦)壹圓八拾△春(島崎藤村)初版本壹圓貳拾△春(小栗風葉)初版春陽堂版三冊揃貳圓八拾△日本音曲全集(中内田村両編)小唄端唄歌澤の部新本一冊特製貳圓半△新從吾所好花街編(二石川校)帙入壹圓半△性慾と我等が文化(ブロッホ原作、鷲尾浩譯絶版)美本貳圓半△生殖器機能障害論(ヒユーネル著、鷲尾譯)壹圓半△北齋改名考(桑原羊次郎)六拾▇浮世繪之研究第一第二揃二冊(日本浮世繪協會編)貳圓半◎獨寢(柳里恭)石川巖校訂八拾。

寄贈紹介

●桃太郎の研究　金田晴正著

桃太郎説話の起原、赤本桃太郎、黄表紙桃太郎などの、作年表さその解題。圖版多く挿入。桃太郎本の小さい作ら纏つた類纂として、好著。(四六版五二頁。價、五〇)大阪市南區日本橋南詰南入、公立社書店)

●歌舞伎道一夕話　五十澤二郎著

一、役者の言葉。二、役者の話など。役者の言葉、は、就中面白く、古名優の隻句を引いて、それに就て藝道の批判を下してゐるのである。役者の話は、主に古名優の逸話篇。共に風變りな芝居研究物、そこに著者の個性が滲み出てゐて、面白い。雜話叢書の第四篇(大判和紙和裝。約百十頁。價二、八五。東京市牛込區東五軒町二十七、發藻堂書院)

●目錄

清水源泉堂主催の、三月七日入札の「浮世繪目錄」。歌麿などに逸品多し。製版佳頁。(菊判圖版數十頁入、非賣品。)

二(一月號)風俗○繪態資料。(三月號)江戸時代文化○繪態資料○江戸往來○やなぎ樽研究○川柳雜錄○北隆館月報○東京新誌○浮世繪○東海の女性○史學○長唄○歌舞伎○紙魚○民俗藝術○民謡詩人○藝術通信○風俗研究○墓碑史蹟研究○國語と國文學○國學院雜誌○歴史と地理○集古○本道樂○文獻第四輯○日本文學講座第十五卷。

著者より

本月の稿洒落本の書形的研究は豫想より數倍の量となつた。今姑らく御辛抱が願ひたい。緒、自分記錄した右原本に就て、異同があらば、主に異本に就て、一々御教示が願ひたい。洒落本現在、明確書名數の約四百の半數位は、開稿に成り得ると思ひます。尚、開稿に[illegible]れなかつたものは、原本を見てゐないのだから、御藏本に依つて補遺の御教示が願ひたい。以上御願(三月二十八日)

定價表		
一冊	金拾五錢	郵稅貳錢
六冊分	壹圓四拾錢	郵稅共
十二冊分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割増の事

○照會は返信料添付の事

昭和三年三月二十八日印刷
昭和三年四月一日發行
(貳拾五錢)

禁轉載

名古屋市[illegible]
編輯兼發行者　尾崎久彌
名古屋市[illegible]
印刷者　芙比貞造
名古屋市[illegible]
印刷所　扶桑社
名古屋市東區[illegible]町一五七番地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

昭和三年三月二十八日印刷 江戸軟派研究 第二十二冊 定價貳拾五錢 送費貳錢

昭和四年五月一日發行

尾崎久彌著

第二十三冊
（通編第六十八冊）

徂春秘事

驛をおりた。二人とも高下駄を穿いてきた。傘は持たない。空は曇つてゐた、降りはしない。この邊も、昨日、夜へかけて降つたと見えて、ぬかるんでゐた。海を心がけた。急に、廣い視界を占めた畠、その中に一筋、路の續くへ出た。菜の花が一面に、兩側に咲いてゐた、臭が烈しい。生温い風が知らぬ間に吹いてゐた。「潮風ね」と、高下駄をコト〳〵させて、腹一杯吸ふやうに相手は云つた。手に持つたオペラバックの皮が、つるりと光つた。

菜の花や海見えずして風強し

餘程歩いた。小さな祠があつた。それを取りまいた松の木立の切れ目から、白濁つた海が見えた。二人で見る海といふ氣がした。ザク〳〵、濱の砂地へ出た。午后四時頃の光を受けて、海は、干滿の分らない程、搖れてゐた。村の若者たちが、貝をいろ〳〵と漁つてゐた。魚籠を覗いた。男は、まて貝といふものを始めて知つた、相手が教へてくれた。男は、下駄の前齒が、「何度も、すり減るのを苦にした、匠べりで、それでも春日らしい、慵しい日暮の光を浴びて二人が寄添つてゐると、丁度二人に見せる餘興のやうに、村の子供達が、劍劇の眞似をしてゐた。

がて、それも散つて行つた。

鍬をもて貝とる人や岬とほし

海曇るまで貝とるを見てゐたり

暮の雲、濱は二人の隱れがぞ

暮れかゝつたので、町へ入らうとした。往きとは異つた路をとつた。草が兩側にむさくろしく伸びて、その間に、水溜りの多いのがあつた。裸馬を鎭めてゐる或る男が、あつた。相手は、それでも女心の優しさか、男に、しつかり寄り添つて歩いた。後ろから馬蹄の音、さつきの男が、路の傍をよつて、驅けて行くのだつた。それが見えなくなる頃に、急に、蛙の、鳴聲が耳につき出した。旅思を唆るといつた心持、放浪性がうづいて、暴れ廻るのに困つた。本當に蛙の鳴聲――それも遠音は、旅に行け旅に行け、と、鳴いてゐるやうだ。相手にも、男の「詩」が分つてゐるやうだつた。

裸馬乘りゆく人や草一尺

月おそし蛙きゝきゝ町に入る

すき腹を、すき燒でごまかした。夫婦者で、妻が在所へ用あつて歸るのを、途中まで見送つてきた、子供もない呑氣さ、といつた風に胡麿化した。酒場の女中は、お泊りなさいませ、親戚たと申して、お泊めしますというた。食べあらしの鍋が、クツ〳〵いつてゐた。障子を開けた。すつかり日は暮れた。近くの工場の寄宿舍の灯が、棟を並べて光つてゐた。遠くの畷を越した森陰に、一つ二つ、灯が瞬いてゐた。淋しい。星も出かゝつた。このまゝ行つて、またいつ歸つて來るか。相手は、ぢきよ、一週間程よというて、自分にも氣休めのやうに、いうた。さういひながら、それが堪へられぬと見えて、しつかりと愛撫を求めた。下では、町の青年の、女給のお客が二三人きてゐた。女中は、暫くたつても上つて來なかつた。――丁度、階下は、西洋料理の、道具建も疎らな酒場。階上は、三間ほどあつて、すき燒に出來てゐた。一間毎、襖は、釘づけになつてゐた。時々、こゝを塲處にするといゝわと、相談してゐた。

離れ村灯のともりたり田舍宿

驛の階橋を渡つた。渡るものは此の二人よりなかつた。男は、入場券を買つてゐた。すぐあと十分計りで來る反對の方向へゆく汽車で、歸らねばならなかつた。相手の方の汽車が早く來るのだつた。階橋の上は、暗かつた。一二分、靜止してゐた。――ベンチによりそつてゐたが、男の間着のマントで隱してゐた。相手の汽車が來た。乘らねばならなかつた。

二分後、男は、見あいた田舍の驛の、花見時の諸々の廣告を、再び見ればならなかつた。(了)

寄贈紹介

愛書趣味(三ノ三)○讀書標(十七、十八)○(以下凡て四月號)道頓堀○文藝○演劇藝術○國語と國文學○本道樂○川柳鯱鉾○シネマ王國○民俗藝術○北隆館月報○國學院雜誌○風俗研究○墓碑史蹟研究○民謠詩人○歌舞伎○やなぎ樽研究○長唄○紙魚○藝術通信○文獻(以下五月號)墓碑史蹟研究○國語と國文學。

著者より

本冊も前回の續き、これでゐてまだ天明期の若干と、寛政以後が殘つてゐる。○表紙の三と四、二面とも廣告にした。それも此の月刊冊子永續の爲である、諒恕ありたい。○上欄は、此頃の白日の夢看過々々。(廿五日)

定價表

一冊	貳拾五錢	郵稅貳錢
六册分	稅共 壹圓四拾錢	
十二册分	同 貳圓八拾錢	

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和三年四月二十八日印刷
昭和三年五月一日發行
(貳拾五錢) 送料貳錢

名古屋市東區車道東町百五十七番地
編輯兼發行者 尾崎久彌
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者 英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社
名古屋市東區車道東町一五七地
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

洒落本の書形的研究（二）

――はじめ、天明以前の數種、補遺を掲ぐ。

○西郭觀燈記　快活道人　挿繪ナシ　寶暦（同七年刊カ）

●小本一冊。●題簽、一重輪廓太く、西郭觀燈記（以下破レ）。●雜（京島原に關する戲文俳句。初め、西郭燈籠記　快活道人撰として、島原の由緒論評の國文。次ぎ、罫を引きて、妓人行、觀燈篇、などの漢文。次ぎ、「談議過て戲の一興申ちらす」、とありて、太夫天神などを詠める句、最後に風水散人とある。）●丁數。燈籠記の國文、一より八。妓人行以下の漢文、九より十、及び無丁一丁分。句、十一より十二。以上、無丁一丁分を加へて、計十三丁。アト、落丁あるが如くなれども、類本なきを以て調べ難し。●柱、下に丁。●毎丁輪廓。漢文以下罫あり。

〔備考〕この本、書目年表等になし。寶暦七年カといふは、中、漢文「觀燈篇」の中に、丙子秋八月とあるが故、此の丙子、寶暦六年と見て、即ち翌七年刊かといふ也。

○浪花青樓志　寶暦九年二月序

●小本一冊。●元表紙、黄地に藍にて劒花菱つなぎの模樣。題簽、明朝体にて、子持輪廓、浪花青樓志　全。●雜（浪花青樓の一般沿革及案內誌。）●見返し、浪華青樓志と隸書体、黄摺。●丁數。序（樵漫題）、序一より序三。後序（子佾漁人）、此分のみ、罫を引き、丁數を打たずして一丁半。（その裏は、余白）。はしがきの如き和文、別丁一より八表まで（その裏は、余白）。目次、又別丁の一より七。本文又々別丁にて、一より四十四表まで。その裏、拾遺半丁。計六十四丁也。●柱、下に丁數。●毎丁輪廓あり。●飜刻本、浪花叢書、風俗篇。

〔備考〕此本、後、改題「廓中一覽」。

裏に貼る。伎道俗説辨（かぶきぞくせつべん） 前編 五冊 近日出來（以上、一行）明和六年丑十月（以上、一行）書榮堂 本町四丁目
伏見屋清兵衛口（以上、一行）とある。清兵衛の下の、印形は、右、陽にて、清兵衛、左、陰にて、即ち
白ヌキ、之印とある。此の書榮堂伏見屋清兵衛と、同じく書榮堂、人名の違ふ、此の「伎鑑」よりは
二ヶ月の後にある純洒落本、「郭中奇譚」の奥附、本屋吉兵衛との異同又は關係、及び「郭中奇譚」の
跋者の淡海先生と、此の「伎鑑」の淡海三麿との同人異人辯は、なほ一考したい。（「郭中奇譚」の項參照。）
即ち以上、總丁數、見返し半●奥附半以外、六十七丁也。（「一筆碥史」の、此本丁數の計算は、誤れり。）●柱、下に丁數。但
し、五十丁以後は、その中央に、市、中、森など、それ〴〵にある。●毎丁、輪廓がある。余白の
半丁分も、輪廓だけは、摺つてゐる。

○蕩子筌枉解　　茶釜散人　　挿繪ナシ　　明和七年庚寅六月刊

●小本一冊。●元表紙、三方折込の茶表紙か。題簽、底本破損の箇處あれど、蕩子筌　絶句な
るが如し。子持輪廓。●雜（唐詩選の枉解物。唐詩選の詩をその儘とりて、これを吉原氣分に解釋
したるもの也。）●丁數、序（陶鐵房（テッホウ）撰ス）二、以下別丁にて、本文、一より五十七まで。跋形式の
もの（茶釜散人）別丁にて、一より二表まで。その裏、奥附、明和七庚寅六月、日本橋通三丁目　京
屋吉兵衛とある。惣計六十一丁。●柱、下に丁數。●毎丁、輪廓あり。

○甲驛新話　　風鈴山人（蜀山人）　　春章畫　　安永四年秋刊

●小本一冊。●小説新宿。●丁數、馬糞中咲菖蒲述とせる序がある。印に、上、丸形に甲州。下に
角形にて、道中とある。此序、序一より序二表まで。序二ノ裏は余白。此の序（とは斷りをらず。）
のみ、罫を引く。次ぎ自序無丁一より同二表まで、そのウラヒラキ春章畫口繪。ソノウラ目錄。以
上、無丁分三丁。以下本文、別丁一より三十八丁表まで。（但し第三十八丁は、丁數なし。）そのウ
ラヒラキ、跋、文末に安永乙未秋、新甲館藏書とある。以上通計四十三丁半。●毎丁輪廓あり。●

柱、無地。ウラ綴目の下、甲序一、又は甲一。●翻刻本、新百家説林第二。

○北遊穴　知　鳥　　松壽軒東朝　　久　豊　畫　　安永六年正月刊

●小本一冊。●小説吉原。●丁數、自序二。追丁にて本文、三より三十九表まで、但し第十七丁の一丁分缺丁。なれど文意は續く。三十九裏は、奥附、安永六年(一行)丁酉正月　日(一行)神田鍛冶町貳丁目(一行)池田屋傳兵衛(一行)。即ち誠は、序以下全三十八丁也。挿繪、七ノウ八ノオのヒラキ　●柱、上に、ア、下に丁數。●序以外、毎丁輪廓なし。

[備考]この本、新修小説年表等、外題を誤つてゐる。即ち外題を北極としてゐるが、序にも北遊(ほくゆう)とあり、本文はじめの角書も北遊とある。以て諸書の誤りを訂すべし。

此本の板木使用本。なほ此の「穴知鳥」の板木の大部分を、使用、再摺した補足再摺改題本がある。それは、「通志選」で、世滿里南鐐撰、天明年間版といふものである。即ち、「穴」の本文第十丁オから第三十丁ウまでの、第十七丁缺の二十丁分は、全く通志選に同樣、同一版木である。滑稽な事は、第十七丁の缺まで、其儘である。即ち通志選は、序及び目錄の三丁と、追丁にて本文の初め即ち四オより九ウまでと、本文第三十一丁(その裏で、通志選終)と、計十丁分を改刻してゐる。(序文も挿繪も全く更へてゐるが、本文は、大体に於て、「穴」と似通つてゐる。)即ち通志選は、「穴」の補足再摺改題本である。(此の事の記錄、一切他に無し。)

○役　者　穿　鑿　論　　戲場大通菴　　無　落　款　　安永六年夏序

●小本一冊。●元表紙、青。●雜(役者物。當時名優の傳と各人の評語。)●丁數、自序一丁　但し、一と二ノ四とありて二丁分。)以下追丁にて本文、五ノオより(中、五ノウの半丁分、五代目團十郎の像を描く口繪。)四十一ウまで。團十郎より富十郎に至る。●柱、下に、丁數。●毎丁輪廓あり。

●翻刻本、演劇文庫第三。

〔備考〕この本、年表に收錄せず。

○家暮長命四季物語(やぼてうめいしきものがたり)　蓬萊山人歸橋　潮(湖ノ誤カ)龍齋畫　安永八年春刊

●小本一冊。●小說踊子(茅場町の中宿で、其附近に巣を食つた踊子を呼び、舟で山開に赴くの筋。三升の作つたといふめりやすなどを入れて「會話練達、頗る氣の利いたもの也」)●丁數、自序四、本文別丁にて三十一丁、別に跋一。計三十六丁。●柱、無地。丁數は、綴目、裏の下。●每丁、輪廓がある。●外題の、家暮長命は、鴨長明のもじり。家暮の長命といへる、茅場町の、土地でも知らぬ藪醫者。此の長命宅へ連中が來て、そこで町藝者を呼び、つひ山行の相談を決めるのである。●飜刻本、江戸時代文藝資料第一、洒落本。

○驛者三友　秩都紀南子(平秩東作ト云)　無落欵　安永八年頃刊カ

●小本一冊。●小說新宿。●丁數。序一ノオより序二ノウまで。但し序二ノオは半丁分全部挿繪。即ち序の丁正味は一丁半。本文別丁にて、一より三十一まで、惣計三十三丁也。●柱、無地。丁數は、ウラの本文末行のスグ左り下、一(又は二)。但し序の二丁、及び最尾の第三十一丁、丁數を打たず。●此本に限り、每丁、序以下、輪廓なし。

〔備考〕此本、新宿穴學問と同本也、その元摺原題也。「穴學問」本は、此の驛者の序の初め、(第一丁の表第二行目)を削り、驛者三友とあるを削りて、穴學もんと、同じく四字を埋木し、且つ、驛者三友の挿繪(序の第二丁表半丁)を削りて、その半丁分に、驛者三友の序の第二丁裏の末文(署名迄とも四行。)を、遡らせて、此の第二丁表に摺り、第二丁裏は、余白となしたるもの。全く同一版木也。即ち、穴學問は、後摺改題たる事、論なし。●尙、此の驛舍三友、安永八年頃とは、文中、平賀源内の「矢口餘日」の噂あればである。即ちその興行當時、遲くも、翌年の同九年春刊かといふのである。

〔備考〕「穴學問」、一名馬糞夜話といふと。然らば、此の三本結局同一にして、しかも「馬」と「驛」と

は、先後何れか、未考。なほ、穴學問として、飜刻本、德川文藝類聚第五、洒落本がある。

○大通人好記　在原持麿　無落款　安永九年睦月刊

●中本一冊。●雜（塵劫記に准へたる、遊里本。）●全追丁にて、序（持麿）、一より二表。目錄、二裏。首書目錄、三表。次ぎ、大數の名の事より以下本文、三裏より十八裏まで。十九一丁分、蝶淇仁雄世和の跋。その跋の最尾、新吉原大門口蔦屋重三郎版。●柱、上に人好、下に丁數。●每丁、輪廓あり。

〔備考〕この本を眞似たりと思はるゝ艶本、「色道算開記」なるもの（作者不詳）、翌安永十年に出でたり。前半、酷似せり。

○空來先生飜艸盲目　腐脫散人　無落款　安永九年刊カ

●中本一冊。●茶表紙、一重の輪廓細く、文字、右の如く、下に完。●雜（平賀源内の歿後、地獄落に材を假り、かねて、田沼の失政を諷刺したるもの。但し中に大通の論などあり「夢枕通人之寐言」の前編。）此本、年表は、滑稽本に入る。寧ろ洒落本に入るべし。又、年代も後編の天明元年より推して、此物、源内の歿後、安永九年ならん。）●丁數、序一、本文別丁にて、廿九丁半。二ノウ三ノオ、挿繪。●柱、下に丁數。（尚、此本、國學院雜誌昭和三年三月號の拙稿「洒落本系の時世諷刺作に就て」を參照。）

○役者新東名鑑　東櫻齋　挿繪ナシ　安永九年初冬刊

●小本一冊。●雜（役者物。新刀銘鑑に准へて、役者の系統及び位附を示す。明和伎鑑の武鑑擬ひと好一對のもの。）●丁數、自序一より二。本文追丁にて、三十五ォまで。三十六ゥは、江戸[illegible]品定奥見せ大評判役者三家柱　全部三冊　作者江鍾の豫告。次ギ半丁、奥附。于時安永第九庚子の（一行）初冬吉日（一行）板元　千本藤七。とある。●柱、上に新東、下に丁數。●每丁、輪廓あり。

○金枕遊女相談　間拔安穴　無落款　安永年間刊

●小本一冊。（稍天地ひろく、巾また大。）●論議（一般遊里。但し、懇丹丸なる假作賣藥の能書の如き体を爲せるも、誠は女郎藝者に與ふる全盛流行の秘傳書也。船宿など丶あれど、深川とは限らず。且つ初めに、調合所 今川登参上通身揚待（京都三條通身揚町の意） 間拔安穴製。（取次所は、會サ家。得戸とあれど、こは、懇丹丸を京仕込の如く洒落れたるまでにて、此本、江戸版なるべし。）●丁數、序一（以下追丁にて、（或は、此間、本文第一丁落カ）二ノ表は扉やうの繪、懇丹丸の看板衝立、（此外に、繪らしきものなし）。此の繪、無落款也。）二ノウより本文、三十一ウまで、三十二の一丁は、跋形式のもの、署名なし。（丁は、最後、三十二丁とある。）凡て假作のものにて、作者名等なし。本文は、第一、客の氣を取事、以下主に女郎の身についた樣々の心得など。其他、禁物、懇丹丸之傳授、藥方などがある。一種の擬作として、風變りのもの也。●柱、無地。丁數は、ウラ綴目の中央に、遊女序一（又は遊女二）。

［備考］懇丹丸は、無論、魂膽をもじつたので、「魂膽總勘定」の如き普通、諸分・策略の意を、賣藥の如く假作したのである。やはり、此本、魂膽物の一と謂ふべしである。

○大通多名於路志　閑言樂山人　無落欵　安永年間刊

●小本一冊、●元表紙、三方截の茶。●論議遊里（命題の如し。大通人となる方法を說ける也。作風、「傾情智惠鑑」の前半と似たり。或は、雲樂山人と同一人か。）●丁數、自序三、追丁にて、本文四より廿一まで。跋（署名なし）、廿二オより廿三ウまで。計廿三丁。挿繪、十ノウ半丁分。本文初め、諸もどきに節つけしたるもの也。●柱、下に丁數。●序以下、毎丁輪廓がある。

○良夜 靜搔　藍川風通　無落欵　安永年間カ

●小本一冊。●雜（韻を含みたる文にて、北里四季風俗を書き流したるもの、會話等一切なし。小說体を爲さず。但し、全体に頗るしやれたる感じ也。）丁數。序二、（此の序に、藍川、風通と、角

と圓の印形あり。本文、別丁にて、三十三にて了。計卅五丁。本文三十三ウの末尾に、錦袖餘香(そでのうつりか)追而出來全部一冊の豫告あれど、未刊ならん。挿繪、三ノウ四ノオ、廿七ノウ廿八ノオ。●毎丁、序以下、輪廓なし。●柱、下に丁數。

〔備考〕此本、年表は、年代未詳の部に入るも、体裁内容より見て、此の安永期に置く。

○本　艸　妓　要　　巫山　陽腎男先生　　無　落　欵　　安永年間と云

●中本二冊。●元表紙、青みを帶びたる厚表紙、三方折込。題簽は、本艸妓要と隷書体。子持輪廓也。●版元、上卷見返しによれば、玉脂軒とあれど、假名なり。下卷の扉貼紙に、浪華書林と眞中にありて、右に、天神橋通内森町、西澤　正本屋利兵衞。左に、太左衞門橋通周防町、西澤　正本屋利助、とある。即ち大阪版也。●上卷は、漢文体にて、妓品。下卷は、國文にて、大通多奈於路志に略体裁同じく、通の論議。●種類、論議(遊里)●丁數。上卷(但し上卷下卷の記入なし。姑らく、此の分を上とす。)叙(承露主人題)、一より二、但し二ノウは余白。叙(腎男陽自叙)、別の一より二、但し二ノウは余白。以下追丁にて凡例、三より四。目錄、五ノオ五ノウ。六妓の附圖、六ノオ六ノウノ半分、アト余白。本文、七ノオより十六ノウまで、太夫。天神。白人(ハクジン)。藝子(ゲイシ)。賤妓(ケンタン)。惣嫁(ソウカ)の六妓。各妓、[主治]、[審擇](シンヤク)、[集解](シッカイ)に分れ、全漢文に洒落のめしたり。上卷の柱は、上に、表裏に亘り、本草妓要、その下の表に、叙、凡例、六妓附圖、太夫などの文字。下に表裏に亘り、一(又は二)。毎丁、下卷は、叙等なし、直ちに本文。即ち、漂遊總義と題する和文、初め謡もどきに節つけあり、文体も謡もどきにて、腎男の色道講釋に入る。丁數、一より十二まで。柱は、上卷と同じく、唯、上(うへ)よりに、表に、叙等の代りに、漂遊總義とある。

〔備考〕此の本、小說年表には、安永年度に入る。若し然りとすれば、江戸版の大通多名於路志と、

特に下卷の形式相似たり。両者何れか摸倣かと思はれる。但し、上卷、腎男の序の終りには、交喜甲戌歳陽月望腎男陽書二干燕讀堂一とある。此の交喜は、康熙をもじり、且つ合歡の快にかけた洒落、その下の甲戌に、此の叙の年代（延いては、此の本の年代）を仄めかしてはゐないか。即ち、此の甲戌を、此の叙作成の誠の干支とすると、甲戌は、寶暦四年の甲戌、文化十一年の甲戌とよりない。即ち安永年間といふよりも、更に遡りて、此の寶暦四年ではなからうか。聖遊廓の同七年よりも古きものといふのである。一考ありたい。●なほ、此本に、後摺本あり、上下二冊合本、又は、上下を三冊に分本したのもある。

○舌講油通汚　南陀伽紫蘭（窪俊満）　春町書　安永十（天明元）年春刊

●小本一冊。●論議遊里（半可通却つて野暮に劣る、一々事例を擧げての通論也。）●丁數。序二、本文三十一。挿繪六ノウ七ノオ。●柱、無地。丁數は、裏の綴目の下。●毎丁、輪廓がある。●飜刻本、江戸文藝資料第一、洒落本。

○かよふ神の講釋　通野意氣　無落款　安永十（天明元）春刊

●小本一冊。●論議遊里（神道の講釋に擬し、その實、色道論。己惚高慢の辨より理窟なしむちやの辨に至る五辨也。前本と殆ど同内容。）●丁數。序（通野意氣）一より七ノオまで。七ノウ又七ノオ、口繪（神官擬ひの男、講釋の体。机上に、湯呑と鈴とある。前に、聽者四。）。凡例半丁（又七ノウ）。本文、追丁にて、八ノオより二十五ウ、終。（跋なし。）惣計、又ノ七を入れて、廿六丁也。●柱、無地。丁數は、裏の綴目の下。●毎丁、輪廓がある。

○通仁枕言葉　蓬萊山人歸橋　無落款　安永十（天明元）春刊

●小本一冊。●三方截の茶表紙。●小説深川。（歸橋の實感多く盛られたるが如し。）●丁數。自序一より二。本文、追丁にて、三より三十三表まで。但し、下六、又十五の二丁分余分にあり、即ち

惣計三十五丁也。挿繪、五ノウ六ノオ、四人男、團欒、噂話の体。此書、よし。●柱、無地。丁數は、裏の綴の下。●序以下、毎丁輪廓がある。

○夢枕通人之寐言　能樂山人　無落款　安永十（天明元）年春刊

●中本一冊。●元表紙、三方觀の茶。元題簽、一本に、夢枕○○とあるを見たり。即ち本文には、寶船通人之寐言とあるも、これを本外題とする所以也。●雜。（前掲、「飜艸盲目」の後編にして、一種の際物的諷刺作。平賀源内の極樂行に假りたるもの。勿論田沼氏失政の諷刺の迹、歷然たるもの也。かねて當時の風俗、主に大通に對する批評がある。純洒落本味また多し。）●丁數、自序一より四、目錄五ノオ。五ノウは余白。本文、別丁にて、一より廿五、但し、十四ノ五一丁あるが故に、誠は廿四。通計廿九丁也。挿繪、本文四ノウ五ノオ。●柱、下に丁數。●毎丁、輪廓あり。●拙稿、「洒落本系の時世諷刺作に就て」（國學院雜誌昭和三年三月號）參照。

〔備考〕此本、一切の年表書目、いかなる部類にも見當らず。傳本稀なる故か。けだし際物作のせゐであらう。

○ひろふ神　本膳亭坪平　無落款　天明二年春刊

●小本一冊。●雜。（純洒落本には非ず。さりとて、年表の如く、滑稽本に入るべくも非ず。京傳、坪平二者の各店報條の類を集めしもの。一說に坪平を京傳の門人とするは如何。出自殆ど同時代、唯、兄事したりと見るべし。）●丁數。書林なにがしの序、無丁數にて、二丁分。本文、別丁にて、一より廿六表まで。報條類、坪平の作、八。京傳のみは、京傳先生作とせり。坪平を京傳門人とするは、此等より出づるか。）の作四。不明三。挿繪らしきもの別に無けれど、菊まんぢう　壽のじやきに、暖簾に描かれた福助がある。二十二ウの部分である。●版元、本石町四町目大橫町　堀野屋仁兵衞。●丁數、ウ綴の下、但し、廿一以下は、二ノ一、二ノ二とある。●毎丁、輪廓がある。

○通神孔釋三教色　唐來三和　歌曆書　天明三年正月刊

●小本一冊。●元表紙三方截の茶。●小說吉原。（大神、孔子、釋迦三聖の遊興。大阪版寶暦の聖遊廓（雪月花）の換骨なる事謂ふまでもなし。）前座、三聖遊近。後座、青樓雜談の二に分つ。●丁數、序形式のもの、一より三。本文、別丁にて、一より四十六まで惣計四十九（外に奥附半丁）。挿繪、十ノウ十一ノオ、うた曆書。●版元、蔦屋重三郎。●柱、無地。綴のウの下に、丁數。序の部分は、口ノ一など、ある。●飜刻本、向陵社本の洒落本輯第一。

［備考］此本、後摺本多し。寛政期の刷ならん。

○柳巷訛言　朋誠堂喜三二　戀川春町畫　天明三年正月刊

●小本一冊。●雜、吉原に材を藉りたる小咄本。小咄本なれど、例外として、洒落本に扱ふ。）●丁數、序（和久良）、口ノ一より口ノ二。本文、一ノ表より廿八表まで。中、挿繪、五ノウ六ノオ。廿ノウ廿一ノオ。廿八ウより三十ウまで、朋誠堂の跋。計三十二丁。外に奥附半丁。●版元、四日市上總屋利兵衛、通油町鶴屋喜右衛門。●柱、無地。丁數は、ウ綴の下。●毎丁、輪廓あり。●飜刻本、賞奇樓叢書二ノ二。日本名著全集滑稽本。江戸軟派全集洒落本集第一（但し此分、後摺本に據りたるもの。）。

［備考］此の本、後摺本ありて、これには、本文一ノ表小咄一、及び廿八表の小咄一。計二話を如何なる故か、削りて、全くの余白（輪廓のみあり）としてゐる。

○滸都洒美撰　志水燕十　書家不詳　天明三年正月刊

●中本一冊。●元表紙、三方截の茶。題簽、太き一重輪廓にて、滸都洒美撰　完。●雜（娼妃地理記の續篇にて、琴三味線のもじり。吉原廓內、各樓、遊君の評判を物す。上欄に、提灯に紋樣ありて、各妓の名を擧ぐ。月本六玉川などの洒落たる挿圖もある。）●丁數、燕十の自序、一より二表。

四方山人の序、二ウより三オまで。菅江の序、三ウより四オまで　喜三二の序、四ノウより五ノウまで。凡例、六ノオより七ノウまで。本文、江丁國右川之名產、○額勢郡より、別丁にて、一ノ表より廿九まで（但し、十五下の一丁分複丁。）。大意（耕書堂主人述）三十表より三十裏の四行目まで、アト、半丁の余白は、奥附。後編錦妓諸雅（琴共書畫のもじり）なる豫告あれど、未刊。惣計、三十八丁也。本文、ヒラキ挿繪の他は、凡て、上欄に提灯ありて、妓の紋を分つ。十五ノウ十五下オ、六玉川のヒラキ挿繪。●版元、蔦重。●柱、無地。ウラ綴の下、丁數。●毎丁、輪廓ありて、天地の線は、表裏に亘る。

●複製本、稀書複製會第四期第廿二回。

○愚人贅漢居續借金（ぐにんおごてゐつゞかりがね）　蓬萊山人歸橋　無落款　天明三年春刊

●小本一册。●小說深川。（題名は、五人男五ッ雁金のもじり。此作、体驗的小說の代表作、赤良（蜀山人）、燕十、菅江、雲樂、歸橋御自身、の五人を描き、富ケ岡八幡の境內の角力見物總つて、仲の町の松江やへ入る。それよりの遊興。一々章を分けて、燕十屏風の中、雲樂屏風の中、歸橋屏風の中、とある。（菅江赤良は、割合に、大人しかつたと見えて、章には擧げてゐない。）即ち、發端とも計四章である。とにかく、當時の名作者が、實名で現れ、その遊興をそのまゝ小說に物したのは、近世文學の上では、先づ類例がないかと思ふ。とにかくこれを度外にするも、好個の短篇は爲してゐる。●丁數、自序三。以下追丁にて本文、四オより三十三オまで。後序（志水理町齋（燕十））、三十三ウより三十五オまで。三十五ウは、余白。即ち惣計三十五丁。挿繪、本文六ウ七オ。●柱、無地。丁數、ウラの綴目の下。●毎丁、輪廓あり。

○傾情知惠鑑　雲樂山人　無落款　天明三年春刊

●小本一册。●論議遊里（女郎に示す手管の數々也。それを一々、二階をせかれた客を遣り手若者に隱して上る法などゝして示す。前半に、假作人物遊女やみ雲の素性を說きたる戲文あり。）●丁

數、志水燕十の序一「以下追丁にて本文、二ォより廿七ゥの三行目まで。(但し中に、八丁複丁あり。)跋(忍岡うた麿)、廿七ノゥ四行目より、廿八表まで。廿八ゥは、滸都洒美撰、通扇與の豫告。及び、耕書堂の名。總丁數、八丁の複を入れて、廿九丁。挿繪、無落款にて、第二の八ノゥ九ノォのヒラキ。●板元、新吉原大門口　耕書堂蔦屋重三郎板。●柱、上に、○。下に丁數。●毎丁、序以下輪廓がある。

〔備考〕此本、一に傾情手管知惠鑑といふは、歌麿の跋に、此の名あるが故である。本外題は、傾情知惠鑑であらう。

○大　通　紀　山(さん)　寺(じ)　　南癸羅法師　　挿繪ナシ　　天明三年春刊

●中本一冊。●年表には、滑稽本に入るれど、洒落本として可也。大通人好記など、異にして、しかも同類也。種類は、雜なれども、軟味多し。諸事を、山號(併せて寺號)にもじり、その山寺の緣起めかして物せるもの。初登山學問寺の如きは硬ければ、色遊(いろゆ)山(さん)六文じ、×澤山不掃(け)じなど、怪しからぬ。●丁數、自序、一より三ノ表。目錄、三ノゥより四ノォ。本文、四ノゥより「三十ゥまで、內、十八複丁ありて、十七を缺く。しかも文意は、續けり。即ち計三十丁。●柱、無地。丁數は、ウラの綴の下。●毎丁、輪廓あり。

○野暮通人狂訓彙軌本紀　　島田金谷　　挿繪ナシ　　天明四年正月刊

●小本一冊。●元表紙、三方截靑。元外題は、一重輪廓にて、右揭の如く、下に全。●雜(市井の雜事より、魚市、芝居、文學の士の品評もあり。狂歌師には、作者には、淨るりには、の如し。作者は、喜三二、春町、全交を擧ぐ。浮世繪は、春章、清長、湖龍、哥麿。深川土橋の遊里にも觸れてある。一種の、散文詩体。)●丁數、序(四方山人)口一より口三ノォ。口三ノゥは、余白。序(口唐　出鳳臺　讓談撰)別の序一より序三ォ。序三ノゥは口繪。以下別丁にて本文、一ォより廿一ォ

まで。跋 中原屋東作——平佚東作の事か。）廿一ゥより廿四ォまで。自跋（島田金谷）廿四ゥより廿六ゥまで。●柱。無地。綴ゥラの下に丁數。●以下、毎丁、輪廓がある。●複製本、謄寫版として、嘗て、石川氏本出でたり。（此の複製本。自跋を闕く。）

［備考］なほ。此の本、再摺。年代を削りたるものがある。即ち四方山人序の天明甲辰の天明の二字を削りたるもの、寛政に入つての再摺本であらう。なほ。本稿の底本、表紙裏即ち見返しに、題號及び此本内容を示せる文字がある。左にその体裁を示す。

島田金谷先生著（右一行）、口唐出鳳臺先生校（左一行）不構翻刻 上の右左を受けて、下の一行）。滑稽狂訓彙軌本紀（大さく、一行）。次、細字にて、左の文字、全五行。

此書ハ日本橋魚市の勢ひふきや町芝居大入の滑稽（一行） 新よし原の全盛立引の意味等をうがち世の傷屈（一行） 儒者の片意地になづんて其學にうむうれひを（一行） 除かん爲に先生智惠袋をひらき野暮通人に（一行） 至るまで眠をさまし自ら人情を解す敎訓の小冊也（一行）

○二日醉巵輝　萬象亭　政演（京傳）畫　天明四年三月刊

●小本一冊。●小説深川土橋 梅川忠兵衞に、仮作す。始めに、脚本体のもの二丁半あり。）●丁數、自序以下、追丁にて、自序、一ォより二ノオ。口繪、二ノゥより三ノオ。次ぎ、三ノゥより五ノゥまで、本文初めの脚本体。六ノォより本文、三十丁の次、跋一ノォまで、但し廿一丁複丁。跋（泥田房）、「三十一丁目を跋とす。」跋一ノゥより跋二ノゥまで。惣計、廿一の複丁とも三十三丁也。●柱、無地。綴目ゥラノ下に、大入　一などゝある。●本文初めの脚本体のものを除き、凡て序以下、毎丁輪廓がある。●飜刻本、徳川文藝類聚第五。及び、賞奇樓叢書二ノ四。

○甲驛妓談角雞卵　月亭可笑　無落款　天明四年春刊

●小本一冊。●元表紙、三方截水色。題簽、竪長の角題簽にて、甲驛妓談角雞卵 全の文字その左の下に

ある。太き二重輪廓にて圍む。●小說新宿。●丁數。序（花山道人）、序一ォより序三ノォ。序三ノウより序四ノォ、口繪。序四ノウは、卽ち半丁分、目品。以下別丁にて本文、一ォより三十四ウの一行目まで。アト後編昔浙談語（未刊であらう。）の豫告。●柱、無地。綴ウの下、丁數。初め、角序一など。後、角　一など丶ある。●飜刻本、江戸文藝資料第一、洒落本。

〔備考〕右の角雞卵は、「青樓玉語言」（文政五年版）の凡例によれば、玉詒言と同樣、尾張藩士の花山亭笑馬の作の如くである。但し此の角雞卵、本文には、月亭佳笑編、花山道人閲とある。果して花山の作であらうか。それとも二者同一か。角雞卵の、花山の序には、遊友月亭のあるじ、とある事はある。

○銚　子　戲　語　　　信陽（しなの）大飯喫（おゝめしくらい）　春　好　畫　　　天明四年春カ（或は天明五年正月）
註鍋

○小本一冊。●小說吉原。●丁數、自序、一ォより二ォ。二ウは、口繪、圓形の中に、各樓屋根の遠見、百菴の句がある。以下本文、別丁にて、一ォより三十一ウまで。次ギ、東方朔　八千歲親類なる跋、跋一ォより跋二ォまで。跋二ウは、不詳。底本、奥附またなし。挿繪、一ノウ二ノォのヒラキ、春好の畫、路洲・芳丸の両人、土堤を漫步の圖。●柱、無地。綴ウノ下、丁數。但し、序の二丁分のみ、柱ノ下に、丁數がある。●序一丁半は、罫を引き、他は無い。凡て每丁、輪廓がある。

〔備考〕此の本、年代を天明四年春としたのは、中に、「ことしのくさゞうしの大通の山入や」云々と、新板の品評があり、且つ前年天明三年は、大飢饉であつた、その爲か、この序、皮肉にも、大飯喫と匿名にし、しかもその印形に、南鐐三片、米五升とあるからである。大通山人は、鍋町の袋入〔二卷合一冊〕の「大江山大通山入」の天明四年版をいふのであらう。卽ち此の黃表紙を正月の版とすれば、稍遲れて、此の洒落本、その年春の版であらう。遲くとも、天明五年正月版ではあらう、と見るのである。

○殘　座　訓　　鈍九齋章丸　無　落　款　　天明四年五月刊

●小本一冊。●元表紙三方藏青、貼外題文字岱赭、殘座訓　全。凡て唐本風。●雜（天明の飢饉を取扱ひ、時政を諷したる如き作。作風は、宵床庵主が、若者哥之介に、いうて聞かする体、即ち談義風也。諸諧級の相を論じたるが、凡て米の高値の惱みを說く。●丁數、自序一丁、本文三十丁、計三十一丁。本文第一表、半丁分、人物半身（即ち宵床庵主）の口繪。本文三十丁裏は、奧附、狂歌ひとり相撲、狂詩七才子、敎訓力足踏止傳の近刻豫告。中、ひとり相撲は、出來とある。年次、天明四年甲辰五月、版元、繁榮堂とある。●毎丁、輪廓がある。

○和　唐　珍　解　　唐來參和　　挿繪ナシ　　天明五年初春刊

●小本一冊。●元題簽、一重輪廓にて、和唐珍解。●小說長崎丸山。（變り物の一。）●丁數、菅江序一丁半、四方山人序一丁半、計三丁。本文は、別丁にて、四十三丁。自跋、第四十三オより第四十四オまで。第四十四ウは、奧附。計四十七丁。挿繪ナシ。●版元、耕書堂蔦重。●柱、無地。丁數は、ウラの綴の下。●菅江（此本は、漢江）序と、本文と、罫がある。四方山人の序のみ、罫なし。

●飜刻本、德川文藝類聚、洒落本。

○無　駄　酸　辛　甘　　千差萬別　　白　壁　書　　天明五年初春序

●小本一冊。●雜（吉原通ひの舟中、當時の流行事物、役者俳諧歌人、料理、女郎の品評、凡てに亘る。中に、京傳妹黑鳶式部などの悅巾合（手拭合）に對する評もある。因みに、此の時に出た、手拭合は、嘗て稀書複製會より複製本も出た、誠にしやれたもの。●丁數、自序一（罫あり）、本文別丁にて、十六、但し又四の一丁あれば、誠は、十七。萬象亭の跋二　罫あり　計廿丁也。挿繪は、四ノウ又四ノオ、三人舟中の圖。白壁書。●柱、下に丁數。●毎丁、輪廓がある、●飜刻　、德川文藝類聚、洒落本。

○息子部屋　山東京傳　自書　天明五年正月刊

●小本一冊。●茶表紙三方截。題簽は、一重の輪廓で、息子部屋　完。●論議遊里。●丁數。跋（戀川すき町）、序ノ一序ノ二。自序、序ノ三。以下追丁にて、目錄、四ノオ。口繪、半丁分四ノウ。以下本文、五ノオより五十オまで。五十ウは、繪本客衆氷面鏡全一冊、出來（一行）山東京傳作 北屋政演畫 耕書堂 白鳳堂 合板（一行）。左に、天明五年乙巳正月（一行）通油町（一行）耕書堂　蔦屋重三郎板（一行）とある。挿繪、十二ノウ十三ノオ。廿一ノウ廿二ノオ。廿八ノウ廿九ノオ。卅六ノウ卅七ノオ。●柱、無地。丁數は、綴目ウラの下。

〔備考〕二世蓬萊山人の「青樓心得草」（安政四年版）は、この息子部屋を全くそのまゝ剽竊。（挿繪の圖柄を多少更へ、序文を變ふ。）中本に改刻したものである。

尙、此の本、介子洞房といふは、この四字を、ムスコベヤと訓ませ、現に、すき町の序には、此の漢字を用ひてゐるからである。

○客衆肝照子　山東京傳　自書　天明六年正月刊

●小本（稍、竪長し）一冊。●三方截茶、題簽、一重の輪廓にて、客衆肝照子　完。●雜、遊里（遊里、妓いろ〲と客いろ〲と其他船宿女房などを描き、その出の姿と、裏に、そのせりふを書きたるもの。一葉に繪、その繪の傍らに、解說、裏に、そのせりふを書く。一個の遊里風俗資料。）●丁數、尻焼散人（抱一と云）序、ロノ一。富藏序、ロノ二ロノ三。自敍、ロノ四オよりロノ八オまで。ロノ八ウは、三和の句。以下別丁にて本文、仕着振袖出、より。此の本文、一オより十九ウまで。跋、別丁にて一オより二ウまで、羅月述。次ぎ半丁、表紙へ貼りて奥附、計廿九丁半。●柱、下に丁數。●每丁、輪廓あり。●飜刻本、帝文の京傳傑作集は、問題にならず。石川氏校の「三都洒落本」の中。複製本、稀書複製會第三期。此の複製本よし。

○人遠茶懸物　一撫齋　不詳　天明六年春刊

●小本一冊。●雜（眼なしの人物、しやれた繪本物。年表は、滑稽本に入るれど、酒落本として取扱ふ方、寧ろ可。）●丁數。自序、丁數を打たずして二。以下本文、一ォより廿ォまで。廿ゥより廿一ォ、以美散人の跋形式のもの。廿一ノゥは、奥附。京傳の指面草の廣告と、書林、仙鶴堂 鶴屋喜右衛門の名。計廿三丁也。●版元、鶴喜。●柱、下に丁數。●複製本、稀書複製會、第一期の中。（但し此の複製本は、二ノゥ三ノォのヒラキ一圖を除く。別に大したものにあらず、間男を本夫が押へたる所、宿屋飯盛の賛也。）

○寒暖寐言　呂佶　百喜畵　天明六年八月序

●小本一冊。●雜（大阪を中心とせる世相一般の論評。）●丁數、序（脇道可話志）、一。追丁にて、序（蘭范）、二ォより三ォ。百喜畵半丁、三ゥ。本文、四ォより十六ゥまで。寒暖寐言陳（跋形式のもの）、十七ォより十八ゥまで。計十八丁、●柱、中央に、○一（又は二）。●毎丁輪廓あり。蘭范の序は、野を引く。●複製本、石川氏謄寫版物。

○むだ砂子　多羅福孫左衛門　無落款　天明六年仲秋序

●中本一冊。●元表紙三方折込黃土色、題簽は、子持輪廓にて、むだ砂子 全。●雜（年表は、滑稽本に入るれど、「大通紀山寺」同樣、酒落本に見るべし。江戸砂子のもじりにて、正月の里、稲荷山、雑村ゲ崎などより、日町の里に至る、十二ヶ月物に寄せて、しかも案内式に作りなす。處々、遊里的文字あり。風俗資料也。）●丁數、自序第一丁、以下追丁にて、目錄第二丁。本文は、第三丁表より第廿八丁表まで。第二十八丁裏は、的物日待草、通俗文選、通碁之石文、の豫告あり。挿繪は、四ノォ。四ノゥ。各半丁づゝ。●柱、上に、砂子一宮、下に、丁數。●飜刻本、日本名著全集江戸文藝之部滑稽本。

○福神粋語録(すごろく)　萬象亭　無落款　天明六年十一月廿日の夜序

●小本一冊。●小説吉原(七福神物の一。七福神の遊興に假る。)●丁數、序(天竺老人――萬象亭と同人なり。)、一。以下別丁にて、一ノオロ繪、作者と版元の面談の体。自序、一ノウより四ノウまで。本文、五ノオより廿六ウまで。後序(月地門人、狐面堂柳郷)、別丁にて、跋一オより跋二ウまで。計卅九丁也。別に、版元伏見屋善六の戯作目錄を添ふ。●版元、伏見屋善六。●柱、下に丁數。●毎丁、輪廓がある。

(備考)此の本、年代を天明六年といふも、序によれば、寧ろ天明七年春の出版か。

○總籬　山東京傳　山東けいこう畵(自畵)　天明七年丁未孟陬の序

●小本一冊。●三方截茶表紙。題簽、子持輪廓にて、總籬　完。●小説吉原。(例の艶次郎を主人公とし、黄表紙「浮氣樺燒」の後篇の如き体を爲す。)●丁數。文きやう序、ロノ一より二。自序、ロノ三より四。凡例ロノ五。以下別丁にて本文、一オより四十一オまで。四十一ウは、狂詩礎などの廣告。底本、此の次ぎに蔦重の洒落本類目錄二丁あり。●柱、眞中に、二まがき　一。丁數は、ウラ綴の下。但し、底本、本文第十九丁に限り、柱の文字なし。●飜刻本、帝國文庫十五、京傳傑作集。こんにやく本第二など。

(備考)この本、名作として、多刷せられたるものと見える。その証據、此の本の後摺本多し。本稿底本も、寛政度(即ち寛政二年十月好色本の禁の以前か。但しその以後、寛政八九年にも、版木を隱匿してゐて、摺つたか。)のものらしい。がまだ、寛政末の僞版らしいものには見つからぬ。

昭和三年四月二十八日印刷 江戸軟派研究 第二十三冊 定價貳拾五錢 送費貳錢

本文

尾崎久彌著

第二十四冊
（通編第六十九冊）

【依托書目】一應御照會の事。〔○半紙本。△中本。◎小本。〕△草双紙「倭文庫廣重」袋畫十五枚及び八犬傳犬草紙再摺本袋廿九枚計四十四枚壹圓參拾△白縫譚、妙々車、金瓶梅、時代鏡等草双紙袋(極美保存)十八枚貳圓△商賣百物語(噺本、文政三年版。初一丁欠)貳圓五拾◎知多萬歲(名古屋版)八拾○輕口臍順禮(東鶴著。繪入。卷一より卷三合本。)參圓△跡形容花競(草双紙風の芝居評判記、三代豊國畫極上摺。嘉永安政版)

雜錄

○從來の飜刻本の誤り

自分の飜刻本「洒落本集成」だつて、出たらどんな非難が出るかも知れないから、何ともいへないが、これ迄の分で、見當つた他人のアラを拾つておく。(全部、洒落本ものゝ。)

1、滑稽文學全集第五の「田舍芝居」は、これは、享和の後版によつてゐる。原本を見ぬから、何ともいへないが、再摺ではなく、再刻本によつてゐると思ふ。初刻は洒落本のもので、あつて、無論天明七年のものであるが、或は、再摺補享修かは知れないが、とにかく、和本は、序跋に於て異同がある。即ち天明版の自序、ほめ詞の口繪。

本は「…いなせこむなき耳にても」かれは上野か淺草か「であるか」、これは「いなせこむない耳にてを」あるべきで、初刻本はその通りである。即ち帝文は、明らかに僞版に據つたものである。

3、指面草は、帝文本の滑稽下が一ばんいゝ。此の底本は、初摺本である。此の本、再摺本は、奥附の鶴屋の名を削つてゐる。滑稽

など無い。この飜刻は、帝國文庫風來山人の方がよい。滑稽全集の解題は、洒落本「田舍芝居」の存在に一寸も觸れてゐない所など、不敵である。

2、帝文本「京傳一の志羅川夜船」は、底本が、再刻(僞版)本である。それは、初刻本と較べると、大体酷似してゐるが、一箇處ひどい違ひがある。「最尾の唄で、それが再刻

全集第六の物は、即ちこの再摺本である。最近の日本名著は、最もひどい。それは、再摺か初摺か知らぬが、跋全部を脱してゐる。几帳面な山口氏の校訂にも似合はぬこれで見ると、いゝ加減な連中の校合によるのかとも思ふ。

●會員募集●

英泉美人畫選集

(コロタイプ鳥の子紙摺・解說付)

五十圖選擇
會費未定

○五年越しの計畫を自費出版で實現してみたい。材料は、その後の家藏分と友人二三の分とから選ぶ。主に一枚繪、竪二枚續で、新出のしかも佳作を集めるつもり。バラで鳥の子印刷箱入にするか、又は、和裝本(半紙本型)にするかは未定。バラだつたら、半紙二ッ折の大きさ。どちらにしても、會費は參圓までとしたい。百口出來れば中止。御勸誘ありて「あぶな繪畫集」以上の申込に接したい。〆切本月中、小生の許へ。(お一人で、何口たりとも勝手也。)實行か否か、實行なれば形式會費など、來册發表。

新刊紹介

(寄贈を受けた分)

○歷史を創る人々 早坂二郎著 ムッソリニ、蔣介石、トロツキー、ガンヂー、クレマンソー、マクドナルド、といつた人々の評傳である。記述が平易で趣味豊かで寢轉んで讀んでもよきものだ。此方面の物としては、新しい思ひ付である。中西書房の處女出版。四六判四百頁以上。壹圓八拾錢。東京市小石川區大塚上町十五、中西書房)

○日本近世社會史の研究 尾池義雄著 大名の廢絶、浪人の發生、農民一揆、町人の實勢力、横暴な高利貸と武士の困窮など、生活に即した新しい見方で、我々からも趣味深い物である。好著(四六判、二百頁以上、壹圓五拾錢。東京市小石川區大塚上町十五、中西書房)

○日本文學講座 第十六卷(菊判・非賣品。東京市牛込區矢來町、新潮社)

○趣味講座四篇 名古屋放送局の發行、佐藤惣之助氏の詩話、江馬務氏の手拭、馬場孤蝶氏の煙草、及び小生の謎の歷史と四氏講を輯む。(四六判七十六頁、拾五錢。名古屋市西區南外堀町十丁目一、名古屋放送局)

(五月號)江戸時代文化(○以毛隨流つやなぎ樽研究三周年記念號○風俗研究○道頓堀○歌舞伎○變態資料○北隆館月報○川柳鯱鉾○國學院雜誌○都會詩人○墓蹟○東京新誌○民俗藝術○文藝時報○演劇藝術○シネマ王國○藝術通信○境地○民謠詩人○柳屋○集古○本道樂○浮世繪○紙魚○古本屋(六月號)國語と國文學。

著者より

次册で、改題しようかと思うたが、今二三册續ける。まだ續きがあるから。○英泉愈々實行してみたい。奮つて御賛助を乞ひたい。作つてみたいのだから、損も少しなければ、ぜひ行つてみたい。○此頃、子供全部が痲疹に罹り、弱つてゐます。(廿八日)

【正誤】三編三八一頁(吉原天秤の下)の上段末行、「しからむし」は全く「しくんし」の誤。

定價表	
一册	貳拾五錢 郵稅貳錢
六册分	壹圓四拾錢 稅共
十二册分	同 貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和三年五月二十八日印刷
昭和三年六月一日發行
(貳拾五錢)

名古屋市東區東道東町百五十七番地 稀書貳番
編輯兼發行者 尾崎久彌
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者 英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所 扶桑社
名古屋市東區車道町一五七地
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

初編二編三編摘三册四圓◎細長橫本 思ひよる日(書畫家忌日年表)薄葉上摺上本壹圓八拾△江都近郊名勝一覽(横本)初代廣重畫金水編安政五年版美本貳圓△栗毛側次馬初編(居亭春信作芳幾畫。末尾一丁欠)壹圓參拾△十六利勘略緣記(黄表紙風滑稽本、京傳作豊國畫)文化十二年版參圓五十△照葉狂言杓子定木初編(中井亘次郎編、芳瀧畫)繪入壹圓半。◎ふみしなん(一九序。三十一丁物)五圓。△(横本 嫩柳(本名、末摘花、[illegible]

柳樽と狂句

柳樽と狂句とは、無論違ふ筈である。柳樽側からは、狂句を卑俗なりとして嗤つてゐる。が結局言葉の遊戯が、それ專門であり、或はその程度が柳樽よりも冗くなつてゐるのが、狂句の全体だとは謂はないが、それが多いやうに、自分からは思へる。昔は、もつと此の混同が甚しかつた。柳樽の句集の中にも、狂句か狂句じみたものを隨分拾つてゐる。

借、私は、今嚴密に、此の両者に、截然たる區別を附けたり、今その比較論をしてみようといふのではない。繪本柳樽類の或物から、私が認めて難句と思つたり、又は繪圖を添へて一層面白いといふものを、その見當つたものを、こゝへ書き拔いてみようといふのである。最後に狂句本の一種からも。柳樽は、家藏本として、比較して冊數に於て纏つてゐる、恐らくはこれで完本かと思ふ「柳の栞」初編より五編の五冊本（種員撰、初代廣重畫。年代不詳）に據る。狂句は、これも廣重畫の「新撰狂句圖會」初編（風柳庵升丸、雜告亭夜宴筆記）に據つておく。此の両種の繪柄は、中々我々素人には、成程、繪柄によつて始めて句解を知るやうなものが多い。或は、意味は分つてゐても、その繪柄によつて、一層拍案的に了解するものも。それ程の繪柄を誰が工夫したかといふ事は、疑問である。例へば、種員撰のものでは、種員が一々、繪柄を差圖したか、全部はしなくとも、二三の難句か又は准難句に、彼が差圖したか。又は全部が全部、挿繪の工夫は、廣重によつたか。種員撰といふ撰の程度がである。如何なものであらう。恐らくは、その中の難句又は准難句は、撰者に問うたと見てよからうか。或は、當時、繪師の廣重すら、此等の句が如何なるものも難解ではなく、それ程に時代的一般常識であつたらうか。

偖、先づ「柳の栞」初編から、ボツ〳〵始める。自分の認めて難句又は、面白いと思ふものに限る。全部には觸れない。當時は、狂句も川柳も混同の多かつた例は、此本「柳の栞」でも、見返しには「狂句柳の栞初編」とあり、又序文にも、御丁寧にも、「……氏は柄井、通稱を八右衛門と呼、東都淺草新堀に住す、曾て滑稽洒落に富、俳風狂句の一体を興しゝに、雅號の柳虛からず（云々）」とあるが如しである。で、御本人では、此の「柳の栞」も全部狂句とも思ひ、又、聞き返したら柳樽だともいふのである。で、本來いへば、今日の常識的からは區別せねばならぬのであるが、今は、唯、原本に據つておく。なほ句の列擧は、原本丁の順序である。

船頭は何處へいつたか賓ぶね（これなどは、よく分る句であるが、七福神だけ乘つた繪を拵へるさ、一層面白い。成程昔から賓船の繪は無數であるが、さて船頭はゐない。七福神交代で漕ぐとしても、またつひぞ漕いでる所を見た事がない。春風に帆を孕んで、船頭不用と逃げるかも知れないが。）〇摺子木坊主雷盆を詠てゐ（富士見西行である。）〇大そうなほころびになる小夜衣（忠臣藏である。繪柄は、及傷の体。）〇かんざしは忠と不忠の間に落（七段目。忠は由良、不忠は九太夫。かんざしは無論おかるの物。）〇隣國をふんごしにする鏡磨（これでみるさ、鏡磨は、越前から來たのが多かつたのか。それとも句意は、外にあるのか。）〇兄弟の中へ寢るから中納言（行平）〇弟は江戸へ逃たと須磨でいひ（同）〇蛤が雀になると夜が明る（婚禮）〇吉野に旗をひるがへす施餓鬼船（太平記をかけてはゐるが、吉野は、吉野丸の意。狂句じみたものである。）〇鐘卷も金をまいたも紀伊の國（紀文の奢りの繪。句意は、道成寺と紀文。）〇極樂の雲も江戸から染めてやり（つまらない句だ。紫雲と江戸紫。）〇馬がおひ後見帝となるところ（鼻を高く描いてゐる、例の人体的迷信である。）〇道鏡は面中鼻で參内し（大威張だとか高慢ちきとか思うたら、誤解である。）〇於竹重年犬曰恐るせ（犬に椀の飯を撒く下女

お竹。重年とは、長生きしてゐたら弱る、けちだからなア、といふのではあるまいか。或は、勿体ないの意か。）○下女は又出て舂屋さんさめるにョ（これでみると、此の舂屋、當時余程精出すものばかりだつたとみえる。）○能衣十二年目にとうときれ（前九年役後三年役。）○蜆貝海へかくした二位の尼（この作者は、女帝だと思つての事か。）○三月と五月のような壇の浦（三月は平家方、五月は源氏方。）或は、平家の女官を三月、源平の武士を五月と見るか。）○忠のりが立つと櫻が丸くなり（花下、敷皮の上に跪坐する忠度の繪。丸くなりは、落花の跡をいうたのであらう。）○糸屑を惣菜にする當麻寺（中將姫）○安物の米うしなひは信濃なり（椀に山盛りで喰つてゐる。）○のりの場とは淺草でいひはじめ（淺草寺。海苔と法。）○辨慶が居ぬと靜をのせるとこ（大物浦）—以上、初編より。

雪の小便白猫のやけどめき（繪は、縁側に小便させる母親と子供。がこれなどは、子供では、やけどが小さすぎはしないか。）○石ずりらしい雪ぎへの東山（大文字。成程、大文字が無ければ、石摺の感じはない。）○天人あま下らず羽衣をうたつてる（天人、天下らずとは、天人は、敵妓。ふられ客が、徒然のまゝの謠 謠だから身分は、侍。）○永雨にギウのねもでぬ吉田町（夜鷹。）○みす帋で昔を思ふ下の闕（下げ髮の妓）○魚の名のむつ鮟鱇の御手料理 高尾の吊し斬られ。）○三ッ俣で今のことさと堀の舟（同）○月に芒はえぬ昔のうつくしき（小町）○七變化したは古今の立女形（同。古今は古今集）—以上、第二編より。

鎌倉の魚で袷が土の牢（初鰹。土の牢に護良をかけてゐる。）○翌日は織に居眠る女七夕（織女星を描く。）○でかいからヤダアと逃る麥畑（その繪がある。）○今戸出の姉さん子供等にわられ（今戸燒）○大手柄雀の辻で鷹をほめ（辻番の侍と、義士の二人。雀の辻は、仙臺屋敷の辻番。鷹は、義士。）○花の翌日息子返事にゆきくれる（親爺に叱られてゐる息子。）○山形も今は戸張で世帯じみ（姐さん被りをして張物をしてゐる女。）○美しい女房は後家の相が見へ。（この句と、蚊を燒てあとは其場の出來心、

その光景を描いた繪と共通にしてゐる。)〇角大師元のおこりは豆大師（この句、朝がへりなめたと見えて下女もすね、と共通にして、男眞中、その左右に女を描く。右の煙管を持つたが、お內儀であらう。)〇子の爲に二日は母も鬼になり（逃げる子供に、灸を据ゑる母親。)〇親達も引ずり娘餅に舂（この句、緣遠さ欲目で見ても片目なりと、共通にした繪。眞中に親爺、右におふくろ。左に、ツンとすました娘を描く。)〇瞽女が猫袋で諸國あるいてる（猫は、三味線。)〇札だけがありがた迷惑などゝ鶴（放し鶴。）—以上、第三編より。

さゝいな善根鳥指に南無阿彌陀（通りすがり、鳥さしにふりむく老人。)〇青樓へふける息子を餅に舂（傍に描いたは、駕籠と提灯。)〇義朝も初手は握てはたらかれ（內海の風呂場。)〇けしからぬ事梅干に種が出來。(この句、なけなしの水を茶呑が來てへらし、と共通に描く。即ち老人と、描かれたは左程婆さんでもない、横顏を見せた女。)〇二寸にはたらで大きな藜堂（淺草寺）〇二代目になつた忠女の初めいさ（鏡山のお初。)〇鏡山裏は湖水の天下一（琵琶湖の天下一と、鏡の裏の天下一。）〇ふてへ後家七日もたゝぬうちに泣（坊主と後家を描く。坊主のは精進の氣で後家をくひ、といふ句と並んでゐる。)〇命なりけり小夜更て水の味（醉ざめの水。)〇宿下り朝寢の蚊帳もかたはづし（御殿者の寢卷姿と、後ろに蚊帳の片はづし。)〇稲麻竹葦に取卷て娵の髮（髮結と嫁。それを見る一人の女。繪では、一人だけを描いてゐる。)〇花火からそれて上るも火焔玉（比翼ござ孝と不孝の中をぬひ、骨かくす歌女郎屋の禁句なり、などと共通。繪は、蚊帳を釣つた寢間、廊下を歩く妓。)〇灰よせにゆくが女房の燒おさめ。(燒に両褄をかけてゐるが、然し面白い句。)〇生水も死水もとるいゝ女房（これも面白い。美しい女房は後家の相が見えと相響く。繪は、前の句と共通で、丁稚を伴にした女と、それをまた手引きする女。背景は、田圃。)〇結構な御代極樂は外ならず（豊作の田を眺めてゐる百姓の二人。)—以上第四編より。

眞中は玉子左右は白髪うど（小町と人丸に赤人か。）○月よりも傘のさへたる物語（石山の月から來た、式部の源氏物語。）○辛崎を見て松風にかきかゝり（同じく式部の源氏。）○日に三箱ちる山吹は江戸の花（吉原と猿若町と日本橋。この圖が、この丁の全部。）○八郎は八反九郎蝦夷錦（但し繪柄は、義經と辨慶斗り。八反は、八丈嶋の謂であらう。）○別れの籬朝良へ露をもち（朝良は朝の良。繪は、背を叩く妓と、振返る客。）○をし鳥の未練をわらふ時鳥（いやな句。おしどりと時鳥とかけた斗り。句意は無論、後朝。）○ぢきにきいすと待駒をうつておき（屛風の外の妓。）○鷄があくびをしたと聾いひ（小咄にもある。）○りきまれて頭痛へひゞく馬の足（芝居、繪は、熊谷。）○松茸の直にしい竹はそりかへり（水牛紅閨と御局ひとり笑と、共通の繪。）○金玉の上で女狸產をする（亭主が八疊敷だからである。このやうな繪。）―以上、第五編より。

○

以下は、新撰狂句圖會初編よりである。（此本、序文、万亭應賀。嘉永二年己酉孟陽とある。さうして此本、大半作者を擧げてゐる。但し作者名なきもある。が、これは古來不詳の物の積りであらうか。）二階からお祭を見る居候　三重（句意は明瞭。覗く居候。）○朝まくの賊は千両とれぬ役　壽保（五右衞門氣どり。繪だけでは、大根も千両も區別はない。）○張良のやうに奈良漬出してやり（沓を差出す格好。）○瓢簞に睨まれ駒はあとじさり（秀吉と盛政。）○盆前の呵責劒の山へ逃（大山參詣。）○渡る手をしへ四ツ目にころされる　鵜芝（これは、四ツ目屋に關係なし。盛綱。）○公家の色事双方で六十二（つまらぬ洒落。三十一文字の相聞だから。）○市歸り杵をかつたでもちにつき（歳の市の歸り、半手桶を杵の柄に挾んで担つた男。）○こちの風なぞと女護の嶋でいひ（こちの人とこちの風とかけたつもりだらう。繪は、石に腰かけた女人。）○獨もの小僧三人だいてねる（寢姿。膝とで三か。）○船遊び神代もたぼをひとり入れ（寶船）。狂句圖會の方は、主に繪を添へる迄もないものばかりである。

英泉美人畫目錄（未定稿）

未定稿ではあるが、諸賢の増補を乞ひたいため、左に錄しておく。家藏を主にして、二三氏の藏品を參照した。左揭の内の枚數未詳の分、即ち揭載外題の中の他の圖。或は他の外題美人畫を藏せらるゝ方は、自分許まで、外題と構圖と寸と落款体と極印の有無、版元とを知らして頂きたい。逐次出來うる限り完全なものにしようと思ふ。但し當分の内一枚物に限る。（二枚續、三枚續、又は竪二枚繼（つぎ）の類は、他日に讓る。なほ、「當世五人女」の如き、五枚續類もまた、他日に讓つておく。なほ、美人畫に限つてゐるのであつて、子供繪、又は七福神などの繪、兩國川開きなどの三枚續繪などは、目下問題にしない事にする。が、筆勞を構はぬとならば、知らして頂けたら、これに越した事はない。自分の蒐集は、美人に偏してゐるから、これらはぜひ文獻として聞いてもおきたい。風景畫の類もである。）

○英泉美人畫目錄一斑　一枚繪のもの

―落款により三大別、且つ順序は、概ね年代順。年代は概ね明らかならざれど、硬き書体を前に、崩したるを後にした。なほ、寸は、少數が間判、他は凡て大錦判である。

A、溪齋英泉畫の落款あるもの

（但しこの分、溪齋の文字の中、齋の字が、下畫の右を丸めて、その左に、小の如き形を入れたるもの。）

外題　極印　版元

一、當世子寶十景　極印　泉市

○右、新吉原の景一枚。（他不詳）

二、新吉原遊君七小町　同　蔦屋

○右、あふむこまち（丸海老屋内江川）一枚。（他不詳）

三、春夏秋冬　同　同

○右、尾張屋内長人（春）□尾張屋内長登、新造長花（夏）□尾張屋内喜長、新造若梅（秋）□尾張屋内喜瀬川（冬）。以上、四枚。

四、江戸名所仇競　極印　丸甚

○右、高名輪の春の梅。二丁町の芝居。の二枚。（他不詳）

五、物日のあそび　同　通三丁目近江屋

○右、水天宮。毘沙門天王。金毘羅大權現の三枚。（他不詳）［但し、右の中、毘沙門、金毘羅の二枚は、例外、一筆庵英泉畫の落款。］

六、浮世姿　同　若狹屋與市

○右、花やしき一枚。（他不詳）「但し、此一枚、
例外。一筆庵英泉畫。前「物日のあそび」の二
枚と同時代歟。」

七、吉　原　美　人　極印　蔦　屋

○右、扇屋内鳰照「いでのやまぶき」の一枚。
（他不詳なるが、六玉川六枚の一ならん。）（此の圖、藍
摺。）

八、婆海老屋内すがた野　同　泉　市（入山形に本）

○右、揃物の内の一枚か。（外題、及び他不詳）

九、新吉原年中行事　同　上　金（入山形に大）

○右、扇屋内つかさ「十一月、酉のまち初雪」の
一枚。（他不詳）

一〇、婦　嬉　の　ゆ　き　同　若　狭　屋（菱形の中に若）

○右、深川八幡の富士。目黒の新ふじの二枚。

一一、美　人　料　理　通　同　佐　野　喜（他不詳）

○右、両國柳橋万八樓。山谷八百善。向島大七
酒樓。今戸金波樓。の四枚。（他不詳）

一二、今　世　美　女　鏡　極印　佐　野　喜

○右、水茶屋。深窓娘の二枚。但し大首也。
（他不詳）（この圖、Bの今様美女鏡と同じ揃か否か。溪齋の
落款体は、異れり。）

一三、華　の　姿（間判）　同　（長方形の中に若松）

○右、右向き立美人、三味線箱を右手に提げた
る圖。（他不詳）

一四、袖　の　う　つ　り　香　同　清　水（角の中に三）

○右、茶屋女らしく、まつと字のある提灯を左
手に、右手褄をとる立美人。背景に梅を描く。
此の一枚。（他不詳）（この繪、獨立ものなりや、揃ひ物
なりや。）

一五、仇　鏡　今　様　姿　同　川　正　板

○右、「向島の雪」の一枚。（他不詳）

一六、當　世　名　物　鹿　子　同　山　口　屋（太きトの文字）

○右、木場三升寮牡丹花の一枚。（他不詳）

一七、浮世美人十二箇月　同　佐　野　喜

○右、三月廓の花（女郎の左むき立姿）□五月川
びらき（竹の縁臺に腰かけたる爪楊枝美人、
涼姿。）□六月天王祭（鏡に向ふ湯上り立美人、
曲線透けたり。）□九月芝神明せうが市（佐野
喜の看板の前に、褄をとりて立つ藝者）□十

一月顔見世(御殿女中、立姿)口十二月としの市(女房と供の者)。の六枚。(他不詳)

一八、新吉原夜櫻　同　江崎屋

○右、角町松葉屋内、粧ひの一枚。(他不詳)

一九、今容美人姿　同　泉市

○右、階子段より、客の置忘れたる煙草入を左手に持ち、下りんとする圖の一枚。(他不詳)

二〇、當世江戸名所揃　同　佐野喜

○右、高輪の一枚。(他不詳)

二一、名所美人合(間判)　同　(寶珠形の中に、伏)

○右、藝者の左向立。[上の輪廓内は、鳥居]口夜具包の前に文を膝に置き腕組の女。[輪廓内は、人家の屋根と樹木と鳥。]の二枚。(他不詳)

二二、江戸名所美人合(間判)　同　佐野喜

○右、新吉原と深川の二枚。(他不詳)

二三、美艶花合　同　若狭屋(菱形の中に若)

○右、春も漸ゝけしきとゝのふ月と梅の賛ある、紙を壁へ左向き立姿の一枚。(他不詳)

二四、扇屋内花扇　同　森田屋(外山形の下に、玉)

○右、揃物の中なりや否や不詳。此繪は、龍虎のうちかけしたる美人の左むき立の一枚。(他不詳)

二五、花名所東百景　同　丸清

○右、飛鳥山之花の一枚。(他不詳)

二六、今樣緣日詣　同　不詳(ナシ)

○右、妙見の一枚。(他不詳)。此の原圖、版元を缺く、再摺の證か。

二七、(東海道)　極印或は名主名一個又は二個。　蔦屋

○右、府中驛二十(極印のみ)口掛川宿廿七(極印と、村松と福の二個印計三個を捺す。)口藤川(田中の一個印、極印ナシ)の三枚。(他不詳)

尙、此の揃物、東海道の外題なし。唯、上に、長方形の中にその宿の名と下に番號數字を入る、但し藤川は、番號の處余白っ全部出來せるものにや、或は中絕なりや不詳っなほ、極印に於て、右掲の如く、極印と名主名二個と三個連印の如き異例あり。此の東海道物、彼の晩年の傑作か、例の道中双六の揃物より遙かに上位にあり。勿論その意味も、エロチックといふに於て。

二八、古今集和哥づくし

吉村の名主名印一個　有田屋

○右、紀友則（螢籠持ち立美人）の一枚（他不詳）

二九、五　色　墨　同　同

○右、黑。子を負べる立美人の一枚。（他の四色不詳）

B、溪齋英泉畫の落款あるもの

（但し、Aとは様式異り、齋の文字、上に文、下に二、及び竪線二本とその右に點を打ちたるもの。勿論、後ほど、この劃が崩れてはゐる。）

三〇、子寶美人合（問判）　極印　若狹屋（菱の中に若）

○右、母親立ちて櫛鋏などを持ち、子供その裾に鏡に顔を寫してゐる圖の一枚。（但し此圖、溪齋英泉筆とある。落款体、最初期也。）（他不詳）

三一、浮世姿美人合（問判）　極印ナシ　泉　佐　板

○右、娘立ちて、ほうづきの根を出しをる圖の一枚。（此の落款、また溪齋英泉筆也。）（他不詳）

三二、當世好物八契　極印　泉　市

○右、上に懷紙と、けん酒と文字のある朱盃と、懷中鏡やうのものとあり、下、藝者風左下向きの大首。□うがひ茶碗とカルタと上にあり、下は、煙管持の右向き美人大首。□紙人形を持つ娘の半身。□上に八犬傳の本が見え、下に狆を肩にした娘の大首。□上に大極上本結城紬島、下に左向き、感じ乏しき顔の半身。□右向き花魁、右手に懷紙を持つ大首。の六枚。（他二枚、不詳）

三三、今様美人十二景　極印　泉　市

○右、手のありそう（よし原）□しんきそう（愛宕山）□うわきそう（高名輪）の三枚。凡て大首也。（他不詳）。（但し高名輪の一枚、落款の下に、丸の中に泉の印を捺す。）

三四、辰巳八契　極印　蔦屋

○右、佃多の歸帆□惠比須のみやの夜雨□新富士の秋の月□洲崎の落雁□三拾三間堂の晴嵐□富ヶ岡の晩鐘□永代橋の夕照□辨天の暮雪の八枚。

三五、天　眼　鏡　同　佐野喜

○右、汐留の一枚。（他不詳）

三六、傾城六佳撰　同　蔦屋

○右、尾張屋内長門（遍照）の一枚。（他不詳）

三七、當世見立六佳撰　同　總州屋

○右、喜撰法師（火鉢の左、腕組をして見上げる娘の坐姿。）の一枚。（他不詳）

三八、日本三風景　同　江崎屋

○右、丹州天橋立（玉屋内花紫）の一枚。（他不詳）

三九、浮世四十八手　極印ナシ　ナシ（不詳）

○右、茶やに待つやくそくの手（上、團扇持ち左下向き。下、眉を剃りたる右下むきの女。）口あだに取組手（上が辻占本を見てゐる娘。下が手拭で顔を拭いてゐる年增。）口ひゐきをたのしみにみる手（上は髮結、下に結はせてゐる娘）の三枚。（他不詳）

四〇、極彩色姿の寫繪　極印　泉市

○右、「契情の現在」の一枚。（他不詳）

四一、傾城道中双娽　極印　蔦屋

○右、日本橋（扇屋内花扇）以下計五十五枚京まで。「五十五枚、揃物あり。一々は略く。」但し、道中双娽といふも、東海道物といはんよりは、寧ろ吉原五十五君の描き分也。構圖舊態をむしかへして、平凡なるもの多し。此揃圖の殆んどの太夫、天保三年の吉原細見に吻合すといふ。即ち天保三年頃の版歟。

四二、今樣美女鏡　極印　佐野喜

○右、娼妓（蒲團を負ひ、煙管を右にさし出せる圖。）の大首。口おやしきすがた（左向き扇をひらく。）の大首、計二枚。（他不詳）

四三、美人會中鏡（別外題、時世六佳撰）極印ナシ　泉市

○右、若き花魁、筆を持つて左むきの半身。口右むき半身の太夫の二枚。（他不詳）

四四、浮世流行花曆　極印　若狹屋（菱形の中に若）

○右、木場のかきつばたの一枚。（他不詳）

四五、大黑屋內雛扇　極印　清水（角の中に三）

○右、外題なし、此の花魁名あり。右上に、和蘭風の雲と家と川と舟とを描き、その緣を額緣の如くす。花魁立ちて、右むき、左手の屛風をあく、中に夜具見えたり。の一枚。（他不詳。）

四六、今樣美人競（間判）　極印　若狹屋（菱形の中に若）

揃物なりや否や不詳。）

○右、美人立ちて、帶に懷紙を右手で入る。右上の輪廓內に、社頭鳥居の景。の一枚。（他不詳）

四七、（無題）（間判）　極印　佐野喜

○右、秋葉と文字のある雪のつもれる誰哉行燈

の前に、立ちて左むきの若き傘持美人、左手にその顔を見上げる犬。の一枚。（他不詳）

四八、東都風契合（間判）　極印ナシ　ナシ（不詳）

○右、柳橋（船宿の女房、布團を背負ひ、右に提灯、左に行火を提げたる立姿。）の一枚。（他不詳）

C、英泉畫の三字落款（又は異落款のもの）

四九、（無　題）　不詳　山口屋（太きトの字）

○右、英泉最々初期の標本。寸截ちきれたる汚れ物なれども、資料として家藏。背景、臥りたる梅の枝と蟠る傘、その前、傘を挿して褄をとれる藝者、右足の先あらはに描かれたり。

五〇、華姿逢妓合（間判）　極印　不詳（ナシ）

○右、背景に、扇面二個、一は、井出の山吹の狂歌と、一は山吹。その前に、娘が立ちて、左の腕をあらはし、白鼠をとまらせてゐる圖の一枚。（他不詳）。〔この圖、英泉筆と落款あり。初期の体さして硬き文字。且つその下に、丸形の中に上に小さく泉の字ある印を捺す。〕

五一、今様すがた五しきそめ　極印　若狭屋（菱形の中に若）

○右、藝者、立ちて左を向ける圖。□蒲團を後ろに藝者の全身。の二枚。（他不詳）

五二、五元集ふう俗くらべ（間判）　同　同

○右、しろ黑のあゐの障子やむめの花　其角の句あるもの、藝者立ちて文を見る。背景に梅、の一圖。（他不詳）

五三、浮世姿（間判）　極印　小山中カ（山の下に中）

○右、今様の小唄も舟の朧月の句あるもの。藝者、立ちて紙を啣へ、右手に三味線箱を提げ、左手に褄をとる右むき立姿。）の一圖。（他不詳）

五四、時世十二相　極印　山田屋（山の下に庄）

○右、一枚に小さく四圖をしきりたるもの、小形鏡面にあだつきそうなどの文字ある十二の小さき大首。計三枚。（これにて完）

五五、松葉屋内粧ひ（間判）　極印　兩國大黑屋

○右、別外題なし。花魁の左向き立姿。の一枚（他不詳）

五六、傾城江戶方格（或は角）　極印　森田屋（外山形の下に玉）

○右、いろはものなれど、果して四十八枚出でしや不詳。水道橋（丁子屋内唐歌―左むき坐

り、合せ鏡。)口王子權現(海老屋内愛染－右立ち)口駿河臺(扇屋内花染－左むき全身)口日本橋(岡本屋内藤之助－女郎の全身)の四枚。(他不詳)。

倚、右の水道橋の一枚は、Bの浮世流行花暦の深川木場の美人と全く、同樣の構圖也。唯、深川と吉原と、美人が變りたるのみ。此の「方格」の方、生氣を缺く。(且つ此の水道橋の落款は筆庵英泉畫の五字といふ異落款也。)

五七、東 都 名 所 合　極印 丸　甚

○右、深川新地の一枚。(この圖、一筆庵英泉畫の落款、その筆庵の二字、前の明道橋のと似る。)(他不詳)

五八、今樣五節美人合(問判)　ナシ　不詳(ナシ)

○右、湯上り美人、左むき全身、上に藥玉模樣を描いた一枚。(他不詳)。此圖、溪齋畫と三字、草体にある異落款也。

○

其他、甞て見當りたるものにて、外題を書き留めおきたるもの、左の如し。(此分、略記。)

○柏子逢妓(吉原物)。○當世婦嬨美多意(王子麥湯御煎茶と小書せられた茶屋の女など。)○江戸名勝盡○江戸名勝合(名勝盡と同一か)○當世料理通(美人料理通の外題替か。同一で二外題か。)○東都名物盡○當世美人合○時世美女鏡(半身にて、抱げいしや。女房の二枚)(此のもの、今樣美女競と同一か。)○東都名所女夫盡の內○浮世四十八癖○浮世風俗美女鏡(蚊帳を出る美女半身の一枚など。)○當世會席盡○美人あわせ○廓中八契。(以上、凡て枚數不詳。)

句 と 繪

最近、或る人から乞はれて女持扇に句を書いてあげた。注文は、なるべく涼しい句といふので、さそくの自作句である。が、當意即妙ではないが、作の瞬間には、好きな浮世繪美人畫が、反射してゐた。その句は、

湯上りにふかるゝ風や天の川
どの舟か小唄もすゞし天の川

の二句で、前者は、初代廣重の三枚續、高名輪名月の美人畫、特にその中の眞中の一枚が腦裏に浮んでゐた。後のは、どの畫家とも決らないが、川開きか、夕涼みの美人畫をぼんやり描いてゐた。乞うた人にも、出來上りを見て、私の描いた畫致が分つたやうだつた。かうしたことは、誰しもの感じであらうが。(久彌)

三馬の「訥子路考極樂道中記」

三馬の戯作で、役者物は、ちよい〳〵見受けられるが、これなどは、徹底したものだ。文化のはじめのもので、「浪花土產初物語」(文化五年仲夏)もあるがこれは、芝翫の藝を暗に賞めたもので、芝翫に似もつかぬ下手の横好の馬の脚が、田舍で芝翫だと詐る、それが物持の隱居や娘に受けると、それは、狸が見せる夢だつたが、親爺もその馬の脚の芝居好にほだされ、後援者となるべく約束し、家内殘らず、花のお江戸へ芝居見物に來るといふ筋で、直接に芝翫に關したものではないが、當時の彼の人氣を誇張した作で、却つて正面からの評判よりは、事効が多い。氣の利いた筆だ。一晝夜の急案と序文にあるが、とにかく才筆で、彼自身後至の一般戯作ものに偶々あるやうな雜炊物より、すなほな、獨創的なものである。但しこれは中本。がこれより四年後、當時四代目訥子(宗十郎)の死に因んだ冊子、「訥子路考極樂道中記」は、一層風變りなもので、訥子評判の本といふでもないが、彼の死に臨んで、その死に假托しての作で、(路考は、つい先月末に死んだから、冥土で追付いたといふのである)この種名優の死直後に出版せられる本の例で、大して珍らしくもないが、唯形式と、その戯作とが、珍である。(因みに、此訥子、十二月八日死、又路考は、前月廿九日の死で、四代目である。)形式は、全く懷中道中記の眞似で、仕立も中本型の横本で、本文全部で十一丁ばかりの小冊子であるが、意匠が奇拔である。即ち、訥子が死んで、極樂へ行く途中の用意にして持つてゐた、地獄極樂道中記、その地獄の部分は不用だから、(自分は極樂へ行くと決つてゐたから。)その地獄の部分(下段)の二枚目表の半ばから貼り紙をして、それ以下、及び、更に六枚目裏からは上下段とも貼り紙をして、以下最尾の十一枚目表まで、その間に自分の死んでから極樂へ行き著くまでの道中記(旅日記)を書き記した、それを娑婆のひいき客へ送つてきたといふ

やうな体裁に拵へてある。したがつて、一枚目表から二枚目表の半ばまでは、極樂（上段）地獄（下段）道中記のまゝで、――これも三馬の仮作――二枚目表の半ばから、六枚目表までは、上段だけが、極樂道中記である。地獄部分の貼紙や、六枚目裏からの全体の貼紙といふのも、さうに拵へただけで、別に貼り紙もせず、仕切りだけして、直ちに、文句を摺り込んである。

さてその訥子の極樂道中記なるものが、それが、またすつかり、紀貫之の「土佐日記」の文体をもじり、それを器用に仕上げてゐる事である。（歌も、ところ／＼土佐日記に似せてゐる。）勿論長さは、土佐日記よりは、短かい。が當時の三馬の、豁達な才筆を見る一例として、誠に面白い。それが、或程度の名文と思へる。試みにこの訥子執筆に仮托した道中記のみを轉載してみよう。（原文の清濁音を明らかにし、且つ讀点を打つておく）他の仮作、上段の極樂道中記、下段の地獄界道の僅かは、これは、普通の懐中道中記めかして、戯れに書きのめしたといふだけであるから、省く。即ち極樂では、▲惣みちのり凡十萬億里、［あだし野］六道の辻へ百萬里半九丁とあつて、その左に説明がある。以下、六道の辻、三途川の解説があつて、未完である。その裏からは、上下全部に、紙を貼り足したといふ体裁である。地獄も、下段一枚半ばかり、總説を掲げてゐる。さて此本、表紙黄、題簽は、訥子略考極樂道中記　完。である。）

これよりはり紙
いたし候

地獄の道は不用に候間はり紙いたし候
て此處よりすゑ死出の旅日記をしるし候

澤村訥子

男もすなる日記といふものを、ほとけもして見んとてするなりと土佐日記めかして書くもをこがましければ、道すがらのことゞもを俗にしるしぬ

十二月八日、無常の風にさそはれ、死出の旅よそひして、ゆくともなくひとつのはらにいたる、こゝはあだしのといふて、さみしき荒野なり、經よむ聲などかすかにきこゆるにぞ、あはれさまさりて、しやばのことゞも猶思ひ出さる、また御贔屓たまはりし人／＼の事、あるひはつねにむつみた

る人〳〵のことわすれがたく、いつのをりには、とありしかくありしと、現世の事かぞへつゞくれば、思はずも泪にむせびて道もはかどらず、あゆみもなれざる十萬億土、けふよりあしそこねてはならじとて、かしこゝのくちばのかげにやすらひつゝ、とかくして此夜は丑みつのころほひ、死出のたび人とむる家求めて、まづかしこにやどりぬ、此家はめいど屋といふて、あるじは世をのがれて名をも黄泉とよびけり、むかしより定めおきしやどなりければ、かの禪門がわかかりし時、わが父のとまり給ひし事など、夜とともにかたるほどに、たらちねのうへをも今さらに思ひ出られ、わが身の事はつゆいとはで、此夜さりなきあかしぬ、されど今のほどハ、ふたゝびしやばにうまれ出給ひて、いとめでたき身となり給ひしよしをきくにぞ、すこしはむねもひらけて、まくらめしもやゝすゝみ侍る、しかはあれどうれしきかなしきにつれて、さきだつものはなみだなりけり

くりごとをいはじとすれどくちぐせに

ハレやくたいもないてばつかり

たはれたる哥よみて、此夜はうち明しぬ、

九日は、そらよくはれたり、あさとくおき出てみれば、はやくも香花などたむけありて、あかの水も折〳〵によくくみかへて、いとまめやかなり、ありし世のたのしみは、酒さかなのみなりしに、今かくよみの國におもむく身となりては、酒肴などみるもいぶせく、たゞたのもしく思ふものは、あかの水又は香花の手向なり、六字の名號おこたらずとなふる身にしあれば、六道の錢も今は用ひなく、けちみやくひとつにずゝ一れん、これぞめいどの友とはなりける、

十日は泪のあめふる、此日は六道の辻かごより下りて、かちをはこびけるが、又ちく生道の馬にのりて、まよひの雲助に荷をもたせぬ、ほどなく三途川につく、此十日あまりさきより、御最屓の泪のあめつよくふりけるよしにて、三ッ瀬川のみかさまさり、ひさしう川どめありとて、此宿に皆とまりをれり、しかるに思はずに、瀬川路考ぬし、おのれには日數十日あまりさき立て、めいどへ來

り給ふよしにて、此三途の川岸にて、はたと行あひぬ、こは〳〵いかにとて、ひとつはおどろき、ひとつはかなしみ、又うれしくもありて、つきぬもの語しつゝも、かたみに袖をしぼるのみ、此川の名を三ッ瀬川となのるさへ、なほしぐみなり

けふははや泪の淵とかはりけり

きのふの瀬川たのみなき世や　訥子

斯よみければ、返し

今ぞしる泪の淵にはまむらや

きのふの瀬川たのみなきとは

さるにても、ありし世より殊にむつまじう、ととひける友の思はずもこゝにてめぐりあひしゝ、又なきえにしぞかし、今よりのちは、もろともにして三づの道行し、はちすの花みちをも、ともなひつれて、上品上生のはすのうてなに、みちびきまゐらせむとて、

西方の欣求淨土におもむくは

ふたりづれなるゑんり江戸ッ子

路考ぬしも泪にくれつゝ、よみ給ふうた

長かれといのりしものを定紋の

丸にいのちのなきぞくやしき

（久剣曰、丸にいのちは、丸にいの字をかけたので、即ち○にい、訥子の紋である。）

おのれもしばしがほど、泪にくれてありけるが、やゝ思ひあきらめて、此夜は、常篤院（ジヤウトクヰン）とて、仙女ぬしのすみ給ひし御寺にやどりぬ、仙女ぬしも今はしやばに生れ出給ひて、世にめでたくおはすよし、寺僧の物語るをきゝて、

寒菊やいまするごとく思ひ艸　路考

傒や常磐にのこる松の雪　訥子

此御寺に石碑あり、寒けれども梅もあり

雪をふみわけてゆかねばならぬ

ありがたきみくにの春にあはんとて　仙女

斯（カク）ゑりつけたり、是なん仙女ぬしのふたゝび生れ出給ふをりからのすさみなりとか

十日、此日は常なき風すさみて、いとあやふくも三ッ瀬川をわたりぬ、此川よりはるかにつるぎの山見ゆ、むかひの岸に、白猿うしの碑（いしぶみ）有。

五代目
市川白猿

三品をくるしさいふもこさわりや
生死流轉のはやがはりして

青石ナリ

すべてこゝに限らず、白猿うしの哥ゑりたるいしぶみ、あまた所にあり、そのさまありし世のはせを塚のごとし

死出の山道はすぐれてけはし、はこねの山をはたちばかりもかさねたるがごとし、紫の雲助こゝに出むかへければ、のりものに打のりて、極樂へといそぎぬ、

十一日、顔みせの二番目めきて、雪の如き花ふりぬ

此所に地獄の追分あり、青黃赤白黑の外に、路考茶色の鬼など立まじりて、地獄へいざなはんとせり、此折から三千の諸菩薩、五百の阿羅漢、へんだんうけんにはちまきし給ひ、〇〇（コヽ紋あり。丸にいっ丸に結綿）定紋付たる香染の揃の衣着て、極樂連中としるせし幡天がいひらめかして、東門通りよりむかへ給ひぬ、

十二日は、八萬四千の大衆とともに石橋の獅子の坐につきて逗留、

十三日は、九品の淨土町を過ぐ、此邊上箔付賣居（今こ）のはちす、或は貸（かし）はちすなど多く、ひとつはちすに五人も六人もすまふ佛あり、あるひははちすももたぬ居候佛あり、あるひは無緣信士やどなし信女、下品下々生の佛たちあまた見ゆ、此日は七日たい屋といへるうま宿にとまりて、路考ぬしとよもすがらものがたりして、あすの淨土入をたのしみぬ、

十四日、けふは初七日なればとて、殊に香花の手向多く、御贔屓の人〲よりもおもひ〲に、手

向給はりし香花ひとつの森なして、かをりたかく、心もわきてすゞしく、身もいさぎよくきよらかなり、おのれは善覺院といへる御寺を宿とし、路考ぬしは、循定院にやどり給ひぬ、わが名は了玄と給はり、路考ぬしハ禪昇と法名給はり、上品上生のはちすのうてなにいたり、しまわうごんのはだえとなりて、百味のおんじきを日〱に給はり、世にまれなる大往生をとげ侍る、かゝれば、さきの世の善き因によりて、ふたゝびうまれ出なば、めでたき身となるべきよし、かしこくもあみだ佛の御もとより二菩薩もてまうしきこえさせたまへば、またの世もいと〱心やすう覺侍る、此のち四十九日にもなりなば、やのむねはなれぬてふたましひをもよびむかへまうすべきとて、ふたりもろともやすらかにたのしみをりぬ、あなかしこ〱

右の通大往生とげ候間必〱御あんじ被下間敷候、此本は七日限りにて地獄一足とびの飛脚屋にたのみ、足疾鬼にもたせ差上候、尙後便萬々可申上候　以上

十二月十四日出　　訥　子

○

といふのである。

「奥附（十一枚目裏）は、板元の需に應じて（一行）、式亭三馬作㊞（二行）、文化九年壬申十二月（一行）、江戸書林（一行）、鶴屋喜右衛門（一行）、鶴屋金助（一行）。」

偖、かうした追善冊子は、いつ頃、誰ぐらゐの（相手の役者は誰）筆から始まつたらうか。（古い處では、唯一つ安永六年八百藏追善の「草白露」といふのを年表に見うけるが。）とにかくその盛行は、文化文政頃の演劇の愈々民衆化と、各流行俳優の輩出とに刺戟せられはしなかつたか。天明寛政期にもこれがあるであらうか。死繪は、そのはじめ此の頃であるとしても、此の死冊子（ヘンな名であるが）は、である。さうして死冊子としても、此の文化の三馬作「極樂道中記」などは、比較的古い方のものではなからうか、即ち戲作的なものゝ意味に於て。さうしてこれには、役者に引ずられ氣味の傾向のあつた職業的作者の發生も、この期頃からであつたといふ事も念頭におきたい。

洒落本の書形的研究

——明和安永期の補遺を掲ぐ

○閑　居　放　言　　玩世道人著　　挿繪ナシ　　明和五年五月刊

●中本一册。●雜（吉原に關する戲賦。即ち本文、北里歌と題し、吉原讃美を漢文にて陳（つら）ぬ。所々和訓の假名を打ち、又和字二行書にて註あり。此の分凡て、門人の大拙の業と、序にいふ。静軒「江戸繁昌記」の吉原の部とよく似て、その先蹤の如き感あり。勿論、此の明和當時は、此の類、漢詩文にもじりたる吉原物を、多く見うける。その中の、比較して古きものか。即ち蕩子窪「明和七年」東都青樓八詠並略記「安永四年」瓢金窟「安永五年」などは、此の以後である。）●丁數。閑居放言序（玩世道人　一より三。此分、六行の罫を引く。北里歌「本文」、別丁にて一オより十五ウの三行目まで、此分每丁罫ありて四行也。十五ウの四行目と十六オの四行とは、門下の竺大拙といへる者の、一字下げの識語。これによれば、道人の前著「詩海錦帆」初編八卷といふのがあつて、此の本と此の北里歌と共通の熟字故事のある事を述べてゐる。が此の詩海錦帆なる著不詳。そのウラ（第十六丁ウ）、罫なく、明和五戊子年五月（一行）、無此印者爲僞刻（細字にて二行）とあつて、下に玩世の二字ある朱の印がある。（この印、事實一々捺したものらしい。）これは、全く面白いもので、明和五年の昔に發見する、印税の捺印の如きものである。（勿論、印税とは、稍性質を違へるが。）次ぎ、裏表紙に貼りて、書肆名、京寺町五條上ル町　梅村三郎兵衞、同室町六角下ル町　田原勘兵衞、大坂心齋橋筋順慶町　栢原清右衞門、參州吉田　風月堂喜兵衞、江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衞、同本石町十軒店　前川權兵衞、同所　山崎金兵衞と七行がある。尙、表表紙ウラの見返しは、玩世道人著不許翻刻千里必究（一行）閑居放言（大きく一行）棲雲館藏［印］（一行。印は、棲云館）とある。●柱。序の三丁分は、表裏兩面に亘りて、下

に丁數。本文は、表面ばかりの下に丁數を打つ。

（作者に就て）玩世道人は、「小說白藤傳」年代不詳）の玩世敎主と同一人である事に氣がついた。恐らく事實であらう。すると、年代不詳の白藤傳は、此の明和、降るも安永ときまる。なほ白藤傳は白藤源太に擬した戯漢文である、准洒落本。なほ、此の玩世道人は、まだ確として分らない。後考に俟つ。（本記述再校の只今では、偶然の機會から此の玩世道人の輪廓も略分り、且つ、その著作目錄も十種以上を知ることが出來た。事は、凡て次冊補遺に讓る——六月五日夜。）

○深　川　新　話　　山手馬鹿人（蜀山人）挿繪ナシ　　安永八年正月序

●小本一冊。●小說深川●丁數、序（朱樂館）、頸を引き、無丁にて一。序（とは、斷つてゐないが、千里亭白駒）、無丁にて一。以下本文別丁にて、一より三十六表まで、但し二十三丁複丁あり、故に誠は、本文にて三十七丁、序とも計三十九丁也。●柱、無地。綴ウラの下、丁數。●毎丁、輪廓がある。●飜刻本、江戸時代文藝資料第一。

○遊　婦　里　會　談　　蓬萊山人歸橋　無　落　款　　安永九年春刊（天明末、再摺カ）

●小本一冊。底本（再摺本）、元表紙茶三方截、題簽は、一重の太き輪廓にて、遊婦里會談　完。●小說深川。●丁數。自序、一より二。以下本文追丁にて、三オより三十一オまで「三十一ウは餘白。跋ナシ。七ウ八オ、ヒラキ挿繪。●柱、無地。丁數は、ウラ綴の下。但し底本、最尾の三十一を誤つて、二十一としてゐる。●毎丁輪廓がある。

（備考）此の本初摺本再摺本の異同。初摺本（竹清文庫本）と對照すると、此の稿底本の再摺本は、自序に年月を缺くの差がある。即ち、初摺本は、自序三ノウラの署名の前に、（再摺本は、此のアキ甚し。）安永九ッのとしの春　とある。が此本、再摺本にしても稀なのか、自分の如きは、大正十四年以後心がけて、やつと最近の天鈞居氏賣立によつて、此の再摺本を獲た事を告げておく。此の再摺時期は不明であるが、天明末かと、再板「辰巳の園」などの發販によつて思はれる。

昭和三年五月二十八日印刷
昭和三年六月一日發行

江戸軟派研究　第二十四册

定價　貳拾五錢　送費貳錢

昭和三年七月一日發行

參編 第二十五冊（七十冊）

本文

「好色年男」の解題と比較

洒落本の書形的研究

「柳樽と狂句」管見（飯島花月）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十五冊（通編第七十冊）

【新刊紹介つゞき】雑誌の分――(以下六月號)愛書趣味○民謠詩人○川柳絖鉾○やなぎ樽研究○本道樂○古典○美之國國展春陽會特輯○變態資料廢刊號○文藝○道頓堀○歌舞伎○民俗藝術○江戸時代文化○歴史地理○江戸往來○風俗研究○あく趣味○北隆館月報○文藝時報○藝術通信。(七月號)國語と國文學。民俗藝術○本道樂。○紙魚。○明治短歌研究

◎「柳樽と狂句」管見

飯島花月

貴誌第三編第二十四冊御掲載、「柳樽と狂句」中の難句とされたものに愚見を附し、其他の珍句に就いても聊か贅辯を申し添へる。妄言の罪は恕して下さい。

　隣國をふんごしにする鏡とぎ

鏡研ぎ職は、加賀國から出たもので其證句は澤山ある「夫にあたり蛇とりに出る鏡とぎ」など、例の大機騒動にまで持込まれて居る。隣國とは申す迄もなく越中禪をいふ大あぐらで鏡を磨くところを職人盡などの書で見る通り、定めて禪も出して居たらうと想像されるが句にはそこまでを述べてない。此繪本の書面はどうであらうか。

　お竹重年犬曰くおそれるぜ

並み〳〵の女中は、飯米をこぼして犬に喰はしてくれるが、大日如來の化顯たるお竹さんは、殘飯を粗末にせぬから犬の餌食がない。

、三月と五月のやうな壇の浦

御考察の通り、雛壇と五月人形の見立てと斷定してよからう。

　忠度が立つと櫻が丸くなり

無論「行きくれて」の歌の意であらうが、丸くなりが解せぬ。(久補、―立つと今迄坐つてゐた所だけ落花がないから、その周圍だけに、即ち落花が圓を描いて、その外縁だけに積つてゐるのをいうたのであるまいか。)

　さゝいな善根鳥さしに南無阿彌陀

鳥を指さうとするとたんに、傍人が念佛を唱へると、其鳥が逃げると信じられて居る。(これは言はずもがなの餘計な補説か)

　花火からそれて上るも火焔玉

吉原の火焔玉屋のいひかけであらう。(同上)

　眞ン中は玉子左右は白髪うど

和歌三神の句である。眞ン中は玉津島明神。左右ハ住吉と人丸。「眞ン中はわかめ左右は干し大根」「左右は提燈まんなかはすき通り」此他にも類句がある。

　八郎は八反九郎蝦夷錦

八反は八端織の事かと思ふが、若くは八丈の誤字ではあるまいか。

(以上)

●●倚、前冊「柳樽と狂句」の中(正誤)四六三頁十四行目の「月に」は「目に」の誤植であつた。月にでは、分らぬ筈である。目なればこそ、あなめ〳〵の髑髏であろ。(久彌)

新刊紹介

――寄贈になつた分

○未刊隨筆百種　第十四巻
○未刊隨筆百種　第十五巻
三田村鳶魚氏校のもの。第十四巻は、露草草紙以下六篇。第十五巻は、柳營譜略以下六篇。第十五巻所收の、水戸齊昭の生子系譜、遊女書入書留など珍也。各巻、索引を附す。校訂、無論信用に値する。(四六判天金各約五百頁、非賣品。東京市牛込區富久町米山堂)

○校訂柳多留　貳編　花岡百樹校訂
柳多留第二編の底本として、最もよし。裝幀亦佳良。(菊半截和紙和裝、四十二丁。八拾錢。岐阜市金屋町二丁目十一、柳書刊行會)

○日本文學講座　第十七巻
藤井乙男氏の「江戸時代文學研究」など。(非賣品。東京市牛込矢來町、新潮社)

○江戸時代文學考説　石田元季著
中西書房の第三出版。裝幀等漸く本格の出版に入り來つた觀がある。さて此本内容は、石田氏多年の研究論述、又は稀書の紹介。無論氏としては、大魚の片鱗に過ぎないものであるが、しかも同氏の著としては、氏の記述を纏めた恐らく最初のものであらう。内容、硬派に近きものあれど、硬中軟また少からず。記述、惣体に簡素、含蓄の多き事、最もうれし。挿入圖版またよし。江湖大方の一粲を望む。(四六判本文三〇六頁。貳圓參拾錢。東京市小石川區大塚上町十五、中西書房)

○羅舞連多雑考　池田文痴庵著
軟派十二考の第一巻。所謂古今艶書の雜考と、現代艶書の珍例數十個を以てせるもの、寧ろ後半、此の實例に於て、最も價値あり。實例の中、猥味に徹底したるもあり。古代艶書考は記述簡に過ぐるが遺憾なり。が珍書として推奨に足る。我等また本書實例の材料を提供すべかりしに、呵々。(和紙和裝、本文百十二頁、非賣品。東京市牛込區東五軒町廿七、文藝資料研究會編輯部)

○和本　第一號
名古屋松本書店の月報として生る。本文、小酒井不木氏の稿と予の戯文小説女見立なるもの計二。他稀書解題數頁。圖版多く、体裁佳良。(菊五十四頁。非賣品。名古屋市中區南大津町一、松本書店)

○古今桃色草紙　第一號
「變態資料」の改題。較俗化したるは惜し。が此方或はより多く賣れるべきか。(菊一三八頁、東京市牛込區東五軒町二七、發藻堂)

定價表

一册	貳拾五錢	郵税貳錢
六册分	税共	壹圓四拾錢
十二册分	同	貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和三年六月二十八日印刷
昭和三年七月一日發行　(貳拾五錢)　送費貳錢

名古屋市東區車道東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造
名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社
名古屋市東區車道東町一五七地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

【著者より】本文、前冊でいうた玩世道人の傳や著書などは、當世虎之巻の再刻三刻本などゝ共に、次册に讓つた。○英泉畫集の計畫、一寸心細い延期したつて少いものは少い、中止かと思ふ。今日までの數、五十に不滿。もう半月待つてゐます。申込御勸誘ありたし。○本月十三日午前六時五分、三男が生れた。久晴と命名した、計十五畫になつて、いゝさうだから。子は殖ゑて益々生活難。戀にもすがれる運命がイヤになり候(六月二十五日夕)

「好色年男」の解題と比較

初期浮世草紙好色本の一に、「好色年男」といふのがある。「浮世榮花一代男」の摸倣作であらうと思はれるものである。が、構想、當時としては、意表に出たもので、またやがては、豆男の八文字屋本を呼ぶ動機ともなつてゐる。左に解題、附するに梗概、及び雜考をものする。

○

●好色とし男　全五卷　元祿八年正月刊

●形狀。半紙本形五冊。丁數、卷一（目錄共十六丁）。卷二（同、十四丁）。卷三、（同、十三丁）。卷四（同、十四丁）。卷五（同、十三丁）。

●挿繪の數。卷一（三ノウ四ノオ。九ノオ。十五ノオ）計三。卷二（四ノオ。八ノオ。十二ノオ。）計三。卷三（三ノウ四ノオ。七ノオ。十ノオ。）計三。卷四（三ノオ。八ノオ。十二ノオ。）計三。卷五（四ノオ。八ノオ。十一ノオ。）計三。

●目錄。此の目錄は、各卷に、一丁づゝ、表裏に亘つてあるのであるが、今、便宜のため、これを集めて左に記する。

卷一。（一）御夢想の丸藥　立は西洞院横は松原、空耳つぶす人のわる口、禪のかき初が戀の始り、心の榮花にさかの下やしき、あたる物を幸の戀、

（二）奉公の濡草鞋　伏見は桃ににぎはし、宇治のほたるハ戀の仕合、嘘なしの懺悔咄し、まれなるきようの細工人、麥粉に物のいはれぬ事、

（三）合点のゆかぬ十露盤　汐のかたまりが助之丞二百十日の風はいかな事、胸のつかえに鳥なかぬ日、小袖たんす二番目の引たし、念比な言葉もあての有とぞ、

（四）夫婦ハ内裏雛　けふり草ハおもひのたれ、貌に火のたかるゝ湯風呂、三嶋大こんのたとへ物、わゝり付たがくやしいさ、よい引汐は三月三日、

卷二。（一）是ハ繪に書し姿　たしか成手形にて通番所、角田川に都鳥しすけ笠、行程に〱永廊下を、上氣して退後はしらず、推量は一ぶもちがはぬ戀、

（二）咎のなき不問語　菊作りは佛父介と申者、しぐれ〳〵に雫のたゑ所、小首かたふけて姿が思案、百人一首の引事おかし、料理人のあんばいしおかし、

(三)溺らせても入らぬ淵　一から十迄人のしらぬ事、おもひがけなきたうがらし、火吹竹をもたせてのいひ事、尻のはけたる人置の小源、

(四)水無月の晦日は　あつたら雪おれ竹、人の好闇風俗は野風、後悔するは道理也〳〵、精進あげにみし其園の柿の木、猫のゐるもかまはぬ鼠なき

巻三。(一)釣下す湖の端　爰にかくれなき碓の音、宗旨改に尋印判、七月十六日女の三井寺詣、無性に腹は立れど親に孝行、青田八反の譲　慥に有、

巻四。(一)今の世の判官殿　はんぞうの湯は少々濁て、喰ぬ殺生に狩場の弓、うどんげの花は咲て候、あまりふしぎにぞんじての事、さゝくさまぎれの子の親、

(二)花洛の妾揃　御評判の繪そうし、塩味かいでみる生魚、二人してのごんくわい、蝿にあき果ての思案、氣にいらぬ両方違、

(三)力競せいくらべ　いさ殊勝なる尼御前、買物のさくゐは大こく町、按摩さりハ夜も夜半、はしごもない屋根葺、綿ぼうしの下鉢巻、

巻五。(一)雨の夜の火廻し　御所風のかんばん後帯、土用八専におこる手のしびれ、媚寛の帳に付し嵐三郎四郎、戀塚の主をちかひしもおかし、首引の相手はしやさ、

(二)名人の曲太皷　××もつの猫は眼のひかり各別、取合せての因果物がたり、

是程あたゝかな物は何であらふぞ、貧僧のかされ斎此上のちそうハ、手水鉢をかへほす水なぶり、

(三)横川の杉の嵐　岡崎の里はかくしものゝ器、鐵槌の音釘の音、すぐなる神によこしまの人、くさめ〳〵に鼻がこそばゆき、傾城町を穴からみたは今がはじめ、

以上である。

以下、その梗概。

第一巻の冒頭である。「元祿七戌のとしもありくやうに暮て、しはすの廿一日、今宵は節分の夜とて、らくやう五條の天神にまうで」た男、此の男、「親のゆづりの両がへみせは、いつの比よりかはり口のちがふて、十千貫目が身体、からりちんとしまふたやにして、殘る物とては、此安部川かみ子一まい、ごそ〳〵」といつた境涯、寶船一枚買ひ込んで、獨寐の床に敷いて寐る、その夜の夢に五條の神が現れ、「汝こよひ、我がやしろにまうで、あからさまのさんげ物がたりして、ふさいのえんを祈れども、かたし〳〵の貝のごとく、どう合てもあいがたし、去ながら、ふかくなげくをしらぬともいひがたし、是をあたへるぞと、こがねの香箱にむくろじほど成丸薬をさづけ給ひ、汝た

ちまちおもかげ引かへ、まゆのかつかうひたいきは、かみのび〳〵とながくなり、しりのひらたき迄に氣を付て、人は女といふべし、こしもと中ゐの奉公に出て、娘にもせよごけにもせよ、かず〳〵の女を、したいやうにすべし、猶此きぬにてこしをまけよと、白ちりめんのきやふ有がたくいたゞく」とおもへば、夢さめたのである。(以上、卷之一、第一)

伏見の里に、さる有德な浪人が住つてゐた。そこへ、お染と名づけて、奉公にきたのが、此の主人公である。折から丹那の留守、内外より錠をおろして、内では何をしようともまゝなれども、外へとては叶はぬ事、女傍輩よりあふての、色話。水風呂だとか、鼻毛ぬくやうなとか、麥粉喰ふやうなとか、芹燒するやうなとか、樣々、思出話に耽る。ふとお染が、わしがとゝさま、京寺町誓願寺まへ、　　の細工人でござるが、此の跡の季の出替りにあそびにゐにまして、よい頃なのを盜んできた。　　さうして、　　だといふて、　　(以上、同、第二)

難波、北濱中の嶋の、伊與やの何左衞門といふ問屋、亭主は三とせ以前、西國の波の泡と消えた、その後家に奉公してゐるお染である。このお染にまた戀慕してゐる手代の新兵衞、それをなるやうならぬやうな風に受けてゐる。比しも春の末つかた、しめ〳〵と降る雨さびしき宵、後家どのゝ按摩をしてゐたお染。後家どのは、うつかり、此頃の閨さびしさを、女と思うて訴へる。さうして「小袖たんすより、ふくさもの取出し、わたなべのつなが鬼のかいなを見するよりも大事さうに、お染が手にわたし給ひ」　　たまはれというのである。お染は、ねがふ所のさいわい、

此の後家どの、お染を「ふたなりとかやいふ物なるか、神ならぬ新兵衞がそちに心をつくせし事のおかしさよ、人にさとられなよ、一期わがそばにつとめよ」と云々。御念頃のお詞を受けるのである。(以上、同、第三)

爰は、堺の通すぢ、家屋も人の風俗も京の兩替

町よりは目をおどろかす所、爰にかり金(かね)やのなにがしとて、並びなき分限、奥さまうつくしく、丹那殿の器量、いづれ內裏雛(びな)の生化(しやうげ)ならん。が、奥樣は、かねて悋氣つよい、所へ、丹那殿は、此頃奉公に來てゐる例のお染に執心。けふは、年のはじめの二日、あら湯に入つてゐる丹那殿の背中を流してゐたは、お染、丹那殿どのから、樣々くどかれて困りきつてゐる。それを隙見して、悋氣に角も生ゆべき貌(かほ)は、奥樣である。お染、奥樣のあとを慕ひ、お部屋に行き、いろ／＼と無實の由を申したが、聞き入れられぬ。でたうとう、無實である筈の證據を見せる、それを見ては、流石の奥樣も我を折給ひ、

是非にと今一季望たまへども、よい時分に引汐、三月三日に又出替り、

といふので、此の節は終つてゐる。(以上、同、第四)

以上で、卷一は終る。插繪、三ノウ四ノオ。(天神社神樂堂の景。)九ノオ半丁分（後家とお染の物語、それを襖で隙見の手代。)。十五ノオ半丁分（丹那殿の背を流してゐるお染、隙見の奥樣。此の圖は、西鶴「好色一代女」卷五の風呂圖に、頗る似てゐる。人物の描き方などに於て。）

次ぎ、二卷は、江戸が舞臺。江戸へ下るため、道中は、若衆姿になつて、立派に下つた。咎める關所では、男の證據を見せて歩いた。江戸は、とある裏棚(店)にしるべあつて、そこに落つき、暫くは、又女の姿に戻つて「笠の內前さがりのよほほひ、こしつき、江戸にはめづらしき」風俗、男の目を惱ませてゐたが、さる大名小路の御館の御隱居、四十ばかりなる後家どのに御奉公した。ある日、おつぼねどもよりあひ「菱川吉田が浮世繪、有程ひろげて」眼に保養してゐたが、いづれも貌をあかめて退散、殘るは、後家どのとお染の二人。後家どの、

(卷二、第一)

「けふは、お館(やかた)の爐びらき、臺所もとはにぎやかに、疊をあげ敷(しき)ちがえ、神(かみ)の折(お)しきにかきなますなどひしめきける、」御隱居は、火燵(こたつ)のあたり初(ぞめ)、

めづらしとお染とさしむかひに御鼻毛を結ばせ給ひ、外には御手がいの猫もあたらせ給はず、云々。ところが、庭では、菊作りの又助、最前より時雨をはらしてゐたが、

合点のいたる皃にて、はるかのからうす部屋にゐる下女のたまをまねき、

このたま、溜息ながらに、去年の秋口、亭主を痢病で死なせた身、そなたのやうなよい器量だつたと、又介に水を向ける。そこで、又介お玉の戀が出來るのである。お玉は、前の亭主のつもりで「武兵衛どの〳〵と、頻りにいへば、料理人の武ひやうへ、あとこたへて、すいがさ持ながらかけ來り、よいあんばいじやと、いふより外はなし。」(卷二、第二)

しばし奉公引いて、休んでゐた。その間に、人置(周旋屋)の小げん(人置女の名)が、さるお邸の奥方への目見えの由、やかましくいふて來たから、ついて行くと、小げんは、奥へ行つて、中々出て來ない。そのひま、門ばんの喜介が所で待つてゐると、「すてつへい、そりさげたるに〳〵しき男」がきて、盛んに口說く。これは、中間の角内といふので、かねてお染を見そめ、小げんを賴んで、此の幕を作らせたのである。逃げきれなくて、たうとう、お染、月のさはりがおこゝいからといふ、此のさはり過ぎて、小げんの所で逢ひまゐらせん、と逃げる。不承不承でゐる所へ、やつと、奥から來た小げん、けふは皆樣、芝居へお出で遊ばし、お目見えが叶はぬ、とその場をごまかす。「尻のはげたる人をきの小げんが目にさへ、おそめを女にしておかし」といふのである。(卷二、第三)

白銀町にかくれなき分限、丸やなにがし、亭主は、腎虚で死に果てた。その女房は、もとよし原の今野風といふ太夫、が亭主の死後は、神妙に、髮きり廻向につとめてゐた。やう〳〵五十日のしやうじんあげも過ぎ行き、窓をあけて秋草花のいろ〳〵を詠めやりたまふ、かくとも知らず此頃この家に奉公のお染と、腰元のおつやとの、

園のかきの木

よし〳〵詮義と、日の暮夜に入りて御ね所へ染ばか

りを呼び給ひ「われもむかしハ戀しりの人の目色にみてとる也。其方が風俗がてんゆかずとのたまひ、油灯をかゝぐるふりにもてなし」云々といふのである。(卷二、第四)

以上、卷二終。挿繪、四ノオ半丁(後室とお染、他の腰元二人、菱川吉田を見てゐる所。)。八ノオ半丁(庭の菊を見てゐる腰元風の者、お染であらう。それを隙見の男女、たまと又介であらう。)。十二ノオ半丁(お染の袖を引く中間の角内。邸の門前の体。)(以下、第三卷)

舞臺は、かはつて、近江の大津である。大津の町に、つき米屋の清次といふのがあつた。これが若くて放埓、磯せゝりに家を留守にする。で隱居した先代の入道が案じて、その妻もろとも相談して、京から美しい嫁のおいつとて、ことし十六なのを迎へる。この嫁に隨いてきたのが、お染である。偖、當座は、清次、家にゐついたが、それも三月程の事で、それからは又、もとの木阿彌、當座の花と詠め捨てゝ、三十日が立つてもよりつかぬこそうたてけれ。されども、おいつすこしも色に出さず、萬づかしこく夫の機嫌を伺つてゐたが、間もなくおいつ懷姙する。と聞いて、清次は合點行かず、さては親入道の子なるかと、親の外聞我が身の耻、隱してのけうと我慢してゐる。時に、お染は、何やら親子打よりてのつぶやき、氣味わるしと、おいつに暇乞の事細々と後の事まで書つゞけ、青田八反丹那樣にお讓り申す(此頃、すでに青田八反の俗語を使用してゐる。)と、無用のなが事、寢所に殘して夜にまぎれ立ち退いた。扨はと、清次、あやしんで、是なん二なりの女なるべしと、一々に思ひあたつた。親仁の曇りは、唐崎の方より晴て、といふのである。(以上、卷三、第二)

お染は、大津を立退き、同じ國の海津のほとり、矢野半六といふ人のもとにゐた。この半六、これまで二六時中色に身をなし、あまたの女の命を取、わづらはせなどしたが、ふと無常の心を發し、死にたる女のためと、水施餓鬼などして、供養して、其後は、彦根の城下より本妻を迎へたが、上には上の有もの、此女、正眞の男の命と

り、命あつての分別と、熊野參詣にかこつけて、京の知邊にかくれ、久しく便もしなかつた。その留守中、毎夜あまたの女を集めて、都のうわさ。その中に、當時の風聞が出てゐる。「塩の長次郎が手づまの品玉、嘉太夫が所のごばん人形、それより氣のうき立はなし、堅田の心中事、まの丶間夫、伊勢參り」のあらけない話。その晩、お染は、御身内の源介と詐り、くらやみの奥樣御部屋にしのぶ。然るに、思は遂げずに別れる。（卷三、第二）

けふは端午の節句、その店先へ、算置（八卦見であらう。）の宮内が來て、丹那樣奥樣やら、お針女の吉やら、腰元お染やら、樣々の性を見て、豫言する。奥樣は、水性、丹那樣は、火性、水にあふて火は消さる丶。是は大わづらひなされ、御命もあやうかりし事有べし。三十年も其まゝ外に置きまして、他人ぶりに遊ばさば、別の事有るまじ。またお染は、さるのとし、土性、一代むまいもの喰、口果報の有る人也。源介が手の筋見て、そなたは、無實の恨をうくる事有り、當月は物事愼んで、天神を信じよなど樣々である。日の暮どき、蚊遣ふすぶる窓をあけて、洗髪に風をうけてゐた。そのお染に源介が云よる。それをうかゞひ見た奥樣、それゆゑにこそ昨夜の源介が不始末、お染とは下地からの念比さうな、お染をはやく追ひ出さずばと、思案を決める。その夜人しづまりて、またお染、源介と詐りて、奥樣の許へ來る。最前の怨みも何處へやらであつたが、やはり駄目だつた。お染、「我部屋に入て、胸のおどりをしづめ、いかにしてゝ夕べ今宵のしゆび、しあんに及ばず、おもへば、算置の宮内がいひしおく樣は水性、我は土性、水に土は、じみ〲と成筈の事よと、殘り多きがあふた〱」で、終る。（以上、卷三第三）

挿繪、「三ノウ四ノオ、花嫁おいつ、お染をつれて、京より嫁入る圖。笠を被つた母親らしき女と、荷を擔いだ下郎の四人、向うは、竹生島あたりの景。」。七ノオ半丁（奥樣の寢間にしのぶお染。）。十ノオ半丁（算置の宮内が、店先、手の筋八卦を見てゐる所。お染と針女と源介との三人が前にゐる。）

第四卷。京の片ほとり、大佛の馬町といふ所、こゝに奥ぶかなる家作り、五條の百足屋とて、下京にて沙汰したる人の隱居也。この隱居、八十斗りであるが、これが判官になぞらへたと見えて、お傍の妾ども、むさし坊龜井片岡いせ鈴木などゝ、それ／＼名のついた美女。但し此の隱居、唯白がねのはんぞうに、なまぬるの湯を入れて、女子どもの

誠の事は叶はず、かゝる手てんがうしてなぐさまれけるは、喰はぬ殺生である。然るに夜半過ぎに、ちよといふ女、お腹痛み、藥よ針よと大さわぎ、そのひまに男子平産。人々駭き、隱居も駭く。とりあげ婆は、隱居のお子と思うて「御年よりの子は、どこやらがたよはき御生れつき」と申すから、隱居いよ／＼腹を立てる。男たるもの門前の犬まで呼んでの詮議、しかし七人の男、くもりのなき言譯立ち、又手代を呼んで詮議しても埒あかず、次は、妾三十八人を一々吟味するに、廿人斗りは腹に仔細ある樣子。最後、片隅にすくみて、まじ／＼してゐるお染、これも腹に仔細あらうと、吟味すると、そこで、廿人斗の子の親が分つたといふのである。隱居、憎しみは刻みても飽かねども、いふ程うつけたる事なれば、一時もはやくと夜の内にお暇とあれば、卅八人の妾ども、日比のなさけに、名殘おしやと、蚊の鳴く如くに泣きける、といふ。（卷四、第一）。

折ふし、さる邸の留守居役人「呉服所をつれて、川原町の大黑屋の裏ざしきで、殿樣の御妾衆廿余人極むるとて、お國よりの注文を兩人が前にひかへてゐたりけり。お染も目見えせばやとおもひ、「肌には雪をあらそふ白むくに、淺黃ぬめの肩さきから帶のきはまで、友ぜんがすみ繪の虫盡し、じやう文のだき柊、紅の裏をふきぬくやうに三寸ほどふかせて、着たりけり、御むそうの二幅しつかと腰にまかせば、さぐられても、あぶなげなしと、はや口の太右衞門後家といふ人をきに着がへの小袖もたせてあゆみける」。所が、この時集つた數百人の妾候補者、皆落第した。そのわけは、留守居のいふには「身が丹那は、東國なるが、お若うしてじひぶかく、かりにも物の命を取事をかた

しませ給ふゆへ、御國の百姓ゆたか成りしが、おびたゞしき蠅所にて、ちよつと御寝なるにも、又は御膳の時も、かの蠅どもの群がりよるを、うるさく思しめす、しかれども鳥もち蠅打にて取事、たちまち命をとる殺生なりとて、呉服所に仰せ付けられ、頬の赤き女を探させ給ひ、蠅をたからせ、そのひまに御ぜんあがるやうにと也。さらさら色を好ませ給ふにあらず」といふので、お染も、心あてさらりとちがい、ともにあきれてかへりぬ、といふのである。（巻四、第二）。

木幡の里に、三十四五の比丘尼、いたづらを極むるが住んでゐた。それに、お染は奉公してゐた。此の尼御、お染に、京の五條、大黒町にあつた子おろし藥を買ひに賴むくらゐのいたづら。ところがその夜、一人の尼、四十あまりのが、別にすらりと立のびた女に綿帽子を被せて、いつぞや申しました　　申して連れてきた。所がこれが男であつたが、たうとう尼前に負けて、伴れてきた尼も面目を失つて、つれて歸る。お染、これには驚いたが、さて自分は、

例の　　事よせて、主の尼前に申す。主の尼も喜ばれたが、　　餘りに恐ろしく、又此所も出にけり。（以上、巻四、第三）

右巻四の挿繪。三ノォ半丁。（今判官殿と、お千代の腹をさすり介抱してゐるお染と、他の女一人。）八ノォ半丁（大名の留守居役一人、その前に、妾の候補者らしくしかけたお染と、他の一人の候補女性。傍に、人置の女。）。十二ノォ（主の尼とお染、物語の体。）

圖柄の中で、お染と直ちに分るのは、お染が凡て（各巻各圖）、定紋の抱柊と、裾模樣に雌松をあしらつてゐることである。

第五巻。大内の宮仕へ、緣を求めて何がしの内侍の許に、一季を勤めた。お染は望み事ある身なれば、いろ〳〵面白をかしく、主の内侍が機嫌を取つてゐた。ある夜雨いとうふりて、さびしき折から御朋輩の何がしの局、御渡りまし〳〵て、宵の間は哥かるた、文字ぐさりの火廻し、らりるれろにつまりての大笑ひ、興に乘じて、酒などすゝめ、おかしき咄になつた。内侍は、日外御室の花

る。」恐らくは、京版であらう。挿繪畫家は不明であるが、半兵衛の系統である、が凡て繪柄は平凡、温和である。唯、文辭に於て、その頃の放恣な好色本の作風を示してゐる。

○

借、この本が、「浮世榮花一代男」(元祿六年版)(但し、貞享年間版「好色四季ばなし」の改題。)の四冊本から暗示を得てゐることは、察するに難くない。即ち「榮花一代男」も、性欲的描寫の可なり突込んだものであるが、さうした形式以外、例の戀に運の拙ない男が、神に祈る、その發端の形は、そつくりである。但し、この「年男」は、榮花一代男よりも、更に一轉化して、神の功徳により、自己美女と化して、自在に漁色の實行に移る、さうした意表的趣向を生んでゐる。即ち「榮花一代男」の、單に隱れ笠を賜はつて、諸國の戀を見聞する、(實行ではない。)最後に、悟を開き隱れ笠を踏み破る。「此の得脱と、「年男」の結末とも、似てゐぬでもない。」さうして此の「浮世榮花一代男」の主人公、即ち隱れ笠の忍之介は、例の世之介(西鶴、「好色一代男」の主人公)にも似かよひ、(即ち世之介を消極的にさせたら、斯うであつたらう。)實行的な世之介の他に、非實行的な、即ち當時男性のその半面の惱みを具現したものとして、「好色一代男」と相對し、「筆致よりも西鶴なりといふ意見もある。」西鶴の亞流か、又は、彼に此が感化された所もあつたらうと思ふ所のものである。その「浮世榮花一代男」の、戀に運の拙ない男の願望を更に、當時の大衆が理想的に、これが趣向を更へたのが、「好色年男」である。恐らく此の「年男」が、全篇實行的趣向より成るの初めではなからうか。(但し、實行と見聞とを折衷した「好色赤烏帽子」の如きも同年に出てはゐる。此事、後說。)尙、此の「年男」、女裝した男性の漁色の記述であるが、形は、西鶴の「好色一代女」に受けた、ともいへなからうか。

かうした、「浮世榮花一代男」の見聞、「年男」の實行。これを折衷したものが、「年男」と同年、江戸版の「好色赤烏帽子」の類である。此の「赤烏帽子」は、一名好色むらく坊で、自分が嘗て紹介した通り、

第一巻より第四巻は、見聞、第五巻は、實行である。神の功德による事も、同工異曲である。即ち、戀の運の拙ないもの、（「浮世榮花一代男」や「年男」の如き。）又は、「赤烏帽子」の如く、拙くなつた癈疾者（瘡毒のため、此の主人公は、羅切した。）の身の上にも、神の功德によつて、戀の樂しい世界は、展開される。さうした事は、時人、恐らく大部分の者の欲求——寧ろ切ない希望、幻想だつたらう。西鶴の「好色一代男」の如きは、餘りに實際とかけ離れたもので、當時でも一種の理想であつたらう。たゞかうした二方面、漁色の理想的典型（好色一代男）と、不運男の幻想（「浮世榮花一代男」や「年男」や「赤烏帽子」など）とは、共に、當時の作者の撚出といふよりも、時代心がこれを生んだのであらう。

此の不運男の戀の見聞と實行、これが更に支那小説の筋を借りて、益々、誇大に、スケールが大きくなつたのは、例の「魂膽色遊懷男」などの豆男の三部作である。（本誌に既載した。）即ちこの「好色年男」の類、上は、「浮世榮花一代男」などを承け、下は豆男物を生む。又一種の楷梯であつたらう。

○「意見早引大善節要」に就て

爲永春水（初代）、が天保十三年に死んでゐない事は、嘗て、「天保の改革と春水」として、本誌にも載せた。その折は、「修身鏡」を材證とした。今又、類似の材證を得た。それは、年表にもある「意見早引大善節要」である。此本中本型、序とも三十丁物であるが、（英泉の繪入）無給名の如く、教訓本である。如何に天保改革に恐慄したかは、これにも分る。口繪の書林店先の体にも、看板は、四書注解口增補早引節用集口經典余師といつたものである。本文の説明は略くが、凡て教訓味である。唯、その奥附が、文獻的價値がある。即ち、天保十三壬寅十二月御免（一行）、同十四癸卯二月發行（一行）、作者　爲永長次郎（一行）、畫工　溪齋善次郎（一行）東都書肆京橋南紺屋町三河屋甚助（以下他書肆、計三行）とある。即ちこれに、また春水の天保十四年存在說が、裏書されよう。故人とも何ともないからである。

洒落本の書形的研究（續）

——安永期一。天明期十六種。

○放蕩虚誕傳　　變手古山人　　不詳（春重カ）　　安永四年正月刊

●小本一冊。●論議三所（三所とは、吉、深、品の三所で、傾城買の秘訣を教へたものとして、古き方のものであらう。但し、女郎を誑すが勝、女に持てる眞義は、女に金を使はすにある、自分が使はぬに限る。といつた、大分下卑た心得を說いてゐる。時世の變を知るべし。三所共通の意味で、要するに一般論で、特に一所に觸れてゐない。）●丁數、自序一より四。序（ずいゆき老人誌）別丁の一より四。以下本文、ずいゆき老人序の丁を受けて、五オより廿三ウまで。廿四の一丁は、奥附。表は、虚誕堂（一行）變手古山人著（一行）、印（一行）、安永乙未正月吉旦（一行）。裏は、後篇　近刻の文字など。（此の後編未刊であらう。）挿繪は、本文丁數の中、八ノウ九ノオ（吉原のつもりで、黑仕立の通客の二と太夫と禿。）九ノウ十ノオ（品川のつもりで、海の見える部屋での妓と妹女郎。）十ノウ十一ノオ（深川のつもりで、廊下を來かゝる妓。障子に客の影法師うつり、對間と女中とが見えてゐる。この構圖、春重畫の版書中判「深川樓」とあるものに似たり。即ち、この本の挿畫家を春重かといふのである。彼は、小咄本「俗談口拍子」などにも描いてゐる。春重かの疑問も適當であらう。）自序とも計廿八丁也。●柱、上に放、下に丁數、その最尾は、本稿の底本、廿四ら八　とある。●自序は罫を引き、他凡て輪廓がある。

○世界の幕なし　　本膳亭坪平　　挿繪ナシ　　天明二年初春刊

●小本一冊。●元表紙三方截青か。●小說雜（遊里に交渉なし。元旦、町家の体也。脚本体。寧ろ滑

稽本紛ひの内容也。）●丁數。自序（此分罫あり）序一より二。次ぎ別丁にて、一ノォ、扉やうのもの、世界之幕無と大きく篆体にて二行、關防印、遊印雅印もある。そのウラ本文、以下二十五ォ、そのウラ、（後編世界の幕なし　次出（天明二壬寅年初春　堀野屋板とある。以上の中、五ノ六一丁あれば、誠は、本文二十四、序とも二十六丁也。●柱、無地。丁數は、ウラ綴の下、初め序一（又は序二）。後、一（又は二）、二十丁以下は、二ノ一などとある。●毎丁、輪廓がある。●飜刻本、江戸時代文藝資料第一。

○古　今　三　通　傳　　夢中散人　江陵散人　一　醉　書　天明二年初春の序

●小本一冊。●論議遊里「大通店おろしなんごに双ばんにはあらず」（双に「なら」の振り仮名）といふてゐるが、やはりその感化があらう。大通至通苦通の三論にて、併せて三通、凡て夢中に授かるといふの也。作者名も、盧生の黄粱をもじつて、江陵としたのか。とにかく、体裁、序跋本文ともしやれたもの也。）●丁數。書寢房の序、一より二。江陵山人の跋（自跋）、三。四ノォは、書。四ノウは余白。以下別丁にて、本文一ォより十三ウまで。跋（四方山人）、追丁の十四ォより十五ォまで。十五ウは、余白。計十八丁也。但し本文六ノォ半丁、書。書は、計二圖、凡て一醉の落款。●柱、凡て下に丁數。●余白の部分も凡て輪廓がある。

（備考）此の本、本文も、蜀山人の自筆に酷似してゐる。跋の四方山人謹書の一丁半は無論、或は、書寢房も江陵散人も凡てまやかし物で、結局四方山人の一手。即ち此の作、やはり蜀山人のものではなからうか。（山中氏の「砂拂」には、此の三通傳を蜀山人作として、珍としてゐられる。）とにかく、論議物としては、氣の利いた方也、

○其　あ　ん　か　　中橋散人　挿繪ナシ　午のはつ春（天明六年初春）の序

●小本一冊。●小説深川。（題は、其行火、尾竹屋の行火にあたつての作なれば也。）●丁數。自序

(署名ナシ)一。本文、追丁にて二オより二十ウまで。跋ナシ。繪ナシ。其大概、其二階、其いほり、其夜の夢、其うつり香、其ほのうと別つ。目錄の類なし。地の文少く、殆ど會話にて、練達のもの也。深川の訛り、多く出で丶面白し。或る妓が、自分名前の彫り物を消した消さぬでの入組、それに、男に惚れる第二者の妓、その三角關係、平凡なる筋なれど、素朴荒削の感じ多く、會話は前謂ふ如く練達、寛政末の三角關係物よりは、却つてよし。●柱、下に丁數。●毎丁、輪廓なし。

○百人一首和歌初衣抄（はついせう）　山東京傳　自　畫　天明七年孟陬刊

●中本一冊。●元表紙三方截茶。題簽は、初衣抄。●雜。(百人一首の枉解物。作者系圖など滑稽に作りなし、且つ、枉註あり。准洒落本。)●丁數、京傳序(ロノ一)。同自端書(ロノ二オよりロノ四オ)。口繪(ロノ四ウよりロノ五オ。)凡例やうのもの(ロノ五ウ)。以下本文、別丁一より三十六。三十七ノオは、京傳の奥書擬ひ。三十七ノウは、雜告(京傳の變名也)の跋。以上計、四十二丁也。次ぎ、蔦屋の目錄一丁半。●版元、蔦屋。●柱、無地。丁數は、ウラ綴の下、ハツロノ一。又は、ハツ一。●毎丁輪廓あり。本文は、上欄を仕切りて、註を載す。

○田　舍　芝　居　萬　象　亭　無　落　款　天明七年初春序

●小本一冊。●小說雜(遊里本ならず。命題の如きものにして、萬象亭が、遊里物全盛のため、その逆を行きたるもの。地方物の機運を起したる、殊に、三馬・一九の此類の陳勝也。)●丁數、扉(竹杖爲輕、森羅亭万倍、かけ合にてほめ言葉を述ぶる体の處。此の兩者、共に御自身の變名也。)そのウラ即ち、「ホメ詞」の裏より同二裏まで、このホメ詞也。次ギ、別丁にて、序一より序三まで、風來山人門生無名子の序。(これも御自身か。)。次ぎ跋一、(筆者、狐面堂柳郷の跋。この者、萬象亭の門人にして、かねがね萬象亭の作を筆耕する男として、萬象亭作の洒落本に、例へば「福神粹語錄」などに、多くその名現れたり。)次ギ、後序(七珍萬寳)、此分別に一丁。次ぎ本文、一より卅

八表まで。三十八裏、門人千差萬別、天竺老人、連署の識語。(これも御自身ならん。)。總丁數、本文、序とも、四十五丁也。本文三ノウ四ノオ、挿繪。●柱は無地。丁數は、ウラ綴の下、序一、跋一など。本文は、田ノ一とある。●毎丁、輪廓あり。●飜刻本、帝文廿二(風來山人)など。
(備考)此本、享和元年に滑稽本として改刻再版。天明版洒落本と、多少の異同あり。(序跋など)此分の飜刻は、滑稽文學全集第五卷所收のものである。

○古 契 三 娼　山東京傳　無 落 款　天明七年春刊

●小本一冊。●小説三所(吉原、深川、品川)。●總丁數、作者自序、ロノ一表よりロノ三表。山王町鳶の者あふさか市事、かふ哉自書の序、ロノ三裏よりロノ四表まで。ロノ四裏よりロノ五裏へ半丁づゝ、三面、三所の妓の風俗、立姿。以下本文、別丁にて、一表より三十五裏まで。●底本、扉あり、子持輪廓にて、右、中、左に三線を引き、右、遊里雲談 京傳 。中、故契三娼。左、陶淵明菊壽帶青樓捨僧慧遠遊(一行)南驛稱山陸子靜乘猪牙入波堀(一行)。●毎丁、輪廓あり。●飜刻本、德川文藝類聚、洒落本。

○野 夫 鑑　駿陽東湖山人　歌 麿 畫　天明丁未(七年)五月雨の比の序

●小本一冊。●元表紙、茶、三方截。題簽は、子持輪廓にて、野夫鑑　全。但し此の地色に黄を摺り込む。●雜(野夫は、野暮ならず、藪醫の野夫である。即ち俑醫罵倒の一書。作風は、談義。)●丁數。四方山人序、二丁。駿陽竹室梧泉序、一丁。自序、一丁。(以上、一より四)以下本文追丁にて、五オより、二十ウまで。挿繪、醫の体、歌麿畫にて、七ノウ。此の歌麿の落款、硬し。最尾に、奥附半丁。●版元、蔦重。●柱、下に丁數。●毎丁、序以下輪廓なし。●複製本、「本道樂」發行、駿遠豆叢書第一編。但し、挿繪等に於て、遺憾多し。

○妓 者 虎 の 卷　田にし金魚　挿 繪 ナ シ　天明七年仲夏序

●小本一冊。●小説藝者。●丁數、追丁にて、一表より二表まで、序。二裏、目錄。三表より本文。但し六ノ七一丁あり。（此の間、元摺「妓者呼子鳥」には、湖龍齋の插繪、庵に入る露時雨子と件の小僧とを描く。）及び、二十丁一丁分（この分、ヒラキにて、同じく湖龍の插繪、客と妓、妓は文身する圖ありたる也。）を缺く。以下、三十四裏まで。但し原本「妓者呼子鳥」とは、末尾などに於て僅かに文句の異同あり。即ち丁數、誠は全三十二丁也。●柱、上に妓者、裏綴の下に丁數。●每丁、輪廓あり。

○替理善運　山跡蜂滿　歌麿　畫　天明八年正月刊

●小本一冊。●茶三方截表紙。●題簽、黄を刷込みて、子持輪廓、替理善運　完。●小説女淨瑠璃師匠。●丁數。自序、一オより三ノオ。三ノウは、意氣眞人寫の半身女性。四ノオは、凡例の如き文字。四ノウは、餘白。本文、追丁にて、五オより廿九オまで。廿九ノウは、奥附。書肆名は、馬喰町江崎屋吉兵衛版。十五ノウ十六ノオ、うた麿筆のヒラキ圖。●柱、下に丁數。●每丁、輪廓あり。

●翻刻本、江戸時代文藝資料の洒落本。

〔備考〕。此の本、版本の大部分を重用した補足後摺改題本「歌妓酒鏡」（若井兼三郎序）、後に出づ。なほ、その項に讓ふべし。

○傾城觽　山東京傳　自　畫　天明八年正月序

●小本一冊。●元表紙三方截茶。●題簽、傾城觽　全、但し無地、輪廓なし。稀書複製會本は、青の地色、模樣入にて、子持輪廓付、此方有摺か。●雜（松葉屋以下、六樓の遊女評判記繪入本。俳諧譜に比したりと自序にあれど、寧ろ評都酒美撰を摸したるか。●丁數、自序、ロノ一オよりロノ三オまで。ロノ三ウは、目錄。ロノ四丁分、凡例。以下別丁にて本文、一オより廿九ウまで。三十オより、附錄、四家の言語解があつて、卅一オまで。卅一ウは、名よせ、及び後編の豫告。次ぎ半丁蔦重の目錄。●版元、蔦重。●柱、無地。ウラ綴の下に、ケイロノ一、又は、ケイ一。●每丁、輪

廓がある。●複製本、稀書複製會の第四期第十四回。

○虚實情夜櫻　　梅松亭庭鶯　　無　善　款　　天明八年初春序

●小本一冊。●小説吉原。●丁數、自序、一オより三オまで。口繪、二ウ四オのヒラキ。目錄、四ウ。以下追丁にて、本文、五表より四十三表まで。自跋、四十三ウより四十四ウまで。但し、本文三十五ノ三十八あれば、缺は、三丁缺、四十一丁也。●柱、無地。丁數は、ナテ綴目の下。●毎丁、輪廓がある。

○青樓五ッ雁金　　梅月堂梶人　　葉川亭永理　　天明八年睦月序

●中本一冊。●小説吉原（五人男に假る。）。●丁數、自序、一オより三オ。三ウは、目錄。以下別丁にて本文、一オより四十オまで。四十ウより四十一ウまで、淨樂軒の跋狂式。但し、四十、四十一は、丁數を打たず。中、四オ、半丁分、雁金（文七）と妓との透見、四ウ五オのヒラキ、雷（庄九郎）と妓との房中。この一丁半に亘る挿繪は、珍らしき趣也。●柱、下に丁數。●毎丁、輪廓がある。

［備考］作者を梅月堂といふ、自序には、然し讀めるが、本文末には、林月堂かなんどとある。林と梅と、何れか。本文末は、恐らく誤りか。なほ、此本、「巣拔五所紋」（寛政二年頃）の前編に相當す。

○會稽錢袋　　唐洲（京傳の事也）　　うた麿畫　　天明八年春刊

●小本一冊。●小説深川（會稽に人物名を假る。）●丁數、序一より序二、京傳の序、序三より序四、唐洲の自序。本文、別丁にて一より十七半。最尾（十八丁表）、本文三行分ありて、次ぎ線を引き、新版狂歌志　唐洲畫　全　近刻。その左、通油町蔦屋重三郎版。とある。全丁數廿一丁半。本文四ノウ五ノオ、うた麿の畫、右、髮結床、髮結の体、左、暖簾をくゞる客。その暖簾に、蔦の紋あり。版元の意匠。●版元、蔦重。●柱、上にぬか袋、下に一（又は二）。但し序四丁半は、柱、上下無地。●毎丁、輪郭あり。●飜刻本、帝文廿六（洒落下）。こんにやく本第一。

○夜半の茶漬　　山東鶏鳴・鶏吉（京傳）　　京　傳　畫　　天明八年春序

●小本一冊。●元表紙、栗三方鑑。●小説吉原。●丁數、口ノ一オは、通客と太夫、路上の圖。口

ノ一ウは、外題と作者名など。京傳序、口二オより口四ウまで。、口五ノオウ、雞告と唐洲のかけ合の序。以下別丁にて、一オより二十四オまで本文。廿四ウより廿五オ、後序。廿五ノウは、餘白。次ギ、半丁分、丁附。本文二ノウ三ノオ、挿繪。●版元、蔦重。●柱、無地。ウラ綴の下、丁數。●毎丁、輪廓あり。●飜刻本、帝文十五(京傳)。及び江戸軟派全集(洒落本第二)。

[備考]本稿底本、袋あり。數度摺、積夜具の体。下に傾城買秘密話夜半の茶漬　と白ヌキ。圖案よし。

○吉原楊枝　京傳自畫カ　天明八年春序

●小本一册。●元表紙三方藏茶。題簽、白の無地に、行書体にて、吉原やうし　完。●小説吉原。●丁數、序一、(笹葉鈴成)。序二(自序)。本文、別丁一より廿八表まで。但し、廿二、廿三、二丁分、又とも何とも斷らずして、複丁あり。即ち此の二丁分を加算すれば、計本文は、廿九丁半也。(中、挿繪、四ノウ五ノオの一丁分を含む。) 本文丁附の廿八裏は、青樓居續日記　全　近刻。青樓遊君あふむ石　全　近刻の廣告あり。次、跋二丁分、自跋にして、一丁半、即ち跋二ノ裏は、汐干のつとより、咋夜の口舌の十種の狂歌本・洒落本などの目錄。總計卅二丁但し複丁二とも誠は卅四丁也。●柱、無地。丁數、裏綴目の下。●毎丁輪廓あり。●飜刻本、江戸時代文藝資料第一。人情本全集第八。

○傾城優(なさけ)曾我　瀬川如皐　無落款　天明八年春序

●中本一册。●雜(お染久松などを主題にせる、脚本体のもの。)●丁數。序一。次ぎ別丁にて、一オは、口繪、お染と久松。一ノウより本文、十六ウまで、第一ばん目。以下、又別丁にて、第二ばん目野崎村の段。一ノオは、口繪、久作・おそめの姉岩瀬・油屋左四郎・お染の四人を描く。此分本文、一ノウより十二ウまで。次ぎ、又々別丁にて、お梅粂之助の分。その一ノオは、兩人の繪。(凡て此の口繪計三圖、歌麿の若描き風。) 此分本文、一ノウより十六ウまで。次ぎ半丁、初日、お染久松、云々。二日目お梅粂之助云々。板元の名。●板元は、下谷竹町、はな久。(このはな久、柳樽本を出した本屋也) ●柱、無地。丁數は、ウラ綴の下。初め、單に、一、二。次ぎ、の一、の二。次ぎ、梅一、梅二など。●毎丁、輪廓あり。●飜刻本、賞奇樓叢書、第二ノ三。

昭和三年六月二十八日印刷
昭和三年七月一日發行

江戸軟派研究　第二十五冊

定價貳拾五錢　送費貳錢

本文

校訂

女里彌壽豊年藏（上）

校者はしがき・凡例。〔以下原本飜刻〕

序―目錄―本文、四季三番三よりよし原丹前まで。

玩世道人に就て

別册第一

（通編第七十一册）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

玩世道人に就て

玩世道人は、初期洒落本の「閑居放言」及び準洒落本の「小説白藤傳」を作してゐる男で、閲歴不詳の人物であつたが、稍輪廓を明らかにするを得た。先にその輪廓を知り得ただけを結論づけると、明和安永頃、江戸にゐた詩人の有數なるもので、弟子も多く、著書十數種、最も詩に關するものが多いのである。從つて前掲二種の戯作も、此の詩の系統を引くもので、始めてそれが、彼としては在り得べき副産物であつたと肯づけられるのである。

據處は、彼の著、詩書の一たる「詩門一覽」によるのである。寓目の物、その初編一册、半紙本型。今、若干此の書の解題的記述を試みよう。

此本、序文二個、一個は、明和庚寅夏　崎陽石之觀順撰識としたもの、中に、玩世道人が當時詩門の宗たる事を推奬してゐる。玩世道人の生地、經歴は不詳であるが此の順撰なるものも、彼と詩の交渉が深かつたやうに書かれてある。次の序文第二は、これは自序であつて、明和庚寅孟夏玩世道人實順識とある。實順といふのが、彼の名であつたらうか。尚、此の本卷末には、東部　小山爲政、田島貞榮、山本義質三名の校とあるから、此の三者は、彼の門人であつたらう。玩世道人、とにかく不詳であるが、此の當時は江戸にゐた事は、東武玩世道人撰と此書にあるから、確かである。尚、彼の著述目錄やうのものが、此の「詩門一覽」初編奥附にある。

■唐詩譯説（古詩部四册絶句部二册五律部二册出來）□同排律七律部（嗣出）■國字分音詩海錦帆（初編八册出來、二編八册嗣出）■大東名勝詩（畿内部出來）■唐詩結網（四册出來）■閑居放言（北里歌、出來）■淨土百詠（一册出來）□熟字合五千字選（二册近刻）■詩門一覽初編（出來。二編近刻）■勢陽風雅（二册出來）■增訂唐詩選（二卷出來）

右の中、■の分は、出來とあるもので、即ち刊本存在の物と見てゞあろ。近刻は、不詳であるから除外した。此外に、年代不詳（但し安永を下らざらん）の准洒落本「小説白藤傳」があるのである。即ち確定的著書約十種。

尚、此の「詩門一覽」初編の版元（前掲數種の既刻追刻の分も同じく）は、此本奥附に、明和七庚寅歳五月東都書林中屋喜兵衛とあるこれであらう。但し、此本見返しには永昌館藏とある。是れ或は、玩世道人の謂であらう。

寄贈紹介

○未刊隨筆百種　第十六卷　三田村鳶魚校

眞佐喜のかつら、雜交苦口記、角力め組鳶人足一條、愚痴拾遺物語など計六種所收。眞佐喜のかつらは、一九三馬などの戯作者傳資料に富み、最もよし。雜交苦口記亦珍事遺聞頗ろ多し。校訂相變らずの嚴正、底本として最も信用するに足らん。出版界濁濁の際、此の本續刊の雄姿愈々冴えたりを覺ゆ。江湖の愛讀を奬む（非賣品。四六判五百二十四頁。東京市牛込區富久町八四、米山堂）

○久米の平内研究　礒ヶ谷紫江編

高岸拓川氏の平内遺蹟等計八家の平内考を編む（挿繪豊富、装幀亦よし。非賣品。四六判一二〇頁。東京府下和田堀町和泉一七〇、墓蹟發行所）

○書物の趣味　第二册

新村出氏の伊曾保行脚、藤井乙男氏の淺井了意の事など諸家の記述を集む（此種雜誌の冠たるべく、内容凡てに遜色なし。藤井氏の了意が研究、予らにとりては最も嬉しきもの也。装幀用紙最も佳良）、壹圓貳拾錢。四六二倍、一五八頁挿繪數葉。京都市石藥市河原町大猪熊町六、書物の趣味社）

○歌舞伎研究　第二十五輯

化政期研究の第一。劇場、劇作者、衣裳などに就ての論、岡本氏以下數家の執筆、斯界の權威たる實を失はず（壹圓拾錢。菊一三〇頁余。歌舞伎出版部）

（寄贈紹介のつゞき）江戸文學第一號（東洋大學歌舞伎研究會にて創刊せられたるもの。山本英隆氏の長篇中村宗十郎の研究などを收む。）□圖書館雜誌（六月號）□美之國（七月、浮世繪特輯號。例の報知展の肉筆板畫の口繪挿繪頗ろ多く記事亦豐富。）□（以下凡て七月號）書物禮讃□國學院雜誌□水甕□民謠詩人□歴史地理□風俗研究□あく趣味□柳樽研究□川柳鯱鉾□歌舞伎□道頓堀□文藝時報□圖書館雜誌□北隆館月報□旅行登山新聞□（以下八月號）文藝□國語と國文學。

著者より

八月九月の二册分を別册として、女里彌壽豐年藏の飜刻に充てた。此校本原稿は昨年夏出來、爾來二三の出版書肆を持廻つたものであるが、何分出版界の現況と、女里彌壽は襯衣だと早合點する現代には向かぬので、先方が愚圖ついてゐるのも尤もである。で思ひきつて本著を利用する事にした。高野氏の歌謠集成にもいづれ出るであらうが、自分のは原本の儘の飜刻、それに使用の底本も高野氏のは七十五首本で違ふと思ふから（一説には、震災で燃えた曼魚氏本の複寫本との事であるが）彼此並び存するもよし、且つ對校に便であらうと思うての事。御愛藏ありたい。家族現在十人、凡て健在。

（七・廿四）

定價表

一册	貳拾五錢	郵税貳錢
六册分	壹圓四拾錢	税共
十二册分	貳圓八拾錢	同

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和三年七月二十八日印刷
昭和三年八月一日發行
（貳拾五錢）
送費貳錢

禁轉載

名古屋市東區車道東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區車道東町一五七地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

校訂

女里彌壽豐年藏

尾崎久彌校

はしがき

めりやすが、江戸長唄の一派として生れたやうではあるが、寔はその唄手が主に長唄の名匠にあつたといふだけで、寧ろ江戸長唄とは別物に取扱ふべきであつて、（めりやすの純粹物をいふ。その中の長唄もの―即ち長篇物は除外）しかも洒落本などの小說的所產と共に、寶曆明和の遊里文藝の最たるものであることも、これらは凡て一般常識であらうから冗くは謂はない。且つそのめりやすを集錄したその最初の物に此の「めりやす豐年藏」がある、しかも此の原本稀覯本の一たる事も、である。自分は、此の「豐年藏」の全鱗を最初に紹介するの惠まれたる光榮を謝せざるを得ない。

此校本の底本、純初摺本と認めらるゝものである。長短計七十四首本、その中の十數首は、江戸長唄の長篇物であるが、他は凡て所謂めりやすである。奥附によれば此本寶曆七年正月の刊、即ち此頃、江戸長唄といはんよりも寧ろめりやすの名を以て、江戸長唄系純めりやす系の凡てを一括、稱してゐた事が確められる。底本、青表紙半紙本型、數葉づゝの稽古本やうを合綴したる形式。江戸長唄系のもの、三枚乃至四枚。めりやす物は多く一枚。初めに、序及目錄の二丁を附す。此の校本を發表するに就て、日本歌謠史（高野氏著）の謂ふ豐年藏七十五首（小夜あらしを別に載す）との異同又は初摺後摺との檢覈、又は、後出めりやす集成本との異同、又は「めりやす袖鏡」の類との比較の如き、凡て予が別稿「めりやす豐年藏私記」に讓る。

最後に此の校本成るは、一に東京佐藤鳳二氏の恩惠、同氏が此の原本貸與の便を與へられ、且つ本校本刊行の受諾を與へられたるによる。此の機に臨んで、自分は篤く同氏の好學的厚意に謝したい。しかも同氏は從來、此の原本をして、東京同好の誰人をしても窺はしめず、筐底に祕せられてゐた、それが自分の僅かなる研究著書に對する過分の好意により、進んで此の原本を無制限に自分に貸し出されたのである。私情には亘るが、嬉しからぬでもない事を述べておく。

昭和二卯年仲夏　久彌誌

凡例

一、本校本、凡て原本のまゝ也。但し印刷の都合上、各丁に附せる譜章（ハ・ヽ點）のみは省く。漢字及び假名の個處等、凡て原本のまゝ也。假名遣等一切更めず。原本にあるもののみ、讀點をを附したり。清濁音、及び捨假名の所在、一切原本のまゝ也。

二、原本の面影を知らしめんため、各首をはりに、その所要枚數

を示す。尙、原本は、本文、一行十五字位、六行半丁。（あらきもの）、一行廿五字位、六行半丁（最も細かきもの、但し此分、少く、且つ純めりやす物に無し。）一行十二字位、六行半丁（此分、純めりやす物に多し）のいろ〳〵、凡て六行也。（校者）

〔校者曰、以下凡テ原本ノマヽ也。〕

夫大和歌ハ人の心を種として萬の言葉とハなれりけり其餘風に絕り當世の長唄めりやすの諷唄華に囀る鶯の美音水に住る蛙の口さミせんも自ら君が代の萬歳を壽き艶なる哉ふりそて留袖の群來て予が拙書を慕ひ此うたを寫してくんなあのめりやすもイヤわつちにも必へといづれ辭難く筆ものするにいさまなければ世に翫ひ一トふしを集めて見やすく讀やすく六行にして女里彌壽豊年藏と題して梓に鏤る事爾なり（以上、口の一丁表）

國太ゝり 四季三番三	ゆまつしやつきやう	菊之亟 彥三郎 ミやこ鳥
菊之亟 今樣三番三	長十次 難波の春駒	七三郎 枕たんぜん
八五郎 おさこ道成寺	菊之亟 新はるごま	
富十郎 京鹿子道成寺	京人ぎやう	
菊之亟 娘道成寺	条太郎名殘	

同らん曲 相生獅子石橋	門太郎名殘
はなよさ 富十郎石橋	菊之亟 はごろもの曲

（以上、口ノ第一丁裏）

山ざき與次兵衛	なきのいし	はぎのつゆ	さゝの松
しんまつ風	いもせ川	むめのかげ	ミつの鳥
吉原たんぜん	おもひ川	あけのうらミ	しろたえ
むけんのかれ	戀ごころ	さりのれ	なつごろも
しんむけん	みだれがミ	しのぶぐるま	ふたつもん
おひむけん	ひさり心中	おさこなび	うきくさ
長五郎髪すき	あけのかれ	こひばなし	江ぐち
はなのゑん	わかれざか	さきさけ	世わ五郎

（以上、口ノ第二丁表）

井づゝ	そでづきん	さりのこゑ	さゝのはゑ
ゆびきり	かゝそで	女さんのミや	
ゆき	松にさくら	十三がね	
おぼろ夜	華のさゝ	あきの夜	
うつり香	あひのやま	ゆかりの月	

わかさ	はなのか	里のにしき
まんれん草	いれぼくろ	さかづき
さとの花	はな野	ほたるび
‖‖	‖‖	たかさご

(以上、ロノ第二丁裏)

四季三番叟

ちはやふる神のひこさのむかしより合此きミ久し
ひさしかれとぞいわゐそよやれいちやざんざや合
合およそせんねんのつるハ合上ばんぜいらくとうたふた
りまたばんだいのいけのかめハ合かうにかうに引合さん
きよくを合いたゞきたきの水ハれい〳〵とおちて合
よるの月は合あざやかにうかんだり合なぎさの引いさ
ごは。さく〳〵として合あしたの日のいろをろう
すありがたさ。てん引かたいへいこく合ごあんをんち
やうきうと。君をいわひて合ちはやふるひとさし
まハうまんざいらく〳〵合モミヂシきミ様もわれら
もうかれてとりなりや引さておもしろや取わけめで
たやものにこゝろえたるあとのたゆふどのハもと
のざしきにおも〳〵とおなをりそゑ合さあらなふ
すゞをまいらせう合すゞハゑきろの合ヤアイヨノそ
れよのふがくのおとがナしやん〳〵とうつてハな
たいこのおとがしてでんからとうつハ〳〵神かぐ
らミかぐら合よかぐらいつもとんどゝなるが合よ
い合つるのはがさねちよまでもいろにかうはく枝
をたれかめハばんだいのいけのせいがいなミをち
らしてどうどうち合入日をまねくまひの袖めなミ
となり合おなミとなり合まつふく風のじゆもんを
となへとこしなへなるよの中やとひや引うしをそろ
へてちはやふる。せんしうらくこそめでたけれ

(以上、三丁)

今様四季三番叟

へきミが代ハちよをかさねしきしのまつ合こずへ
〳〵にすごもりて合鶴の羽をのすそよや合どんと
ゝ。なるハたきの水。れい〳〵さら〳〵。あさや
かに。うかんだりやへあめがしたこひとなさけハ
うらおもて。ほれて見さんせいとしけれどもかと
ござる。よしやれうき名の立田川。ながれもあへ
ぬもミぢ葉ハ。たへずこうよう。たへずとうたり。

ありうごうあり〵ありはらの。なりひらさんにもまきやせまい。あゝまきやせまいかり衣の。すがた人ハ空ごとよなふいたづらやへなるとならぬハ袖ふる手のうち合ごうじやゐ合しめてしやんこへ。ゆるめてにこ〳〵合あふ夜。あハぬよちはやふる合神のむかしハ二ばしら。天の岩戸をひらくや。梅の見どへ。花の姿のいとしらしへ春ハ万代。花のさんさかりハ合よしの山。お室の御所のよいさん櫻くんしゆの中をきた山いなり。山の初むま合ごんせ〳〵夕すゞミ。かも川の。川のせぬれにそぬれしぬるゝ小女良こむすめたて。ものとほめてハ。それ。それ〳〵〳〵と。袖をひくへ秋ハ野山の色つくもミぢ。枝にさりとハ鹿もこがれて妻こふる合さりとハ〳〵ほんにへ。思ひきるせときらぬせと。そこのつめたい雪のよやさりとハ〳〵ほんにへ。さをなぐるまのよるべなき　（以上、二丁）

江戸がのこ男道成寺

つゞミ詞へみだれごゝろやくるふらんへ花のすがたのこざくらにかほりゆかしき花ざかりこすゐ〳〵をたをらんとハあゝうらめしの人心へにくやあらしもよぎてふけへはなのあたりをよぎてふけへふけ行かねのつく〲とおもひまハせバ身のつらさ人めをしのぶ關のとの明ていハれぬわがこゝろ二上りへいにしへにかハらぬ君がおもかげを見るたび〳〵にかハゆさのおもひハいとゞますかゞミくもらぬ心有あけのつれなく見へしわかれよりわするゝひまハないハいなわれが戀ぢハはかまのかミよそでもないとさあいひかハしほんににくいじやないかいな人のこひなれおいてたもとに花のつゆへおゐど一ばんふつて見とな十もんじやりハおいゐのそれおてんとてんのなげざやへ又と有まいせかい一ッぱい大つ鑓石づきつかんでしつかりとゐい〳〵〳〵このよいやさゐい〳〵〳〵このよいやさへばんにやかならず忍ぶのミだれふけてへ妻戸をほと〳〵たゝくハ相づの手くだハくだ鑓まくら鑓千代もやちよも替らぬ〳〵國の大鳥げへあたりにめを付見まハして鐘のあたりにめをつけ見まハしてかねの有じをさいわいに引かついてぞ入にける〳〵　（以上、二丁）

京鹿子娘道成寺

へかねにうらミハかず〳〵ござるしよ夜のかねをつくときハしよぎやうむじやうとひゞくなりごやのかねをつく時ハぜしやうめつぽうとひゞくなりじんしやうのひゞきハしやうめつめつゐいりあひハじやくめついらくとひゞくなり聞ておどろく人もなしわれもごしやうの雲はれてしんによの月を詠め明さんへいハずかたらぬわが心ミだれしかミのみだるゝもつれないハたゞうつりぎなどうでも男ハあくしやうものさくら〳〵とうたハれていふてたもとのわけふたつつとめさへたゞうか〳〵とどうでもをなごハあくしやうものミやこそだちハはすはなものじやへ戀のわけ里ぶしもだうぐをふせあミ笠ではりといきぢの吉原花のミやこハ哥でやハらぐしきしまバらにつとめする身ハたれと伏見のすミぞめぼんなうぼだいのしゆもく町より難波四すぢにかよひきつぢにかぶろだちからむろのはやざきそれがほんにいろじや一二三四よ露ゆきの日しものせきぢもともにこの身をなじミかさねて中ハまる山たゞまるかれと思ひそめたがゑんじやへむめとさん〳〵さくらハいづれあにやらをとゝやらわきていハれぬ花の色へあやめかきつばたハいづれあねやらいもとやらわきていハれぬ花の色へにしもひがしもミんな見にきた花のかほさよをへ見ればこひぞますへさよをへかハゆらしさの花むすめへ戀の手ならひつゐ見ならひてたれに見しよとてべにかねつきよぞミんなぬしへの心中だておゝうれし〳〵すへハかうしやにナそふなるまでハとんといハずにすまそゞへとせいしさへいつわりかうそかまとかどふもならぬほどあひにきたふうつりりんきせまいぞとたしなんでミても情なやをなごにハ何がなるとのご〳〵の氣がしれぬ〳〵あくしやうな〳〵氣がしれぬうらミ〳〵てかこちなきつゆをふくミしさくら花さハらばおちんふぜいなりへおもしろの四季のながめや三ごく一のふじのやま雪かと見れバ花のふゞきかよしの山ちりくる〳〵あらしやまあさひ山〳〵を見わたせば(以上、上ノ三丁)哥の中山いしやまのすへの松やまいつか大江山いくのゝ道のとをけれど戀ぢにかよ

ふあさま山一夜のなさけありま山いなせのとのはあすかきそやままつち山わがミかミやまいのりきた山いなり山ゑんのむすびしいもせやまふたりが中のこがね山花さくゑいこの〱ゐばすて山ミねの松風音羽山入あひのかねをつくば山とうゑいざんの月のかほばせ三笠山へたゝたのめうぢがミさまがかわゆがらしやんすいづものかミさんとやくそくあればつゐ新まくらさとに戀すればうきよじやへふかい中じやといひたてゝこちや〱よいしゆびでにくてらしほざいとしらし花にこゝろをふかミ草そのに色よくさきそめてべにをさすがしなよくなりよくあゝすがたやさしやしほらしやさあ〱そふじやいな〱さつ きさミ だれさうとめ〱田うゑうたすそやたもとをぬらしたさつきへよしのはつせの花もミぢさらしなこしぢの月雪ハしゝさらでんもときをしるげにありがたき法のにハしやうちやくきんくごゆふひの雲にかゝやきてへうたふもまふものりのこゑなんでもせいァヽなんでもせいはるハ花見のまくぞゆかしき夏ハやかたのふねゆかしよい〱よい〱〱ありやゝこりやゝよいとな秋ハむさしの月ぞゆかしきふゆハ月見のちんゆかしよい〱よい〱〱ありやゝこりやゝよいさなうきにうかれて第一中うにまよふたさんげ〱六こんざいしやうなむふざう明わう〱あゝなんでもせい〱うごくかうごかぬかなまくさばんだばさらだこりやうごかぬぞしんごんひミつでせめかけ〱じゆずのありたけやつさらさ〱せんだまかろしやななんのこつちやへそハたやうんたらなんのこつちやへといのりけるへきんせい東方しやうりうしやう〱きんせい西方びやくたいびやくりう一だい三ぜん大せんせかいのごうしやのりうわうあいミんなうじゆあいミんしきんのみきんなれバいづくに恨の有べきぞといのり祈られとびあがり御法のこへにこんじきの花をふらせしその姿げにもたへなるきごくかや

（以上、下ノ三丁）

百千鳥娘道成寺

ワキ　つくりしつミもきハぬべしかねのくやうに承らん

〱へさなきだにおもきが。うへのさよ衣我つま

ならぬ仇人にまよふ心の戀のふちしづミも。やらぬものおもふ人めを忍ぶそめぎぬのこひしゆかしきねんりきの。つくりしつミもせめてさてれんぼのやミのはれやらぬ月ハほどなく入りしほの〳〵けむりみちくる小松ばら。はるの日ながくまだくれぬひたかの寺にぞまいりける〽此間ゑび蔵ひろ次狂げん有〽うれしやさらバまハんとてゑぼしをしばしかりにきてあふぎおつ取いろ〳〵のすでにひやうしをすヽめけり〽扨も名高きしらびやうし天のうすめのミことよりなさけ色ねにひくいと竹の。さヽのひとよのちぎりもあろにかハい〳〵もミな一トさかりつらい心をつゆほどもしらいで。月ならバ十三ン夜。花のゑんとて。おもひそめ戀の手ならひつい見ならひてふかきどのごに命もほんに三とせ四とせの思ひをすてヽ物もいハずにいや〳〵とせひにいやならのきもせふぞもとのしらぢにしてもとしやむかし思へバいまさらによしなのうらミ。恨かこつもはづかしや〽花の外にハ松ばかりくれ初てかつこひゞくらん〽此間かつこまひ〽やよひころや春風のやなぎの糸のたよ〳〵としだれ柳か露のそひねの玉柳〽玉のふへのね聲すミてぼさつもこヽにゑうがうの天のつゞミか打ッなり〳〵おもしろや〽よるべ定ぬ浪まくら〽戀しき人のねをや出さんしらべも夢かまぼろしと今ハ太このうつヽなや〽打や太このねもすミて〽さつさめぐれや二ッたいこのねもよし〽さつさどん〳〵どヽ〽どヽ〽つく〳〵でんづくどんづくどんからが〳〵これハ扨置〽たつた川にハちんちりもミぢをながす我ハ君ゆへナアうき名をながすのほんほさどなどさよいよへ〽さあ〳〵すまやあかしのまんまる月のめいしよ松ハからさきナアかすミハと山のほんほさどなどさよいよへ〽さあ〳〵〽忍ぶよの〳〵さまがつてかとはしりでヽミれバよハふく風につん〳〵つまどをほと〳〵きり〳〵〳〵やつきりきり〳〵ミ

ねハあらしのおさ斗〽君と我とが中ハむすぶの神様しだい鳥ハものかハつらいハかねよのひとり待よハにくてらし。かハるまいとのいふたとバがうそかいなそんれもそなたかへうき名ハまゝよ結ふのかミ様しだい鳥ハものかハつらいハかねよのひとり待よハにくてらしかわるまいとのいふたとバかうそかいなそれもそふだかへかねをうらむるつミふかし〽げに有がたき法のにハしやうちやくきんくご夕日のくもにかゝやきてぼさつもこゝにらいくわうのよそほひハもくぜんのきざくたへなりや〽（此間しやつきやう有）〽さる程に〳〵寺々のかね月おち鳥ないてしもゆき天にミちじほ程なく此山寺の江そんのぎよ火うれひにたいして人〳〵ねむれバよきひまぞと立まふ様にねらひ寄てつかんとせしが思へバ此かねうらめしやとてりうづにてをかけとぶぞとミへしが引かついてぞ失にけり〽（此間七三鄭かねのかたりあり）。〽東方にござんせ〳〵とみかおかにハ二けんぢや屋の花ざかり南方にしな川入江の色ハ盡せぬ舟遊び〽西方にしかも柏木ゑもん櫻のさかりへ北方にわけもよしハら太夫かうしにさんちやつぼねにはし女郎〽うきにうかれて第一ちううにまよふたさんげ〳〵六こんざいしやうなむふどう明王〳〵〽うごくかうごかぬかなまくさまんたばさらだこりやうごかぬぞしんごんひミつでせめかけ〳〵じゆずの有だけやつさらさ〳〵せんだまかろしやな何のこつちやへそハたやうんたら何のこつちやへ〽（此間海老藏廣次いのり有）〽きんぜい東方じやう龍じやう〳〵きんぜいさい方びやくたいびやく龍きんぜい中王かうたいわうりう一だい三千大せんせかいのごうじやのりう王あいミんなうじゆあいミんしきんのミきんなれバいづくに大じやの有べきぞといのりいのられとびあがり身ハひざくらのほのふとなつておひめぐり〳〵行ちがい〳〵くるり〳〵くる〳〵〳〵〽よぶもさけぶも恨のこたまかすミにまぎれてうせにけり　（以上、四丁）

相おひ獅子

〽花とび。てふおどろけども人しらず。われもま

よふやさま〴〵の。四季おり〳〵のたわむれハ。其ものごにあハれなり。てふやこてふのせめてしばしハ手にとまれ。見かへれば花にまぎれて見へつかくれつ。いろ〳〵のすがたやさしき夏こだちハこゝろづくしのなこのとし月をへ。いつかおもひのはるゝやら。こゝろひとつにあまるやらよしや世の中ハ花にたハむれえだにふし。おじゝめじゝのあなたへひらりこなたへひらり〳〵ひらり〳〵〳〵とまひあそぶ。八しき九しきのふんじんの亂びやうしハ。それてわれ〳〵も心ミだれて足もたまらずたきのおとのしたハないりもしらなミのこくうをわたるがごくなり夏の夕ぐれに山〳〵を見わたせバおりしも松風にあをばすゞしく吹さそふ。はら〳〵はつと鳥のむれゐるハ。ときもこそあれひさしほさてもおもしろや。又ハほとゝぎすかきねにむすぶうの花や。ぼたんしやくやくあつちりな。こつちりな。あちりこちりすぢりもちりてゑりくりゑんじよのおく山のかげも。戀といふとハたれもしる物をむごやな。何ものか月もかたむくほの〴〵かねの。つらやうらめしわかれやまさる。なみだ玉ちるあさほらけ。人め。忍べバ。うらミハ。せまし。ためにしづミし戀のふち。心からなる身のうさを。やんれそれハ〳〵へまことうやつらや〳〵思ひまハせバむかしなり。ぼたんにたわむれしゝのきよくげにしやつきやうの有さまハ。しやうかの花ふりしやうちやくきんごゆふひの雲に。きこゆべきもくぜんのきごくあらたなり。しばらくまたせ給へや。ゑうがうのじせつもいま。いくほどによも過じ。しゝとらでんのぶかくのミきん〳〵ぼたんの花ぶさにほひミち〳〵。たいきんりきんのしゝがしら。うてやはやせやぼたんぼう〳〵くわうきんのずい。あらハれて。はなにたハむれ枝に。ふしまろびげにもうへなきしゝわうのいきほひ。なびかぬくさ木もなきときなれや。ばんぜいせんしうとまひおさめ。〳〵。しゝの座にこそなをりけれ（以上、三丁）

英執着獅子、

花とび蝶おどろけ共人しらず〳〵我もまよふやさま〳〵に四き折〳〵のたハむれハてふよ小蝶よせめてしバしハ手にとまれ見かへれバ花の木陰に見へつかくれつはをやすめすがたやさしき夏こ立〳〵心つくしのな此とし月をへいつか思ひのはるゝやと心一ッにあきらめんよしや世の中〳〵みじかよの夢ハあやなし其うつりかのにくてたおろかぬしなき花をなんのさら〳〵〳〵さらに戀ハくせ物〳〵露しのゝめの草ばになびく青柳のいとしほらしく二ッのしゝの身をなで〳〵かしらをうなだれミゝをふせ花に宿かる浮世の嵐あなたへさそひこなたへよりつ園の小蝶にたハむれあそぶおのが友よぶしゝの駒〳〵花にうつらふ　戀の小蝶のまひの袖〳〵戀すてふひよくれんりのかハゆらし〳〵大みや人の庭櫻ひあふぎかざすひ櫻のちしゆの櫻やたき櫻月のかげさへ明石かた人丸櫻袖すゞり筆のいのち毛墨櫻たがこざくらやにくからぬ姥櫻花ざくら〳〵名とりの里に引しやミのてまり櫻のはづミよし思ひそめた

よ糸櫻君のなのミきく櫻ふたりか戀の山櫻いのるちかひもいせ櫻色もかわらぬむらさきの江戸櫻いへ櫻おも白や〳〵時しもいまハほたんの花のさくやミだれてちるハ〳〵ちりくるハ散ハ〳〵ちりくるハちり〳〵〳〵散かゝるやうておいとしうてねられぬ花見てもとろ花にハうさも打わすれ〳〵人め忍べハうらミハせましためにしづミし戀のふち心からなる身のうさをやんれそれハ〳〵へまとうやつらや〳〵あさな夕なにうつすかゞミのよいかねしやうとわしハ水しやうでおまへとふかい〳〵それをうたがふとかいなさらりと柳にやらしやんせやなぎに〳〵やらしやんせ思ひまハせバむかしなり〳〵ぼたんにたハむれしゝのきよくげにしやつきやうのありさまハせうかの花ふりしやうちやくきん〳〵ごゆふ日の雲にきこゆべきもくせんのきとくあらたなり〳〵しばらくまたせ給へやゑうかうのしせつも今いくほどによもすぎじ〳〵しゝとらでんのぶがくのミきん〳〵ぼたんの花ぶさにほひミち〳〵たいきんりきんのしゝがしらうてやはやせやぼたんは〳〵かうきんのすいあらハれて花にたハむれ枝に

ふしまろびげにも上なきし丶わうのいきほひなびかぬくさきもなき時なれやばんせいせんしうとまひおさめ／＼獅子のさにこそなをりけれ（以上、三丁）

市まつ菊五郎　**しやつきやう**

へ花さびてふおさろけども人しらず　われもまよふやさま／＼に四きおり／＼のたハむれは蝶よこてふよせめてしばしハ手にとまれすがたやさしきはなのかげよしや世の中へしかるに平家よをとりて廿よねんハひとむかしかたるも聞も袖袂なミた／＼の春さめやへいにしへにかハりしすかたミやぎの丶萩やすゝきの露しぐれのべにかはづの聲さへきけバ有しむかしがおもハる丶へ朝がほのあさな／＼にさきそめてさかり久しき花にぞ有りけるかきね人めしのへバうらミハせまじためにしづミし戀のふちへしばらくまたせ給へやふじのすその丶ぢん屋／＼にいゑのぢやうもん大一大万大吉日とゆふ日のくもにきこゆべきもくせんのきざくあらたなり（合）へしばらくまたせ給へや。ゑうかうのしせつもいま。いくほどによもすぎじ。し丶とらてんのぶがくのミきん／＼ほたんの花ふさにほひミち／＼。たいきんりきんのし丶がしら。うてやはやせやぼたんぼう／＼。くわうきんのずい。あらハれて。花にたハむれ枝に。ふしまろびげにもうへなきし丶わうのいきほひ。なびかぬくさ木もなきときなれや。ばんぜい千秋とまひおさめ／＼し丶のざにこそなをりけれ　（以上、二丁）

難波のはるごま

へめでたや／＼はるの初の春ごまなんどハ。夢にミてさへよいとや申ス／＼大よせ小よせくるハの名取ハ花ざき花村まきゃぬ。たかまど。くれなゐ染川今川大いそ。一座に。つらりと。おなをりなされ。大よせよし／＼よいとや申ス／＼（引）へ（上）今ハ此身をすてをぶねさすにもかいのあらざればへわたりかねたるうきせ川へ水ももらさぬ其中をへむりにつとめを嶋原のへ三すぢのしやミのいとしやなふたりハいへどいひかいもなきミだれがミ。ばら

〳〵と〽うれしさのなミだばかりにいろあらバ〽たとゑいハずとかたらずとおもひのたけハ引とゞくもの〽かふじやはてまいかならずやいの〽つらい月日とおもハずとまつハときわのみどり子の〽すへをたのミにさとのくれよそのむつごとうらやまし。こよひくるわのなこれ〳〵しのびねにこれまさんやなへこひのこれ〳〵あらしにこゑをとられたほんぼにかハいさまならなんとしよこれまさんやなへかさね〳〵しさよきぬや〽いとしやおしや我つまハ〽こひとむじやうのさかいぬめ〽うきよを〽はやく〽ちりめんや〽おゝそれ〳〵〳〵じやいのそれほどにかわゆい物かいの〽おやにかいきをうけし身ハ〽やまい〳〵もどうぜんと〽なれと〽忘れぬ〽あげや町〽おゝそれ〳〵〳〵じやいのそれほどにかハゆい物かいの〽ほつれてやつすわがすがた〽これをミ〽あれを〽ミるときハ〽おゝそれ〳〵〳〵じやいの。それほどにかわゆい物かいの〽ミればひるさへ戀のやミ人めのせきの明くれに〽かよふまじきハやつこれくるハのまぶぐるひたゞ世の中ハ此道とうやまつて（以上、二丁）

新はるごま秋の野月毛の駒

〽うれしめでたの。春ごま見どにかざりたて。かごいでよし〳〵おうそれ〳〵じや。それ〳〵おつゞらむまよ。ふさんかさねてあやゝにしきやきんらんびろうど。しゆす。ひじゆすふさんはりしてこしやうしゆを。のせて。うたふ小哥のおもしろや〽うらゝかにそのゝ花の春こまハ。夢にミてさへ。物よいといの。はつ春のゑ方まいりハミないせさんぐうだうしやむれしらさきなんどのまひまふやうにちらり〳〵とすげ笠きつれてつれてゆこもの花かさ〽笠をめそならバみかさ山。かすが山。これもかァミのちかひとて人が笠をめすならバゑい〳〵われもかさを。きつれて。花のミやこの御しよぬり笠よ。二かい。さんがいしなをやらせておせ〳〵。どつこい。おせ〳〵どつこい。はるハ

ござんせ。ちもとの。はなのへ　花のミやこの御所ぬり笠よ二かいさんがい品をやらせておせ〳〵。ごつこいおせ〳〵ごつとい。春ハござんせちもとのはなのへ〽さかりハな。さかりハみよしの。色もうつくしこきくれなゐのだて小袖。身せばかく袖こふうもあれば今風も。ちんぢりめんのかゝゑをび。うしろハこひのおもにかや。きせんなんによのこゝろハほんにはなのやま。〽つなぎとめたよ。〳〵さくらのはゞにこまがいさめば木ずゑのはながさ。ちらり〳〵ちら〳〵〳〵さてもせいやうひがしよりきてあめじやござらぬてん。てん〳〵きのひでりがさ。さしかけよい〳〵〳〵〳〵きせかけありや〳〵〳〵〳〵これのおにわへとびこミはねこミ。春ごまはながさ。ひらいた〳〵さあひら〳〵〳〵。いく千代かけていさむはる駒

（以上、三丁）

京人ぎやう

ふでとりそめて。ゑにもかよばぬだてすがた。江戸むらさきのかゝへをひなにわふうとやそぎ袖のうまれついたるもつたいハしなよふふう都そだちか京人形ちよこ〳〵あゆむ。かあいらしのぼり下りのふりよしなりよし品川やかごハ戀ぢのとぶつばめやれこれさつさあゝかたせゑ　またとあるまい日本ばしやアレ渡りて色の堺町。人のあつまる市むらげいこのしな〴〵に。瀬川の水にかげうつす。われもとりなりにたそふで人のいひわたきくことに。なじみかさなりたのしむ中にあハぬつらさにな　こがれしよりもあふてわかるゝかねのこへ　うたふ小うたのすぎしころいづくいなかもさよへ。男とナアかわ女郎かさよへやうすだんかう西も東も戀のさた。物や思ふととふもうし。道もじやら〳〵なしどけなく。すそふきかへすもミうらのはらり〳〵。よしや吉ハらうわきの並木。おせさ〳〵かふして行舟ながめにあか

ず浅くさ寺をふしおがミこゝにやすらひかしこに立て春のゝに出君がため合心づくしの若艸の。しバしやすらひ土筆日かげをいとふ花のかげ（以上、二丁）

門出京人形

丹前へ水仙の花のすがたや若衆ぶりをなこなりけり室の梅〳〵あらおもしろのけしき哉。山もいろめく花もみぢ。ちら〳〵袖に。袖にちら〳〵ちるもミぢ情もあらバちよと一ト筆合かき紅葉〳〵ゆへくかしこ。もしやおこゝろお心。こゝろかわらば。わしや薄もミぢ。げに戀ハくせもの。おとこ出立のいたづらふうに。しやん〳〵。しやんとこざりめにおびひきしめて。とゝんと条太郎どつこいとんと条ざつこいとんとゝの様。そのさまどしに。長いかたなに。ながわきざしをまあ。十もんじにぼんじやりと。さしてしこなし里がよひハアしほらしや合きミにあひたらバまい日そうして通ハんせ。さりとハ。ゑゝごうじやいな。わするゝひまもないわいな合戀ハさま〴〵有ルが中にさ。わけて戀路ハ。あふこひ。待戀。しのぶ戀。わが戀ハかならずこよひハがつてんか。がつてん〳〵。そなたもがつてん。われらもがつてん。あいづの手くだのミこんだ。ゑい〳〵ゑいやつとも手を打合いさミいさんで。くるハ大よせへ合やりおどりふれ〳〵ふりこめさ合ふりこめさおさきを揃ふてこれハとさありやんりやゝ。こりやんりやゝ合いさんでさ合すゝんでさ合行れつ揃へてぼつ立ろ。行も。やれさて。通ふもしのぶのミたれ。風がふくやら戀風が合つれて〳〵さつさ。おちよ物さつさわか里の。湊ながめん。合ゑいやらさらさ。〳〵とゝんととんと此身を。なげかけ。ゆりかけ。しとゝんとん。とん。しとゝんしだれ柳の。ほつそりすハり。黒じゆすの帯合〳〵きりりとしやんと〳〵結しめたよ。やれ扨なふ。花ハこゝの之道行へあれこらんせよ都路へ。けふ思ひ立旅衣。花の束を立。いてゝ日も行さきの空とをく。すそハちらほら。ちらほらすそハ。もミうら小袖そべり〳〵と。だてらしやハア ゆか

しさよ磯に鳴ちどり明の別の。つらさをつげてちり。ちり〳〵や。ちり〳〵。ちり〳〵。やちり〳〵ちりとぶハ〳〵つがひはなれぬ。川千鳥。ハアしほらしや〽見渡せバ。月のかも川ハ流も清しおもしろやしんさらしなの。月ハ合ひと合しほ合月の猿澤の月よの。さかの月よなを〳〵ひろ澤の月花山の。月石山の月姨捨の月こよひこやの丶。月ハ松嶋の月すまや明石の月の名所や。寄くる波の合宮嶋の月合さらしなの月合けしきハ盡じ合ふわの月きて三ゐ寺の月のよいよの東に名高きむさしの丶月よもにてらすや月のかさ。きてミよかしのもミぢがさ〽月のもん日に。月待遊ぶ下戸も上戸も三ッ盃で。重ね〳〵し八重九重〽老せぬや〳〵薬のなをも菊の水。盃もうかミ出て友にあふぞ。うれしき。又君に逢ぞうれしき〽戀と聞〳〵猶きくに付ケても。たのしミの〽とハりや白菊のきせ綿をあた丶め。酒をいざやす丶めん〽声のはのふへを吹〽波のつゞミごうご打〽よも盡じ〳〵万代までの竹のはの酒酌共盡ず。のめ共かハらぬ秋のよの盃。〽影もかたふく入江にかれたつ足元ハよろ〳〵さよハりふしたる枕の夢の覺ると。思へバ泉ハ。其まゝ。盡せぬ宿こそめでたけれ〽盡せぬ宿こそめでたけれ（以上、四丁）

門太郎名殘

上おもかげの身にそひて。ぬしなきあとのわすれがたミそよしなけれ。そひはてもせぬミちしばのやけの丶きゞすよるのつる子ゆへのやミにまよふの合さりとては〳〵くやしやなまよひ〳〵てをるまの合やるかたもなきうき身のうへと。またきくぞくなミだのあめのしゆらのちまたやミつ瀬がわとてもかくてもうきよハゆめよさめてあしたのくもばかりしやばじや〳〵とすてこと葉にもおもひまわせば。いふまいものをいろもなさけもつきゆきはなもミんな〳〵江戸にハよいことばかり合ア丶わがつまこひしなごりおし。あづまこひしやゐざこひしつきぬなごりハ日にちたび（以上二丁）

羽衣のきよく

〽花ふりてたへなりやれいきやう四方にくんずおもしろのいまのおんがくおもしろのかくの音〽天のはらふりさけミれバかすミ立空もいつしか行雲のうらやましげにうちながめかれうびんがのなれ〳〵しこへさらに雁金のかへりゆくあまぢときけバなつかしやげにをとめ子のげいしやううゐのきよくをなし天のは風のひら〳〵〳〵と雨にうるをふ花の袖あづまあそびのするがまひこのときや始なるらん花の色かもよいうば櫻すがたやさしやほら〳〵〳〵とふたへのおびをきり〻としやんとゑんむすび〽おちやめのとのくせとしてせなに子ををひねさせておいていんのこ〳〵とゆたもなめなかけそよかわゆらしさになあいさかりあいすればかぶり〳〵てうちしほのめさてもそなたハたれ人の子なればていかかづらかはなれがたやの〳〵手車にのせてまいろのひがし山や西山きたさがのおどりハついのぼうしをしやんときておどるふりがミどへ花見てもごろ〳〵はなにハうさもうちわすれおもしろや〽こ〻のゑの都がへりの江戸ざくら瀬川ぼうしを菊櫻にほひ櫻や八ゑひとへ君がなさけのうす櫻そんそれハまとによふいふた〽忍ぶよの月もすこしハをそ櫻有明ざくら戀のじやまやミにてらすハひざくらやはまでこがゐ〻しほがまやそんそれハまとによふいふた〽たと〳〵野のすへ山櫻とらのを住しおくまでもふたりちかひしいせ櫻きしやうせいしをすミ染やそんれハまとによふいふたよしのはつせの花よりも紅葉よりも戀しき人ハとれ〳〵見たいものじやとごろ〴〵おまいりやつてとうげこめされよとがをバいちやがおひまいらしよしほらしや見れば五色のあやの竹あやのしとねも〽君と我ふたりゑんのむすぶのひたち帶天津乙女ハたが袖ふれしすがたよしゑきろのすゞふれバなりもよしいゑい〳〵〳〵十二の子だからそろへて〳〵さつさしぐれか鈴のねか〽日本めでたいかすがの山ハ三笠よいやさまてバかんろの日がらかさ月のかさほどひらいた〳〵秋ハなをもみぢ笠それ〳〵それじやいのまとにかさ〻ぎのはしを渡した〳〵とけぬ思ひの戀も有ルに數〳〵の

文にわしやだまされて忍ぶ其夜ハやミこそよけれこん〳〵こぬ夜ハつん〳〵つらにくわれひとりまくらかたしきよもすがら〽枕ならべてさんささあ待夜ハまれにあふときばかりかわい〳〵とだましておいてにくやくたかけまだ宵ながらきぬ〳〵つげてほんににくいじやないかいなうやつらや〳〵空もなつかし雲の波かてうとびこふくもの袖かけめぐるかへす乙女子のこゝもたへなりあづまうた〽さまハ天人なそれとんとろりをとめのすがた雲の通ひぢちらとミた見初た〳〵天にん女郎衆のしなもよくかぶの𦬇の遊びも爰にかくやらん去程に時うつつてあまのはごろもうら風にたなびき〳〵三保の松ばらうき嶋がくものあしたか山やふじのたかねかすかになりてあまつミそらの霞にまぎれてうせにけり　（以上、四筆）

両州隅田川名所づくし

〽扨もするがのめいしよをいはゞ合三こく。いちの。ふじのミね合和哥につらねしくものうへ。合おほミや人も合しるぞかし〽いづれめいしよハさま〴〵にあるが中にもあづまのあそび合三ごく一の。さんちやぶね合ながるゝ水ハ。すミだ川合うち出見れバ。まつちやまむかふに。三めぐり。しらひげハ。じゆミやうめでたき合ミやしろや合それにも。おなじミほのミやうじん。はごろもの松合むさしに久しき多田のやくしハ合宮ゐの松合するがにあべ川むさしに。ふか川合きよ見が關。かすミがせきハゐど見坂合所かわれバ川の名も。かハる川〳〵おもしろや〽ミもすそ川や。せんぼんの松合かたそぎのミや川や合流れもきよき。八十せ川合ミねの雪げのふじ川や。水せきとめよ。すくひとろもの櫻川こゝろのちりの。あくた川こひのおもにの。うき名たつ合〽それもいろなら。まゝのかハ。よしのハ。はなをなかすらん。こよひたつなら。あすか川にめぐれやめぐれ。水。ぐるま。よどの。川瀬の水すミて。そこにもミゆる。石川やはまのまさごハ。つくるとも。つきせぬわかの。ミちひろし（以上、上二丁）〽いふた〳〵よふいふた。そんれも。そふじやかへ。ひやうしにかゝつて。まいろかの。鳥ハ合くじやく。ほうわう。た

か。こたか合きミと。われとハ。たがい。ちん〳〵。ちがいの。ひよく。おしどり。思ふが中にこがら山がら。よぶこ鳥。空に一トこへ。すがたかくして。ほとゝきす。あちり。こちり。すじり。もじりて。ちら〳〵。柳につばくらの風合かぜふかバいかにせん。花にやどるうぐひす〽ゆきくれて。花をこよひの。あるじとハ。いとしさくらの。花のもと花鳥風月ハ。よい中どうし。それへ〳〵。それなぜに。花の梢に。よる〳〵やどる。ねぐらうれしき。花の色〽合いとしさくらの。花のもと。くわてうふげつハ。よい中どうし。それへ〳〵。それなぜに。はなのこずゑによる〳〵やどる。ねぐらうれしき。花のいろかほりゆかしき。はなのゑんこひハくせものまよひの。ふちよ。とんとはまらバ。やうきひ合櫻りんき。しや合たきざくら。ひざくら合あさぎさくらこいハいやよ。こくもすミぞめ。あだな草。ほんにへ〽まよひのふちよ。とんと。はまらバ。ちもとのさくら。りんき。しや。てまりしほがま合うすいさくらこいハいやよやえ九重ぞ。よしのぐさほんにゑ。しほらしや〽うたふ川。まふ川君が代を。あふぐもおろか。さつ〳〵の。五じつにひとたび風ふきて合雨ハ終日。民ゆたか〳〵治るみよの。かまくら山万歳らくとぞかなでける（以上、下二丁）

丹前 まくら物狂ひ

三下り〽枕も聞よ夜こそねられねひとりぬるよの長まくらすてゝもおかれずとればまぼろしにミゆるハゐんぐわなことじやへ〽謡かゝる姿ハはづかしのもりてやよそにしられなんうらめしやかなしやと袂を顔におしあてゝつゝめどせきくる我心そこハ涙の露しぐれ花のあづまへ歸り咲二上り〽花のかほ見せはや咲の梅のかほばせしんぞよいこの〳〵顔ばせ花のすがたもにしきにかざるいろのすがたのうしろ帯しやんと小づまをとり〴〵に合きちがひよほうさいよ〳〵とわらをさまゝよ大事の〳〵とのごゑぬふて袖の長羽織出立ばへよき大小もさすがミやこのふうぞくになびかぬ戀もあだしのゝつゆのなさけもあるならばうれしかろ〳〵ぞいな合わしにばかりハおもハせておもハぬ君がにく

らしやにくいほどなを思ひぞます鏡くもりがちなるしぐれどき合ふりだせ〳〵やつこの〳〵げんくわんまへしゆくいり下馬さきがてんじや〳〵ふりこめ〳〵よいやさはなもよしのゝ川ちどりこゝろいそ〳〵いそ千どりすそハむらちどりをきんしでぬはせだてなうらちどりこひとなさけをちんどりがけにかけて廻りあわふ〳〵しゆびのなる夜ハあはしま千鳥とりハものかハわかれ朝ちどり合戀ハさま〳〵あふこひ待こひしのぶ戀てもそふじやい合なさまをまつよハひとりうらみのたゝミざんす合チントぎし月見のいざよひハおまへとわたしがくぜつしたと思ひだす中を結びしさゝごともそのにゐまくらおもひだすゑんのあるのがまとなれ（以上、三丁）

（校者曰、以下の分、原本目錄に割りたる如く、全くのめりやす系のもの也。始め三葉ぐらゐづゝ、後一葉物多し。）

山ざき與次兵衛

あれ〳〵を見やむしさへもつがひはなれぬあげはのてうわれ〳〵とてもふたりづれすいなどうしの中〳〵に春にもそだち花さそふなたねのはなハねびきくさ手に手をとりてさとのなごりとくわしやろ待おくる姿のしどけなやさらば〳〵のこゑしごろになミだぐミなたねの花のうらがれにうれしいやらかなしいやら人のうわさのひとふしにあづまうけだせやまざきよち兵衛そんれかへうけだせ〳〵やまざき與次兵衛いつかおもへバしたひもとけてそんれかへいつかおもひのはるゝやらけふぞおもひのはるゝやら花になれ〳〵小蝶もなれてはなになれ〳〵小てうもなれて小袖こづまにしバしハとまれかしけふハすがたを町ふうにおもわくもんといふあたにはなたちばなのこゑしのぶこひぐさきりとハおもひぐさそれをゑての月見の夜にくむけしきとゐづゝ屋でそらにくもなくのみあかしそれにひきかへ狂らんとハうそにもせよじつにもせよそれほどおもふうたがひハはしればはしるこれ〳〵またとまらばとまるミだれごゝろのふたおもひいのちつれなきながれの身ながれわたりのよの中にしばしとゞまるいろざとにかミもしられぬこひのやま（以上、三丁）

まつかぜ

へあわれいにしへをおもひいづれバなつかしやゆ

き平の中なごん。みとせハこゝにすまのうら。みやこへのぼり給ひしか。此ほどのかたみとて。御ン立ゑぼしかりぎぬを殘しをき給ひしに。是をミるたびに。いやましの思ひ草。はずへにむすぶ露のまも。わすられバこそあぢきなや。合かたミこそ今ハあだなれこれなくハわするゝひまも有なんとよみしもことわりやなを思ひこそハ深かりし合亂れがミ。亂れ心やくるふらん。我が姿ハ淺ましや。かミハおごろをいたゞきて日かげを待し夕がほのつるにはなれしやれ車合よしや恨もいとしさのつきそひ廻る俤のにくやかれとハ神かけて。合思ハぬつまをはなちやる心のうちこそはかなけれさは去ながら一チねんの。しんいとなつて合思ひしらずや思ひしれ。あらうらめしの心やな。今更何との給ふとも。こなたハ忘れし松風の＼／松かぜの合立別れいなばのやまのミねにおふる松としきかバ歸りこん。あら頼もしの御ッうたやそれハいなばのとを山松是ハなつかし君こゝに。すまのうらハの松の行平。立かへりこバわれもこかげにいざたちよりて。そなれ松のなつかしや合松にふきぐる風もきやうじて合すまのうらなミどう＼／＼／ごつとはげしき夜すがらまうしうのゆめにあらわれうせにけり（以上、二丁）

よし原丹前

二上りへめそなら＼／ャふかあミがさをとてもめすならふかあミがさよあめハふらいでさぬれかゝるぬれてたつなもきみゆへとさりしゆふべの月の
謠ころすいちやうこうけいにまくらならべしいもせもいつのまにかハへだつべきおよそこゝろなきよねたちもいづれいふにナいわれぬいろざとがよひのミちしば合かよふミちしばあさもどりこのせゑいこのせこづまに＼／つゆがうきたつどてのばんする身ぞつらやいつのしのゝめからやらつゐかのひとになずんだ＼／くるハ一ばんたでしやのわけをにくい事きいた＼／あゝすうとめすうとのかわめがこちのおもハく＼／ざいたそつちのおもわくくざいたふる＼／ゆきにかよひ＼／くざいたア、すうとめ＼／すうとのかわめがこんごはやる＼／あげ屋ではやるとの太夫まへくにかんむりづけに

昭和三年七月二十八日印刷
昭和三年八月一日發行

江戸軟派研究　別册第一

定價　貳拾五錢　送費貳錢

昭和三年八月二十八日印刷
昭和三年九月一日發行

参編　別冊第二（通編第七十二冊）

本文

校訂

女里彌壽豊年藏（下）

けいせいむげんの鐘より高砂まで（完）。女里彌壽袖鏡に就て（校者附錄）。

江戸軟派研究二編・三編總目次

大阪　ゆき

尾崎久彌著

江戸軟派研究

別册第二（通編第七十二册）

著者より。本冊で第三編を打切つた。よりて、後ればせ乍ら第二編諸共總目次を附した。來月からは改題するか、改編するか、未定だが、多分、「江戸文學研究」の創刊號とするつもり。内容は、從來よりは、稍、部分的に取扱はうかと思ふ。倍前の御好意を賜はりたい。（九月五日）なほ、上阪や何やかやで、印刷所からは、本文の初校が、先月末届いたのに、かく出來の後れた事をお詫びしておく。

大阪ゆき

久しぶりで、大阪へ行つた。三十一日の晩、同地放送局で放送したのです。「大阪を書いた戯作」といふので、三十分。あとで、局の人に聞いたら、たゞ一つ、云ひ誤りがあつたと。何だと聞くと、ニッポンバシだといふのである。成程、江戸はニホンバシ、大阪は、ニッホンバシ、だつた。すつかり忘れてゐたのです。名古屋とは、マイクロホンが違つてゐた。聞けば、これが新式で、調節にもいゝさうな。が、街にぶら下つてゐる丈、少々たよりなかつた。その晩午後から体を預けてゐた舊友で、南地で花柳病と内科の醫者をやつてゐる花岡君（昔の歌よみ仲間の兄哥分だつた雅號は桃崖君）の宅へ、これも舊友で、今同地で辯護士をやつてゐる松岡君が落合つて用があるからその晩歸るといふのを、むりやり、二人で引張り出した。さうして、道頓堀からあちこち、戎橋詰で、ビールを飲み、序でに私の望んだ柳屋へも廻り、（だるまや氏は寢てゐた。）新町邊を引張り廻され、たうとう、カフェーらしいものを見せてやるといふので、ユニオンの本店だらう、そこへ引入れられた。花岡君の知つてゐる、もと、名古屋の縣病で看護婦をやつてゐた女給の、頗る大阪式美人なのがゐた。それが丁度夜の二時頃だつた。外が夜の二時までなのに、この店ばかりは、四時まで、さうして晝は休んで、また夜の五時から始めるのださうな。裝飾ぐらゐには驚かぬのが、そこで、上流婦人らしい人妻や若い娘さんたちが、盛んに女ばかり、あちこち、談笑してゐるには、驚いた。三時頃までゐて、途中、松岡君に別れて、花岡君と、花岡君の宅へ歸つた。

翌日午後、奈良へ行かうと、上六までぼつ／＼出かけた所が、高尾書店をふいと訪れた所、高尾君と初對面だつたが、同君の案内で青木平七氏の宅と、積德堂と中尾書店と、夜からは南木芳太郎氏とで、これだけたづれた。青木氏の宅では、古版物の繪入本を澤山見た。繪本位で誠に多量に集めてあつた。夜から十時半まで、南木氏の所にゐた。大阪と京の洒落本や、役者物の古いのや、めりやす本などを見た。錦繪も、座右のを見た。迚も一日や二日で見つくせられない。後日を賴んで別れた。午後から、高尾氏に始終、案内してもらつた。青木氏といひ、南木氏といひ、突然の訪問に不拘、門戸を開放せられたのは、うれしかつた。奈良行以上の收穫だつた。その晩、大阪をたつた。

寄贈紹介

○出版年鑑　一九二八年版　出版界一年史などの好記事がある。出版目錄は、名の如く、精細なもの。好記錄。（四六判約二〇〇頁。八十錢。東京市芝區白金三光町、國際思潮研究會）

○日本性語大辭典　桃源堂主人著　從來のあらゆる書より上乘。語數も豐富。好著。但し此の好著、間なく頒布不能となつたといふは遺憾。いづれ、補遺など出づるであらう。（四六判布裝。一八〇頁餘索引附。五圓。東京市牛込區東五軒町二七、文藝資料研究會編輯部）

○未刊隨筆百種　第十七卷　享保通鑑等他三篇。（四六判五一六頁。非賣品。東京市牛込區富久町。米山堂）

○日本文學講座　第十八卷（菊判。非賣品。新潮社）

○近世毒婦傳　横瀨夜雨著　明治初年の新聞雜誌から丹念に遺聞を拾つたもの。類書の白眉であらう。（和裝菊判。非賣、東京市牛込區東五軒町二七、文藝資料研究會編輯部）

○よはひ草　第一輯　小林商店での齒展の第一記錄で圖版も豐富。又文獻記事の拔載も多量。特殊出版物として好々著。（菊判約百五十頁、圖版數十頁。一圓五十錢。東京市本所區外手町、小林商店廣告部）

○地唄夜話　藤田斗南著　地唄の長唄に就いて等。藤田氏の個雜。發展を望む。（菊判一六頁二十錢。大阪市淀川區十三南ノ町八三、藝術通信社）

○印度旅日記　泉芳璟著　異風俗、瑰奇な事實を主にした著者の周到な見聞錄。奇著（和裝一〇四頁。非賣。東京市牛込區東五軒町二七、發藻堂書院）

雜誌の部—（七月號）以毛隨流〇歌舞伎研究〇あく趣味〇史學（以下八月號）—〇桃色草紙〇美之國〇紙魚〇墓碑史蹟研究〇風俗研究〇本道樂〇國學院雜誌〇歌舞伎〇民謠詩人〇民俗藝術〇愛書趣味〇道頓堀〇歷史地理〇やなぎ樽研究〇川柳鯱鉾〇江戸時代〇文藝時報〇藝術通信〇北隆館月報、

定價表	
一冊	貳拾五錢　郵稅貳錢
六冊分	稅共壹圓四拾錢
十二冊分	同　貳圓八拾錢

○郵券貳錢一割增の事
○照會は返信料添付の事

昭和三年八月二十八日印刷
昭和三年九月　一　日發行
（貳拾五錢）送料貳錢

名古屋市東區京道東町百五十七番地
編輯兼發行者　尾崎久彌

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷者　英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地
印刷所　扶桑社

名古屋市東區車道東町一五七地
發行所　江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

わけのさかづきつけざのほうび壹のかちにハしよくわひをふらずしなかいじやうハすひつけたばこむてんほゐなやまがきまでのぞく／＼わかいしゆ詞そのかんむりハひくはぢよろしゆのおちやのひまさあさゆくべい／＼さあさくるわのわけのこのさと（以上、三丁）

けいせいむけんの鐘

〽おもひにハどふした花のさくとヽ。身にぞしらるヽうやつらや。いかにならひじやつとめじやとて。いやなきやくにもあハねバならぬ。やぼならかふしたうきめハせまじいとし男ハあヽ。まヽならずしゆびのあいづや手くだの枕。むりなとでもごふやらかわい〽なじミかさなりたのしむ中の。あハぬつらさになこがれしよりも逢て別るヽ鐘のこへ別れて逢てあふてわかるヽかねのこへいつかくるハをはなれてほんにほんのめうとヽいハるヽならバ。今ハむかしの。かたりぐさ（以上、一丁）

おもひの緋櫻

〽身にかへて思ふ人にハとをざかりおもわぬ人のしげ／＼にくるわのさとのうきつとめせふともなきあだまくら合ねてもさめてもくになりてむねのかゞミのかきくもりういぞつらいのしんぼうハかハい男にあひたふて見たふてどうもならぬハへ合此よにぐちになる物かいな。わしにばかりハまことと思ひはまりやすきハすいのふち。しづむものなればおもへバさいな。ほんにぶすいがましじやもの心しらずや明のそら（以上、一丁）

おび無けん

〽さて。もこヽろの。はかなきおもひ。身ハつきだしのはつひより。くるわの。みづに。すむもにごるも。ながれのすゑハ合いとし。おとことこヽろのまヽに。そふをたのミの。うきつとめ。ねんのあき日を。ゆびをりかぞへくらす月日ハゆめみるやうで。すゑのひさしき。わが思ひ。いやな人にももしつながれて。おもハぬかたへゑんわるならバ。いつそしんだがましじやもの。さりとハ

〳〵はてしなや　（以上、一丁）

髪すきいもせの鏡

二上り 〽くしげきやうだい取そろへ。ことばにいハぬ。ミだれがミ。いたつらがミのばら〳〵と。もつれてとけぬ。ときぐしの。男ごゝろを思ひやる。かほと顔とのかゞミ山。人のしかからさき見へて。くの。忍ぶ人めも男ゆへたかいの心。みくまのゝわがミほのうミしら波や合おなじながれにミちのかミ〳〵様を中だちに。せいもんくつされ。のちのよかけて。かハるまいぞと。くりとながら。かへすぐ〳〵もたのミてし。いふにいハれぬわが涙ぬれて。すミちるのべがミの。あからさまにハ人しらず。思ひ〳〵〳〵　（以上、一丁）

花のゑん

三下り はなのゑんむすぶのかミの中だちさんたのミやんすおがミやんすかならずせめてひと夜はきても見よかしなむりなことゝハおもへどほんにわらハしやんすがミなだうりじやゑだうりのないハわしひとりかハいといふてくれのかねつく〳〵物をおもひがほふでとすミとになミだをそへてまことあかせどそれとハよまぬかハい〳〵もひとさかり

（同上）

をきのいし

〽まだねもやらぬたまくらに。そでもないことおもひわび。うつら〳〵とふけてさへ。ねまきのきぬのはだうすきつらいぞういぞヲゝなんとせう合〽かなしミの。なミだハいとゞせきあへぬふかきおもひのふちとなる。見るにつけ。きくにつけ。むねにせまりしかず〳〵の。そでもかわかぬ。をきのいし　（同上）

いもせ川

きのふの花ハけふのゆめいまはわが身につまされてぎりといふじハせひもなやつさめする身のまゝならぬわかれとなればいまさらにいなせともなきはなれきハいとしおとこにわしやいのちでもなんのおしかろ露の身のきへバうらミもなきものをなんぼたづねてもかげ清がゆくゑ水のそこまであこ

やハしらぬごふでもじげさますいじやものかへしのちのあしたの文ばかりつもるおもひのいもせがは　(同上)

思　ひ　川

なま中になれずハものハおもふまし。いつの月日にあひなれそめていまハわが身のおもひ川しづミもやらでこひのふちなミだのあめにそでぬれてかわくまもなきしやくりなき人のこゝろハむごらしや。をなご心ハそふじやないわいなあかたときあハねバくよ〳〵と。ぐちなおもひかなミだでゐるわいなわしをかあいとおもふでゐるやくだかけどりのなくやひところ　(同上)

戀　ご　ろ　も

ふミのたよりになこよひゆことのかへりことかねてあふたらなにからいをと。うれしいやらこわいやら。月日かぞゑて思へばほんに。それをたよりにはてそふじやハへまくらひきよせなのちにはなしがよかろぞやとりがないたらわかれはいやよ。うれしいやらこわいやら。いまハわが身もおもへばほんにそれをたよりにはてそふじやわへなじミかさねのこひごろも　(同上)

見　だ　れ　が　ミ

こたつのやまにさしむかひ。たばこすひつけうづミびに。たがたきすてしかほもそや〳〵くゆるおもひハほかでハないぞへ三五の月のミだれがミ。ふミにあひたさ見たさをバそのいのちげになをかけてすへハひとつにまかする身ぞへおもひかくさんまつばがミ　(同上)

ひとり心中

あわれさハ。たまつさのべのくさまくら。ゆめにみるその中に。こわいゆめ見るはかなさよへなまいだ〳〵おもひおもふたがゑんのはしわしは十四でなれ〳〵そめてことしや廿三まる九ねん。なじミかさねていまものおもふ。なまいだ〳〵おひおもふたがゑんのはし　(同上)

あけの鐘

中 われハくがいのむろにさく花のなにわじやうすかうばいの色も香もおとこゆへすてしうき身も命にもなに中〳〵のむねのやミまよふ心ハたれゆへぞそなたほどかハいものハうそじやとほんにおもやるなせいもんまとしんきほかのなじミハあすか川ふちハ瀬となるならひときけばすへかけしもかけしおとこも心がかわらバ仇にや二世のちかひもそらごとよまくらとる手にあけのかね（同上）

わかれ坂

中 いつわりのなきよのさとの四ッ門をないてわかれてこゝろもすまず。たばこのんでもきせるよりのどがとをらぬうすけむりよそになびくもミなおとこゆへけふハあづまの人の月あすハつくしのことの葉のあきてうたてのしやば世かいおもふて見さんせからいとのむかしがましじや。なまなかにそめてしんくの〳〵いとのむすぼゝれいまハくやしきはしごあげ屋の。わかれざか（同上）

はぎの露

はぎのつゆこぼれやすきに月ぞすむちかひしひともろともによにすミながらまゝならぬ合ふミハあれどもたよりなきあわれうきよの川がなふたせおもひきる瀬ときらぬせとあふてつらさをかたりたや（同上）

むめのかげ

ゆこかもどろかしあんはしこよとさおこへまつこゑいとまなきにかよひ路ひとめしのぶにこかげもよしやはづかしやもしもたれぞがたれじやととふたらばはな見にきたわいのふうき名たつともむめのこかげ（同上）

明のうらみ

あゑばうらミといふことかあわぬゑにしをおもふてないてにくいあかつきかなしのよあけつらいわが身のむりとはしれどいつがいつまでこのうきさとになくがつとめかあゝむごらしやすかぬわいのしらぬ人にハいふてもすまずせめてとへかしほとゝぎす（同上）

とりのね

上とりのね。わかれよとてはなかねどもつらいハあけのきぬ〴〵になく〳〵だかけにくまれてさらば〳〵となきわかれかしわをんどりのなめとりにのつげてなく〳〵こゑ〴〵のときしらずさてもむこや此間たもとにかゝるのちのしも　(同上)

しのぶくるま

さすがいわきにあらざればきしやうせいしはあることわざよひとよのたけによを〳〵こめてもゝ夜のかずにしたひももほどけてかならず〳〵〳〵ちがやるなしのぶくるまのやるせなや　(同上)

おとこ帯

三下ツク〽なまなかにあひも見もせぬその内ハこひしとばかりおもひしにあふて顔見てなミだのふちせ水のあわひのかた思ひうらみにうらミかさねぎのたもとのかわくひまもなやどふしたゑんでうぢがミのまゝにもならぬとかいなひぢを枕にかりねのゆめにもをしの思ひ羽はなれじと二世をむすびしおとこをびほかにわるぎハあるまいけれどあくしようらしいがなんよへなんのさら〳〵外にわるぎハあるまいけれどあくしようらしいがなんよへさそふ嵐にくれの花　(同上)

戀はなし

三下り〽ひとこそしらねかわくまもなきそでとそで〽つゐしたことがゑんのはしむすぶちぎりは〽ふかうなる〽うきながすはつらいもうれし〽たとへせくともせかれてゐよかまぶハつとめのちからにまつ身うきをかぞへてたゝミざん〽さても心のやるせなや〽とふにやおちいでかたるにおちるおもふあたりのことをとふあたりのことをとふあたりのことをとふ中のよいどし戀ばなし　(同上)

ときぎけ

三下り〽つゆの身も。くるわのさとにすミなれて。こゝほどほんによいことハないとおもふもおとこゆへ。せかれまいとてさるところのよとへ〽つゝむ心の

しのびあひきのふハけふのむかしばなしのかす〳〵にしんくのいとのたまくらや〳〵申〳〵とおこされてかねのねしらずとき酒のひよんなひよんな人さんになれまい物を〳〵ひよんなひよんな人さんがいとしゆてならぬ夢かうつゝか春のあけほの（同上）

里のまつ

三下り（中）へふりつもる。雪にハしろきさとの松。けいせいにまとハなしと世の人の。わけしらず情しらずことハぞや〳〵（合カン）たとへいのちのつゞくたけ。ほんのまとをあかしてもおとこのかたよりそれぞとのたよりもせねバとをざかり。おもハぬかたのや（合）どの花とさくときハはじめのまとのちのうそ〳〵つとめばかりに逢客さんの。かさなるまくらやいろぎぬのすへのよるべとなるときハはじめのうそもミなまと〳〵（合）とにかくにゑんの有のがまとなり有のがゑんの縁のあるのがまと也。何とゝはれてゆふづきよ（同上）

三ツのとり

おもふとハ。かならず夢に見るものを。こわいゆめミるゑんのつな。しめてねた夜のむつごハ。つゐ目をさます。よぶことり（合）いろふかくも。たがいにつゝむをなご氣の。むねに手をおき。くよ〳〵と。明ていはぬもつミかいな。さて戀しやなミやこ鳥（合）戀のミちハ。いやしきたかきへだてなく。ゑんハいなものあぢな物。とけてこゝろのミだれあひ。實よいわいなあふせどり。ミつのとりにもうらミあり（同上）

しろたえ

二上り しろたえに。（引）ゆきのふり袖。ちらと見た。（入）さまのすがたの。なつかしやそらに。しられぬ。わがおもひ。（合）柳にゆきの。しつぽりと。えだもたハめるそのうへに。さもいつくしき。しらさぎの。ゆきにこゞへて。しよつぼりと。あゝしよつぼりと。（入）とまりし。ふりハ。かわいらしやな。ふりくるはるの。あわゆきに。袖につもるをうちはらひ。はらへどつもるはるの。あわゆき（同上）

なつごろも

なつごろも。われはひと重におもへども。きミのこゝろにうらがあるやらしんきじやゑたまにくるのに〳〵。ねたとハつらや。またれぬ。身なりやせひもなし合あゝまゝならぬ。月見るきミが名こそおし合あきのごてミち。よし原すゞめ。ぢようらうが女郎見る。さとのくれ　(同上)

ふたつ紋

こひ中ハふでとかミとのふたおもひ。ふミのかしこハ筆のとめ。りん〳〵ハしよてのこと。いまハふたりがうきなさえ。見るにつけ。きくにつけ。うちかたのしゆび。ミなわしゆへにほん〳〵に合おもひ思ふて。きたハいな〳〵。しのぶそのよハ。やミこそよけれ。かほが見たさに。まがきまで思ひ〳〵て。きたハいな〳〵。ゑんも月日をまつばかり　(同上)

うき草

そのきぬ〴〵の物思ひまたあふともいつかハと。ふかきこゝろの。かこちぐさねびきにせんといひかハす身ハ捨草のすてられて。流れし。此ミハよど川の。なにをたよりにうき草のなミにゆらるゝうたかたの。あはぬハきミが情なやねたましやそれハわかくさ身をうらミぐさなんのそなたにあいたでハなしあきもあかれも。せぬなかなれどうけだされゆくあとにのこりしつたなきこの身せめてあはれとおもへかし　(同上)

江ぐち

むかしを。いまに。なぞらへて。わが身ゑぐちのたハ。むれにながれを。たつるをなの身なれど手にふれ。きにし。たまてばこ。ふたへこゝろハ。なけれどもはなに。なれたやいとやなぎ。ひかば。なびかん。たまづさに。かず〳〵のせし。うた何ぞこきん万よういせ物がたり。ことの。しらべかひくて。あまたの。たまづさ。いとゞ。すぎにし。思ひだす。たびのやどりを。なぐさめん。いで一さしを。かなでん　(同上)

世 和 五 郎

へいたづらに。をくる月日のかすそへて。つもるうらミハひとすぢに合石にたつやもあるものを。なごやかひなき。心ところ。くろかミかけて。いのる身なれやさりとてハ合みだれがミ。とくにとかれぬ。したごゝろ。すぐにいわれぬ〳〵。ぬれがミおとこ。びんのそゝけも。アゝまゝよさ合はるさめに。とまりさだめぬてうひとつ。ぬれてかハらぬ〳〵。つばさもわれも。おなじおもひの。アゝそでにさ。なミだたまちるおもひぐさ（同上）

ゐ づ ゝ

おもひなき身と。つゝめども。いでそよいろにあらわれて。とはるゝつらさ。はづかしさ 合の手ひとりぬるよの。たまくらに。こゑおとづれてかりがねの。こしぢにかゑるしほらしや 合の手さのミつれなきひとゆへに。なをひたすらに。おもひそふ身はうきくもの。よるべなき（同上）

ゆ び き り

三下り
ゆくミづのかずかくよりもはかなきハおもはぬひとをおもふことゝいまハわが身にあいそもこそも月よのとりねるもねられぬわしひとり 合の手たとへどふしたうきめにあをとなんのゐけんのきかふかいなそでもかわかぬなミだあめはれぬおもひをかわゆがらんせたのむかミ〳〵（同上）

ゆ き

へうきことの。なをはれやらぬむねのやミ。つもるおもひとつめたいと。わけていハれぬアゝよの中合子ゆへにまよふ。うたかたの。夜さむのかぜと。身にしミ〳〵と。うすごろも合まことうらなき。こゝろの月も。くもり〳〵てふりくるなミだ。われはかわかじ。そでたもと（同上）

お ぼ ろ 夜

へおりふしの。そらもあやなきおぼろ夜に。しのびてかよふたちぎ（くカ）口ハ。しづましくら（カ）の戀はなし合すいたおとこのうわさして。ねるもねられぬきまゝざけ合なさけにぎりハあるものを。ひくにひかれぬ。さミせんの。一ごそハふと二世かけて。てうしあハする三ンさがり合あへば。うれし。か

ほミるけれど。別思(わかれ)へバ。あハぬもましじや。〱
はじめあわずハ。なか〱に　(同上)

うつり香(が)

〽はるのよの。やミハあやなしむめのはな。いろこそ見へね。こがれゆく。ミちハひとすぢかつらゐの。月もぬからぬ。おぼろかげ 合 うれし〱が。身につもり。だます〱ハ。だまされたのか。アゝまゝよ。ふたつまくらのむろのうち 合 うらミのたねの。かず〱を。かたるその夜(よ)ハあかつきの。ひとめしのぶの。かやハかくるゝ　(同上)

わかさ

〽いまハたゞ。あまのかるもに。すむむしの。ねをのミなきて。われながら。たとへいのちのつゞくたけ。ほんのまことをあかしても。つらやおとこの。まことしならぬ。うらミかず〱。ないものかなんぞのやうに。さりとてハゆるさぬこひの。せきもりハとてもあふよの。あるものかなんぞのやうに。さりとてハ。めにハしぐれのいろもミぢ
(同上)

はなのか　琴(こと)のしらべ

二上り 〽ながゝれと。なにおもひけん。世(よ)の中の。うきを見するハいのちなり。おもへハゆめの世を。しらではかなくすむ月の 合 うつゝのやミにちる花の。おぼろ〱と見もわかぬ。あけてちりなん。上 暮(くれ)て散なん。ちればぞ花ハ色(いろ)もかも 合 いづれはかなき 合 はるの風 合 ふかぬ 合上 其(その)まの一トさかり。合 おしやしばしの花のゑんなごりを雲にふきとぢよとめてかひなき花のかを。合 袖(そで)につゝめど小笹(をざさ)のあられこぼれやすさよわがなミだ。合 ともになきつれかへるかりよそに見なしておもひこそやれ。などや心のなかるらん　(同上)

里(さと)の錦(にしき)

三下り 人めもしらぬ男(おとこ)ならうらみも戀(こひ)も有ルまいものをなまし近江(あふみ)の水鏡(みづかゞみ)うつしてミればミなそこハかたいかたゝの石山(いしやま)ときつうの瀬田(せた)にわしやのせられておもひすごしも我(われ)から崎(さき)のひとつまへ。帶(おび)しさげないふりよ。たとひあわつと三ゐ寺(でら)のミねでハ思ひいるさきの。やばせの風に平(ひら)のか。雪の暮間事(くれまこと)なれどもいたつらかミの。いふにいはれぬ世の中の人のうわさも七十五日うきなきと。と

やまの時鳥(ほとゝぎす)合はてそうじやハヘ〳〵末(すへ)ハ一ツのもとの水　(同上)

袖(そで)づきん

ふりつもるゆきにハいとゞおもひだすすぎし御げんのむつごとをそんな心のくよ〳〵とさりとてハ〳〵かわいおとこハなをまゝならぬまくら二ツハよそにあれどこゝろふたつハないわいな。あふハうれしわかれハいやよ。ひとめしのぶのそでづきん

かくそで

〽おもひにハしやくがなるやら。しやくにおもひがなることか。つらいつとめのそのうちに。ついしたことがゑんとなり。一ト日あはねバすめやらず。あふようれしくおもふまもあけゆくそらにわかれてハ。またすめやらぬものおもひ。うつら〳〵とあけくれにおもかげばかりめにのこり。かくそでのミじかきはをりひよりげたしやんとさしたるひとこしの。そのなりふりのいとしらし。おもひこがるゝ月日をたてゝほんのめうとゝなるならば。ずつとこんどの〳〵さきのよまでもひとつよぎ　(袖づきんと併せて二丁)

松にさくら

〽さくらぞめきの朝(あさ)がゑり見そめていまはふちとなるそりやほんかいなほんにうきよに川(よ)がな二ツおもひきるせときらぬせと合あひなれし夜(よ)ハさミだれの水(みづ)ももらさぬ中〳〵ハそりやほんかいな合ほんにわたしが心(こゝろ)ハふたつあハぬつらさと戀(こひ)しさと。思ひつもりし文月(ふみづき)のほしのちぎりハきくもうしそりやほんかひなほんにつとめとまとゝ二ツ日本(にほん)づゝミも名(な)にたちて身ハあさがほのつゆとき合へ野(の)べに妻(つま)こふむしのこゑそりやほんかいな霜(しも)よぞすだくきり〳〵すなくねや袖(そで)にこふるらん

(以上、一丁)

華(はな)のさと

三下り〽さとなれぬ。はじめハものをおもわねどつとめになれてすいごしの。ひとにもまるゝうきなかにつゐしたことがゑんとなりわするゝひまも。なにとかとういぞつらいのきぬはりはさりとハさりとてハ合おとこごゝろのむごらしい。をなご心ハ。そうじやないわいな合かたときあわねバ

くよ〳〵と。ぐちなおもひで。ないてゐるわいなひとりぬるよのあくるまゝはるの夜さへも。上いかにひさしき　(同上)

相のやま小笹の車

〽もとハうわきで　あゐそめ川の。ふかうなるほど。あハれハせいで。こすにこされぬ人めのせきよ。かんのしわすも。日の六月も。つらい。つとめに。日をくらしやるが。かほにほそりが。かハいやミゆる。おもやふたりが。いきながらへて。ゐるもふしぎの内ぞかし。久しぶりにて。あひの山。あひにきたさに。三ッつぎの。さほハ契りのたがやさん。こちのしやうたいなしが。辻でかぶろをくごくとさ。友だちに。見つけられて笠を。かぶつてゆくハの。戀がしやうばいならバ。しかるとでハなけれども。きんざんに。まぶがついて。うきなたつのが。めいわく。きてハたもとの。露しぐれ　(同上)

まんねんさう

三下り　おなじ世にすむかひもなきにごり水ながれ〳〵のうきつとめふかい中をもひきはなれつらさかた

らん友さへなくてたれにをちこちたよりのないハどふかかふかとおもひあんじてけふとくらしつあすか川いふてかひなきすてをぶね　合の手　うきにたへぬハなミたのしぐれさだめなき世とかねてハしれどゑヽさとられぬはほんにゐんくわなゑんしやものひとりぬる夜のよハのかねふきすさミたるさよ嵐　(同上)

いれぼくろ

三下り　はるの夜のゆめにハあらぬたまくらにうきかうき身のつとめの中にいとしおとこをひとめをしのびひとりねやもる月にくもまちこしあけのとりのこゑ　合の手　うそかまことかまことかうそかこヽろのをくにふミかよふミちしるべせよいもせのはしのわたりそめなんこひのなかだち　(同上)

さかづき

三下り　盃に向へバたがふ人心常に耻したハむれを酒を力にいふてのきよ少ほろゑふ顔もみち花とならべしめうとどふした縁でわしや嬉しいおまへハどふやらいやそでかなし申〳〵是申シほれたがにく

袖づきん、かくそで、松にさくら、華のささ、相のやま小笹の車、
まんねんさう、いれぼくろ、さかづき

いかたゞしハかハい丶かあの〳〵まれ人さんほ合んに結ぶの神かけて何のじよさいが有ぞいの思ひ合たる相ぼれの枕の外ハしる人ぞならくのそこに沈むともかハらぬ程にへゆめの世にともに夢ミる夜さむのころもつゐあたゝむる夢のむつ言（同上）

鳥のこゑ

三下り へめいごのとりとなきあかすあかぬこのよをふりすてゝしらぬあの世へたゞひとりゆくかとやおもふもつらややるせなや合ふでとかミとにいひのこすさてもこのよのつれなさハつらいひとにもおもハれてそふかとやおもふもなミだこひのふちたれかとふまのこひのせきもり（同上）

女三の宮

花のさかりハ引なゝゑ八重。十二ひとへのうつり香下を。おぼろ月夜の引うすげしやう。すがたやさしき。ひのはかまふミしたきたるあしごりハしやなら〳〵合と野べの春風そよ吹ばミすのひまよりから猫の。下綱にひかれて女三のミやの合櫻をかざすひあふぎや。おほミや人のいとまなき戀路。うつる心やむらさきの色に出そよ耻しながら花によ合下そへておくる文。上見よかし〳〵ちりぬるまに。心づくしのいつとなく。まつにかひ有花のゑん（同上）

十三鐘

三下り へなか〳〵に人めもしらぬくらき夜にいのちのきづな鐘のおん一ッ月日のめぐミハあらでかたハくるてハナわるさ二ッふたつ（マヽ）ふたりがそハれもせいで三ッ見るとのならざかや四ッよミぢのこれがさハりよ五ッ六ッむつのちまたにまよひ子の合おもへバ七ッ何ども此かねの嵐にさそふきりが谷はや九ッもとをからぬ一二のすゑのそのひとつかぞへ〳〵てひとふたつきゆるを我と待ばかり（同上）

あきの夜

三下り さりとてハかミのむすばぬゑんなれば心のやミハはれもせで身をしるあめにそでぬらすぎりとなさけと世のうさをはらしてあかすあきのよのながくもかなとちかひてしふてのいのちげいま身のうへあぢきなや合の手とてもこのミハこれほどに

おもひつめたるゐんぐわぞしさりとてハひとめしのぶハまだなとかぎりあるミをなんのそのはてハこれまでとふぞいの（同上）

ゆかりの月

本てうし ヘうしとみしながれのむかしなつかしや 合 かわいおとこにあふさかのせきよりつらい世のならひ 合 おもハぬ人にせきとめられていまハ野ざわの一ツ井の水すまぬ心の中にもしばしすむハゆかりの月のかげ 合 しのびてうつすまどのうちひろいせかいにすミながら 合 せまふたのしむまど／＼こんなゑにしがからにもあろかはなさくさとのはるならばあめもかほりて名やたゝん（同上）

里の華

三下り ヘさくらどきはなもちりなんいつそゆきかとゆふがすミまちあひのつじそれかあらぬかあふて見よまことのないさともなしヘうそじや／＼とおとこのくせにそふかへヘするゑは 合 どうしてかふしてとかたいやくそくするすミにヘそめる命ハ二世かけておもひ川ふかふなるほどわしやうきくろすけいなりさまをたのミのゑんさだめ（同上）

はな野

三下り ヘさきかわす。花のねざめのあさがほに。いとゞあい有をミなへし。くねるおもひハたれゆへぞ。おとこ心ハ秋の野の。くさの数／＼ますはなに。ミだれやすさのいとずゝき。とけてあふ夜ハたま／＼に 合 あだにねる夜のもゝよ草。浅からざりしふかくさの。との葉ぐさをかるかやと。ふでにしめしてかよふ神に。二世のちかひをむすびがそ（同上）

里の春

ヘいとしおとこのきぬ／＼に。かゑてうれしき初とりの。ころ／＼つぐる明のそら。あをミだちたるかどのまつ。かわらぬいろの中の町すがほ。すあしのふうぞくは梅にならふてやなぎにきいて。すいとしこなすさとことば。ごてさんおかさんあにさんと。そろふていわふミつのあさ。ミつさかづきのかずすぎて 合 あしハちどりよさき

わ代さ。かぶろがかたにつくはねの。つきぬいもせのたハむれに。けふもくれ行松のうち

ほたる火

三下り へみじか夜を。まだねもやらでうか〳〵をふミをあひてのひとりごと。ほんにおもへばおとこ氣のあんまりつよい筆のあとはらのたつをりかいたのか。様といふじをねんいれて。いたぎんくさいなんじやいなそれじやさかいに。わしや氣がもめる合へ〳〵しかわゆくぬしさんを。おもひ〳〵そろと。すゑのとの葉神かけて。こゝろのまゝの世たいならぬしを寐かして。まゝたいてふたりあそばゝ蘭のその。たまのうてなとをゝうれし(里の春ト併セテ、二丁)

高砂

三下り へたかさごの松のはる風ふきくれてをのへのかねのひゞくなりすへはる〳〵の都路をけふおもひたつうらのなミふなぢのどけき春風もいくかきぬらん跡すへもこれやこの姉といもとゝ中のよいどしゑつれだちていざしらくものよものそらこまのたづなをちからをびしめてむすんできつさしてしやんとしめたるとのごぶり合おとこまさりのミちすがらすれつもつれつちやらくらとおもしろげなん合こゝろのいさむ春駒ハゆめに見てさへよいとや中〳〵あしなミそろへて二ッ三ッ五ッや三ッの時よりも願ひをむすぶたま垣の神にいのりをかけまくもたのもしく高砂のうらはりまがた尾上のはまの一ふしに合たかさごやこのうら舟にほをあげてやんさ〳〵それそこせ。月もろともにいでしほの。そんれハへをのえのまつにかよわんすすミよしさんまのまつがえハ。どうでもあくしやうでさまごんざんす。ふうふのゑんこそしほらしや諸鳥むれゐて羽をやすめ心もいかで住よしの松やぎんつるきん鶴からころもおまへのそりはしやばんにやミやまいりよるのつゞミの拍子をそろへてすゞしめたまへかミかぐらさてばんぜいのをみごろもさすかいなにハあくまをはらひておさまる手にハちふくをいだきせんしうらくにハたミをな

できんざいらく
こそめでたけれ　（以上、三丁）

右の一緘は松島杵屋の流を汲で是
版するの正本也　霧者予孤獨にして外
類板なし

寳曆七丁丑正月吉日
（以上、日比谷本奥附）

【附錄】

女里猶壽袖鏡に就て

「女里猶壽袖鏡」は、明和若しくは安永頃、（天明ではない。）めりやすを集録した横本小型のものである。これは、私の知る限りに於て、二種はあるやうである。一種は、昨年夏大阪の中村積穂堂古典講から買入れた寳藏本である。今一種は、故、佐々氏の「俗曲評釋」にも採り入れられた、曾て帝大にあつた書名不詳の横本のめりやす本、これである。これが、「めりやす袖鏡」であるとは、佐々氏からは謂はれなかつたが、其後、というても昨年の夏の事であるが、私が、「めりやす豊年藏」原本發見の由を「讀賣新聞」に發表したところ、藤田徳太郎氏と湯朝竹山人氏とから續いて寄稿があり、又、渡邊野賢一氏から、日比谷本の前五曲ばかりが落丁で、後に小夜嵐のついた本を、私の記事により發見した報告があつた。さうして、「小夜嵐」のあるのは、若し果して日比谷本が然なれば、これは、後摺の續足し本である事も、藤田氏により、私の文語が確かめられた。私は、其後續いては書かなかつたが、「小夜嵐」は、「豊年藏」出版の寳曆七年正月以後のものであり、從つてアトのものが先に載る害がないから、これは問題にならぬと思うた。即ち「小夜嵐」は、寳曆八年十一月の市村座興行のものであるからである。それと、私の底本とした「豊年藏」は、右校本に、形だけを示したやうに、即ち目錄の處、所得のとほりで、他は、悉く埋木である。この埋木の部分に、後からの増補のため、目錄も彫り足すつもりでゐた事は、古書を見なれた者には、容易に分る事である。即ち日比谷本は、その目錄、「小夜嵐」が、「さとのはる」のつぎにあり、「即ち最尾、高砂の五行前。」又本文もあるとの事。すれば、この日比谷本は、少くとも、小夜嵐の寳曆八年十一月以後「歌撰集」の寳曆九年七月以前の、續足後摺本たる事、疑ない。この後摺本が他にもあつて、日本音樂學校の藏本、（原本に、寳撰で備えた宮川曼魚氏本だとか）、これは、「日本歌謠類聚」に七十五首本（「小夜嵐」を入れて七十五首。）として入れられた底本らしいが、即ち此の宮川本系のものと、日比谷本のものとは、同一の後摺本で、即ち同一二本であらうと思ふ。尚ほ此の種後摺本は、却つて相當に世間にあらうと思ふのである。それを更に（豊年藏後摺續足本から）「さよ嵐」だけを入れた「歌撰集」を寳曆九年七月出版してゐるのだと思ふ。

ところが、面白い本は、此時、藤田氏の話にされた、横本のめりやす本（佐々氏の底本となつた帝大本と同一のもので、「豊年藏」の後の複製本だといはれた、それが私にはをかしいと思へた。即ち此の帝大本を底本とした佐々氏の「俗曲評釋」には、そのめりやすが、自分の「豊年藏」のめりやすとは、同題のもの

も、多少の字句の異同があり、又、全く違つたものも載つてゐるらしいからである。さ、此の藤田氏の推定豊年藏の複製本さ、日比谷本の豊年藏(半紙型、予の底本の後摺ならん。)さ對校したさころ、藤田本のは、「袖鏡」だつた、さ、波多野氏から私へむけ報告があつた。するさ、これで、藤田氏の豊年藏の複製本が存在してゐた云々は、全く崩れた譯である。即ち此の波多野氏のいうた袖鏡さ、自分購入の袖鏡さ二種あるわけである。この藤田本の袖鏡は、その底本か又はそれさ同じものか、さにかく、大阪の南木文庫にも存在してゐる。私が今月一日、南木氏訪問の折から、同氏は私に見せようさして、探されたが、書物虫干のため混雜してゐて知れなかつた。私の購入した「袖鏡」の事も知つてゐられて、南木氏舊藏のものさも違ふ由をいはれた。確かな事は一度、南木氏の袖鏡(カ)――藤田氏本さ同一ならん――さ、私の「袖鏡」さ、豊年藏(今度の校本、これだけは、現在の最古最良の本さ信ずる。)さ對照しなければ、しつかり分らぬ事であるが。さにかく、昨夏、豊年藏に關聯して、やゝ後摺で怪しいさは思うたが、大奮發して(それほど賣値は、高價であつた。)購つた「袖鏡」の事を、左に簡單に述べておく。

年月(削つたものか)のない、隱士　竹醉堂識さした序が一丁。その序の末に、淺草觀音御地內　㊍伊勢屋吉十郎板さあるその序に、「女里弥壽袖鏡さは題するものならし」さあり、その書名のあさは、別に埋木改刪の跡が見えない。目錄全部を載せる。

今やう三ばそう○しろたゑ○雪の花緣の狩衣○かさりのゆき○名さりの月○さゝびき○なにはの春ごま○あひおひじゝ○門太郎なこり○によさんのみや○新まつかぜ○むけんのかれ○新むけん○をびむけん○長五郎かみすき○はなのゑん○いもせかわ○おもひ川○をきのいし○こひごろも○みだれがみ○もゝ千鳥道成寺○新相生はころも○ほてい○くさずり○さぎむすめ○うしろめん○けいせい○花がさおどり○まくらたんぜん○つくばねうり○くさずり引○水せんたんぜん○はつさくら○ほうらくの舞○すがたのゑ○ふゆぼたん○幸もんづくし○新草ずり○かんばい○四きのはな○さよあらし○はながたみ○すがたの花○四季のはるごま○大こくまひ○かりまくら○きゞすのあめ○しのぶうり○よし野ぐさ○まつむし○よるのつる○うの花相の山○秋のなゝくさ○新そでづきん○牛五郎かみすき○そてのつゆ○こゝろの花○くずの葉○新おもひ川○つなでぐるま○わがこゝろ○かりのかれ○こさの音○おぼろ月。

の以上で、即ち江戸長唄系のものを略いた、純めりやす物さ思はれ、且つ、豊年藏(予が底本)にも歌撰集にも、その後の「常盤友」の類にも、共通のものも見うけるやうである。すでにその一部を對校した拙稿もあるが、なほ、「袖鏡」さ稱する別本一覽の上、他日、發表したい。若し同型横本の「袖鏡」が果して存在するなれば、自分の本は、その後摺、綴足し內容の本であらう。唄の一々から、出板の年代も分らうかさ思ふ。

なほ、南木氏本に、哥曲花川渡(四十八首。明和三歳戌太郎月)さ哥曲花家臺(同、明和六年丑霜初月さ)いふのがある。これば、一見した所、「豊年藏」さ同樣の板木を用ゐた所もある、又、豊年藏以後のものもある、半紙本のめりやす物後摺合輯本である。無論、どれにもない當時の新曲がありはせぬかさ思ふ。がこれも、南木氏本目錄內容精査、比較の後日に讓る

右、「豊年藏」校本發行に際して　久彌しるす

昭和三年秋九月

尾崎久彌著

江戸軟派研究　貳編

目次

以上

內譯、貳編第一冊、大正十四年一月(通編第廿八)同第十五冊、大正十五年六月(通編第四十五)、別冊第一(大正十四年五月)同第二(同、六月)、同第三(同、十月)の發行。

計一箇年半、十八冊分也。

江戸軟派研究　参編

尾崎久彌著

目次

以　上

内譯、第一冊、大正十五年七月(通編第四十六)、第廿五冊、昭和三年七月(同第七十)、別冊第一、昭和三年八月(同、第七十一)、別冊第二、昭和三年九月(同、第七十二)。

計二箇年さ三月、廿七冊分也。

昭和三年八月二十八日印刷
昭和三年九月一日發行

江戸軟派研究 別冊第二

定價貳拾五錢 送料貳錢